

コードギアス 久遠の
アルカ

キナコもち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貴女の為に、私は生きる。

全てを失ったあの日、少女はそう決意した。己の全てを魔女に捧げようと。

ルルーシュとナナリーの妹として生まれた主人公が、願いを叶える為に紆余曲折を経て世界を変えるお話。

そして、C・C・とイチャつく為の話。

目次

プロローグ

prequel 1 アルカという少

女 | 1

prequel 2 私が生まれた日

| 15

prequel 3 東の間の休息

29 |

prequel 4 別れ | 41

prequel 5 逢着 | 53

prequel 6 憎むべき相手

65 |

prequel 7 手掛かり

75

prequel 8 再会 |

prequel 9 日常 | 115

prequel 10 迫る運命

135

第1期

stage 1 魔神が生まれた日

149 |

stage 2 期待と歓喜 | 174

stage 3 それぞれの仮面

191 |

stage 4 魔女と少女 | 209

stage 5 譲れないモノ | 225

stage 6	奪われた仮面	244
stage 7	二人の異母姉	265
stage 8	黒の騎士団	282
stage 9	枢木スザク	296
stage 10	ナリタ攻防戦	

313

stage 11	名前	328
stage 12	出生	341
stage 13	戦いの犠牲	356
stage 14	過去の負債	371
stage 15	歪み	389
stage 15.5	惨劇	404
stage 16	もう一人の姉	

stage 17	無窮	434
stage 18	初陣	450
stage 19	ノネット・エニアグ	
stage 20	騎士	481
stage 21	枢木スザクに命じる	
stage 22	神が根付く島	494
stage 23	主と従者	530
stage 24	箱	549
stage 25	幕間	564

ラム

419

514

※挿絵あり

681	s t a g e 3 3	母として	697	T U R N 1	偽りの世界	802
		——		第2期	——	
	s t a g e 3 2	少女の在り方		騎士最後の日	——	780
650	s t a g e 3 1	剣として	666	メイドたる者	——	767
		——		o f f s t a g e	——	
	s t a g e 3 0	崩壊の始まり	630	ニ、喝采ヲ	——	756
		——		l a s t s t a g e	愛シキ世界	
617	s t a g e 2 9	去つた者、残つた者	739	s t a g e 3 6	二人だけの舞台	
		——		は魔王	——	722
	s t a g e 2 8	血染めのユファイ		s t a g e 3 5	照らすは少女、導く	
597		——		709	s t a g e 3 4	そして、終幕へ
	s t a g e 2 7	行政特区日本			——	
	s t a g e 2 6	宣言	579		——	

T U R N 3 0	一天万乗の君	1447
T U R N 2 9	玉座	1424
T U R N 2 8	継承	1409
T U R N 2 7	アルカ・アングレカム	1390
T U R N 2 6	想い	1371
T U R N 2 5	破滅の光	1345
T U R N 2 4	第二次トウキョウ決戦	1328
T U R N 2 3	開戦直前	1310
T U R N 2 2	迷いの渦中	1292
番外編：紅月カレンの受難		1270
T U R N 2 1	黄昏の中で	1249

T U R N 3 1	破壊	1461
T U R N 3 2	傍目八目	1478
T U R N 3 3	天に咲く花	1491

プロローグ

prequel アルカという少女

「立ちなさい、アルカ。」

母上の事が苦手だった。

鋭い眼光が私を射抜く。

目に涙を浮かべながら、地面に這いつくばる幼い私。

それを見下ろす私の母、マリアンヌ・ヴィ・ブリタニア。

2人の手には、レプリカの剣が握られている。

「そんなんじゃない、お兄ちゃんとお姉ちゃん。守れないわよ?」

ああ、夢か。本国に居た時の夢。

母に稽古を……いや、訓練を受けている時の。

母上の事が苦手だったことについて、はつきりと言語化することは出来ない。何となく、感じていただけだ。

母上が私達に時々向ける視線の違和感に。

兄上と姉上は気づいていなかったであろう。あの2人は心の底から母上の事が大好きだった。

私だけが感じた違和感だ。もしかしたら気のせいかもしれないし、彼女の厳しい教育が嫌だっただけかもしれない。

ただ、何となく私達を通して、別の何かを見ていた。そんな気がただけだ。しかし、今となっては私の疑問を解決する手段は無い。

殺されたからだ。

私が5歳になったばかりの出来事だ。

同腹の兄上と姉上が中心となって企画してくれていた、私の誕生日パーティー。

それを翌日に控えた夜に、母上は殺された。

身体中に穴が空き、その血で絨毯を濡らし。その場に居た姉上を庇う様に抱きかかえ、倒れていた。

「……………っ!!!」

その時の驚愕と絶望に入り混じった兄上の顔は、一生忘れる事は無いだろう。

世界有数の超大国である「神聖ブリタニア帝国」。

その次期皇帝の座を狙った覇権争いに、私たち皇族は生まれたその瞬間から、参加することを強いられる。

弱肉強食がブリタニアにおいての絶対の掟。

生き残った強いものだけが次期皇帝としてその椅子に座ることが出来る。

皇帝候補の母数を減らす為に殺された異母兄弟や継母は山ほど見てきた。

ブリタニア皇帝の椅子は、大勢の犠牲の上に成り立っている。

私の母もその犠牲の一人となったのであろう。

庶民の出でありながら、騎士侯として登り詰め、最終的には王妃として迎えられた母上。さぞ、敵も多かつた筈だ。

ブリタニアに恨みを募らせたテロリストの犯行、というのがこの事件の表向きの真相だ。実際に実行犯のテロリストは捕まり、既に処刑されている。

だが、皇族に身を置く誰もが思ったことだろう。

——消された、と。

その日の警護を任されていたコーネリアのリ家か。

何を考えているか分からないシユナイゼルのエル家か。

私達の事を目の敵にしていたカリーヌのネ家か。

誰が裏で引いているかは、わからない。

しかし、間違いない断言できるのは、陰謀に巻き込まれたという事。

何故なら、母上の死後。私達に向く目は、哀れみ、同情などでは無く、悦に満ちてい

ただのだから。

いくら母上の事が苦手といってもこの事件は流石に堪えた。

別に嫌だった訳では無い。人並には好いていたし、尊敬もしていた。

母上を心の底から慕っていた者達の悲しみに満ちた表情。

事件に巻き込まれ、足と目の機能が失われた痛々しい姉。

私に心配をかけまいと気丈に振る舞う兄の姿。

目まぐるしく変わる環境。

そして何も出来ない無力な私。

ただただ、泣く事しか出来なかった。

母上という支えを失ったヴィ家はその後、没落の一途を辿る。

他の皇族からの攻撃は苛烈を極め、後ろ盾であるアツシユフォード家は本国を追われた。

私達を守る存在は、あそこには居なかった。

そして私達、きょうだい兄弟妹の番もすぐに――

「ルルーシユ、ナナリーと共に日本に渡れ。」

神聖ブリタニア帝国第98代皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアは言った。

経済大国である日本の首相の下に送ることで外交の道具にしようとしているのである。

表向きには留学、見方を変えれば人質。

母と後ろ盾を失った皇族に出来る事は殆ど無い。ましてや私達はまだ10にも満たない子どもだ。

当時の日本とブリタニアはいつ戦争を始めてもおかしくない程、緊迫していた。

そんな日本に皇子と皇女を送れば、どうなるか、誰もが容易に想像出来たであろう。

最悪、殺される。

今考えれば、父上はそれを望んでいたのかもしれない。

日本に攻め入る理由が出来るのだから。

「皇子と皇女なら、良い取引材料だ」

そして、兄上と姉上は日本へ渡った。

私を残して。

父が言った皇女の中に、私は含まれていなかった。
残された私はというと――。

◇
◇
◇

「ん……」

重たい瞼を開け、身体を起こす。

「大丈夫か？ 顔色が良くないが。」

そうやって一人の少女が私の顔を覗き込んだ。
金色の瞳が私を映す。

「うん、ちよつと昔の夢を見てて…。おはよう、C・C。」

心配かけまいと私は笑顔を作り、返答した。

C・Cの人形のように整った顔が少し曇る。
しまった、逆に心配させてしまったか。

「……まあ良い。シャワーを浴びてきたらどうだ？寝汗で気持ち悪いだろう？」
彼女は何か言いたそうにしていたが、その言葉を飲み込み、淡々と告げる。
言われてみると確かに身体中が汗でベタベタだ。

「そうしようかな、誰かさんが昨夜、張り切り過ぎてそのまま寝ちやつたし。」
「気絶したみたい寝てたもんな？楽しんでくれたようで何よりだよ。」

C・C^{シィ}は口角を上げながら目を細めながら、そう言った。
嫌味を言ってもものらしくらりと躲される。

いつまで経っても口では勝てない。

・
・
・

身体のとたつきがシャワーによって流されていく。

少し腰に痛みを感じるものの、気持ちのいい朝だ。

昔の夢を見たことを除けば。

(日本……か……)

兄上と姉上が日本に送られてしばらくして、ブリタニアは日本に戦争を仕掛けた。
明確なきっかけは分からない。

2つの国の間には、常にいざこざが絶えなかったから。

一か月も経たないうちに日本は破れ、ブリタニアの支配下に置かれる事となる。

日本という名前は奪われ、代わりに数字が与えられた。

ブリタニアのナンバーズ制度である。

戦争に巻き込まれた兄上と姉上は無事だろうか、頼れる者が何も無い状況で、生活出来ているだろうか、姉上の身体は大丈夫なのだろうか。

(私の事は、憶えているだろうか。)

一度考え始めると、足を泥沼に取られたように、中々抜け出せない。

気分が沈んでしまう。

2人が日本に送られたのが5年前。

兄上が10歳で、姉上が7歳の時だ。

末妹である私は2人と一緒に居た時間がそもそも少ない。

加えて2人は次期皇帝を目指す方針だったのに対し、私は騎士侯になる方針だった。

普段の生活も、別行動が多く、夜くらいしか一緒に過ごせなかった。

その少ない時間の中でも、兄上と姉上は私を気にかけてくれたし、優しくしてくれた。

大好きだった。

どうして私だけが本国に残されたのだろう、どんなに辛くても2人と一緒に過ごしたかった。

「大丈夫か？」

思考に沈む私を、心配してか顔、C・C^{シィッ}が様子を見に来た。思っていたよりも、長い時間、シャワーを浴びていたらしい。

「ちよつと、家族の事をね……。大丈夫。」

シャワーから出るお湯を止め、タオルに手を取る。

「……お前には私が居る。前にも言ったが、あまり過去を引きずるなよ。」

不器用なアドバイスに私は口角を上げる。

C・C^{シィッ}と出会ってから、もう7年近くになるか。

思えば、肉親よりも長い間一緒に居る。

腰まで届く綺麗な緑色の髪。シルクのような肌。吸い込まれそうな金色の瞳。人形の様
様に整った顔。

「ありがとう。」

そんなC・C^ッに抱き着き、お礼を伝える。

「普段もそれくらい素直だと良いんだけどな。」

優しさを含めた声で、彼女はそう言いながら、私の頭を撫でる。

ああ、心地良い。

彼女の温もりを感じていると、外から複数の足音が聞こえるのに気が付いた。

(……………つ、ゆっくりしている暇も無いか。)

内心、舌打ちをし、服を手取る。

「追手だな。ブリタニアの。」

C・C^{シューツ}が何時もの表情で、淡々と呟いた。

「そっか、この家、気に入ってたんだけど、潮時だね。」

私達が過ごしていたのは、まだ真新しい廃村。

争いが絶えないご時世だ。戦争にでも巻き込まれ、住処を追われたんだろう。

金目の物は無かったが、ライフラインは生きていた。私達には、丁度良かったんだけど。

溜息を吐きつつ、服を着て、私は家から出る。

「こちらA1。対象を発見しました。」

目の前のブリタニアの軍人が、私を確認した矢先、耳に手を当てながら、そう呟いた。この場に居るのは3人。

目は隠れていない。

増援来る前に手早く済ませるか。

「対象を拘束後、バトラー將軍に…「ねえ。」

言葉を遮り、私は声を掛ける。

意識をこちらに向けさせる必要があるから。

3人の銃口と視線が一斉に、私の方へ向く。

ヘルメットとかしてなくて良かった、楽に処理が出来る。

「死んでくれる?」

私がそう、お願いをすると3人は喜々とした表情で首筋に銃口を当て、ためらいなく引き金を引く。

辺りに鮮血が飛び散り、嗅ぎなれた臭いが充満する。

身体にかからなくて良かった、お風呂入ったばっかだし。

「すぐに移動しないとな。」

いつの間にか、家から出てきたC_シ・C_ッが、私の手を取りながら呟く。

彼女のひんやりとした手が気持ちいい。

「うん、行こう。」

私はC・Cの手を握り返し、歩き始めた。

世界有数の超大国ブリタニアから、追われている私とC・C。
そんな私達は今、日本——エリアーへ向かっている。

私の兄上と姉上が消息を絶った地。

味方は存在しない。

そう、私達は選択できる未来が限られている。

手段を選んでいる暇はない。

魔女から貰った力ギアスを利用して、私は彼女の平穏シイを手に入れる。
邪魔するものは容赦しない。

口元を歪ませながら、心の中で呟いた。

prequel 2 私が生まれた日

「ん…雨か。」

C^シ・C^ッが空を見上げながら呟いた。

私も同じように空を見上げると、顔に水滴が落ちてきた。

夕日で綺麗に赤みがかった空に、所々暗雲が立ち込めてきている。

「夕立かな。もう少し先へ進みたいけど、どうする?」

ブリタニアからの追手を振り切って数週間。

私達は日本を目指し、各地を転々としていた。

兄上と姉上が生きているかどうかはわからない。

でも、もし生きていたら、再会が叶うかもしれない。

そんな私の気持ちを、彼女は汲み取ってくれた。

C・C^シと兄上、姉上。皆で一緒に暮らせたとしたら、どんなに幸せな事だろうか。そんな自分勝手に、都合の良い願いを心に浮かべていると

「今日はここで寝泊まりしよう。日も落ちてきたしな。」

C・C^シはイタズラっぽく私に言った。

彼女が視線の先の建物に目を向ける。

黒を基調とした大人っぽいホテルだった。

しかし、私の知識にあるホテルとは、どこか違う。

ホテルの入り口が目につきにくい奥の方にあり、入り口辺りが電飾でキラキラしていて、外装とはミスマッチだ。

極めつけは……

「ねえC・C^シ。宿泊はわかるけど、休憩って何？」

「……………まあいざれわかるさ」

珍しく何処か歯切れが悪い。

なんて思っていると「入るぞ。」と手を引つ張られた。

「このホテルつて人と会わずにお部屋行けるんだね！私達にはありがたいね。」

何か問題あつてもギアスを使えばどうとでもなるけど、トラブルは無いことに越した
ことはない。

(そこを踏まえてC・Cはここを選んだのかな？)

C・Cが選んだ部屋に入る。

玄関の近くにお手洗いと大きいお風呂。

奥の部屋には二人が並んで寝ても、スペースが余るくらい大きいベットがあつた。

部屋の内装も豪華であり、設備も考慮すると宿泊費が結構、高いんじゃないだろうか
？

お金は軍人の死体から漁つたので無くはないが、心配だ。

「このホテル高そうだけど大丈夫？」

「こういう所は内装、設備のグレードと金額は比例しないから大丈夫だ。」

と自信満々に言い切った。

(まあ、C・C^{シュー}がそう言うなら大丈夫か。人生経験も比べ物にならないし。)

彼女の言葉には妙に安心感と心地良さがある。

気を抜くと麻薬のように、ズブズブと溺れてしまいそうだ。

「今日はゆっくり休め。また明日、日本に向けて移動するぞ。」

そう言いながらC・C^{シュー}は服を脱ぎ始める。

芸術品の様に美しい身体だが、胸の辺りに傷がある。

彼女が不老不死になった頃に出来た傷らしいが、詳しいことは知らない。

私が3歳の頃からの付き合いではあるが、まだまだ知らないことが多い。

(そういえば、彼女との出会いは母上がきっかけだったっけ)

今は亡き、母の事を思い出す。

「風呂入らないのか？沸いたぞ。」

思考に更けていると彼女の声がした。

お風呂を沸かしておいてくれたらしい。

「ん………入る、ありがとう。」

私も服を脱ぎ、C・C^{シー}の待つ、浴室へと向かう。

私が小さいのもあるが、それを差し引いてもホントに浴室が広い。

これなら、C・C^{シー}もゆつくり出来そうだ。

お互い、髪と身体を洗い、湯船に身を沈める。

(気持ちいい………)

C・C^{シィ}の足の間に腰を落とし、彼女の身体に寄りかかる。

温まってきて少しウトウトしていると、彼女の細くて綺麗な腕が、私の腹部辺りに伸びてきた。

そしてそのまま私の肩に顎を乗せ、身体を密着させる。

C・C^{シィ}の吐息一つ一つが耳に当たる。

「ギアスの調子はどうだ？問題ないか？」

と心配そうに尋ねてきた。



彼女と契約して5年近く経った。

忘れもしない、兄上と姉上が日本に渡ってすぐの事だ。

兄上と姉上から引き離され、独り身となった私は、すぐに世界は残酷なんだと、思い知らされる事となる。

まず最初に、皇位継承権を剥奪された。

まあ、元々有つて無いようなものではあつたが、それでも有るのと無いのじや話が違つてくる。

とにかく、全てを失つた私を守る物好きなど、あそこには存在しなかつた。ましてや、何も出来ない、10にも満たない子どもに対して。

皇位継承件を剥奪された日の翌日。

アリエスの離宮にて、子どもの死体が発見された。

顔は誰のものか分からないくらいに潰された死体。

背丈とその格好から、アルカ・ヴィ・ブリタニアであると、判断され、そのまま、死んだことにされた。

実際には、剥奪されたその日、ある施設へ連れていかれた。

私とC・C・が出会つた場所。

ギアス嚮団。

子ども死体の事は、後から聞かされた。

V・V・という男に。

お前の帰るべき場所はないぞ、と無慈悲に。

そこから3年間、嚮団によって生かされていた。

母上に何度か連れて行かれたこともあつたが、こんなに長い間、身を置いた事は無

かった。

生かされていたと言え、聞こえはいいかもしれないが、実際は飼われていたにすぎない。

文字通り、実験動物として。

ナイトメア、生身、銃火器をそれぞれ用い、嚮団に身を置く人間と殺し合いをさせる戦闘訓練。

薬物を投与され、身体にメスを入れられ、電気を流された人体実験。

拒否権などは存在せず、いくら泣いても手を緩めることはなく。

懇願しても誰も聞く耳を持たず。

飽きもせず、毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日。

繰り返し行われてきた。

地獄だった。

私自身を将来戦力として、道具として利用するためだろうか。

母上の様に帝国最強のナイト・オブ・ラウンズになれということだろうか。

それともただ単に、私を苦しめたいだけか。

意図なんてどうでも良かった。

考えたところで何か変わる訳じゃなかったから。

——私は間違いなく、あの時、死んだ。

「アルカ、お前には生き残るための力が必要だ。私がそれを与える。」

そんな時、彼女が手を差し伸べた。

日々の訓練と実験で、心が荒んだ私を、聖母のように慰め続けてくれた彼女。外の世界を知らない私に、たくさん話をしてくれた彼女。

「お前は死んだことになっていたな。名をくれてやろう。……名前はそのままだ。姓は……ふむ、そうだな……アングレカムとでも名乗れ。」

全てを無くし、肉親からも引き離され、一度死んだ私。

そんな私に彼女は、手を差し伸べてくれた。

生き抜く為の力をくれた。

人間としての名前をくれた。

間違いなく、あの時。私はこの世に誕生した。

それから私がC・C^{シュー}と契約した、と悟られない様に振る舞った。

悟られてしまつては、いざ逃げる時に、対策されてしまうから。

そしてチャンスが生まれた。

嚮団の実質トップであったV・V^{シュー}が不在の日が続いたのだ。

私は彼女に連れられ、地獄から抜け出した。

それが2年ほど前の事……。



「…うん、大丈夫だよ。」

湯船を見つめながら答える。

水面に映る私の右目は毒々しく赤い光を放ち、瞳には羽ばたいている鳥のようなマークが浮かんでいる。

ギアスだ。

「なら良かった。」

ホットとしたようにC・C^ッは眩き、私の首に顔をうずめる。

(彼女から甘えてくるなんて珍し………イツ………)

少しチクツと痛みを感じ、目の前の鏡で彼女の唇があつた場所を確認する。

そこには、虫刺されの様な、赤い花が咲いていた。

「もう………」

ため息をつきながら首をさする。

後ろに居るC・C^ッが悪戯成功と言わんばかりの顔で、ニヤニヤしているのが、目の前の鏡で確認できる。

呆れたような態度を私はとっているが、実のところ嬉しさを感じている。

彼女はそんなこともお見通しのだろう。

「ちよつと待つてろ。」

そう言つてC・C^{シュー}は浴室を出た。

先ほどまで背中にあつたぬくもりが無くなり、寂しさを覚え始めた頃、彼女が戻つてきた。

その綺麗な手に卵みたいな形をしたピンク色の物体を持つて。

「C・C^{シュー}、何？ その手に持つているもの？」

「簡単に言えば玩具だな」

「玩具……………？」

……………なるほど、わからない。

「わからない、つていう顔をしているな。まあ心配するな、夜は長い。身をもつてわからせてやる。」

C・Cの目が細くなり、口角が上がる。

この表情を私は知っている。

彼女がこの表情をする時は大抵、私は寝れない。

・
・
・

その後、私は彼女の手によって、文字通り身体に、一晚中教え込まれた。

このホテルの意図、玩具の正体。

(いずれ分かるって、そういう意味……………)

腰を擦る。

今日は痛くてそこまで遠くには行けなさそうだ。

彼女には、私をおぶる責任があると思う。

「どうだ？ なかなか良かっただろう？」

口角を吊り上げ、彼女は笑う。

「~~~~ツ!!バカツ!!!」

このロリコン魔女め。

prequel 3 束の間の休息

「あの、すみません。お願いがあるんですけど——」

右目が毒々しく、赤く染まる。

「エリアー1まで、船に乗せていただけませんか？」

私と相手の視線が交わる。

しばらくして、目の前の貨物船の船員は「乗りなよ！」と快諾してくれた。

「…後は他の船員に、私達が降りるまで無視し続けて、とギアスを掛けるだけ……」

「……………顔色が悪いな。」

「まあ、見てて良い気分はしないから……。」

「前にも言ったが、ギアスは力に過ぎない。結局は当人の使い方による。さっきのギア

スは、お前が危惧している事にはならない。」

「……………うん、分かつてる。」

現在、私達が居るのは中華連邦の東側に位置する港。

ここから船に乗り、海を越えれば、エリアー……………つまりは日本に着く。

嚮団から逃げ出して2年近く経ち、ようやくここまで来た。

こここの港にはブリタニアからの追手の姿は無い。

そもそも、中華連邦の領土内。さすがに他国の領土、しかも人が集まる港だ。居たとしても、派手に動けないだろう。

「……………。丁度、エリアーへ向かう船があつて良かったな。ブリタニアの領土に入るまで、一先ず安全だろう。」

「この船の行き先が軍港じゃないのも良かったね。」

エリアーに本社を構える、貿易会社の船だ。

行き先は、キュウシユウ。フクオカ租界の漁港。積み荷は魚らしい。

「あまりここに居て、私達を知る者に見つかつても面倒だ。早いところ乗り込むぞ。」

C. C. はそう言つて、私の手を引き、船に乗り込む。

期待はしていなかつたが、やはり、客船とは程遠い。

人が寝泊まりする区画は、最低限必要な広さに設定されてるようだ。

狭い通路を通り、船員用に用意された空き部屋に入る。

ベッドが1つ。他には何も無い。入り口の近くに、簡素なシャワールームだけがある。

それだけが幸이었다。

部屋を見てC. C. は、ほう…と小さく呟いている。

「…しかし、こういう船にはナイトメアは乗つてないんだな。私が乗つたことある船には大体居たが。」

「C. C. が言つてるのは軍用船の事でしょ？この船は民間企業の物だからね。ナイトメアはあくまでも軍用品。軍と密接な関係がある企業とか、皇族が乗つてるとかじゃない限りは、無いと思うよ。」

ナイトメア——正式名称「Knight Mare Frame」
意味は、騎士の馬たる機体。

元々は医療現場や災害現場での活躍を想定されていた、4m〜7m位の人型機動兵器。その圧倒的な機動力と制圧力により、今までの兵器の常識を覆した。

日本進行の際に、初めて実戦投入。それ以来、ブリタニアの主力兵器として運用されている。

当時の日本からすると、まさしくだっただろう。

閑話休題

つまり、この船は安全ということだ。

……久し振りの休息だ。

「ふわぁ……。」

気が抜けて、ついつい欠伸が出ってしまった。

ベッドに腰を掛けると、身体に倦怠感を感じる。

疲れているらしい。

「エリアーに着くまで時間あるし、寝ていい？」

「……誘っているのか？」

C・C^シは真面目な顔をして呟く。

「へ？」

なぜ、そうなる。

「ここ数日、安心して身体を休めることが出来なかつただろう？つまり、私は溜まってる。」

相変わらず淡々と彼女は告げる。

分かるようでわからない。

「そうは言っても、C・C^{シュー}だって疲れてい……うわあ!？」

C・C^{シュー}に押し倒された。

彼女の綺麗な顔が、目の前に。

お互いの息を感じ取れるくらい、近い。

「……………」

C・C^{シュー}の口は開かない。

しかし、表情が、物語っている。

目の前にいる彼女は、蠱惑の笑みを浮かべている。

「え、えーつと、貴女が、その。その気になると……ね。身体が休まらな……。え?あ、待って。ちよ、んつ……C・C^{シュー}。あ、いやつ……んんつ……」

そうして私は、彼女に頂かれた。



「なんだまだ夜中か。」

脚を絡ませ、私の身体にしがみつきながら眠るアルカを起こさない様、私は小さく呟いた。

まだ日本には着かないし、このまま朝まで寝てて良かったのだが、目が覚めてしまった。

(すぐには寝れそうにもないな……。)

内心、溜息をつきながら私の腕に抱かれ、幸せそうに眠る幼い少女に目を向ける。

陶器の様に白い肌。淡いクリーム色をした穢れを知らない髪。

目を閉じているため、今は見えないが宝石のような綺麗なアメジスト色の瞳。

触れれば壊れてしまうのではないか——。そんな儂い印象さえ受ける。

「どうか、お前だけは変わらないでくれ。」

私はそう願いながら、彼女の形の良い小さな頭を撫でた。

「ん………^{シュー} C・C………^{シュー}………」

彼女は口角を僅かに上げながら、か細い声で私の名前を口にしたら、起こしてしまったと思っただが、寝言だったようだ。

夢の中でも私と一緒に居るのか？——自然と口元が緩む。アルカが私に対して依存しているのはわかってる。

しかし、私も同じように、いや。彼女以上に依存してしまっている。

「私が一人の人間に執着するなど何時ぶりだろうか？」

私の疑問に答える者はこの場には居ない。

頭では理解はしているが思わず口に出してしまった。

(思えば、もう長い付き合いになるな。)

アルカと初めて会った日の事を思い出す。

初めて会う私を警戒し、マリアンヌの後ろに隠れていた。

アルカの面倒をみてやってくれ、と言われた時は、正直面倒に思った。

何故、私がこんな事をしなければならぬ、と。

……まあ、マリアンヌの頼みを、断る筈は無いのだが。

そうして、共に過ごしていく内、あることに気付いた。

アルカはマリアンヌに対して、苦手意識がある、と。

聞けば、時々向ける彼女の視線が怖いこと、自身に対するスキンシップが少ないこと、

が理由だそうだ。

しかし、アルカ自身は、マリアンヌ事を嫌いでは無いし、尊敬の念はあるという。

つまりは、苦手意識が邪魔をして、距離感が掴めない、という事だ。

だから彼女は、マリアンヌからの愛情を待っている。欲している。

しかし、マリアンヌがアルカの想いに、気づいたところで何か変わるだろうか。

マリアンヌ自身が子に対する愛情を持ち合わせているか、正直微妙なところだ。

愛情が欲しいが、母を信用しきれず、甘えることが出来ない……

それが当時のアルカだ。

マリアン又は段々と、アルカが私の元に居る時間を増やしていった。

最初のうちは、戸惑っていたアルカも、数を重ねるにつれ、私に懐いていった。

そんな彼女からの私に向ける感情は、表裏の無かった。眩しいほどの好意だった。

「私、C. C. の事、大好き！ずっと一緒に居たい！」

そんなありふれた言葉が、今も私の心に残り続ける。

恨み、妬み、憎悪などの感情を向けられたことは数えきれないほどあるが、こんなに純粋な気持ちを向けられたことは今まであつただろうか。

氷の様に冷たくなっていった私の心が、彼女によつて溶かされていく様な気がした。

〇〇・〇〇〇が欲していたもの、そして忘れてしまったモノはコレだったのかもしれない。

「純粋な好意というのはこんなにも心地の良いものなんだな。」

少し心が軽くなったような気がした

モノクロだった私の世界は、彼女を中心に色付いた。

自分自身の願いを優先し、人の人生を食い物としてきた魔女私は現在、自分ア以外ルカの幸せを願っている。

変ったわね、C・C・C・C

頭の中で誰かがそう言った。様な気がした。

もう一度アルカの方に目を向ける。

私の欲を小さい身で受け止めた彼女は朝まで起きることは無いだろう。年齢に釣り合わない刺激を与えたのだ。無理もない。

「何回聞いたかわからないけど、あなたってロリコンなの？」

また頭の中の誰かが私にそう言った。

うるさい、黙れ

心の中で悪態を付き、頭に響く声を見無視することにした。

アルカの幼いながらも整った顔に視線を向け、優しさを込めて私は呟く。

「お前アルカの幸せを私は願っているよ。」

私は幸せそうに眠る幼い少女の額に唇を落とす、身体をより抱き寄せて再び眠りについた。

prequel 4 別れ

エリアー1には二つの居住区域が存在する。

ブリタニア人及び名譽ブリタニア人が住む「租界」。

かつての日本人達、つまり非名譽ブリタニア人が住む「ゲットー」。

租界は住環境が整っており、華やかな街という印象を受ける。

それに対してゲットーはお世辞にも人が住める環境とは言えない。ライフラインは整備されておらず、目に付くものは倒壊した建物と疲弊した日本人……イレヴン達。

「……………」

場所はフクオカ租界の展望台。

ベンチに座りながらゲットーを見下ろし、思考に耽る。

租界とゲットー。支配するものとされるもの。強者と弱者。

弱肉強食が国是である、ブリタニアらしい光景だ。

貨物船を降り、私達はフクオカ租界に足を踏み入れた。ブリタニア人である私が、

ゲットーに踏み入れた暁にはそこに住むイレヴン達に何をされるか、想像は難しくな
い。

暴行、恐喝、殺害、強姦、e t c……

ありとあらゆる負の感情を向けられることだろう。

それだつたらブリタニア人が住む租界に居た方がまだ安全だ。

もちろん、軍の動向には、常に気を付けなければならぬが。

「まあ、追われているって言っても一部からだけだし、気にしすぎてもしょうがないか。」

私達の存在を知る者は少ない。嚮団の関係者と一部の皇族くらいだろうか。私は5
年前に死んだことになっているし、C. C. はそもそも存在がオカルトみたいなもの
だ。

私達の事を誰かに話したとしても、気が触れたか、としか思われぬであろう。

「それよりも早く情報を集めないか。」

兄上と姉上の手掛かりを知りたい。

生きているのか、死んでいるのか。
生きているとして、何処に居るのか。

「日本にある2人の手掛かりというと、枢木家くらいか……」

枢木家……。日本最後の首相、枢木ゲンブの家系である。

兄上と姉上が人質として送られた際に引き取り手だったのが枢木家だ。
しかし、

「枢木ゲンブは戦時中に自決、枢木家に所縁のあるものは戦犯として処刑されたのだから？ 枢木は当てにならないと思うが。」

私の膝に頭を乗せ、寝ていた筈のC・Cが話しかけてきた。

「起きてたの？」

そうだとしたら独り言をずっと聞かれていたことになる。

恥ずかしい。

「こんな外で寝れるか。アルカの膝枕を堪能したかっただけだよ。」

100%の下心で私に膝枕をさせてたらしい。

眠いと言っていたから、してあげたのに。

起きてたということは、私が彼女の頬や頭を撫でたり、キス…したりしたのも分かっているのか……

顔に熱が集まるのを感じる。

「そういえば、面白い話を聞いたぞ。」

悶々としている私にC・Cは声を掛ける。

「トーキョー租界にアッシュフォード家の名を冠した学校があるらしい。」

アッシュフォード家……

私達、ヴィ家の後ろ盾。

ブリタニアの元伯爵であり、医療・福祉面からKMFナイトメアの初期開発に関わっていた「アツシユフオード財団」の大元。

母上に試作第三世代KMF「ガニメデ」を提供し、母上が騎士侯、皇妃と地位を得ると同時に、成長していったのがアツシユフオードである。

しかし母上が暗殺された際に、後ろ盾であったアツシユフオード家は伯爵位を剥奪され、本国から追放されたとは聞いていたが……。

「日本に来てたんだ……というか誰から聞いたの？」

「……信頼できる情報筋っていうのは確かだ。安心していい。」

答えになっていない……

が、彼女は昔から秘密主義だ。私に話せないことだつてあるだろう。

仮に聞いたとしても「いずれわかるさ。」と躲されるだけ。

聞くだけ無駄だ。

「……まあ、他に手掛かりも無いし、遠いけどトーキョー租界に行ってみようか。それ

で、学校の名前は？」

ようやく掴んだ兄姉きょうだいの手掛かりに喜びを感じながらCシー・Cツィに問いかける。
彼女は何か、後ろめたさを含みながら

「アツシユフォード学園だ。」

と呟いた。

・
・
・

「対象発見しました。」

フクオカ租界にあるビルの屋上から、展望台にいる緑色の髪をした女と10歳くらいの少女を視界に捉え、バトラー将軍に報告する。

『よくやった！対象が租界から出次第、捕縛に移る！KMFも出せ！』
ナイトメア

將軍は興奮を隠し切れない様子で命令を下す。

少女二人の捕縛にナイトメアKMF……？

何かの聞き間違いかと思ひ、再度將軍に確認を取る。

「は、ナイトメアKMF……ですか………？」

「そうだ！同じことを何度も言わせるな！緑色の髪の女は殺しても構わん！至急要請しろ！」



「死んでくれる？」

私の眼前に血の海が広がる。

今ので何人目だろう、こうして人を殺したのは。

フクオカ租界を出た途端に軍による追跡が激しくなった。

「租界に居る時点で監視されていたんだろう。」

死体から銃を回収しながらC・Cは呟く。

彼女が言っていることは正しいだろう。あまりにもタイミングが良すぎる。

軍人が持っていた通信機を手に取り、通信履歴を確認する。

私達が租界に居た時からついさつきまで、頻繁に誰かに連絡を取っていることがわかった。

「すぐに追手来ると思うし、早く行かないと。」

私はそう呟いて、C・Cの元へ行こうとした時、

——彼女の右腕が吹き飛んだ。

「え？」

彼女が左腕で右の肩口を押しえながら、地面に膝を突く。

痛みでその端正な顔が歪んでいる。

今すぐにも彼女の元へ駆け寄りたいが、その気持ちを必死に抑え込み、状況の把握に頭を回す。

何処から撃ってきた？

C・C^{シィッ}が居る場所から考えるに、私からは見えないビルの陰からだろう。

追手の数は？

これまでの経験を考慮するに、多くて5人と推測できる。ブリタニア側も大事にはしたくないはずだ。

(5人程度だったら、どうにか出来る)

銃はある。直接目を見ることが出来ればギアスも使える。

それに私自身、幼少期の訓練で、ある程度は生身でも戦える。

一番の問題は……腕が吹き飛ぶ程の威力を持つ兵器……

いくつかの可能性が浮かぶ。

思考に更けていると、崩れかけたビルの陰から私の疑問に対する答えが姿を現した。

「KMF……?」
ナイトメア

最悪だ——。

想定はしていた。

でも、ただの捕縛に使用しないだろう、とどこかで甘い認識が私にあった。

忘れていた、相手はブリタニアだ。目的の為なら老若男女、関係無しに殺す国。

ただの歩兵だけだったらまだ何とかなつた。銃は持っているし、直接目を見ればギアスも使える。

しかしKMFナイトメアに対する有効な戦術が私達には無い。

どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう。

思考が追いつかない。全身から嫌な汗が噴き出ているのがわかる。

私が狼狽していると、痛みで顔を歪ませている彼女と目が合った。

行け。C・Cシィが目で私にそう訴えかけているのがわかる。

頭では理解出来た。

私はまだKMFナイトメアの視界に入っていない。気づかれないうちに逃げることも可能だろう。

それに彼女は死ねない身体だ。

生き残ることを勝利条件とするなら、今の最善手は私が逃げる事——。

「い、やだよ………」

C・Cシューを見捨てることなんて出来ない。

彼女の声を、温もりを失いたくない。離れたくない。

そう私が考えているのがわかったのか、C・Cシューは苦痛に曇らせていた顔を少し和らげ、言葉を紡いだ。

音として私に届くことは無かったが、彼女の唇の動きから言葉を汲み取る。

「またな」彼女の唇は確かにそう、形を作った。

震える脚に鞭を打ち、C・Cシューに背を向け私は走り始めた。

近くに兵士が居たのだろう。私が走り始めてすぐ、探せという声と複数の足音が聞こえた。

立ち止まる訳にはいかない。ここで足を止めてしまえば彼女の行動が無駄になる。彼女が私に向けて呟いた言葉が頭の中でリフレインする。そう次がある。冷静になれ、アルカ・アングレカム。奪われたものは奪い返せばいい。

「必ず……取り戻す……！」

涙で歪む視界を拭いながら、私はただただ走り続けた。

prequel 5 逢着

C・C^シと別れてから3日目の深夜。

私は現在、ゲットー内の廃ホテルの中で傷の手当てをしている。

旧日本で言う所の北九州辺りだろうか。

ようやく追手を振り切った私は身体を休める為にブリタニア軍もイレヴンも居ない所を探していた時、このホテルを見つけた。

今にも崩れそうでお化けが出てもおかしくない外観。中も荒れ放題だし、部屋によっては血痕が残っている。ブリタニア軍人が気まぐれでイレヴンを殺しに来たのだろうか。

お世辞にも人が寄り付く様な場所ではなさそうで私には打って付けだった。

幸い水は使えるみたいだ。

「……つつ………」

肩や足を掠めた弾丸によって出来た傷、走っている時に出来たであろう切り傷等を一

一つ水で洗い、ホテルの部屋にあったカーテンを傷に巻き応急処置を施していく。

追手を完全に振り切る前は止血程度しか出来なかった為、こうして手当てする時間が確保出来たのはとてもラッキーだ。

応急処置が終わり、思考を今抱えている問題へとシフトさせる。

「本州に向かうためにはブリタニアが管理する道路か交通機関を使う必要がある……か………」

そう、海を渡る手段が無いのだ。

最後に私を追ってきた軍人からギアスで聞き出した情報だ。

本州へ渡れる道路は全て軍により管理されており、使用できない。

交通機関に関しては、私を捕縛する為だけに警備を強化しているらしい。顔も割れているという。

「一般人を装うにも………」

バレる可能性が高い以上取るべき選択ではない。

「ん、ダメだ。頭が上手く働かない」

そういえばここ三日間寝る暇なんて無かった。

今頃になって自分の身体が休息を求めているのに気が付いた。

「いくら考えても解決策浮かばないし、今は寝ようかな」

身体を横にして目を瞑る。

身体は休息を求めている筈なのになぜか眠れない。

瞼の裏に浮かぶのはC・Cの姿ばかりだ。

改めて考えてみれば常に追われている状況の中、唯一心を落ち着ける事が出来る存在が彼女だった。

寝るときはいつも彼女の腕の中。起きたら目の前には芸術作品の様な端正な顔が必ずあった。

しかし今はそれが無い。そう考えると中々寝付くことが出来なかった。

私は寝ることを諦め、身体を起こす。

彼女が居ないと満足に寝る事すら出来ないのか。自分自身に呆れ、苦笑をする。

C・C^{シィ}を奪還するにしても今のままでは不可能。

最低限の戦力、組織的な連携、情報……準備すべきものは沢山ある。

「まずは落ち着ける環境を確保しないと………ん？」

コツコツ複数人の足音と微かな話声が聞こえる。

「お……ぎ……こんな………にある………かあ？」

「わから……い………みんな……物資を………持ち帰………」

「たま……夜中に………大きい声………のやめてよ」

段々声がクリアになっていく。こっちに近づいてきている証拠だ。

私は音を立てないよう、そつと銃を取りドアの傍に身を潜める。

入ってきた瞬間に銃を突き付け、人質を取るためだ。軍人だったらすぐにも射殺するところだが、話し方的にイレヴンだろう。

イレヴンは仲間意識が強く、身内には甘いと聞いている。人質を取るのが一番効果的

だろう。

ガチャリと向かいの部屋の扉を開けた音が木霊した。どうやら一部屋ずつ確認している様だ。

「この階最後の部屋ですね、扇さんこの後どうします?」

「なあ扇い、もうねみいし帰ろうぜえ〜」

「あ、ああ、そうだな。もう遅いし今日は切り上げるか」

声がハッキリと聞こえた。どうやらもう目の前に居るらしい。

男二人に女一人……女は声の感じ的に大人ではなさそう。

男のどちらかを人質、もう一人をギアス。女は……まあ放置でいいだろう。

私が取るべき行動のパターンをいくつか頭に浮かべているとドアノブが回り、扉がゆっくりと開いていった。

大柄な男が部屋に入ってきた。私は素早く男の頭に銃を突き付ける。

「動く……扇さん!!!」

言葉を言い切る前に私の持つている銃が取り払われた。

(はやつ………!)

想定外の出来事に私は距離を取る。もう一人の男によって阻止されたとばかり思っていたが、どうやら女によって取り払われたようだ。

大柄の男ともう一人の男は思考が追い付いていないようで呆然としている。

距離を取った私はすかさずギアスを発動しようと女の方に視線を向ける、が――

私が距離を取ったと同時に詰めてきていたらしい。考えていたよりも女との距離が近く、ギアスをかける暇がない。

「しまっ――」

あつという間に女に押し倒され、腕を拘束された。

「何者よ、あんた!？」

女が私に問いかける。

女にギアスをかけようと女の顔を見つめる。さっきまでは暗がりで見えなかったが距離が近くなったことよって見えてきた。

強い意志を持った目、日本人離れした白く端正な顔立ち、癖のついた赤い髪――。

「ブリタニア……人……？」

ギアスの事を忘れ私は思ったことをそのまま口にした。

「あんなやつらと一緒にするな!! 私は日本人だつ!!」

物凄い剣幕で怒鳴られた。

容姿は明らかにブリタニア人だが、本人の否定っぷりからハーフ、もしくはクォーターの可能性が高いな。

赤い髪の女に押し倒されながらそんなことを考えていると、

「おい、カレン。大丈夫か？」

私が最初に銃を向けた男が赤い髪の女——カレンに話しかけてきた。確か扇と呼ばれていたか。

「私は大丈夫です、扇さんこいつどうしましょう？」

会話の内容的にこの扇という男がリーダーなのは間違い無いだろう。

全体的に歯切れの悪い物言い、銃を向けられた時の反応の鈍さを考慮するとギアスを使うまでもなさそうだ。

ギアスは一人の人間に一回しか使えない、使わずに済むならなるべく使いたくはないものだが……。

「んなこと決まってるだろ、扇に銃を向けたんだぜ？ブリキに遠慮することなんてないだろ」

もう一人の男が口を挟んだ。短絡的な物言い、チンピラのような見た目。何も考えて無

さそうな声音。

この男に対してもギアスを使う必要は無さそうだ。

問題は――

「あんたは黙ってて玉城。私は扇さんに聞いているの」

私を組み倒しているカレンと呼ばれる女だ。

人並外れた身体能力。ぶれることが無さそうな強い意志。頭もそこそこ回るのだから。

この場で一番厄介な存在である。

さて、どう切り抜けるか――

「どうするって言うてもなあ……明らかにまだ子どもじゃないか」

扇さんが動揺を隠しきれない様子で小さく呟いた。

私は組み敷いている少女に目を向ける。

陶器のような白い肌、穢れを知らないクリーム色の髪、強い意志を秘めたアメジスト

色の瞳。

触れたらすぐに壊れてしまう様な、そんな儂い印象を受ける。

確かに扇さんが言う通り、幼い少女だ。歳もまだ9歳、10歳くらいだろう。

しかし、そんな見た目の少女だからこそ私は警戒心を強める。

銃を向けた時の迷いの無さ、銃を取り払った後の判断の早さ。そしてなにより、

(拘束されているというのに焦っている様子がない……)

仲間がいる様にも見えない、武器を隠し持っていることも無さそう。

少女は静かに私たちの会話や動作を観察している様子だ。正直言つて気味が悪い。

少女と目が合う。吸い込まれそうなアメジスト色の瞳、彼女と目を合わせているだけで心が見透かされてしまいそう——

「っ……………」

ここにきて初めて少女が顔を歪めた。

どうやら傷が開いてしまったらしい。肩や脚の辺りから鮮血が溢れ出てきている。

「ケガをしているじゃないか!!」

扇さんが焦った様子で少女に話しかけた。元教師というのもあつて純粋に彼女の事が心配なのだろう。

「おい、扇い。まさか助けるつもりなのか？ お前に銃を向けてきたんだぞ!! それにガキつってもブリタニア人じゃねえか！ほっとけよ!!!」

玉城がイラついた様子で声を荒げた。

玉城の言い分にも一理ある。相手は私達を蹂躪したブリタニアだ。それにそもそも手を出したのは彼女からだ。

しかし――。

「す、すみません……が…、どいてくれ……ませ、んか……？ 危害、は……加えませんの
で……」

「追われている身でして、気が動転していたんです」と少女はか細い声で呟いた。どうやら訳ありらしい。扇さんの方へ視線を向けると、彼は小さく頷いた。

「わかったわ……ただし完全に自由にするわけにはいかないから」

「重々承知しております」、と少女は私に続けて口にした。

後ろで玉城がギャーギャー騒いでいるけど、リーダーは扇さんだ。

私は組み敷いている彼女からゆっくりと身体を離す。

少女は慣れた手つきで開いた傷口の応急処置を行い始めた。どうやら本当に抵抗する気は無さそうだ。

「それで、君は何者なんだ？追われている身と言っていたが……」

扇さんが少し警戒心を含めながら問いかける。

少し間を置いて少女がポツリポツリと話し始めた。

未だに少女に対する気味の悪さは拭えない私は、彼女の一挙手一投足を漏らさず観察しながら耳を傾けることにした。

prequel 6 憎むべき相手

「それで君はブリタニアから追われているわけか……」

アルカと名乗る少女は小さく頷いた。

彼女は元貴族階級の出らしく、ブリタニアに対して反体制的な思想を持った家系、所謂「主義者」だったようだ。

ナンバーズに対して支援を行っていたある日、同じ貴族の家系から告発され、両親は暗殺。血の繋がった兄妹きょうだいは生死不明、彼女がその家系の最後の生き残りらしい。

「将来的に反ブリタニア勢力の戦力にする為、母上は私に幼少時から様々な訓練を施しました。身体の動かし方からKMFナイトメアの操縦まで……」

それである身のこなしと判断力か、まだ不鮮明な部分が多いが納得は出来る。

「君の素性はわかったが………」

扇さんが頭を掻きながら少女に問う。

「どうやって日本まで来たんだ？君一人ではとても来れるような距離じゃないだろう？」

少女は静かに話し始めた。

両親が殺されきょうだい兄妹と生き別れた後、本国でとある女性が手を差し伸べてくれたらしい。つい最近まではその女性と一緒に行動していたらしいが……

「んで？その女つてのはどこに居るんだよ？」

玉城の言葉を聞いた少女は、今までで一番の動揺を見せた。瞳に涙を貯めながら彼女は独白を続ける。

「ブリタニア…軍に…先日捕まりました……。私、を……逃がすために…囹となって

………。もともと彼女も、ブリタニアに……追われている身なんです……。それを彼女に分かつていながら……!!」

少女の小さな拳が力んでいるのが私達から見ても分かる。——悔しいだろう、何も出来なかつた自分が。

私はその少女の姿に自分自身を重ねる。

(お兄ちゃん……)

「私に抗う力さえあれば、彼女を失うことは無かつたんです！これ以上ブリタニアに搾取されることは無かつた……!!」

少女の瞳を見つめる。同じ目だ——。私達と、ブリタニアを憎む目。

扇さん、玉城、私の3人はお互いの顔を見合わせる。この少女をどうするか。

いくらブリタニア人といえど、追われているのを知りながら10歳の少女をここに放つて行くのも目覚めが悪い。

しかし、保護しようにも——。私達は再び頭を悩ませることとなった。



一通り話し終えた私は、チラリと3人の様子を伺う。

最初に比べるとだいぶ警戒心が薄まったように見える。

少なくともギアスを使わずともこの場を切り抜けることは出来そうだ。

嘘に少しの真実を織り交ぜただけで警戒心を薄めることに成功した。日本人はやはり甘いな、と内心ほくそ笑む。

「あの、皆さんは何をされている方なんですか？一般人の様には見えませんが……」

一斉に3人が私の方へ顔を向けた。

ゲットーに居る時点で名誉ブリタニア人では無いのは確実。

少女が見せた強いブリタニアに対しての嫌悪感、訓練されている身のこなし。

私の想像通りだと嬉しいのだけど……。

「あ、ああ。俺たちは……」「反ブリタニアのテロ組織の人間……ですか？」

扇という男の言葉に被せて3人に言い放つ。

その言葉を聞き、3人の顔色が変わった。凶星か。

「そうだ、と言ったらどうするつもり？」

カレンと呼ばれる少女が私を睨みつけながら問いかける。

「仲間に…加えて頂けませんか？」

C^{シー}・C^ツを取り戻すためには戦力は必要不可欠。それも組織的な戦力であればより確実性が増す。

日本は数ある植民地の中でも群を抜いて反抗勢力が多いと聞く。

現在進行形で活動しているテロ組織と連携出来るのなら可能性が有るのなら試す価値は大いにある。

「君がブリタニアを憎む気持ちはわかったが…：俺たちの組織は日本人の集まりだ。ブリタニアの血が入っている君が歓迎されることは無いと思うが…」

扇が言葉を慎重に選びながら私を諭すように言った。優しい性格の男なのだろう。よし、あと一押しだ。

「承知の上です。出会って間もない私を信用できないのも理解しております。ただ、ブリタニアを憎む気持ちに人種は関係ありますか？今の日本により好みをする余裕はあるのでしょうか？」

間髪入れずに私は続けた。

「あなた方の敵はブリタニア人ですか？ブリタニアという国そのものでは無いのですか？ブリタニアという国と戦争する気があるのなら、覚悟を決めてください。」

ブリタニア人である私を受け入れる覚悟を――。



「ブリタニアも把握してないレジスタンス用の移動ルート…ですか。キョウトという組織も中々やりますね」

北九州から本州へと繋がる海底トンネルの中でアルカが年相応に目を輝かせながら呟いた。

結局私達は彼女の圧に負け、仲間に加えることにした。まあ歳も考えると仲間というよりはかは保護という意味合いの方が強いが。

「んで、アルカはトウキョウ租界に行きたいんだっけ？」

「はい、そうです！皆様の活動拠点がシンジクゲットーなのはラッキーでした!!」

彼女の顔にペアつと笑顔になる。こういうところは年相応で可愛らしいな、と私は呑気に考えていた。

トウキョウ租界に彼女の兄姉の手掛かりがあるらしい。

自ら協力を申し出た彼女だが、兄姉の行方を搜索しつつ協力するつもりだったようだ。

「そうは言うけど、もし私達がトウキョウの方で活動していなかったらどうしてたのよ」
「この辺りの方ではないという確信はありました、土地勘が無さそうだったので。あと
は……喋り方ですかね、なまりを感じなかったので関東の方かなあと」

「まあほとんど勘ですけど、あはは」とアルカは続けた。

貴族の出というのもあり語学能力は高いらしい。逃亡生活を続けている中でも少
しずつ勉強していたのだとか。10歳という歳で平然とやっている彼女が未恐
ろしい。

「そういうえば、トウキョウで活動している皆さんはどうしてフクオカに？」

「ああ、物資の補給も兼ねて、こっちで活動しているレジスタンスに会いに来たんだ。
KMFもあるという話だったから無視出来なくてな。ただ俺らが着いた頃にはレジス

タンスは全滅していたよ。ブリタニアに嗅ぎ付かれていたらしい。」

アルカのことで完全に忘れていたけど。そういうえば本来の目的はそれだった。
KMFはともかく、壊滅したレジスタンスが持っていた物資を回収出来たから完全に無

駄骨というわけでは無かった。

「なあ扇い、連れて行くのは良いけどよ。こいつゲットーで匿うのか？俺らはともかく周りの住民達が何するかわかったもんじゃねえぞ」

玉城の言葉で私の意識は再び会話へと戻される。珍しくまともな意見を言ったわね

：

「ああ、そのこと何だが……」私が預かります」

扇さんの言葉を遮る。

ブリタニア人の彼女をゲットーに住まわせるのは危険すぎる。癪であるがブリタニア貴族である私の家ならばある程度は誤魔化しが効くだろう。正妻は無視をすればいい。それに彼女は何処か危なっかしくて、放っておけない。

「追われているのは一部の人間からだけなのよね？」

「はい、そうです。彼らも大事にはしたくない筈なので、普通に暮らしている分には問題無いかと……。追手も完全に撒きましたし」

「まあ念の為に軽い変装はさせるとして……大丈夫そうね。そういう訳だからよろしくね」

アルカを見つめながら私がそう言うと、彼女は一瞬キョトンとした後に「ありがとうございます！」と元気に答えた。

「お姉ちゃんみたい……」

アルカが顔を赤らめながら嬉しそうに小さく呟く。

う、なんだこの可愛い生き物……。

不思議なことに出会って間もない彼女に私は絆されていた。

prequel 7 手掛かり

「アルカ…アルカ……起きて、起きなつてば」

私の肩を枕代わりにしながら眠る彼女を優しく起こす。

一緒に逃亡していた女性——C・C（シーツ）と言ったか。

C・C（シーツ）がブリタニアに捕縛されてから一睡もしていなかったらしい。気が済むまで寝かしてあげたいが、そろそろトウキョウ租界に着く。

「このまま少し租界から離れた場所に車を停める感じで大丈夫か？」

中々起きないアルカに苦戦していると、運転している扇さんが苦笑しながら話しかけてきた。

「あ、はい。そこから家まで歩いて行きます。ただ……」

チラリとアルカに目を向ける。

「んだよお、おぶってやればいいじゃないか。お前だったらそのくらい余裕だろ」

玉城が茶化すように言った。

このまま起きなかつたら最悪そうする事になる。

しかし私も慣れない遠出で疲労が溜まっている。出来る事なら自分自身で歩いて欲しい。

「ん……………」

と、その時私の肩が軽くなった。どうやら起きたらしい。アルカは眠そうな目を擦りながら辺りを見回す。

「よお、ちつとは疲れとれたかあ？」

「玉城…さん…？…おはよう、…ございます…？」

どうやらまだ頭が働いていないらしい。

「ん……………、ああ!!すみません、カレンさん!!!肩をお借りしてしまつて…重かつたですか!?!」

慌てた様子で彼女がかしこまる。

「大丈夫よ、そんなに気を使わなくて」

そんなやり取りをしていると、車が停まった。着いたらしい。

「アルカ、君の活動については今後カレンを通して伝える。それまでは傷を癒すのに専念してくれ」

「お気遣いありがとうございます、これからよろしくお願いいたします」

ペコリとアルカが頭を下げる。

扇さんも玉城の反応を見るに彼女を受け入れ始めている様だった。玉城なんてブリタニアっていう言葉を聞いただけでも機嫌を損ねていたのに、不思議なくらいすんなり受け入れている。

そしてそれは私にも言える事だった。



トウキョウ租界——

占領後のエリアー内でブリタニアの国民が住む街。

全域が人口地盤で覆われている、ブリタニアの科学力が詰まった近代都市。

カレンさんの自宅はトウキョウ租界の中心街から少し離れた場所にあるらしい。

「継母がとつても鬱陶しいけど、そこさえ我慢すれば安全に暮らせると思うわ。少なくとも今までよりはね」

「心労、お察しします……」

紅月カレン、それは彼女の日本人としての名前。

普段はカレン・シユタットフェルトと名乗り、ブリタニア人として暮らしているらしい。

ブリタニア有数の名家当主と妾の子、それがカレンさんだ。

「あ、そうだ。さつきも言ったけど私に対して気を使わなくていいわ。呼び捨てでいいし、敬語もいらない」

これから長い付き合いになるだろうし、と彼女は続けた。

カレンさんとの距離感を中々掴めないでいる私を氣遣つてか、彼女の方からそう言うてくれた。

せっかくの申し出だ、言葉に甘えることにしよう。

「はい……じゃなくて……。うん、ありがとう……カレン」

少し気恥ずかしいが、そのうち慣れるだろう。

そうこうしている内に彼女の家——シユタットフェルト邸に着いた。

私ができるべきことは分かっている。今は準備期間だ。

確実にC・C[・]を取り戻す為、力を蓄える期間。何年かかろうとも絶対に成し遂げ
みせる。

私は心に誓いながら、これからお世話になる彼女の家へと踏み入れた。



彼女の家に匿われてから半月が経過した。この半月の間、C・C[・]の情報どころか、兄
上と姉上の手掛かりを一切掴むことが出来なかった。というのも、カレンに「傷が癒え
るまでは外出禁止!」と釘を刺されてしまったからだ。面倒を見てくれている訳だし、
私の為を思つてのことだと思つと、反抗出来るはずもなく、今日まで大人しくしていた。

「ほら、カレン!よく、見て!!傷なんて何処にもないでしょ!!!」

「わかった…わかったから……」

肩と脚に巻いてある包帯を取り、カレンに「ほら、みたことか」というように見せつ
ける。C・C[・]と離れ離れになつてから碌な治療が出来ず、化膿してしまつていた傷が
時間が戻つた様に元通り。傷跡が残らなくて良かった。身体に傷が出来た状態で彼女

や兄上達に再会したくないもの。

なんて考えていると

「あんた、銃で撃たれてた訳でしょ？手術もしてないのに、こんな綺麗に銃創つて無くなるようなものなの？」

しかもたった半月で…とカレンが訝しげな表情で呟く。

「私、昔から傷とか病気の治り早いんです！」

カレンが少し呆れた様な表情で私を見つめる。嘘は言っていないんだけどな

「まあ、何にせよ完治して良かったわ。あんたも言いつけ守ってくれた訳だし、私も約束は守らないとね。」

その言葉を聞き、自然と笑顔になるのが自分自身でもわかる。

「じゃあ……………」

「外出を許可してあげる。でもしばらくは一人での外出はダメ、私もついていくわ。」

「…………カレンって案外、過保護だよね…。私子どもじゃないよ」

カレンが私の言葉を聞き、より呆れた顔をして

「実際、子どもでしょ…………」と呟いた。



アツシユフオード学園の正門、制服を着た赤い髪の少女と警備員が言い争っている。

「だから！この子の入学を検討する為に理事長から学校の説明を受けたいのよ！それだけだってば！」

「君たちを疑っている訳では無いが、防犯の関係上、身分がわからない状態で通すわけにはいかない。」

「私の身内！つまりシユタツトフェルト家の血縁です！私の学生証は提示したんだしそ

れで通してよ！」

かれこれ10分くらい、私はこの警備員の説得を心見ているが、一向に首を縦に振らない。前まではここまで警備固く無かったじゃない……ああ、イライラする！アルカなんて飽きてしまったのか、正門に設置してあるカメラをボ——つと見つめている。想定ではもつとスムーズに行く予定だったのに…

遡ること数時間前、「アツシユフオード家の者と話したい」というアルカの望みを叶える為、カレンは一番確実で安全な方法を考えた。完全に部外者でIDも無いアルカをどのようにして学園に入れ、学校の理事であるアツシユフオード家に接触するか。

しばらく頭を悩ませていたカレンが思いついたのは、在学生である私自身とシユタツトフェルト家の貴族階級を利用する事。ブリタニアという国は基本的に貴族主義で成り立っている。貴族が発した一言で裁判の結果がひっくり返ったというのも珍しい話ではない。それだけ貴族の発言力は強いのだ。アルカは現在、身分を証明するIDが無い。シユタツトフェルト家に頼るの様な形になって癪ではあるが、アルカの身分をシユタツトフェルト家で保証しよう。そうだ、それが一番良い。

そこからの行動は早かった。「アツシユフオード学園に入学を希望している親戚の子

がいる、出来れば理事長から直々に話を聞きたい」と連絡をした。その後、ぶかぶかの私のYシャツを着てベットに寝っ転がりながら本を読んだアルカの髪を整え、あらかじめ買っておいた服を着せ……今に至る。

私の認識が甘かった。ここまで警備が嚴重になっていたとは。

「来客があるとは確かに聞いているが、IDが無いんじゃ通すわけにも……ん、ちよつと待ってくれ……」

唐突に警備員が背を向け、身に着けている通信機で誰かと話している。

「ええ……はい……了解しました。」

話終えたかと思うと

「……二人とも通つて良いそうだ……そつちの子のIDの確認も必要ない、理事長が直接会つてくれるそうだ。」

と、渋々ではあるものの通してくれるらしい。

「やったね、カレン。学校の説明を受けられそうで良かったあ。」

先ほどまでボーっとしていたアルカが駆け寄ってきた。警備員の主張の変わりように動揺を隠せない。この子が裏で何かしたのではないか、とまで思えてくる。実際やりそうだし。

「あんた、何かした?」

「別に何も?カメラあったし、カレンのこと知っている人が見ている、さっきの人を説得してくれたんじゃない?」

確かに……ミレイ・アッシュフォードならあり得ない話でもないか。



「お前が入学希望者……で間違いないか?」

不自然な程に人の気配が無い廊下。恰幅の良い黒服の男が私に話しかけてきた。どこからどう見ても学校職員には見えない。

「ええ、違いありません。理事長の元へ案内してくれるんですか？」

「ああ、付いてきなさい。ただし本人だけだ。カレン・シユタットフェルトの同席は認めない。」

高圧的な男の物言いに「はあ？」と声をあげたカレンを「まあまあ」と落ち着かせる。

「それは理事長の指示ですか？」

「そうだ。入学希望者本人だけに説明をしてくださるそうだ。」

「ふうん……そう……。カレン、私はお話してくるから。何処かで時間潰してて、先に帰っても良いよ。」

カレンは何処か納得出来ない様だったが、渋々といった様子で「はあ……わかったわよ。」と呟く。

「じゃあ適当に時間潰してるから、終わったたら連絡して。はい、これ私の電話番号。校内に何個か固定電話置いてあるから。」

どうやら一緒に帰ってくれるらしい。



豪華な装飾が施された理事長室。静寂に包まれたこの部屋に「ガチャリ」と乾いた音が響く。

「いやあ、遅くなって済まないね。もう歳なのか身体が思った様に動かなくてね……」

そう朗らかに呟きながら一人の老人が私の目の前に腰掛ける。「ルーベン・アツシユフォード」：アツシユフォード学園の理事長であり、元ブリタニア貴族。パーティー等の派手な事を好み、その浪費家ぶりからアツシユフォード家没落の要因の一つとされている男。

「そう言う割にはまだまだ元気そうじゃないですか。想像よりもお変わりなくて安心しましたよ、ルーベンさん。」

「……何処かでお会いしましたかな？」

「ええ……アリエスの離宮で。貴方が主催したマリアンヌ王妃の誕生日パーティーの時でしたっけ？」

「ふむ……シユタツトフェルト家を招いた記憶はありませんが……」

この男、いつまでこの不毛な会話を続けるつもりだろうか。

「……建前は結構です。私の事憶えているのでしょうか？本題に入りませんか？」

「はて、憶えているとは？貴方とは初対面の筈ですが……」

私を試しているつもりなのか、もしくは成長した姿を見たいのか。どちらにせよ私から切り出さない限り、この不毛な会話が終わることは無さそうだ。

「はあ……。私達が学園の敷地に入る前、正門に居た警備員に身分証明書の提示を求め

られました。身分を証明出来ないと言園に入れることは出来ない、と。イレヴンによるテロ行為が立て続けに起きているエリアーの情勢を考えると当然のこと。カレンが警備員と言合いをしている中、警備員の態度が一変。私は身分証明書を提示してないのにも関わらず、敷地内に入ることを許された。大方、身に着けていた通信機から通しても良いと指示があったのでしよう。正門には防犯用のカメラが設置されていた：私達の様子を確認するのは簡単でしょう。」

「……いむむ」

「それにこの部屋に来るまでに通った廊下。不自然な程に人気が無かった。たまに見かけた人と言えば、学園の職員にはまるで見えない黒服の男。アツシユフオード家直々のSPですかね。まるで皇族を出迎える様な人払いつぶりでしたね。加えて、学校側の対応も不自然過ぎます。私は表向きにはカレンの血縁の入学希望者として貴方に会いに来ました。しかし実際に理事長室に通されたのは私一人。私を連れてきた、血縁である筈のカレンを同席させないのはおかしい。」

一通り話を聞いたルーベンは、安堵と歓喜といった感情を顔に露わにしたまま呟いた。

「…その聡明さに苛烈な姿勢、まるでマリアンヌ王妃を見ている様でしたアルカ様。あまりにも懐かしい光景だったもので、つつい遊び過ぎてしまいましたな。」

母上の姿を私に重ねたことに少し苛立ちを覚える。

相変わらず遊びが過ぎますね、と少しの嫌味を言葉に込める。

「カレン・シユタットフェルトは貴女の事は何処まで…：…？」

「皇族ということは知りません、貴方が心配していることは起こりませんよ。カレンはエリアーに來てから初めて知り合った友人です。彼女は善意で私に手助けしてくれているのです。感謝こそすれ、疑いをかけるようなことは無いです。」

その言葉を聞き、「そうですか」とルーベンは呟く。

そして意を決した様に、続けて私に言葉をかけた。

「マリアンヌ王妃が亡くなられた後の貴方様の足跡、お伺いしても…？」

まあそれくらいなら良いだろう。

「時間も惜しいので簡潔にはなりますが、」

◇◇◇

ギアスやC・C^{シィッター}の事は伏せつつ今までの経緯をルーベンに説明した。

用意された紅茶を口にしながらチラリとルーベンに目を向ける。彼は顔に手を覆いながら肩を震わせている。そして声を震わせながら

「このルーベン、胸の高鳴りが抑えられません…マリアンヌ王妃が亡くなった際は二度とお目にかかれなないと不躰ながら考えていました…。」

この様子を見るに味方…と考えても良いかもしれない。歓喜、安堵といった感情を隠し切れない様子でルーベンの独白が続く。

「まさか二度もこのような奇跡が起こるなんて…これで少しはマリアンヌ様に顔向けが出来ます。」

「二度もっ？」

「……ルルーシュ様、ナナリー様、お二方はご存命でございます。姓をランペルージに変え、この学園の学生として……」

「兄上と姉上が………?」

prequel 8 再会

兄上と姉上が暮らしているというクラブハウスにルーベンと共に向かっている。

この学園に二人が居る、もうすぐ会える。兄上と姉上に再会するという私の悲願がようやく叶うというのに、なぜか少し怖い。二人は私の事を憶えているのだろうか。私という存在は二人にとって重荷になるのではないか。そんな思考が脳内を駆け回る。

「…本当にこの学園は広いですね、流石はトウキョウ租界で一番のマンモス校です。」

恐怖心を紛らわす様に私はポツリと呟く。

「エリアーで唯一の中高大一貫校ですからなあ。ここまで大きくなるなんて始めは想像もしていなかったです。」

私の数少ない自慢です。とどこか誇らしそうにルーベンは胸を張る。

「さ、着きましたぞ。ここがクラブハウスです。」

アツシユフォード学園の学生会館。パーティーやイベント事に使われるらしいが、イベントが無い限りは一般生徒は基本的に出入りしないらしい。宿泊施設も整っており、生活する分には申し分ないとのこと。

「本当に……兄上と姉上が……ここに………」

走った訳でも無いのに息遣いが荒くなる、勝手に手と脚が震える。再会したらまず何て声を掛けるべきか、どのような表情をするべきか。そんなことばかりを考えてしまふ。頭が上手く働かない。

「お三方の再会に私が同席するのは野暮ですな。ここで失礼させていただきます。」

ルーベンはそう言い残し、この場を去った。

「はい…案内、ありがとうございます、ごぎいます…」

自分でも驚く程か細い声が出た。きつとルーベンの耳に届いてないだろう。いや、今はそんなことどうでもいい。

クラブハウスの扉の前、私は深く深呼吸をし、扉の取っ手に手を掛ける。

「ごちやごちや考えても仕方がない…行くこう。」

自分自身の臆病な心に鞭を打ち、私はクラブハウスに足を踏み入れた。



クラブハウス内の広々とした廊下を進んで行くと、開けた部屋に行きついた。リビングだろうか。品のあるテーブルとイス、テレビやラジオ…といった生活家具が目についた。

足が悪い姉上の為だろう、家具は最低限しか配置されておらず、広々とした空間が確保されている。

「本当にここで暮らしているんだ……」

話だけではまいち実感が湧かなかつたが、実際に生活感のある風景を目にすると改めて此処に住んでいるという事実を認識させられる。

「ナナリー？ 咲世子さん？」

「!!!」

不意に後ろから聞こえた男性の声にハツとなり、声の主の方へ勢いよく振り向く。

「帰ったの、か……?？」

まつすぐな黒い髪に紫色の瞳、10人すれ違えば10人が振り返るであろう整った顔立ち。そんな少年が目を丸くさせながら私の方をじつと見ている。

ああ、間違いない。この人が私の……

「お兄ちゃん……」

無意識に私はそう呟いた。

◇◇◇

最後にこの目でアルカを見たのは本国に居た頃、俺が父……いや、あの男に日本に渡れと言ひ渡される少し前、ナナリーの病室でだ。

ナナリーが横たわるベットのシーツを握りしめ、ただ、ただ彼女は涙を流しながら、弱々しい声でナナリーの事を呼んでいた。看護師によると一晩中その様子だったという。

目に隈を作り、嘆くことしか出来ないアルカに俺は声を掛けることすら出来なかった。

怖かったのだ。アルカに非難されるのが、なぜ守れなかった。と

今思えばあの時、臆する事無く声を掛けるべきだった。あの光景を最後に、アルカは俺達の前から姿を消したのだから。

日本へ渡る俺達を見送りに来た異母兄弟達にアルカの事を聞いても誰も所在を知らない様だった。

日本が敗戦し、ブリタニアの植民地となった後、俺達はアッシュフォード家に匿われ、姓を「ランペルージ」に変えた。皇族としての俺達は死んだのだ。

偽りの平穏を手に入れた俺がまず最初に行ったこと、それは、アルカ・ヴィ・ブリタニアの手掛かりを探すことだった。出来る限りの手は尽くしたが、調べてもそれらしい手掛かりは出てこない。結局、現在に至るまで何の成果も得られなかった。俺たちはただ、アルカと再会出来る事を祈りながら過ごすことしか出来なかった。

しかし、

「——お兄ちゃん……」

そんな、彼女が。一切の行方が分からず、生死さえも不明だった、俺たちの妹が。

目の前に、居る。

ああ、間違える筈もない。

「——アルカ……」

病室でナナリーを泣きながら呼び続けていたアルカ、俺の最後の記憶にある彼女より

背も伸びているし、まだまだ幼い顔立ちではあるが成長を感じられる。…当然か、5年も経っているのだから。

陶器の様な白い肌、穢れを知らない淡いクリーム色の髪。俺やナナリーと同じ、アメジスト色の瞳。身内という事を差し引いても可憐であり、どこか神聖さすら感じる。将来、間違いなく、美人に成長するだろう。

そんな彼女は瞳に涙を貯め、あの時と同じように、弱々しく。

「あ…い、たかった…！」と呟いた。

いや、同じではないか。弱々しい声ではあるが、間違いなくその声には、歓喜が含まれているのだから。

俺は泣きじゃくるアルカを抱きしめる。

「…相変わらず、泣き虫だな……………」

「人の事、言え…ない…でしよ……………！」

気づけば俺も涙を流していた。



「…美味しい……」

「特別な茶葉を取り寄せたものでな、お前に振る舞えて良かったよ。決して裕福とは言えない生活だが、紅茶^こだけは拘りを捨てられない。」

「昔から紅茶、好きだったもんね。」

「ああ、自然と心が落ち着くんだ。」

泣きじやくつっていたアルカを落ち着かせる為に、紅茶をいれた。本来はナナリーとのティータイムを楽しむために用意した物ではあるが、アルカもナナリーと同じく大事な妹だ。奮発しても構わないだろう。

……これは追加でまた、取り寄せる必要があるな。これからは3人で飲むことが出来るのだから。

「落ち着いたか？俺でそんなに泣いたんだ、ナナリーと再会した時はどうなるんだ？」

「もう泣かないもん。姉上との再会は、うーん、そうだな。」

姉上、私です。アルカでございませす。覚えてらっしゃいますか？

みたいな感じで冷静に大人っぽく語りかけて…泣きじやくる姉上をこの胸で受け止

める！」

アルカは「ヴィ」家の末の妹だ。いや皇族全体で見ても末端と言つてもいいだろう。その幼さ故、王位継承権は90位、最下位だ。あの母上がアルカの皇位の継承を諦めるほどに、アルカの立場は特に弱かった。

そうした背景もあるのかもしれない。成長した姿を見せ、認めてもらいたい。という気持ちが強いのだろう。我が妹ながら可愛らしいことだ。

「ふ…それにしてもお兄ちゃん、か。懐かしいな、散々コーネリアに矯正されていたが、結局直らなかつたんだな。」

「いや、あれだけ言われてたんだよ？流石に直つたよ。さっきのは、うん、感極まつて…」

普段はそんなこと無い、たまたまだ。とアルカは主張する。まあ確かに、こうして話しているとナナリーの事を姉上と呼んでいる。本人としてもお兄ちゃん、お姉ちゃん呼びには多少の恥ずかしさを感じているのだろう。それがわからない兄おれではない。

分かつていても、ついつい意地悪をしたくなつてしまふ。

アルカはナナリーとは違い、快活な性格で、表情が豊かだ。ユーフェミア寄りの性格、

というべきだろうか。それは今も健在らしい。

つまりは、弄り甲斐がある。

「ともかく！私は昔のままの、泣き虫のアルカでは無く！立派に成長したというのを姉上に……」

唐突に乾いた電子音が部屋に響いた。音が鳴った扉の方へ眼を向けると、メイド服を着た黒髪の女性と、車椅子に乗った栗色のウエーブがかった髪の可憐な少女が居た。咲世子さんとナナリーが散歩から帰ってきたのだ。

「ルルーシユ様、ただいま戻りました。」

「今帰りました、お兄様。…あら……？紅茶の匂い…お客様ですか？」

「ああ、おかえり、ナナリー。実は……「お姉ちゃん!!」

俺の言葉を遮り、アルカはナナリーの元へ駆け寄る。ナナリーの前で床に膝をついた、かと思うとそのままナナリーの太ももへ顔を埋め、また泣き始めた。

目の見えないナナリーは状況が呑み込めず困惑している様子だったが、自身にしがみ

つきながら泣いている存在を確かめるかの様にアルカの頭に手を伸ばし、「あ…」と小さい声を漏らした

「…そんな、もしかして…アルカ……………なのですか?」

ナナリーが名を口にした途端、アルカはさらに泣いた。

「やれやれ…言ってた事とやってる事、逆じゃないか?」



「…取り乱した……………」

目を充血させたまま、アルカは本日三度目の紅茶を口にする。

「…さつきもこの光景を見た気がするな。」

「五月蠅い、兄上。」

意地悪が過ぎたのか拗ねてしまった。

「泣きじゃくる姉上を私が抱きしめる筈だったのに……」

「ふふ、逆でしたね。可愛かったですよ、アルカ。」

「むう……」

また泣いてしまったアルカを落ち着かせる為、再び紅茶をいれた。

俺もそうだが、アルカも大概、紅茶が好きだ。

「……落ち着いた事だし、いいか？アルカ、俺達と別れた後の事を聞いても……」

アルカは先程とは打って変わって、神妙な表情となり、ポツリポツリと話始めた。



「そうか、そのC・C（シーツ）とかいう女性に感謝しなければ……」

ギアスの事、カレンが所属するレジスタンスの事は伏せ、二人に私の大まかな経緯を話した。死んだことになっているとはいえ、まだまだ平穩とは言い難い兄上と姉上の環境に、ギアスや物騒な組織を持ち込む訳にはいかない。

「しかし、ブリタニアに……」

「うん、捕まった。私を逃がす為に。」

「……………」

「……………」

不安を隠し切れない、といった様子で二人は私を見つめる。おそらく私が心配なのだろう。恩人の為に自身の身を切るのではないかと。

「心配しないで。折角二人と再会出来たんだもの。これ以上は望まないよ。それにブリタニアに捕まったってことは、もう……」

「生存は絶望的……仮に生きていたとしても取り戻す手段も力も無い……」

「お兄様!!」

咎める様に姉上は声をあげた

「いや、いいの、姉上。わかっているから…。これからは兄上と姉上、3人が平和に暮らせる様、行動していくつもり」

そう、私は3人の平和の為に行動を起こさなければならぬ。そこに兄上と姉上を巻き込む必要は無い。私だけでやってやる。何年かかろうとも。

「そうか……。」

静寂が部屋を支配する。重たい空気を振り払う様に、兄上は話題を変えた。

「今はシュタットフェルト…だったか？その家に寝泊まりしているんだらう？そいつには連絡したのか？」

「あ…」

まずい、カレンに連絡するの忘れてた。あれから何時間経ったのだらう。もう日も傾

いてきている。

「色々、報告しないとだし、お礼しなきゃだし、私の荷物も向こうだし……」

今後の活動とか、相談しないと……

「と、取り敢えずカレンの所へ行ってくる！夜ご飯までには！帰るから!!」

まずは電話しないと……私は校内にあるという電話を探す為、クラブハウスを飛び出した。

「慌ただしいな……」

「ええ、昔と変わらさ……」

慌ただしいのは違い無いが、心地良さと懐かしさを感じる。

「今日の夜ご飯は豪勢にいこう、咲世子さんに頼まないとな」

「ふふ、楽しみです。」

きつとナナリーも同じ気持ちだろう。



「んで。運良くアツシユフオード学園の生徒だったあんたの兄と姉にあの後そのまま、再会したと……」

うんうん、と綺麗な髪を揺らしながらアルカは頷く。

「足の悪い姉は寮での生活は困難。理事長の計らいで、ルルーシユとナナリー……だっけ？二人は特別にクラブハウスに住まわせてもらっている……」

全寮制である筈のアツシユフオードで寮に入っていない兄きょうだい妹……噂で聞いたことはある。

私は病弱設定で通っているので特例の通いだ。

「そこにあんたも一緒に住むつもり……と」

そうなんです。と嬉しそうに目の前の少女は頷く。畜生、可愛い。

「まあ、理事長からの許可は貰って無いのだけど。問題無いだろうって兄上が。」

「レジスタンスはどうするの？」

「勿論活動するよ、カレンと同じ二重生活」

「意外と辛いわよ……」

「わかってるけど……折角肉親と再会したんだもん一緒に居たい……」

それはそうだろう、誰だってそうだ。私だってお兄ちゃんが生きていれば同じことを望むだろう。

「別に止めはしないわよ、家族とは一緒に居るべき。」

「……何から何までありがとう、私の我がまを聞いてくれて。」

「ただし、時々泊りに来なさい」

ぼかん……とした表情でアルカは私を見つめる

「レジスタンスの活動もお互いしやすくなるし、それに、あんたが家にいると……その、えーっと、たの……しいし……」

私の言葉はを聞きアルカはにたあと笑みを作った

「ふふ、カレンって素直じゃないよね。もちろん遊びに行くよ、せつかく出来た友達なんだし」

「はいはい……どうせ私はひねくれてますよっと。んで、あんたの荷物は……」

「そのまま預かって貰っててもいい？中身殆ど普段の生活に必要な無いものだから……銃とかナイフとか……」

なんていう物を持ち歩いているんだ、この幼女は。まあ今までの生活を考えると仕方がないが。

「あ、でも黒いパーカー。あれだけは持っていく。」

ああ、アルカが寝るとき、毎回握りしめているやつか。

「あの所々縫ってある、オーバーサイズのやつ？欲しいならそれくらい買ってあげるわよっ。」

「あれはお金じゃ買えないよ…C・C^{シィ}に貰ったやつだもん。」

「…確かにそれは替えが効かないわね。わかったわ、それだけ取りに行きましょう。」



翌日

アツシユフオード学園 クラブハウス アルカの部屋

「もうお昼…か…。」

寝すぎてしまった。疲れていたのだろう。

それもそうだ。昨日カレンと別れた後、クラブハウスに戻った私は兄上と姉上、3人

で食事をし、そのまま夜が更けるまで話し込んでいたのだから。

…慌ただしい一日だった。たくさん泣いたし、たくさん笑った。

ここにC・C^{シ・ツ}が居ればな……

沈みがちになってしまふ思考を振りほどく。その光景を実現させる為にこれから行動を起こすのだろう、弱気になるな。

深呼吸をし、部屋を見渡す。

兄上に案内された部屋だ。私の部屋らしい。今まで誰も住んでいなかったというこの部屋は、不自然な程に綺麗で、家具が揃っている。

ダブルサイズの大きいソファ、テレビと本棚、パソコン。

本国に居た時ほど、という訳では無いが、一人で使うには十分すぎる程広い。二人で使っても狭苦しくはならないだろう。今まで誰かとずっと一緒に過ごしてきた私からすると、広すぎて寂しさを感じてしまう。

後から知ることになるが、私といつ再会しても良い様にと、兄上は掃除を欠かさなかったそうだ。家具が揃っているのもそうした思いから、だという。

「兄上も起こしてくれればいいのに。…ふわあ……………」

昨日が慌ただしかった影響なのか、中々動く気が起きず、つつい欠伸をしてしまう。元々寝起きが良い方では無いけど…

「まあ、気を使ってくれたのかな…」

なんて考えていると、廊下からドタドタと大きな足音が聞こえてきた。

ん？誰だろう？兄上…な訳無いだろう、立ち振る舞いが基本的に上品な兄上はそんな事しないはず…。姉上な訳でも無い。

昨日兄上と姉上と一緒に居たメイドの人…咲世子さんだろうか…。うーんでもそんな慌ただしい人には見えなかった。彼女はおしとやかな女性…という印象だ。

「実は私、音を立てずに走ることが出来るんですよ、ふふ」とよくわからない事も言っていたし…

うーん、うーんと頭を悩ませていると、足音がピタリと止んだ。丁度私の部屋の前くらいで。

そして部屋の扉の電子ロックが何故か勝手に解除され、扉が開いたと思ったら、見るからに快活な金髪の女性が勢い良く、部屋の中に入ってきた。

「ルルーシユとナナちゃんの可愛い可愛い妹ちゃんは、ここにやあーんん!!!」

今日も慌ただしい一日になりそうだ。

prequel 9 日常

「ルルーシユとナナちゃんの可愛い可愛い妹ちゃんは、ここにやあーん!!!」

意志の強そうな瞳、綺麗な金髪、学生離れした色っぽい体付き。そんな女性が今私の部屋の入口にいる。

突然の出来事に私は理解が追いつかずつ呆然としてしまう。

「え、ええ？だ、誰…ですか…?」

「ん、ほうほう…。聞いてた何倍も可愛いわネ。」

話が噛み合わない……

彼女はそんな私を気にもせず、話を続ける。

「二人の妹と聞いてたからしつかり者かと思ったんだけど、今起きたところなのかな？」

案外寝坊助さん？」

その言葉にハツとする。

私は今、上半身だけを起こした状態だ。重力に従って寝る時にかけてた布団は落ち、ナイトウェアが外気に晒されている。

「!!」

つまりは、同性とはいえ、初対面の人に見せる格好ではない。

ほぼ反射的に、横に合ったパーカーを手に取り、胸元に手繰り寄せる。

「ふむふむ、初々しい反応。大変よろしい」

なにかだ。

と、思わず口に出してしまいそうになる。

そんな会話とも言えないやり取りをしていると、

「会長…なんで、そんなに…はあ、はあ…早いんです、か…」

苦しそうに呼吸をしている兄上の声が聞こえてきた。

「私が早いのでは無く、あんたが遅いのよん、ルルーシユ」

どうやら走ってここまで来たようだ。この様子を見るに相変わらず兄上は運動が苦手の様だ。

「まだ寝てると、言ったでしょう…マスターキー、で鍵まで解除して、入らなくても……」

兄上の呼吸が落ち着いてきた。先ほどよりも息が続いている。

なんて考えてる間に私を置いて二人の会話は続く。

「善は急げ、つていうでしょ。こういうのは思い立ったらすぐ行動！」

「相変わらずの、行動力、ですね…」

随分と親しい様に見える。会長と呼ばれていたことから学校関係者ってことは想像出来るが……

「兄上……この方は……?」

「あ、ああ。アルカ、この人は……」

「アツシユフオード学園高等部、二年！生徒会長のミレイ・アツシユフオードよん！」

大きい胸を張り、高らかに金髪の女性……ミレイ・アツシユフオードは名乗りをあげた。



クラブハウス内、私達が住む区画のリビング。

「私をアツシユフオード学園に入学させたい……?」

私は兄上とミレイさんから話を聞いていた。

あの後一度部屋から出てもらい、急いで寝癖を直し、顔を洗い、服を着替えた。

「ええ、ルルーシユから相談を受けてね。妹に普通の暮らしをさせたい、って。聞けば貴女、今まで一度も学校に通つたこと無いらしいじゃない。」

「皇族としては別におかしくないことですが……」

「でも今は皇族じゃないでしょ。」

「まあ……そうですね……」

「それに他の生徒達の目もあるからね。部外者の貴女を住まわせる訳にもいかないのよ。」

彼女の言い分は分かる。

アツシユフオード家としては私をこのまま匿いたい。

しかし生徒でもない私を敷地内に住まわせるのは悪目立ちしてしまう。学園に対しての不信感も増すことだろう。

アツシユフオード家としての主張と生徒代表としての主張。

丸く収める一番確実な方法が私の入学、ってことだろう。

兄上の方に目を向ける。彼女の主張に対して意見を出す気配は無い。

しかし、昼間学校に拘束されるとなると、レジスタンスの活動がしにくくなる。

「……」が難点だ。

「それに入學してくれるのなら私達の方でIDも用意出来るわ」

「……」

ID…身分証明書を持たない私としては喉から手が出る程欲しいものだ。IDを持たないブリタニア人なんて怪しすぎる。

「アルカ、お前の歳を考えるとブリタニア人であるお前が、学校に通っていないのは不自然過ぎる。軍に目を付けられたらどうする？もうお前を失いたくないんだよ……」

「………わかりました、では入學する方向で。」

兄上の気持ちを無下にする訳にもいかない。

カレンの様に体調不良とか、最悪お願キアスいを使って時間を確保しよう。

「しかし、そうなると今後一年は別のところで暮らさないといけないんですね……」

「え、あと一年？」

ミレイさんは目を大きくさせる

「はい、だって私まだ10歳ですよ、もうすぐ11歳になりますが。アツシユフオード学園は中等部から。」

「……………」

「中学生は12歳からが一般的。」

「会長…まさか、」

「私の年齢知りませんでした?」

チラリ、と兄上の方へ眼を向ける。

「話した筈なんだがな……………」

事前に話していたらしい

「は、ははは。はは……………」

ミレイさんから乾いた笑い声、と思っただらいいかな

「だあいじょーぶ!!!」

と大きな声で叫んだ。

随分と愉快な人だ

「飛び級よ！飛び級!!一年の差なんて大したことないわ!!」

「そんな無茶苦茶な…。」

兄上が呆れた様に呟く。

「元々実力主義のブリタニア!!13歳で騎士になっっている女の子も居るのよ!!!元皇族ってことは幼少期の教育もしっかりしてたでしょう!!ルルーシュとナナちゃんの妹だし、きつと大丈夫!!絶対大人より頭良い!!!天才!!!」

どこで息継ぎしているかわからない。早口言葉の様に矢継ぎに言葉を発した彼女は「その方向で書類の作成とかしておくわねー!!明後日から入学だから!!よろしくう

!!!

と言い残し、ミレイさんは去っていった。

「あれが俺たちの後見人、アツシユフオード家のご令嬢だ……」

「…台風みたいな人だったね……」

はあ……

「……………疲れた」

兄上と言葉が被った。

◇◇◇

「アルカ・アングレカムです、エリアーに来たばかりで、慣れないこともたくさんありますが、何卒よろしくお願ひいたします。」

「アルカさんは本国からの推薦で飛び級で編入が決まった子です。皆さんよりも年下で

はありますが、年齢に関わらず接してください。」

教室内が少しざわつく、まあそれもそうか。年齢的には小学生である筈の少女が中学校へ編入してきたのだから。

「じゃあ席は…一番後ろの窓側の席ね。」

「はい」

教壇から離れ、席へ向かう。物珍しい物を見るような、好奇心目が非常に鬱陶しい。

席に座り、頬杖を着き、外を見る。

目立たない席で良かった。ここならあまり生徒と関わらなくて済む。世間体や兄上と姉上の事を考え入学を決めた。決して仲良しこよしをする為に入学した訳では無い。

ここまでの展開は非常に早かった。ミレイさんと話したその日に身体の採寸を採られ、翌日には教科書と一緒に制服が届いた。

(ほんと、行動力の塊)

なんて考えていると、周りからカリカリと音がし始めた。どうやらHRが終わり授業が始まつたらしい。

まあある程度は真面目な生徒を演じよう。

そんな事を考えつつ、授業で使う予定の真新しいノートに自身の名前を書く。アルカ・アングレカム、と。

(アングレカム……か。)

アングレカム、ラン科・アングレカム属。白色が特徴の花。

C・Cシューからもらった大切な名前。

入学手続きの際、性をどうするかという話になった。

普通だったら「ランペルージ」と名乗るべきだろう。兄弟きょうだい妹いなのだから。

しかし、そうはしなかった。理由は勿論ある。

本国からの飛び級の編入生ってだけでも注目を集めるのに、高等部の副会長と同じ苗字。家の事を詮索されでもしたら面倒なことになる。

それに

(名前を変えるとC・Cとの繋がりが無くなっちゃうような気がして……)

要するに私の我儘を通して貰ったのだ。

「ランペルージ」と「アングレカム」は親戚、という扱いにミレイさんはしてくれただしい。

私が校内でも二人と気兼ねなく過ごせる様にと、気を利かせてくれた。

なんとなく、兄上が信用する理由、分かる気がする。

ふと、授業に意識を戻す。

(ブリタニア史……か……)

皇族の都合の良い様に改変された歴史など、学ぶ必要はあるのだろうか。

(C・Cが教えてくれた神話の話とか童話とかの方がよっぽど面白い)

溜息を付き再び外に目を向ける。

授業の内容をBGMに、ぼんやりと彼女と過ごした日々を思い出していた。



編入して3か月程が経過した。

適当に授業を受け、適当に抜け出し、カレンの家に何度か遊びに行き、兄と姉と共に過すごす…。

そんな普通の生活を表向きにはあるが、私は宮んでいた。

もちろんただ平和を享受していた訳では無い。

カレンの家に行った時は決まって扇さんの所へ向かい、レジスタンス唯一のKMFナイトメアである赤いグラスゴーでメンバーの操縦訓練も手伝った。

ゲットーの空き地でカレンと対人格闘戦の訓練もした。

…扇さんに何度か止められたけど………。

勿論ブリタニア軍の動向も逐一チェックはしていた、しかし…

(C・Cシィの手掛かりもまるで無し、軍の動きも大人しすぎる。)

扇さんが消極的なのも大きいですが、レジスタンスとしての活動はほとんど出来ていな

い。

ブリタニア軍に動きが無いのだ。

本国の重鎮がエリアー1に来る気配も無い。

新兵器が開発されていると噂も無い。

あるのは何時ものブリタニア人とイレヴンの小競り合いくらいだが、いちいちそこに首を突っ込んではいくら時間があっても足りなくなってしまう。

(まあ、総督がクロヴィスだからっていうのもあるか)

クロヴィス・ラ・ブリタニア：政治能力は並以下。戦闘指揮は平々凡々。エリアー1のテロ行為が盛んなのも彼の統治力の低さから、とまで言われている。

しかし、だからと言って完全なる無能という訳でも無い。

芸術面においては非凡の才能を持ち、エリアー1の遊園地や美術館などの大衆娯楽施設には、ほぼ彼が関わっている。

その甲斐もあり、国民からの支持は厚く、慕われている。

それに加えて、今のエリアー1で間違いない、治安の改善に一番力を入れている人物であると断言できる。

というのも、途上エリアであるエリアー1が衛生エリアに認定される為には、エリア内の治安改善は絶対条件。

彼からしてみれば、優れた総督として成果を上げ、次期皇帝の足掛かりにしたいのだろう。

ブリタニア軍が大人しいのは、多少なりとも彼の人柄や指標の影響もあるだろうか。しかし、ここで勘違いしてはならないのが、あの男の行動は全て愛国心と自己愛から来るものである。

イレヴンは元より、ナンバーズに対して何も感情を持つてはいない。同じ人と認識しているかすら怪しい。

つまり、こちら側からすると、ただの敵であることには変わらない。

(ただ何も考えず、力を振るうことは簡単。だけど、そんなのはただの八つ当たりだ。やるなら戦争……)

限られた戦力に限られた物資。敵は世界の1/3を占める大帝國。

必要最低限で最大の成果を出さなければならぬ。

やるからには無駄なことをしたくない。

しかし、ブリタニア軍側が付け入る隙を見せない。

つまり今の私達は明確な火種が無く、行動を起こせない。

「はあ……………」

「溜息なんて付いてどうしたのですか？何か悩み事?？」

声の主へ眼を向ける。車椅子に乗った盲目の少女、その後ろにはメイド服を着た日本人の女性。

「姉上、それに咲世子さん。いや、宿題がめんどくさくてね。」

「宿題は早めに片付けてしまおうのが吉ですよ、アルカ様。私は期限ギリギリにやるタイプでしたけど。」

「ダメじゃん……………」

適当に誤魔化しながら、咲世子さんと場所を代わる。

「それじゃあ、行こうか、姉上。」

今日は私が姉上をエスコートする日だ。



「学校生活はどうですか？」

「周りからの好奇心な目が無くなってきて過ごしやすくなったかな。」

「お友達は出来ました？」

「カレ…「カレンさん以外で、ですよ。」

「……………」

「先生が困っていましたよ、成績は良いのにあまり周囲に馴染めていない、と。」

「話も感性も合わなくてね、高等部の生徒会の人達という方が楽しいんだもん……………」

中等部の生徒はデリカシーが無い人が多く、今一好きになれない。

まだ成熟しきっていない年齢だから仕方が無いといえれば仕方が無いのだけど…

周りの幼稚さが気になってしまっしょうがない。

「アルカが経験してきた事は特殊で、皆が皆同じ経験しているわけではないんですから。」

普通の学生はそういうものですよ」

お説教を受けてしまったが、それは姉上の優しさから来るものだろう。

C・C^{シィッ}。C・Cしか信用できる存在が居なかった生活と皇族時代の影響で、どうも学校という環境に慣れない。

それをわかった上でこの話をしたんだろう。

心配をかけてしまったようだ。

(まあ、少しはこっちから歩み寄ってみるのも必要なのかな。無用な心配かけたくないし。)

姉上に言われるとどうも弱い。

「無用な心配ではありませんよ、妹を心配するのは姉の役目です。」

そう言いながら車椅子を押ししている私の手に姉上は手を重ねる。

「口に出してた？」

「いいえ、雰囲気に出てました。ふふつ。」

「敵わないなあ……」

「お姉ちゃんですから。」

相変わらず優しく、心地良くて。

この人の妹で良かったと心の底から思う。

「ありがとう。姉上」

「お安い御用です。」

姉上は世界の醜さなんて知らない、とでもいう様に可憐に笑う。

(身を持って知っている筈なのに……)

車椅子の取っ手を握る手に力が入る。

守らなければ、この人を。

作らなければ、大切な人達が平穩に過ごせる世界を。

(その為なら、どんな手を使っても……)

prequel 10 迫る運命

皇曆2017年

アツシユフォード学園 クラブハウス 自室

(バトラー將軍、正式にエリアー総督補佐に就任…ねえ……)

クラブハウス内にあてがわれた自室。

太陽はすでに昇っているのにも関わらず、この部屋の主はカーテンも開けずにパソコンの画面に映し出されているニュースの記事を眺めている。

久しぶりにブリタニア軍に動きがあった、と思い確認したらこのニュースだった。

私の欲しい情報に繋がるとは思えないが……

(まあ、エリアーでレジスタンス活動する以上、全くの無関係でも無いしな)

この男についての情報を整理する。

バトラー・アスプリウス

クロヴィスの腹心の部下であり、生粋の研究者。

基本的には、本国にあるというクロヴィスお抱えの研究機関に在籍しており、直接的な補佐はせず、研究分野の面から間接的な支援をする男、らしい。

らしい、というのは私が元々知っていた訳では無く、ニュースから得た知識だからだ。

(武官でも無い男が何故……)

本国からの指示…は無い。政治も戦闘指揮もお世辞にも良いとはいえないクロヴィスに研究者を付けてどうする。

クロヴィス本人の指示…。が妥当だろうか。

問題はなぜクロヴィスがバトラーを呼び寄せたか。

正直、クロヴィスの元へこの男が加わったとしても、さして今のエリアの現状から変わるとは思えない。

ただただ、腹心だから？

いや、タイミングがおかしい。着任と同時にわかるが、クロヴィスが着任してからもう大分経つ。

なんで今になって…

(バトラー将軍…バトラー……………)

名前が何処か引つかかる。

聞き覚えがあるような。

(あ……………)

C. C. といかがわしいホテルに宿泊する少し前に私達の前に現れた追手ギアスにかかる前、彼の名前を口に出していた……

「この男が…私達を捕まえるよう指示していた…？」

仮にそうでなくても関係者である可能性は非常に高い。

「やっと見つけた…C. C. の手掛かり……………！」

「向こうの方から私の元へ来てくれるなんてありがたい。
自然と口元が緩む。」

「この男を歓迎する準備、しとかないと」

そう呟く少女の顔は、年齢に似つかわしくない、狂気を孕んだ表情をしていた。

◇◇◇

トウキョウ租界 シンジユクゲツトー

「ブリタニアの新兵器？」

扇をリーダーとするレジスタンスが集まるこの場所で、レジスタンスメンバーである永田さんが耳にしたという噂を聞いている。

「ああ、どうもバトレーとか言うこの間来た総督補佐が開発しているらしい。その兵器

の研究施設が租界の外れの方にあるという話だ。」
「ブリタニアの新兵器か……内容は？」

扇さんが問う。

「化学兵器……毒ガスだ。」

「その情報、確かなの？」

「キョウトの使者からの情報だ、扇が居ない時に来て俺が対応した。」

「どうします？ 扇さん……」

カレンが扇さんに判断を煽る。

このレジスタンスのリーダーは扇さん……しかし、この人は優柔不断な性格であり、自信が無い。

人望はあるがトップには向かない……オデユッセウスの様な男、というのが私の印象だ。

（後押しした方がいいかな）

バトラーが開発しているという化学兵器。

兵器自体には興味が無い。けど…

バトラーを炙り出す為の良い取引材料として利用できる。

レジスタンスが活動する兵器（理由）があり、化学兵器の利用価値もある。

私としてはここで行動を起こしておきたい。

「ブリタニアがどのような意図で、このエリアーで化学兵器を開発しているかはわかりませんが…」

この場に居るメンバーが一斉に私の方を見る。

「ブリタニアの事です。確な使い方はないでしょう。最悪、虐殺の可能性もあります。」

「ぎゃ、虐殺……さすがにそこまでは………」

「ない。と言い切れますか。目的の為なら民間人ごと切り捨てる国ですよ。テロ組織の根絶をうたい、ゲッターに住む日本人を皆殺し。可能性として十分に考えられます。」

扇さんを始めとするみんなの顔色が青くなる。

日本占領時の戦争のことを思い出しているのだろうか。

「今私達がすべきことは……」「未然に防ぐことだ」

私の言葉を遮り、扇さんが声をあげた。

「これ以上ブリタニアに日本人を殺させる訳にはいかない。完成する前にその兵器を俺達の手で確保する。」

「扇さん……」

よし、乗ってきた。

「決行日は追って連絡する。それまでは物資の調達に専念してくれ。この場に居ない玉城達にも伝えておいてくれ。カレン、アルカはグラスゴウの調整を頼む。一番大きな戦力だからな。」

扇さんの言葉を聞き、カレン、永田の表情に決意が宿る。

リーダーとしての素質は今一だが、人望はある。

この男さえ説得してしまえば、あとは勝手に周りがその気になる。
楽なことだ。

「ブリタニアと……戦う……」

うつむいているカレンが小さく呟く。

「不安？」

「少し、ね。」

「大丈夫だよ、心配しなくても。私、精一杯頑張るから。」

目的の為に、ね。



かつての繁栄の様を僅かに匂わせる、荒廃した瓦礫まみれの町。

こんな場所に似つかわしくない、黒髪の可憐な少女が一人、どこか不機嫌な様子で歩いている。

(日本人は情に流されやすい…とは知っていたけど、まさかここまでなんて……)

元々の淡いクリーム色の髪を変装の為に、黒く染めた少女、アルカだ。

やはり兄妹きょうだいなのだろう、黒髪の彼女の面影はルルーシユをちらつかせる。

(確かに情に訴える形で仲間には入ったけど、まさか作戦にすら参加させてくれないなんて)

彼女は自身の所属するレジスタンスのリーダー、扇要に言われたことを思い出す。

(アルカ、今回の化学兵器強奪には君は不参加だ。ブリタニアとの戦闘が予想されるんだ…。子供である君を参加させる訳にはいかない、か)

内心舌打ちをする。

ブリタニアだったらこうはいかない。

使えるものは何でも使うし、そこに性別も年齢も関係ない。

仮に今の日本とブリタニアの立場が逆だったとしたら、アルカは作戦に参加出来ていたであろう。

しかし、それはあくまでもブリタニアの尺度だ。

そして彼女はブリタニア人。日本人では無く、過去に日本で暮らした経験も無い。

日本人の考え、特色を知識として知っている。だが、知っているだけだ。

知っているのと理解出来るのは別である。

（扇が最初、私のレジスタンスへの参加を渋っていたのはわかった。いや、扇だけではなく、玉城やカレンといった他の人達も）

なんとなくわかっていた、私を使うことに対して抵抗感を持っていることに。

（だからこそ、普通の子どもじゃないとわからせる為に、彼らの抵抗感を払拭させる為に

今まで貢献してきた)

アルカが普段、レジスタンスでしていたことは到底、他のメンバーが出来るようなことでは無かった。

武器を始めとする物資の調達。銃火器の扱い方のレクチャー。KMFの操縦訓練と整備。etc……

本国で学んだことを、逃亡生活中に磨いたスキルを、時にはギアスを。

自身の持つ能力、全てを活用し貢献してきた。

その甲斐あってか、徐々に皆からの私に対する意識も変わってきた、と思っていたが。アルカ自身が考えているよりも日本人は、非情になれないらしい。

(だからブリタニアに負けたんだよ)

思わず毒づく。

今、レジスタンス内で一番ブリタニアとの戦闘に役立つのは他でもないアルカだ。

銃の取り扱いも飛び抜けて上手く、KMFの操縦も問題無い。

幼少期、母であるマリアンヌから叩き込まれてきたアルカ。彼女が持つ本来のポテン

シャルも相まって、皇族の中でも目を見張るものがあつた。

あの皇族きつての武闘派で知られるコーネリアが驚愕のあまり言葉を失つたほどには。

アルカを作戦に参加させない、という判断はリーダーとしてはお粗末な判断だと言える。

人としての面で見れば、当然の事とも言えるが、アルカにしてみれば、良識ある人としての判断など、どうでもいい。

(勝手に行動するのは、簡単。だけど、イレギュラー私が混じることで指揮系統に乱れが生じる可能性も考えられる)

一人の勝手な行動が、負け戦を招く…よくある話だ。

(はあ…、少し離れた場所で様子見…かな。通信機の盗聴だけしよう。状況は把握したい)

こんな事になるなら最初に会つたあの時、配下としてではなく指導者としてレジスタ

ンスに加わるべきだった。

ここまで根強いと私への意識は簡単には変わりそうにない。

扇は人望だけはある。今から私が組織の実権を握ろうとしても、ヘイトを集めるだけだろう。

リーダーが変わらない限りは。

「私の事を一つの戦力として認識できるクレバーな指導者……。ふ、そんな都合のいい人居るわけないか……」

他人に縋る様な思考に、アルカは思わず嘲笑する。

「とりあえず、今は目の前の事に専念しよう。早く帰らないと。」

もう日が落ちてきている。

少し足取りが早くなる。

ルルーシュが家に戻る前にヘアスプレーを落とし、普段の彼女に戻らないといけなからだ。

アルカはゲッターを後にした。

運命の日がすぐそこまで迫ってきている。
彼女が求める存在が、魔神が生まれる日まであと7日。

第1期

stage 1 魔神が生まれた日

アツシユフオード学園 中庭

「ルルーシユは？」

「リヴアルさんが連れて行ったよ。次の授業までには戻って言った。一緒にご飯食べようかと思っていたのに。ね、シャーリーさん。」

「ええ！わ、私は、別に……。生徒会としての自覚を……。。」

ミレイさんに聞かれ、兄上との最後の会話を思い出す。

また、チエスの代打ちに呼ばれているらしい。

「お金！賭けてるんですよ！！ルルったら頭良いのに使い方おかしいんですよ！！ちゃんと勉強すれば……。ねえ？」

オレンジ色の髪をした少女。シャーリーさんは私とニーナさんに同意を求める。

「うちのルルちゃんは本当は良い子なのに！って？可愛いわねえ〜」

新しいおもちゃを見つけたようにミレイさんは目を細めた。

「そ、そそそんなんじゃない!!」

シャーリーさんが慌てふためく。

「そろそろ認めよう？シャーリーさん。私、シャーリーさんだったらお義姉ちゃん姉って呼んでもいいよ?」

「ア、アルカちゃんまで!!」

「良かったわね、シャーリー！ブラコンい拗もらせ末妹との公認よ!!」

「か、会長……もう勘弁してください……」

顔を真っ赤にしながら意気消沈したシャーリーさんに、悪戯大好きミレイさん、その

光景を会話には参加せず見守っているニーナさん。

アツシユフオード学園高等部 生徒会役員の面々だ。

全員年上……ではあるけど敬語を使うのはやめた。いや、やめさせられた。

「固い！固いわ!!アルカ!!私達の関係にそんなもの敬語は不要よ!!」

とミレイさんに強く言われたからだ。

実際私の敬語が抜けるまで、色々な事……をされた。

あれはセクハラで訴えても良いのでは？

ともかく、ミレイさんの手によって使うのを早々にやめた。

閑話休題

ともかくこの場に兄上は居ない。

姉上も学友とご飯を食べている。

一緒にご飯を食べる人が居ない私は、自室で食べようと思い、クラブハウスに戻ろうとした。生徒会室の前を通りかかったその時、ちょうど彼女たちと会い、今に至る。

「じゃあ私、行くね。」

3人に声を掛ける。

「まだ授業まで時間あるよ?」

ニーナさんが時計を見ながら呟いた。

「ちよつと用事があつて…、どうしても外せないの。お昼、誘ってくれてありがとう、楽しかった!」

そそくさと兄上特製弁当を片付け、その場を去る。

「ちゃんと授業には出るのよー!」

少し遠くからミレイさんの声がする。

返事代わりに振り返り、3人に手を振る。

(ちゃんと授業には出るのよ、か)

今日はもう恐らく学校には戻れないだろう、と思いながら制服の上に着ているパーカーのポケットに手をつ突っ込み。電子端末を取り出す。

その端末の画面にはトウキョウ租界の地図とその地図の上を移動する赤いポインタが表示されている。

(今は…租界の外側に通ってる高速の上か)

そろそろ軍が動いている頃合いだろうか。

イヤホンを取り出し、地図が表示されている端末に繋げる。

『クソ、玉城が作戦通りにやらないから!!』

仲間に対し、焦った様子で悪態を付く男の声が聞こえた。

捕まっては、しかし穏便には遂行出来ない、そんな様子だ。

その後も様々な情報が耳に入ってくる。

『帝国臣民の皆さん、そして協力していただいている。大多数のイレヴンの方々…』
『イレヴンじゃない！日本人だ!!』

クロヴィスの会見、カレンの強い否定、車の走る音、近くを飛んでいるであろうVT
OL機の音。

そんな音を流し聞きしながら自室に着いたアルカは着替え始める。

着ていたピンク色の制服と皺一つ無いワイシャツをベットを脱ぎ捨てる。

胸は膨らんでおらず、まだまだ女性とは言えない身体。

しかしながら、無駄な肉など無く、体付きはしなやかで芸術作品の様な神聖さが宿る。
そんな彼女の身体が外気に晒される。

脱ぎ捨てた制服を気にも留めず、タンスから新たに服を引っ張り出す。

黒いスキニー、白い無地のTシャツ。オーバーサイズの黒いパーカー。キャップ付き
の帽子。

おしやれに興味を持ち始める年頃の女の子からしてみると地味な恰好と言える。
が、アルカの目的はおしやれすることではない。

『クソ、ちんたら走りやがって!!』
『やめろ、そつちは!!』

男女の言い合う声が聞こえたと思つたら、轟音が続いた。
イレギュラーが起きたらしい。

脱ぎ捨てた制服をそのままに、彼女はクラブハウスを後にした。

◇◇◇

「クソ、軍まで出てきた! どうする!？」

私が乗っているトラックの運転手、永田が叫ぶ。

私達は作戦通りに化学兵器の奪取に成功した。が、玉城のドジのせいで想定よりも早く感づかれ、先ほどから追われている。

今までは忠告だけで終わっていたが、私達の様子に痺れを切らし、とうとう発砲してきた。

トラックだけで逃げるのはもう限界だろう。

「そのために私がいるんですよ!!」

私は覚悟を決め、腰をあげる。

私がここに居る理由……それはアルカ以外の仲間の中で、私が一番KMFの操縦が上手いからだ。

後ろの荷台に積んであるKMFの元へ足を運ぶ。

赤いグラスゴー。レジスタンス唯一のKMF。

アルカがこの日の為に整備してくれた機体。

彼女が言っていた言葉を思い出す。

「このグラスゴーには脱出機能が無い。いや、あったけど私が外した。駆動系を整備するのに部品がどうしても足りなくてね。脱出機能に使われている部品で代用したの。」

つまり、と彼女は真剣な顔で私を見つめる。

「グラスゴーの破壊はカレンの死。私としては苦肉の策だった。けどKMFの戦力は無視出来ない程大きい。だから私は貴女の命を守ることより作戦の成功を優先した。」

だから、こんな非情な私が言えたことでは無いけれど

「死なないで、カレン。」

そう言ってアルカは何かを差し出した。日本の神社に売っている様な、お守りだ。交通安全と書いてある。

「これは？」

「ゲットーの外れにね、神社見つけて、そこにあった。日本人ってこういうのにお祈りするんですよ？」

「交通安全……ってなんか少し違う………？」

「……似たようなものでしょ！」

アルカは、はにかみながら私に笑いかけた。

操縦席に括り付けたお守りに目をやる。

「ええ、やってやるわよ……。生きて帰ってやるんだから……！」

操縦桿を持つ手に力が入る。

グラスゴーを前進させ、私はトラックから飛び出した。

◇◇◇

カレンはKMFで戦闘に出た。

聞いてた会話からもそれはわかる。

しかし永田は？

(車に仕掛けた盗聴器……壊れたかな)

カレンが戦闘に出た後、発砲音や衝突音などが続いた。その拍子に壊れたのかもしれない。

ない。

残る情報源は仲間同士の通信の傍受……にはなるが、どうせ玉城辺りの愚痴しか聞かないだろう。

私が今知りたいのは、前線に居ない仲間達の会話ではなく、化学兵器に関することだ。

(……使えないやつらめ)

内心、毒づき、シンジユクゲットーの方へ眼を向ける。黒煙が立ち込め、空にはブリタニアの輸送機。黒い小さい粒がそこから降下しているのが見える。

(……名誉ブリタニア人の歩兵と純血派を中心とするKMF部隊……ってところかな)

クロヴィスはシンジユクゲットーを壊滅させてでも毒ガスを奪い返したいらしい。いや、この様子だと毒ガスかどうかとも怪しく見えてくる。いくらなんでも過剰すぎるのだ。

(ま、ある意味で毒かもしれないけど)

クロヴィスの地位を崩せる様な、毒。
その正体は何なのか、今の私には知る由もない。

◇◇◇

「なんなんだよ！お前は!!」

たまたま乗り合わせてしまったテロリストのトラック。

その積み荷であるカプセルを追うブリタニア軍。

7年振りに再会したブリタニア軍人になっていた親友。

毒ガスと思われていたカプセルから出てきた謎の少女。

そして：

俺を助けるために上官に反発し、撃たれた親友。

一度に色々な事が起き過ぎて、状況が整理出来ない。

「お前のせいなんだろう！なあ!?!しかもブリタニアが…スザクまでも……。」

こんなことならアルカとの昼食を楽しむべきだった。

思わずルルーシユは自分の取らなかつたもう一つの可能性を夢想する。

そんな様子を謎の少女、緑色の髪をした魔女、C・C・Cは品定めをするかの様な目つきでルルーシユを眺めていた。

数刻後

「いいか、そこで待っているよ」

幾分かの落ち着きを取り戻したルルーシユはC・C・Cを連れ地上に出る階段へと向かう。

辺りには血の匂いが充満している。

「どうだ、様子は」

「イレヴンしかないようです」

階段を上がった先で、男の声が聞こえる。

(この声は…さっきの軍人か…)

ルルーシユの親友、枢木スザク。彼を撃った軍人だ。
彼らの足音が遠のいていく。

その時幼い子供の泣き声が木霊した。
と同時に機関銃の発砲音が聞こえた。

発砲音が鳴り止んだと同時に、子どもの泣き声も途絶えた。

「……………っ!!」

思わず声をあげそうになる口を手で押さえる。

そう、これがブリタニアだ。

子どもであろうが老人だろうが関係無い。

思わず吐きそうになる程の強い血の匂いが充満する。

『ピリリリリ』と唐突に乾いた電子音が響いた。

ルルーシユのケータイだ。

「!!」

ケータイの画面を確認する事無く、電源を切る、が、時すでに遅し。ルルーシユは軍人に見つかってしまった。

◇◇◇

「んもう！切っちゃったよ！ルルのやつく!!!!」

思わず、大きな声を出してしまった。

「アルカちゃんも繋がらないし……」

ほんとあの二人、どこで何をやっているんだろう。

もう午後の授業も終わり、放課後になった。

生徒会の仕事もたんまりある。

「ほんと、ナナちゃんは真面目なのに……」

ルルーシユ・ランペルージ：

アツシユフオード学園生徒会 副会長。学業は極めて優秀。だが、品行方正とは言い難い。

授業中の居眠り、さぼりは当たり前。暇さえあればギャンブルの代打ち、賭けギャンブル。

ナナちゃんを見習ってほしい。

アルカ・アングレカム：

アツシユフオード学園中等部の生徒。だがその腕を買われ、もとい会長に気に入られ次期生徒会メンバーとしてよくお手伝いに来ている。

ルルとナナちゃんの親戚の子で兄弟同然に育ったらしい。

彼女も学力面において非常に優秀、だが同じく品行方正ではない。

ルルとは違ってギャンブルはしないけど、授業はルル以上にさぼるらしい。

校則違反にも関わらず常に制服の上に私服のパーカーを着て過ごしている。

交友関係も非常に狭く、中等部ではナナちゃん以外とは話そうともしない…。問題だらけの二人の優等生を思い浮かべ、溜息を付く。

「危険な事に巻き込まれてないといいんだけど……」

あの二人、どこか危なっかしいからなあ……。と考えながら私は、生徒会室へと足を運んだ。



「テロリストの最後に相応しいロケーションだな。」

兵士達の銃口が俺と緑髪の少女の方へ向く。

「ま、学生にしては良く頑張った。さすがはブリタニアの子だ。」

しかし、と言葉を続けながら指揮官の男の銃口も俺ほうへ向く。

「お前の未来は、今、終わった」

「くっ!!」

殺される。思わず目の前の男から目を背ける。

「殺すなあああ!!」

少女の声が木霊した。

「あ……」

軍に追われている少女。緑髪の少女が俺の前に立ち、そして倒れる。額に風穴を空けて。

「おい!!」

銃口を向けられていることを忘れ、少女に駆け寄る。

その目は閉じられ、額からは血が溢れ出る。

助からないだろう。

「…ふん。出来れば生かしておきたかったが……。上には、こう報告しよう。我々はテロリストのアジトを見つけ、殲滅。しかし人質はすでに殴り殺されていた、と。どうだ即席にしては良く出来ているだろう？」

男が何か言っているが頭に入っていない。

(なんだこれは……)

スザクもこの子も…ゲッターに住むイレブン達も……。

皆同じ命の筈だ。同じ血が流れている人間の筈だ。

それが、どうして。こんなにも。あつさり。

そして俺も…？

死ぬのか？何も出来ないまま？

妹達と今まで過ごした光景がフラッシュバックする。

(ナナリー…アルカ…!!)

とその時、死んだはずの少女の手が俺の腕をつかむ。

「!!」

意識が現実から遠のく。思考が何かに絡め取られる。

そんな俺を気にも留めないといった様子で、感情のこもっていない声で少女は語り掛ける。

『終わりたくないのだな、お前も。』

(なんだ、これは?)

『お前にも生きる為の理由があるらしい。力があれば生き残れるか?』

(さっきの女か? いや、ありえない)

彼女は淡々と語り掛ける。

これは契約と——。

力を与える代わりに願いを叶えろ、と。

『王の力はお前を孤独にする…その覚悟があるのなら……』

様々な情報が、光景が頭の中を駆け巡る。

無機質な2つの星。大勢の巫女。翼を広げた鳥のような紋章。淡いミルク色の髪をした少女の後ろ姿。

そして、神殿の様な場所で、たたずむ。父^敵。シャルル・ジ・ブリタニア。

「……っ！」

ああ、思い出した。俺のやるべきことを。復讐すべき存在を。

「良いだろう！結ぶぞ、その契約!!」

そう口にした途端、俺の中の歯車がかチリと音を立てて噛み合った。気がした。思考が現実を引き戻される。

周りの光景は何も変わらない。充満した血の匂い。大量のイレヴンの死体。頭を打ち抜かれた少女の死体。銃を持った兵士達。

「なあ」

何も変わらない光景、しかし

「ブリタニアを憎むブリタニア人は、どう生きればいい？」

「貴様、主義者か！」

変わらない光景の中で、変わったものが確かに一つここにある。

「どうした？撃たないのか？相手は学生だぞ。」

俺は抗う力を手に入れた。

「それとも気づいたか？撃って良いのは、撃たれる覚悟があるやつだけだ。」

左目に熱が集まるのを感じる。

どういう力かは分からない。だが、使い方は分かる。

「な、なんだ……？」

見えない力に怯える兵士達に俺は告げる。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる。貴様達は…死ぬ。」

「ヒッヒヒヒヒ……」

狂ったかのように男は肩を震わせ、笑う。

「Yes, Your Highness!!」

兵士達はその命令を本懐、とでもいう様な表情で首筋に銃を当て、引き金を引く。首から血を吹き出しながら男達が倒れる。

この場での生存者は俺一人。

辺りには死体の山。目の前には俺が殺したブリタニア軍人達。

自分が引き起こした惨劇に思わず、顔を歪める。がそれも一瞬の事。

(あの日から俺は嘘をついて生きてきた。名前も経歴も嘘。全く変わらない世界に飽き飽きして、でも諦める事も出来なくて…)

だけど

(手に入れた、力を…抗う力を……!)

「だから…!!」

端正な顔立ちの少年は口元を歪ませながら呟いた。



トウキョウ租界 展望台

突然強い風が吹く。

下からめくりあげる様に吹いた風は少女の被っていた帽子を吹き飛ばした。

外気に晒された淡いクリーム色の髪がなびく。

少女は帽子が飛ばされたにも関わらず、気にも留めない様子で、ただただ、黒煙が立ち込めるゲッターの方に目を向けている。

「……C.C. ……?」

なんでそう感じたかは分からない。

ただ、何となく、彼女がすぐ傍に居る。

そんな気がした。

stage 2 期待と歓喜

シンジユクゲッター内の状況は今、どうなっているのだろうか。

ブリタニア軍のKMFが投入されてからしばらく経つ。

端末に目を落とす。

カレンが乗るグラスゴーのポインターは健在だ。少なくともカレンは生きているらしい。

ホッと自然に安堵の溜息が出る。

耳のイヤホンからはカレンと扇さんのやり取りを最後に何も聞こえなくなった。

通信機を使うほどの余裕も無いのだろう。

(カレンは毒ガスが使われたと思うって扇さんと話していたけど…)

それは無いだろう。

毒ガスが実際に使われているのなら、今もこうしてブリタニア軍がゲッターに留まっている筈がない。

(……カレンの乗っているグラスゴーのエナジーファイラーが尽きる。ここで潮時……)

その時ズボンの後ろのポケットに入れているケータイが震えた。

(兄上……?)

画面を見ると兄上の名前が表示されている。

「どうしたの？」

『ああ、アルカ。悪い、今ニュース見れるか?』

「え、うん。ちよつと待って」

もう一個の端末でニュースアプリを起動する。

『シンジユクゲットーのことについて報道されてるか?』

「……? えーつと、軍事演習による通行止め、だつて。」

『ふむ、そうか。ありがとう。』

何か考え込むかのようなトーンで話したと思つたら、今度は極めて明るい声……普段私とや姉上と接するときの何時もの様子で、

『すまない、今日は帰りが遅くなりそうなんだ……ご飯はナナリーと一緒に食べてくれ。』

と。

なんで兄上がゲットーの様子を気にする?

このニュースを見ていない割には、なんでゲットーで何か起きていることを知っている?!

「えー…夜ご飯も別…?」

努めて何時もの雰囲気で、我儘を言ってみる。

『すまない…今度埋め合わせをするから…。手強い相手を見つけてね…。』

「ふふ、冗談だよ。気を付けて帰ってきてね。」

『ああ、じゃあ。』

その言葉を最後に電話は切れた。

手強い相手…か。

いくつかの可能性を列挙する。

が、今考えても仕方ないと、思考を戻す。

(電話越しの周りの音は静かだった。それに電話を掛ける余裕も私と少し雑談をする余裕がある、ということは少なくとも今は安全な場所に居る)

心配じゃない…という大嘘になる。

けどそれ以上に私は兄上の事を信用している。

勝てない相手に勝負を挑むような人ではない。

手強い相手というのに対しても勝つための手段、方法がすでにあるのだろう。

イヤホンを再び付け直す。

相変わらず何も聞こえはしない。

少し身体が冷えてきた。

(温かい飲み物でも買に行こつと)

私は展望台を後にした。

・
・
・

『勝ちたければ、私の指揮下に入れ!!』

レジスタンスが窮地に追い込まれていたその時、とある男が手を刺し伸ばした。

後にゼロと呼ばれるその男は、瞬く間にシンジユクゲットーに蔓延るブリタニア軍を壊滅させ、ブリタニア帝国の第3皇子クロヴィス・ラ・ブリタニアを殺害した。

シンジユク事変と呼ばれるこの事件は、ゼロの輝かしいステージデビューの場となった。

—— A・A 著書 「帝国の崩壊」 第1章より抜粋

◇◇◇

トウキョウ租界 シユタツトフェルト邸 カレンの自室 シンジユク事変 同日、夜

「そ、それで急にクロヴィスからの命令が出て、ブリタニア軍は嫌々ながらも私達の手当

てをして引き上げたってわけ。」

「そんなことが……」

現地に居なかつた私はカレンからシンジユクで起こつたこと、謎の男の事を聞いていた。

「クロヴィスの不可解な命令……タイミング的にその謎の男の仕業……つて考えるのが一番合点がいく。」

「けど、どうやってクロヴィスを従わせたのかが分からない。」

うーんつと二人で頭を悩ませる。

謎の男……私も実際に聞いていた。

そして声を聴いた瞬間、ある一人の存在が脳裏を過ぎつた。兄上だ。

(声は似ていた……けど、通信機越しでノイズも荒かった。断定は出来ない。)

「まあ何にせよ、無事で良かった。作戦は失敗……だけど、死ぬよりはまし。扇さんに大人しくしてろつて言われたんでしょ? どう、久しぶりに学校でも?」

「考えとくわ……」

「それじゃ、また明日。学校で。」

バイバイとカレンに手を振つてシユタツトフェルト邸を後にする。

カレンが最後、話聞いてた? みたいな顔をしていたが、気にしない。

一人で帰路についている中、カレンから聞いたシンジユクの事を思い出す。
(作戦失敗……か……)

作戦の失敗。すなわち、目的の物は手に入れることが出来なかった。

いや、化学兵器自体が欲しかった訳では無いけども。

いつになったら、彼女と、C・Cと再会出来るのだろうか……

「会いたいよ……」

ポツリと呟いた言葉は租界の喧騒にかき消された。

◇◇◇

アツシユフオード学園 中等部 教室

教室がざわついている。

「毒ガスだって、怖い……」

「見てこれ、イレヴンの死体」

「こんな近くでテロ行為が……」

「KMFかけえ、俺も乗りたい」

昨日のシンジユクの事で話題は尽きない。

反応は人それぞれ、まるで映画を観た後のように興奮している生徒もいれば、イレヴ

ンに対して不安を募らせている生徒も居る。

まあいずれにしても、私からすると、雑音以外の何ものでもない。

(……………カレンから……?)

ふとカレンからメツセージが届いた。

ケータイを確認すると簡素なメツセージで一言。

『学校、来たわよ。』

思わず口元が緩む。

(ほんと素直じゃないねえ)

◇◇◇

アツシユフオード学園 クラブハウス リビング

疲れた。

中等部どころか学校のあちらこちらで、シンジユクのあること無いこと、噂話。耳に

タコが出来そうだった。

放課後は放課後で生徒会のお手伝い。

部活の予算審査が終わらないらしく、私に泣きついてきた。

それが終わった後はカレンとお茶……だったが、何故か兄上の事を根掘り葉掘り聞かれ

て気が休まらなかった。

とにかく、疲れた。

「はい、出来ましたよ。」

メイド服の女性、篠崎咲世子さんが姉上に鮮やかな紙で折られた鳥を渡す。

「これは……鳥？」

「はい、鶴です。」

私と姉上は日本の文化であった、おりがみを教えてもらっている。

「紙一枚でこんなのが……日本人って器用なんですね……」

「私も少しは折れるのよ、何か折ってあげましょうか？」

折り紙に興味を示した私に姉上は少しだけ得意げになる。

「え！ほんと！何がいいかなあ……」

私達の会話をを微笑ましそうに眺めている咲世子さん。

そんな和やかな空間に、もう一人分の声加わる。

「ごめん、遅くなっちゃって。」

兄上だ。

「おかえりなさい、お兄様。」

「おかえり、兄上」

「おかえりなさいませ。」

三者三葉、それぞれが反応を示す。

「ただいま、ナナリー、アルカ。咲世子さん。」

穏やかな顔と、優しい声。

いつもの兄上だ。

・
・
・

「咲世子さんに折り紙を教えてもらってたんです。一枚の紙を何度も折ると鳥とか、花とか色々なものに……あ………」

ナナリーの口元からスープが零れる。

「ちよつと動かないでね、姉上……。うん、拭けたよ」

すかさずアルカがナプキンを取り、ナナリーの口元を拭う。

「そんなに急いで話さなくても大丈夫だよ、俺は何処にも行かないから。」

妹達との食事。

俺にとって一番心が安らぐ時間であり、毎日の楽しみでもある。

しかし、昨日は3人同じ時間に食事を取ることは叶わなかった。

…俺の帰りが遅くなったからだ。

もつとも、俺が帰宅するまで二人とも起きてはいた。が、先にご飯を済ませたらしい。良かった。昨日の俺は食べる気分ではなかったから、不幸中の幸いとも言える。

「よかった。」

「え？」

「昨日のお兄様、少し怖かったから。」

「ごめん、ちよつと考え事があつてさ……」

あの光景を思い出す。

冷たい銃の感触。命乞いをするクロヴィス。

考え込む俺をアルカは不思議そうな顔で俺を見ている。

「ん？どうした、アルカ？」

「え、あ、いや。……兄上は何かお願いあるかなあつて」

「なんだ？唐突に」

「お兄様が帰ってくるまで、咲世子さんに折り紙を教えて貰つてたんです。折り紙で鶴を千羽折ると夢が叶うという素敵なお話がありました……。」

「そこで姉上と2人でお互いの願いは何？つていう話になったのをさつき思い出して……。それで兄上は何かないかなあつて。」

妹達の可愛らしい発想に口元が緩む。

しかし、今の俺に、願いを言う権利があるのだろうか。

人を殺した俺に……。

「いや、俺は……。2人のはどんな願いなんだ？」

「優しい世界であって欲しいです。」

ナナリーの即答に対してアルカは何処か言葉を選ぶ様に、慎重に

「大切な人達が幸せに暮らせる世界……かな。」

2人の純粋な願いを聞き、思わずハツとなる。

そうだ、俺達には選択できる未来が限られている。

アツシユフオードもいつまで匿ってくれるかは分からない。

素性がバレればシャーリーやリヴアル達も離れていくだろう。

行く末は、政治の道具か陰謀の餌食だ。

妹達にとって、今の世界は優しくない。

この世界では、幸せに暮らせない。

「お前達が大人になる頃には、きっとそうなっているよ。」

妹達には気休めに聞こえただろう。ナナリーは嬉しそうに、アルカは何処か不安そうな顔をしている。

しかし、これは俺の覚悟だ。
妹達に優しい世界を、幸せに暮らせる世界を。作らなければ。

◇◇◇

アツシユフオード学園 クラブハウス エントランス

「研究のデータが入ったメモリーカード？」

うん、と目の前の眼鏡をかけた少女は申し訳なさそうに頷く。

「クラブハウス内の何処かに落としたりしちゃったみたいなの……」

眼鏡の少女、ニーナさんの大事なデータが入ったカードが何処かにいってしまったら
しい。

「大きさは？」

「すごく小さい……」

「最後に見たのは？」

「私が使っているパソコン部屋……」

「パソコン部屋以外に何処か行った？」

「2階に用事があつて、一度だけ……」

私、リヴアルさん、シャーリーが順番に問いかける。

ニーナさんは頻繁にクラブハウスにある一室に引き籠り、趣味の研究に没頭している。

彼女が普段使っているパソコン部屋は、私達が住む区画とは反対側の最奥の部屋。

2階にも行ったということは……

この場に居る4人で小さなメモリーカードを、彼女の広い行動範囲から探さなければならぬらしい。

気が遠くなる。

「まあ……まだ会長の準備。かかりそうだし、それまで探すか……」

リヴアルさんが少し、げんなりしながら呟く。

それに対し。シャーリーさんは絶対に見つけるぞ。と意気込み、ニーナさんは相変わらず申し訳無さそうに眉を下げている。

「皆で探せばきつと見つかるよ、がんばろう?」

私の言葉が合図となり、4人は黙々と小さなメモリーカードを探し始めた。

◇◇◇

「あつたあつた!!」

「ああ、それです、それ!!」

シャリーさんとニーナさんは互いに手を取り喜んでいる。

「ふふ、あつて良かった……あれ？ 兄上にカレン？ 全然気づかなかった。」

私達の居る2階から下の階へ視線を落とすと、兄上とカレンが居た。

2人はポカンとした表情でこちらを見ている。

「アルカ？ それに皆も……どうして……」

「そっちは見つかった？」

「会長とナナリー……？」

言葉が途中だった兄上だが、続けることは無く、部屋に入ってきたミレイさんと姉上の方へ意識を向ける。

ミレイさんが押すワゴンの上にはたくさん料理が。姉上の膝の上には専用の段ボールに入ったピザが。

「この料理は……？」

「あれ？ 知ってて連れてきたんじゃないの？」

「は……？」

理解が出来ない、2人はそんな顔をしている。

「カレンを生徒会に入れるって、やったね！」

私の言葉を聞いた途端、顔面蒼白のカレンが私を部屋の隅へ連れていく。

(ちよつと！私入りたくないんだけど！)

(そんな事言われても……私が決めた訳じゃないし……)

(じゃあ誰が決めたのよ!?)

(理事長だつて。部活が出来ない病弱お嬢様(仮)のカレンに気を使ってくれたらしいよ)

(余計なお世話よ……。大体……)

ああだ、こうだ。カレンとのひそひそ話が続く。

(まあまあとにかく、私も生徒会には顔出してるから、ね？行きたくない日は病弱設定を使えばいいじゃん)

(………はあ、腹くくるしかないか……)

「おーい、そのの2人。内緒話してないでこっち来なさいよ。」

私達の様子に痺れを切らしたらしい。

カレンの手を引つ張りながらミレイさんの元へ戻る。

「ごめんごめん、カレンに生徒会の仕事出来そうか聞いてたの、大丈夫だつて」

「そう、それなら良かったわ。じゃあ始めますか！新しいメンバーの歓迎パーティー……!!!」

お祭り女の言葉を皮切りにどんちゃん騒ぎが始まった。

リヴアルさんが持ち込んだシャンパンによってびしょ濡れになってしまったカレン。風邪を引いては大変だと、カレンは途中退出。

主役が居なくなつた事により、パーティーは一時中断となつた。

急ぎカレンをシャワー室へ案内し、早々にお役御免となつた私は、皆の待つエントランスへ戻る。

代えの服を持っていこうとしたが、カレンのサイズに合う服を私が持っている筈もなく、兄上が代わりに自身の服を届けるそうだ。

「そんな、」

「どうして……」

「皆して、どうしたの？」

先ほどのどんちゃん騒ぎとは打って変わり、皆神妙な顔つきでテレビを見ていた。

姉上が眉を下げながら、悲しみを含んだ声で口を開いた。

「アルカ、大変なことになつたの」

「一体何が……」

私もテレビへ意識を向ける。

画面には純血派のリーダー、ジェレミア・ゴットバルトが真剣な顔つきで会見を行っていた。

右上にLIVEと表記されていることから生中継ということが分かる。

『クロヴィス殿下は殉死されたのだ。平和と正義の為に……………』

「クロヴィス総督が……………殺されたんです……………」

テレビの音声と姉上の声が重なる。

その言葉を聞き、私は目を見開く。言葉を失う。

しかし

決して、悲しみからではない。

決して、不安からではない。

私の中にあるのは

(……………ふうん……………)

今後に対する期待。

皇族殺しをやったのけた者が現れたという歓喜。

それだけだった。

Stage 3 それぞれの仮面

「え、例のシンジユクの男から連絡が来た？」

『ええ、明後日の16時、旧東京タワーの展望室に來い、と。』

クロヴィスの死亡が報道されたことによって、カレンの歓迎パーティーは中止となった。

姉上が酷く動揺し、パーティーを続けるどころじゃなかったからだ。

クロヴィスの死も悲しんでいたが、それだけが原因では無いだろう。

一番強く動揺が見られたのは枢木スザクが容疑者として逮捕された、と聞いてからだ。

まあ無理も無いが。幼馴染なのだから。

枢木スザクとは会ったことは無いが、2人から話は聞いている。

兄上と私で不安がる姉上を何とか寝かしつけた後、外の風に当たりたい、と兄上に伝え、私はクラブハウスの屋上へと向かった。

勿論、建前だ。

カレンから話したいことがあるから後で連絡すると言われていたからである。

想像通り、レジスタンスに関する事だった、聞かれる訳にはいかない。

「いつ来たの？」

『私がシャワーに入っている時、要件を伝えるだけ伝えて切られちゃったけど。』

「クラブハウスの電話に掛けてきたってことは向こうには素性、バレているみたいだね。扇さんには？」

『伝えたわ。私は制服を着て東京タワーへ。少し離れて扇さん達が付いてくるみたい。そして…』

「あわよくば、全員で接触……と」

『そう、一人で行くのには危険過ぎるから……って』

確かに、一方的にこちらの事を知っている相手に一人は無謀すぎる。

『アルカはどうするの？来る？私的には止めた方が良いと思うけど……』

カレンの本来の面倒見の良さからなのか、私が付いていく事は了承し難いらしい。

身を案じてくれるのは有り難いが、正直、何も行動できないのも飽き飽きしてきた所だ。

この調子じゃいつ私の悲願が叶うか、分かったもんじやない。

それに、本当にシンジユクの男本人だとしたら……

色々と確かめたい事がある。

「いや、行く。男の真意を確かめたいし。それ、に、いざとなったら守ってくれるんでしよう?」

『はあ……ハイハイ。わかりましたよ、お姫様。』

思ったより素直に引き下がってくれた。

多分、私がそう言うだろうと分かっていたんだらう。

『あんだ、ちゃんと変装してきなさいよ? 得体の知れない人に会うんだから』

「変装……変装かあ……。頼んだもの出来てるかなあ……」

あの老人、ちゃんとやってくれただろうか。少し不安だ。

『頼んだもの?』

「こつちの話。じゃあ、また明後日ね。」

カレンとの電話を終え、屋上を後にする。

明日の放課後、行ってみよう。



翌日 放課後

「ああ、全て言われた通りにやった。こつちの世界では超一流ってやつがやっているし……」

目の前の男は操り人形の様に、感情を失った声で語る。

「あとは全ての証拠を消して、忘れればいいんだな？」

いや様に、では無く、実際に操り人形か。ギアスを掛けたのだから。

レジスタンスとして活動をしていく上で一番留意しなければならないのは、素性がバレる事だ。

私達の相手は帝国ブリタニア。私にとっての古巣。

私の正体が軍にバレれば、芋づる式で兄上、姉上の事も知られてしまう。

そこだけは常に気を付けなければならない。

そこで私は、普段の活動で顔を隠せる様に、仮面を作った。

比喻では無く、文字通りの仮面だ。

パツと見は何も変哲の無い金属製の仮面。

フルフェイス式では無く、顔の前面を覆うだけの少し模様の入った仮面。

(割と凝ってしまった……)

KMFにも使われている軽くて丈夫な素材を用い、変声器を取り付けた。

ただ顔を隠せて声を変えられれば良かったのに。自分自身に身に着ける物って考えると、素材から拘りたくなっちゃって……。

(まあ無事出来て良かった。)

私は店を後にし、仮面の入った紙袋を手に下げながら、足早にアツシユフオード学園へ向かった。

帰路の途中、見知った人物が同じ様に紙袋を手に下げながら歩いていった。

私は駆け寄り、後ろから声を掛ける。

「やつほ、兄上。」

「ほわあ!？」

聞いたことの無いような声が辺りに響いた。

・
・
・

時は少し遡り、アルカが仮面を受け取る少し前。

奇しくも妹と同じ店で、ある少年が店主から品物を受けとっている。

「ああ、全て言われた通りにやった。こつちの世界では超一流つてやつがやっているし……」

目の前の男は淡々と語る。

「あとは全ての証拠を消して、忘れればいいんだな?」

ギアス…便利な力だ。

「ああ、良くやってくれた……」

今後の事を考えると、まず一番気を付けなければならないのは俺の素性だろう。

万が一、軍にバレでもしたらナナリーやアルカも芋づる式に知られてしまう。

そうやってしまつては意味が無い。

正体を隠して行動を起こす必要がある。

その為に、仮面を作らせた。

頭を覆いつくす、フルフェイス式の黒い仮面で、変声機が付いている。

仮面を付けたままでもギアスを使えるように、左目の部分は開閉出来る様になっている。

ついでに仮面のデザインに合わせて、スーツも用意した。

(ふ、少し凝り過ぎてしまったか)

俺は店を後にし、仮面の入った紙袋を手下げながら、帰路につく。

(仮面とスーツをもった状態で会長にでも出くわしたら、目も当てられないな。確実に紙袋の事を聞いてくるだろう。そんな面倒は………)

「やつほ、兄上。」

「ア、アルカか……今帰りか？」

「うん、ちよつと買い物に……どうしたの、あんなに驚いて？」

兄上と2人でアッシュフォード学園へ向かっている。

「ああ、考え事しててな。いきなり後ろから声かけられたもんだから、ビックリしたんだ」

「ごめんごめん。それにしても、最近の兄上、考え事ばかりしてる。そんなに前に電話で話してた、手強い相手っていうのは厄介なの……？」

「あ、ああ……中々活路が見いだせなくてな。常にそっちに頭を持って行ってしまふよ、はは……」

兄上はぎこちなく笑う。

ふと視線を落とすと、私より大きい紙袋が目に入った。

「何買ったの？」

「スーツだよ。ほら、会長つて学校で良くイベントを開くだろう？絶対無言パーティーとか、男女逆転祭りとか……」

兄上の言葉から、ミレイさんの発案したイベントを思い出す。

うん、どれも疲れたっていう印象しかない。

「会長がまたイベント思いついたらしくてな。やるかどうかは分からないが、一応の為に買ってきたんだ。」

「だから、生徒会室にはコスプレ道具が沢山あるんだね…」

会長の気まぐれの度に買ってたら、そりゃあの量にもなるわ。

生徒会室の片隅に積まれた段ボールを思い浮かべる。

「アルカは？何を買ったんだ？」

「カレンへのプレゼントだよ、歓迎パーティー中止になっちゃったし。だからいくら頼まれても見せてあげないから！」

「はは、流石にプレゼントの内容を当事者が知る前に、見るわけにはいかないよ。」

そうこうしている内にアッシュフォード学園に着いた。

「じゃあ俺は買ったものの片付けてくる」

「うん、私も」

それぞれの部屋に向かう為、兄上と別れた。

言葉は交えずとも、根柢の目的は同じ。

素性を隠す為に、思いついた手段も同じ。

一度決めたことは、とことん拘ってしまいうのも同じ。

何なら、利用する店も同じ。

やはり、兄妹きょうだいなのだろう。何をするにしても兄ルルーシと妹ユアルカは似ていた。

その様子を遠くから見ていた緑色の髪をした少女はため息を付きながら……

「……微笑ましい光景だよ、全く。」

と一人呟いた。

これは余談だが、数日後。

2人が利用した店の店主は変死体として見つかった。

この店主は密接に裏社会に関わっていた為、何らかの恨みを買って殺された、というのが警察及び軍の見解だが、果たして。

◇◇◇

トウキョウ租界 旧東京タワー

ブリタニアが日本に仕掛けた侵略戦争——極東事変。

その戦争によって、展望台の上部が崩壊した東京タワーは、戦争が終わった今でも修復されずに当時の姿で残っている。

そんな痛々しい姿の東京タワーは現在、極東事変の記念資料館として使われている。

戦争の資料館、普通は痛々しい戦争を後世に伝えるのを目的として作られるものだ

が、そうではない。

この資料館の目的は、旧日本人のブリタニアに対する恐怖心を忘れさせない様にする事だろう。

隷属させるのは牙を折るのが一番効果的……とアルカが言っていた。

その証拠に名譽ブリタニア人でも無い扇さん達が入館出来ている。

『ブリタニア軍の圧倒的勝利は、蒙昧な旧日本政府に対し——。』

耳障りな館内アナウンスが流れている。

もう何回聞いたであろうか。

指定された時間よりも早く到着し、それらしい男を探したが、見当たらなかつた。

腕時計に目線を移し、時間を確認する。

15時59分。

あと少しで予定の時間だ。

私からも、扇さんからも少し離れ、一人ベンチに座っているアルカに目を向ける。

パーカーのフードを深く被り、うつむいている為、表情は確認出来ない。

重力に従って下へと垂れている艶のある髪が黒くなっている事から、ちゃんと染めて

きたのが確認できる。

アルカから視線を戻し、再び時間を確認する。

16:00丁度。

『アツシユフオード学園からお越しの、カレン・シユタツトフェルト様。落とし物が届いております。展望フロア、サービスカウンターまで……』

アナウンスがフロアに響く。

落とし物をした憶えは無い、そうなると電話の男の仕業だろうか。

警戒を緩めず、アナウンスされた場所へ向かう。

「こちらで間違いないでしょうか？」

「え、ええ。ありがとうございます……」

サービスカウンターの女性から黒い携帯電話を受け取る。

辺りを見渡すが、やはりそれらしい人物は居ない。

「ん……？」

先ほど受け取った携帯が、突然振動し始めた。

電話だ。画面には「ZERO」と表記されている。

(ゼ、ロ………?)

「…はい、もしもし」

「環状5号線外回りに乗れ、お友達も一緒だ。」

「え、ちょ………」

また一方的に切られてしまった。

「何かあった?」

「うわっ!」

呆然としてしていると、突然後ろから声だし、思わず声をあげてしまった。

「ああ、アルカ………今度は環状5号線外回りに乗れ、だつてさ。扇さん達も一緒に。」

いつもよりアルカの頭の位置が若干高く、少し慣れない。

聞けば、変装の一環としてシークレットブーツを履いているそうだ。

「ふうん……じゃあ行こうか。」

少し考えむ様に黙ったと思えば今度は私の手を引いて歩き始めた。

相変わらずフードを深く被っており、上から見下ろす形になっている私の視線からは、表情は読み取れない。

「そんな、皆に相談もせずに……」

「もし罠だったらこんな回りくどい事しないでしょ。多分、カレンの仲間が何人いるか確かめたくて、ここに呼んだんだと思うよ。」

アルカは扇さん達を手招きして呼び、私の手を引いたまま、所定の場所へ向かい始めた。

環状5号線：トウキョウ租界とゲットーの境界を走る路線。トウキョウ租界を一周出来る唯一の路線。利用客も多い。

平日の夕方にも関わらず、席は埋まっており、立っている人もちらほらと見受けられる。

満員とまではいかなくても乗車客は多い。

しかし、

(客が静かすぎる、不気味なくらいに。)

乗車客は少なく無いのに雑音が何一つ聞こえてこない。

それどころか、イレヴンである筈の扇さん達に、反応すら示さない。

大体のブリタニア人はイレヴンを毛嫌いしている筈なのに。

まるで何かに操られている様に、ただただ虚空を見つめている。

「ん……」

隣に居るカレンが携帯を取り出し、耳に当てる。

あの男からの電話だろう。

「ブリタニア人の街だ……私達の犠牲の上に——」。

進行方向に向かって右側。

トウキョウ租界の方を見ながらカレンは呟く。

会話の内容は聞こえない為、詳しいことは分からない。

まあでも予想は着く。

租界についてどう思っているか、とでも聞かれたんだろう。

「先頭車両……だって」

電話を終えたカレンが耳元で囁く。

カレンを先頭に、進行方向に向かって車両を移動する。

やはりどの車両も不自然な程に静かだ。

「!!」

一番先頭の車両に足を踏み入れたカレンは歩みを止める。

目の前に目線を向けると、ある人物がこちらに背を向けて佇んでいた。

乗車客は一人も居ない。

「お前……なのか……?」

男は何も答えない。

「シンジユクのあれは、停戦命令もお前なのか?」

電車がトンネルに差し掛かり、車内が暗くなる。

と、同時に男は身体を翻した。

漆黒のマントに紫色のスーツ。そして仮面。

男……なのだろうか。身長の高さからそう考えたが、線が細い為、判断は難しい。

『どうだ？ 租界ツアーの感想は？』

機械交じりの声が社内に木霊した。

「ツアー？」

「おい、こんなふざけた奴だったのか？」

吉田と杉山が言葉を漏らす。

『正しい認識をしてもらいたかった。租界とは、ゲットーとは。』

腕を左右に広げ、仮面の男は雄弁と語る。

「確かに、我々とブリタニアは差がある。絶望的な差だ。だからこうして——」

『違うな、間違っているぞ。テロではブリタニアは倒せない——』。

仮面の男、ゼロは語る。

やるなら戦争だ。

民間人を巻き込むな。

正義を行え、と。

(……へえ……)

男の言葉を聞き、思わず口角が上がる。

◇◇◇

『不可能を可能にして見せれば、少しは信用できるだろう。』

俺の言葉を聞き、レジスタンスは押し黙る。

信用が出来ないながらも、納得はしてくれた様だ。

ふっ、ありがたいことだ。

人間というのは奇跡に縋る生き物だ。

後は、スザクの奪還という奇跡を起こせば、俺は、いや、ゼロはたちまちイレヴンに

とつての希望として認識され始めるだろう。

これで前提条件はクリアされた。

しかし、ただ一つイレギュラーが発生している。

俺の目の前、カレンに隠れる様に佇む少女。

今の今まで一言も発さず、沈黙を守っている。

何者だ？

『……………』

俺の視線に気づいたのか、今まで微動だにしなかった少女が顔を上げる。

仮面だ。俺と同じ、仮面を身に着けている。

顔の前面を覆うだけの金属製の少し模様の入った仮面。

フードと仮面の隙間から艶やかな黒髪が確認出来る。

いつの間に身に着けたのだろうか。

『どうしてクロヴィス総督を殺したの？』

機械交じりの声が響く。

俺ではなく、彼女のだ。

そんなことを何故、彼女は聞いたのかは分からない。

俺がクロヴィスを殺した理由……

答えは一つだ。

『……………あの男が、ブリタニア皇帝の息子だから。』

「え…………？」

俺の言葉が意外だったのだろう、カレン達に困惑の色が見える。

ただ一人。仮面の少女を除いて。

『……………そう…、いいね。』

考え込むような素振りを見せたが、それもほんの少しの事。

彼女はまるで俺の事を待ち望んでいたかの様に、嬉しそうに呟く。

仮面の奥で少女が笑っている、そんな気がした。

Stage 4 魔女と少女

『怨嗟の音が…怒りの声が上がっています……殿下がどれほど愛されていたかという証の声です……』

ブリタニア軍による枢木スザク移送の生中継。

道路を取り囲む民衆から非難の声が上がっている。

「地獄に堕ちろ」「クロヴィス殿下を返せ。」

そんな声が道路中央の枢木スザクに向かって投げられている。

(15世紀にあつた魔女狩りみたいな光景…)

勿論実際に見たことは無い。

あくまでもこういう感じだったのかな、という想像だ。

「スザクさん………」

一緒に中継を聞いている姉上が、不安を隠し切れず、彼の名前を零す。

「きつと大丈夫だよ、姉上。信じよう?」

何を。とは言わなかった。

震える姉上の手に自分の手を重ねる。

ゼロは言ってみせた。不可能を可能に、奇跡を起こして見せると。

彼が期待通りの男だったら、彼の軍門に下るのも悪くない。

そういう意味でも見逃せない中継だ。

(張りぼての毒ガスカプセルとクロヴィスの御料車でどうするつもりだろうか)

ゼロの指示でその2つを見た目だけで良いから作って欲しいと言われ、カレンと扇さんと私の3人で用意した。

彼に協力した3人の中で、あの場に居るのは2人。

扇さんとカレンだ。

また作戦から外された事に少しばかり思うところが無い訳でも無いが、彼の判断に今は従うことにしよう。

私、車の運転したことないし。

ふと、枢木スザクを乗せた車と、周りのKMFが停止する。

周囲はざわつき、リポーターからも困惑の声が上がる。

『ここで止まるという予定はありません…何かのアクシデントでしょうか…?』

カメラに映るジェレミアは笑みを浮かべる。

純血派のリーダー、ジェレミア・ゴットバルト。

クロヴィス亡き今、実質的に軍を取り仕切っている男だ。

ブリタニア軍はブリタニア人だけで運営していくべき、というのが純血派の主張。名譽ブリタニア人である枢木スザクが容疑者になった事で、軍内部での発言力を高めた様だ。

皇族の死すら利用して、成り上がる様はまさしくブリタニアの国是の象徴とも言える。

この枢木スザクの移送中継も彼にとつての一種のエンターテインメントなのだろう。エリアーでの軍のトップは私だ、と主張する為か。

真犯人がいることを見越して、枢木スザクを餌に、炙り出そうとしているのか。ジエレミアの真意は分からない。

どちらに転んでも、彼がエリアーにおいての軍の覇権を握ることは時間の問題だろう。

彼が今日、無事に移送出来れば、の話だが。

(来た………)

3人で作った張りぼてのクロヴィスの御料車が小さく映る。

(さてと、お手並み拝見だ、ゼロ)



『私は、ゼロ』

仮面の男が名乗りを上げる。

突然の登場に周囲の民衆、リポーター、この光景を見ている全員が驚きを隠せない様子だ。

「ぜ、ロ……？」

それは、姉上も例外では無い。

空の輸送機から墮とされたKMFがゼロとカレンの運転する車を取り囲む。

一見すると絶体絶命。生身で鋼鉄の巨人であるKMFに勝てるわけがない。

しかし、ゼロは動揺の一つも見せず、その場に佇んでいる。

ジェレミアはゼロへ銃口を向ける。

何か話している様だが、周囲の雑音にかき消されていて、テレビ越しからは彼の声は聞こえない。

ふと、ゼロが右手を上げ、指を鳴らす。と同時に御料車の張りぼてが外れ、偽の毒ガスカプセルが現れた。

『何らかの機械かと思われませんが、目的は不明です——』

軍属の人間にしか分からないであろう、兵器。

周りに居るブリタニア市民は事の重大さに気付いていない。

そんな状況下でジェレミアは焦った様子を隠そうともせず、ゼロに語り掛ける。

『分かった。要求は?』

『交換だ、そつちの男と。』

急にカメラが寄り、音声クリアになる。

現場のマスコミがネタを嗅ぎ付け、近づいたのだろうか。

『笑止!この男はクロヴィス殿下を殺めた大罪人!引き渡せる訳がない!!』

『違うな、間違っているぞ。犯人はそいつじゃない……。クロヴィスを殺したのはこの、

私だ!!』

今まで一番、ブリタニア市民の困惑と驚愕の声が大きく上がった。

『イレヴン一匹で尊いブリタニア人の命が大勢救えるんだ。悪くない取引だと思うがな。』

ゼロは周りの様子を一瞥することも無く、言葉を続ける。

『こやつは狂っている!殿下の御料車を偽装し、愚弄した罪!贖うがいい!』
『いいのか?公表するぞ、オレンジを。』

一瞬、時が止まった様に静寂が訪れる。

「オレンジ?知っている、姉上?」

「さあ…分からないです」

ジエレミアとの距離を詰める為なのか、ゼロの乗る車が、前進し始めた。

『私が死んだら公表される事になっている筈だ。そうされたくなければ……』

『なんだ、何を言ってる——。』

『私達を全力で見逃せ！そっちの男もだ!!』

『………………。ふん、分かった。その男をくれてやれ。』

ブリタニアは必要とあらば民間人をも切り捨てる。

ブリタニア市民を人質として立てこもったテロ集団を、民間人ごと叩き潰した、という話は有名だ。

出世欲に憑りつかれていようが、ジエレミアは生粋のブリタニアの軍人であり、KM Fを駆る騎士侯。

テロリストとの交渉など、普通だったら乗る筈も無い、が。

彼は人が変わった様に、ゼロの話に乗り、枢木スザクを解放した。

「これは……………」

この光景を大多数の人間は、「オレンジ」を恐れたジエレミアが、ゼロに屈したと見るだろう。

しかし、私には。

この光景が、全く別のモノに見える。

「アルカ？何が起きたの？」

「……ん、ああ。えっとゼロの交渉に応じて、枢木スザクをゼロに引き渡したんだよ。」

「スザクさん、無事なんですね！」

姉上は嬉しそうに、暗かった顔に笑顔を少し取り戻した。

（間違いなく、ゼロは……ギアスを……）

思い返すは、ゼロと初めて会った時。

乗車客は私達に何の反応も示さなかった。

クロヴィスの暗殺もギアスがあれば容易いだろう。

テレビに意識を戻す。

そこからの展開は一瞬の事だった。

レプリカのカプセルからガスが噴出した事で現場はパニックに。

純血派がKMFでゼロの逃亡を阻止しようと試みるものの、自身のリーダーである

ジェレミアに阻まれ、ゼロはまんまと逃げおおせた。

「よかったあ」

無意識から出た安堵だろう。

姉上は、異母兄を殺した真犯人よりも、幼馴染の無事に意識を向けていた。

（誰もが不可能と思っていた事を、二度もやって見せた……その奇跡が作られた演出だと

しても、これで扇さん達はゼロへと傾倒していく事に……)

ガチャリ、と扉が開く音が響いた。

「お兄様？おかえりなさいー？」

姉上が身体を向けた方へ、視線をやる。

そこに居たのは、兄上では無く。

「…嘘……………」

緑色の髪をした。人形のような見た目の少女。

「アルカ——」

C・C・だった。

◇◇◇

ああ、何も変わらない。

いや、変わらないのは、当然か。彼女は不変の存在なのだから。

その綺麗な緑色の髪も。

端正な顔立ちも。

冷たい印象を与えながらも、どこか優しさを含んだその金色の瞳も。

私に対して柔和に微笑みを向けるその表情も。

両手を左右に広げながら。

おいで、とでも言っているかの様に。私の大好きな優しい表情で。

「——っ」

視界が涙で滲む。

姉上の言葉の途中だっただろう。

目の見えない姉上からすれば、状況を半分も理解出来ていないだろう。

申し訳無さを感じない、と言えば嘘となるが、今だけは許してほしい。

私は腕を広げるC・Cの元へ駆け寄り、その胸へ飛び込んだ。

まだ、泣き虫は卒業できそうにない。

◇◇◇

(なんだこれは………)

意味が分からない。

スザクを解放し、ゼロの力を扇達に認めさせた俺は、愛する妹達が待つクラブハウスへ帰った。

そこにはいつもの光景が広がって——いなかった。

「おかえり、ルルーシュ。」

「おかえりなさい、お兄様」

「あ、……おかえり……」

見覚えのある緑色の髪の少女。

車椅子に座る盲目の妹。

緑色の髪の少女の膝の上に座り、目を充血させ、しおらしいもう一人の妹。

机の上には折り紙が散乱している。

「その様子だと、食事は外で済ませてきたな。」

アルカを後ろから抱きしめながら、我が家同然にくつろいぎながら、ふてぶてしく言う。

「心配しました……。ゼロという人の騒ぎに巻き込まれたんじゃないかって。……お兄様？せつかくC・C・Cさんが来られたのに。」

「C・C・C……？」

アルカを助けたという……、この女が？

「話には聞いていましたけど、変わった方ですよ。本当に名前がインシヤルだけだなんて。」

「あ、ああ……」

この状況をどうするべきか、策を模索するも、頭が上手く働かない。

兎に角、この女に対する情報が足りない。

本当にこの女がアルカが言っていた人物だとしたら、アルカに聞くのが一番だろう。

「なあ、アルカ……………」

「アルカは今、キャパオーバーで碌に受け答え出来ないぞ、頭が働いていないからな。」

もつとも、そうしたのは私だがな、とC. C. は悪戯っぽく呟いた。

(何をしたんだ!?)

いくら考えようと解は出ない。

こいつと2人で直接話す必要がある、な。

手荒な真似にはなるが、仕方が無い。

テーブルの上に置いてある紅茶の入ったティーカップを手に取り、床に落とす。

「ああ、大丈夫か?こんなに濡らしてしまつて。着替え、貸すからちよつとこつちへ来てくれないか。」

穏やかな口調とは裏腹に、今の俺の目はクロヴィスを殺した時よりも鋭いだろう。

「はあ、わかつたよ。アルカ、少し席を外す。」

「あ、うん……………は、い……………」

彼女の腕を掴み、自室へと連れていく。

「ナナリー、アルカ。危ないからそこから動くなよ。後で片付けるからさ。」

そう言い残し、部屋を後にした。

◇◇◇

「誰だ、お前は？」

部屋に入り、彼女を突き飛ばす。

そんな俺の態度に気にする素振りも無く、むしろ愉快そうに口元を緩めている。

「言っていないかったか？ C・C・と。」

「そうじゃなくてお前は——」

「死んだはず、か？」

そう、あの時、シンジユクで。

彼女は額を撃たれ、絶命した筈だ。

「気に入ったか？ 私の与えた力は。」

力——。俺の左目に宿るギアスの事だ。

「やはり、この力は……お前が……」

「不満か？」

「いや、感謝している。お陰でブリタニアを崩すスケジュールを、大幅に前倒し出来たのだから。いや、それよりも。」

話を聞く限り、アルカはこの女と共に過ごした期間が長い。

この女の異常性、ギアスの事。

知っていてもおかしくない。

兄としては妹の身近に、こんな得体の知れない女や、危険な力が彼女の傍にあるのは好ましくない。

「お前の身体や、ギアスの事。アルカは——」

「自分で聞け。」

びしやり。と切り捨てられた。

「……お前とアルカの関係……詳しく知りた——」

「自分で考えろ。」

「………何処で知り合った？」

「しつこいのは嫌いだ。」

………ああ、この短時間だがよく分かった。

この女とはまともに会話が出来ないという事が。

（今度、アルカに聞いてみるか……。妹に探りを入れる様で良い気分はしないが…）

「…お前、これからどうするんだ？軍に追われているんだらう？」

「軍といつても極一部だけ。アルカと同じだ。普通に隠れているだけで十分だ。」

そう言いながら彼女は、部屋の出口へ向かう。

「ここにはアルカも居るしな、アルカの部屋で過ごすことにするよ。」

「おい、ここに泊まるつもりか？」

「泊まるのではなく、住むつもりだ。」

頭が痛くなる。

ただでさえ、ゼロとして名乗りを上げたんだ。

これ以上、不安の種を増やす様な真似をしたくは無い。

それよりも！アルカには悪いが、この女を妹達に近づけたくない！悪影響を及ぼしそ
うだ！

(アルカはこの女の何処が……)

そんなことを考えていると、

「あ、そうだ。ルルーシュ。アルカは明日、学校休みだ。起きれないだろうからな。部屋にも来るなよ。」

「は？待て！どういう意味だ！」

「おやすみ、ルルーシュ。」

俺の疑問に答える事無く、C・Cは部屋を出た。

アルカの元へ向かったのだろう。

「なんなんだ、一体……」
人並な表現だが、すごく疲れた。

Stage5 譲れないモノ

クラブハウス ルルーシユの部屋

時刻：早朝

ゼロが姿を見せたあの日から。エリアーは以前と比べて、騒がしくなった。テレビや新聞を始めとする各メディアは、ゼロは何者だ、と連日取り上げていて、耳にタコが出来そうなくらいだ。

「オレンジ事件」から、信用が失墜したジェレミアは、軍の統率を保てず、警察との連携もボロボロ。その証拠に、ゼロに触発され動きが活発になったテロ組織の対応に後れを取っている。今週だけで、もう7回もテロが起きています。

エリアーは、一人の男の手によって、混乱の渦中に突き落とされた。他でもない、俺自身の手によって。

そんなゼロの正体を知るのが、2人居る。

目の前で……ピザを食べている……

「ふむ……まあまあ味の味だな」

「前に頼んだやつの方が美味しかったね。」

C・C・とアルカだ。

アルカに至ってはこれから学校があるだろうに、良く朝から食べれるな。

「兄上も食べる？」

「いや……遠慮しておく……」

「アルカ、こいつに食わせてやる義理は無い。私が食べる分が少なくなるだろう。」

義理はあるだろ。思わず突っ込む。

誰の金だと思っているんだ、このピザ女。

アルカもアルカだ。C・C・に対して甘過ぎる。

「……………はあ。」

この女が現れてからというものの、溜息が増えた。

「どうした？ルルーシユ。溜息なんかして、幸せが逃げるぞ。」

ゼロともあろうものが、情けない。いつも通りの無感動な表情をしてC・C・は眩

く。

(ゼロ……か……………)

ピザを口に運ぶアルカに視線を向ける。

幸せそうにC・C・の横でピザをほおばっている。

(巻き込むつもりは無かったんだがな……)

彼女は見つめながら、俺はこの間の夜の出来事を思い返す。



「単刀直入に聞く、アルカ、お前はC. C. の身体の事……ギアスの事……知っているな？」

深夜1時。

アルカに話があると伝え、自室に招き入れた。

しばらく、世間話を楽しんでたが、段々とアルカとC. C. に関する話へ。

話の途中、俺は意を決して、彼女に切り出し、今に至る。

「……C. C. から聞いたの？」

「いや、あいつは何も喋らなかつた。ただ一言、アルカに聞けとしか」

「どうしてその結論に？」

「アルカが本当に知らないのなら、あいつは知らないと言えばそれで済むだろう。だが」

C. C. はそうしなかつた。何かあります、と言っているようなものだ。」

C. C. はアルカと過ごす時間が減るのを嫌う。

アルカが何も知らないなら、一言そう言えば、話しは終わり、こうして俺と問答する

時間も無くなっていった筈。

彼女からすればそっちの方が良いだろうに。

「うん、知ってるよ。」

誤魔化すことも無く、いつも通りの口調であっけらかんとアルカは言う。

「……………契約はしているか」

「うん。してる。」

「やはりか…………」

自分でも苦虫を噛み潰した様な顔をしているのがわかる。

「気づいてたんだ。」

「確証は無かったけどな。だが、年齢を考えれば、まだまだ幼いアルカが、C・Cの手助けがあったとはいえ、ブリタニアからの追跡を免れてきたんだ。ギアスを持っていると考えた方が辻褄が合う。」

ごく一部の人間だけに追われているとはいえ、仮にも世界の1/3を支配する大帝国。ただの子どもが振り払える程、ブリタニアは甘くない。

俺とナナリーだってアッシュフォード家の手助けがあつて、やっと生き残れたんだ。

(感謝すべきか…………、それとも逆か…………)

ギアスが無ければ、アルカとこうして再会することは叶わなかったであろう。その点

では感謝すべきなのだろう。

しかし、契約したことで、人とは違う理に足を踏み入れてしまったのも事実。複雑な気分だ。

「能力は？」

「ゼロ……いや、兄上と大体同じ。兄上ほど、拘束力は無いけど。」

「……………」

「気づいてない、とでも思った？」

「いや、可能性としては考えていた、しかし……」

一緒に生活しているんだ、当然、ゼロが関わっている事件が起きた日と帰りが遅い日が一致している事など、分かっているだろう。

それに俺のバックボーンも当然知っている。俺がブリタニアを憎む理由も。

しかし、これだけでゼロは俺、という結論に辿り着く事は出来ない。

ギアスの事を知っていても俺には辿り着かない筈だ。

オレンジ事件でのギアスの使用。中継されていたんだ、当然アルカも見ていた筈。ゼロがギアスを有している、という結論には帰結しただろう。

加えてあの日、クラブハウスに現れたC.C.。あいつの行動も、新たに契約した俺ではなく、アルカに会う為と考える方が自然だ。

まあ実際、俺はついでで、アルカが目的だろうが。

まあ、それは兎も角、どれも決定的な材料にはならない。

そう考えると、俺がギアス能力者だと結論付ける前に、俺がゼロであると考えた事となる。

そんな事、出来るのはカレンの様な当事者しか……

「ああ、兄上からすれば、情報足りないか。」

アルカは鍵の着いた机の引き出しを開け、底板を外す。そこからある物を取り出した。

カレン達がシンジユク事変で使っていた、通信機。

「……………これは……」

「シンジユクの時、私はあの場には居なかったけど、カレン達の状況はそれで確認していたの。兄上からの電話が来たかと思ったら、今度は似たような声の男がカレン達の手助けをし始めたんだもん。びっくりしたよ。」

まあ雑音混じりだったし、声の情報なんてそこまで信用するモノでは無いから、当てにはしていないかったけど、とアルカは続ける。

待て、なぜこんなモノをアルカが持っている、それにカレン達、だと。

まさか。まさかまさかまさかまさか。

「あとは、クラブハウスにかかってきた、カレン宛ての電話。カレンの事を知っているなら、シユタツトフェルト家に電話を掛ければ良い。彼女、学校に居る方が珍しいんだし、病弱設定だからね。だけど、わざわざクラブハウスに電話を掛けてきた。一般生徒は出入りすらないクラブハウスに。外部の人間が取る行動にしては不自然過ぎる。と考えると、あの場の状況を確認できる場所に居たって考えた方が自然。」

まるで、この口ぶりは。

「あ、そうそう。あの電話が来てからね、カレン、兄上の事を私に聞いてこなくなつたの。それまでは五月蠅いくらい、聞いてきたのに。初めは一目惚れでもしたのかな、なんて呑気な事考えていたけど。電話を皮切りに、って考えるとシンジユクの男と兄上が同一人物って疑っていたのかな？ シャワー室に服を届けに行ったのも私では無く、兄上だし。自分への疑いを晴らす為に、録音かなんかを用意して、自分がその場に居る状況でカレンに電話を掛けた、って考えればカレンの変わり様も腑に落ちる。」

仲間みたいじゃないか。

「まあ、決め手はこの時かな。」

アルカは再度、引き出しの底から取り出す。

仮面だ。金属製の、模様の入った。電車ですつとつむいていた黒髪の少女の……。

「あの男の息子だから殺した、か。一番納得のいく回答だったよ。」

「お前、まさか……………」

「うん、扇要をリーダーとするレジスタンスの仲間です。」

兄上は目を大きく見開かせる。

まあ当然だろう、妹がテロ活動の片棒を担いでいたのだから。

「なぜ…………そんな事を…」

「なぜか、分かっているんじゃない？ 兄上と一緒だよ。ブリタニアが…………父が憎くて

仕方が無い。」

そう、あの男が。

神聖ブリタニア帝国第98代皇帝、シャルル・ジ・ブリタニア。

「きっかけは母上の事件から。そこからC・C.と過ごしているうちにね、気持ちが大んどん大きくなってきて。」

兄上と姉上と別れた後の事を思い出す。

繰り返される人体実験。実際に人が乗ったKMFを完全に破壊するまで終わらない
戦闘訓練。

そしてC. C. に対する仕打ち。

「何も出来ない自分に嫌気がさして、でも行動に起こせなくて。きつと誰かがどうにかしてくれるって期待して目を逸らして生きてきた。だけど、あの時。C. C. がブリタニアに捕まった2年前に思い知った。——ああ、自分が行動を起こさない限り、世界は何も変わらないって。」

C. C. との逃亡生活。平穩では無かったし、気を抜けない日々ではあったけども、楽しかった。

彼女と一緒に、様々な街へ行き、様々な風景を目にし。間違いなく、幸せだったと言える。

追手が来た時に対処すればいい、なんて考えながら過ごしていた受け身の日々。

「C. C. と別れた後、一度だけギアスで人を殺した。」

カレン達と出会う少し前のこと、私の事を追っていたブリタニア軍人達に取り囲まれた。

私の周りには銃を持った軍人達。私の手には何の仕掛けも無いただの拳銃。取るべき行動は一つだった。

死ね。とただ一言、そう告げた。

「Yes, Your Highness」と、軍人たちは声をあげ、自ら命を絶つ。

「その時、思い出した。いや、改めて認識した。私には力がある。自分の思い通りに人を動かす願いが。だから——。」

「扇グループに接触し、仲間に加わったと。カレン・シユタツトフェルトの家によく行っていたのも活動の為か。」

「うん、まあ……本当にただ遊びに行っていた日もあるけど。」

いや、今の兄上とって私とカレンの友人関係など重要では無いか。

「アルカ……正直に言うと、俺はお前にはそんなことをして欲しくない。平穏な世界で、平和な場所で、ナナリーと共に笑って過ごして欲しいんだ。俺がゼロとして、その場所を作る。お前の怒りも憎しみも全て背負う。だから」

「手を引け……って?」

「……………ああ。」

そう言うだろうとは、分かっていた。兄上は優しいから。

だけど、もう私は。

「無理だよ、もう遅いんだ。私はもう既に兄上以上に手を汚しているの。今更、引き返せない。」

「それでもいい、いいんだ。俺が許すから……」

「許しなんて必要ない。私はもう前に進むだけ、歩みは止めない。」

兄上の顔には悲しみと困惑が入り混じった表情が浮かんでいる。

ああ、そんな顔をさせてしまうなんて、私は出来ない妹だ。

それでも私は

「私は自分の願いの為に、行動を起こした。そこに他人の介入の余地は無い。兄上だつて同じでしょう？ だから仮面を手を取ったんでしょ？」

そう、他の何物でもない、これは私の戦いだ。

ブリタニアに対する憎しみも、世界に対する嘆きも、私だけのもの。

「ルルーシユ、いくら言った所でアルカは折れないぞ。意外と頑固な奴だからな。」

2人しか居なかった部屋に、新たな声加わる。C・Cだ。

「それでもアルカを止めたいのなら、ギアスを使え。こいつの思いを捻じ曲げて、平穏な世界に返すと良い。」

だが、その時は。と彼女は淡々と告げる。

「アルカという人間は死ぬことになるけどな。」

兄上はハツとした表情でC・Cの方を見る。

「なんだその顔は？当然だろう。アルカの戦う理由は、今までの人生で培ってきたものだ。中途半端にギアスを掛ければ、いつかはまた、同じ思いを抱くだろう。」

C・Cの言い分は尤もだ。

仮に、ギアスの事、レジスタンスの事、ゼロに関する記憶を消したとしても、根柢にあるブリタニアに対する気持ちは消えはしない。

同じ人間である限り、アルカである限りは。

「関わらせたく無いのなら、アルカという人間の記憶を全て消せ。そしてもう二度と関わらない覚悟を決めろ。……それが出来ないのなら、こいつの思いを汲んでやれ。」

「……兄上。」

うつむいている兄上に、私は優しく声をかけ、その頭を自身の胸に持つていき、抱きしめる。

「大丈夫、私は死なないよ。」

◇◇◇

アツシユフオード学園 中庭

時刻：昼

結局俺は、アルカにギアスを掛けなかった。いや掛ける事が出来なかった。

あの時のアルカの覚悟を決めた目、同じだったのだ、俺と。

アルカの思いを、願いを知った。

結局、妹の願いを捻じ曲げる程、非情に徹してやれなかったのだ。

(結局、俺も甘いな。)

アルカがC・C・に甘すぎる、と呆れていたが、俺も人の事は言えない。

(……アルカが、ブリタニアとの戦いに身を投じる以上、手厚く守ってやる必要がある) 本人は死なないと言っていたが、その言葉を100%信じる訳にもいかない。

これから行うのは戦争なのだから。

(守りぬいてやる、俺がこの手で)

そう、兄としてもゼロとしても。一番近くに居る事になるんだ。

アルカには平和になった世界でナナリーと共に幸せに暮らしてもらう、それは俺の譲れない願いだ。

如何なる犠牲を払おうとも、妹達だけは——

「ねえ……この前の電話の件なんだけど……」

「ん……う？」

ふと顔を上げると、目の前には赤い髪の少女。

カレン・シュタットフェルトが立っていた。

「ほら、バスルームの……。連絡を取りたくて、着信履歴とか分からない？」

ああ、なるほど。

この少女はゼロと連絡を取りたいのか。

それもそうか、スザクの奪還以降、扇グループとは連絡を取っていないからな。

「いやあ、学校の電話だからな……俺の方では……」

勿論、履歴を残すなんて馬鹿な真似はしていない。

やる気があるのは有り難いことだが、俺も動き過ぎた。

クロヴィスの後釜も公表されていない事だし、今は大人しく………ん？

ふとカレンの後ろに目をやる。

「そう、そうよね……やっぱり。」

木の下で、踊り子の様にくるくると回る少女。

腰まで届く緑色の髪。金色の目。人形のような無感動な顔。

茶色のジャケット……つまりは俺の私服を着て、呑気に、平然とそこに居る。

(…あの、女………!!)

胃がキリキリしてきた。

追われている身でありながら！

外部の人間でありながら！

どうして！そう平然と!!我が物顔で校内をうろつける!?

俺の視線に気づき、C・Cはクラブハウスの方へ、向かって行った。

「いめん、ちよっと……」

カレンにそう言い残し、俺はC・Cの後を追う。後ろで「あ、うん」と、か細い声が聞こえた。

——クラブハウス 屋上

「馬鹿かお前は！ふらふらと出歩くな!!」

「いいだろ？ 学校の中くらい。アルカが居なくて退屈なんだよ。」

「ダメだ。お前は部外者なんだぞ。」

「私は何処でもそうだ。」

ええい、こいつとはやはり、会話がままならない。

アルカに頼んで説得してもらうか、いや、しかし……

「ん？ なんだ？ あいつは。」

そうこう考えている内に、C・Cは屋上の周りを囲む、石造りの柵に手を掛けていた。

目線の先には、壁に傷をつける青い髪の少女が。

「ああ、今日もやっているのか」

「今日も?」

「彼女には、毎日ここの壁に印をつける様にギアスを掛けた。持続力の実験だよ。」

もう彼女にギアスを掛けて何日経過しただろうか。もう随分立つはずだ。

アルカの言う通り、俺のギアスの拘束力は強いらしい。

(逆にアルカのギアスは一日も続かないらしいな。)

俺のギアスは命令を下す、に対し、アルカのはお願いを聞いてもらう。

一見、同じの様に聞こえるが、全く違う。

命令は支配的、お願いはある程度の自由が認められるもの、と俺は解釈している。

仮に同じ相手にピザを買ってこいとギアスを掛けたとしよう。

どちらも結果だけみればピザを買ってくるだろう。

しかし、買ってくるまでの間は？

アルカのギアスの場合、その間の行動までを制限することは出来ない。

まあ、つまりは、アルカのギアスはそのまでの強制力は無く、その為、簡潔な願いし

か相手に押し付ける事が出来ない、という事。

そして、アルカのギアスお願いは、俺のギアス命令を上書き出来ない。

(使いどころを見極める必要がある……)

一人の人間に対して、一度しか使えないギアス。

同じ様な能力を持つアルカが加わった事により、手数が増えたと考えていたが、実際はそうではなかった。

(アルカは俺のギアスの完全劣化と、何処か申し訳無さそうに言っていたな。) 妹の少し落ち込んだ顔を思い出す。

その時は、そんな事無いよと言い、頭を撫でたが、機嫌は治っただろうか。

横で聞いていたC・Cが「まあ、能力だけで見れば、劣化だな。」と呟いていたが

……。

「ふん…慎重な事だ……」

意識を目の前の少女に戻す。

「武器のスペックは理解するべきだろう。お前も我儘が過ぎると……」

「効くかな？ 私に。」

「……………」

実際効かないのであろう。

仮に効くのであれば、この女はこんなふてぶてしい態度を取らない筈だ。

「安心しろ。お前と私は共犯者だ。お前達の不利になる様なことはしない。」

そう語る彼女の言葉は、いつもとは何処か違う様に聞こえた。

この点だけは信用出来る。そんな気がした。



クラブハウス アルカの部屋

「——という事があってな。全く、あの坊やの頭の固さにもほとんど愛想が尽きる。」

「あはは……まああまり困らせないであげてね、割と繊細だから……」

「あれは繊細などでは無く、肝が小さい。」

C・C・C がベッドの上で私を後ろから抱きしめながら、今日の出来事を淡々と話す。耳にかかる彼女の息遣いが少しむず痒い。

何時もの光景だ。

毎日、私が学校行っている間にしていた事、お昼にやっていたドラマが面白かった、姉上とこんな話をした、あのピザが美味しかった等々、欠かさずに彼女は話してくれる。

暇な時間を彼女なりに、過ごしている様だった。

こうして彼女の日常を聞くのが、私の日々の楽しみになっていたりする。

「今度、夜中にこっそり校内探索とかしてみよう？」

「……ほう……それは良いな。」

これで少しは彼女の退屈も紛れるだろうか。

なんて考えながら、手元にリモコンを手繰り寄せ、テレビをつける。

寝る前にこうしてニュースを確認するのは私の日課だ。

ブリタニアの動きを簡単に知る事が出来るから、欠かすわけにはいかない。最近では、ゼロの話題で持ちきりで飽き飽きしていた所だが、

『エリアーの新総督に——』。

ニユースキャスターがエリアーの新総督が決まった旨を伝えている。

「ほう……とうとう来たか。」

C・Cも関心があるらしく、声を漏らす。

テレビに映るテロップには、新総督の名前が表記されている。

「あの人、私達の次の敵……」

第2皇女 コーネリア・リ・ブリタニアと。

stage 6 奪われた仮面

第2皇女 コーネリア・リ・ブリタニア

皇女でありながら、有事の際は先陣を切って戦地へ赴く、女傑。

帝国の敵はどんな犠牲を払ってでも打ち倒す。という強い覚悟の元、各地の内乱を悉く力によって鎮めてきた。

ブリタニアの国是を厳守し、ナンバーズとブリタニア人の区別は、皇族の中でも群を抜いている。

世間からは、ブリタニアの魔女と言われ、非情な人間として認識されている、が………
(コウ姉様が次の総督……か……)

その実、世間が言うほどコーネリアは非情では無い。

ナンバーズとブリタニア人を区別するのも、彼女の根底に、ナンバーズは皇族である自分が導かなければならない、という強い意識があるからだ。

ブリタニアの軍門に下らない、ナンバーズ……つまりは非名誉ブリタニア人に対しては苛烈を極める。

が、ブリタニア国籍を持ったナンバーズ、名誉ブリタニア人に対しては、守るべき帝

国臣民、として認識している。

それを彼女が口に出すことは、決して無いだろうけど。

コーネリアという女性性は、戦場における姿ばかりが注目されているが、優れた統治者という側面も併せ持つ。

まあ、ナンバーズからすると、そんなコーネリアもただの敵であることには変わりないが。

(やりづらいなあ、色々な意味で)

加えて彼女は存外、身内には甘い。

実妹である、ユーフェミア・リ・ブリタニアは勿論の事。

他の異母兄弟に対しても家族として接する。帝位を狙い、争い合う皇族の中では珍しいタイプの間人だ。

それは私達に対しても同じだった。

特に私に対しては……

「——ルカさん。アルカさん。」

「え？ あ、何？」

物思いにふけてしまい、クラスメイトに声を掛けられているのに気づかなかった。

「高等部にイレヴンが入学してきたって話、知っています？」

ああ、そういうえば。そんな話どこかで聞いた気がする。

「ごめんなさい、興味ない。」

「あ……………」

そう言つて私は席を立ち、教室を出る。

クラスメイトには悪いが、噂話で花を咲かせる程、仲良くする気は無い。

関わる人が増えれば増える程、それは私にとつての重荷になる。

全てを背負いながら戦うなんて芸当、私には出来ない。

(最近、話しかけられる事、多くなつた気がする)

C・C・と再会してからだろうか。

ミレイさんに「最近、雰囲気柔らかくなつた？」と言われた事を思い出す。

自分でも気づかないうちに気が緩んでいたのかもしれない。

そんなことを考えながら、私はクラブハウスへと向かう。

授業？今日はサボりだ。

・
・
・

アルカの学校についての評判は、そこまで悪くない。

彼女自身は愛想が無く、歳も下であることから、嫌われている、周囲から浮いている、と思っっている。

本人としても仲良くする気は無いので都合が良いと、特に態度を変える気は無い様だ。

しかし、実際はそうではない。

彼女は学校中で、高根の花とまで言われている。

生徒から聞けば、

「愁いを帯びた幼い顔が美しい」

「普段のツンツンとした態度と、ナナリーと居る時の態度のギャップが尊い」

「突き放す様な態度取っているのに、困っている人を見過ごせないのが可愛い」というプラスの感想ばかり。

生徒会が設置した目安箱。そこに寄せられる意見にも

「妹にしたい」

「甘やかしたい」

「一緒にピザを食べたい」

などの意見が頻繁に寄せられている。

つまり、アルカは嫌われているのではなく、遠くから温かい目で見守られているだけ。

彼女の態度に対してマイナス印象を持っているのは教師陣くらいだ。

「……まあ、そんなところだな。」

「流石、ルルーシユ。べた褒めだね。」

目の前に居る少年。枢木スザクは柔和な笑みを浮かべる。

「事実を言っているまでだ。生徒からの生の声だぞ。」

「はいはい。」

スザクにアルカとはどんな子か、と聞かれ、客観的事実を伝えた。

なのにどうして、こいつは生暖かい目を俺に向ける？

「楽しみだなあ、ルルーシユのもう一人の妹。でも、本当に驚いたよ。入学したと思ったら、ルルーシユとナナリーと一緒に学校だし。まさか君が生き別れたと言っていた、もう一人の妹まで一緒にだなんて」

「ああ、本当に奇妙な巡り合わせだよな」

そう、今日付けでスザクはアツシユフォード学園に入学してきた。

クロヴィス殺しの元容疑者で、イレヴンであるスザク。

スザクこそ、周りから悪意のある目を向けられ、疎まれている。

そんな状況ではスザクとゆっくり話す事も出来ない。

だから俺はスザクをこっそり屋上へと呼び出し、こうして人の居ない屋上で話をして

いる。

そうこうしていると、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

「そろそろ戻らないとな。」

「そうだね。じゃあ、ルルーシュ。放課後、楽しみにしてる。」

「ああ。」

そう言い残し、スザクは一足先に教室へと戻っていった。

ナナリーとスザクの再会も楽しみだが、アルカとスザクの対面も楽しみだ。

2人ともどの様な反応をするだろうか。

これから起こる事に期待を膨らませながら、俺も教室へと歩みを進める。

◇◇◇

「初めまして、君がアルカかい？」

日本人にしては色素の薄いくるくるした髪。

緑色の優しい目。

幼さを残した顔立ち。

「あ、はい……。初めまして……。」

枢木スザク。

「ルルーシユとナナリーから話は聞いていたよ。自慢の妹だつて。」

「…私も、2人から話は聞いていました…。不器用でバカだつて。」

私に対して柔和に微笑んでいた彼の顔が、兄上の方へと向く。

「…………ルルーシユ？」

「…いや、そんな事言つたかな？」

兄上とスザクさんは、口喧嘩を繰り返しているが、2人とも何処か嬉しそうだ。

「ふふ、スザクさん、お兄様にとつて初めてのお友達なんですよ。」

久しぶりの再会に姉上の声も弾んでいるのが分かる。

(兄上のあんな顔…初めて見たかも)

年相応の楽しそうな表情をしている。

一通り言い争いを終えた兄上は、机の上のティーポットを手に取り席を立つ。

お茶が無くなったらしい。

「あ…手伝うよ。」

「…………ふ。座つてろつて。7年前と違ってこつちがホストなんだ。」

「うん、分かつた。」

再び柔和な笑みを浮かべて、スザクさんは席に座る。

「お前、なんか大人しくなつたな。」

「君はがさつになった。」

「ははは、はいはい。」

兄上は笑いながらリビングを後にする。

「本当に仲、良いんですね。あんな兄上、初めて見ました。」

「最初に会った頃は酷かったよ。喧嘩ばかりさ。あ、敬語は要らないよ。」

「はい、いや、うん。……わかった……」

なんだろう、初めて見た時から、こうして言葉を交えた時から、違和感を感じる。

「スザクさん、アルカは初対面の人に壁を作っちゃうところがあるんです。懲りずに仲良くしてあげてくださいいね?」

「はは、昔のルルーシユみたいだね。大丈夫、そのつもりだから。」

彼に対して何か。

「まあ俺達よりも信頼できる人間が少ない環境だったからな、仕方が無い。」

お茶を淹れなおした兄上がキッチンから戻ってきた。

そこからは3人の昔話から、私の話へと移る。

私の経歴から、兄上達と再会した時の事など。様々な事を、夜が更けるまで、4人で話した。

クラブハウスの自室から外に居る2人を見下ろす。

兄上とスザクさんだ。

2人は何かを言い合っている様だが、ここからは何も聞こえない。

「あの男を見て……どう思った？」

ベッドの上に居た筈のC・C・Cが、何時の間にか私の隣に居た。

「……優しくていい人だな。って思ったよ。」

実際に初対面である私の事も気に掛けてくれていたし、昔話を聞いていても、悪い印

象は持たなかった。

「……そうか。」

C・C・Cは静かに眩き、再びベッドへ腰かける。

「ただ……」

「ん？」

「ただ、変な感じがした。彼と初対面じゃない様な、赤の他人では無いような。そんな感

覚。」

その時、後ろでC・C・Cが目を細めていた事を私は知らない。



アツシユフオード学園 中庭

「——ええ、そう。だから貴女が居ないと大変なのよ。ルルーシユ、リヴアルはサボるし、会長は直前で仕事思い出すし。シャーリーは部活があるし、ニーナは研究に没頭しているし……」

「相変わらず自由だねえ。」

最近の生徒会の様子を、愚痴も含めて、カレンから聞いている。

迷惑そうな口調とは裏腹に、嬉しそうな顔をしているのだから、彼女も素直じゃない。

「ふふ、仲良くやっている様で何より。」

「はあ？何処が——」

『あーテストス……ん？入ってる？おけおけ……』

突然、学園中に1人の女性の声が響いた。

学園切つてのお祭り女、ミレイさんだ。

カレンと顔を見合わせ、顔を青ざめる。

『こちら、生徒会長のミレイ・アツシユフオードです。猫だ！』

この人がマイクを取るときは、碌なことが起きない。

『校内を逃走中の猫を捕まえなさい！部活は一時中断。協力したクラブは予算を優遇します。』

「そんな無茶苦茶な……」

自分達の仕事を増やしていることにミレイさんは気づいているのだろうか。

『そして、猫を掴めた人にはスーパードラッグキーチャンスが！生徒会メンバーから、キッスのプレゼントだあ!!』

ミレイさんの高笑いが校内に響き渡る。

「生徒会メンバーって私も!?!」

ほら碌な事じゃない。

「！！！！」「さうですよね！！！！」
「うっー！」

目の前の茂みから男達が飛び出した。

格好を見るに、園芸部と映画制作部……かな。

「生徒会に出入りしてるし」

「お嬢様の唇」

「頬つぺたとか、そういうオチじゃないですよね?」

「いやーこの際、頬つぺたでもいい!」

「え？ 場所指定出来るの!？」

「じゃあ……………」

一斉にカレンへ視線が集まる。

「「「「「よっしやー!!!」」」」」

興奮した男達は猫を捕まえる為、一斉に走りだした。

「……………キモッ……」

思わず言葉に出してしまった。

いや実際そうなのだから許してほしい。

「やめてよ、私の初めての!!」

カレンは顔を真っ赤にさせ、病弱設定を忘れて叫ぶ。

いやー大変だなあ。

「んじや、頑張つて捕まえてね。また明日。」

カレンに手を振り、その場を去ろうとした、その時。カレンに肩を掴まれた。しかも

結構強い力で。

「痛い痛い痛い!!」

「何処にい、行こうとお、しているのかなあ?」

口調はおっとり、表情は笑顔の筈なのに、威圧感を感じる。

「いやだって、私には関係無……痛いっ!! 本当に痛い!!」

肩を掴む手の力がさらに強くなる。

「アルカはあ、友達が困っているのにい、見捨てちゃうのお?」

何なんだ、この有無を言わせない強制力は。まさかギアス……

なんて下らない事を考えていると、唐突にポケットの中の携帯が震え始めた。

「ちよつと、離して! カレン!! 電話、来てるから!!」

カレンから解放された私は携帯の画面を確認する。

(兄上……?)

念の為、会話を聞かれない様に、カレンと距離を取る。

「もしもし?」

『アルカ! 今、どこだ!?』

「中庭だけど……どうしたの?」

『猫だ! 猫を、捕まえるんだ!!』

猫……というとミレイさんが言っていたやつだろう。

「兄上、私は別にキスなんて……」

『仮面が! ゼロの仮面が猫に盗られたんだ!!』

一瞬思考が止まった。

何が盗まれた？

仮面だ。

誰に盗まれた？

猫に。

全生徒が血眼になって探している動物は何だ？

ここまで来て、私の思考は現実へと引き戻される。

「へっ!？」

自分でもらしくない、と思えるほどの間抜けで、甲高い声が出た。

『とにかく、頼むー!』

そう言い残して兄上は電話を切った。

冷汗が止まらない。顔が引き攣る。

ぎこちなく笑顔を作り、カレンの方へと向いた。

「…カレン……喜んで手伝うわ…」

負けられない戦いが今、始まる。

・
・
・

アツシユフオード学園 高等部 廊下

『猫を見つけたら、所有物は私に渡しなさい!! 私に! 私に! 私に!!!』

生徒を煽るミレイさんの声が再度響き渡る。

「人を勝手に商品にして! これだからブリタニアは!!」

「いや、流石に人種は関係無いと思う」

ブリタニア人が、では無くミレイさんが、というのが正しい。

「もう! 病弱なんて設定! しなければ良かった!!」

カレンは先程から、生徒とすれ違う度にお嬢様モードを発動している。

放課後とは言え、まだまだ生徒の多い時間帯。

持ち前の身体能力を発揮しきれず、搜索は難航している。

（身体能力が高いカレンと一緒に居ればすぐに見つかると思っていたけど、誤算だったか……）

これならカレンと別れて、一人で探した方が効率が良かったかも……と考えていたその時。

廊下の曲がり角で、カレンは一人の生徒とぶつかった。

「ごめんなさい! そっちは……」

オレンジ色の腰まで届く髪に、活発そうな顔立ち、そして

「つて、シャーリー？　なんて恰好しているの!？」

アツシユフオード学園指定のスクール水着。

「だって……私達のキスがかかっているのよ!!　ねえ、アルカ!!」

「え、私も？　私、正式なメンバーって訳じゃ……」

「……同感!!」

「ねえ、聞いてる?」

カレンは私の言葉はスルーしてシャーリーさんの言葉に同意する。

今ここに、生徒会乙女同盟+αが、勝手に結成された。

・
・
・

「これで私達のキスは安泰ね。シャーリーは後ろを。アルカは……」

私達3人は猫を何とか袋小路に追い詰めた。

(やっとこの騒動も終わる……)

馬術部は馬を乗り回し、リヴアルさんはバイクを走らせ、園芸部はマタタビをそこら中にばら撒く……ハッキリ言って滅茶苦茶だった。

でも後は目の前の机の下に居る猫を捕まえればいいだけ……

「待って!!」

「何?」

と、そこでシャーリーがストップをかける。

「どうしたの? シャーリーさん。」

「ねえ、2人はキスの権利、誰に使うの?」

「は?」「へ?」

いきなりの質問に、カレンと私の眩きが重なる。

「いや、私は別に使う気無い…けど…」

「カレンは? ひよつとして…ルル?」

「な、なんでそうなるのよ!」

ここにきてシャーリーの乙女心が爆発してしまった様だ。

こうしている間にも猫が…

(最悪、ギアスを使うしか…でも…)

身近な人にギアスは——

一瞬だけ、過去の記憶が蘇る。

(あんな思いは、もう…)

沈みかけた意識を現実に戻す。

再びシャーリーへと視線を向けた時、聞き捨てならない言葉が聞こえた。

「だってこの間、その…ルルと……」

シャーリーは顔を赤くしながら、言い渋っている。

ルル…兄上と？カレンが?!

さつきまでの沈んだ思考が一気に吹き飛ぶ。

「え、カレンって本当に兄上の事好きなの!？」

「本当についてどういう意味よ!!」

「やっぱり！ルルとカレンさんは……」

「だから、何も無いってば!!」

そうこう3人が言い合っている間に、気づかれる事無く、猫は足元を通り過ぎる。

ルルーシユは知らない。

「女三人寄れば姦しい」という言葉を。

それはアルカとて、例外では無いということ。

・
・
・

「非常に……申し訳……無いデス……」

「良いって良いって。こうして無事、手元に戻ってきたんだ。」

ベッドの上で正座し、肩をすくめ、しおらしくしている末妹。

聞けば、あと一步のとこまで猫を追い詰めたものの、シャーリーの発言に気を取られ、取り逃してしまった様だ。

「でも、あそこで私が捕まえていれば……あんな危険な目に……」

「スザクが助けてくれたんだ、問題無い。それにスザクが学園に馴染む良いきっかけになったからな、寧ろこの方が良かったと思う。」

だからそんなに落ち込むな、とアルカの頭を撫でる。

猫を掴める為、俺とスザクは時計塔の屋根の上に登った。

猫が着けている仮面に気を取られていた俺は、足を滑らせ、時計塔から落下しそうになった。が、スザクが助けてくれた。

その際お互いの名前を呼び合ってしまった為、俺とスザクの関係が露呈してしまっただが、結果的には彼を生徒会に入れる事が出来た為、上々の結果だと俺は思っている。

仮面の事、誰にもバレなかった事だしな。

「今度からスザクも生徒会のメンバーなんだ、仲良くしてやってくれ。」

「あ、うん……わかつてる……」

そういうアルカの表情は、先ほどとは打って変わり、神妙であった。

◇◇◇

『人は平等ではない。』

歳を感じさせない圧倒的な威厳。

『生まれつき足の速い者、美しい者、親が貧しい者、病弱な身体を持つ者。』

恰幅の良い身体。

『生まれも育ちも才能も、人間は皆、違っておるのだ。』

世界の1／3を占める超大国ブリタニアの絶対君主。

『そう、人は差別される為にある。だからこそ人は争い、競い合い、そこに進化が生まれぬ。』

第98代皇帝 シャルル・ジ・ブリタニア。

『不平等は悪ではない。平等こそが悪なのだ。』

黒髪の少年は彼を射殺さんとはかりの鋭い眼光で彼を見つめている。

『我が息子、クロヴィスの死も、ブリタニアが！進化を続けているという証!!』

淡いミルク色の髪の少女は冷静に見据えている。しかしその瞳の奥には、ドス黒い憎しみの色。

『戦うのだ！競い、奪い、獲得し、支配しろ、その果てに未来がある!!』

色素の薄い髪をした少年は、何かを堪える様に、拳を握りしめる。

『All Hail Britannia!!!』

腰まで届く緑色の髪をした少女は無感動な表情で彼を見つめる。

「あいつらの敵……か……。」

Stage 7 二人の異母姉

「おい、アルカ……そんなに泣くな………」

紫色の髪の女性、コーネリアが、泣いているアルカを慰める。

「……でも、コウ、姉様……。母上、私にだけ……厳し、い……きつと、私の事、嫌い……なんだよ………」

嗚咽を交えながらも、少女は答える。

「マリアンヌ様か？ まさか、そんな筈がない。期待しているんだよ、お前に。」

「……私に……？」

「ああ、お前は筋が良い。KMFの操縦にしろ、剣の扱いにしろ。そのまま、騎士侯としての道を進めば、閃光にも届くだろう。」

「……………」

「確かにあの方は厳しい。しかし、それはお前だけに対してではない。ルルーシュだつて、泣かされていたぞ。」

泣いていた少女は目を丸くする

「お兄ちゃんが……？」

「アルカ。兄上、だ。」

コーネリアがアルカを咎める。

その言葉を聞き、彼女はぼつが悪そうな顔をし、兄上が、と言い直した。

「ふっ……。座学で……だったかな。ルルーシユも苦戦している様だ。マリアンヌ様の厳しきは、全てお前達の為なんだよ。」

「ブリタニアに、貢献できる様に……？」

「違う、まあ結果的にはそうなるだろうが。弱肉強食のこの国で、お前達が生きていける様に、だ。」

「……………随分懐かしい、夢。」

上半身を起こす。

母上の指導に根をあげ、ヘソを曲げていた時の光景。

異母姉であるコーネリアが、彼女なりに慰めてくれたのを良く憶えている。

(私に対しては、特に気に掛けてくれていたっけ)

横で眠るC・Cへ視線を向ける。

布団の端から白い肩が見えることから、服を着ていないのが分かる。ふと、肌寒さを感じ、自身の身体を確認する。

私も着ていなかった。

重力に従って落ちた布団を手繰り寄せ、部屋にある時計を確認する

時刻は早朝、5時ちょうど。

学校行く準備をするには、早過ぎる時間だ。

「かといって2度寝するのもなあ……」

私は寝起きがあまり良くない。

今から寝てしまったら、確実に、寝坊する自信がある。

「……ふああ……」

しかし、眠い。

昨晩は寝れなかったから。横で心地良さそうに眠る、彼女の所為で。

(まあ、私が起ききれなくても、兄上が起こしてくれるでしょ。)

他力本願思考に切り替えた私は、再び布団に入り込み、C・Cに身体を寄せる。

ほどよく温かく、心地良い。

瞼が、重くなってきた……

数時間後。

結果、兄上は起こしに来ず、私は盛大に遅刻した。

あの魔女、人払いは事前にしつかりしていたらしい。

◇◇◇

クラブハウス ルルーシユの部屋

「組織が必要だ。」

部屋の主は重々しい口調でそう呟いた。

「ゼロを信用し、命令を忠実に遂行する組織が。」

「コーネリアに無様に負けたと思ったら、次は妹に泣きつくとは。情けない男だ。だから言っただろう？アルカも使えと。」

「黙れ魔女。」

話を聞くと、兄上は一人でサイタマゲットーに向かい、コーネリア軍と戦闘。

シンジユクの様子に、現地のテロリストに指示を出すも、統率が取れず惨敗。

窮地に陥った時、ゼロに紛したC・Cに助けられた……らしい。

「ゼロを信用……という点では、扇さん達が一番適してると思う。シンジユクとスザクさんの件もあるし。それにKMFの扱いもマシだしね。」

「お前が教えたんだっけか。」

「うん、あとカレンも一緒に。」

「……そうか。」

あのブリタニアと戦争するのだから、KMFくらいは扱ってもらわないと困る。

そう思つて、扇さん達には操縦訓練をほぼ毎日、やって貰っていた。

それが役に立ちそうで何よりだ。

「……アルカからして、扇グループはどう見える？」

「扇さんに対する信頼と、カレンのKMFの操縦技術だけで成り立っている……感じかな。」

実際に、扇さんに対する信頼は厚い。

元々知り合い同士だったのだろう。

玉城さんは……まあ除いて、割と全員、扇さんに対してはイエスマンな部分はある。

「……紅月カレンの操縦技術は間違いないんだな？」

「本国でもそうそう見ないくらいには。」

「……そうか。リーダーの扇さえ抑えれば、どうにでもなりそうだな。」

「間違い無く。」

兄上の目に覚悟が宿る。

そんな彼を見てC・C・はやれやれ、と肩をすくめた。

◇◇◇

電車の窓からゲッターが見える。

倒壊した建物、幽鬼の様に歩くイレヴン達。

(…………ゲッターの姿は、何処も変わらないね)

外の景色を眺めていると、

「私、トウキョウ租界を出るのって初めてなんですよ!」

目の前から興奮を隠し切れない、といった様子声が聞こえた。シャーリーさんだ。

「ルルーシユも来れると良かったのにねえ。」

私の隣に座るミレイさんは、意地悪な顔をしている。

「な……………」

「良いではないか。今宵は語り明かそうぞ。好きな男の子、教えあつたりさあ!」

「そんな人居るの…………?ミレイちゃん……………」

ミレイさんの発言にすかさず、ニーナさんが突つ込む。

私も、ミレイさんには居ないと思う。

「ふふ、さあねえ。」

私達4人は今、河口湖にあるコンベンションセンターホテルに向かっている。

なんでもサクラダイトの分配レートを決めるサクラダイト産出国会議が開かれるらしい。

サクラダイト――

エリアーで多く取れる鉱物資源。

主にKMFの動力炉であるドライブの触媒として使われており、ブリタニアが日本を侵略したのも、これが目的だったと言われている。

アッシュフォード家は、エリアーにおけるサクラダイト利権を握っている家系の一つであり、ミレイさんはアッシュフォード家の代表として参加するらしい。

会議と言っても、あらかじめ決定されている事項を確認するだけの場らしく、後にかれるパーティーが、殆どメインになっているとか。

そこで、1人で行くのは詰まらない、と考えたミレイさんは私達の声を掛けた。

(……でも、なんで私まで……)

本来だったら今日は、ゼロと扇さん達の会合だったのに。

私はそつちに参加するつもりだった。

誘われた事を話したら、兄上にも、姉上にも、扇さんにも、カレンにも！

皆が皆、口を揃えて、「たまには行ってこい」って言うんだもの。

ちなみにC. C. だけは渋っていたが、最終的には「……まあ、一泊くらいは許してやろう。」と言ってきた。

(止めて欲しかった……)

結局、私はミレイさんやシャーリーさんの押しに負けて着いてきた。

どうも昔から、人の頼みに弱い。

「それにしても、アルカが来れて良かったわあ！ルルーシュ、口煩いったらなんの……」

「兄上、心配性だから……」

「まあ、こんな可愛い子が妹に居たら分かるけどねえ。」

おりやおりや、と言いながらミレイさんは、私の頭を撫でる。

兄上が念入りにミレイさんに確認していたのも知っている。

メディアの参加はあるか、どんな貴族が来る、ホテルのセキュリティ、治安etc

……

素性が素性だから、気にするのも仕方が無い。ミレイさんもそれは分かっているだろう。

……聞かれた後、やつれた顔していたけど。

結果的に、兄上チェックリストは合格した様だった。

「アルカってこんなに可愛いのに、浮いた話、一つも無いの？」

「ないよ……私の学校での話、聞いているでしょ?」

「ええ! 気になる男の子とかは!」

ミレイさん、シャーリーさんが矢継に質問してくる。

ほんとに恋愛話好きだよね……

男の子…男の子かあ……居るわけが無い、だって

「居ない。だって私、男に興味無いもん。」

「「え?」」

3人の声が社内に木霊した。

◇◇◇

(……………最悪)

恐怖で震えるニーナさん。

それを優しく抱きしめるミレイさん。

恐怖を必死に堪えているであろう、シャーリーさん。

ニーナさんに習って、肩を震わせ、シャーリーさんに抱き着く私。

周りには怯える顔をしたブリタニア人達。

今この場に、ホテルの食糧庫に連れてこられた人質だ。
ブリタニア人

「諸君らは民間人であり、本来は巻き込むべきではない者達ではあるが……」
男が口を開く。

「我々の日本を占領した、悪しき民族である事には変わりない。」

後ろにきつちりと固めた黒髪。横に携えた日本刀。

「私は日本解放戦線中佐、草壁である。悪いが協力してもらおう。」

旧日本軍の生き残りで構成された、エリアーで最大のテロ組織。

日本解放戦線。

私達は今、彼らが起こしたホテルジャックの人質としてこの場に居る。

(本当に、最悪。)

ブリタニア軍に人質の映像でも、送り付けるつもりなのだろう。

クサカベと名乗った男の横に、カメラを持った兵士が居る。

この映像をコーネリアが観ると考えると、下手に映る訳にはいかない。

あれの所為で私は顔を上げることが出来ず、シャーリーさんの胸に顔を埋め、怖がっている演技をするしか無い。

怯える私を哀れんで、シャーリーさんは背中を撫でてくれる。

(……子どもで良かった……)

こうしている内は、日本解放戦線も私に突つかかかって来ない。

今だけは実年齢に感謝である。

(カメラだけだったら、適当に隙を見てどうにかするんだけど……)

いつまでもこうして撮影するわけでは無いだろう。

ブリタニア軍との交渉もあるんだ、人質ばかりに人員を割くわけが無い。

カメラより問題なのは、この部屋に居る少女。

腰まで届くピンク色の髪。今は変装の為なのか眼鏡を掛けている。

ブリタニア第3皇女 ユーフエミア・リ・ブリタニア。

現総督、コーネリアの他にもない、妹である。

(こんな小さいパーティーに、皇族が自ら来ないでよ……)

大方、ユフィ姉様が行きたいとでも我儘を言ったのだろう。

昔からそういう傾向はあったが、今も健在らしい。

市民との距離を詰めようとする皇女様、というのも困ったものだ。

とにかく、仮にカメラが無くなるうとも、彼女が居る限り、私は行動できない。

意外と記憶力の良い彼女の事だ。すぐに私だつてわかるだろう。

(はあ……誰か助けて……)

彼女さえ居なければ、ギアスでどうとでもするのに。

ここに集められて何時間経っただろうか。

まだ数分の事にも思えるし、数時間経ったようにも思える。

「人質を1人殺したくらいで、交渉には応じないか。仕方ない、2人目だ。」

今から15分事に1人ずつ殺していく、と言われてから30分が経過したらしい。

「人質の映像はもういい、その代わり、殺す時の映像を撮っておけ。ブリタニアに我らの覚悟を思い知らせるんだ。」

ユフィ姉様の方へ、視線だけ向ける。

何やら隣に居る女性と言いつ合っている様だった。

SPだろうか。私が名乗り出ます、とか言っつていそう。

「イ、イレヴン………」

ふと、か細くて震えている声が、狭い室内に反響した。

ニーナさんの声だ。

「今、なんと言った!?!」

兵士は銃をこちらに向け、激昂する。

「イレヴンだと?我々は日本人だ!!」

「分かってるわよ！だからやめて！」

「訂正しろ！我々はイレヴンではない！」

兵士に対し、ミレイさんが声をあげる。

ニーナさんの幼馴染としてか、彼女本来の正義感からか。私には判断出来ない。

けど、これは非常に不味い。

この密閉空間に加えて、人が死んでいるんだ。人質達のストレスも溜まっている。

それに兵士達側も相当なものだろう。

これだけの規模のホテルハイジャックだ、軍が出てこない筈が無い。恐らく、ホテルの周りにはコーネリア軍。テロリストからしてみれば、いつ攻めてくるか分からない。

そんな両者緊迫した中で、ニーナさんが爆弾を投下してしまった。

簡単には収まらないのは明白。

「訂正するから!!」

私の頭の上で、声が上がった。

シャーリーさんの私を抱きしめる腕に力が入る。が、震えている。

(……………)

怖いのだろう。触れてる部分から気持ちいが伝わってくる様に、ハッキリとわかる。

「なんだその言い方は!?お前達、隣の部屋に來い！きっちり教え込んで……………」

「っ！いい加減に——」。

留まる事無く、ヒートアップする日本兵士にギアスを使おうと言葉を紡ぐ——
「おやめなさい!!」

ことは無かった。

突如、響いた凜とした声に、遮られたからだ。

「なんだ貴様!!」

「私を、貴方達のリーダーに会わせなさい!」

「何?」

「私は、ブリタニア帝国第3皇女 ユーフミア・リ・ブリタニアです。」

辺りがざわつく。

それもそうだ、今まで表舞台に立つ事の無かった、第3皇女。

エリアーの現副総督が、こんな所に居るのだから。

「貴女、大丈夫? 怪我はない?」

場違いな程に優しい声で、ユフィ姉様はニーナさんに問いかける。

「は、はい……。」

ニーナさんは、まるで神を崇めるかの様な顔で、暗闇の中から光を見つけた時の様な表情で、彼女を見つめている。

「…草壁中佐がお会いになるそうだ……」

「ありがとうございます。私がここから離れている間は人質に手を出さないと、約束して頂けますか？」

「ああ、わかった。」

ニーナさんに話している間に、通信機でクサカベに報告したらしい兵士がユーフェミアを連れていく。

ふと、私の前を通り掛かった時、足を止めた。

「あら……？ 貴女……」

シャーリーさんにしがみつき震えている…様に見える私の頭に手を乗せ、そのまま撫で始めた。

「ごめんなさいね？ 妹に似ていたものですから、つい……」

「おい、早くしろ！」

痺れを切らした兵士が声を荒げる。

「大丈夫よ、安心して。私が何とかしてくるから。」

「……………」

頭の上の温もりが消え、足音が遠くなっていく。

クサカベの元へ向かったのだろう。

(…何も……変わらない………)

その真つ直ぐな優しさも。考えるよりに先に行動してしまう所も。

「おい、その子ども。次はお前だ。」

そんな貴女だから。

「ちよつと！約束が違うじゃない!!」

「手出しはしない。連れて行くだけだ。まあ尤も、さっきの皇女様がダメだった時の保険としてだがな。相手は血も涙も無いブリタニア人だ。これくらいの事をして罰は当たらないだろう。」

「あんだ達ねえ……!」

そんな貴女だから、嫌いになれないんだ。

「…わかりました。」

兵士に食らいつく、ミレイさんとシャーリーさんを静止させる。

「ほう?」

兵士は少々意外そうな顔をして私を見る。

「大人を殺しても埒が明かない。子どもを殺す事で、ブリタニア軍に与える印象を強くしよう……と?」

下種め。

「アルカ!？」

「……私一人の存在で、貴女達が助かるのなら、それで良い。」

「……………え？」

まあ、勿論死ぬ気は無い。

まだ私の望む世界を創っていない。

だが、これも嘘ではない。大切な人達は守らないといけないのだから。

「でも、大丈夫。私は死なないよ。」

そう言葉を残し、私は部屋を後にした。

目の前には銃を持った兵士一人。

(世話が焼けるお姉ちゃんだな……………)

私は兵士に気付かれない様、溜息を付いた。

Stage 8 黒の騎士団

「ねえ。」

目の前を歩く日本兵士が私の方へ向く。

「私の質問に、答えてくれませんか？」

・
・
・

コンベンションセンターホテルの客室。

一人の少女がベッドに腰掛け、足をぶらぶらと忙しなく、動かしている。

少女の目の前には、軍服を着た男が、正座している。

異質な光景だ。

足を遊ばせている少女の手には、目の前の男から奪った拳銃。

「。という状況だ。」

彼が知りうる状況を、粗方聞いた。

外には案の定、コーネリア軍。

中にはゼロの一団。

地下では、ブリタニアの新型KMFが現在、戦闘中。……兄上が言っていた「白兜」だ
ろうか。

「ユーフエミアが連れて行かれた場所は？」

「25階のスイートルームだ……」

「ふーん、そう。ありがとう」

「もう、いいのか？ じゃあ、お前は屋上に……」

「うん、もういいよ。バイバイ。」

彼の眉間に銃口を向け、ためらう事無く、引き金を引いた。

火薬の臭いと鉄の臭いが辺りに充満する。

さつきまで人だったモノに視線を向ける。私が殺めてしまった日本兵士。

「……………ごめんね。」

何に対しての謝罪なのか、私にもよく分からなかった。

自然と口に出してしまった、それだけだ。

(さて、と。これからどうしようかな。)

今は変装出来る道具も持っていない。被害者として軍に救出されてしまえば、メデイ

アによって確実に世間に晒される。

ゼロ：兄上なら、私を匿ってくれ。この場での最善の行動は、ゼロ達に合流するのが一番良いだろう。

しかし

「妹に似ていたから、か。」

先ほどのユーフェミアの行動を思い返す。

考え無しで、直感だけは鋭くて、どこまでも優しい彼女。

「25階……か……」

私は階段へと足を運んだ。

◇◇◇

『死ね。』

こいつらは救えない。

日本解放戦線のクサカベ、もし彼らの元に正義があれば、と淡い期待をしていたが、やはり無駄だった。

なにより、俺の妹を巻き込んだんだ。償ってもらおう必要がある。

(その命で。)

なに、無駄死にはしない。利用してやるさ、演出としてな。

目の前に居るクサカベと兵士達が、自身の持っている銃と刀で自害する。

「中佐！」

銃声を聞き、外の兵士が声を上げ部屋に入ってきた。

その後ろにはユーフェミアが。

『落ち着け。』

「ゼロ……」

『中佐達は自決した。行動の無意味さを悟ったのだ。』

「……………」

『ユーフェミア、民衆の為に人質を買って出たか？相変わらずだな。』

え？つとユーフェミアは目を丸くする。

（そう、何も変わらない。昔から。）

昔から彼女は、考えより身体が先に動く人間だった。

そしてその行動に、悪意も下心も無い。

俺やシユナイゼルとは違う。

「ゼロ！」

作戦を終えた扇達が駆けつける。

『そこに居る兵士達を連れて行け。私は彼女と話がある。』

「あ、ああ……。わかった。」

『紅月は部屋の前で待機だ。持ってきた荷物もお前が持っている。』

「了解しました、ゼロ。」

しばらくして、部屋に静寂が訪れた。

『…さて。副総督に就任されたと聞きました、ユーフェミア皇女殿下。』

「喜ぶことではありません。」

『そう、クロヴィスが死んだからです。私が殺した。』

異母兄の光景が目には浮かぶ。始めて人を殺したあの時の。

『彼は最後まで私におもねり、命乞いをした。イレヴンを殺せと命じたその口で。』

「だから兄を殺したのですか?」

ユーフェミアの表情に怒りの色が浮かぶ。優しい彼女の事だ。異母兄とは言え、クロ

ヴィスに対しても情を持っていたのだろう。

『…いいや。』

「では、なぜ!?!」

『あの男が、ブリタニア皇帝の子どもだから。……そういえば、貴女もそうでしたね。』

一つの足音が廊下に響く。

(まだ、日本解放戦線の生き残りが……)

赤い髪の少女。紅月カレンは、音のする方向へ銃を向ける。

視界に人の姿は無い。

しかし、足音は依然変わらずペースで、近づいてくる。

(あそこの曲がり角か……)

ゼロからの指示は、部屋の前で待機。

邪魔者が来た場合に始末しろ、という事なのだろう。

(彼女だったら良いんだけど……)

銃を持つ手に力が入る。

人質の中に彼女の姿は無かった。兵士に連れていかれたらしい。

しかし、制圧した日本解放戦線のメンバーは、誰も彼女の所在を知らなかった。

焦燥と不安が無い訳では無い。

しかしゼロは言った、彼女を信じよう、と。

(でも、ゼロってアルカに信頼置く程、関わりがあつたっけ?)

いや、今はそんな事考えるな。

もし、足音の正体が敵だとしたら、私は引き金を引かなければならない。
廊下の角から、小さい人影が現れた。

「あれ、カレン一人？」

幼いながらも、凜とした綺麗な声。

「……アルカ!!」

思わず銃を投げ出し、彼女に駆け寄り、抱きしめる。

「良かった……! 無事で!!」

「わわ、よしよし……」

彼女は小さい身体で、私を受け止め背中を撫でる。

普通逆では……と思わなくも無いが、今はそんな事いい。

事が事だ、いくら彼女とは言え、心配だったのだ。

「……カレン……? 私、血生臭いから、出来れば離れて欲しいなあ……」

アルカにそう言われ、彼女から血の臭いがする事に気付く。

「血……? 怪我してるの!?!」

「違う違う。返り血だよ。ここに来るまでに何人か、ね。」

そう言いながら、彼女は手に持っている拳銃をヒラヒラとさせる。

彼女の来ている白いワンピースは、返り血でベツタリだ。

まあ、怪我が無いなら良かった。

……後でお説教だけど。

「それで、ゼロは？この中？」

「ええ、そう。ユーフェミアと話してる。」

ユーフェミアと一緒に……、と眩き、考え込む。

「ああ、そうだ。ゼロからの預かり物。貴女の荷物よ。」

ゼロから渡されたアタツシケースを彼女に渡す。

「これは……制服と、仮面？」

「そう、私達のお揃いの。これを着て人質としてでは無く、ゼロの部下として脱出しろ、だつてさ。」

「なるほど……気を利かしてくれたのか。」

有難い、と言いながら、アルカは制服と仮面を取り出し、着替え始めた。

◇◇◇

轟音を立てて、ホテルが崩れる。

視線の先には、僕を助けた仮面の男。

「ゼロ………」

自分に与えられた任務。

ホテル地下に続く、搬入口に突入後、ホテルの基礎、ブロックを破壊する事。

その後は、別部隊が混乱に乗じて、テロリストを掃射、人質を救出という作戦だった、しかし。

少なくとも、アルカ。ルルーシユの妹だけは、僕の手で救わなければならない。

コーネリア殿下の目にも止まったら、彼らの生活は壊れてしまうのだから。

だから僕は、作戦を完遂した後も、待機命令を無視して突入した。

でも、確認出来たのは、彼女では無く、ゼロ。

視認したと同時に、爆発音が鳴り響く。

「まさか………」

ブリタニア軍の想定では、ホテルが完全に崩壊するまでは8分。

それをゼロが横やりを入れてしまった。

(これじゃあ………)

ホテルの崩壊は加速する。

ブリタニア軍が突入することが出来ない、それに、アルカを探す時間が無い。

怒り、悲しみ、絶望。様々な感情が僕を襲う。

「…救え、なかった…、俺は、また!!!」

感情に任せ、操縦桿を叩きつける。

学園の皆に、どう顔を合わせればいい？

ルルーシユやナナリーに、何て言えばいい？

昔とは違う、やれるだけの力はあつた。なのに。

「クソ!!!」

少年の悲痛な叫びは、誰にも聞かれる事は無く、闇に溶けた。

『人々よ！我らを恐れ、求めるがいい。我らの名は、黒の騎士団！』

仮面の男、ゼロは雄弁と語る。

『我々、黒の騎士団は、武器を持たない全ての者の味方である。イレヴンだろうと、ブリタニア人であろうと。』

コーネリアは、彼をただのテロリストと吐き捨てた。

『私は戦いを否定しない。しかし、強者が弱者を虐げる事は、断じて許さない！』

ユーフェミアは、困惑した表情で彼を見つめる。

『撃つて良いのは、撃たれる覚悟のあるやつだけだ!』

枢木スザクは、その顔に怒りの表情を浮かばせている。

『我々は、力ある者が、力無き者を襲う時、再び現れるだろう。』

彼の傍で、紅月カレンは、複雑そうに眉間に皺を寄せる。

『力ある者よ、我を恐れよ。力無き者よ、我を求めよ。』

ゼロの傍で佇む仮面の少女。アルカは、口角を上げ、口元を歪ませる。

『世界は我々、黒の騎士団が、裁く!!』

ゼロ——ルルーシユは、自身に言い聞かせる。

もう後戻りは出来ない、と。

日本解放戦線が起こした、ホテルジャック事件。

手をこまねいていたブリタニア軍に代わり、ゼロが率いる黒の騎士団が人質を救出した。

そこで彼は高らかに、自らの正義と黒の騎士団の結成を口にした。

この事件をきっかけに、黒の騎士団は今日まで、名を轟かせる事となる。

そして、その傍らで佇んでいた仮面の少女、皇アルカ。「背信の魔女」として悪名高い

彼女が、初めて表舞台に立ったのもこの事件である。

英雄ゼロの傍らで、その仮面の下で何を考え、感じていたのかは誰も知らない。

—— A・A 著書 「帝国の崩壊」 第2章より抜粋

◇◇◇

「ありがとう、助けてくれて。」

黒の騎士団がアジトとして使っているトレーラーの一室、ゼロの部屋で少女はお礼を口にした。

「なに、無事で良かったよ。」

それに答えるのは、ゼロ——ではなく、仮面を外したルルーシュ。

妹の前だからと冷静を装っているがこの男、仮面の下では冷汗を流し、内心焦りまくっていたであろう。

「だから、言つたろう？こいつは大丈夫だと。それをするだけの力も、技量もあるのだから。」

「そうは言つても人質として救出されたら、コーネリアにバレるだろう。ゼロの配下としてあの場を去る為にも、制服と仮面を渡す必要があつた。」

「それは建前だろう？……シスコンめ」

「黙れピザ女」

全く…妹の前くらい、見栄を張らずに、心配で死にそうだった、と告げればいいものを。

「まあまあ…こうして助かった訳だから………ん？」

ふと、アルカのケータイが震える。

画面を除くと、何件もの着信が。

枢木スザク、ミレイ・アツシユフオード、シャーリー・フェネット……

アルカの学友達か。

「俺は扇達の所に行ってるから。一度も連絡してないんだろ？皆、心配してるんだよ。」

ルルーシユの優しい、甘ったるい声が響き渡る。

普段とのギャップがとても気持ち悪い。

「う、うん。適当に言い訳作って、無事って伝える。」

そう言つてアルカは電話に出た。

あれやこれや、とその場でそれらしい言い訳を作つて、対応している。

ルルーシユは仮面を被り、下の階へと向かった。

(暇だな……)

この部屋からは出るな、と口煩い坊やに言われてるし、アルカは電話で私に構えない

し。

おい、電話をそうそうに切りあげて、私の相手をしろ。

そんな気持ちを入れて、電話中の彼女にちよつかいを出す。

私のちよつかいに対して反応を示す、アルカが面白く、可愛い。

(これは、いいな……)

この後、アルカに怒られた。

stage 9 枢木スザク

その後の黒の騎士団の活躍は目まぐるしかった。

民間人を巻き込むテロ、横暴な軍隊、汚職政治家、企業犯罪組織……ゼロの宣言通り、人種関わず、悪を一方的に断罪していった。

あつという間に黒の騎士団は英雄と担がれ、協力者も増えた。

なにより一番大きいのは、キョウトからの協力が得られたことだ。

キョウト――

敗戦国となった日本において、真つ先にブリタニアの軍門に下った日本の旧財閥。

イレヴンのブリタニアに対する反感を沈める為に一役買ひ、エリアの平定に努めた。

それ以来、日本人でありながら、ある程度の権利が与えられている。

というのが表向きのキョウト。

実際は、ブリタニアへ武力による抵抗活動を行っているエリアーの複数の武装勢力へ、兵器などの支援を行っている。

早々にブリタニアを受け入れたのも、内部からの崩壊を謀つての事なのだろう。

まあ、私から言わせれば売国奴だ。

話を戻そう。

キョウトからの支援が得られたことで、黒の騎士団はKMFを手に入れた。

ブリタニアのグラスゴーを改造し、コピー生産をした無頼。

そして、純日本製のKMF、紅蓮二式。

先日のリフレインの一件で、グラスゴーを失った私達にとつて、僥倖だったと言える。

そんな黒の騎士団は、今日も悪を裁く為、活動を続け…………

「眠い。」

アッシュフォード学園中等部の廊下を、一人の少女が歩いている。

指定の制服に、自身の私服であるパーカーを羽織り、その目に隈を作らせて。

「もう限界、帰って寝る。」

一人眩きながら、誰も居ない廊下を進む。

向かう先は自身の部屋があるクラブハウス。

時刻は11時過ぎ。

本来だったら授業を受けている時間帯だ。

いわゆる、サボリである。

「毎日、名を上げる為に夜通し活動して…………。活動無い日は、皆の操縦の面倒を見て…………。

最近はカレンのお悩み&決意相談会……。日中は怪しまれない様、学校……。」「
思った以上にきつい。とアルカは思った。

「カレンと兄上は、どこにそんな体力が……。」「

この少女は、2人が真面目に授業を受けている、と思っっている。

しかし、実際は2人とも爆睡しており、授業の内容を何一つ聞いていない。

寝不足で朦朧とする意識を、保ちながら何とか自室まで帰ってきた。

扉に手を掛け、開けると。

「アルカ？」

C・C・C がベッドの上で寝転がりながら、本を読んでいた。

「あ、……。ただいま、C・C・C。……」

「どうしたんだ？こんな時間に。今はまだ授業……。」「

言葉を遮り、C・C・C の横へ倒れ込む。

彼女の着ているシャツを握りしめ、目を閉じる。

「授業……。今日は無理……。眠い。一緒に寝……。」「

・
・
・

すやすやと心地良さそうに寝息を立てて、寝ているアルカ。
そんな彼女の上に乗る、その細い首に手を掛ける。

「……………、はあ」

が、指に力を入れることは出来なかった。

「ああ……………分かつているさ。それでも……………」

彼女の首から手を放し、あいつに意識を向ける。

「なに？……………そんなことは……………そうか…わかったよ……………」

アルカの頭に手をやる。

艶のある髪が手触りが良く、つつい撫でてしまう。

「ああ…。お前の口車に乗ってやるよ…。……………マリアンヌ。」

◇◇◇

「この国は、キョウト六家の妖怪共に支配されている。」

恰幅の良い、日本人の男は語る。

「総理になってもこの様だ。権力を手に入れたとて、実際は妖怪どもに握られている。

それが国だ。昔から、何も変わらない。」

その陰湿な声は、薄暗い部屋にピツタリだ、と思った。

「だから、変えなければ。如何なる手段を使おうとも……。それがブリタニアであつてもな。」

傍で話を聞いていた少年は、目を丸くする。

「そ、その為にブリタニアと戦争を……？」

「ワシはマスメディアを煽つて、反ブリタニアの世論を作つたのに過ぎん。あとは日本国民の意志よ。」

日本は、民主主義だからな。

男はそう言い、煙草を吹かす。

「後、預かつているブリタニア皇族だが。取引先との要望でな。始末する事にした。全く、ブリタニアの身内争いは見るに堪えんな。」

少年は信じられないモノを見る様な目で、男を見つめる。

「兄の方は残しておくか、今後の保険として使えなくも無い。」

「まさか……それで………」

「植民地となつた後の日本を統治する為に、な。これであの妖怪どもから解放されるといふ訳だ。お前も総理の子なら、覚悟を決めよ。ワシと共に覇道を歩め。」

少年の顔がみるみる歪んでいく。

失望、憤怒、憎しみ。それらが入り混じつた表情をしている。

「父さん……、やめてください。戦争は………」

「ふん、一体何を聞いていたんだ？ここまで来て引くわけにはいかないだろう。」

男は少年の願いを一蹴する。

「お願いです、お願いです、今からでも遅くは無い……」

「くどいぞー！」

男は少年を突き飛ばす。

突き飛ばされた先の机に、背中を強打したらしく、席込んでいる。

「全く、何の為に話したと思っっているんだ……。スザク、自身の願いを叶える為には、過程など気にしてはいけないのだ。」

男はそう言い残し、部屋から出ようとする。

少年はゆらり、と立ち上がり、後ろの机に置いてあるモノに手を伸ばす。

ナイフだ。机の上の皿に乗っている果物を切る為の。

「なら……父さんをここから出す訳にはいかない……」

ナイフを構え、少年は走り出す。

男のふくよかな腹に向かって、ナイフを突き刺す。

「ぐ……はっ。ス、スザク。お、まえ………」

「出ちやいけないんだ」

少年の眩きを最後に、部屋に静寂が訪れた。

・
・
・

「っ!？」

余りに鮮明な夢に、思わず飛び起きる。

「今のは……………」

胸の鼓動が早い、寝ていただけなのに息遣いも荒い。

身体は寝汗でびっしょりだ。

頭に痛みを感じ、手で押さえる。

「…何故、彼が夢に……………」

その疑問を答える者は居ない。

C・C・と私以外に部屋には誰も居ない。

その彼女も隣で寝ている。

「そもそも、夢、なの……………」

夢だとしたら鮮明過ぎる。

彼の記憶…と言った方が、まだ納得できる。

しかし、そうだとしたら、分からない。なぜ、彼なのか。
「……枢木スザク……」

◇◇

アツシユフオード学園 生徒会室

「アルカはどう思う……？ 黒の騎士団を……」

「何？ 藪から棒に。」

生徒会のお手伝いを頼まれ、生徒会室に行ったらスザクしか居なかった。

昨日の夜に見た夢の事もあり、何となく、気まずくて。

皆が来るまでは黙っておこう、と思っていたところ、彼から話かけてきた。

「ほら、君は黒の騎士団に助けられただろう？ どんな印象だった？」

この人は嘘を付けない素直な性格だ。

この質問は軍人としてでは無く、彼個人の純粹な疑問だろう。

「宣言する様に、正義の味方……って印象だったよ。ブリタニア人の私も邪険に扱わなかったし。今やっている事も、テロリストというよりは警察だしね。」

「それなら何故彼らは警察に入らなかつたんだろう？」

「組織に染まるのが嫌だったんじゃない？ 実際、今の警察は腐っているし。」

「今はダメでも、徐々に内部から変えていけばいいじゃないか！」

私は目を細くめる。

「今の貴方と同じように？」

「……………っ！」

「いや、実際にスザクの存在が軍に対して、どう影響を及ぼしているかは知らないけど、今の言い分を聞くに、そういう想いを抱いて入ったんでしょ？」

「……………ああ、そうだ。ルールに従わないと。ズルして手に入れた結果なんて、意味がない。」

「……やけに潔癖だね。まるで昔にルール違反をしちやつた様な言い方。」

スザクの顔が曇る。

「……………僕は……………」

この反応、あの夢は事実って考えていいかもしれない。

しかし、そうなると、次の問題は彼の記憶を私が見た理由だ。

それが分かるまでは、胸に閉まっておいた方がいいかな……………

「まあ間違いにしろ、正解にしろ。結果は結果。その結果に少なからず救われた人も居るでしょう。例えばホテルジャックの人質とか。イレヴンとか。」

「アルカ……………」

「正義なんて結局は、その人次第なんだから。自身の正義に準じればいいと思うよ。」
スザクとの論争は平行線と判断し、私は席を立つ。

「何処へ？」

「まだ皆来ないし、喉乾いたから。飲み物買ってくる。スザクも何かいる？」

「アルカ……、君はサボリ癖があるってナナリーから聞いてるんだけど……………」
疑わしそうな目でスザクは私を見つめる。

「大丈夫だって、生徒会のお手伝いは、サボらないからさ。」

そう、言い残し生徒会室を後にする。

「ルール、か……………」

廊下に私の独り言が響く。

「私はもう既に、外れちゃってるからなあ。」

彼が知ったらどんな顔をするだろうか。

そんなことを思いながら、購買に向けて足を進めた。



黒の騎士団 アジト KMFフレーム格納庫

「…武装は……呂号乙型特斬刀、43mmグレネードランチャー、スラッシュハーケン……それに輻射波動機構。」

赤いKMF…紅蓮二式のコックピットで、一人の少女がマニュアルを読みながら、モニターを弄る。

「機構内で高められた高出力の電磁波を高周波として放つことで、膨大な熱量を生み出す……。電子レンジみたいなモン？」

独り言を言いつつも、モニターを弄る手は止まらない。

「とりあえずカレンの身体能力に合わせて反応速度を設定して…。操縦桿の感度は…まあ本人にやらせた方がいいか。それから………」

「おい、アルカー!!」

「ん?」

呼びかけに応じ、アルカはコックピットからひよっこりと顔を出す。

「玉城さん?」

「相変わらずKMF弄ってんのか?」

おちやらけた態度、軽い口調。しかし、面倒見が良く、慕う物も少なく無い。

黒の騎士団初期メンバー、玉城が後ろに何人かを連れてやってきた。

「私とゼロ以外、KMFを碌に弄れないじゃないですか。だからやってるんです。人を機械オタクみたいに言わないでくださいよ」

そう言いながらアルカはコックピットから降りてくる。

黒の騎士団はゼロとアルカ以外、まあ厳密に言えばカレンもだが。イレヴン…つまりは日本人で構成されている。

しかも殆どは、元民間人。当然、KMFに関わる機会は無かった。

しかし、ゼロ、ルルーシユとアルカは、幼い頃からKMFに乗っている。

ブリタニア皇族は有事の際、戦場に赴く事が多い。場合によってはKMFに乗って戦う可能性もある。その為、幼少期の頃から、こういった指導をされているのだ。

そうした背景から、ゼロとアルカは黒の騎士団のKMFのメンテナンスを請け負う事が多い。

「ところで、この用件は？」

「ああ、後ろのこいつらがな。KMFの乗り方について教えて欲しいんだとよ。」

「彼らは？」

「新入りだよ、新入り。つまりは俺の後輩だ。」

今は紅蓮の設定で忙しいし、何よりめんどくさい。

もう皆、人並には乗れるんだし、私に頼らなくても……

「玉城さん……すみませんが。今、手が離せなく………」

『アルカ。』

もう一人の声加わる。

『少し話があるのだが……』

ゼロだ。後ろにはカレンと扇さんも居る。

「急用？」

『ああ、出来れば。』

「あーすみません、玉城さん。また今度っていうことで……。玉城さんが教えてあげてくださいよ。ちゃんと乗れるんですから」

そう告げると、顔を明るくして「しょうがねえな！」と言い残し、彼らはこの場を去った。

……扱いやすい。

『浮かれているな。玉城はともかく、騎士団全体が浮ついている』

ゼロの言う事も、最もだ。

キョウトからの支援が決まり、組織として成長を遂げた黒の騎士団は、今は民衆にとつての英雄。

その事実、鼻が高くなっているメンバーが大勢居る。

「…それで、話というのは？」

『ああ、すまない。扇、彼女に。』

扇さんからタブレットを受け取る。

そこにはコーネリア軍の動向と、情報提供者の情報が表示されている。

デイトハルト・リート、情報提供者の名前だ。

メディアの人間らしい。

「入団希望のブリタニア人からの情報なんだが。週末にナリタ連山で、大規模な掃討作戦が行われるらしい。」

「ナリタ…って言うと、日本解放戦線の本拠地があるって噂の？」

『ああ。』

「いいね、行きたい。」



アツシユフォード学園 プール

飛び込み台の上からC・C・が飛び込む。

プールサイドには、パソコンを弄っている私服のルルーシュ。

その近くで、プールに浸かりながら淵に肘を付き、ルルーシュと話すアルカ。

夜の帳がすっかりと落ち、誰も居なくなつた学校で、3人は各々の時間を過ごしている。

「ディートハルト・リートは主義者かな？」

「どうかな、ただスパイとしては堂々とし過ぎている。まあ少なくとも軍の動向と辻褃は合う。ナリタの件は信用して良いかもな。」

「結構な事だな、入団希望者も増えて。」

飛び込みに飽きたらしいC・C・Cが私の傍へやってくる。

(……ちよつと……C・C・C……)

(ふふ、いいじゃないか……)

兄上から見れば、いつもの様にC・C・Cが私を抱きしめている様にしか見えないだろう。

しかし、見えない部分。

私の脚に、自身の脚を絡ませ、手の位置はお腹の少し下の鳩尾あたり……くすぐったいし、恥ずかしい。

「おい……あまり、アルカにちよつかいを出すな。悪い影響が出そうだ。」

顔をしかめ、兄上はC・C・Cに言う。

それを聞き、彼女は愉快そうに口元を歪める。

どうせ、「もう手遅れだ。」とか考えて、悦に浸っているのだろう。

「週末はナリタに向かうんだったな？」

「ああ、コーネリアの軍に横やりを入れてくる。」

「ふ、本当にそれだけか？ そんな顔には見えないが……」

「日本解放戦線を壊滅させるんだ。」

2人の会話に、割って入る。

彼女の手の位置と、脚の位置が気になるが……今は我慢。

「日本解放戦線は、エリアーにおいて最大の反抗組織。彼らが居る限り、キョウトの支援はあちらに傾く。それに大衆の支持も二分化されてしまう。だから……」

「ナリタでコーネリア軍に潰してもらおう。そして疲弊したコーネリア軍を俺達が叩く。」

「そして、物資も大衆の支持も、黒の騎士団が独り占めする、と。酷い考えだな。正義の味方には思えない。」

そんな彼女の声は、何処か愉快だった。

(正義、か……………)

先日の、スザクとの会話を思い出す。

ルールに従わなければ、ズルして手に入れた結果に意味は無い、と彼は言った。

しかし彼の意見は、正攻法で結果を勝ち取れる、強い者の意見だ。

(……………貴方が思うほど、強い人間ばかりじゃないんだよ、枢木スザク。)
内心溜息を付き、後ろに居るC。C。に身体を預けた。

Stage 10 ナリタ攻防戦

「咲世子さん、お兄様とアルカの朝食は要らないわ。」

盲目の少女、ナナリー・ランペルージは、篠崎咲世子にそう呟いた。

「今日から3日ほど、旅行ですって。」

「そうですか、最近良くお出かけになりますね。恋人とか？」

咲世子は気づかない、ナナリーの顔が曇っていることを。

「そう…ですね……」

兄と妹は気づかない、自分達の選択した行動が、どれだけ彼女を悲しませる事になるかを。

（2人して私を置いて出掛ける事が多くなった…、寂しいです。お兄様、アルカ……）

◇◇◇

ナリタ連山、山頂近くの山小屋。

『落ち着け、話をしに来ただけだ。』

仮面の男、ゼロはその仮面を外し、告げる。

「お前たちは無視するだけでいい。全ての異常を。」

その言葉を聞いた兵士達は、囲碁を打ち始める。

言葉通り、ゼロを無視して。

「ゼロ、扇さん達に合図送った……よ……」

髪を黒に染めた少女。アルカがゼロに続いて山小屋へと入る。

ゼロに任されていた事を、終えたらしい。

「ああ、ありがとう。……どうかしたか？」

段々と小さくなった声に思わず、ゼロは、いやルルーシュは顔をしかめる。

彼女の視線は、先ほどギアスを使った兵士達に注がれている。

「その兵士達なら心配するな。異常を無視しろ、とギアスを掛けた。」

「……うん、分かっている……」

安心させようと声を掛けたが、彼女の様子が戻ることは無い。

「……もし、無理をしているのなら、その。安全な場所で待機も……」

「あ、ううん。KMFに乗るのが怖い訳じゃないんだ。私から戦闘に参加するって無理に言ったんだし。ただ……」

「ただ……?」

少女は何処か、自身を嘲笑する様に、しかし悲しそうに

「昔の事を思い出しただけ」
と呟いた。

——時を同じくして、ナリタ連山の山道。

多数の無頼とトラック、そして深紅のKMFが、山頂に向け、移動している。

『ゼロとアルカのやつ。何で無頼の無線を使わないんだ？』

『それより、ハイキングってどういうつもりかしら？』

『軍事教練だろ？』

仲間達の疑問が飛び交う中、一人黙々と作業を続ける少女。

深紅のKMF、紅蓮式式のコックピットの中でマニュアルと睨めっこしている紅月カレン。彼女は仲間達の疑問に対する回答を持ち合わせているが、会話に混じる気配は無い。

(これから、ブリタニアとの激しい戦闘になる。そして……)

カレンは操縦桿に括り付けた、交通安全のお守りに視線を移す。

(今度はアルカも戦闘に参加する。頑張らないと。)

彼女の顔に決意が宿る。

テロリストとして、初めて戦場に出る友人、アルカ・アングレカムの事を想って。

アルカとカレンは、戦闘訓練からKMFのシミュレーターまで共にした仲間でもある。彼女の優秀さは、カレンも良く知っている。

が、それとこれとは話が別だ。

(私がエースパイロット……、私が一番の戦力……)

友達に対する想いと、力を持つ者の責任が彼女の背中に押し掛かる。

◇◇◇

アルカの様子がおかしい、とルルーシュは思った。

少なくとも、扇達への合図を頼むまでは普通だった筈だ。

(そうなる、やはりギアスに掛かった兵士達……)

と、そこまで考え、ルルーシュは思考を止めた。

外に見知った人物。それでいてこの場に居る筈の無い人物が居たからだ。彼女が居るといふのにも関わらず、アルカは変わらず、囲碁を打ち続ける兵士達を見ている。

「アルカ、外は寒いから、ここで待っている。」

妹にそう声をかけ、ルルーシュは外に居る少女、C・Cの元へ向かった。

「C・C、何をしている？こんな所で。」

ルルーシュの言葉に反応し、C・Cは振り向く。

「守ってやるって言っただろ？」

「保護者面をして……俺を守る暇があるなら、アルカを……」

「ルルーシユ、お前は何故、ルルーシユなんだ？」

言葉のキャッチボール位はしてくれ、と内心でルルーシユは毒づいた。

「哲学を語っている余裕は無い。」

C・C・はルルーシユの言葉に気にも留めず、続ける。

「家の名はランペルージュに変えた。だが、ルルーシユという個人は残した。甘さだな。過去を捨てきれない」

「だからってC・C・はやりすぎだろ、人の名前じゃない。それにアルカはどうなんだ。お前が名を与えたのだろう？」

再びC・C・はルルーシユの方へ振り向く。彼女のその顔には、寂しさと優しさが入り混じった、そんな表情が浮かんでいる。

「それは、私の甘さだ。あいつじゃない。私が甘かったから、弱かったから。あいつはこれからも苦しむ。」

「どういう意味だ。」

彼女の意味深な発言に、ルルーシユは眉間に皺を寄せる。

「……いずれ話すぎ、その時がきたら、な。」

「…C. C. ……どうして、ここに……………」

山小屋から、我を取り戻したらしいアルカが出てきた。

「なに、お前らを守ろうと思つてな。それより、…………大丈夫か？」

「あ、うん。もう、平気…」

心配して駆け寄つたC. C. と、落ち着きを幾分か取り戻した妹。その2人の様子を
見て、ルルーシユは思う。

(C. C. のアルカに対する執着は何だ？ただの契約関係…には見えないが)

ただの契約関係だとしたら、あそこまで距離を詰めないだろう。俺とC. C. の様
に。あくまでビジネスライク、利害が一致しているから共にいるだけだ。

しかし、アルカは…

と、ここまで考えて、ルルーシユは思考を止める。そろそろ、扇達が到着する頃合
だ。

「C. C.、そろそろ黒の騎士団が到着する。お前は安全な場所に…………」

「ああ、わかつているよ。」

そう言い残し、C. C. はこの場から去つた。

ルルーシユは外していた仮面を付け直す。

『アルカ、やれそうか？』

「……………ええ。」

麓ではブリタニア軍のKMFにトレーラー。空には輸送機。戦争が始まる。

◇◇◇

無頼のコックピットの中で、ゼロの声が響く。

『よし、全ての準備は整った！黒の騎士団、総員出撃準備!!』
操縦桿を握る手に力が入る。

『これより、黒の騎士団は、山頂よりブリタニア軍に対して、奇襲を敢行する。私の指示に従い、第3ポイントに向け、一気に駆け下りろ。』

「……………久々だ……………覚悟してよ、ブリタニア……………!!」

普段は精工な人形のように整った顔をしたアルカだが、今はその顔に好戦的な笑みを浮かべている。

『作戦目的はブリタニア第2皇女、コーネリアの確保にある。突入ルートを切り開くのは、紅蓮式式だ。』

カレンが乗る、紅蓮式式。それがこの作戦の要であり、主力。

紅蓮式式は、地面に刺さる貫通電極にその右手を添える。

貫通電極……

紅蓮の輻射波動で発生する熱エネルギーを、地下水に送り込むものだ。そして内部で水蒸気爆発を起こさせ、人為的に土砂崩れを起こす。

『出力確認、輻射波動機構、涯際状態維持——。』
紅蓮の右手に付いている輻射波動機構に熱を帯びていく。

『鎧袖伝達』

その後、紅蓮を中心に激しい光が発生した。

しばらくして、激しい地響きと共に、巨大な山崩れが起きる。

(ふふ、思い通りに事が運ぶのは心地良い)

これでゼロの想定通り、コーネリアの部隊は孤立。敵軍に対して多大な損害を与えた事となる。

ああ、ついでに。日本解放戦線ももう終わりかな。

後はカレンを中心に、残存戦力を排除。コーネリアを確保すればいい。

「……さあ、作戦開始だ。」

私はKMFを走らせた。



純血派次席、キューエル・ソレイシイは、その短い生涯に幕を閉じた

「……亡霊……か……」

あながち間違いいではないか。

実際に、アルカ・ヴィ・ブリタニアは死んでいるのだから。

「……………つ。旧世代のKMFじゃこんなものか。」

コックピットに付いているモニターに目をやる。KMFの異常を知らせる警告が出ている。腕の部分や脚の部分に、耐久以上の負荷がかかってしまったらしい。

「……だけど、まだ動く。」

『アルカ、大丈夫？』

カレンが無線を用い、アルカの様子を聞く。

「うん、大丈夫だよ。見てたでしょ？私の操縦。ちゃんと出来るんだから」

『……ふふ、はいはい……』

戦場に似合わない、少女の可憐な声が、お互いのコックピットに響く。

「カレンも、紅蓮での初戦お疲れ様。ちゃんと輻射波動も使えて何より」

『お陰様でね、ありがとう』

『2人とも、次のポイントまで移動するぞ』

ゼロが通信に割って入る。

先程まで話していた2人は目つきを鋭くし、彼に了承の意を伝えた。

「完全に使い潰すまで、付き合ってもらおうから……」

静かになったコックピット内で1人、アルカは呟いた。

◇◇

「……………」

無頼の四肢が、悲鳴を上げる。

コックピット内には、先ほどよりもけたたましい警告音。

少女は、モニターにちらりと目をやったが、気にする様子は無い。

『イレヴン風情があああ!!』

目の前のサザーランドが、声を上げ、前進する。

「遅い。」

突っ込んでくるサザーランドの頭に目掛け、スラッシュハーケンを飛ばす。それに

よって、怯んだサザーランドのコックピットに目掛け、スタントンフアーを突き刺す。

パイロットを失ったサザーランドは、完全に沈黙し、激しい音を立て、爆発した。

「……これで、5機目……、流星にきついな……………」

額に汗を流し、アルカは呟く。

アルカが乗るのは第四世代KMFグラスゴーが元となっている無頼。基本的な性能は、グラスゴーと変わらない。それに対して、現在のブリタニアの主力は第五世代KMFであるサザーランド。グラスゴーの戦闘データを元に改良されたものだ。並のパイロットであれば、正面からの戦闘では勝ち目が無い。彼女は、そんな機体性能の差を技量で埋めているのだ。しかし、無茶な戦闘を繰り返した事で、アルカの乗る無頼は限界が来てしまったようだ。

彼女に与えられた任務は、孤立したコーネリアに付いていた護衛の掃討。近くに居た残存戦力は、今ので最後の様だ。一緒に付いていた仲間はやられてしまい、一人になってしまったが、何とか役目を果たせた。

ふう……と、彼女の口から安堵の溜息が出る。

「そろそろ、あっちも終わったかな……？」

そうこうしていると、コックピット内に、ゼロの声が響く。

『これ以上は消耗戦になる、撤退だ!!』

「……そっか。コーネリアはまた別の機会だね。」

再び操縦桿に手を添え、無頼を走らせる。

「脱出地点は……ポイント4、このまま真っ直ぐか。」

今の無頼が出せる最大の速度で所定の地点まで移動する。

しばらく、KMFを走らせていた彼女だが、急にその動きを止め、目的地とは少しずれた方向へ、視線を映す。

「……………兄上……………」

◇◇

なんだこれは……………

ルルーシュを守ろうと、白いKMF―ランスロットの前に立ちふさがったC・C。

その彼女に触れた途端、ルルーシュの意識は、現実から引き離された。

前とは……………違う……………？

C・Cと契約した時と感覚は似ているが、目に見える光景が決定的に違う。

「や、やめろ……………」

額にギアスの模様が浮き出ているシスター。教会に石を投げつける人々。枢木神社。城。

「私に……………入ってくるな……………！」

胸の傷を眺め、悲しげな表情を浮かべたC・C。絶え間なく聞こえる人々の悲鳴。

「どうして、私が……………」

母の後ろに隠れ、不安そうな表情のアルカ。スザクの父である柘木ゲンブ。

様々な光景が、ルルーシユの脳内に直接、送り込まれてくる。

『俺はああするしか、なかったんだ!!』

少年の悲痛な叫びが。

『私の願いは、人を歪める…』

絶望した少女の眩きが。ルルーシユの脳内に響く。

醜い、と繰り返し眩きながら、人を殺める少女。

頭を抱え、言葉にならない声で、叫ぶ少年。

その2人と視線が交わった所で、ルルーシユの意識は現実へと引き戻された。

『何なんだ、今のは!』

「馬鹿!今のうちに逃げろ!!」

その言葉にハッと目の前のKMFに、ルルーシユは意識を向ける。

ランスロットは暴走状態。その手に持っている武器、ヴァリスをあちらこちらに乱射している。その弾丸が当たったことにより、破壊された岩や木の破片が、辺りに飛び散っている。

「——っ!!」

『C.C.C.!!』

そして、その破片が彼女の胸に、深く突き刺さる。

彼女の端正な顔が歪む。額からは汗を流し、破片が突き刺さった場所からは夥しい量の血が出ている。

「早く……逃げろ……！」

ルルーシユが行動を決めかねていたその時、一機の無頼がこの場に現れた。激しい戦闘をした為か、機体の所々から煙が立っている。

『C・C・！ゼロ！』

(アルカか……!!)

無頼を駆る少女、アルカは周囲の状況を確認した後、目の前のランスロットのヴァリスに向かって、スラッシュハーケンを放つ。それによってランスロットの手からヴァリスが離れ、銃弾による破壊は止んだ。その隙に、無頼を前進させ、C・C・とルルーシユを回収。速度をさらに上げ、ランスロットから遠ざかる。

『アルカ、何故……！』

無頼の手に乗るゼロが、驚きを隠せない様子で、アルカに問いかける。

『何となくここにいた気がしたの！取り敢えず安全な所まで連れて行くから、話は後で！』

逃げ切るまで機体が壊れない事を祈りながら、アルカは無頼を走らせた。

stage 11 名前

ナリタ連山の麓にある洞窟。3人はそこへ逃げ込み、カレンの到着を待っている。無頼が完全に壊れる前に、カレンへ救難信号を発信出来たのは僥倖だったと言える。

「ちよつと痛いかもしれないけど、我慢してね……」

痛みで顔を歪めるC・C・に、優しくアルカは語りかける。

その細い指を彼女の血で赤く染めながら、慣れた手つきで破片を摘出する。

「アルカ、俺はあとどのくらい後ろを向いていればいい?」

「もう少し待つてね。もう終わるから」

C・C・を治療しようと、彼女の服を脱がそうとしたアルカに「見ないで。」と強く言われてしまったルルーシユは、現在、アルカとC・C・に背中を向け座っている。

彼女の不死身の身体の事が気になり、傷口を撮影したり、血液を摂取したかったが、無理そうだ。

「……うん、よし終わった。兄上、マント貸して。C・C・に掛けるから」

「ああ。もう、いいか?」

「うん、いいよ。こつち向いて」

破片が身体から取り除かれた為か、C・C・の顔は先程よりも穏やかになっていた。彼女の身体にはゼロのマントが掛けられている。そんな彼女の頭を自身の膝に乗せ、アルカは慈しむ様に頭を撫でている。

「……随分早いな、慣れているのか？」

「うん、自分達でやるしかなかったから」

ああ、そうだった。とルルーシユは思い出す。

アルカはつい一年くらい前までは、逃亡生活をしていたのだった。当然、病院など通える筈も無い。

「ごめんね、無頼、壊しちゃって。」

「ん、ああ。良いって。お前が無事ならKMFくらい安いもんだ。」

アルカが乗っていた無頼は、ここに到着する少し前に動かなくなってしまった。無理な戦闘で限界を迎えていた無頼を、さらに酷使したのだ。壊れてしまうのも仕方が無い。

「無頼は乗りにくいのか？」

「うん……。戦えない事は無いけど。思ったように動いてくれないかな。」

「…カレンの様に、専用機を用意した方が良いかもな。」

「まあ、余裕があったら、お願いしようかな。」

無頼の性能が、アルカの技量に見合っていないのはルルーシユも分かっていた。しかし、戦力に限りがある現状では、彼女に見合うKMFを用意できず、無頼に乗って貰っていた。

(戦場に送り出すようなことは、兄としてしたくないが)

ゼロとして考えると、彼女の技量は無視できない程大きい。戦闘の度に使い潰されるのもコストがかかり過ぎるし、長時間の戦闘も考慮すると新型を用意した方が良さそうだ。

「う……あ……」

「C・C・？」

ふと、洞窟内に彼女のか細い声が響き渡る。アルカは優しく彼女の名を呼ぶ。

「……………」

彼女の声が木霊する。

「あつ……………」

「……………C・C……………」

人の名前だった。至って普通の人の名前。

「やっと呼んでくれたね……。私の名前……………」

そう呟くC・C。は、いつもの淡々とした声では無く。見た目相応の、少女の声だっ

た。

「……昔の夢を見ているの？C・C・C。」

アルカは再び慈しむ様に、彼女の頭を撫で始める。

「……………」

聞きたいことは山ほどある。アルカに対しても、C・C・C. に対しても。

だが、普段とは違い弱々しいC・C・C. と、それを優しい目で見守るアルカ。そんな二人を見て、ルルーシユはどうしても聞く気分にはなれなかった。

眠っていたC・C・C. が目を覚まし、アルカの膝から顔を上げる。

「アルカに感謝しろよ。お前の応急処置をしたんだ。」

「C・C・C. ……大丈夫……………」

心配そうな顔をして、アルカはC・C・C. の顔を覗き込む。そんな彼女に対し、優しい微笑みを浮かべるC・C・C.。

「…全く、またお前は……。私には必要無い事、知っているだろう？」

「でも、痛みは感じるでしょ？どうせ治るから、って考えないで。」

呆れ口調とは裏腹に、C. C. の声は何処か優しい。

「……………なあC. C. ……——というのは、お前の名か？」

「……………お前、何処でそれを……………」

いつもの調子を取り戻し、C. C. は目を鋭くする。その様子からルルーシユの憶測は確信へと変わった。

「C. C. ……それは……………」

「ふ——、やはりな。寝ているお前が口にしてたよ。良い名前じゃないか。C. C. よりずっと人間らしい。」

「馬鹿馬鹿しい、私に人間らしさなど……………どうせ私は……………私には……………。今更名前なんて……………名前、なんか……………」

段々と声を小さくし、その目に涙を浮かべるC. C.。そんな彼女をアルカは、後ろから抱きしめ、耳元で囁く。

「……………私は、好きだよ。C. C. の名前も。貴女の事、全部好き。だから、自分自身を嫌いなにならないで。」

その彼女の声に応える様に、C. C. はアルカの手に、自身の手を重ねる。

（ああ、こいつはいつも、私に優しい言葉を投げかける…。私の心にするりと入ってくる……………。だから私は、お前を手放せない……………）

アルカの言葉は私を蝕む毒だな、とC・C・は考えた。その光景を見ていたルルーシユは、意を決した様に口を開く。

「……良い機会だから、言っておく。その……きつきは助かった——」

ルルーシユの感謝の言葉に、2人の少女は眼を向ける。C・C・は驚きを隠せない様子で、アルカは少し呆れ顔で。

「……兄上、ぶつきらばう過ぎじゃない……う？」

そんな彼女の言葉に「そうかな」と微笑みかけ、ルルーシユは続ける。

「今までも、それからギアスの事も。だから……、ありがとう。」

「……感謝されたのは、2回目だよ……。だが、初めての時とは程遠いな、何より温かみが無い……。本当にアルカの兄か？」

「多分、兄上なりの精一杯かと……昔から素直じゃないから……」

ああ、わかつているよ。つとその顔に笑みを浮かべ、C・C・は呟く。

「では、お礼を貰おうか。もう一度名前を呼べ、今度は心を込めて、な。」

「仕方ないな。——」

C・C・は目を閉じ、その言葉を噛みしめる様に静かに聞いている。アルカは2人のそんな光景を、微笑ましそうに見守っている。

「ダメだな、発音も違うし、やっぱり温かみが無い。アルカにでも教えて貰うんだな。」

「ふん、我儘なやつだな。」

「……なあ、アルカ。私の名前を呼んでくれ。お前の声は心地が良い。」

C・Cはアルカの頬に手を添え、顔を近づける。遠くから見れば口づけをしている様に見えるくらいの距離だ。

「おい、近いぞ」とルルーシユルスの声が響く。

「うん……。——あ。」

アルカが口を開こうとしたその時、洞窟の外からKMFの機械音が聞こえてた。恐らくカレンが到着したのだろう。ルルーシユは仮面を付け直し、何処か良い雰囲気の人に話しかける。

『お迎えが来たようだな。』

「ああ、残念だ。全く、タイミングが悪い。」

「まあ、いつでも言っておけるから。今は我慢、ね?」

拗ねた様に呟いたC・C。にアルカは優しく語り掛ける。いつもとは逆の光景だな、とルルーシユは胸の内で呟いた。

「うん、それもそうだな。今夜にでも、ベッドの中で囁いてもらおうでしょう。甘く優しくな。」

『「……えっ?」』

アルカは顔を真っ赤にして、ルルーシユは顔を唾然とさせて、2人の気の抜けた声が洞窟内に木霊した。

◇◇◇

「結局、ゼロは捕まらないままか。」

ブリタニア軍が所有する指揮用陸戦艇、通称「G1ーベース」。多数のKMFを搭載出来るほどの広さを持つこの移動要塞で、2人の男女が歩いている。

1人はブリタニア帝国第2皇女「コーネリア・リ・ブリタニア」。

その数歩後ろに、彼女の騎士「ギルバード・G・P・ギルフォード」。

れっきとしたブリタニア軍人である2人は、ナリタでの戦いについて話している。

「日本解放戦線が防衛ラインを押し上げているので、その中に紛れたのかと。」

「好かん。常に何かを盾にして身を守る。」

質実剛健を体現したような彼女には、ゼロのやり方はやはり気にくわないらしい。

「それで？報告に合った、亡霊というのは？」

「あらゆる攻撃をギリギリで躲し、こちらのサザーランドを一方的に破壊した無頼が居たと、脱出した兵士から報告を受けています。」

「…第4世代相当のKMFでサザーランドを……。あの赤いやつと言い、一枚看板では

無いらしい。」

コーネリアの顔が曇る。エリアーに蔓延るテロ組織を根絶し、綺麗にした状態で妹であるユーフェミアに渡そうと考えている彼女だが、手をこまねいているのは明らかだ。他でもない、ゼロと黒の騎士団に対して。

「あと、これは別件ですが……………」

「……………まだ、何かあるのか？」

ナリタ連山での敗北に、黒の騎士団の想定以上の戦力。問題は山積みだというのに、とコーネリアは頭を抱えた。

「…エリアー4の反乱を鎮め、本国に戻ったナイトオブナイン…。彼女が近いうちにエリアーを視察に来る、と本国から連絡が来ております。」

「エニアグラム卿が…?」

彼女の事を頭に浮かべ、コーネリアはため息を付いた。

・
・
・

ブリタニア帝国首都、帝都ペンドラゴンの空港で、1人の女性が豪快にくしやみをした。

眉の上で切りそろえられた前髪、短い後ろ髪をした、銀髪の女性。

「しつかし、本国は寒いなあ！風邪でも引いたかな？」

アツハツハツハ、と言葉とは裏腹に、気にも留めてない様子で彼女は、ノネット・エニアグラムは笑う。そんな彼女の後ろで金髪の女性は呆れた様な表情で、その光景を見つめている。

(絶対、そんな事無い……！)

金髪の女性、モニカ・クルシエフスキーは内心で強く思った。

「エニアグラム卿……。何も、民間の航空を使わなくても……」

「卿はよせ、モニカ。今は軍務では無い。ノネットさんと呼べ」

ブリタニア帝国においての皇帝直属の最高戦力、「ナイトオブブラウンズ」。そこに身を置いていた彼女達だが、今は制服では無く私服。つまりはプライベートルダ。

「まあエリアーの視察は表向きには軍務だが……。殿下が心配でな、様子を見に行くだけだ。実際は旅行みたいなものよ。皇帝陛下も存外、話が分かるお方よなあ！」

「そうだとしても、民間の空港じゃなくても良いじゃないですか。仮にも貴族なんです……」

「まあ、そう固い事言うな！息抜きだよ、私だつてたまにはゆっくりしたいんだ。」

再び豪快に笑い、モニカの肩を叩く。

「そんな心配するな！ ラウンズの制服も、事務仕事で使う資料も、軍用機で先に送ってある。機密が漏れる事は無いよ。」

そういうことじゃありません！ という言葉をモニカは呑み込んだ。彼女の意志が固いことはモニカも知っている。いくら言っても聞かないだろう。とモニカは諦めた。

「珍しく戦闘以外のエリア移動だ。お土産でも買ってこよう。ジノとアーニヤに何が良いか聞いておいてくれ。」

「……はあ……わかりました……。……：エリアーは反ブリタニア運動が特に盛んだと聞きます。くれぐれも気を付けて下さいね。」

先ほどまで愉快そうに笑っていた彼女の顔が、たちまち好戦的な顔へと変わる。

「ふ……、誰に言っている。」

◇◇◇

クラブハウス アルカの自室

皆が寝静まった深夜。

2人の少女の囁き声が、部屋の中で微かに響く。

部屋は暗く、ぼんやりと影しか見えないが、人の身体の分だけ盛り上がった布団がモソモソと動いているのが確認できる。

「……んあ……っ、はっ………し、しーっ！………」

酸素を求め、呼吸が荒くなっている少女の声。頭が上手く働かないのか、言葉も何処かたどたどしい。

「おい、そつちじゃない。もう一つの方だ。」

そんな少女に対し、無慈悲に魔女は告げる。しかし、声音は楽しんでいる様だ。

「——っ！」

影が少し大きく揺れた。

「さあ、名前を呼べ。甘く、私を求めながら、な。」

「……う……ん、あっ………んんっ………」

言葉にならない声を出しながら、少女は自身の上に乗る魔女の首に、腕を回し、引き寄せる。そして彼女の耳元で

「……」

人の名を口にした。

「うん、やはり良いな。お前は。」

満足したのだろうか、柔らかな笑みを彼女は浮かべる。が

「……だが、ダメだな。もう一度だ。」

意地の悪い笑みを浮かべ、自身の親指を少女の唇に這わせる。一通り感触を楽しんだ

のか、指を離し、今度はその唇に深く、口付けをする。

「ん——、……はあっ……、ああ、……は、はな……し……が、んっ、ち、ちが……」

「今更何を言う、満更でもない癖に。」

「っ!!」

先ほどよりも大きく、影が揺れた。

ま
ま
ま

まだまだ日は昇りそうに無い。

余談だが、翌日、少女はお昼過ぎに起きる事となる。

そんな彼女の第一声は

「腰が痛い」

それを聞いた少女の兄と姉は

「ん?」

と不思議そうに、首をかしげていた。

Stage 12 出生

「キョウトからのラブレター、見た？」

『ああ、さつき扇から受け取ったよ。』

黒の騎士団がアジトとして使っているトレーラー。その2Fにあるゼロの私室に、アルカは居た。

部屋にあるベッドにうつ伏せになりながら本を読んでいる。彼女はこうしてゼロの私室で過ごししている事が多い。他のメンバーはゼロの部屋に入り浸るアルカに不思議そうな目を向けている。それに対して彼女は一言、「作戦会議！」と言って言いくるめているのだから、彼女の組織内における信頼は相当なものだ。そんなアルカを横目に、ゼロは自身の仮面に手を伸ばし、それを外した。

「日本解放戦線、見捨てた甲斐があつたね。」

「ああ、これでキョウトも黒の騎士団に支援するしか道が無い。後は主導権をこちらが握ることが出来れば条件はクリアだ。」

彼女は横にしていた身体を起こし、椅子に座るルルーシユの方へ身体を向ける。

「日本解放戦線の…えっと、片瀬？はどうするの？どさくさに紛れて逃げたんじゃ？」

「何、今は放っておくさ。使い道が無い事も無いしな。」

「コーネリアに対する罠とか?」

「まあ、そんな所だ。」

ふと、部屋に扉をノックする音が響く。

「誰だ。」

「私です。あの、さつきは出過ぎた事を言って、すみませんでした。」

「…カレン、君も私の素顔が知りたいか?」

「……………、いいえ、失礼します。」

カレンの足音が遠ざかる。2人の短い会話を黙って聞いていたアルカは、彼女の足音が聞こえなくなったタイミングで口を開いた。

「信用を完全に得るのは、難しいね。」

「ああ。玉城を中心に、未だにゼロに対する不信感を感じる。このままではコーネリアと戦うどころじゃない。早急に改善する必要がある。」

「ふふ、その為のキョウトでしょ?」

「ふ、勿論それだけでは無いがな。ただまあ、キョウトの代表からゼロが認められれば、あいつらの不信感も払拭されるだろう。」

ルルーシユは手に持っている資料に目を落とす。そこにはある老人の名前と写真、大

まかな経歴が記載されている。

キヨウト六家、桐原泰三。そこにはそう、記されてあつた。

◇◇◇

日本——エリアーにおけるサクラダイト採掘量は世界一。そしてその殆どは富士鉱山から取れるという。日本がエリアーとして支配下に置かれてからというもの、サクラダイト採掘施設として、その姿の半分は機械に覆われている。かつての日本の象徴は、ブリタニア帝国の養分となっているのだ。

そんな富士鉱山に、黒の騎士団は居た。

「醜かろう?」

老人の声が響く。年老いているものの、何処か覇気を感じる庄の強い声。

声のする方へ、皆が一斉に目を向ける。そこには駕籠があつた。幕が下りており、中に居る人物の顔を見えない。近代的な施設の中にある物としては、余りにも異質だ。

「かつて山紫水明、水清く豊かな霊峰として名を馳せた富士の山も、今は帝国に屈しなすがままに凌辱され続ける、我ら日本の姿そのもの。」

よく舌が回る老人だ。とアルカは思った。

(この状況を望んだのは自分達であろうに。)

キョウト——表向きにはNACというブリタニア内政省の管理下にある団体。早々に国を見捨て、ブリタニアに媚び諂い、自分たちの権力だけを保持しようとした売国奴の集まり。というのがアルカのキョウトに対する評価だ。

「顔を見せぬ非礼を詫びよう。が、ゼロ。それはお主も同じこと。」

「……………」

ゼロは喋らない。

「ワシは見極めなければならぬ、お主が何者なのかを。その素顔、見せてもらおうぞ。」

黒の騎士団を囲む様に、複数の無頼が現れる。それぞれが持っているライフルをゼロに向け、停止した。

「お待ちくださいー！」

カレンがゼロを庇う様に、両手を広げ、老人に主張する。彼が居なければ勝てなかった。と。

そんな彼女の主張を、老人は一蹴し、扇にゼロの仮面を取るように命じる。

「すまない、ゼロ。でも俺も信じたいんだ、お前を。だから信じさせてくれ。」

扇が仮面に手を掛け、外す。仮面の下から現れた姿は——

「お、女!?!」

「そんな……………」

緑色の髪をした少女、C・C。

「違うわ！この人はゼロじゃない！私は見た、この人とアルカとゼロが一緒に居るのを！」

「そこの女、誠か。」

「ああ。」

いつもと変わらず、無機質な声で彼女は呟く。

「しかもお主、日本人じゃないな？」

「イエスだ、キョウトの代表。桐原泰三。」

「貴様！」

その名を彼女が口にした途端、SPの表情が変わり、懐から銃を取り出す。

「ああ、これじゃ正解ですって言ってるようなものじゃん、とアルカは呆れた顔で見下ろす。

『アルカ、頼む。』

ゼロの声がコックピット内に響く。頃合いだ。

「うん、任せて。」

突如、黒の騎士団を囲んでいた無頼の一機が、目の前の無頼2機に対し、スラッシュハーケンを飛ばす。突然の事に反応出来なかった無頼は、その手に持つライフルを地に

落とす。今度は横にいる無頼に対して、スタントンフアーを振り下ろす。上からの圧力に無頼はバランスを崩し、膝を突く。

そして、桐原泰三に対して、ライフルを向けた。

『ぬるいな。それにやり方も、考え方も古い。』

機械交じりの声が、闇から響く。闇の中から仮面の男、ゼロが現れた。

『だから、あなた方は勝てないのだ!』

「ゼロ……? それにこの無頼の動きは…アルカ……?」

カレンは啞然とした表情で呟く。

『桐原泰三。サクラダイト採掘業務を一手に担う、桐原産業の創設者にして、枢木政権の陰の立役者——。』

ゼロは桐原泰三に関する情報を口にしながら、彼にゆっくり近づいていく。

「……………キョウトの妖怪、か。」

そんなゼロの言葉を聞きながら、アルカは無頼のコックピット内で、いつか見た夢の事を思い出していた。

『貴方のお察しの通りだ、私は日本人ではない!』

カレンを始めとする黒の騎士団のメンバーが、あまりの驚きに声を上げる。

「日本人ならざるお主が、何故戦う? 何を望んでおる?」

「ブリタニアの崩壊を。ふ、貴方が相手で良かった。」

言葉と同時にゼロは仮面に手を掛け、素顔を晒した。

「っ！お主……」

「お久しぶりです、桐原公。」

◇◇◇

無頼のコックピット内でアルカは操縦桿から手を離し、身体から力を抜く。桐原泰三がゼロの話聞く気になつたからだ。

「……あとは、兄上次第、か。まあ大丈夫だろうけど。」

ルルーシユと桐原泰三が顔を合わせるのには、これが初めてではない。7年前の夏、ルルーシユとナナリーが日本に送られた際に会つていたので。そこに会話は無かつたものの、ルルーシユの素性を知っているのなら、仮面を被り、ブリタニアに反逆する理由にも合点がいくだろう。あとはこの場で桐原本人から認めて貰えれば、ゼロに対する不信感も緩和するはずだ。

無頼のハッチを開け、コックピットから出る。

「やっぱりーアルカ!!」

「やっほ。」

カレンの反応に対し、アルカの返事は場違いな程軽い。

「なんだあ？お前、今日は休みつつつてなかったか？」

「ああ、すみません、黙ってて。私は私で、仕事があつたんです。」

「でも…、私達くらいには、話してくれても……」

玉城、カレンがアルカに言い寄る。

「おい、そう虐めてやるな。こいつもゼロに頼まれてやっただけなのだから。」

初対面とは思えない口調で、ゼロの姿をしたC・Cはアルカの肩を抱く。

「ちよつとあんた、アルカに馴れ馴れしくない？」

「馴れ馴れしいも何も。お前よりもアルカとは長い付き合いだぞ」

「カレン、この人はね……」

そういえばC・Cと再会出来た事、話してなかった。と思い、アルカは口を開こうとする。

「アルカ、こつちに来てくれ。」

桐原泰三と話している筈のゼロルルルシユに呼ばれ、意識をそちらへ向ける。

(……………？私が桐原と話す事なんて……)

頭に疑問を浮かべながら、アルカはルルルシユの元へ足を運ぶ。

「……………お主が、アルカか。」

「……はい、初めまして、桐原泰三様。アルカ・アングレカム…いや、アルカ・ヴィ・ブリタニアと申します。先ほどの非礼、この場を借りてお詫び致します。」

元来の育ちの良さからか、大人顔向けの礼儀で、その形の良い頭を下げる。

そのアルカの仕草を桐原は何処か懐かしむ様な目で見ている。

「……かかつ、よい。顔を上げよ。」

「さあ、話してもらいましょうか、桐原公。何故彼女を知っているか。」

「私を、知っている……?」

彼を見つめるルルーシユの目は敵意に満ちている。

返答次第では、この場で殺してしまうのでは、と思う程に。

「……まだこの国が日本として、世界に誇る経済大国としてあつた頃、ブリタニアから取引を持ち掛けられての。」

皇歴 2003年 日本

ブリタニアとの戦争が起きる7年前。

サクラダイトの利権を巡り、当時からブリタニアと日本の間では小さい争いが絶えな

かった。何がきっかけに戦争になるか分からなかったこの時代。日本政府は戦争を回避する為、日夜対応に追われていた。

当時はまだ一議員だった枢木ゲンブもその一人。キョウト六家の出身である彼を、桐原は陰ながら支援する事で、自身も間接的に政治に関わっていた。

そんな時だった、ブリタニアから取引を持ち掛けられたのは。

キョウト六家の当時の当主、皇造とブリタニア王妃の間の子を作り、その子供を皇族に迎え入れたい、と。

ブリタニアが何故、皇との子を欲するか、結局桐原は理解することが出来なかった。

しかし意図はどうあれ、見返りは彼にとって魅力的だった。

もし戦争が起こり、日本が属領となった際、キョウト六家のある程度の権力と地位は約束する、とブリタニアは言った。

政府は超大国であるブリタニアとの戦争を回避しようとしていたが、桐原からすれば無駄な行いに見えた。なぜなら遠くない未来、必ずブリタニアとは戦争になる、それが桐原の考えだったからだ。そもそもブリタニア側がそういう姿勢なのだ。戦争をする口実を探す様に、ブリタニアは日本に対して動いていた。

勝てば、日本は世界有数の大国として発展する、負けてもある程度の自治を認められる、それに加えて。

（日本が属領となった場合、皇族に身を置く”皇”の子供がブリタニア崩壊への足掛かりとなる。）

ブリタニアの顔とも言える皇族の中に、ナンバーズの血を引く子供がいると知られたら、国の根幹を揺るがす大きな爆弾となる。その爆弾を、ブリタニアは自ら抱え込むと言ってきたているのだ。

（負けた時の保険として、取引に応じるのも一興かの。）

そして桐原は、皇造の種——つまりは精子を冷凍保存してブリタニアに提供した。

◇◇◇

「そしてその2年後、子が誕生したと、ブリタニアから連絡があった。」

「……その子供が……私……?」

アルカの目が大きく見開かれる。いや、彼女だけではない。彼女の隣に居るルルーシユも、同じ様に驚愕を露わにしている。

「まさか庶民の出である、マリアンヌ王妃が子を成すとは思っていなかったがの。皇族の血を引く王妃が産むとばかり思っていたが……。」

「じゃあ……アルカは、皇族ですらない……。」

「血だけで見れば、そうなるの。シャルル・ジ・ブリタニアの子では無いのだから。」

一見すると、ブリタニア側に得が無いこの取引。

桐原が言う様にアルカの存在はつけ入る隙となる。

（日本人とのハーフ…。皇族の血すら引いていない。だから母上はアルカを騎士の道へ……、しかし、そこまでするなら、そもそも何故産んだ？）

答えは出ない。

（皇族の血を引かない子供、しかも当時は違うとはいえ、ナンバーズの血を持つ子供を皇族に迎え入れるメリットが、母上がアルカを産んだメリットが、当時のブリタニアに合ったということになる）

だが、そうだとしたら、何故アルカは切り捨てられた？

母上が死んだからか？

日本が属領になったからか？

ルルーシユの意識は、浮かび上がる疑問に向く。だから気が付く事が出来なかった。隣に居る妹、アルカの様子に。

「そう……ですか。母上の私に対する態度、ようやく合点がきました」

穏やかに笑みを作り、彼女は言葉が続ける。

「でも新たに確かめたい事も出来ました。母上の事、ブリタニアの真意、もつと調べないと。ね、兄上。」

至っていつもの調子で、兄に妹は話しかける。

「ん？あ、ああ、そうだな……。」

「本当に私がキョウト六家の血を引くのなら、黒の騎士団への支援を惜しまないでしよう？」

「ああ、そのつもりだ。お前達はブリタニアの偽り無き敵。扇らにもワシから伝えよう。」

「それは良かった。」

振る舞いはいつもの彼女。しかし、何かが違う。

「正し、条件がある。黒の騎士団のメンバーとして活動をしている間は皇と名乗れ。」

「……日本人達の象徴になれ、と？」

「ゼロと2人でな。顔を晒せぬゼロだけでは、民衆の不信も募るじやろう。ゼロに足りない部分をその血で補うのじや。皇の血縁者が協力していると知れば、支持する声もより増えるじやろう」

「……良かった。ここでキョウト六家に身を置けとか言ってきたら、どうしようと思っていました。……うん、まあ、それくらいなら良いでしょう。」

普段のルーシユなら気づいただろう、彼女の笑顔が作られたものであると。その瞳の奥に、悲しみの色を宿していると。



トウキョウ租界

昼間の晴天が嘘のように、激しい雨が降っている。

雨が降っている所為か、いつもより人通りが少ない繁華街。傘もささずに1人の少女が歩いていった。

その綺麗な髪を雨で濡らし、アメジスト色の瞳は、何処か虚ろで危うい。

(皇……、枢木宗家にあたる家。日本における古くからの名家……か)

当時の大人たちの都合で、私は生まれた。

母上が何故、私を産んだのか。何故私を皇族として育てたのか。それは分からない。

だが少なくとも、何かしらの利益があつて産んだのだろう。そうでもない限り、私を産む利点が無い。

(ふふ、まるで物みたい)

思わず自身を嘲笑する。

実の妹だと思っていた私が、種違いと知って、兄上はどう思っただろうか。姉上はどう思うだろうか。

母上は何を思いながら、私を育てたのだろうか。

私の誕生は、誰かに望まれたものであったのか。

「……私が生まれた理由ってなんだろう？」

少女の呟きは、雨の音によってかき消された。

stage 13 戦いの犠牲

「やつ、と……、み、見つけ、たあ……！」

声の主の方へ、少女は顔を向ける。そのアメジスト色の目は赤く充血しており、涙を浮かべている。

「……お兄ちゃん……」

兄と呼ばれた少年は、泣き腫らしている少女の隣に座る。

「随分、探したんだぞ……。ここは広いんだから、あまり遠くに行かないでくれよ……。」

幼いアルカとルルーシュだ。

まだ2人がブリタニア本国で暮らしていた頃。2人が住むアリエスの離宮での出来事。

「……ごめん……」

アルカの顔は曇ったままだ。

「母上の訓練が厳しかったのか？」

アルカは首を横に振る。

「カリーヌ姉様が……」

「……またあいつか。」

今度はルルーシユの顔が曇る。

カリーヌ・ネ・ブリタニア。ルルーシユにとつての腹違いの妹で、ナナリーとアルカにとつての異母姉。ルルーシユ達、ヴィ家を毛嫌いし、顔を合わせれば罵詈雑言を投げかけてくる帝国の第5皇女。

「一人だけ騎士を目指しているのはおかしい、兄上と姉上の本当の妹じゃないんじゃないの？ って言われた。」

「……………」

カリーヌは短絡的で幼稚な性格だ。そんな彼女の悪口など、普段のアルカなら何処吹く風と聞き流しそうだが、とルルーシユは思った。

しかし、当時のルルーシユは気づかなかった。この弱肉強食の環境で、彼女がどれ程、ルルーシユとナナリーの実妹である事を誇らしく想っているか。それがどれだけ彼女の支えになっているかを。

「私は、2人の妹だから、頑張れて、いるのに……」

思い出してから、再びアルカはその目に涙を浮かべる。

「……アルカ、誰に何を言われても気にしちゃダメだ。」

ルルーシユはアルカの頭に手を乗せる。

「また同じ様な事を言われたら、思い出すんだ。僕達と一緒に過ごしてきた日々を。」
アルカは静かに、ルルーシユの話を聞いている。

「どんなに否定されようと、アルカが僕達の妹として過ごしてきた日々は変わらない。たとえ何が起きてても、僕達の妹はアルカだけだよ。」

充血した目を見開き、兄を見つめるアルカ。

「さあ、帰ろう？ 母上とナナリーも待っている」

ルルーシユは立ち上がり、自身の妹に手を差し伸べる。

そんな兄を見てアルカは、さつきまで曇っていた顔に笑顔を浮かべ、差し伸べられた手を掴む。

「うん、お兄ちゃん」

◇◇◇

シャーリーのお父さんが亡くなった。他でもない、黒の騎士団私達の手によって。

ナリタでの戦いで起こした、土石流に巻き込まれたようだった。

「その……ごめんなさい、シャーリー……」

「なんでカレンが謝るのよ……」

カレンの謝罪に対して、シャーリーが努めて明るく応じる。

誰もがその彼女の姿を見て思っただろう。無理をしていると。

シャーリーの言葉に、カレンは何も返すことは出来なかった。それもそうだ。私達がやりました、などと言える筈もないのだから。彼女の謝罪は無意識から出たものだろう。カレンは優しいから。

「……………」

兄上は俯いたまま、シャーリーに目を合わせようとしめない。自身のその命令で、作戦で殺してしまった結果を受け止めきれないのだろう。

2人とも自責の念で押しつぶされてしまいそうな顔をしている。

それに対して、私は。

(この結果を、すんなりと受け止めてしまっている自分がいる)

勿論、悲しくない訳じゃない。巻き込んでしまった事に対するショックもある。しかし、2人ほど自責の念に駆られない。

皇族を追われたあの日から、何かを犠牲にしながら生きてきた。そうしなければ生きていけなかった。

そして、それは今も変わらない。その犠牲が友人の父親に代わっただけ。

ここまで考えて、自身を嘲笑する。

(…………いや、自分の事で手一杯なだけか)

ダラダラとそれらしい理由を並べたが、結局は私が不器用なだけだ。

自身の出生を知ってから、兄上と姉上と種違いと知ってから、私の頭はそれでいっぱいだった。

そこに飛び込んできた友人の父親の死。そっちに意識を向けられる程、心に容量が無かった。

「卑怯だ！」

スザクが声を上げる。

「黒の騎士団は……ゼロのやり方は卑怯だ！」

自分で仕掛けるのでも無く、ただ人の尻馬に乗って、事態をかき回しては審判者を気取って勝ち誇る！

あれじゃ、何も変えられない……

間違ったやり方でも手に入れた結果に、意味なんて無いのに……！！」

スザクの言葉に、兄上とカレンは肩を震わす。

場が静寂に包まれる。

誰も彼の言葉に、反論する事が出来なかった。

「さ、私達は……この辺りでお暇しましょうか。」

場の空気を変える様に、ミレイさんがいつもの調子で言った。

正直、こういう場での彼女は心強い。

兄上とシャーリーを残し、私達はその場を後にする。

その間、誰も口を開くことはなかった。

◇◇◇

『ねえ、アルカ。私達のしている事は、正しいのかな……』

「……………シャーリーのお父さんの事？」

『うん……』

クラブハウスの自室でC・C・と過ごしている時、カレンから電話がかかってきた。

「…何が正しいかは、結果が出るまで分からないよ。だから私達は、自分達の行いを信じて進むしかない。」

『分かっているけど…。でも……』

「犠牲が出る。だから足を止めるの？ そうじゃない、払った犠牲を無駄にしない為、前に進み続けるの。どれだけ恨まれようと、成し遂げなければただの人殺しで終わってしまう。」

そんな私とカレンの会話を、C・C・は私の膝の上に頭を乗せて、静かに聞いている。

『アルカは、強いよね。』

「……強い、強い。違うよカレン、弱い。だからそうやって割り切らないと前に進めない。」

『アルカ……』

「ごめんね。今日の作戦、不参加で。」

『いや、いいのよ。調子悪いんでしょう？ それに新型が来るまで、戦線に参加させるのは危ないってゼロも言っていたし。ゆっくり休んで。』

「うん、ありがとう。気を付けてね。」

カレンとの電話を終え、ケータイを放り投げる。

「今日は、片瀬とか言う男の救出作戦、だったか？」

私の膝に頭を乗せるC・Cが、口を開く。

「表向きには、ね。キョウトからの要請もあるし、団員達の声も上がっている。流石に無視するとゼロのようやく出来た信頼も揺らいでしまう。」

「だから、救出するふりをして、囮として見捨てると。正義の味方とは思えないな。」

「既に死に体とは言え、日本解放戦線の象徴である片瀬が生き残っているとすると、黒の騎士団への支持も支援も、二分化されてしまうから。」

「……まあ、良かったよ。あそこであいつが足を止めなくて。」

C・Cが落ち込む兄上の背中を押してくれたらしい。と言っても、殆ど悪口だった

みたいだけど。

「それにしても、解せんな。こんな状態のアルカを放置し、別の女に気を向けるなんて。」
「あはは……。まあ兄上とシャーリー、仲が良いから……。それに今日、休ませてくれたし。」

「私が言っているのは、あの男は言葉が足りん、という事だ。」

自身の出生を知ってから、今日まで。兄上と碌に話をしていない。

桐原との会合があったその日のうちに、シャーリーの父の死を知ったんだ、無理もない。

「……アルカ、無理するなよ。あまり抱え込み過ぎると、お前が壊れてしまう。」

C. C. の綺麗な手がアルカの頬に添えられる。

「ただでさえ、抱え込んでいるんだ。ルルーシユくらいになら、話してみてもいいとは思うが。」

その言葉に対し、アルカはその瞳を大きく震わせた。何かに怯えている、そんな風に見える。

「……無理にとは言わないが、心に留めておけ」

C. C. はアルカの膝から頭を下ろし、自身の横の空いているスペースをポンポンと叩いた。寝ろ、という事だろう。

アルカはそれに応じ、C・Cの横に寝ころぶ。

「まだ寝るには早……うわあ!？」

アルカの言葉を遮り、C・Cはアルカを抱きしめ、自身の胸の中へ引きずり込む。アルカを抱き枕にしている構図だ。

「いいから寝るぞ。寝れば幾分か、気分転換にもなるだろう。」

彼女の強引な物言いに、思わず苦笑する。

が、その強引さが心地良い。

アルカはそう考えつつ、静かに目を閉じた。

・
・
・

皆が寝静まった深夜、扉の開閉音でアルカとC・Cは目を覚ました。ルルーシュが帰ってきたのだ。

「おかえり……兄上」

「随分と遅かったじゃないか。首尾はどうだったんだ？」

「あ、ああ……。ただいま……」

姉上は寝ているし、明日は学校が休み。久しぶりに兄上と話せる時間が出るかもし

れない。

寝る前のC・Cの言葉を思い出し、意を決して口を開こうとする。

「あのね、兄上……」

「顔を見られた可能性が高い。」

「何?」「え?」

私の言葉を遮り、兄上が衝撃的な事実を口にした。

「持っていた銃が無くなっていた。俺が気絶している間に誰かが持ち去ったんだ。現場に血痕が残っていた。」

「という事は、少なくとも2人に……?」

「ああ、撃った奴と撃たれた奴、2人居る筈だ。」

「現場には誰が?」

「日本解放戦線の生き残りとブリタニア、それに黒の騎士団。前者2つの可能性は低い、俺がこうして無事なのだから。」

「黒の騎士団の方は?」

「無い……とは言い切れないが、少なくとも扇達は何時もと変わらなかった。」

「他に手掛かりは?」

私の言葉に兄上は顔を曇らせた。

「……あの戦場で、シャーリーを見た気がする。」

「ああ、お前とキスした女か」

今まで沈黙を守っていたC。C。が口を開く。

「つ……………、しつこいな！」

苛立ちを隠すことなく、兄上は声を上げる。

「確認しただけだ、色ガキめ。しかしだとすると、私達が当面探るべきは…」

まだ私は、兄上と話せそうにない。



アツシユフオード学園 学生寮 シャーリーの部屋

「どうして私が、他人の下着を漁らねばならんだ。この貸しは高いぞ。」

色とりどりの下着が入ったタンスの中を漁りながら、C。C。は文句を口にする。

「分かっている。……アルカ、女性がモノを隠す時は、一般的に何処に隠す？」

シャーリーと一番歳の近いアルカは感性も似ているだろうと考え、ルルーシユは聞く。

「ええ？ そんなの分からない……。うーん、ベッドの下？」

「エロ本か。」

「え？　そういう本ってベッドの下に隠すの？」

「男は大抵そうだ。試しにルルーシユのベッドの下でも漁ってみたらどうだ？」

「あるわけないだろう。そんなもの。」

アルカとC. C. の会話をBGMに、ルルーシユは時折口を挟みながら室内を物色する。

「日記も14日までしか書いてないし……」

シャーリーの日記のページを目に通しながら、アルカは呟く。

「…彼女のお父さんが亡くなった日だな……。あつ」

完全には振り切れていないのだろう、動揺からルルーシユが手に持っていた箱が零れ落ちた。

「これは……」

「兄上の写真……？」

その箱の中にはルルーシユの写真がいくつも入っていた。

「いじらしいじゃないか、容疑者にしては」

「本当に兄上の事、好きなんだね……」

「……………っ」

ルルーシユは表情を曇らせたまま、机の上に置いてある本を手取る。電車の時刻表

だ。あるページに付箋が貼ってあり、そのページをルルーシュは開く。
「…ナリタ……?」



ナリタ 慰霊碑の前

(ルル、どうしてこんな事を……)

ゼロの正体を知ってしまった。ヴィレッタという軍人にそそのかされ、ルルーシュの後を尾行した日の夜の出来事だ。

「さあ? どうしてだろうねえ。」

ふと、声が聞こえた。人を小馬鹿にした様な、男の声。

「立派な慰霊碑だね、シャーリー・フェネットさん。」

振り向いた先には、長身の男が居た。その目をサングラスで覆い、リズムを取るように一定の間隔で手を叩いている男が。

(え、誰?)

シャーリーは何も言葉を発していないのにも関わらず、男は続ける。

「酷い男だね、ルルーシュは。」

「どうして、ルルの事を……。」

怖い、とシャーリーは思った。全てを見透かしている様に語るこの男が。

「騙っていたんだろう？ ホントはゼロなのに。」

「誰なの、あなた……？」

新しい玩具を見つけた子供の様に、男は語る。

「彼は君のお父さんを殺す命令を出したその口で、君の唇を奪ったんだよ？」

「許せないよねえ？」

彼女は思わず後ずさる。

「罰を受けなくてはいけない、彼も。君も。」

「私も……？」

男の口が愉快そうに歪む。

「全部知っているよお、あの夜の事はね。」

ゼロの正体を、ルルーシユの顔を見たブリタニア軍人「ヴィレッタ・ヌウ」を撃った

時の光景が、彼女の頭の中に蘇る。

「君も殺人者、ゼロと同罪だね。」

シャーリーの顔がみるみる歪んでいく。

男はそんな彼女をたたみかける。

「その上、父親の死と引き換えに対価まで得て。」

耳を塞ぎ、崩れ落ちるシャーリー。聞きたくない、私の心を覗かないで。そんな気持ち
ちが頭を支配する。

人を導く教祖の様に、男は語る。

「罪を償い、心を解き放たないと、君もルルーシユもあまりに可哀そうだよ。」

男のサングラスの奥にある瞳には、アルカとルルーシユと同じ模様が浮かんでいた。

Stage 14 過去の負債

「……ここだと思ったんだがな。」

ナリタ連山の麓に建てられた記念碑。その前に3人は居た。

記念碑にはナリタでのブリタニアと黒の騎士団の戦いに巻き込まれ、亡くなった人々の名前が刻まれている。ユーフェミアが急いでこの記念碑を作らせたのは有名な話だ。

「手分けして探すしかないな。」

いつもとは違い、ゴシック調の服を身に着けたC・C・がいつもの様に無感動な声で提案した。

「じゃあ、3人で手分けを……」

「いや、二手だ。アルカは俺と一緒だ。」

「何を言う。アルカは私と行動する、お前が一人だ。」

「……何だと?」

「……はあ……」

2人の言い合いに、アルカは思わずため息を付く。

「あの、私を1人にするっていう選択は……」

「無い。」「無いな。」

アルカの第三の提案は、全く同じタイミングで一蹴された。

「お前は追われているだろう、そんなやつとアルカを一緒に……。周りにはまだ軍も居るんだぞ！」

ルルーシユの言う通り、周りには軍から派遣された兵士やKMFが復旧作業を行っている。

「何度も言わせるな、追われているのは一部だけ。こんな所に派遣されるような軍人が、私達の事を知っている筈がない。」

「そうだとしても……………」

「それとも自分の妹に、痴話喧嘩を晒すつもりか？ よく考えるんだな、ルルーシユ。正体がバレたのはお前だけ、そんな状態でアルカと共に女に会ってみろ。こいつまでバレてしまう。」

「……………」

C. C. はアルカの肩に手を回し、自身の身体に引き寄せる。

「なに、心配するな。こいつを危険に合わせるような事はしないさ。」

そうやってC. C. は、アルカの手を引きその場を去った。

「…もしかして、気を使ってくれた？」

C. C. の顔を見上げ、アルカは呟く。

「……今の状態では、ルルーシユと一緒に行動するのは気が重いだろ？」

「……………」

何も言い返さない代わりに、アルカはC. C. の手を強く握り返した。

◇◇◇

「じゃあ、高いところからでも見渡せばあ？」

馬鹿にしたような口調で、目の前のバイク跨る男は言う。

ルルーシユの女を見ていないか、聞いただけでこの態度。話にならない。

「分かったもういい。アルカ、行くぞ。」

「……………」

「…？ アルカ？」

アルカからの返事が無かった事を不思議に思い、彼女へ眼を向ける。

視線は一点に注がれていた、横を通り過ぎる登山鉄道に。

「あれ、兄上？ …あと一人は……誰？」

登山鉄道の車内に、見知った顔が一つ。ルルーシユだ。

その前を歩く長身の白髪の男。瞳をサングラスで覆い、口元は愉快そうに笑みを浮かべている。

「……あつ……………」

心臓の鼓動が早くなる。動揺でその目が大きく見開かれる。

「まさか、マオ？」

「…マオ？」

聞き覚えの無い名前に、アルカは首を傾げた。

「なあ、もう行っていいかな？」

蚊帳の外だった男が痺れを切らして、話しかける。

「おい、そのバイクを貸せ」

「C・C・？」

「はあ？嫌に決まってるだろ……………」

突然のC・C・の横暴な物言いに、男は反論する。が、彼女の纏う雰囲気それをねじ伏せる。

(兄上と口喧嘩している時とは、比べ物にならないくらいの威圧感だ…………)

態度を変える様子無く、C・C・は詰め寄る。その黄金の目は酷く冷たい印象を受ける。

「これが最後だ。いいから、寄越せ。」

山頂に続く山道を、2人乗りのバイクが疾走する。

「C・C・C. どうしたの？ そんなに焦って？」

バイクの後ろの席に跨り、その腕をC・C・C.のお腹に回すアルカが問う。

「ルルーシユと一緒に居た男に、憶えがあつてな……！」

マオの事を思い出し、ハンドルを握る手に力が入る。

「それってギアス能力者？」

「ああ……！ルルーシユにとつての天敵だ……！」

その言葉を聞き、アルカの腕にも力が入る。

アルカを連れて行くという選択は失敗だったと言える。

C・C・C.はこの時失念していた。マオがC・C・C.に向ける異常な執着を。後ろに座る少女に、危険が及ぶ可能性が高い事を。



ルルーシユのチェスの腕前はプロも顔負けだ。今まで、一人にしか負けた事無いし、チェスの代打ちでお金を稼いだこともあった。そんなルルーシユが。

(馬鹿な……この俺が完全に読み負けるなんて……………!)

全ての策が悉く潰される。達人同士の接戦では無い。まるで手玉に取られている様に、一方的にルルーシユが負けている。唯一彼を負かした男、シュナイゼルとのチェスだつてここまで一方的な展開にならなかつた。

(何者だこの男……………?)

「聞いて無いの? C. C. に。」

「っ!!」

C. C. の名を聞き、いくつかの可能性が浮かぶ。

「流石だねえ。僕の正体について一瞬で14の可能性を考え付くなんて。」

こちらの調子を崩すように、一定のリズムでマオは手を叩く。

「しかも、その内の一つは大正解。」

マオはサングラスをずらす。その現れた両目は赤黒く、幾何学めいた模様が浮かんでいる。

「ギアス能力者!!」

すかさずルルーシユはギアスを掛けようとするが、その前に彼はサングラスを元に戻

した。

「おっと、君のギアスは相手の目を直接見なければ使えない。そういうルールも全部分かっちゃうんだよねえ。」

「思考を読んだ!?!」

「そういうギアスなんだよ、僕のは。」

思考を読むギアス、不味いな。とルルーシユは考えた。

(俺のギアスも、アルカのギアスも発動条件は同じ。掛ける前に対策されてしまう……) ルルーシユの頭で考える癖は強みと言えるが、思考を読むことが出来るマオの前では弱点となる。

「ん、アルカ……? 他にも能力者が居るのかい?」

「……………っ!」

思わず舌打ちをする、この男の前では何もかも見透かされてしまう。

電車が大きく揺れ、その動きを止める。

山頂の駅に着いたようだ。

「んまあ、いいや。僕が用あるのは君。さあ、罰ゲームを始めようか。」

窓の先には銃を構えたシャーリー。マオに対して向けているのではない、ルルーシユに向けている。

「シャーリー……!!」

「なんだよ、折角ドラマチックにしてあげたのに。」

シャーリーのトラウマを利用して、ルルーシユを殺害しようとしたマオだが、それは失敗に終わった。

ゼロに対する憎しみとルルーシユに対する恋慕がごちゃ混ぜになった事で、まともな思考が出来なくなり、彼女の手綱を握ることが出来なくなった為だ。

「まあ、いいや。つまらないけど、2人まとめて……」

マオは電車の中に置いてある銃を取りに、中へと入る。その瞬間、列車のドアが閉まり、動き始めた。

「……! 誰だ!? 僕が気づかないなんて……! まさか!」

視線の先にはC・Cが居た。マオの方へ銃口を向けて、悲しそうな表情で彼を見つめている。

「やっぱり! 君なんだね! C・C……!」

マオは子供の様な無邪気な笑顔で、彼女を見つめる。がそれも一瞬の事。彼の視線は

別の者に注がれた。

銃を持っていない方のC・C.の手を掴み、嫌悪感を含んだ目で彼を見つめる少女、アルカに。

(C・C.、アルカ……!!)

ルルーシユの心の声が、頭に響く。

「ああ、そうか。君が。」

口元を歪めて、マオは呟く。その目に狂気を宿らせて。

「君が本当の、泥棒ネコか。」

嫉妬の感情に支配されているマオはこの時、大きな見落としをしている事に、気づく事が出来なかった。

◇◇◇

ナリタからトウキョウ租界へ向かう電車の中。

「まず確認したい。お前は敵か？ 味方か？」

シャーリーの記憶をギアスで消したルルーシユは、C・C.に問う。

「何を今更。」

いつもの調子で彼女は答える。しかし、その端正な顔は愁いを帯びている。

「あのマオという男は、他人の考えを読み取るギアスを持っている。それでいいのか？」
「そうだ、ギアスの発現の仕方は人によって異なる。マオの場合は、集中すれば最大500m先の思考を読むことが出来る。その気になれば深層意識まで読み取れる。頭で戦うタイプのお前には最悪の敵だよ。」

「深層意識……、トラウマとかも……？」

アルカが少し怯えた様に、C・C・に聞く。

「……………ああ。」

「……………まあ、想像はしていたがな。俺達以外にもギアスを使えるやつが居るってことは、あいつもお前と契約したのか？」

「15年前に。アルカと出会う前の事だ。」

「はん、大先輩って訳だ。」

15年前……、C・C・が本国に来る前の事だろうか、とアルカは考えた。

「私より前の契約者……」

少し、心がざわつく。

「で？ その大先輩は俺達の敵か？」

「マオの目的は私だ。敵と言っても命を狙ったりは……」

そこまで言って、C・C・はハツとした顔でアルカの方へ向く。

「……………C. C. ?」

ルルーシユはイラつきからか、そんなC. C. の様子に気付かない。

「あいつの能力条件は？」

「……………ああ。マオのギアスは強い。お前らの様に回数制限も、目を見るとかの制約も一切無い。」

ギアスの効力の強さは、素質によって決まる。素質が低ければ様々な制約を課されるし、そもそも発現しない場合もあるという。素質だけで言えば、ルルーシユやアルカよりも高い。

「ふん……………、素質、か。そういう意味ではアルカの素質は俺より低いという事か。」

アルカ本人から聞いた、彼女のギアス能力を思い出す。同系統の能力ならば、より限定的な能力を持つアルカの方が素質は低い。

ルルーシユはそこで安堵した。力が限定的な分、彼女とギアスの関わりが薄くなると考えたからだ。

(出来る事なら、アルカには普通の道を歩んでほしいからな……………)

目の前に座る妹へ、目を向ける。

俯いている為、表情は見えない。

「……………ふん、そうだな……………」

俺の眩きに対し、C・Cは何処か歯切れ悪く答える。

「…話を戻そう。弱点は無いのか？」

マオのギアス能力は分かった。確かに厄介だが、付け入る隙は必ずある筈だ。

「…強いてあげれば、マオは能力をオフに出来ない。常に周囲の心の声が聞こえてしまう。本人が望もうと、望むまいと。」

◇◇◇

ルルーシユの弱点であるナナリーとアルカ。

深層意識をマオに知られたことから、ルルーシユはクラブハウスに身を置き、2人を守っていた。

「最近はお兄様とアルカが家に居てくれるので嬉しいですよ！」

ナナリーはその顔に笑顔を咲かせながら言う。

「私も。久しぶりに姉上と一緒に過ごせて嬉しいよ。」

同じ様に、アルカも笑顔で応じる。しかし、その笑顔は何処かぎこちない。

自身が半分しか血が繋がっていない事を気にしている為だろう。

ナナリーに対しても、まだ話せていないようだった。

「アルカは昔から、すぐ何処かに行ってしまうから。口にはして無かったけど、心配

してたんですよ?」

「え? そんなにフラフラしてたっけ?」

「はい、まるでネコみたいに。お兄様とよく、離宮内を探し回ったんですから。」

ルルーシユ達が住むクラブハウス内のリビングで、姉妹は思い出話に花を咲かせる。

その一方で、彼女たちの兄、ルルーシユは――

「確かにアルカ達を守ることは必要だが、待っているだけでは……」

「黒の騎士団に捜させている。」

自室でC・C. と作戦を練っていた。いや、作戦会議というよりは言い合いに近い。

「ゲッターではなく、このトウキョウ租界に居たらどうする? 時間の無駄遣いだ。」

黒の騎士団は現在、エリアーで一番の反抗勢力と言える。

組織が大きくなった事で、そこに集まる情報、人、金も増えた。

しかし、あくまでも黒の騎士団は非名誉ブリタニア人の集まり。租界内までは、まだ

まだその力は及ばない。

「そんなことより私を使え。マオの目的は私だ、私が……」

彼女を知る者が見れば、同じ様に考えただろう。

珍しく焦っている、と。

「……なあ、ギアスを使い続けると、俺やアルカもあなるのか?」

ギアスの制御が効かなくなり、常に発動しているマオ。

「それとも、お前との契約を果たせなかったから。ああなったのか？」

ギアスを使った行きつく先が、あの状態ならば……………

ルルーシユの心に焦りが生じる。

「…使おうちにギアスはその力を増していく。克服できない者は、自らの力に飲み込まれていく。」

ルルーシユの顔に怒りの表情が浮かぶ。

「それを知ってて契約を持ち掛けたのか！ 俺にも、マオにも、アルカにも……………」

「……………そうだ。」

「契約の内容は？」

「……………」

C・C は何も答えない。

「お前は卑劣だ！」

ルルーシユの罵倒にC・C は少し、悲しそうな表情を浮かべる。

「捨てる時になぜ始末しなかった？ 力を奪うなり、命を奪うなり。その中途半端の所為で、シャーリーは!!」

ルルーシユは激しく彼女を責め立てる。無理も無い。彼女が過去に抱えた負債が、脅

威として身の回りの者を傷つけているのだから。

「マオの事に関して、別行動を取るべきだろうな。」

彼女はそう言つて、ルルーシユの部屋から出ようとする。

「今日からしばらく、隣の棟に移る。心配するな、アルカは連れて行かない。私の傍に居ると、狙われる可能性が高いからな。」

「隣？ 生徒会や文化部の部屋が……」

「そんなものは知らん。後処理はお前がやれ。」

そう言い残し、彼女は部屋から去った。

「あ、C・C……」

部屋を出ると、そこには不安そうな表情を浮かべたアルカが居た。人の感情に機敏な彼女の事だ、C・Cの今の表情を読み取ったんだろう。

「…アルカ、すまない。しばらくは別行動だ。」

先ほどのルルーシユとの会話とは打って変わり、優しい声音で語り掛ける。

「お前を守る為なんだ、分かってくれ。」

穏やかな表情を浮かべ、C・Cはアルカの頬に手を沿える。

「……………うん。」

暗い表情のまま、彼女は小さく肯定した。

「……すまないな。」

そう言葉を残し、C・C・はこの場を後にする。

「……………マオ。過去の契約者。」

1人残された廊下で、アルカは静かに呟く。

「私は彼を、認めない。」

そう呟いたアルカの瞳には、激しい怒りが宿っていた。

◇◇◇

「探しているのはリフレインの売人じゃない！ マオという東洋人だと言っただろ！」

C・C・の脚が、目の前の男の喉に突き刺さる。

「租界で東洋人って言ったら、あとは下働きしかいねえよ！ 警察にでも行けっつて！」

喉を潰されている男は、顔に苦悶の表情を浮かべながら答える。

マオを探す為、租界内で情報を集めているC・C・。

彼女の声音は珍しく感情的で、顔には焦りの表情が浮かんでいる。

「警察は嫌いだ！」

苛立ちからか、脚により力が入る。

「じゃあ、黒の騎士団にでも頼みな…、裏ルートなら、今はあそこが一番強い！」

そこが役立たずだから、こうして探しているんだろう。とC・C・は思った。

「どいつもこいつも、同じ答えを……!!」

「当たり前だろ……!!」

これ以上この男から有益な事は聞けそうにない。そう考えたC・C・は男を解放し、この場を去る。

「……どこに居るんだ、マオ。私はもう、お前とは……!!」

C・C・の思考を焦りが支配する。

このままでは、ルルーシュがゼロとして活動できなくなる。

このままでは、アルカに身の危険が及んでしまう。

(マオとアルカを会わせてしまったのは失敗だった……! 早く見つけなければ、あいつの矛先がアルカへ向かってしまう……!!)

初めて、私を受け入れてくれた。

初めて、私に感謝をしてくれた。

初めて、私自身を見てくれた。

モノクロだった私の世界に、色を付けてくれた大切な存在。

アルカアルカアルカアルカアルカアルカアルカアルカアルカアルカアルカアルカ

私の可愛いアルカ。

「必ず私が、マオを始末する……」

彼女の黄金の瞳は、何処までも冷ややかだった。

stage 15 歪み

『やあ、アルカちゃん。こうして話すのは初めましてだねえ。』

人を小馬鹿にしたような声が電話越しから聞こえる。

『どうしてこの番号を？って思ったでしょ。シャーリー・フェネットの携帯に番号が登録されていたからね。念の為、憶えておいたんだ。』

よくもまあ、こんなにペラペラと。苛立ちが募る。

『どうでもいい、早く要件を話して。』

『君はルルに似て言葉遣いが下品だねえ。まあそれは置いて。最初は君には用が無かったんだけど、予定変更だ。今からクロヴィスランドに来てよ、C・Cも呼んでい

るからさ。』

『3人で仲良くお話でもするつもり？』

『まさか。思ってもない事言わないでくれよ。僕には分かるよ、君の醜い心が。』

『泥棒ネコに相応しい罰を与えてあげる。』

そう言っただけで電話は切れた。

「……マオ、私が必ず……!」

クロヴィスランド。

クロヴィスが生きていた頃に彼自身が手掛けた遊園地。トウキョウ租界において有名な観光スポットだが、クロヴィスが死んでからは休園が続いている。

そんなクロヴィスランドのメリーゴーランドに跨り、子供の様にはしゃいでいる青年が居る。

マオだ。

「C. C. ! 君はなんて静かなんだ! 君の心までは読めないよ! やっぱり君は最高だよ!」

「……相変わらず子供だな。」

「白馬の王子様って言って欲しいなあ。君を迎えに来たんだからさ!」
「……………」

マオは子供の様な無邪気な顔で、嬉しそうにC. C. に語り掛ける。両目に赤黒く輝く彼のギアスがミスマッチで、何とも歪な印象を受ける。

そんな彼を見て、C. C. の隣に佇むアルカは、気味が悪いと吐き捨てた。

「隣に居るネコちゃんの声が五月蠅いけどね。」

マオはアルカを睨みつける。

「マオ、どうしてアルカをこの場に呼んだ？」

C. C. はアルカの少し前に立つ。マオから彼女を守るように。

「C. C. が僕を選ぶことは分かり切っていることだけど、幼い彼女ではそれを理解出来ないんじゃないかって思ってるね。C. C. が僕の手を取る様を目の前で見れば、彼女も分かってくれるでしょう？ 僕は優しいんだ、彼女がC. C. の事を諦めてくれさえすれば、彼女は殺さない。まあそれが出来なかった場合は——」

マオはアルカの方へ銃を向ける。

この場で唯一、思考が読まれてしまうアルカは動くことが出来ない。

下手に行動すれば、この男を逆撫でしてしまう。この手のタイプは精神が不安定で厄介だ。

「マオ、前にも言った筈だ。私はお前とは……」

それを理解しているのか、C. C. は話を進める。

「そんなの嘘嘘。C. C. は僕の事が大好きなんだからあ。」

そう言って彼は自身のヘッドホンを外す。

『ありがとう、マオ。……マオ。マオ。』

C. C. の声だ。

常に周囲の音が聞こえる彼にとっての精神安定剤の様なモノなのだろう。

「やめろ!!」

C. C. は声を荒げる。

「アルカ、君は分かるだろう? この幸せが。君も僕も同類の筈だ。彼女の声、体温、全てが心地良いだろう?」

「……っ!それは……」

「まあ君は僕も体験していないような事、彼女としているみたいだけど。そこは目を瞑ってあげるよ。どうせこれから先、彼女と居るのは僕なんだから。君には愛しの兄上も姉上も、友人だつて居る。それに加えてC. C. まで手に入れようとするのは欲張りなんじゃない? 冷静に考えればわかる筈だ、本当に彼女を必要としているのはどちらかが。」

ズカズカとギアスで人の心の中を踏み荒らして、気持ち悪い。嫌悪感で吐きそうになる。

「C. C. ……君だけだ、君だけなんだ。僕が欲しいのは! 君さえ来てくれれば……!」
マオはゆつたりとC. C. に歩み寄り、抱きしめようと手を伸ばす。

「やめろ！」

C. C. は悲痛な叫びをあげ、彼の手を振り払い、銃口を向ける。

「最初からこうしておくべきだったんだ……」

乾いた銃声が遊園地に響く。

「C. C. !」

肩を抑え、C. C. は血に膝を突く。

「やっぱりC. C. は僕を撃てなかった。C. C. は僕の事が好きなんだよ！ アハハハハ!!」

C. C. はマオを撃つことが出来なかった。一瞬だけ、ほんの一瞬、引き金を引くの
をためらってしまった。

狂った様に笑い続けるマオを無視して、アルカはC. C. に駆け寄ろうとする、が。

「おっと、君は動いちやダメだ。」

マオに銃口を向けられる。

「君はただそこで、指を咥えて僕とC. C. が愛し合う様を見ているんだ。どうせ無策
で来たんだろう？ 君もまだまだ幼いよねえ。」

そう、マオが言う様に、アルカはマオに打ち勝つ算段を立てずにここまで来た。頭に
血が昇っていたのだ。

ただでさえ最近のアルカは、自身の出生の事から、精神が不安定だった。そこに現れたマオという脅威。

嫌悪、怒り、焦燥、不安……様々な感情が彼女の中を駆け巡り、考えるよりも行動が先に出てしまったのだ。

「……お前は………!!」

アルカの顔に怒りの形相が浮かぶ。

「聞け！ マオ、私はお前を利用しただけだ！ そんな感情、私は持ち合わせていない！」

「……はあ？ 何言ってるの？ 嘘はいけないよ、嘘は！」

再び乾いた音が響く。

「ううっ！」

C・Cの言葉にならない悲鳴が、木霊する。

「嘘はダメなんだよ、嘘は！」

言う事を聞かない子供を叱る様に、マオはC・Cに語り掛ける。凶弾を彼女に浴びせながら。

C・Cの肩に、脚に、腹に。銃弾の形に合わせて穴が空き、そこから赤黒い液体が流れ出る。

「ねえ！ やめてよ!!」

「動くなつて言っているだろう!!」

アルカの頬を銃弾がかすめる。

「C. C.。僕ね、オーストラリアに家を建てたんだ。白くて綺麗な。とても静かな家。」
場違いな程に明るい男の声が、園内に響く。

「だけどオーストラリアに行くには、飛行機に乗らなくちゃいけないんだ。でも、C. C. を飛行機に持ち込むには、ちよつと大きすぎる。だからさあ。」

マオは手に持つ銃を投げ捨て、彼が用意したチェーンソーが置いてある場所まで歩く。

「コンパクトにしてあげる! これならあつという間だよ!!」

「やめて!」

その顔に怒りの表情を浮かべたまま、アルカはマオに銃口を向ける。

「邪魔するなつて言つただろう?」

声のトーンを低くし、不機嫌そうな表情を隠そうともせず、マオは言う。

「貴方がC. C. の事を本気で好きなら、それで良いと思つてた。彼女がそれで幸せなら、それで。だけどこれはどういうつもり? 自分を捨てたC. C. への復讐?」

「復讐? 違う、違う違う違う違う! そんな事、するもんか。これは感謝の気持ちだよ。」

「感謝……?」

アルカは信じられないモノを見たような目で、マオを見つめる。

「お前は、歪んでいる。」

声を震わせながら、アルカは言う。

「お前はC・C。自身の事なんて見ちゃいない! 彼女と一緒に居る自分が、自分自身に優しい世界が好きなだけだ! そんなお前に……!」

「…はあ? 歪んでいる、だってえ? アハハハハ! 君がそれを言うかい!」

「…どういう意味?」

アルカに顔に焦りが浮かぶ。

「4年前、E・Uの領土内にあった村で、君は何をした?」

「っ!!」

「マオ! やめろ!!」

鼓動が早くなる。

彼女の顔が恐怖で染まる。そのアメジスト色の瞳の焦点は合わず、銃を持つ手は震えている。

「ああ! いいところに来たねえ。ルルク!」

アルカは恐る恐る、その顔を後ろに向かせる。

そこにはルルーシユが居た。息が荒く、額に汗を流している事から、ここまで急いできたのが分かる。

「……あ、あにう、え……………」

来てほしくなかった。そんな言葉が彼女の顔から読み取れる。

「……………どういふ状況だ、これは！」

「今から君の妹の思い出話をするところだったんだ。君に似て嘘つきな彼女のね。」

「なんだと?」

その顔を歪ませ、マオは手を叩きながら語る。

「こいつはねえ、村を一つ潰しているんだよ。村人全員にギアスを掛けてね。優しくしてくれたにも関わらず。いやあ、酷い光景だ。この世のモノとは思えないねえ! アハハハ!!」

玩具で遊ぶ子供の様に、マオは続ける。

「日に日に数を減らす村人達を見て、君はどう思った? 良かれと思って口にした願いが、人を歪めたのを知って、君は何を感じた!」

「……………やめて……」

アルカのか細い声が口から漏れる。

「日に日に…………? アルカのギアスの効力は一日持たないんじや……………」

「まさか！ 大嘘だよ、そんなの。彼女自身がそういう使い方しかしない、っただけさ。」

「……やめてよ……」

その瞳から、涙が零れる。

「彼女のギアスは毒だよ、人を蝕み続ける毒。お願いっていうのが、いやらしいよねえ！」

自分は願っただけだから、知りませんって責任から逃れる事が出来るんだから！」

「私の心に入ってこないで……」

「ルルのギアスより効力が短いなあ？ とんでもない。彼女の願いを聞き届けたら最後、それは一生相手に残り続ける！ ギアス発動中も記憶が消えないというのも、いやらしい所だよねえ！」

ルルーシユの瞳が大きく揺れる。

「記憶が消えない……？ じゃあ、ギアスに掛かった者は、無意識に……。」

「そう、彼女の願いを全うする。自身がやるべき事と誤認したまま！ その人の在り方を徐々に歪めていくんだ！ 醜い力だねえ！」

「だからアルカは、その場で完了する願いしか、口にしない……。」

マオの口が三日月の様に吊り上がる。

「そして、自身のギアスが人を歪めてしまうのを、醜いのを知っているから、ギアスを掛

けた者は可能な限り殺す。醜い自分のギアスが、人を蝕んでいる様を見たくないから！」

「……それは、…私なりに、責任を………」

「責任……？ ハツ、違うね。逃げているだけだ。本当に責任を取るなら見届けるべきじゃないかい？ それを君は、心の奥底で分かっているながら、人を殺す。自分自身が耐えられないから!! それを歪んでないと言えるかい!?!」

一種の潔癖症に近い、とルルーシユは思った。

(ギアスを掛けた人間を見る目に、違和感があったが、そういうことか……)

思い返すは、ナリタ連山に居た囲碁を打っていた日本解放戦線の兵士。確かにそういったらを見てから、アルカの様子は目に見えて変化した。

「君は常に、ルルやC. C. に対して愛情を求めているよねえ？ 表面には出していないかもしれないけど、僕には分かる。君は愛に飢えている、僕と一緒にだ。」

「黙って……!」

「でもそんな君を誰が愛す？ 醜い力を持った君を。歪んでいる君を!!」

「黙ってって言っているでしょ!!!」

アルカの絶叫にも近い声が、響く。

「君は永遠に歪んだままで!! そんな君を……!?!」

乾いた音が響いた、発砲したのだ、アルカが。

「う、……か、はあ………」

お腹に風穴が空き、血を流しながらマオは地面に倒れる。

倒れ伏したマオに彼女は近づく。

「なぜ……思考が………うつ?!」

お返しと言わんばかりに、アルカはマオに銃弾を浴びせる。丁度C・C・が撃たれた場所だ。

「マオ、お前はもう………」

アルカの目が赤黒く染まる。

「私に関わらないで——」

◇◇◇

無意識にギアスを発動したのだろう、マオに自身のギアスが掛かった事を知ったアルカは、マオに止めを刺そうとした。が、それをルルーシュが止めた。

その後、ルルーシュはあらかじめギアスを掛けておいた警察を呼び、クロヴィスラン

ドを後にした。

そして、警察ヘリの中。

「ルルーシユ……アルカは………」

「分かっている、悪意があつてやつた事では無いのだろう。マオは人を煽るのに長けている人間だ。誇張表現もあつただろう。」

脅威を拭つたのにも関わらず、アルカは俯いたまま顔を上げない。

「私は………」

「アルカ。」

ルルーシユは優しく語り掛ける。

彼女はその声に肩を震わし、恐る恐るルルーシユの方を見る。

「俺は、お前の願いが醜いとは思わない。願いというのは人を動かす原動力だ。それを力として発現させたお前を、俺は兄として誇りに思っている。」

アルカは呆然と、ルルーシユを見上げている。

「それにその、すまなかつた。お前の悩みに気付いてやれなくて。まさか混血という事くらいでショックを受けているなんて、思っていなくてな。」

「だから言つたらう、お前は言葉が足りないよ。」

ルルーシユの言葉にC・C・が呆れた様に声を上げるが、

「ああ、そうだな。」

珍しく言い合いをする訳でも無く、すんなりと彼女の言葉を受け入れた。

「……半分しか、血が繋がって、いないこと……。兄上は、シヨックを受けなかったの……？」

「驚きはしたが、だからと言ってアルカに対する見方が変わる訳じゃないさ。前にも言っただろう、何が起きても俺達の妹はアルカだけだつて。」

「あ……………」

虚ろだったアルカの目に、再び光が宿る。

「ナナリーも同じ気持ちだ。一緒に居る時、いつもと変わらなかつただろう？」

「……話してたの……………」

「当たり前だろう、俺達は兄姉妹きょうだいなんだから。アルカが気を使ってナナリーに相談しない事くらい、想像出来る。」

静かに話を聞いていたC・Cが、ここに来て口を開く。

「……まあ、そういう事だ。だから言っただろう？ 話してみてもいいんじゃないか、つて。」

それと、と彼女は続ける。

「私はお前の全てを知っている。知った上で一緒に居るんだ、……わかるな？ 私もお

前の事、大好きだぞ。」

C・C・は優しくアルカを抱きしめる。子どもをあやす様に、慈しむ様に。

ルルーシユはそんな二人の光景を何処か複雑そうな表情で見ているものの、その顔に笑みを浮かべ視線をずらした。

「辺境の地にある村は大体、余所者には厳しいんだが、ここはお人好しが多いな。」
C・C・は焼き魚を食べながら、そう呟く。

「住まいだけでも有り難いのに、ご飯まで提供してくれて。感謝してもしきれないね。」
彼女の目の前に座るアルカは、嬉しそうに話す。

ブリタニア本国から逃げ出し、エリアーに向かっている最中に見つけた村。

本来は2、3日だけお世話になるつもりだった彼女達だが、もうかれこれ一週間程、厚意を受けていた。

「気を抜くなよ、アルカ。下心が無いとも限らん。」

「えー、そういうもん？」

「そういうもんだ。」

肉親と離れ離れになってからというもの、アルカは常に周囲の悪意に晒されてきた。
彼女の味方はC・C・だけ。

悪意を向けられる事には慣れていても、好意を向けられる事には慣れていなかった。

そんな中で、余所者であるC・C・とアルカを温かく迎え、歓迎してくれたこの村。

まだ10にも満たないアルカは、たったそれだけの事で、心を許すのに値すると判断したようだ。

良く言えば純粹、悪く言えば騙されやすい。

(まあ、その分。私がしつかりすれば問題ないか)

他人の感情には昔から敏感なアルカが、そう言っているんだ。そんなに神経質にならなくても問題はないか、とC・C・は判断した。

「でも、あまり長居するのは良くないよね…」

「まあ、そうだな。ブリタニアからの追手もあるし、なによりエリアーに着くのが遅くなる。」

彼女達の目的はあくまでもエリアー。慣れない逃亡生活で疲弊したアルカを休ませる為、C・C・はこの村に滞在する判断を下したが、見ての通りアルカもすっかり調子を取り戻した。いつまでもここに滞在するわけにもいかない。

「うーん、何か恩返ししたいなあ」

「恩返し?」

「うん、見ず知らずの私達に良くしてくれてる訳だし。ほら、家貸してくれた村長さんとか、いつもご飯くれる漁師のおじさんと肉屋のおじさんとか。あとは隣に住んでいるお姉さんとか。」

色々良くしてもらったからね、とアルカは呟く。

アルカは基本的人好しだ。他人からのお願いは断れないし、困っている人が居たら手を差し伸べる。

案外頑固な彼女の事だ、一度言ったら聞かないだろう。

それなら、とアルカでも簡単に、かつ危険が及ばなそうな恩返しをC・C・は提案する。

「……なら、村の奴らの話を聞いてやったらどうだ？」

「話つて……世間話とか、悩みとかそういうの？」

「ああ。アルカは昔から人の感情に敏感だろう。それにこの村には子供が少ない。お前みたいなやつと話すだけで案外人は、気が楽になるもんだ。」

アルカはその大きな目を何回か瞬きさせた後、その顔に笑みを浮かべた。

「お悩み相談……、それなら簡単に出来そう！」

こうしてアルカのお悩み相談教室が始まった。

アルカのお悩み相談は、ハッキリ言つて大好評だった。

人の感情を器用に汲み取り、的確なアドバイスを。かといってダメ出しをするのではなく、あくまでも本人を肯定しつつ、背中をちよつとだけ押す様は、村中の人々から支持を集めた。

それこそ、それでお金を貰えるくらいには。

アルカの純真無垢で幼い見た目の効果もあるのだろう。連日のように彼女の元には村人が訪れた。

C. C. が本来想定していたよりも、長い期間の滞在となってしまうているが、逃亡生活中で使うお金を稼げることもあつて、中々村から出れずにいた。

「案外お前、指導者とか向いているんじゃないか？」

「えー、やめてよ。私に人の上に立つ度量は無いよ。お悩み相談で十分。」

「ふ……。元皇族が言うことか？」

皆が寝静まった夜、2人は布団の中で談笑していた。

「……しかしアルカ、そろそろ区切りを付けておくんだな。長居し過ぎた。」

「うん……。そろそろ出ないと、だね。大丈夫。ちゃんと後腐れ無いようにするから。もう少しだけ……。ね。」

◇◇◇

アルカの元に1人の女性がやってきた。

「……………また？」

「……………うん、ごめんね。アルカちゃん……」

アルカ達が寝泊まりする家の隣に住むお姉さん。彼女がこうして私の元に来たのは

5 度目になるか。

相談内容はいつもと同じ、恋愛相談だ。

「もう告白しちやえばいいのに……。あの人も絶対、貴女の事好きだよ？」

「アルカちゃんと言うなら、そうなんだろうけど……。どうしても行動に移せなくて……」

奥手すぎる……。！とアルカは思った。

私達はいつまでもここに滞在する訳にはいかない。村を出る前に、この彼女に行動を起こしてほしいが……。

（無理矢理でも背中押さないと、一生このままなんだろうなあ……）

とアルカはここで閃く。後押し出来る良い力が、私にはあるじゃないかと。

C・C・は言っていた、使い方を間違えるな、と。

なら間違いなければ良い方向へ転がる筈だ。

「しようがないな……。取って置きのおまじないを掛けてあげる。……私の目をよく見て――」

アルカは初めて、他人の為にギアスを掛けた。

結果だけ言えば、大成功だった。

2人は結ばれ、村中から祝福を受けた。アルカにとつても、喜ばしい出来事だった。そして、彼女は自身のギアスを誇らしく思った。

(ギアスなら、他の人の悩みをよりの確に解決できる！)

半月ほど村に滞在したからか、アルカは完全に村の人々に情を抱いていた。

だがそんな村からあと少しで去らなければならない。それならば、せめてもの置き土産として私の力を残していこう。

幼いアルカはそう考えた。

それからというもの、アルカは相談に来た人達に躊躇いなくギアスを掛け始める。

好きな人にアタックしたいという願望を後押しし。

周りの目が気になって、やりたい事が出来ないという悩みを解消し……………。

様々な人の願いを、悩みを、欲望を、全て聞き入れ、そして開放していった。

村は訪れた時よりも活気に溢れ、賑やかになっていった。

異変が起きたのは、アルカがギアスを使い始めてから、3日後の事。

女性の変死体が村の中で発見されたのだ。

その服はズタズタに引き裂かれ、女性の局部の辺りに乾いた鮮血と白い染みがベツタ

りと付着していた。

恋愛相談に来ていたお姉さんだ。

「何で……？」

アルカの乾いた声は、誰にも聞かれる事は無く、彼女の恋人の悲鳴に掻き消された。

犯人はすぐに見つかった。魚屋のおじさんだ。

しかし、様子がおかしい。お姉さんを殺した動機をいくら聞いても、「頭の中の声が促した。俺は彼女の言う通りに行動しただけ」の一点張り。

これには駆けつけた警察もお手上げだった。

その日から、毎晩異変が起きた。

時には、犬や猫が無残に殺され。

時には、村人の家から金品が盗まれ。

時には、人の四肢が欠損した死体が発見され。

時には、時には、時には、時には、時には——

閉鎖的な村というのもあり、村全体がギスギスし始めた。

お前がやったんじゃないか。

あの家の男が、夜歩いていたのを見つけた。

あいつの様子が可笑しい。

アルカはその光景を見て、15世紀頃にあったという魔女狩りの事を思い出す。住民同士がお互いを告発し合い、罪の無いものが何人も死刑に処されたという、所謂集団ヒステリー現象。

今この村に起こっている事は、まさにそれだった。

「アルカ、村の様子がおかしい。出るぞ。」

夜の帳が完全に降りた深夜、C. C. は言った。

「幸い、私達にはまだ疑いが掛かっていないが、それも時間の問題だろう。」

「……………C. C. ……。わ、わたし……………」

その時、家の外から異臭が漂ってきているのに気づいた。

窓の外に視線を向ける。

火だ、火が上がっている。

火事に気付いた村人が、村の中央に集まり言い合いをしている。

その形相は、今にも殺し合いをしよう程だ。

「……………っ!!」

「アルカ!!」

アルカは思わず家から飛び出し、皆が集まる広場へと向かう。

「お前が火を付けたんだろ！俺は知っているぞ、お前が夜な夜な出かけているのを!!」

「なんだと!?　そういうアンタだつて……」

「ね、ねえ!　皆どうしたの!?　らしくないよ、落ち着いて!!」

アルカは言い合いをしている村人に駆け寄り、なだめようとす。

「確かに、最近の村の様子はおかしいけど。だからといってここで言い合いしても……!!」

「落ち着いて……だと?」

1人の男が呟く。

「言いたいことを言えなかつた俺に、我慢しなくていいと。おまじないを掛けたのはアルカちゃんじゃないか……」

その言葉にアルカは肩を震わす。

「頭に響くんだ、君の声が。我慢しなくて良い、つて優しい声で。後押ししてくれる。」

「……ち、違う……。わ、私、そんなつもりで…………」

アルカは顔を青くして、思わず後ずさる。

その時、村の端の方から女性の悲鳴が響いた。

その場から逃げる様に、アルカはその声のした方へ向かう。

「……何、してるの…………?」

そこには女性の身体があつた。四肢が切断され、白目を向いて息絶えた死体。

「……ああ、アルカちゃん。君の願いの通り、やりたい事をやっているんだ……。人の目を気にして出来なかつた事を。」

アルカの瞳に涙が浮かぶ。肉屋のおじさんだ。その手には赤く染まった肉切り包丁が。

「実はね、切断した腕と脚を調理して食べているんだ、それが美味しくてね。特に女性のお肉の方が柔らかくて美味しい。君に相談して良かったよ。」

男は身体を翻し、アルカの方へ向く。

「でもまだ、子供のお肉っていうのを食べた事無くてね。興味がある。」

そう言つて男はアルカの腕を掴み、押し倒す。

「……っ！ いやっ！ や、やめて!!」

「そんなに抵抗しないでくれよ！ 僕は君の願いの通り、行動しているだけなんだから！」

アルカは激しく抵抗する。が、大人の腕力に勝てる筈もない。

そして、目に涙を浮かべながら抵抗をする彼女の姿は、男の情欲を掻き立ててしまった。

「……ああ、なるほど！ 子どものままで死にたくないんだね？」

「な、何を……」

男はその顔に笑みを浮かべながら、ズボンを脱ぐ。

「大丈夫、ちゃんと大人にしてあげるよ……」

男は器用にアルカの服を包丁で切る。アルカの上半身が、外気に晒される。

「いやっ……!!」

「妻に先立たれてしまつてから、ご無沙汰でねえ。大丈夫！　ちゃんと満足させてあげるから！」

男の劣悪な顔が、アルカに近づく。

「い、いや……、わ、わたしに、触れないで!!　…助けて、C. C. ……!!」

乾いた音が響き、男は頭から血を流しながら、力無く倒れる。

返り血がべつとりと、アルカに掛かる。

「無事か！　アルカっ!!」

珍しくその顔に焦りの色を浮かべて、C. C. はアルカに駆け寄る。

「……し、しーっ……」

駆け寄つたC. C. にしがみつき、アルカは力無く彼女の名を呼ぶ。

「ああ、私だ。……すまないな。遅くなつてしまつて……。隠してある銃を取り出すのに時間がかかつてしまった。」

「あ、い、いや。大丈夫……。服を切られたただけだから……」

「C. C. はそんなアルカの身体を確認した後、自身の上着をアルカに着させた。……どうして、こんな事になった?」

C. C. の言葉に、アルカは村人達が集まっていた筈の村の中央に目を向ける。狂った様に笑いながら、殺し合う村人達。

1人の女性を囲み、鬨っている男達。

家屋に火を付ける女。

あらゆる家から金品を強奪している村人。

人を括り付け、火を灯す女。

辺りに点在する、人々の死体。

「人を殺す事が、こんなに楽しいなんて!!」

「見た目は最高だったが、こっちはダメだな。ギャハハハ!」

「これで、俺は裕福に……!!」

「前々から、貴方の事、気にくわなかったのよ!」

村のあちこちから、悲鳴が、笑い声が、怒号が、聞こえる。

そんな村人達が、共通して口にする事、

「頭の中の少女の声が、こうしると望んでいる。」

全身を返り血で染め、村の中央に立つアルカは天を仰ぐ。

「C. C. ……。私は、もう他人の為にギアスを使わない。」

まるで神に懺悔するかのように、空を見つめたまま、アルカは呟いた。

これ程の事を起こしながらも、アルカはその歩みを止める事は無かった。

マオの言う通り、確かに彼女は歪んでいるのかもしれない。

果たして足を止めなかった事が、彼女にとって幸運だったのかどうかは、今はまだ誰にも分からない。

Stage 16 もう一人の姉

「良かったのか？」

観光客、会社員……多くの人が行き交う空港で、黒色のウィッグを身に付けたC・Cはルルーシュに問う。

「何がだ？」

「分かりきったことを聞くな、アルカの事だ。一人でキョウトに向かわせるなんて……。」

ルルーシュの顔が曇る。

「……一人ではない、カレンも一緒だ。それにキョウトからのアルカ本人の指名だからな、無視も出来ない。」

この場に居るのはルルーシュとC・Cの二人だけ。現在、アルカは黒の騎士団の使者としてカレンと共に、キョウトに向かっている。

「それに……。」

「……？」

「ああいう事が合ったからこそ、俺達以外の人間とも関わるべきだと判断した。これは

兄としてな。」

ルルーシユが言うのはマオの一件の事である。

アルカのトラウマを掘り起こし、彼女の心を傷付けた一連の事件。

「……そうか。」

C. C. はそれ以降、アルカに関する口を口にしなかった。心配してた彼女だが、ルルーシユの言葉を聞き、落ち着くところに落ち着いたのだろう。

「……良いのか？ 私が使者で。」

「へりくだれば舐められる。そういう相手だろ？ 中華連邦は。」

黒の騎士団、ゼロの目的はブリタニアという国の崩壊。いずれ来る戦いに備え、国外にも協力者を増やしておく必要がある。C. C. の中華連邦行きはその第一歩だ。

「自信が無いな、私はお前と違って謙虚なのだから。」

「その調子でやってくれ。」

「お前の望み通り動いてやるよ。そうだな、報酬はアルカの一日だ。」

「……アルカの活動に支障が出ない範囲で頼む。どうしてか知らないが、お前と過ごした後、疲れた顔している事があるからな。」

「さあ、どうだかな？」

C. C. は意地悪く、笑みを作った。

そんな2人の会話を、声を少し離れたところから聞いている人物が居た。

「へえ、そりや都合いいや。」

◇◇◇

くしゅん、と車内に小さなくしゃみが響いた。

「風邪?」

「何処かで誰かが、噂しているのかも……」

キョウトの本拠地へと向かう車の中。

目隠しをされた2人の少女が口を開く。秘密結社であるキョウトの場所が公にされないようにと使いが施したものだ。

「相変わず、秘密主義なのね。」

「不自由をお掛けして、申し訳ございません。」

カレンの言葉に、運転手の男は抑揚無く応じる。

「まあ言っても仕方無いよ、カレン。キョウトも危ない橋を渡っているんだから。」

「ええ、分かっているわよ。ちよつと意地悪言ってみたくなっただけ。」

富士鋳山の麓から乗車して20分ほど、そろそろ着くころだろうか。

「えーっと、アルカを呼んだのは皇神楽耶様、だっけ？」

「うん、そう。キョウト六家の盟主。日本における貴い血。そして……」

「アルカの腹違いの姉……、ね。」

「そう、だね。」

アルカが日本人とブリタニアのハーフであることは、黒の騎士団内において有名な話だ。

桐原が提示した黒の騎士団への支援の条件は、アルカが皇家の血を引いていると公表すること。ゼロへ向けられる不信の解消、日本人達からの支持、ブリタニア人である彼女が組織に身を置く理由付け。様々な角度から見てもその方が良いとゼロも判断し、公表するに至った。

公表した時の黒の騎士団内には激震が走った。暇さえあればアルカに質問攻め、接し方もよそよそしくなり、一部の団員はアルカを姫と担ぎ始める始末。

そんなアルカの様子を不憫に思ったのか、はたまた一緒に居る時間を邪魔されたく無かったのか。C・C・Cがいつもよりも感情の籠っていない声で冷たく一言。騒ぐ団員達を鎮めた。

一部からの敬愛の眼差しは消えないものの、組織は落ち着きを取り戻した。

「見せたいものがあるって聞いているけど……。それだけじゃ無いよね……。きつと。」

「会うの、恐い？」

「恐いというか……、実感が湧かない。会ったことも無い異国の人が血の繋がった姉なんて……。私には兄上と姉上も居るのに。」

「ルルーシユとナナリーねえ……。あの2人も知らなかったんだ？」

「うん、そうみたい。……母上は謎の多い人だったから。今は聞くことも出来ないけど。」

「はあ……。あんたも難儀ねえ……。」

ふと、車の動きが止まる。着いたようだ。

「お待たせいたしました。どうぞ、こちらに。」

目隠しが外され、目に光が入ってくる。

「……………姉……か。」

アルカは本国で共に過ごした義姉達の事を思い返す。

比較的友好だったコーネリア、ユーフェミア、マリーベル、ライラ。

私達を目の敵にしていたカリーヌ、ギネヴィアを始めとするその他大勢。

今から会うであろう皇神楽耶は、果たしてどちら側に人間か。

そう考えると少し、自身の足が竦むのが分かった。

(……………カレンの言う通り、怖いのかも。)

口には出さない、けど。

カレンに縋る様に彼女の手を握り、アルカは男の後ろに付いていった。

◇◇◇

「へえ、似合うもんじゃない。流石皇家の次女。」

「まあ、まあまあ！ お似合いですわ！」

カレンと神楽耶が感嘆の声を上げる。

彼女達の目の前には顔を赤くして、その両手を下腹部辺りに添えて、モジモジしている着物姿のアルカ。

「ねえ…、からかってる？」

「え、何ですよ？ 本当に似合ってるわよ。」

「そ、そう……。」

何処か歯切れの悪いアルカ。

そんな2人の会話を横で聞いている神楽耶は、悪戯を成功した子どものように笑みを作る。

遡る事、30分前。

アルカとカレンが案内された和室には着物を身に纏った少女、皇神楽耶が静かに佇んでいた。

癖のない真つ直ぐな黒髪、スザクと同じ緑色の瞳。大和撫子を体現した様な少女だ。まだ年端もいかない少女とは言え名家の当主である神楽耶を前に、2人も自然と背筋が伸びた。

そんな2人を見て笑みを深くした神楽耶は、開口一番に「まずはおめかしをしましよー！」と言い放った。

そして今に至る。

(な、何で私だけ……、しかも)

今まで縁が無かった、日本の古くから伝わる正装である着物。慣れない文化を前にアルカはたじろいでいた。

しかも――。

「な、何で下着を…、身に着けちゃ、ダメ、なの……？」

「ええ!?! アルカ、貴女何も着てないの!?!」

顔を真つ赤にしながら、コクンと小さくアルカは頷いた。

「あら、昔の日本では着物の下には、身に着けなかつたのですよ? 今まで日本の文化に

触れてこなかった妹に、肌で文化を感じて欲しかったんですけど……」

「なるほど、文字通り、肌でね。」

「カレン、黙って！」

変わらず顔を赤く染めながら、睨みつけるアルカ。非常に嗜虐心を擲る光景である。やばい、何かに目覚めそう。とカレンは思った。

「まあ現代では、普通に下着を身に着けますけどね。着物専用のもありますし。」
「は？」

思わずアルカの口から漏れ出る。

「じゃあ何で……？」

「ちよつとした悪戯ですわ！ 固い顔していらしたので！」

神楽耶の顔に満開の笑みが咲く。

ダメだこの人、早くどうにかしないと。アルカは内心、呟いた。

「さて……、場も和みましたし、本題に入りましょうか。」

何処がだ。

「カレンさん、申し訳ありませんが席を外していただけますでしょうか？」

「ええ、分かりました。では、また後ほど。」

カレンは再び表情を引き締め、部屋を後にしようとする。

「アルカ、今度はあまり待ちぼうけさせないでね。」

カレンはそう言い残し、この場を去った。

部屋に一瞬の静寂が生まれる。

なんと声を掛けられいいのか、アルカの頭はそれでいっばいだった。

「……似てませんわね、私達。」

そんなアルカを見かねてか、神楽耶の方から口を開いた。

「……ええ、血は繋がっている筈なのに。」

アルカも神楽耶の言葉に応じ、重い口を開く。

髪の色も異なれば、目の色も異なる。

顔立ちに関してもそれぞれが属していた国の特徴が顕著に出ており、とても姉妹とは思えない。

「

ブリタニアは科学技術において、世界一と聞きます。遺伝子操作もお手の物かもしれない。

「

……まああの国ならあり得ますね。仮にもブリタニア皇族として育てるつもりだった様

ですから。純粋なブリタニア人に見える様に、手を加えていても不思議じゃありません。

「

それでも、私達は姉妹なのですわね。」

「……………」

肯定の言葉は出なかった。

血の情報だけで考えるのなら、彼女は確かに姉なのだろう。しかし、つい最近まで名前どころか存在すら知らなかった。そんな人をいきなり姉と呼ぶのは抵抗がある。

「……………あの、神楽耶様。」

「敬称は不要ですわ。それと敬語も。姉妹なんですから、お姉ちゃんと呼んでくれても良いんですよ?」

「……………えっと……」

戸惑うアルカを神楽耶は温かい目で見つめる。子を見守る母の様に。妹の面倒を見る姉の様に。

「アルカ、私は貴女という妹が居ると知って嬉しいんですよ?」

「……………え?」

「戦後、父と母は死に、血縁者で生存している者は柩木スザクただ一人。しかしそんな彼は自らブリタニアに飼われる事を望み、日本を裏切った。私は文字通り、天涯孤独だったのです。そんな折に貴女が現れた。」

神楽耶はアルカの頬に両手を添え、彼女の瞳を見つめる。

「半分とは言え、血が繋がっている正真正銘の妹。そして志を共にする同志。これが嬉

しくない訳無いでしょう？ 貴女はゼロ様と同様、私にとつての希望……光ですわ。」

神楽耶の目を見つめていたアルカは、静かに目を閉じる。

先程まで身構えていた自分が馬鹿らしく思えてきた。

彼女が言っている事は本心だろう。その緑色の瞳に一つの曇りも無く、純粹に出会いを喜んでくれているのを感じる。

神楽耶が姉だという実感は今一まだ湧かないが、彼女の好意も無下には出来ない。

「……わか、った……。すぐには無理、だけど。……頑張りま、頑張る……。お姉……。か、神楽耶……。」

神楽耶との距離感を掴めていないのか、上手く言葉が紡げないアルカを彼女は嬉しそうに見つめる。

視線をずらし、頬を赤く染めながら言葉をとどとどしく紡ぐ彼女が非常に愛らしい。

（お姉ちゃん、もしくはお姉様と呼んで欲しかったところですが、呼び捨てというのも生意気な妹みたいで良いですわね。）

想像よりも可愛らしい反応を示した異母妹に、神楽耶の心は温かな気持ちで満たされた。



着物から着替え、黒の騎士団の制服を身に纏ったアルカは、カレンと共に長い廊下を進む。

「神楽耶様とは仲良く出来た？」

KMFの格納庫へ続く廊下を歩きながら、カレンはアルカに優しく問いかける。

「うん…。ぼちぼち？」

「そつか。まあ、急な出来事で戸惑うのも無理ないけど、ちよつとずつ慣れていきなさいね？」

そう言いながら、カレンはアルカの頭を撫でる。

「……また、子ども扱いして……。」

「アルカの頭、撫でやすいんだもん。」

会話に花を咲かせつつも、2人は足を止める事無く歩み続ける。

アルカがキョウトに呼ばれたもう一つの理由。神楽耶の言う「見せたいもの」を見に行く為だ。その神楽耶は一足先に目的の場所へと向かった。

「見せたいもの」の内容は聞いていないが、指定された場所から推測するにKMFだろう。

「それにしても、アルカ専用のKMF、か。」

カレンは何処か複雑そうに、呟く。

「……？　不満？」

「不満というか、心配。戦力として頼りになるのは理解しているけど。それでも、まだ幼い貴女が前線に出るなんて。」

「……………」

「今更っていうのは分かっているわ。それでも……。……ねえアルカ、戦場は私やゼロに任せて、貴女はバックアップでも……。」

身近な人を、友人を失いたくない。手を汚して欲しくない。というカレンの想いがひしひしと伝わってくる。

シャーリーの件が合ったからだろうか。それとも自身の兄の事を思い出してからだろうか。

いや、その両方だろう。

そんなカレンに対して、アルカは安心させるように微笑みかける。

「カレン、前にも言ったでしょ？　私は死なないよ。」

ああ、その顔だ。彼女は決まってこういう時、儂く微笑む。触れれば消えてしまいうな。誰にも別れを告げずに去ってしまいうな。そんな顔。

（だから私は貴女が心配なのよ。）

キョウト KMF格納庫

「あー！ やつとききましたわ！」

神楽耶の少女らしい高い声が、格納庫内に響く。

「もう、遅いですよ！ 2人とも！」

「ご、ごめん……、着物を脱ぐのに手間取っちゃって。」

神楽耶を見上げながら、アルカは呟く。

「あら、私とした事が！ アルカが初めて着物を着た事、忘れてましたわ！ あまりにも

似合っていないので……」

ごめんなさいね、と神楽耶はアルカを撫でる。

何でこんなに子ども扱いされるんだろうか、と内心でアルカはため息を付いた。

「えっと、神楽耶様。これが……」

場の空気を変える様に、カレンが目目の前の鋼鉄の巨人を見つめ、呟く。

そこには全身を深い青色でカラーリングされたKMFが居た。

5〜6mほどはあるだろうか、一般的なKMFと比べると等身が高い。目を引くのは燕尾服の様に腰に装着されているバインダーと、額から伸びる一本の角。バインダーを

支える為か、脚部はがっしりとしている。下半身がしっかりしている分、上半身が華奢であり、何処か女性的な印象を受ける。

「ええ、紅蓮と同じ、第七世代相当KMF『無窮』むきゆうですわ。」

Stage 17 無窮

「無窮……………」

青色の巨人を見上げながら、アルカはその名を噛みしめる様に口にする。

「……………コックピット部分、やけに小さいですね……………」

カレンも同じ様に見上げながら、呟く。

「そりやそうよお。パイロットの子の身体に合わせて調整したんだからあ。」

間延びした女性の声が格納庫内に響く。

声の主の方へ、アルカとカレンは顔を向ける。

そこには白衣に身に包んだ褐色肌の女性が居た。その手にキセルを持ち、額にはチャ

クラの化粧。

「貴女は？」

アルカの疑問に神楽耶が応じる。仰々しく手を広げ、口を開いた。

「この方こそ、紅蓮二式、無窮の生みの親！ 名を……………」

「ラクシャータ・チャウラーよ。よろしくう。」

2人の言葉にアルカとカレンは驚きの表情を浮かべる。

「貴女が、紅蓮の開発者……?」

「そういうアンタが、パイロットの紅月カレンちゃんかしらあ。輻射波動は気に入ってくれたかしら?」

「え、ええ! それはもう……!」

カレンは顔を輝かせながら、激しく頷く。

「そつちの子がアルカちゃんね。ふうん、貰っていたデータ通り、本当に小さいわねえ。」
「あ、はい。皇アルカと申します。えーつと、データ通りというのは?」

「事前にキョウト経由でゼロからのオーダーが合ったのよお。無窮をワンオフ機として使いたいわって。その時にパイロット、つまり貴女の身長体重を教えて貰ったって訳。」

第七世代相当KMF『無窮』はラクシャータが過去に開発したものだという。性能がピーキー過ぎて乗り手が見つからず眠っていた無窮をゼロが嗅ぎ付け、アルカの為に調整させたらしい。

(……兄上、勝手に私の身体の情報流したな……。)

そういえばナリタでの戦いの前後位に、健康診断書を見せてくれて頼まれたな、とアルカは思い出した。

「最初に聞いた時は耳を疑ったけどお、あの無頼の戦闘データを見せられちゃね。納得せざる終えなかったわあ。私としても無窮のデータが取れる良い機会だったからね、急

ピッチで調整したわあ。」

「そ、それはありがとうございます……」

アルカは深々と頭を下げる。

「いいのよお。ふうん、それにしてもあんな化け物じみたデータを叩き出だすパイロットが、こんな可愛い顔した子達だったなんて……。ゼロも中々、隅に置けないねえ。」

「ええ！　ぜ、ゼロと私はそんな……」

カレンは顔を赤く染めながら、否定する。

満更でもなさそうだな、とアルカは思った。

「……えっと、無窮の腰回りに付いているバインダーの様な物は何ですか？」

「ああ、あれね。見ての通りバインダーよお。中に太刀とかマシンガン等の武装が入っているわあ。紅蓮の輻射波動の様な特殊武装は無い機体だからねえ、その分手数は多いわよお。」

ラクシャータ曰く、腰のバインダーも脚部の外郭も後付けしたオプシヨンパーツだという。戦況に応じて武装と換装を切り替えながら戦うKMF、それが無窮だ。

「だから、無頼の時にみたいなの戦い方してお。ゼロを泣かせることになるわよお。主に費用の面で。」

「あはは……。気をつけます……。」

ワンオフ機と言うだけあって、修繕費も無頼の比にならないだろう。気を付けないと……………」

「ラクシャータ博士は黒の騎士団の専属メカニックとして、加わってくれるそうですわ！ 良かったですね、アルカ！」

神楽耶の言葉に、アルカとカレンは、目をぱちくりとさせる。

「協力、してくれるんですか？」

「そのつもりよお。ゼロに付いていった方が面白そうだし？ 紅蓮と無窮のデータも取れるし、良い事尽くめなのよお。」

「ふふ、それは頼もしいです。よろしくお願いします。」

「よろしくう。良いデータ、期待してるわよお。」

じゃあ、早速。とラクシャータは呟き、アルカは首を傾げる。

「今からみつちり、戦闘シミュレーションをやってもらうからあ。」

「…………へっ？ 今からですか？ でも、もう日も傾きかけてますよ？ 今からやるんじゃ、租界に帰るのも遅くな……………」

「問題ありませんわ！ 泊っていかれるのでしよう？」

神楽耶がその顔に満面の笑みを咲かせ、声を上げる。

「ゼロから無窮の最終調整はしっかりする様に言われていてねえ。設備が整ってるキョ

ウトでやった方が楽だし。パイロットのデータを取りながら調整した方が確実だし。」
ラクシャータはゼロからの要望を思い出す。

それはもう、耳にタコが出来るんじゃないかという位、無窮の調整を行う様にと言われた。

（そんなにこの子が大事なのねえ。どういう関係何だか……。まあ、どうでもいいけど。）

ゼロの正体が気にならない、と言えば嘘になるが、ラクシャータからすればそんな事は二の次だ。

彼女にとって大事なことは、自分が手掛けたKMFがどの様な働きをするか。その一点に尽きる。

ゼロとアルカの関係を詮索するのを止め、意識を現実に戻す。

「カレンは？ カレンは知っていたの？」

「知っていたし、ちゃんと話したわよ。その時のアルカ、緊張からなのか上の空だったけどね。」

神楽耶との会合を意識するあまり、聞き漏らしていたらしい。

「まあ、そういう事だから。よろしくう。」

「……仕方ないか……。」

折角姉上と久しぶりにゆっくり過ごせると思ったのに……。内心溜息を付き、アルカは無窮のコックピットへ向かう。

「さあ、見せてもらおうわよお、アルカちゃん。その腕前を。」

◇◇◇

「疲れた……」

無窮の横に座り込み、その額から汗を流すアルカ。

汗によって濡れた髪が肌に纏わりついており、幼いながらも色香が漂う。

「二時間乗りっぱなしだったもんね、お疲れ様。」

そう言いながらカレンは、座り込んでいるアルカに水を差し出す。

「ありがとう……。まさかあそこまでキツイなんて……」

差し出された水を手に取り、喉を鳴らしながら飲み干す。

「あそこまでいくと、ただの悪ノリね……」

アルカの操縦技術が想定以上だったのか、後半のラクシャータは新しい玩具を見つけた子どものように、目を輝かせていた。シミュレーターの難易度をどんどん上げていき、しまいには数十機のKMFを同時に相手をさせられていた。

「あ、そうそう。ご飯前にお風呂にしましょう。って神楽耶様が。」

「確かにご飯前に汗を流したいかも。入ってこようかな。」

疲労が溜まった身体に鞭を打ち、アルカは立ち上がる。

「一個下の階の大浴場だつてき。行きましようか。」

アルカの手を取り、カレンは足を進めようとする。が

「アルカ？」

アルカは一向に足を進めようとしなない。

「大浴場つて、つまり、皆で一緒に入るタイプの、お風呂だよ、ね……」

「……………？ ええ、神楽様が3人で一緒に入りましよう！つて。」

「カレンと、神楽耶と……入る……………。べ、別々とか、出来ないかな……」

何故かアルカの歯切れが悪い。何か入りたくない理由でもあるのだろうか。

「え、何？ もしかしてアレ？」

「まだ来たことも無いです！」

「そうは見えないけど、太って恥ずかしい、とか？」

「体系の変化はありません！」

「自分の身体の発育の事、気にしてる？ そんなに心配しなくても、ちゃんと成長するわ

よ。」

「そんな心配もしてないです！」

思いつく限りの一緒に入りたくない理由を言ってみたが、どれも違う様だ。「じゃあ何がそんなに嫌なのよ……」

カレンが呆れ顔でアルカを見つめる。

「え、えーつと…、それは………」

「ほらほら、行くわよ！ 汗流さないと、気持ち悪いでしょう？」

カレンはアルカの背中を押し、大浴場へ強引に連れて行った。

・
・
・

「もう、遅いですよ！ 私ずっとこの格好で待っていたんですから！」

バスタオルを身体に巻いた神楽耶が頬を膨らまし、アルカをジト目で見つめる。

「ああ、すみません。何故かこの子、一緒に入るのを渋り始めて……」

「あらあら、なんと可愛らしい。そんなに恥ずかしがること、無いんですよ？ 姉妹なん

ですから！」

得意げな顔をしながら、神楽耶はその慎ましい胸を張る。

「いや…恥ずかしいという訳じゃ、ないんだけど……」

じゃあ、問題無いですね、と神楽耶は意地悪い顔を作り、怪しい手つきでアルカに忍

び寄る。

「な、何……？ そのいやらしい手つき……」

「も、ち、ろ、ん。その服を脱がすんですわ…、これからお風呂に入るんですから……」

「い、いや……2人が入った後に、自分で脱ぐから……」

忍び寄る神楽耶と全く同じ歩幅で、アルカは後退する。

「ふふ、そんな寂しい事、言わないでくださいな……。カレンさん。」

「ごめん、アルカ。いい加減覚悟決めて？ 私も早く入りたいし。」

アルカの後ろに立っていたカレンが、彼女の身体を拘束する。

「カレン……！ う、裏切り者！」

「さあ、アルカ。お姉ちゃんに見せて下さいな。その陶器の様な白い柔肌を……。さあ

さあ。」

神楽耶はアルカが着ている服に手を掛ける。

「た、助けて……、し、shirt……」

良いではないかー！ つと神楽耶の楽しそうな声と、アルカの助けを求める声が脱衣場内に木霊する。

「あらっ？」

アルカの肌を守る最後の布が取り払われたその時、神楽耶が疑問を口にした。

「虫刺され？ アルカの身体のあちこちに赤い跡が……」

肩、胸、背中、お腹。視線を下に向ければ、腰、太もも辺りにも。身体のあちこちに赤い跡があつた。

肌が白い分、とても目立っている。

「虫刺されって……、あー……」

神楽耶の言葉に反応したカレンが、アルカの身体をまじまじと眺める。

「……あまり、見ないで……、その、恥ずかしいから……」

頬を赤く染めながら、近くにあつたタオルを手元に手繰り寄せ、その小さい身体を覆い隠す。

「アルカ、折角綺麗な身体なのですから、虫刺されといえど、放置してはいけませんよ？

あとで塗り薬、差し上げますね！」

「……あ、ありが……とう……」

◇◇◇

「疲れた、本当に疲れた。」

神楽耶に借りた寝間着に着替えたアルカは疲れた顔を隠そうともせず、布団の上で眩く。

「そうね……、私も神楽耶様のエネルギーに押されっぱなしだったわ……」

同じ様にカレンも疲労を顔に浮かべながら呟く。

妹であるアルカに会えたことが嬉しいのか、神楽耶の口は開いたままだった。

普段の学園生活の話から、アルカとカレンの子ども時代、恋愛話。常に質問攻めで振り回されっぱなしだった。

「そういえば、神楽耶様は気づいてない様だったから聞かなかったけど、あんたの身体のマーク、誰が付けたのよ？」

「え、その話蒸し返す？」

「仕方無いじゃない、あんなの見せつけられちゃ。んで、誰よ、あそこまで貴女に執着している男は？」

「え、えーつと……カレンの知っている人……ていうか、男……じゃないというか。」

アルカの言葉を聞き、カレンの顔が固まる。

何言っているんだ、この子は。そんな言葉が表情から読み取れる。

「え、え？　じゃあ、男じゃないって事は女？　マジで？」

思考をフル回転させる。

私知っている知っている人で、女性………。アルカの傍に居る女性………。

生徒会メンバー、ナナリー、黒の騎士団の女性陣………。

ううん、どれも違う。彼女達に対するアルカの態度は普通だった。

「……………あ、C.C. ……………？」

アルカにとつての恩人。幼い頃からの付き合い。そして、ことある事にアルカに対してスキンスリップを取るあの態度。

「……………あ、…うん……………。そ、そうデス…………。」

あの誰に対しても媚びない高圧的な態度。

感情を表に出さない人形のような見た目。

そんな彼女が……………？

「え、ええ!? 嘘! 彼女が!? ちょっと、どういう事!? 一体いつか…」

「もう話おしまい!! 明日もあるんだから、寝よ!!」

「…あ、ちょっと!」

布団を被り、アルカは横になる。

それっきり彼女は口を開かなかつた。

「……………もう、絶対いつか、聞き出してやるんだからね!」

翌日 キョウト KMF格納庫

『いいい？ アルカちゃん。今回のシミュレーションの結果が、無窮にそのまま反映させられるわ。』

一般的なKMFよりも小さいコックピット内で、ラクシャータの声が響く。

『昨日は無窮の慣れてもらうために、雑魚を沢山倒して貰ったけどお。今日の相手に対して無双出来るとは思わないでねえ。』

眼前に仮想の戦場と一機のKMFが映し出される。

現状、唯一の純日本製KMF。黒の騎士団のエース。

「紅蓮、二式。」

『アルカ、手加減は無しだから。』

アルカの顔に好戦的な表情が浮かぶ。

「…上等………！」

◇◇◇

時を同じくしてアツシユフオード学園。

「放せよ！ この父親殺しが!!」

「っ!!」

神楽耶と同じ緑色の瞳が大きく見開かれる。

「お前は7年前に実の父親を殺している。ふん、徹底抗戦を唱えていた父親を止めれば戦争は終わる？　子どもの発想だねえ。実際はただの人殺し。」

死の淵から蘇った男、マオの言葉がスザクの心を切り刻む。

「違う！　僕は…、俺は!!」

そうしなければ、ルルーシユとナナリーの身が危なかった！

そうしなければ、あの男が支配者になっていた！

スザクの頭に過去の光景がフラッシュバックする。

「よかったねあ、バレなくて。周りの大人達がみくんまで嘘をついたお陰さ。」

傍に居るルルーシユが口を開く。

「それじゃあ、枢木首相が自決することで軍部をいさめたって……」

「大嘘だよ、何もかも。」

「仕方が無かった！　そうしなければ、日本は……君たちは……」

「今更後付けの理屈かい？　この死にたがりが……!」

何時もの朗らかな表情は無く、恐怖に怯える子どもの様に、スザクは顔を歪める。

「人を救いたいってえ？　救われたいのは自分の心だろ？　それに殉じて死にたいんだ

よねえ？　だから何時も、自分を死に追い込む!」

シンジユク事変、ホテルジャック、ナリタ。彼はいつも自分から、危険に飛び込んでいった。

「う、……うわああああ!!」

スザクは悲痛な叫びを上げ、膝から崩れ落ちる。

「お前の正義は歪んでいるんだよ！　は、血は争えないねえ、君はアルカによく……うッ」

「……？」

急に言葉を切り、頭を抱え始めたマオの様子にルルーシュは訝しげな視線を投げる。

「……ああ……、五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い、五月蠅いんだよ!!　頭の中の声が、彼女の声が!!」

「アルカの、ギアスカ……」

アルカが掛けた「関わるな」という願いが彼を蝕んでいるのだろう。

「彼女の事を考える度に、頭に響くんだ……、余計な声を増やしやがって……。」

フラフラと覚束ない足取りで、マオは講堂の出口へと向かう。

「おい、待て……!」

その時、講堂の扉が開いた。マオが開けたのではない。

「マオ……」

スーツに身を包んだC・C・だ。

「ああ……C・C……。迎えに来てくれたんだね……。さあ、一緒に……っ」
子どもの様な笑顔を浮かべながら、C・C・を抱きしめようとするマオ。
そんなマオに対し、彼女は彼の手を振り払い、懐から銃を取り出す。

「マオ、さよならだ。」

銃口を彼の首筋に当て、引き金を引く。

「……がっ……」

その両目に宿っていたギアスの模様は消え、マオは静かに崩れ落ちた。
倒れた彼を見下ろし、C・C・は呟く。

「マオ。Cの世界であっても、お前とは金輪際、関わる事は無いだろう。」

マオから視線を外し、空を仰ぐ。

「願い、か。」

彼女の呟きは誰にも聞かれる事無く、虚空へと消えていった。

stage18 初陣

アッシュフォード学園 中等部

(芸術週間、ねえ……。)

芸術に対して多大な尽力を注いできたクロヴィスに因んで設けられたイベント。通常授業は全て美術系科目へ差し替えられ、これに合わせてクロヴィス記念美術館も開館するとか。

(……ねむ。)

先日キョウトから帰ってきたばかりなのに、勘弁してほしい。とアルカは筆を走らせながら思った。

(ただの授業だったなら居眠り出来るのに、こうも美術系科目ばかりだと実技が多くて……)

ふわあ、と欠伸をしながら目の前のモデルに目を向ける。

クラスメイト同士で二人一組のペアを組み、お互いをモデルにして人物画を描く、という内容だ。

私の相手はクラスメイトの……えっと。うん、まあ。名前はこの際、どうでもいいだ

ろう。

「ア、アルカちゃん！ 私、しっかり描くからね！ 頑張つてその愁いを帯びた綺麗な顔、絵にするから!!」

「は、はあ……。」

ペアであるクラスメイトのテンションがやけに高くてやりにくい。

（こんな事、している場合じゃ無いんだけどなあ。）

そう、今日の夜には大事な作戦が控えているんだ。黒の騎士団にとつても、私にとつても。

なにせ今晚は……



「本日は藤堂鏡志郎の処刑日ですが……」

髪を後ろに纏め、眼鏡を掛けた理知的な男、ギルバードが口を開いた。

「立ち会うこともなからう、既に日本解放戦線は無いのだ。」

それに応じたのはエリアー現総督、コーネリア。

視線の先には列車に収納されていく無数のサザーランド。

「……いや、待て。銃殺はあの男に。」

「総督！」

後ろに佇むギルフォードの方へ視線を向けた時、少し離れたところから声がした。彼女の妹であり、副総督のユーフェミアだ。

「すまないな、急で。美術館の方はよいのか？」

「式典は午後からなので。」

ブリタニアの魔女として、兵士として恐れられるコーネリアは、式典の様な華やかなイベントには参加しない。柄じゃない、と自分自身で考えているからだ。

そういう帝国臣民を喜ばせる様なイベントは、ユーフェミアに一任してある。それは今回の美術館の落成式も例外では無い。

「それよりイシカワで不穏な動きってNACが……」

ユーフェミアはその顔に影を落とし、不安を吐露する。

「バックに居るのはEUか中華連邦だろうな。ガン・ルウを確認したとの情報もある。しかし、これはホクリクを平定する好機だ。」

反乱分子を叩き潰す為、これからコーネリアは精鋭達を率いて租界を離れる。ユーフェミアを残して。

まだまだ一人立ちが出来ていない妹に対し、柔らかい笑みを浮かべ、安心させる様にユーフェミアの顔に手を沿える。

「こちらにはダールトンを残しておく、それと……………」

「やあやあやあ！ コーネリア殿下にユーフェミア殿下！ ご機嫌麗しゅう！」

白い軍服に紫色のマントを身に着けた銀髪の女性。ノネット・エニアグラムが人の良さそうな笑みを浮かべ、右手を上げながら近づいてくる。

「彼女も租界に残る、何かあれば力になってくれるだろう。」

「エニアグラム卿！ どうしてここに？」

「いや、殿下のお見送りをしようと思ひましてね。これから戦地へ赴くのでしよう？」

「戦地と言つても相手は小物、すぐに済みますよ。それよりユフィの事、よろしく願ひします。」

コーネリアはノネットに対し、軽く頭を下げる。

士官学校時代の彼女の事を知らない者が見れば、目を疑つただろう。皇族としてのプライドが高い筈のコーネリアの今の態度に。

「そんなかしこまらなくても良いんですよ、殿下。私達の仲じゃないですか。後輩の頼みを無下にする程、捨てちゃいけませんよ。」

それに、と彼女は言葉を続ける。

「そろそろデスクワークにも飽きてきたところでしてね。戦場が恋しくなってきた所です。」



「良いのかなあ？ 黒の騎士団と手を組んじゃって。」

「藤堂中佐を助ける手があるの？」

「キョウトの言葉でもある。新型もかしてくれというし。」

藤堂鏡士郎の懐刀、「四聖剣」の朝比奈、千葉、卜部が順に口を開く。

「でも主義主張がちよつと違うような……」

「私達は民族主義じゃない。分かっているくせに。」

四聖剣の中でも最年少である朝比奈は、ゼロに対する不信感を隠そうともしない。

「……いずれにせよ、細かいことは中佐を助け出してからだな。」

四聖剣で唯一、沈黙を貫いていた仙波が話をまとめる。

朝比奈の言う事ももつともではあるが、黒の騎士団以外に頼れる者が居ないのも事実。
実。

「分かりました。藤堂さんが居る所が、俺の居場所ですから。」

そんな調子だから同性愛者と誤解されるんだ、と千葉は思ったが口には出さなかった。
た。

「それにしてもあんな幼い子どもまで参加しているんだな……」

ト部が少し悲しそうな顔をして、呟く。

彼の視線の先には淡いミルク色の髪をした少女、アルカ。

彼女は今、ラクシャータとカレンと共にKMFの整備を行っている。

「……聞けば12歳らしい。そんな子どもが戦争、か。世も末だな。」

その凛々しい顔に影を落とし、千葉は呟く。

「12歳!? その歳でKMFを操縦しているのかい? 未恐ろしいねえ……。」

「だが兵士と言えど、幼いのも事実。我々がしつかりしなければ。」

四聖剣の面々はお互いに顔を見合わせ、力強く頷く。アルカの存在が、彼らの結束力をより強めた様だった。

そんな中、アルカはというと。

「パイロットスーツって、身体のライン結構出るんだね……。」

頬を赤らめ、恥ずかしがっていた。

「改めて言わないでよ……、私も結構恥ずかしいんだから……。」

赤を基調としたカレンのスーツに対し、深い青色のスーツ。操縦の妨げにならない様にか、身体のラインにピッタリと密着し、幼いながらもスラリとした身体が強調されている。

「本当にこんなので運動性が上がるんですか?」

カレンが訝しげな顔をしてラクシャータに問う。

「上がんないわよお。」

キセルを手で遊びながら、ラクシャータは眩く。

「はあ!?!」

アルカとカレンは、思わずそろえて声を上げる。

「生存率が上がるの。」

そんな2人の様子を気にすること無く、ラクシャータはいつもの調子で答えた。

そう言われてしまうと、何も反論できない。

アルカとカレンは、恥ずかしいけど我慢するか。と2人揃って俯いた。

『着替えたか。』

ふと、機械交じりの男の声が響いた。

「ゼロ。」

『どうだ? パイロットスーツの着心地は?』

「えーつと、恥ずかし……」

「はい! 黒の騎士団のエースとしての気が、より引き締まる思いです!」

アルカの言葉を遮り、カレンは身体の姿勢を綺麗に正し、答える。

(嘘つけ!!!)

さつきまで同じ事言っていたのにこの変わり様。流石生粋の猫かぶり……。

『そうか、それは何よりだ。今後の戦果に期待しよう。』

「はい!!」

まあカレンがゼロに尻尾を振るのは今に始まった事じゃないし、彼女のモチベーションに繋がるならいいや。

アルカはため息を付きつつ、言葉を飲み込んだ。

『アルカ。』

「なに？」

カレンから視線を外し、アルカの方へ向く。

『今回の作戦だが、一番危険なのは君だ。同時に成功確率が高いのも君となる。ここで君という大事な戦力を失う訳にはいかない。』

「……………」

『死ぬな、これが私から君へのオーダーだ。』

そういえば家でも同じ様な事を言われたな、とアルカは思い出した。

勿論、今より冷静さは欠いていたし、兄上としての心配だったけど。

(ゼロの立場からもう一度言うなんて、本当に心配性。)

ふふ、とその端正な顔に笑みを作る。

「その願い、ちゃんと聞き届けたよ。」

『取り敢えず、無窮での初陣おめでとこう。戦闘データがたくさん取れそうなので、最高じゃなくいい。』

ラクシヤータの間延びした声が響く。

『軽く作戦のおさらいをするわねえ。作戦場所はチョウフ基地外周。警備するブリタニア軍の一掃、及び白兜以外の増援の掃討。時間はゼロが撤退の指示を出すまで。つまりは皆が安全に遂行出来る様、アルカちゃんが敵を引き付ける……、シンプルな囮作戦ねえ。』

彼女の声を片耳で聞きながら、無窮の武装を再度確認する。

『無窮の運動性能を活かす為、単騎での作戦遂行……、まあ当然ねえ。』

ゼロは僚機を付ける事を強く推していたが、アルカ本人がそれを却下した。

無窮の性能が高過ぎるが故に、第四世代相当の無頼では付いてこれず、かえって足手纏いになってしまうからだ。ここで戦力を浪費するのは賢い選択とは言えない。

それを伝えたらゼロルルルーシユも渋々ながら了承した。

『時間だ。アルカ、頼む。』

新たにゼロの声が響く。

『ええ。』

操縦桿を握り、無窮を起動させる。

『無窮、皇アルカ。出ます。』

◇◇◇

チョウフ基地を囲う様に配備されていた軍用のトラックが、KMFが。次々と激しい音を立てて爆発する。

「つー、コーネリア殿下が不在の時に!!」

サザールランドを駆る男は思わず舌打ちをする。

コーネリアの不在を狙ったかのような黒の騎士団の襲撃。

サイタマでもナリタでも、ここ最近の戦闘は全てコーネリアの指揮と精鋭のお陰で黒の騎士団と渡り合ってきた。

しかし、今はそのどちらもこの場には居ない。

『なんだ、このKMF…、うわあああ!』

『攻撃が当たらなっ!!』

『おい、こんなやつ、見た事無いぞー!』

さつきからずつとこの調子だ。

基地の正面ゲートを警備していたKMFとの通信が途絶えたと思つたら、今度は仲間達のノイズ混じりの悲鳴。恐らく破壊されたのだろう。

サザールランドの速度を上げ、仲間の元へと急ぐ。

角を曲がり、また直進し。進むに連れ、KMFやトラックの残骸が増えていく。

「そろそろ、か……。っ!?!」

目を疑つた。目の前の光景に。

一般的なKMFよりも高い等身。燕尾服の様な腰に着いたバインダー。額から伸びる一本の角。両手にはKMFの装甲をも貫く太刀。額から伸びる一本の角。両手にはKMFの装甲をも貫く太刀。

そんな青いKMFが複数のサザールランドと戦闘をしていた。

いや、戦闘にすらなっていない。蹂躪という表現が正しいだろうか。

「敵はたった一機……。の筈なのに……。」

アサルトライフルは全て避けられ、近接戦闘は全て受け止められ、スラッシュハーケンはその手に持つ太刀で切断される。

「イレブン風情が……!」

数では優位に立っていた筈なのに。一機一機確実に潰されていく。

アサルトライフルで牽制していたやつは、投擲された太刀が脚部に刺さり動けなくなった。

近接戦闘を挑んだやつは、コックピットを太刀で貫かれた。

スラッシュハーケンを飛ばしたやつは、お返しと言わんばかりのスラッシュハーケンを吹き飛ばされた。

あまりの戦力差に絶望を覚え、操縦桿を持つ手から力が抜ける。

そして、

「何だ!? 何処に消えた!?!」

急に視界から青いKMFが消えた。意識を一瞬だけ、ほんの一瞬だけ外しただけなのに。

青いKMFの位置を確認する為、ファクトスファイアを起動させようとする、が。同時にけたたましい警告音がコックピット内に響く。外の様子を映すモニターにノイズが走り、コックピット内に熱が籠ってきているのが分かる。

「…ああ、なるほど。後ろだったのか……。」

男はサザランの爆発に巻き込まれ、その生涯に幕を下ろした。



「これが、無窮……。」

サザールランドの後ろから突き刺した太刀を引き抜きながら、アルカは呟く。

「やっぱりシミュレーターと全然違う。」

キョウトで散々シミュレーターを行ったが、実戦はこれが初めて。

無窮の性能は彼女の想像以上だった。

アルカの操縦に寸分狂いなく付いていく反応速度。

無茶な戦闘も可能にする耐久性。

サザールランドの攻撃を受け止め、叩き潰す圧倒的な出力。

立体的な動きを可能にする運動性能。

「試しに白兜の動きを真似してみたけど、無窮で再現できた。これならあいつとも渡り

合えそう。………ん？」

ふとKMFの駆動音が聞こえ、意識をそちらへ向ける。

地に伏していたサザールランドが起き上がろうと、動いている。

「ああ、そういうえば頭を吹き飛ばしたただけだったね。」

無窮をゆっくりサザールランドに近づける。

「いめんね。」

無窮の足をゆっくり上げ、コックピット目掛け踏み下ろす。上からの圧力にコック

ピットは音を立てながら拉げ、動かなくなった。

「無窮での戦闘も大体慣れた。後は与えられた役目を……。」

『見た事無いKMFだが、黒の騎士団の新しい機体か?』

ふと女性の声が響き、アルカはそちらへ意識を向ける。

そこには第五世代KMF「サザーランド」の改良機。「グロースター」が居た。

(グロースター? 今コーネリアは租界に居ない筈……。)

グロースターはエリアー内では現状、コーネリアとその精銳の者達が乗る機体だ。

しかしそのコーネリアは精銳を連れ、イシカワへと向かった筈。

(コーネリアが戦力を一部残した……いや、だとしたら一機では来ないだろう。)

この場に居る筈の無い目の前の存在に、アルカは思考を巡らす。

『これはお前がやったのか?』

テロリストに対して世間話をするかの様に話しかけてくる軍人に、アルカは少し呆れ

顔になる。

「…そうだと云ったら?」

『おお! 女だったか! いや、凄まじいなあ! 黒の騎士団のまともな戦力は赤いや

つだけだと思っていたが、お前と言ひ、基地内で暴れているやつらと言ひ、考えを改め

る必要があるな。殿下にもそう伝えておこう。』

コーネリアに対してコンタクトが取れる女性騎士……。いくつかの可能性がアルカの脳内に浮かぶ。

『……ただまあ、これはおいたが過ぎるんじゃないか？』

アルカの両肩が急に重くなった。実際に重くなった訳では無い。強いプレッシャーを感じたのだ。

「……………貴女は…？」

『おや、これは済まない。騎士ともあろう者が、名乗るのを忘れていたよ。』

最近、ブリタニア本国からとある女性騎士がエリアーへ渡航してきた、という情報は黒の騎士団にも届いていた。

その女性は帝国における最高戦力であり、コーネリアの士官学校における先輩。コーネリアの紹介でアルカ自身も会った事がある。

ここまで予想が当たって欲しくないって思ったのも久しぶりかも、とアルカは冷汗を流しながらグロースターを見据える。

『ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラムだ。女同志、仲良くしようじゃないか。』
「ほんっと、最高の初陣。」

Stage 19 ノネット・エニアグラム

「……っ!!」

顔をしかめ、思わず舌打ちをする。

「改良機とは言え、グロースターでここまで…。これがナイトオブブラウンス……!」
今ならハッキリと分かる。強い。

第七世代相当のスペックを持つ、無窮。ブリタニア軍のランスロットとも渡り合えるであろう数少ない機体。本来であれば第五世代であるグロースターでここまで苦戦はしない筈だが。

『ハッ! 私を前にしてここまで戦えた相手は、エリアーでお前が二人目だよ!!』
「そりゃ、どうも……!!」

突っ込んできたグロースターのランスを右手に持つ太刀で受け流し、もう片方の手に持つ太刀で反撃に出る。

『だが、甘いな』

しかし、その反撃はグロースターの鋼鉄の身体を切断すること無く、空を切った。

ノネット・エニアグラムと会敵してからというもの、ずっとこの調子だ。無窮の攻撃

はグロースターを捉える事は出来ず、グロースターの攻撃は無窮を貫く事は叶わない。まさに一進一退の攻防。

(…決めきれない……！ スペックではこちらが圧倒しているのに!!)

グロースターのスラッシュハーケンを躲しながら、アルカは思考を巡らせる。

(ゼロ達がチヨウフ基地に入ってから、もう随分と経った。ブリタニアからの援軍も考えると、私に残された時間は少ない。)

目の前のグロースターに目を向ける。

その紫の装甲に包まれた機体の所々から、攻撃を与えていないのにも関わらず、黒煙が立ち込めている。

(私の役目はあくまでも足止め。目的を見失うな、アルカ・アングレカム。)

気づかないうちに生まれていた闘争心を抑え、頭を冷やす。

(今のノネットさんは、ナリタでの私と同じ状況。いくらパイロットの質が良かろうと、機体がそれに追いつかない。それなら、私が取るべき選択は…)

ナリタ戦で乗っていた無頼の状態を思い出す。

負荷が特に掛かった箇所。

最初に動かなくなった箇所。

状況を分析していると、コックピット内にゼロ||ルルーシユの声が響いた。

『……アルカ…、目的は完了した。撤退だ……』

「……？ 分かった。」

何時もとは違う覇気の無いルルーシユの言葉に疑問を覚えつつも、意識をグロースターに戻す。

「楽しんでいるとこ悪いけど、ここらで退散させてもらいますよ、っと。」

届くことの無い独り言を呟き、アルカは操縦桿を強く握る。

そしてグロースター目掛け、無窮を前進させる。

『……までやってなお、正面から来るか！ 舐められたものだな!!』

無窮を迎え撃つ為、グロースターはランスを構える。

(やはり甘い。逸る気持ちを抑えきれず、最後は正面突破。声から推測するに、まだ若いのだろう。)

まあ、戦場に立った以上、歳は関係無いがな。とノネットは口角を上げながら呟く。

(機体の動きも悪くなってきた。相手には悪いが、ここで私も決めさせてもらう。)

狙うはコックピット。

KMFを確実に無力化するの一番手っ取り早い手段だ。

アルカもそれを理解しているのか、右手に持つ太刀をグロースターのコックピットの位置に構える。

(破壊は出来なくても、せめて無力化を……！)

互いの機体が変わるその直前、手に持つ太刀をグロースターの頭に目掛け、無窮は投擲した。

「っ！ この距離で!! 自ら優位を放棄するか!」

今ランスで太刀を弾いてしまえば、相手を仕留める事は叶わない。そう考えたノネットはすかさず回避行動を取るが、急な操縦に機体が追い付かず、思った様に動かない。放たれた太刀はそのままグロースターの頭を吹き飛ばす。

「……っクソ!」

「思った通り! そろそろ機体が限界でしょう!!」

一瞬機体が揺らぐも、即座に立てなおし、構え直す。

それに対しアルカは、無窮の右半身の外部装甲をパージ。機体を軽くし、さらに速度を上げる。

「メインカメラは潰されてしまったが、この距離だ! 私が外す訳が無いだろう!」

変わらず正面から来る無窮に、ランスを突き刺す。

金属が拉げる音がし、何度も味わった敵を貫く感覚を機体越しに感じた。が

「……っ! 外したか!!」

貫いたのはコックピットでは無く、無窮の右半身。腕を吹き飛ばし、コックピットを

かすめたが、アルカには届かない。

「私の本命はこっち!!」

すかさずバインダーから太刀を取り出し、グロースターの脚部を切断する。

グロースターはそのままバランスを崩し、地に伏した。

脱出機能が作動する様子は無い。

「……ナイトオブナイン…、ノネット…エニアグラム……」

『アルカちゃん、ブリタニアからの援軍のご到着よお。早く撤退しなさいな。』

タイミングを図ったように、ラクシャータから再度撤退するようにとの指示が下る。

「……………わかりました。皇アルカ、帰投します。」

帝国最強の騎士の一角を仕留めるチャンスではあったが、欲を出して援軍に追いつかれても意味が無い。と思考を切り替え、無窮を脱出ポイントに向け、走らせる。

「はっはーん、なるほど。外部装甲だったのか。目測が狂ってしまったな。」

コックピットから出たノネットは、去っていく無窮を見据える。

その無窮の姿は最初に見た時よりも、右半身がスリムになっていた。頭を潰した時、パージしたのだろう。

「それにあのパイロット、貫かれる直前で軌道を変えたな？」

機体の面積が減ったところで攻撃を外すほど、ノネットは甘くない。

目測のほんの少しのズレと、アルカによる咄嗟の軌道変更。

その二つの小さい要素が合わさった事により、彼女はノネットを出し抜く事が出来た。

「あれだけのKMFを問題無く扱える操縦技術。とつさの判断の良さ。目先の利益に捕らわれない冷静さ。いやあ、敵にしておくには勿体無いな。」

しかし、とノネットは手を顎に添え、考え込む。

「閃光を彷彿とさせる、そんな戦い方だったな……」

・
・
・

黒の騎士団 トレーラー ゼロの自室

「そんな……、スザクが……。スザクが白兜の、パイロット……」

焦点が定まらない目でルルーシユは呟く。

「兄上……」

そんなルルーシユの手を握りながら、アルカは心配そうな表情を浮かべ、彼に寄り添う。

「ふん、思ったより重症だな。」

「C・C。」

そんな中、C・C. がいつもと変わらない無感動な表情で部屋に入ってきた。

「今回の作戦も、スザクへのアピールのつもりだったんだ……」

枢木スザクにとって、藤堂鏡志郎という男は親であり、兄の様な存在だったという。

そんな藤堂を慕っていたのをルルーシユも知っていた。そこで大々的に彼を救うことで、スザクのゼロに対する認識を変え、味方に引き入れる。そういった狙いも今回の作戦にあった。

その話を聞いたC・C. は呆れた表情で「殊勝なことだ。その行動力を少しでも女に向ければ、卒業できるだろうに。」と言い放っていた。

「ナナリーの事を守って欲しかった。あいつの居場所はあそこでは無い……」

「…おい、またお前は……」

「C・C.。大丈夫だよ。」

ルルーシユの背中を彼女のなりに押そうとしたのだろう。C・C. は口を開こうとしたものの、アルカがそれを静止した。

俯いているルルーシユの顔に両手を添え、自身に向かせる。

「兄上。彼を仲間に取り入れたいなら、いい方法があるよ。ただし、これがラストチャン

ス。」

「…ギアス以外でか？」

「ええ。まだ切つてない手札が一枚あるでしょう？」

◇◇◇

「申し訳ありません、殿下。私とした事がしくじりました。」

トウキョウ租界に佇むブリタニア政庁。その一室でノネットはコーネリアに報告を行っていた。先日 of チョウフ基地の件の事だ。

『いえ、確かに藤堂を奪還されたのは痛いですが……。租界を空けてしまった私の落ち度でもあります。今考えるべきは今後の対策でしょう。』

「そう言つて頂けると助かります。」

『黒の騎士団の新型が6機…、頭が痛い話だ。』

珍しく顔を曇らせたままコーネリアは頭を抑える。士官学校時代の先輩であるノネットを前にしているからだろうか。普段の彼女ほどの力強さは感じられない。

「基地に突入してきた白いやつが4機、藤堂が乗り込んだ黒い機体。それに私が交戦した青い一本角…ですね。解析によると白いやつ of の性能はグロースター以上、黒いやつと一本角 of の性能はランスロットと同等、第七世代相当だとか。」

『何より問題なのはそれを乗りこなす人材を奴らが確保していたという事実。はあ…、戦闘データが取れただけでも儲けものか。』

「そうですね、今回の規模の小さい戦闘で新型を引きずり出せたのは不幸中の幸いと言えます。それと、一本角との戦闘データを解析に掛けたのですが、以前ナリタに現れたという亡霊のデータと一致します。同一人物と見て間違い無いかと。」

ノネットは考え込む様な素振りを見せたが、それも一瞬の事。何かを決意した様に顔を引き締め、口を開く。

「今はまだ及びませんが、あの一本角のパイロットはラウンズ相当のパイロットのなる可能性が高いです。ジノやアーニャに見られた傾向が出ておりました。そしてこれは所感ですが…」

『?』

「閃光…、かつての彼女に通ずるモノが見受けられました。それこそ成長したあの子を見ている様な。探りを入れてみる価値はあるかと。」



「あらノネット、珍しいわね。」

淡いミルク色の髪をした少女、アルカの手を引きながら、マリアンヌは優雅に笑みを

作り来客に話しかける。

「ご機嫌麗しゆう、マリアンヌ殿下。それにアルカ皇女殿下。いやあ、休暇を頂きましてね。コーネリア殿下が良くこちらにいらつしやると聞いて足を運んだ次第です。」

「あら、私達はついで、つて事?」

頬を膨らまし、マリアンヌはノネットに問いかける。

勿論ノネットにそんなつもりは無いし、マリアンヌもそんな事は分かり切っている。

マリアンヌの常套手段だ。人をからかう為、わざと意地悪な言い方を取る。悪戯好きな彼女の性格がよく表れている。

これで相手がコーネリアやジェレミアであれば、真に受けて面白いのだが。

「はは、まさか。アルカ様に会いに来たんですよ。」

膝を折り、アルカに視線を合わす。マリアンヌの服を掴み、後ろに隠れている者の、聞こえるか聞こえないかくらいの大きさで「こんにちは」と呟いている。

「それじゃ、私がついでつてこと?」

「おっと、失言でしたかな。」

ノネットがアルカの元に訪れる様になったきっかけは、コーネリアだ。

コーネリアの先輩であるノネットは、彼女から良くマリアンヌやアルカの話聞いていた。マリアンヌから訓練を受ける傍らで、アルカの面倒を良く見ていたという。

異母兄弟に対しても情が深いコーネリアだが、その中でも群を抜いてアルカの事を気に掛けていた。

単純に憧れの娘だからか、KMFを駆る騎士として育てられているからか。おそらくは両方だろう。

アルカが幼いながらも人並外れた才能を持っている事はノネットも聞いていたし、ここまで話を聞かされると他人事の様にも思えなくなる。

結果、コーネリアに付き添う形で訪れ、それ以後はマリアンヌに代わって訓練をした。り、教鞭を振るったりしている。

「その後の首尾は如何ですか？ アルカ様。」

「……えっと、剣術で、クロヴィス兄様に勝ったり、ユフィ姉様にテストの点数で勝ったり、しま、した。」

「おお、それは頼もしい。私も鼻が高いですよ。」

ノネットは笑みを作り、アルカの頭にポンツと手を乗せる。

「私としては、まだまだだけどねえ。せめて優等生には勝ってもらわないと。」

「それは手厳しい。」

ノネットは苦笑する。

マリアンヌのそういう所が苦手だった。

アルカに対して少し厳しすぎる。将来的には戦場に出る訳なのだから、力が入ってしまうのも多少は仕方が無い事だが、それを差し引いても過剰なのだ。まだ5歳にもなっていない娘に、皇族きつての切れ者と名高いシユナイゼルに勝て、など普通は言わないだろう。ルルーシユ様やナナリー様に対する態度を知っている分、余計にそう思う。まあその分、周りがアルカに対して優しくするから、アルカ自身は健やかに育っているのも何とも言えないが。

「…今日は、訓練、見てくれるの?」

思考に更けていたノネットの意識は、アルカの声で現実に戻される。

「ええ、そのつもりですよ。そうですね、今日はKMFの動かし方についてレクチャーしましょう。」

「あら、それは助かるわ。お願いしてもよろしくて? 今日にはナナリー達の勉強を見ないとなの。」

「はい、お任せください殿下。さあ、行きましょうか、アルカ様。」

差し伸べられた手をアルカは掴む。

「…行って、まいります。母上。」

「ええ、頑張つてね。」

ノネットに連れられアルカはその場を後にする。

その後はコーネリアも合流し、3人で日が傾くまで一緒に過ごした。

「また、夢…。最近、多いな。」

重たい瞼を開け、身体を起こす。

カーテンの隙間から、自然の光が入ってきている。どうやらまだお昼らしい。

「完全に寝過ぎしちゃった。」

今日は平日。その事から言わなくても今置かれている状況が分かる。

特に焦る様子も無く、アルカは再び身体を横にさせ、隣に居るC・C・に抱き着く。

(今の夢は、本国に居た頃の…、でも……………)

「学校は良いのか？」

ふと、上からC・C・の声が聞こえた。起きていたみたいだ。

「うん、良い。身体が怠い、重い、動かない。誰かさんの所為で。」

「ふ、それならマッサージでもしてやろうか？ きつと気持ちいいぞ。」

C・C・は妖艶な笑みを作り、アルカの太ももに手を這わせる。少し擦ったくて、アルカの小さい身体が少し跳ねた。

「…今日どころか明日も動けなくなりそうだから、遠慮しておく……。」

それは残念だ。とC。C。は這わせていた手をアルカの背中に回す。

「……夢を、よく見るのか？」

「……？ 最近、多い、かな。」

「……そうか。まあ、お前は一度眠ると長いからな。その分、見てしまうんだろうな。」

睡眠が長いのも、夢を見るのも昔からの事なのに、C。C。は時々こうやって聞いている。いつもの事なのに、まるで心配するかの様に。

「…禅定って知っているか？」

「仏教のやつ？ 心を静めて無色界に到達するって言う……。」

無色界——、欲望も物質的条件も超越し、ただ精神作用にのみ住む世界……って前に何処かで学んだ気がする。

「ああ、それだ。まあ私から言わせてみればただの通信手段だな。」

普段から脈絡無く、意味深な言葉を言う事が多いC。C。だが、今日のはホントに話が掴めない。

「通信手段？ 無色界との？」

「ああ。通信手段という意味では睡眠も同じ意味だな。」

「それじゃあ、私達は寝ている間に何処かと通信しているってこと？」

「私はそう考えている。お前は以前に枢木スザクの記憶を夢で見たと言ったな。つまりは……。」

そう語るC・C。普段と変わらない口調に声音。直に来る彼女の体温も何時もと変わらない筈、なのに少し怖い。

「……っ。」

淡々と語っていたC・C。は言葉を区切る。

「いや、何でもない。昔本で読んだ内容を最近見かけてな。久しぶりにアルカに話を、と思ったんだが。あまり好きではなかったか。」

「あ、ううん。そんな事無いよ。内容が難しくて、ね。今寝起きで頭が働いて無いから……。」

しばらく2人の間に沈黙が訪れる。

「……やっぱりマッサージ、施してやろう。」

そう言つてC・C。は身体を起こし、私の上へと乗る。

「え!?、い、いや……。今日一日大人しくしてれば大丈夫……。」

「そんな寂しい事を言うな。これでも腕には自信があるんだ。色々とほぐしてやろう。」

まだ日も落ちていない平日の午後。

少女のくぐもった声が部屋に木霊した。

Stage 20 騎士

「枢木スザク。」

凜とした少女の声が木霊する。

これから仕える事になる主、ユーフェミア・リ・ブリタニアの声だ。

「汝、ここに騎士の誓約を立て、ブリタニアの騎士として戦う事を願うか。」

ブリタニアの伝統とされる騎士の任命式。この場に立てるのは純粋なブリタニア人のみ、の筈だった。

「Yes, Your Highness.」

「汝、我欲を捨て、大いなる正義の為に剣となり、盾となることを望むか。」

「Yes, Your Highness.」

この式を皮切りに、任命された者はその生涯を捧げる事になる。

スザクは腰に携えていた剣を引き抜き、剣の柄をユーフェミアに向ける。これも古くから伝わる伝統だ。

剣を受け取ったユーフェミアは、その刀身をスザクの両肩に置き、高らかに宣言する。

「私、ユーフェミア・リ・ブリタニアは、汝、枢木スザクを騎士として認めます。」

言葉を終えたユーフェミアは、スザクに剣を渡し、受け取ったスザクは刃を収める。彼はその場に立ち上がり、来賓の貴族の方へ手を向ける。

貴族たちの顔は一部の人間を除いて冷ややかであった。

(やはり、受け入れられないか……)

無理も無い。ブリタニア帝国史上初の、異国の騎士。それもナンバーズ出身。

(何を弱気になつていているんだ……。覚悟していた事じゃないか。僕は正しいやり方で変えていくんだ。)

覚悟を決め、貴族達の冷ややかな目から主人を守る様に、スザクは佇む。

しばらくの間、会場は静寂に包まれていたが、とある人物が沈黙を破った。

特別派遣嚮導技術部のリーダー、つまりはスザクの元直属の上司。ロイド・アスプルンドだ。彼はその顔に穏やかな笑みを浮かべ、手を叩いている。

そんなロイドを呆然と眺めていると、横からも拍手が聞こえた。コーネリア・リ・ブリタニアの腹心の部下、アンドレアス・ダールトン。そしてナイトオブナイン、ノネット・エニアグラム。

ロイドに続いて、その2人もスザクに対し、拍手を送る。

その光景に思わず、スザクとユーフェミアは表情を柔らかくする。

実力主義のブリタニア帝国において高位に位置する3人が拍手をしたからであろう。

冷やかな表情を送っていた貴族達も渋々といった感じで拍手を始めた。

（ああ、やはり。僕は間違っていないかった。こうして正統な手段で結果を得れば、認めて貰えるんだ。）

ゼロが現れてから、ルルーシユと再会してから。自身の正義を何度か問い直した。迷いもした。本当に自分がしている事は正しいか。

（ルルーシユとナナリー、見ているかい？ これで少しは安心してくれるかな？ それにアルカ、ありがとう。君の言葉に、僕は励まされた。）

だがこれで証明された。こうして結果として返ってきた。
（僕はもう、迷わない。）



時を同じくして、エリアー近海。黒の騎士団が保有する潜水艦の中。

『それでは、黒の騎士団再編成による新組織図を発表する。』

扇やカレンを始めとする幹部の面々と、新たに加わった藤堂と四聖剣の前に立ち、ゼロルルーシユは説明する。

度重なるゼロの奇跡、キョウトの支援、藤堂や四聖剣の加入によってより大きな組織となった黒の騎士団は、作り変えられた。

レジスタンスとしてでは無く、軍隊として。

『軍事の総責任者に、藤堂鏡志郎』

『情報全般、広報、諜報、渉外の総責任者に、デイトハルト・リート』

『零番隊長、紅月カレン』

『作戦遂行補佐に、皇アルカ』

聞きなれない役職に、カレンは困惑の色を浮かべる。対し、横に佇むアルカは感情を表に出さず、ゼロの言葉を待つ。

『アルカとカレンに関しては私直属の部下となる。よろしく頼む。』

カレンは嬉しさを隠そうともせず笑みを浮かべ、アルカはやはり表情を変えずに返事をした。

「はい！」

「…ええ。」

作戦遂行補佐、文字通り作戦の成功の為にゼロの指示の元、独立して動く役職。立場的には藤堂と同等位だ。

幹部席への指名はゼロの信頼の表れ。一般的な黒の騎士団メンバーならば、誰もが憧れるポストの筈であるのに、アルカは少しも喜びの色を浮かべない。

(……結局、守られちゃっているな。本来は私が守る筈だったのに。)

ゼロルルルーシユのアルカに対する想いは変わらない。アルカがいくら戦果を上げようと、力を示そうと、彼からすれば守るべき対象なのだ。出来る事なら戦場に出て欲しく無いし、黒の騎士団にも参加して欲しく無い。

しかし、いくらアルカを戦場から遠ざけようとしても、彼女自身がそれを望まない。加えて、皇という名前がそれを許さない。

だからルルルーシユはゼロ直属の作戦遂行補佐という役職を用意し、アルカをそこに座らせた。いつでも守れる様に自身の目が届く範囲で、なおかつキョウト六家の血筋に相応しい地位。

そんな彼の気遣いをアルカは感じているからこそ、カレンの様に純粹に喜べない。

本来、ルルルーシユとナナリーを守る騎士として育てられたアルカからすると、逆に守られるというのは複雑なのだ。

(頼りにされるのは嬉しいけど、なんかこう、ね。)

思考に更けているアルカを他所に、ゼロはその後も次々と役職を発表していく。

口煩い玉城を納得させる為に適当に用意した役職を発表し終わったタイミングで、

デイトハルトが口を開いた。

「ゼロ、一つよろしいでしょうか？ 後程、協議すべき議題があります。」

「枢木スザク、彼はイレヴンの恭順派にとつて旗印になりかねません。私は暗殺を進言します。」

ゼロやアルカ、扇、藤堂といった中核メンバーを集めたこの場でデイトハルトは、言った。

その提案に対する幹部達の表情は、芳しくない。

「なるほどね、反対派にはゼロっていうスターが居るけど、恭順派には居なかったからねえ。」

幹部の中で表情を変えなかった数少ない人物、ラクシャータが納得がいった様子で口を開いた。

「人は主義主張だけでは動きません。ブリタニア側に象徴足りうる人物が現れた今、最も現実的な手段として暗殺という手があります。」

デイトハルトの言う事は決して間違っていない。彼の言う通り、既に枢木スザクを

英雄視する声も上がっている。

彼は示してしまったのだ、例えナンバーズであっても、認められる可能性があるという事を。

完全に日本人の意見が二極化する前に、枢木スザクを始末することで、再びゼロに指しを集めようという事だ。

「反対だ。」

藤堂が口を開く。

「その様な卑怯なやり方では、日本人の支持は得られない。」

「私は最も確実で、リスクの低い手段を提示したままで……」

デートハルトは言う、あくまでも手段の一つだと。

「私も反対です。」

藤堂に続く様に、アルカも口を開いた。

「これは意外ですね、貴女からは同意を得られると思っていたのですが……。やはり血筋ですか。」

本当に驚いた様子で、デートハルトは目を見開いた。

「……どういう意味ですか?」

アルカは目を鋭くし、デートハルトを見据える。

「そのままの意味ですよ。貴女は枢木本家である皇の血筋の者。つまりは血縁者だ。それに貴女は彼とご学友だと言う、情が生まれたのでは？」

「私がそんな事に拘るとでも？」

「私にはそう見えますがね。」

視線だけで人を射殺せそうな目つきで、デイトハルトを睨みつける。

初めて会った時から、この男の事は好きになれなかった。ゼロを妄信し、担ぎ上げる事を目的としているこの男を。まるでゼロを、ルルーシユを玩具の様に扱われている気がして嫌で仕方なかった。

「殺すより彼を仲間に引き込んだ方がメリツトがある、つてだけです。スザクは日本国最後の首相の一人息子だ。私の様に突然現れた存在より、彼の方が日本人からの支持は得られるでしょう。キョウトもそれを望んでいる筈。」

「自身の立場を明け渡しても良い、と？」

「ええ。知つての通り、私はブリタニアで生まれ、ブリタニアで育ちましたから。日本にそれほど思い入れはありません。所詮は名ばかりの存在。彼をこちら側に引き込める手段があるのなら、私はそちらを選択したい。」

アルカはその場を立ち上がり、この場から去ろうとする。

「もし、全ての手段を使い果たし、それでも彼が刃を向けてきた時はどうするおつもりで

すか？」

「……その時は、敵として処理します。」

そう言い残し、アルカは部屋を後にした。

◇◇◇

アッシュフォード学園 クラブハウス

「ほんと、お祝い事大好きだね……」

普段は生徒会メンバー以外の人は寄り付かないクラブハウスが、賑わっている。

生徒会主催の「枢木スザク君、騎士就任おめでとうパーティー」の影響だ。

ミレイやシャーリーを始めとする生徒会メンバーは勿論、ブリタニア人や日本人の一般生徒も多く参加している。

ただただ豪華な食事にありつきたいという層も一定数居るだろうが、大多数の生徒は純粹にスザクのお祝いを目的に参加している。

それも彼の太陽の様な人柄の影響だろう。

「あつ」

アルカとスザクの視線が交わる。

スザクは自身の周りの周りの生徒に声を掛けると、そのままアルカの方へ真っ直ぐ向かって

きた。

「やあ、アルカ。こうして話すのは久しぶりだね。ちゃんと授業は出ているかい？」

「……開口一番それ？」

「君はルルーシュ以上のサボリ魔らしいからね。心配になっちゃって。」

「心配しなくても、必要最低限は出席してるよ。」

そういう事じゃないんだけどな、と頬を掻きながらスザクは苦笑する。

「…騎士への就任、おめでとうございます。」

そういえば、まだお祝いでいなかつた、と人形のように整った顔に笑みを浮かべ、アルカは祝いの言葉を伝える。

「ありがとう！ 君のお陰だよ！」

対するスザクも、幼さ残るその顔に柔らかな笑みを浮かべる。

「私の？」

予想外の言葉にアルカは疑問を浮かべる。

「前に生徒会室で僕に言ってくれただろ？ 自身の正義に従って。」

ああ、あの時か。とアルカは思い返す。

日本解放戦線によるホテルジャック事件の少し後の事。

言われてみると、彼とそんな話をした気がする。

「その言葉のお陰で、改めて自身を信じる事が出来た。進むべき道を見失わずにすんだ。だから、君のお陰なんだ。…ありがとう。」

「……そんな小さい出来事でお礼言われるなんて思っていなかった。」

「僕からしたら大きな出来事なんだよ。君の言葉は不思議と僕の心に入ってくる。」

彼の言葉を聞き、アルカは顔を引き攣らせる。

「…よくそんな恥ずかしい事を……」

「？」

無意識からの発現だった様だ。ミレイさんに朴念仁と言われただけの事はある。

「スザクくん！ こっちに来てー！」

少し離れた所からシャーリーの声が響く。

パーティーの主役に気を休める暇は無いらしい。

「ほら、呼ばれているよ。私の事は良いから、行ってあげて？」

「うん、ありがとう。今度またクラブハウスに遊びに行くよ！ お茶でもしよう！」

そう言い残し、スザクは駆け足でシャーリーの元へ向かった。

彼から視線を外し、会場を見渡す。

相変わらずお祭り騒ぎをしているミレイに、上品にピザを口へと運ぶナナリー。様々な生徒が各々の形で騒ぎ、スザクの栄進を祝っている。そんな中で複雑そうな顔でスザ

クを見つめるルルーシュ。

「……兄上。」

そんな兄に掛ける言葉を、アルカは持ち合わせて居なかった。

ルルーシュの苦悩はルルーシュにしか分からないのだから、どんなに励ましの言葉を掛けたとしても、それは気休めにしかならない。

(……せめて最大限、私に出来る事を。)

アルカは静かにそう決意し、会場を後にした。

◇◇◇

式根島 近海

黒の騎士団がインド軍から譲り受けた潜水艦の中で、ゼロは作戦概要を語る。

『ユーフェミアが本国からの貴族を迎えに、あの島へやってくる。騎士である枢木スズクも共に居るはずだ。戦略拠点では無い為、戦力も限られている。作戦の目的は枢木スズク及び、ランスロットの捕獲!』

あくまでも正々堂々と、民衆からもメンバーからも遺恨が残らない形で仲間を引き込む。これがゼロの最終決定だ。

ゼロルルーシュの手に自然と力が入る。

分かっているのだ。アルカの言う通り、これが最後のチャンスであることを。

彼が過去に起こした過ち、彼の正義感を利用する。そこでスザクが揺らがなければ、もう彼がこちら側に来ることは無いだろう。彼の頑固さは、ルルーシュが一番良く知っている。

ここが分岐点なのだ。黒の騎士団にとっても、ルルーシュにとっても、スザクにとっても。

そして、

(式根島の近くに来てから、ずっと誰かに見られている気がして気持ち悪い。) アルカにとっても。

stage 21 枢木スザクに命じる ※挿絵あり

黄昏の空に浮かぶ神殿。

常識に当てはまらないこの空間に、その少年は居た。

足元まで伸びた金色の髪が特徴的な、どこか超常的な雰囲気を持つ幼い風貌の少年。その少年はその整った顔を愉快そうに歪めている。

「ふうん、式根島に彼女が……」

表情には笑みを浮かべているものの、その言葉には抑揚が無く、感情が込められていない。

「これは彼女にとって、良い刺激になるかもしれないね。」

この空間に少年以外の姿は無い。にも関わらず、まるで話し相手が居るかの様に少年は喋り続ける。

「元々はそつちの遺跡を祀っていたんだ、良い結果を期待しているよ。」

少年の人形の様子に整ったその顔は酷く歪んでいた。



潜水艦 更衣室

身に纏ったパイロットスーツの空気を抜き、身体にピッタリと密着させる。

「……………ふう……」

作戦前だと言うのにも関わらず、思わずため息をついてしまった。

メンバーの士気の低下に繋がる可能性があるのです、あまり褒められた行為ではない。「アルカ、ゼロからの伝言。マスクをきちんとしていく様に、だつてさ。」

同じくパイロットスーツに着替えたカレンが、アルカの肩をポンつと叩く。

「マスク……………、ああ。マスクね。了解。」

素性を隠す為に作らせたマスク。殆ど身に着ける事が無かった為、記憶から薄れていった。

今回の作戦の性質上、ブリタニア軍と直接接触する可能性が高い。

私の身を案じての事だろう。

相変わらず過保護な兄上に思わず、苦笑をする。

「言われなくても持つていくよ、つて伝えてくれる？ 私した後で行くから。」

カレンは少し訝しげな表情を浮かべつつも、分かったと呟き、この場を後にした。

「……………調子が悪そうだな。」

見計らった様にC. C. がアルカに話しかける。

「C. C. ……？ えっと、いつから——」

「お前が着替え始めた時から居たぞ。気づかなかったのか？」

言葉を遮り、呆れを含んだ声で彼女は問う。

「うん……………」

C. C. に言い返す言葉が思いつかなかったのか、アルカは口を閉ざし、視線を落とす。

「…………重症だな。」

「変な感じがするんだ、式根島この辺りに来てからずっと。誰かに監視されている様な、呼ばれている様な。」

「ふむ……………」

彼女の言葉を聞き、C. C. は何か考え込む様な仕草をしたが、意を決した様に話始める。

「式根島の近くにギアスに纏わる遺跡があつてな、恐らくその影響だろう。」

「…………遺跡？ 嚮団のあれみたいな？」

アルカの脳裏に浮かぶのはギアス嚮団が本拠地を置いていたブリタニア本国にある遺跡。

「ああ…。 ギースと関わり深い場所だ。 ギースユーザーがお前の様になるのも珍しいくない。」

「……そっか。」

アルカは釈然としない様子ではあったものの、それ以上口を開く事は無かった。いくら聞いてもこれ以上ははぐらかされると悟ったのだろうか。

もしくは信頼の表れか。隠し事は多くても彼女は、自身に危害を加える事は決して無いという。

沈黙が訪れた更衣室内に、機械交じりの声が響く。

ゼロによる艦内放送だ。作戦に出撃する者は格納庫に集まれ、という内容の。

「じゃあ、時間だから行くね。 ありがとう、気に掛けてくれて。」

「ああ。」

足を出口へと運び、アルカが扉に手を掛けようとした時、C・C は再び口を開いた。「アルカ、一つ忠告だ。」

「?。」

「さっき言った遺跡だが、お前は絶対に近寄るなよ。」

アルカが格納庫へと向かい、誰も居なくなつた更衣室で1人口を開くC. C.。
「なんだ？ 私に文句があるのか？」

「……別に、深い意味は無いよ。ただ、時期尚早だと判断したまでだ。」

「この件に関してはお前達より私の方が詳しい。黙って見ていてくれないか。」

「……ああ、変わつてないよ。何も変わらないさ。分かっているだろう？ マリアンヌ。」

◇◇◇

式根島 ブリタニア軍基地

射出されたスラッシュハーケンが、ブリタニアのVTOLを貫く。

両手に持つ太刀が、サザーランドの胴体を切断する。

『一番隊、そのまま前進！ 零番隊は一番隊の側面から援護しろ！』

右へと展開している紅蓮とサザーランドが交戦している様子が視界の端に映る。

「流石KMF無しでブリタニアに土を付けた男、戦いやすい。……兄上程じゃ無いけど。」

藤堂の指示の元始まつた軍事基地への襲撃。

カレンにアルカ、藤堂、四聖剣といった黒の騎士団の主戦力が集まるこの戦場で、ブリタニア軍は完全に弄ばれていた。

トウキョウ租界から遠く離れた孤島の軍事基地。そこに在住する軍人のレベルは当然低く、コーネリア軍と戦い続けている黒の騎士団にとって相手にすらならない存在。

しかし黒の騎士団は、基地の防衛設備やKMFを破壊していくだけで、チエックを掛けようとしなない。

『とどめ頂き……、あ？ どあつ がっ！』

そんな中、圧倒的有利なこの状況に興奮したであろう、玉城の声が聞こえたと思ったその瞬間、今度は彼の悲鳴が響いた。

破壊されたのだ、彼の乗る無頼が。

倒れ行く無頼のその後ろには、白の甲冑を身に纏ったKMF「ランスロット」。

『ようやくお出ましか。』

高台から様子を見ていたゼロールルーシユは覚悟を決め、その手に持つバズーカの標準を親友^{スザク}へと合わせた。

(さあ！ 向かって来い、スザク！)

戦場へと姿を現した途端、警戒していなかった方向から砲弾が飛んできた。

とつさにスザクはランスロットの両腕に搭載されているブレイズルミナスを展開し、それを防ぐ。

「……くっ」

弾が飛んできた方向へ視線を向けると、そこには無頼の肩に乗ったゼロの姿。

こちらを挑発するように、その身を外に出している。

「ゼロ、やっぱり……い！」

ゼロの姿を捉えた途端、スザクの脳内に焦燥が生まれる。

今のスザクは特派所属のパイロットでは無く、ユーフェミアに仕える騎士。

何よりも重要なのは彼女の身の安全。

黒の騎士団が主戦力を基地に集めたのは自分をユーフェミアから引き離す為では無
いだろうか。

自分が離れている間に彼女を手に掛ける気じやないだろうか。

彼女は自分の為を思って、ここに送り出してくれた。ならその期待に応える為には。

そんな考えが頭を支配する。

だからスザクは気にしなかった。

自身がゼロを視認した途端、基地を襲撃していた黒の騎士団が撤退した事を。

まるで自分をおびき寄せるとかの様に、ゼロが移動を始めたのを。

(いくら藤堂先生が居ようと、ゼロさえ叩けば黒の騎士団の戦力を大きく削る事が出来る。なら、僕が今、やるべき事は……！)

スザクは操縦桿を前に倒し、ゼロが逃げた方向へと移動を始めた。

◇◇◇

(砂地に装備無しで飛び込むなんて……)

ゼロを追う内に、幾分か冷静さを取り戻したスザクは、状況の分析に思考を割く。

丁度KMF一体分がすっぽりと埋まりそうな深さの砂地の陥没部分。

ゼロの乗る無頼はそこへと飛び込んだ。

(それともランスロットを囲むつもりか？ 自らを囲にして——。しかし！)

ゼロの事だ、無策でここまで逃げてきた訳では無いだろう。

だが、そのゼロの策を突破する力が、ランスロットにはある。

援軍も期待出来ないこの島で、今取れる最善の選択は——。

無頼の進行方向にスラッシュハーケンを放ち、動きを止め、すかさず前に回る。

MVSを抜き、ゼロへと突き付ける。

「ゼロ！ これぞ！」

ゼロを捕らえる最大のチャンスに、スザクはその顔を険しくする。

「お前を！」

スザクを仲間に取り込む先後のチャンスに、ルルーシュはその顔に決意を宿らせる。

「捕まえたあゝ」

自身の理論を実証出来るこの場に、喜びを感じながら、ラクシャータはその手に持つキセルでスイッチを押す。

その瞬間、砂地を囲んでいた機械が発光し始めた。

「ゲフィオンディスタバー……。ちよこつとお手伝いしたけどホント、とんでもない兵器ね。」

アルカはその様子を確認しながら苦笑する

簡単に言えば、範囲内に独自のフィールドを形成し、サクラタイトの活動を停止させる装置。

つまりは――。

「動けない!？」

いくら操縦桿を動かそうと、いくらボタンを押そうと、ランスロットは沈黙を保ったままだ。

ユグドラシルドライブの回転も完全に止まったのが分かる。

『話がある、枢木スザク。出てきてくれないか？ 第一駆動系以外は動かせるはずだ。捕虜の扱いについては国際法にのっとる。』

そんな中、ゼロが畳みかける様に身を晒すように促してくる。

『話し合いに乗らない場合、君は四方から銃撃を受ける事になるが？』

周りを確認するとランスロットを囲む様に、黒の騎士団のKMFが砂地に集まっていた。

無頼に紅蓮、無窮。それに黒の騎士団の新型の月下。

「くっ……」

ゼロの何時ものやり方だ。

一見、平和的にも見えるが、実際はこちらに選択権等無い。

『スザク、構いません！ ランスロットから出て下さい！』

スザクの身を案じたユーフェミアの焦った声が、コックピット内に響く。

「…Yes, Your Highness.」

ランスロットからスザクが出てきた事によって、ゼロの交渉が始まった。

ここからじゃ会話は拾えないが、恐らく枢木ゲンブを殺害したことをネタに揺さぶるつもりだろう。

「首相殺し、か。」

そういえば、あの夢で見た光景は事実なのだろうか。

幼いスザクが、父親に向かってナイフを突きつけたあの光景は。

「いやいや、今はそんな事考えている場合じゃない。」

ついつい思考に更けてしまうのは兄上譲りか。

そんな事を考えている間に、状況が様変わりした。

スザクがゼロの腕を拘束し、銃を突き付けたのだ。

『あいつ……！』

『動くな、力場の干渉を受けるぞ。』

カレンの怒りが籠った声と、それを制する藤堂の声が響く。

「兄上……！」

カレンの気持ちは分かる。私だって今すぐ助け出したい。

しかし、ここから攻撃するにしても、ゼロに危険が及ぶし、駆け付けようにも藤堂の言う通り、動けなくなってしまう。言わば、八方塞がり。

(どうする、最悪私がスザクにギアスを……。いや、しかし、駆け付けている間に兄上が殺される可能性も……。)

そうこうしている内に、ゼロを連れ、スザクはランスロットのコックピット内へ入る。アルカの顔に焦りが浮かぶ。

これで彼女に藤堂の様な経験が、知識があればこの状況を打開出来たかもしれない。しかし、彼女はまだ幼い。

(クソ……！ これでスザク自身を狙撃する線も無くなった……！ どうしたら……！)

時を同じくして、式根島ブリタニア軍港

「誰がそんな作戦を！ 枢木スザクは私の騎士ですよ！」

ゼロを拘束しているスザクごと、ミサイルで爆撃するという作戦を聞いたユーフェミアは、怒りをあらわにしながら軍人に詰め寄る。

「これは、準一級命令です。命令の撤回は総督以上か、三名以上の将官クラスの合意によつて……」

ユーフェミアに対し軍人は、機械の様に冷静にそう答える。

準一級命令。つまりはユーフェミアより立場が上の者が下しという意味。

総督であるコーネリアか、あるいは。

「だから！ そんな作戦を下したのは誰ですか!? 私にラインを繋ぎなさい！」

「準一級命令です。 ユーフェミア副総督。」

ここでユーフェミアは悟る。自身の権限ではどうにも出来ないという事を。

「っ！ おどきなさい！」

ユーフェミアは軍人の後ろに控える水陸両用KMF「ポートマン」に駆け寄り、コックピットへと向かう。

「基地に伝えなさい！ 私が巻き込まれる危険があると！ それでも発射命令を撃てますか!？」

命令を下した人物は恐らく――。

ユーフェミアの脳裏にある一人の男が浮かぶ。

彼女から見て、その人物は優しい兄そのものだった。

私に危険が及ぶと知れば、止めてくれる筈…。

そんな淡い期待を抱いて、ユーフェミアはポートマンを駆る。

自らの騎士、枢木スザクの元へ。



『接近するミサイルを確認!』

千葉の音が響く。

モニターを確認すると、こちらに向かってくる無数の赤いポインター。

「っ！」

すかさず無窮に装着されているバインダーからライフルを取り出し、その銃口を空へと向ける。

「撃ち落とします！」

アルカの声を聞き、立ち尽くしていたメンバーの意識が現実へ引き戻される。

『全ナイトメア！ 飛来するミサイルに対して弾幕を張れ！ 全弾打ち尽くしても構わん！』

藤堂の声を皮切りに、黒の騎士団の全KMFが上空に向けて発砲を始めた。

ただ一機、紅蓮二式を除いて。

『ゼロ！ 今助けに!!』

紅蓮はミサイルを撃ち落とす事無く、ゼロの元へと前進する。

「カレン!?! バカ!!」

アルカはカレンを咎める様に声を上げる。

『しまった!』

焦りのあまり、ゲフィオンデイスターバーの存在を忘れていたのだろう。

力場内に入った紅蓮は、ランスロットと同じように干渉を受け、完全に沈黙してしまつた。

同時刻 ランスロットコックピット内

『くっ！ このままではお前も死ぬ！ 本当にそれでいいのか!』

追い詰められゼロは思わず声を荒げる。

その様子は、普段の冷静な立ち振る舞いからは想像も出来ない。

「う……」

ゼロの言葉を聞き、スザクの中に迷いが生じる。

本当にこれが正しいのか。ユーフェミアを生涯守るのが自らの責務なのでは無いか。

——親友を残して死んでしまつていいのか。

ゼロに向ける銃口が僅かに震えたその時、コックピット内に司令官の声が響く。

『枢木少佐、これは無駄死には無いぞ！ 国家反逆の大罪人、ゼロを確実に葬る事が出

来るのだ！ 貴公の武勲は後々まで語り継がれることになるう!』

そうだ、ここでゼロを始末しなければユーフェミアにも、ルルーシュ達にも危害が及

ぶ。

今この場でゼロをどうにか出来るのは僕だけだ。

それに決めたじゃないか。僕はルールに従って死ぬ、と。再び銃を持つスザクの手に入力が入る。

『黙れ!!』

自らの部下に、自身スズの親友ザクに死ねと命じたブリタニアに、上官の無責任な言葉に苛立ち、コックピットを力強く叩く。

「軍人は命令に従わなければならないんだ!」

『ふん! その方が楽だからな! 人に従っている方が!! お前自身はどうなんだ!!』
他人に従い、与えられたものだけを享受する。それは生きていたとは言わない。

そんなもの…、過去の俺達と同じだ。

あの日から自らの意志で生きていくと、そう決めた。

だから。俺はお前の考えを否定する!

「違う!」

ゼロの言葉に対し、スザクも声を荒げる。

「これは俺が決めた俺のルール!」

周りの意志を全て無視し、己の正義だけを信じて過ごしていた幼少期。

ルールから外れた俺は、日本の敗戦を招き、全てを失った。

あの日に決めたんだ、ルールに従って生きると。正しいやり方で、皆が納得する方法

で、変えていくと。

だから、君の考えは受け入れられない！

◇◇◇

「ゲフィオンデイスターバーを解除してください！ 無窮で2人を救出します！」

『許可出来ない！ 君まで危険に晒される！』

「私なら大丈夫です！ いいから早く！」

兄と友人の危機に、アルカは声を大きくする。

（最悪の場合、スザクを殺しても……！）

優先すべきはルルーシユとカレンの命。

それ以外はどうかろうとも……！

大切な人を救うため、少女の細い腕に力が入る。

「スザク、ゼロを放せ！ 私は……、私は生徒会のカレン・シユタツトフェルトだ！

こつちを見ろ!!」

カレンは紅蓮から飛び降り、ランスロットに駆け寄る。

良き理解者であり、日本の希望であるゼロを救うため、ずっと隠してきた正体を大声で告げる。

スザクの気が一瞬でも逸れれば、私に矛先を向けてくれれば、そんな淡い希望を持って、カレンは声を上げ続ける。

「スザク、まだ死んではなりません！」

不慣れな操縦に気を払いながら、ユーフェミアは自らの騎士の元へ向かう。

ルールを順守し、自らの身をも蔑ろにする優しい青年。

彼の立ち振る舞いはとても危なっかしく、放っておけない。

この理不尽な世界で彼が生きていける様に、守る為にと自身の騎士に任命した。

その彼が今、他でもない自国の指示によって、命の危険に晒されている。

そんな事実をユーフェミアは受け入れられない。

だから彼女は駆ける。

枢木スザクを守る為に。

・
・
・

黒の騎士団が飛来するミサイルを全て撃ち落とす時、ランスロットに、砂地に巨大な影が掛かる。

誰もがその異変を前に、呆然とした。

太陽が雲によって隠された訳では無い。

そこには巨大な人工物が浮かんでいた。

「あれは…、お兄様のアヴァロン……。」

その人工物に覚えがあるのか、砂地に到着したユーフェミアは誰にも聞き取れない程の小さな声でその名前を呟く。

アヴァロン。

ロイドやセシルが所属する、特別派遣嚮導技術部。通称「特派」が建造した世界初の浮遊航空艦。

ランスロットにも搭載されているブレイズルミナスを採用し、戦艦の弱点である船底に展開させる事で高い防御性を確立することに成功した。

「なんの冗談よ、あれ……。」

常識外れの兵器の登場に、アルカは思わず気を取られ、呆然としてしまう。

他の黒の騎士団のナイトメアがいくら狙撃しようと、全ての攻撃が阻まれてしまう。

その時、アヴァロンの船底にあるハッチが開いた。

地上からは確認出来ないが、そこには黒い甲冑を身に纏った一機の鋼鉄の巨人。

その両肩に装備された兵器が赤黒く光り始める。

その光の矛先は、ゼロとスザクが居る砂地の陥没地帯。

『スザク！ このままでは本当に死ぬぞ！』

「ルールを破るより良い！」

『この、分からず屋が！』

「あつ……」

頭の固い幼馴染に苛立ちを覚えつつ、ゼロ＝ルルーシュは右目を露わにする。

スザクはゼロの言動に何処か引っかけかかりを覚えたのか、わずかに警戒を緩める。

丁度、同時刻。黒い鋼鉄の巨人の両肩に赤黒い光が収束し始める。

「っ！ 兄上!!!」

少女の悲痛な叫びとは裏腹に、全てを殲滅する無情な光が降り注ぐ。

辺りは激しい音と、砂埃に包まれた。

刹那、アルカの脳裏には幼い頃の記憶が浮かんだ。

そこにはマリアンヌ母に手を引かれている幼い自分。

マリアンヌは優しい声音で、子どもを寝かしつける様な穏やかな声でアルカに語り掛

ける。

「さあアルカ、お勉強の時間よ。行つてきなさい。」

そこでアルカの意識は途絶えた。

stage 22 神が根付く島

神根島 海岸

「……最悪。」

最後に憶えているのは降り注ぐ赤黒い閃光。

それと、母に手を引かれていた幼い自分。

「母上の夢見た時って大体良い事無い……。」

海水に浸っていた身体を起こし、何故か一緒に流れ着いていた仮面を手に、波が届かない場所へと歩を進める。

「あー、びしょびしょだ。」

海水で身体は濡れ、砂が肌とスーツの間に入り込み不快感を覚える。

「何処かで水浴びしないと…、さて。」

改めて辺りを見渡す。

人工物は一切確認出来ず、人気も無い。

「……んー。 気温、湿度から考えるに、式根島の近くって考えていいのかな？」
作戦開始前に確認した地図を思い出す。

確か式根島の少し外れに、小さな島があつた気がする。

「取り敢えず、安全の確保。 2人の搜索はその後にしよう。」

浜辺を歩きながら、ふと考える。

自分でも驚く程、落ち着いている、と。

傍から見たら誰もが思うだろう。 兄と友人の事が心配なんじゃないか、って。

兄上とカレンの事は勿論心配だ。

しかし、どうしてかは分からないが、彼らが生きている確信がある。 生きてこの島に流れ着いている。 何となく、そう感じるのだ。

（流れ着いた、か。）

自分が海岸に倒れていたからそう思ったが、果たして本当に流れ着いたのだろうか。
コックピットに居た筈の自分が何故、生身で居る？

本当に流れ着いたのだとしたら、内地にいた筈の自分達はどうかやって海まで飛ばされた？

（……ギアスに関わる遺跡ねえ。）

作戦前にC・Cが言っていた事を思い出す。

不可解な事が多い今回の件、どうしてもギアスの関与を疑ってしまう。

「転移……って考えた方が自然？ それだとしたら一体誰が——。」

「あら、貴女は……」

考え事をしながら歩いていたアルカは目の前から来る少女に気付かなかった。

同じように海水に濡れ、砂にまみれたドレスに身を包んだピンク色の髪の少女。

「ア、ルカ……？」

「ユファイ姉……！」

母が殺されたあの日から、一度も会う事の無かった義姉。

嫌われていた私達と親しく接してくれた優しい義姉。

自らを人質として買って出たあの時、私の頭を撫でてくれた義姉。

そんな彼女が今、私の目の前に居た。

「……………」

アルカは気まずそうに視線を逸らす。

昔の彼女だったら、駆け寄って抱き着いていたかもしれない。しかし、今の彼女はブリタニアに対するテロリスト。言わば敵。

「やっぱり、生きていたのね！ よかった……。」

しばらく目を丸くして驚いていたのも一瞬の事、すぐに優しい顔でアルカに微笑み、

抱きしめる。

「ちよ……、んっ……………」

久しぶりの義姉の抱擁に思わず小さい声を上げる。

零距离で感じる義姉の体温に、息遣いに、わずかに抱いていた警戒心を解いていくアルカ。

（感の良い彼女の事だ。 私が今、何をしているかも粗方分かっているだろう。 いつまでもこうしている訳にもいかない。）

ユーフェミアに包まれながら、アルカは考える。

（……………だけど、あとちよつと。 もう少しだけ。）

アルカは静かに目を閉じ、ユーフェミアの背中へ自身の手を回した。



「ッ……………」

思わずこの状況に舌打ちが出てしまう。

（扇達と連絡を取るの難しいな。 しかし、一般人を装ってブリタニア軍に助けを求めようにも……………）

気づけば流れ着いていた別の島。

しかし、手元には通信機は無く、団員すら見えない。

(ん?)

ふと、視線を感じ思考を止め、その方向へ眼を向ける。

そこには2人の少女が佇んでいた。

1人はエリアー1の副総督、ユーフェミア。もう1人は自身の実妹、アルカ。

「ゼロ……………」

ユーフェミアは驚いた様子も無く、静かにその名を口にする。

「これはこれは、ユーフェミア皇女殿下。こんなところでお会いするとは。』

懐から銃を取り出し、その銃口をユーフェミアへと向ける。

『…………隣に居る少女は私の大切な部下でしてね。こちらに引き渡してくれと、ありがたいんですが。』

ユーフェミアは何も答えず、静かにゼロを見上げる。彼女の横に居るアルカはユーフェミアを取り押さえようともせず、何処か諦めた様な表情を浮かべている。

しばらくゼロとユーフェミアの間に無言のにらみ合いが続いていたが、ユーフェミアが口を開き、沈黙を破った。

「…ルルーシユ。」

『!!』

「ルルーシユなのでしょう？ 誰にも言っていないません。 本当です。」

仮面の下のルルーシユの顔には驚愕の色が浮かんでいる。

「だから、私を撃つ前に、せめて……」

顔を見せて下さい。 ユーフエミアはそう告げた。

見たいのだ、成長したルルーシユを。 幼い頃に生き別れた異母兄を。

『……………』

ユーフエミアの願いに対し、返事は無かった。

ただ、静かに、ゼロルルーシユは自身の仮面に手を伸ばす。

わずかな機械音と共に、ゼロの仮面は外され、ルルーシユの顔が晒された。

「あ……………」

ユーフエミアは思わず声を漏らす。

記憶に残っているルルーシユよりも背が高く、髪が長く、目つきが悪い。

それも当然だ。 何せ7年も経っているのだから。

しかし、優しい彼の面影が、その綺麗なアメジスト色の瞳が、昔と変わらず、ユーフエ

ミアは瞳に涙を貯める。

「ルルーシユ……………」

海岸沿いにある波が届かない程の大きな岩の上で、3人は休んでいた。

アルカとユーフェミアの服を乾かす必要があつたからだ。

岩盤にパイロットスーツとドレスを広げ、岩を背もたれに、アルカとユーフェミアは深く腰掛けている。

無論、2人に替えの服など無く、裸だ。

そこで妹達^シを心配したルルー^コシユは自身のマントをユーフェミアに掛け、彼女の脚の間にアルカを座らせた。

それが現状、彼が思いついた身体を冷やさない方法だつたのだ。

ユーフェミアも彼の意図を汲み取つたのか、アルカを後ろから抱きしめ、マントで覆っている。

肌の触れ合いが恥ずかしいのか、アルカは顔を赤くし、モジモジと落ち着かない様子だ。

閑話休題

一先ず、妹達の身を優先したルルーシュだが、彼の頭の中には一つの疑問でいっぱいだった。

それは――。

「いつから気付いていた?」

ふと、ルルーシュが口を開いた。

ユーフェミアに名前を言われたその時から、本来だったら真つ先に聞くべきだった質問。

「ホテルジャックの時……」

「そうか……。あの時は思わず言い過ぎたよ。」

クロヴィスを殺した理由を聞かれた時、ゼロはブリタニア皇帝の子どもだからと口にした。

それではまるで、皇帝自身に恨みがあるような口振りじゃない。

ユーフェミアはあの時から、ゼロに対する見方が変わった。

「でも確信したのは今さっき。」

「……私が居たから?」

静かに話を聞いていたアルカが口を開いた。

声は淡々としているが、その顔には少し陰りが見える。

負い目を感じているのだ、自身の所為で兄の正体がバレたのではないかと。

「それも勿論あるけど、ルルーシユの言動かな。真つ先にアルカを引き渡す様に言ってくるんだもん。それに銃を向けるだけで撃つ気配しなかったし。」

「……………甘いな、俺も。」

妹に対して甘いのは昔からじゃない、ユーフェミアは内心そう思ったが、口にはしなかった。

「でも、そうしたら何でコウ姉様に相談しなかったの?」

「お姉様は私の言う事なんか信じないわ。それに、それ以上に悲しくて……………」

ユーフェミアは皇族の中でも珍しく、異母兄弟とも親しく接していた。

元来、争いごとに向いていない性格もあつて、身内同士の殺し合いは見てられないのだろう。

「1つだけ教えてくれ、君は母が殺された事件について何か……………」

「ごめんなさい。でも、お姉様は色々調べているみたい。」

「そうか。」

マリアンヌの所へ通い、稽古に明け暮れていたあの時のコーネリアの光景がルルーシユの脳裏に浮かぶ。

(そういえば、アルカの面倒も良く見ていてくれたな。)

「私も一つ聞いても良い？ 貴方は、ゼロ？ それとも——。」

少し声音を震わせながら、ユーフェミアは問う。

敵か、そうでは無いか。

「ルルーシユだよ。ああ、今ここに居るのは君の知っているルルーシユだ、ユファイ。」

ここで初めて、ルルーシユはユファイと呼んだ。

この言葉の意味を受け取ったのか、ユーフェミアは再び涙を浮かべる。

「アルカもそれでいいな？」

「私は最初からそのつもりだったよ。」

「ふっ、そうか……付き合わせて悪かったな。」

穏やかに笑みを浮かべ、ルルーシユは呟く。

緊迫した空気が解かれ、和始めたその時、乾いた音が響いた。

良くある空腹を知らせる音だ。

「あ……。安心したらお腹が空いちゃいました！」

頬を赤らめユーフェミアは素直に告げる。

そんなユーフェミアの光景に対し、懐かしさを覚えながらルルーシユは彼女の要望に応える為、準備を始めた。

◇◇◇

「ええつと……。」

苦笑を通り越して、顔が引き攣ってしまっているアルカ。

食料確保の為、森へと繰り出した3人。

ルルーシユが野生動物の足跡や糞を見つけた事から、今3人の居る道が通り道という事を確信。

そこに罠を置き、動物を捕獲する。という作戦を立てたままでは良かったのだが……。

「はあ、はあ……くっ……。」

「本当に大丈夫？」

目の前には息を切らし、今にも倒れそうになっている兄と、それを心配そうに見ている姉。
ユーフエミア
ルルーシユ

この光景が生まれる僅か数分前。

罠の為の穴を掘ろうとアルカとユーフエミアが意気込んでた所に、太い木の棒を持つたルルーシユがストップを掛けた。

ここは俺に任せろ。そう言わんばかりの雰囲気です。ルルーシユは木の棒を地面に突き付け穴を掘り始める。

何度もアルカやユファイが手伝うと言ったが、ルルーシユはそれを拒み、そして今に至る。

「あー…、兄上。私変わるよ?」

「いや……、お前も、慣れ、ないこの状況で、つ、疲れて、いるだろう……、そんな妹に、肉體労働を、……させる訳にはつ。」

ルルーシユの額には滝の様な汗が浮かんでいる。

「えーつと……」

ユーフェミアとアルカは視線が交差し、意志を汲み取ったのか、2人は小さく頷いた。「じゃあ、私とユファイ姉で果物とかお水、取って来るね。」

「あ、ああ……、気を付けるんだぞ……」。

「はーい。」

2人は笑みを浮かべながら、その場を後にした。

・
・
・

「変わらないわね、ルルーシユ。強気でプライドが高くて、貴女の前では弱みを見せようともしない。」

「こっちは無理してるの分かってるんだけどね。まあでも、そこが兄上の良い所だし、私はそんな兄上が好き。」

ルルーシユから少し離れた場所で、ユーフェミアとアルカは果物を採取しながら会話を花を咲かせる。

時折2人が眩く、「これって食べられるのかな?」という言葉が不安をそそる。

「でもいくらユファイ姉の前だからって、恰好付け過ぎだと思う。いつもだったら少しは頼ってくれるのにさ。」

少し不満なのか、どこかいじけた様にアルカは語る。

「あら、そうなの? 昔のルルーシユは一から十まで貴女達の事やっていたのに。」

「あはは……。まあ、色々とありまして……。」

C・C・C にかからかわれるからね……。

この件に関しての口喧嘩はもう何度も見てきた。

大体C・C・C のがのらりくんだりして圧勝だったけど……。

「ふふ、思ったよりも元気に過ごしていて良かったあ……。あ、そうそう、ずっと聞きたかったんですけど。」

「?。」

「学校生活はどう?。」

学校生活——、聞かれて思い浮かぶのは、生徒会の面々と過ごす日々。姉上とのんびり過ごす放課後。C・C・と夜のプールに忍込み……。

(いや、最後のはちよつと違うか……。)

兎も角、思い返してみると、楽しい出来事ばかりで満ち足りた気分になる。

「……楽しいよ、恐いくらい。」

「……そう。」

ユーフェミアの顔を見ると、口は笑みを作っているものの、視線は下がり、何処か寂しそうな印象を受ける。

そこでアルカは納得した。

(羨ましいんだろうな。)

ユーフェミア・リ・ブリタニアという少女は学校に通ったことが無い。

それもその筈、皇族は学校には通わず、宮廷内で学びを修めるのが基本。

例外はあるものの、16歳という、まだまだ遊び足りない時期に副総督に任命された彼女にとって、学校という環境は特別なものに見えているのだろう。

「……行きたいね、学校。私、ユファイ姉と同じ学校に行ってみたい。」

「アルカ?」

これは決して慰めからでは無く、本心から出た言葉だ。

「一緒に授業受けて、放課後は一緒に美味しい物食べに行つて。」

アルカはユーフェミアに目を合わせる。

「……平和な世界になつたらしたいね。」

「……………」

彼女は静かにアルカの言葉を聞いている。

「それに、兄上との仲も進展するしね。」

「……………はい？」

「そうしたら私、兄上とユファイ姉の事、全力で応援するから！」

「……………え？ 何を言つて……………」

折角、人が真剣に話を聞いていたのに、なんて冗談を飛ばしてくるんだこの子は。そんな声がユーフェミアの顔から読み取れる。

「え？ 私てつきり兄上の事まだ好きなのかと…。ほら、前にルルーシユのお嫁さんになる！ 言つていたし……………」

確かユーフェミアがルルーシユ達の所へ泊りに行つた日。

ナナリーとユーフェミアがどちらがルルーシユのお嫁さんになるか喧嘩をし始め、面白半分でアルカも参戦してきた昔の出来事。

「そ、そんな昔の事！ とうるか私の事を棚に上げて！ 貴女とナナリーだつて言つて

いましたからね!!」

「あの頃は私も姉上も子どももだったから……。でも大丈夫! 今なら純粹に2人の事

祝える!」

「わ、私だつて子どもでしたよ! それに今は他の人が……!」

無邪気な子ども時代の話を改めて聞くと羞恥心に襲われる。それは皇族であろうと変わらない。

アルカが擲揄う様に言ってくるものだから、ユーフェミアはヒートアップし、思わず口を滑らしてしまった。

「え、他の人? 誰? 皇族の人? 軍の人? 私の知っている人?」

アルカのお花畑脳内には、何人かの顔が浮かぶ。

ダールトン、ギルフオード、ビスマルク、シュナイゼル e t c ……。

「教えません! ほら、ルルーシユの所へ戻りますよ!」

両手に果物を抱え、ユーフェミアは走り出す。

「あー! 逃げた! ねーねーだーれー!。おーしーえーてー!」

ユーフェミアを追ってアルカも走り出す。

一時的に彼女達を取り巻くしがらみから解放されたこの場で、アルカはこんな時間がずっと続けば良いのにと、と考えた。

Stage 23 主と従者

アルカとユーフェミアの規則正しい寝息を聞きながら、ルルーシユは一人考える。

「あの頃のままで居られたら、どんなに良かったでしょう。」

ユーフェミアが眠りに落ちる前、口にしていた言葉だ。

彼女の言葉に対する返事をルルーシユとアルカは持ち合わせていなかった。

ルルーシユは考える。

あの頃のままで居られたら、どんなに幸せだっただろう。

母が生存し、ナナリーは自身の足で、目で世界に触れ、アルカと生き別れる事など無

かった。

しかし、

「そんなものは偽りだ。」

仮に皇族に身を置いたままだったらどうなっていただろう。

アルカの出生を知る事も無い。

皇帝あの男に与えられ、生かされる日々。

今の世界の光景を、知る事すら無かっただろう。

「……………」

ルルーシユは立ち上がり、寝ているアルカの傍に寄る。

ユーフェミアの腕に抱かれて眠る彼女の顔は安らかで、この世の穢れを知らない様にすら見える。

「俺は……………」

アルカの形の良い頭に手を伸ばし、そのまま髪を撫でる。

髪はまるで砂の様にルルーシユの指の間をすり抜けていく。

「俺自身が生き抜くためにも……………」

止まる訳にはいかない。

◇◇◇

神根島 遺跡

「思考エレベーターねえ……………」

気の抜けた男の声が、遺跡内に反響する。

「考古学は得意じゃないんです……………」
特に超とか付きそうなものは……………」

声の主は特派所長、ロイド・アスプルンド。

彼は目の前の、扉にも見える遺跡を見上げながら呟く。

誰がどう聞いても、彼が面倒臭がっているのが分かる様な声音だ。

「貴様！ 無礼であろう！」

そんな彼の態度を、バトラー・アスプリウスは咎めた。

この男は存外、皇族に対する忠誠心が高く、クロヴィスが死んだことで尽くしきれなかった忠義を、今は別の皇族へと注いでいる。

それは――。

「そんなに嫌がらないでくれよ、父君もこの手のモノにご執心らしくてね。 そうなん
だろ？ バトラー。」

常に穏やかな笑みを浮かべ、ロイドの様な変わり者に対しても常に礼節を持って振る舞う好漢。

神聖ブリタニア帝国第2皇子にして帝国宰相、シュナイゼル・エル・ブリタニア。

現状、最もブリタニア皇帝に近いと言われている男が今、エリアーへと来ている。

「はい、同様のモノが世界の数か所で見つかっており、私が発見したここを除き、全てが
天領とされておりません。 これは推測ですが、各国に対しての侵攻計画はこれらのポイ
ントに沿って行われているものかと……。」

クロヴィス死後、バトラーを通して知った。

彼が熱心に行っていた研究を。シャルル・ジ・ブリタニアが固執しているものを。

シユナイゼルは興味があった。彼らが執着している古代文明に。これが果たして、世界にとって合理的なのか。

「んで、そんなオカルトのデータ解析に、ガウエインのドルイドシステムを使うんですか？ まだ未調整の試作機を。」

3人の視線の先は一機のKMFに注がれた。

第六世代KMF「ガウエイン」。

通常のKMFの1.5倍程の高さがある大型KMF。

ロイドが開発した電子解析システム、「ドルイドシステム」を搭載しており、情報戦に特化した機体。

そのシステムが反応を示したのだ、遺跡にある、何かを。

「その為に君を呼んだんだよ。」

シユナイゼルは柔和な笑みを再び浮かべる。

「あはあ。」

合点がいったのか、ロイドの気の抜けた声が遺跡に響いた。



神根島 山頂

「この辺りだと思うんだが……」

昨晚、ルルーシユが見たという人工光。

ルルーシユ、アルカ、ユーフェミアの3人は、光の元とは思われる神根島の山頂へと辿り着いた。

「人の気配が全くしないけど、本当に見たの？ 寝ぼけてたんじゃなくて？」

アルカが揶揄う様に口を開く。

確かにアルカの言う通り、人の気配は無く、光の発生源であろう機械も無い。

「まさか、流星にこんな状況で見間違えないよ。俺はアルカほど眠気に忠実な訳でも無いしな。」

「もしかして、さっきの事言ってる……？」

アルカの言葉に、ルルーシユもすかさず意地悪く反応する。

朝に弱い彼女は、先ほどまで思考がまともに動いて無く、ユーフェミアとルルーシユの手を焼かせていたのだ。

そんな2人のやり取りを少し後ろから見ていたユーフェミアは微笑む。

(懐かしいわね。)

この二人は昔も良く、お互いに冗談を言って揶揄い合っていた。

ナナリーに対する接し方とはまた違うが、これもこの兄妹なりの絆なのだろう。

ユーフェミアからしてみたら、2人の対等な兄妹関係に、昔は憧れを抱いていた。

「……………ねえ、」

突如、後ろから聞こえたユーフェミアの声に、2人は会話を止め、振り向く。

「捜索隊が居たら、この時間も終わりなの？」

「……ユフィ姉……………」

2人の光景を、昔の記憶と照らし合わせている内に、ユーフェミアは耐え難い寂寥感に襲われた。

「……………仕方ないさ。」

ユーフェミアは顔に影を落とす。

寂しくて仕方無い、そんな顔をしている。

「まあ、兄上と一緒に食事すらまともに取れないもんね。」

「そういうことだ。悔しいが、この役目は本来の騎士に譲るとしよう。」

「……………ふふっ。」

2人のやり取りに思わず笑みがこぼれる。

気を使ってくれたんだろう、我儘な私に。

「そういえば、どうして彼を騎士に？ 名誉ブリタニア人だろうか。」

「それは……。」

ユーフェミアが言葉を紡ごうとしたその時、進行方向から物音がした。

「！」

会話を中断し、3人は草陰と隠れる。

すかさずルルーシユとアルカは懐から仮面を取り出し、それを身に着ける。

それはこの穏やかな時間が終わる合図とも言えた。

外の様子を伺っていると、物音の主が姿を現した。

白いパイロットスーツを身に包んだスザクと腕を拘束されたカレン。

（何故あの2人が？）

ルルーシユは知らない、カレンが自身の元に駆け付け、巻き込まれた事を。

「スザク！」

自身の騎士の無事に感情が高ぶったのか、ユーフェミアは飛び出す。

「ユーフェミア様!？」

特派と安全な場所に居る筈のユーフェミアがどうしてここに。

そんな疑問がスザクの脳裏に浮かぶが、それを解決する答えは持ち合わせておらず、

また時間も無かった。

『動くな。』

ゼロが現れたからだ。ユーフェミアに銃を突き付けて。

その横には見覚えのない仮面の少女が一人。

(誰だ、あの子は?)

初めて見る子だ。軍の情報にも上がっていない。

体つきと身長から少女と推測出来るが、それ以外の事は全く分からない。

唯一上げるとするならば、その着ているパイロットスーツのデザインがカレンと一致している事から、黒の騎士団員という事くらいか。

「ゼロ！ それに貴女も！」

カレンは嬉しそうに声を上げる。

『そこに居る私の部下を返してもらおう。 人質交換だ。』

ゼロの言葉により、スザクの思考は現実引き戻される。

「ゼロ、お前はまた！」

込み上げてきた怒りを抑えられず、スザクは声を上げる。

信用出来ない、そう彼の顔が語っている。

最もこの場において不利なのはスザクであるから、当然の反応と言える。

『私達にとって、この皇女殿下は用済み。 手っ取り早く済ませる為にも交渉に応じて』

下さい。』

仮面の少女が沈黙を破り、口を開いた。

『そういう事だ、さあ彼女を渡せ、柘木スザク。』

「くっ……。」

ゼロ達の言葉を信じるか、信じないか。

スザクの心に迷いが生まれる。

だから気づくことが出来なかった、自身の後ろでカレンが拘束を解き、自らに襲い掛かろうとしていた事を。

「おやめなさい！」

ユーフェミアの声も虚しく、スザクはカレンに羽交い絞めされてしまう。

「黙ってる！ お人形の皇女様が！ 一人じゃ何も出来ないくせに！」

お人形の皇女様、お飾りの副総督。

ユーフェミアが陰で言われている事だ。

勿論、ユーフェミアにもその自覚はあるし、言われているのも知っている。

しかし、だからこそ。ルルーシユとアルカに譲れないモノがある様に、彼女にもそれはある。

元々負けず嫌いのユーフェミア、カレンの物言いにヒートアップしてしまった。

「なっ！ 構いません、スザク！ 私の事は気にせず戦いなさい！」
『皇女殿下！』

（あー、もう滅茶苦茶だ……。）

どうしてこうなってしまうたんだろう、とアルカは思った。

スザクに伝えた様に、今更ユーフェミアに何かする気はさらさら無いし、この場から
穩便に去ればそれで良かった。ルルーシユも同じ考えだ。

しかし事態は2人の望んでいない方向へとこじれていく。

「今なら……！」

一瞬の間隙についてスザクはカレンの拘束を振りほどいた。

いくらカレンと言えど、男性のスザクの力には敵わない。

持ち前の身体能力を発揮し、スザクは一瞬で距離を詰める。

迫るスザクから逃げる様に、ゼロとアルカはユーフェミアから離れ、カレンの元へ
寄った。

『この石頭が！』

ゼロが苛立ちの声を上げたその瞬間、事態は急変した。

地面が赤く光出したのだ。

『何?!』

視線を下へと向ける。

そこには模様が浮かんでいた。大空へと羽ばたく鳥の様な模様。アルカとルルーシユに宿るギアスの模様。

『これは……』

アルカはC・C・の言葉を思い出す。

(ギアスの遺跡……?)

ギアスを発動している時と同じ感覚に襲われながら、アルカは自身の動悸が早くなっている事に気付いた。

(なん、だこれ……)

気持ち悪い。

思わず自身の胸の中央を抑える。

全身から汗が吹き出し、脚が震える。

とうとう自立するのが困難になり、アルカはその場にしゃがみ込む。

『！おい！』

アルカの異変に気付いたゼロは、彼女に手を伸ばす。

が、その瞬間。

激しい音と共に、床が沈んでいった。

同時刻 神根島 遺跡

「な、なにこれ……」

彼を知るものが聞けば驚くだろう。

それほどまでにロイドは困惑していた。

突如、ドルイドシステムが解析しきれない程のデータが激しい振動と共に流れ込んできたのだ。

モニターから目を放し、遺跡を見る。

掘られた模様に合わせて、赤く光っていた。

中央から各方向に伸びた線はまるで血液の様に、植物の根の様にも見える。

「お下がりください！ 我が君！」

シュナイゼルの身を案じたバトラーが声を上げる、がシュナイゼは声が聞こえていないのか遺跡を見つめたまま立ち尽くしている。

そして、遺跡の支柱が崩れ、天井の一部が崩落した。

その天井の崩落と共現れたのは。

「枢木少佐！ それと、まさか……ゼロ！」

そこに居たのはスザク、ユーフェミア、ゼロ、カレン、アルカ。

ブリタニア軍はゼロに対し、銃口を向ける。が

「バカ者！ ユーフェミア様もおられる！ 確保だ！確保しろ!!」

意外にもそれを制止したのはバトラーだった。

兵は銃を下げ、5人が居る遺跡の祭壇へと駆け寄る。

「ゼロ！ あそこにナイトメアが！」

『よし！ あれを使うぞ！』

カレンが指さした方向には、黒い鎧の鋼鉄の巨人。

『おい、行くぞ！』

座り込んでいるアルカに声を掛け、手を引こうとするがアルカは動かない。

まるで人形のように力が入っておらず、心ここにあらずと言った様子だ。

心配したカレンも、アルカの元へと駆け寄る。

『おい、どうした!?!』

『どうしたのよ!?!』

アルカと同じ状況の人物がもう1人。

「スザク？ スザク！ どうしました!?!」

2人は焦点が合わない目で、遺跡を見上げていた。



(なに、これ)

自身の目の前に広がるのは無機質な星の様な物。

前にもこの光景を見たことがあるような気がするが、今のアルカには思い出せない一つ一つの光景に感想を抱いている暇は無く、刻一刻と目まぐるしく変化していく。

同じ顔をした無数の少女達、人々の悲鳴、図書館の様な場所。

次々と情報が頭へと流れ込んできて、頭が割れそうだ。

(これは…、なん?)

突如、目の前に広がる視界が見覚えのある場所へと変化した。

奥にはギアスの模様が描かれた扉の様な遺跡。

その祭壇で踊る、巫女の様な服を着た黒髪の少女。

祭壇の前で膝を付き、静かに祈る無数の人々。

少女の服は少し胸元が緩く作られているようで、時折胸元の様子が伺える。

彼女の胸元には自身も深く関わっている力の象徴。ギアスのマークが刻まれていた。

黒髪の少女が踊り終えたその時、一人の少年が祭壇へと上がってきた。

軽い癖のついた茶髪の少年。腰には刀が携えてある。

少女の前に立った少年はしばらく少女を見つめていたが、覚悟を決めた様な顔付き

で、片膝を付き、頭を下げた。

これに似ている光景を知っている。そうだ、騎士の叙任式だ。朦朧とした意識の中で、アルカはそう思った。

ふと、全ての光景が消え去り、アルカの周りには何も無い白い空間が広がった。色も無い、モノクロの世界。

「はっ？」

思わずアルカの口から声が漏れる。

その目は驚愕のあまり見開かれ、震えている。

そこには少年が居た。

先ほどの光景と同じように膝を付いて。

日本人にしては珍しい色素の薄いくせの付いた髪。

優しい緑色の瞳。

枢木スザク。

先ほどの光景の2人と寸分違わない位置に、恰好で、アルカとスザクは居た。

◇◇◇

「……!! い、今の、は……。」

アルカの意識が現実に戻される。

耳に入るのはゼロとカレンの声、それに大勢の兵隊の足音。

『おい、立てるか!?!』

まだ覚醒しきっていないのか、ゼロの声に対し反応を示さない。

遺跡から目を放し、ゆっくりとスザクとユーフェミアが居る方向へと向ける。

「君は……。」

スザクが驚いた様子でこちらを見つめていた。

仮面越しの筈なのに彼と目が合った、そんな気がした。

「ゼロ！ そろそろ！」

兵士の足止めをしていたカレンが声を上げる。

アルカは力なく座り込んだままで、動けそうに無い。

『カレン！ 彼女を頼む！ あのナイトメアで脱出する！』

「はい！」

カレンは向かってくる兵士に向かって目眩ましのフラッシュを焚き、アルカを横抱きにする。

「ホント、世話が焼けるんだから！」

カレンは力強く駆けだした。

『ありがたい！ 無人の上に、起動もしているとは！』

「ゼロ！」

アルカを抱いたカレンが、コックピットまで登ってきた。

『ありがとう、カレン。彼女を後ろの席に。』

2人乗りのKMFという前代未聞の仕様に戸惑いつつも、アルカを後部座席に座らせる。

変わらずぐったりとしていて、生気を感じられない。

素早く発進準備を整え、ゼロはコックピットを閉める。

操縦桿を握り、前進させようとしたその時、ある男の存在に気が付いた。

(シユナイゼル!!)

ルルーシユが唯一勝てなかった兄。

母の死の真に近いであろう人物。

(ええい、今は！)

目的を見失うな、自身にそう言い聞かせ、ルルーシユはガウエインを動かす。

複数のKMFに追われるものの、アヴァロンと同じくフロートユニットを搭載したガウエインを追える筈も無く、ゼロを乗せたブリタニアの新兵器は空へと消えた。

「スザク、すまない……」

追手を振り切り、黒の騎士団との合流地点へ向かっている最中、ルルーシユは自分がスザクにした事を振り返る。

式根島の砂漠地帯でランスロットのコックピット内に捕らわれていたあの時。

自らの命を犠牲にしようとしたスザクにルルーシユは生きろとギアスを掛けた

自身が助かりたかったからじゃない、純粋な彼の願いだった。親友に死んでほしくないといいふれた願い。

しかし、その願いが、親友を苦しめる呪いになる事を、ルルーシユはまだ知る由も無かった。

◇◇◇

「おい、どういふつもりだ。」

その声は酷く不機嫌だった。

「だからまだ早いと言っただろう！」

「それをお前のくだらん悪戯で、あいつは……!!」

それは何時になく感情的だった。

「そんなことは知らん。それはお前達の事情だろう！」

「ああ、もういい！ 兎に角、アルカの事は手出し無用だ！ 私に任せてくれ!!」

ひとしきり話終えたのか、彼女はため息を付きその場に座り込む。

「…アルカ……………」

その呟きにどんな思いが詰められているか、それは本人にもよく分からなかった。

Stage 24 箱

黒の騎士団の潜水艦にある無数の部屋の中でも群を抜いて広い部屋。

ゼロの私室で魔女、C・C・は少女の帰りを待つ。

その顔に浮かぶ表情は機械の様で感情が読み取れないものの、立ったり座ったりを繰り返し、落ち着かない様子だ。

「ゼロ！ アルカは一体……。」

『私にも分からない。ただ一つ分かる事は異常なまでに疲弊している事だ。今は休ませよう。カレン、君は先に藤堂達の所へ。』

部屋の扉越しからゼロとカレンの会話が聞こえる。

(やっと戻ってきたか。)

話を終えた様子のゼロは、アルカを横抱きにしながら自室へと脚を踏み入れる。

「遅いぞ。」

部屋の主を迎える挨拶も無く、C・C・は文句を口にした。

『C・C・……、アルカは……』

「ああ、分かっている。そのベッドに寝かせろ。」

C. C. が示したのはゼロの私室にある、一人を寝かせるには大きすぎるベッド。ゼロは彼女の言う通りにアルカをベッドに下ろし、自身の仮面を取る。

「いつからこうなった？」

「島にある遺跡の様な物の前に立った時からだ。」

「他に変わったことは？」

「……そういえば、倒れる直前、胸の辺りを押さえて苦しそうにしていた。」

「やはりそうか。」

ルルーシュへ質問をいくつかしながら、C. C. は靴を脱ぎベッドへ上がる。そしてそのままアルカの上へと跨り、何時から持っていたのか、その手に持つナイフを彼女の胸へと突き立てる。

「おい、何を……。」

ルルーシュの疑問に答える事無く、そのままナイフを勢いよく下へとスライドさせた。

音を立てながら、アルカの着るパイロットスーツが引き裂かれ、彼女の年相応の胸が外気へ晒された。

「おい、C. C. !!」

当然の奇行に、ルルーシユは立ち上がり怒りの声を上げる。

「なんだ？ スーツなら予備があるだろう、いちいち声を荒げるな。」

「そうでは無くて——！」

「いいから黙って私に任せろ。何、取って食う訳じゃない。」

それに、とC. C. は言葉を続けた。

「いくら妹とはいえ、乙女の柔肌をそう、まじまじと見るものでは無いぞ。分かったなら、カレン達の所へでも行つてろ。」

彼女は淡々と、しかし目線はアルカの胸元を見つめながら、話す。

「……分かった、任せよう。」

ルルーシユは渋々という様子ではあったものの、了承し仮面を被る。

隠し事は多い、が嘘はつかないし、アルカの対して危害を加える様なことはしない。

ルルーシユはその二つに関しては信頼を置いている。

了承したのもその心情の現れだろう。

『変な事はするなよ。』

「分かっている、このシスコンめ。」

ルルーシユは部屋を後にし、部屋にはアルカの呼吸の音だけが残る。

「……………」

C. C. は口を開くことなく、自身の細長い指をアルカの胸の間に滑らせる。

「……ん……………」

くすぐったいのか、アルカから吐息が漏れる。しかし深い眠りに落ちているのか、起きる様子は無い。

「お前にとつて、どつちが幸せなんだろうな……………」

C. C. の間に答える者はこの場に居なかつた。

◇◇◇

皇歴2005年

「珍しいな、お前が頼み事なんて。」

薄暗い部屋の中に1人の少女の声が響いた。

黄金の瞳に作り物みたいに整った顔立ち、人形の様な無感動な表情。

彼女はその手に持つ資料に目を通しながら、この部屋に居るもう一人の人物に問う。

何の用だ、と。

「そんな大それた事じゃないわ。ただの相談よ。」

柔和な笑みを浮かべているドレスの女性、マリアンヌはその手に抱いている赤子に視線を向けながらそう言った。

「私は見ての通り忙しいんだ。子どもの面倒ぐらい自分で見たらどうだ？」

「あら、貴女いつも、自分はお飾りだ、って言っているじゃない。たまには友人の頼み位、聞いて欲しい物だわ。」

「……わかったよ。」

嚮団の研究員がまとめた研究資料をバサツと机に放りだし、C・C・はマリアンヌの方へ向く。

嚮主という立場から形式上、資料に目を通してあるものの、本来彼女は研究になど興味は無い。

資料を放り投げたのは、その表れだろう。

「それで？」

「この子の名前を考えて欲しくて。」

マリアンヌは自身の腕の中で眠る赤子をC・C・に見せる。

「そいつは…、例の……。」

「そう、例の血筋を混ぜた私の子ども。」

そこにはついこの間、生まれたばかりの子ども。マリアンヌの第三子。

話には聞いていた、しかし実際に会うのはこれが初めてだった。

「……自分の子どもの名前くらい、自分で考えたらどうだ？」

仮にも母親だろう、と呆れながらC・Cは言った。

「そうと言つてもねえ、もう二人も名前を考えたのよ？ 何も思いつかないわ。」

それに、この子はお腹痛めて産んでないし。マリアンヌは肩を竦めて語る。

「……………」

体外受精、マリアンヌがこの子を産むときに選択した方法だ。

つまり、この赤子は機械によって受精が行われ、こうして生まれるまでの過程を全て機械の中で過ごしてきた。

この子に対しての執着が無いのだろう。

「親とは思えない態度だな。」

「私に一般的な親を求めちゃダメよ。貴女だつて分かっているでしょう？」

「……………ああ、そうだったな……………」

C・Cは寝ている赤子に視線を向ける。

「良く寝ているでしょう？ 薬で眠らせたの。この子、母親の私に抱かれても中々寝付かないから困っているのよ。」

「はっ。 案外、お前の内面でも覗いているのかもな」

「……………まさか、貴女じゃあるまいし。」

こんな母親ならそうなるのも当然の様に思えるがな。

C. C. は内心そう毒づいた。

「話が逸れたわね。それで、どうなの？ C. C.。」

「名前、名前か……。」

急にそう言われても何も出てこない。

何か由来になりそうな物は無いかと彼女は辺りを見渡す。

部屋にあるのは簡素なベッドと机、それと本棚。

「……アルカというのはどうだ？」

C. C. は本棚を見つめながら呟いた。

つられてマリアンヌも本棚へ視線を向ける。

「アルカ…、箱舟^{ark}ねえ……。」

2人の見つめる先には一冊の本。

「良いわね、中々おあつらえ向きな名前じゃない。……ねえ、C. C.、貴女はその

アルカ^箱に何を詰める気？」

「……なんだそれは、別に深い意味は無い。ただ最近読んだ本を思い出ただけだ。」

まあ良いわ、とマリアンヌは踵を返し部屋を出ようとす。

「もう行くのか？」

「仮にも一国の皇女が生まれたのよ？ もう周りは五月蠅いくらい大騒ぎ。これでも

忙しい身なの。」

マリアンヌはうんざりと言った様子で部屋を後にした。

「……何を詰める、か。」

これが私とアルカのファーストコンタクトだった。

薄暗い部屋の中、C・C・は目を覚ました。

「……………懐かしいな。」

そう呟き、未だに起きる様子の無い少女へと視線を向ける、頬を撫でる。

「本来だったらあの時、名前を捨てさせるべきだったのだがな。」

これではルルーシュに甘いと言った立場が無い。

結局、自分が生きてきた痕跡を残したかっただけかもしれない。

「嗚呼、私のアルカ。どうかお前だけが変わらないでくれ。」

そう言葉を紡ぎながら、C・C・は静かに目を閉じた。



『どうだ、調子は？』

キョウトが用意したラクシャータ専用のラボ。

そこに足を踏み入れたゼロはこの主に問う。

「頼まれたフロートユニットの整備とハドロン砲の調整は行ったわあ。ドルイドシステムの方も問題無さそうだし、後は……。」

『パイロット、か……。』

2人はゼロが強奪してきた第六世代KMF「ガウエイン」を見上げる。

このKMFは機体本体を動かす前席と、ドルイドシステムや武装の管理を行う後席の二種類、操縦席が存在する。

神根島から脱出する時はゼロ一人で操縦していたが、このKMFの真価は二人のパイロットを持つて発揮する。

『アルカなら——』

「アルカちゃんはおすすめ出来ないわあ。」

ゼロの考えを汲み取ったのか、言葉を遮りラクシャータが口を開く。

「このガウエインはいわば指揮官専用の移動砲台。情報処理能力と後方射撃に秀でた機体。アルカちゃんのような前線で活躍出来るパイロットは乗るのは勿体無いわよお。」

それ、と彼女は続ける。

「仮にアルカちゃんが乗るとして、今度は無窮のパイロットが居なくなるわあ。貴方のオーダーでアルカちゃんに合わせて改造したんだもの、もうあの子以外には乗れないわよお。同じ理由でカレンちゃんもダメね。」

『……そう、だったな。』

ラクシャータの反論に対し何も言えず、ゼロは考え込む。

ゼロの脳内で、パイロット候補はある一人の人物へと絞り込まれた。

(あの女、ちゃんと操縦訓練やっているだろうな……。)

不安しか残らないが、ここで考えても仕方ない。

ゼロは思考を切り替える。

『分かった、ご苦労だった。パイロットの方はこちらで何とかしよう。引き続き頼む。』

「はいはい。フロートユニットの方はアルカちゃん優先で良いのよね?」

『ああ。』

ラクシャータはその手でキセルを遊びながら、空いている片手でパソコンを操作する。

「ねえ、ゼロ。」

ラボを後にしようとした時、ラクシャータから話しかけられ、足を止める。

「貴方つてロリコン？」

『……………何？』

全く予想をして無かった問いに、ゼロの思考が止まる。

「だって、アルカちゃんをすごい気に掛けているじゃない？ まあ年齢と血筋考えたら

そうなるかもしれないけどさ、それでもちよつと過保護な位に。」

『そんなことは……………』

「幹部達が影で噂してたわよお、ゼロはロリコンだ、つて。」

『…なん、だと……………』



トウキョウ租界 政庁 総督室

『ふうん、仮面の少女、ですか。』

「ええ、神根島でゼロと共に居たそうです。」

コーネリアは神根島での出来事をまとめた資料に目を通す。

『神根島…………、と言えば枢木少佐が半狂乱になったやつですね。』

あやつは無事ですか

?』

「一時は軍規違反として捕らえられたものの、シユナイゼルお兄様の口添えですぐに釈放されました。特に処罰も求められなかったそうです。」

『はあ、あやつは運が良い。こうして人から好かれる点もある意味才能でしょう。こうしてコーネリア様にも気に入られているのだから。』

快活な声を上げながら、ノネットは笑う。

「…やめてください、私は一人の軍人として彼を評価しているだけであつて……。」

『ハイハイ、そういう事にしておきましょう。……それで話を戻しますが、仮面の少女について他には?』

再びコーネリアは視線を資料に落とす。

「他には何も。近くに居たユファイも枢木も素性に繋がる情報は得られなかったそうです。それは赤毛の少女も同じですね。」

『そう、ですか……、歳の方は?』

「これは憶測ですが、赤毛が10代半ば〜20代前半。仮面のが同じかそれ以下と報告が上がっています。」

ここでコーネリアはふと、疑問に思う。

やけにノネットが仮面の少女に興味を持っている事に。

「……仮面の少女に何か？」

『ん？ ああ、いや大したことでは無いんです。仮面のとはチョウフの時に一戦交えていますから、純粹に私を打ち負かしたものに對する興味ですよ。』

「あの仮面の少女が一本角のパイロット、ですか……？」

『まあ殆ど勘ですが、恐らくそうでしょう。』

赤毛の少女が紅蓮と呼ばれるKMFから出てきた事は確認が取れている。

消去法で考えると、確かに仮面の少女が一本角のパイロットである可能性が高い。

「藤堂ら旧日本解放戦線の黒の騎士団への加入に、ランスロット並みのスペックを持った二機のKMF、それを扱えるパイロット。そしてゼロによる新型の強奪。中華連邦の方でも不穏な動きがあるという。頭が痛い話だ。」

コーネリアは自らの頭を抑え、溜息を吐く。

『まあ、そう気を落とさないでください。もうじきダールトン将軍の子ども達、グラストンナイツがエリアーに配備されるのでしょうか？ 私ももうじき、そちらに戻ります。』

ああ、そういうえげとコーネリアは顔を上げる。

「……あの子の事、何かわかりましたか？ 私の方は調べる時間が取れず……。」

黒の騎士団への対応に、ユーフェミアと枢木の件、シュナイゼルの訪問と、ここ最近

のコーネリアは多忙を極めていた。

『お恥ずかしながら確信に迫る情報は全く。当時の事も調べようにも情報も殆ど残っておらず……。彼女と交流が合ったアーニヤ…、アールストレイム卿も何も憶えておらず、当時警護をしていたジェレミア・ゴッドバルト辺境伯は行方知らず……。』

苦笑いを浮かべながらノネットは続ける。

『ヴァルトシュタイン卿に聞こうにも、彼は今EUの方に行ってましてね、捕まえられませんでした。』

「……そう、ですか。」

無駄足だったか、とコーネリアは顔に影を落とす。

『ただ……。』

「?。」

『あの事件、不可解な事が多すぎますね。あの子と思われた顔が潰された子どももの死体。聞けばアリエスの離宮の目の前に転がっていたらしいんです。変じやないですか? 彼女を殺した事をアピールしたいのなら顔を潰さない方が効果的。彼女を殺した事を隠したいのなら、そんな目立つ場所に死体を置かなきゃいい。中途半端なんです、下手人の行った事が。』

当時、立て続けに起こったヴィイ家の不幸に動揺し、冷静な思考を保つ事が出来なかつ

たコーネリアはそこまで頭が回らなかった。

今思い返してみると、確かにおかしい。

『それに子どもの死体は葬式が行われる事無く、すぐに火葬。下手人は翌日には見つかり、その場で射殺。事件の発生から収束まで早すぎる。皇族が一人、死んでいるのに。殺されたのも、ルルーシユ様とナナリー様が当時の日本へ渡つてすぐの事。』

まるで彼女を死んだことにして、生かした様に見える。』

後ろ盾の無い皇族というのは悲惨なものだ。

他の家から激しく攻められ、将来性が乏しい為、従者も就かない。

加えてアルカは唯一の身内となった兄と姉も失い、文字通りの天涯孤独。皇位継承権も最下位。

そんな状態では当時5歳の彼女はとても生き残れないだろう。

『これは私の主観ですが、生きていますよ。アルカ様は。』

ノネットの脳裏に仮面の少女の姿が浮かぶ。

KMFの操縦センス、状況判断。太刀の運び、間合いの図り方。

過去に共に訓練に明け暮れた幼いアルカの姿が重なる。

(確かめる為にも、私は……。)

再び彼女はエリアーへと踏み入れる。

stage 25 幕間

KMFを乗りこなす為には、何より身体作りが大事である。

これは実際に乗った経験がある者だけが実感できる事実であろう。

身体に掛かる激しいGに耐えうる身体を、長時間の戦闘を乗り切れる体力を、激しい戦闘にも対応できる反応速度を。

ブリタニア軍においても、パイロットの育成は身体作りから始める程、重要視されている。

そして、それはここ、黒の騎士団でも変わらない。

「あんだ、ホント身体柔らかいわねえ。」

柔軟を行っているアルカに体重を掛けながら、カレンは感心した様に口を開く。

「昔から、やってた、からね。」

ゆつくりと息を吐きながらアルカは返事する。

2人が居るのは、アジトに用意された簡素な訓練室。

主にKMFの操縦の為の身体作りを目的として作られた部屋だが、ここ最近KMF

のパイロットが固定化されてきた事もあり、あまり利用者は居なかった。

「さて、と……。」

「やりますか。」

柔軟を終えたアルカは立ち上がり、カレンを真っ直ぐ見据える。

「ただやるだけじゃ面白くないわね……。そうね、勝った方が何か奢るってのはどう？」

「上等。」

・
・
・

「んで、次行くのが訓練室なあ。まあ、俺くらいになるとよ、利用する事無いんだが。

お前らも最初位は訓練しておいた方が良いと思うぜ。」

「「はい！」」

複数の男女を連れ、上機嫌で玉城はアジト内を進む。

サボっている訳では無い。最近、黒の騎士団に入団してきた新人の面倒を見ているのだ。

ブリタニアへの対応や次の作戦の準備で忙しい中、唯一暇そうにしていた玉城に白羽の矢が立ったのだ。

「あ、あの、ナイトメアの操縦っていうのは、やっぱり難しいですか？」

玉城の後ろを歩いてきた新入団員の内の一人の男が、何処か興奮した様子で玉城に尋ねる。

「ん、まあ、最初はちつとは難しいかもなあ。でも、この俺様の指導にかかればすぐに乗れるようになるぜ！ なんつったって、黒の騎士団のエースパイロットだからなあ！」

「お、おおお〜」

高らかに笑う玉城を、目をキラキラさせながら見つめる新入団員達。

そうこうしている内に、訓練室のある区画へと差し掛かった。

そこで玉城は訓練所前に出来ている人だかりを目にする。

「あ……？」

訓練室と通路は一枚の強化ガラスで隔たれており、外からでも中の様子が確認出来る様になっている。

「誰か使っているんですかね？」

「ただ使ってるだけじゃ、こんな人だかり出来ねえと思うんだが……。はっ、案外ゼロが

素顔を晒してたりしてな！」

玉城は冗談を交えつつ、人だかりへと向かう。

人だかりの中で、見知った顔が見えた。

扇、杉山、井上といった黒の騎士団古参メンバーだ。

「よお、扇く、こんな所で油売ってていいのかあ？」

扇の背中を軽く叩き、玉城は話しかける。

「ん、ああ、玉城。ちよつと珍しいものが見れてな。ほら。」

言いながら扇は訓練室の中へと指を向ける。

そこには喧嘩：では無く、組手をしているアルカとカレンの姿。

いや、組手と言うよりは模擬戦闘と言うべきだろう。

両者の目には普段の友人関係は見られず、お互いがお互いを容赦無く攻め立てている。

「あいつら何やってんだ？」

「訓練みたいよ。ほら、神根島で遭難した時、カレンって一時的に枢木スザクに拘束さ

れたでしょ？ 彼に歯が立たなかったのが悔しかったんだって。アルカちゃんはア

ルカちゃん、フロートユニットのシミュレーションをカレンに付き合ってもらってる

から、それのお返し。だつてさ。」

玉城の疑問に井上が答えた。

「実際、この模擬戦の後、そのままナイトメアのシミュレーションに行くんだつてよ、ほ

んと体力が底無しというか何というか……。」

「まあキュウシユウ戦役で思う事があったのかもな、ゼロが一人で片付けてしまったし……。ほら、特にアルカとかその辺りに敏感だから。」

続けて青山と扇が口を開いた。

「はあく〜ん。……………ガキが無茶しやがって。」

再び意識を2人へと戻す。

力が勝っているカレンは足や手を用いて直線的な攻撃を中心にアルカを攻める。

対するアルカは、カレンに力で勝てない事を分かっているのか、防御よりも回避に専念し、隙については絡め手を用いて切り返している。

まさに剛と柔。お互いの性格の表れにも見える。

脚を踏み込んだ際の振動、お互いの身体がぶつかっり合った時に放つ鈍い音、どれもまだ学生である彼女達が出て良いものではない。

2人の気迫に、見ているこっちが怯んでしまう。

「カレンもそうだけど、アルカちゃんも容赦無いわね……………」

「というど?」

「アルカちゃんが攻撃しようとしている所ね、鳩尾とか肩とか。所謂、急所ばかりな

の。ほんと何処で教わったんだろう、っていう位的確よ。」

「急所、か。確かラクシャータ博士も言っていたな、ナイトメアで戦っている時も真つ

先にコックピットとか関節を狙っているって。」

「それはえぐいな……。いや、手早く敵を無力化するのを重視するなら常套手段とも言えるか？」

そう話している間にも彼女達の攻防は続く。

アルカの的確に急所を狙った攻撃も恐ろしいが、それを見てから対応するカレンの反応速度も恐ろしい。

「あ、あの……。」

ふと、新入団員が声を上げた。

「ああ。ごめんなさいね。最近入ってきた子よね？ どうしたの？」

「あの訓練やつてる子達……。いえ、お二人の様なレベルが普通なのでしょうか……。ぼ、僕にはとても……。」

他の新入団員達もその言葉に同意する様に、首を縦に振っている。

その様子に玉城以外の3人は顔を合わせると、声を上げて笑い始めた。

「ああ、いや。あの2人は特別なんだよ。紅蓮と無窮っていうナイトメアを見た事あるだろ？ 赤いやつと青いやつ。」

代表として扇が口を開く。

「あの2人……。カレンとアルカはそれのパイロットなんだ。その2つのナイトメア

は随分とピーキーな性能をしていてね。彼女達にしか扱えない。彼女達にしか出来ない事があるように、君達にしか出来ない事が絶対にある。そんなに気負う必要は無いさ。」

扇の言葉に、顔を明るくする新入団員達。

視線を戻し、再び話題は2人へ戻ろうとしたその時、もう1人の声に加わった。

『ハハハに居たのか。』

「ゼロ。」

黒の騎士団リーダー。ゼロである。

ゼロの登場に新入団員は顔を引き締め、井上、青山も何処か落ち着かない様子を見せる。

そんな様子を見て、ゼロは内心溜息を吐きながら言葉が続けた。

『何、彼女達に用が合っただけだ。そう身構える事じゃない。』

そう言いながら、ゼロは訓練室の扉を開け、踏み入れた。

相変わらず戦闘を続けている彼女達はゼロの存在に気付かない。

しばらく無言のまま、2人の様子を見守る。

カレンの猛撃を小さい身体で受け止めるアルカ。

身体的不利にも関わらず、精一杯反撃するアルカ。

病み上がりでありながらも汗を流し、健気にカレンとの訓練に励むアルカ。

『……………、精が出るな。』

出てしまった、我慢しようと思っていたのに。ルルーシユは内心そう考えた。言わずもがな、いつもの妹想いシズコンである。

兄としては、これ以上自らを傷つけてしまう行為を続けて欲しく無かったのだ。

「ゼロ…?」

一番に反応したのはカレンだった。

カレンは一瞬だけ、視線をアルカからゼロの方へ向ける。

「隙あり。」

その一瞬をアルカは見逃さなかった。

カレンを足払いし、バランスを崩した彼女はそのまま重力に従って倒れる。

そのままアルカはカレンを組み伏せた。

「私、アイスクリーム、が良いな……!」

「ちよ、ちよつと…、卑怯じゃ、ない?」

お互い息を切らしながら、口を開く。

気を逸らしたカレンが悪いよく、そう言いながらカレンの身体から退き、手を差し伸べる。

差し伸べられた手を取りながら、何処か納得出来ないと言った様な表情で立ち上がる。

『すまないな、邪魔をしてしまった。』

「い、いえ！」

「ううん、そろそろ止めようと思ってたし、タイミング的には良かったかな。それで、要件は？」

『アルカ、君にお手紙だ。』

「手紙？」

ゼロから差し出された紙を手に取り、不思議そうな顔でそれを眺める。

『……キョウトからの。』

◇◇◇

キユウシユウ戦役

旧日本政府、第二次枢木政権下において官房長官を務めていた男、澤崎敦が起こした一連のテロ事件の総称。

中華連邦の支援を受け、キユウシユウのフクオカ基地を占拠し、日本の独立を宣言。

しかし、枢木スザクを始めとするブリタニア軍がKMFで基地を強襲。それにより起

きた混乱の隙をつき、コーネリアが率いる親衛隊が制圧。

澤崎に積極的に支援していた中華連邦の曹將軍もろとも捕縛され、このテロ事件は終息へ向かった。

と、というのが表向きの報道。

実際は基地への強襲は枢木スザク単独での遂行であり、ブリタニアの援護は無かった。

彼を援護したのは他でも無い、ゼロだ。

もちろんゼロがこの事件の解決に一役買った、等と報道される訳が無い。

しかし例え報道されなくとも、黒の騎士団がこの件に関わったのは揺るぎない事実である。

そして今回の一件で黒の騎士団の立場を完全に確立する事に成功した。

ブリタニア、では無く間違った主義や主張を憎む組織。

この認識が一般市民に定着したことは非常に大きい成果と言える。

特に、この後に控える大規模なクーデターに大いに役に立ってくれるだろう。

「……はあ……………」

キユウシユウ戦役の事を思い返すと、少し憂鬱な気分になる。

そんな気分になるなら思い出さなきゃ良い、という意見もあるだろう。

しかし今、壇上が上がっている先生がそれについての熱く話をするものだから、思い出したく無くても思い出してしまう。

アルカの今の顔は誰が見ても分かりやすく落ち込んでいる。

何故、彼女はキュウシユウ戦役の話で心に影が差すのか。

厳密に言えば、キュウシユウ戦役だけに限った話では無い。

チョウフ基地でのノネットとの痛み分け、神根島での昏睡と数日に及ぶ体調不良、そしてルルーシユとC・C・のみで介入したキュウシユウ戦役。

焦っているのだ、自分が役に立っていないのではないかと。

元々、ルルーシユの障害を打ち払う剣として、その身を守る盾として育てられてきたアルカは、ルルーシユに守られる事に若干の抵抗がある。

そうであるのにも関わらず、最近は守られてばかり。まるで自身の存在意義を無くした様な感覚に陥るのだ。

アルカのそんな気分を余所に、壇上の教師はさらにヒートアップする。

彼女は熱を増していく教師を目に留めながら思わず苦笑をしてしまう。

(まあ、ブリタニア市民からしたら大きな事件だから、熱くなるのも分かるけどね。)

澤崎という日本人が表立っては居たものの、背後に控えていたのは中華連邦。

キュウシユウ戦役とは、味方を変えれば中華連邦による実質的な侵略行為。一步間違

えれば国同士の戦争にすら発展してた可能性が有る。

だから目の前のこの教師は、生徒達の空気を汲まずに、熱く、語っている。警鐘を鳴らしている。

周りの生徒は他にやりたいことがあるのか、早く終わらないかと落ち着き無い様子だ。

(休めばよかったかな……。)

今、アルカが居るのはアツシユフオード学園中等部の教室。久方ぶりの学校に来てい

る。

というのも黒の騎士団の活動に一区切りついたからだ。

黒の騎士団は現在、次の作戦に向け準備をしている。物資の調達、人員の確保、各レジスタンス組織との連携、内部協力者の確保 e t c やる事は沢山あるものの、その分、設定された準備期間も長い。

ブリタニア軍に激しい動きも無い最近、黒の騎士団に入り浸らずとも、十分に準備を進める事が可能であった。

その実、ルルーシユも最近、学校に顔を出している。

実際は進級の為の単位が足りないから来ている訳だが、妹の前では恰好を付けたいルルーシユはそんな事話す筈も無い。

(あ、やっと終わった。)

話したいことを話終えたのか、満足そうな顔で教師は壇上を退き、2人の生徒と入れ替わる。

先生のソロライブから本来の目的へとシフトするらしい。

壇上に上がったのはこのクラスの中心人物、常に皆の中心に立ち、纏めてきた2人の男女。

その内の女子生徒の方が笑みを作り、声を上げた。

「ただいまから！ 第15回！ 学園祭クラス会議を始めます!!」

少女の声を聞き、周りの生徒も声を上げた。

中には両手を上げ雄たけびを上げている生徒も居る。

「……この学校、イベント好き多すぎでしょ……。」

アルカは周りのテンションについていけず、1人項垂れた。

・
・
・

「ね、ねえ……!」

クラスメイトが学園祭について盛り上がっているのをBGMに、外の様子を窓から眺

めていたアルカは意識を戻す。

アルカの席の前には先ほどから指揮を執っているクラスメイトの女の子。

何処か緊張している様子だ。

「どうかしました?」

「ア、アルカちゃんは何か、文化祭でやりたいこと、ある?」

どうして歳下の自分にそんな緊張を…、そう疑問を抱きながらアルカは考える。

学園祭という行事は人生で初めてだが、ミレイやルルーシユから粗方話は聞いている。

「んー…、これと言って特には。」

アルカは気づかない。

目の前の少女だけでは無く、クラスの全生徒が自身に注目している事に。

「でも、私に出来る事なら手伝いますよ。」

「……ほんと?!? ありがとう!」

少女は。アアつと顔に笑顔を咲かせ、アルカの前から居なくなる。

そしてそのまま興奮した様に他のクラスメイトへ何かを話始めた。

その様子をしばらく不思議そうに見ていたアルカだが、まあいいか、と視線を再び外へと向ける。

彼女は後に後悔する事となる、自身のクラスの出し物を碌に知らないまま、返事をした事を。

Stage 26 宣言

「ええ〜!? アルカ、手伝えないのお!？」

「クラスの方の手伝いを約束しちゃって……。」

「そんなぁ……。学園祭が一番忙しいのに……。」

シヨックのあまりテーブルに体重を掛け、身を乗り出すミレイ。

向かい側に座っているアルカは苦笑をしながらも、申し訳無さそうにしている。2人の顔の距離はお互いの息遣いを感じられる程に近い。

「だからってまだ生徒会でもないアルカを巻き込まないでくださいよ、会長。」

その様子を少し離れた場所で見ながら、ルルーシュは口を開く。

声からはそう感じられないが、そのキーボードを打つ指がせわしく動いている事から、彼も忙しい事が伺える。

「だつてえ、アルカちゃん優秀何だもん……。後、傍に居ると私のやる気がグンつと上

がる。可愛いから。」

「完全に私情じゃないですか。アルカ、気にしなくていいぞ。お前は過ごしたい様

に過ごせばいい。」

うーん、と口にしながら予定を確認するアルカ。

「あ、でも私のクラスでの手伝いは基本的に午前中に集中しているから、午後からの巨大ピザ作りはお手伝い出来るよ。」

「……ホント?」

目を潤わせながらも、期待を込めた目でミレイはアルカを見つめる。

「うん、最近学校休みがちで手伝えなかつたし、いいよ。」

「い、よっしゃー! 流石アルカ! マジ天使! アルカしか勝たん!!!」

つい先ほどまでの殊勝な態度からは想像出来ない程の反応を見せるミレイ。

その光景にルルシユは呆れつつも、どこか安心しきった様な表情をしていた。

これが学園祭開催の1週間前。

そして、現在。

アツシユフオード学園、学園祭当日。

ナナリーによる猫の泣き真似による開始宣言がされてから間もなく、校内は沢山の人で盛り上がっていた。

ランスロットを主役とした演劇、生徒自身がなったモグラ叩き、お化け屋敷やコスプレの館等と言った趣向を凝らしたものから飲食店まで。

色取り取りの出し物がひしめき合っている。

その中でも一際盛況しているのがここ、中等部の教室で開かれているメイド喫茶。

「ほら、アルカちゃん！ 笑って笑って！」

来店した生徒に写真を撮られつつ、アルカは笑みを作る。

（メイド喫茶つて聞いてないんだけど……。）

アルカが事前に知っていた情報は喫茶店という事のみ。

手伝わって言っても適当に厨房とか客引きとかのつもりだったのに、まさかホールス

タッフを任されるとは思わなかった。

ましてやメイド服を着るなんて。

（まあ、これも午前中だけ……。がんばろう。）

静かに決意を固め、注文を取るべくアルカはホールを歩く。

「おい。」

ふと、声を掛けられ、アルカは声の主の方へ向く。

「は〜い——」

「このメイド特性タピオカピザをくれ。」

そこには長い髪を二つ結びにし、高等部の制服を身に包んだC・Cが居た。

彼女は足を組み、背もたれに体重を掛けながらメニューを見つめている。

「つてC・C・?」

予想外の来客に、アルカは目を丸くする。

「ああ、来てやったぞ。外が騒がしくて二度寝が出来なかったからな。全く、祭り事があるなら事前に言ってくればいいものを……」

「……ごめんね。」

アルカは勿論伝えようとしたが、それにルルーシユはストップを掛けた。彼曰く、「面倒事はごめんだ」と。黒の騎士団と学園祭の準備が追われ、日に日にやつれていった兄を不憫に思い、アルカは素直に従ったのだ。結局、ルルーシユの思いも虚しく、C・C・はこうして出てきているのだが。

「まあ、いいだろう。良い物も見れたしな。アルカはそういうのも似合うんだな。盲点だったよ。」

C・C・は品定めをする様に、アルカの全身をじっくりと眺める。

「そんなにジロジロ見られると恥ずかしいよ……。えっと、タピオカピザだっけ?」

「ああ、この私がお前達のピザの評価をしてやろう。」

「あはは、お手柔らかに……。」

普通のメニューを作っても面白くないという、どこぞの会長の様な意見が大多数を占めた事により、この喫茶店のメニューの八割はゲテモノ料理で占めている。

常人では考え付かない様な料理の数々にアルカは面を喰らったし、今でも引いてい

る。
そんな中、ピザをこよなく愛し、ピザのエキスパートとも言えるC・C・がこの喫茶店のピザを注文した。

アルカの内心は冷や冷やである。

「なに、そう身構えるな。私はピザに関して寛容だぞ？」

「んん……、口に合うと良いんだけど……。じゃあ、注文伝えてくるから、ゆっくりしててね？」

パタパタと小走りでアルカはその場を後にする。

そんなアルカの後ろ姿を目で追いながら、C・C・は小さく呟いた。

「メイドプレイ、か……。」

◇◇◇

「接客業って案外疲れる……。」

その辺の店で買ったジュースを飲みながら、アルカは学園内を散策する。

あの後C・C・にピザを届け、しばらくホール内の注文を取っていたが、想定よりも客の引きが早かった為、早めにあがらせて貰った。

C. C. はアルカが仕事を終えるまで喫茶店内で待つていたが、この後もお手伝いがある為、一緒に散策は出来ないと伝え、先にクラブハウスに戻るように言った。勿論、この後ガニメデで作る予定の世界一のピザを届ける約束をして。

「さてさて、お手伝いの時間まで暇になってしまった……。」

生徒会（主にミレイ）が発案した世界一のピザ作り。そのイベント進行の手伝いを買つて出たアルカだが、その手伝いは午後から。まだ一時間も時間がある。

（ホラーハウスでぬりかべしてるカレンを揶揄いに行くか……、それともご飯にするか……。）

ホラーハウスの驚かし役、初期型のグラスゴー並に熱くてやつてられない、とカレンからメッセージが来ていた事から、相当面白い事をやらされているのが想像出来るが、今の時間にカレンが働いている保証も無い。

そして何より、お腹が空いた。

（どうしよっかなー。）

辺りをキョロキョロと見渡すと、見知った人物が目に入った。

（姉上に、咲世子さん……。それにあれは……。）

車椅子に乗ったナナリーに、それを押す咲世子。その2人だけなら何時もと変わらな
い光景だった。しかし、2人に追従する様に歩く1人の少女の存在が、異常な光景と変

えた。

毛先がカールした腰まで届くピンク色の髪。サングラスと帽子をしているが、見間違える筈ない。

(ユフイ姉……?)

クラブハウス内のルルーシユ達が暮らす区域に作られたリビングで、3人の少女が机を囲む。

「……あの、黙っていてくれますか？ 私達のこと。」

その目が開く事は無いものの、しっかりと目の前のユーフエミアを見据え、眉を下げてナナリーは呟く。

ナナリーに同意する様に、アルカも真剣な瞳でユーフエミアを見つめる。

「でも、このままじゃ……。」

ユーフエミアが反論する様に、口を開く。

彼女の言いたいことはアルカもナナリーも分かっている。一生逃げ続ける生活が続けても良いのか、そう聞きたいのだろう。自らの身分を偽り続け、誰が味方で敵かも

ハッキリしないまま怯える日々。辛いとは2人も思っている。叶う事なら平穩に暮らしたいと。

だからアルカとルルーシュは立ち上がったのだ、本当の平和を手に入れる為に。

ここでユーフェミアを頼ってしまえば、待っているのはブリタニア帝国による保護。ユーフェミアがこつそりと匿ったとしても、その彼女が皇族である限り、ブリタニアによつて生かされている事には変わりない。

そんな事実を、アルカは到底受け入れる事が出来ない。

ユーフェミアの言葉に対し、口を開こうとした時、隣のナナリーが口を開いた。

「いいんです。私は、お兄様とアルカが一緒ならそれで。」

「あ……………」

「……………」

ユーフェミアは気づかされた様に、アルカは複雑な表情を浮かべ、それぞれ反応を示す。

（一緒ならそれでいい、か。）

要するに今の生活で満足している、幸せだ。そういう意味だ。

一瞬、アルカの中に迷いが生まれる。戦う理由の一つにナナリーの幸せがあるからだ。しかも、本人の口から今の環境が十分と、確かにそう出てきた。

(戦う必要なんて無かった?)

兄と姉に再会したあの日。3人で助け合いながら過ごしたこの1年。そこには確かに、求めるものが在った。

(いや、それで良しとするなら、私達が戦っている意味は? 流した血の意味は?)
様々な思考がアルカの脳裏を駆け巡る。

(……それに。)

瞳を静かに閉じる。

瞼の裏には一人の魔女。

長い年月をたった一人で過ごし、決して死ぬことの無い少女。

C・C・と会って何度目かのあの日。アルカがC・C・へ言った言葉が頭の中でリフレインする。

……ルカ。……アルカ……、アルカ!

自身の名が呼ばれている事に気付き、アルカはハッと目を開ける。

「アルカ、どうしたの? 体調でも悪い?」

心配する様に、ナナリーはアルカの顔を覗き込み、その手をアルカの手へと沿える。

「あ、いや、少し考え事を……。」

「案外、寝てたとか? ほら、この子。昔から寝坊助さんだったし。」

ユーフェミアが意地悪な笑みを浮かべる。

あの時の仕返しのももりか……?とアルカは内心呟く。

「本当に大丈夫だよ? 心配しないで。」

心配する姉を落ち着かせる様に、アルカはナナリーの頬を撫でる。

「それで、えーつと、何だっけ?」

「あー! やっぱり聞いてなかった! ルルーシユは何処に居るのって聞いてたのよー!」

呆れたながらも何処か微笑ましい表情を浮かべながら、ユーフェミアは声を上げた。

◇◇◇

「母上のガニメデがピザを作ってる……。」

かつて、閃光のマリアンヌとして名を馳せた母が乗っていた機体。

幾つもの敵を打ち取り、戦場を駆けていたKMFが、ピザを作っている。

企画書や昨年の映像を目にした時も感じたが、やはり実物はより鮮明に感じる。シユールだと。

ましてやそれを操るのが兄上では無く、現役の騎士。枢木スザク。

彼の存在が、より一層際立たせる。

「去年までは俺の役目だったんだが、やはり本職には敵わないな。」

「今日は驚くことばかり、貴方達がこんな近くに居て、しかもスザクの友達だったなんて。」

ガニメデを操縦し、ピザの生地を順調に大きくさせていくスザクを見ながら、ユーフェミアは嬉しそうに、ルルーシユは堅い表情を浮かべながら話す。

「私は、皆が幸せにならないと嫌なの。」

「でも、会うのはこれで最後だ。」

楽天的なユーフェミアとリアリストのルルーシユ。

それぞれの性格を色濃く表した会話だ。

「ううん、良い方法思いついたから。」

ルルーシユの言葉を気にすることも無く、どこか胸のつつかえが取れた様子でユーフェミアは口を開く。

良い方法？とアルカが聞き返そうとしたその時、一陣の風が吹いた。

唐突に拭いたその風は、ユーフェミアの帽子を吹き飛ばし、彼女の纏めてあった長い髪が露わになる。

「え、ユーフェミア様?!」

エリアーの副総督であるユーフェミアは、当然メディアの露出も多い。加えて、イ

レヴンを騎士に任命するといった前例の無い行為に反応したメデイアが毎日特集を組んでいたものだから、ユーフェミアのその姿は多くの国民の脳裏に染み渡っただろう。

その結果、サングラスをしているものの、そのシルエットが完全に露わになった事により、周囲の人間に存在がバレてしまった。

1人の女子生徒の声をきっかけに、ユーフェミアの元に生徒やミレイが呼んだメデイアが集まってくる。

「ルルーシユ、アルカ！ ナナリーを！」

「悪いがそうさせてもらおう！」

皇族と親しく話していたことだけでも注目を引くのに、メデイアにまで写されてしまったら、自身の生存がバレてしまう。

ルルーシユはナナリーの車椅子を押してアルカと共に人目の付きにくい場所へと退避する。

「危ない！ 走らないで！」

ユーフェミアが来ている、という事実がガニメデの周りにいた生徒や来場客が一斉に、彼女の元へと流れていく。

文字通り人の波に足を捕らわれ、バランスを失ったガニメデはピザの生地を手元から放してしまった。

その光景をとある一人の人間以外は気にも留めず、ユーフェミアへと押し寄せる。

会場に来ていたセシルや特派のスタッフ、ユーフェミアのSPが人の波を止めようとするも、あまりの人数にユーフェミアと共に揉みくちやにされてしまう。

その光景に見かねたスザクは、ガニメデを操縦し、彼女の元へと駆け付け、ガニメデのその手にユーフェミアを乗せる。

おとぎ話の様な光景に、周りは見惚れつつも、意識はユーフェミアへと注がれる。

「ユファイ姉様は……?」

「大丈夫、スザクが駆けつけてくれたみたい。」

「よかったあ……。」

アルカの言葉を聞き、ナナリーは安堵の息を漏らす。

「ねえ、お兄様。」

「ん?」

「スザクさんとお姉さま、お似合いですよね。」

「……姉上……。」

唐突なナナリーの言葉にルルーシユは困惑の色を浮かべ、アルカは悲しそうな表所を浮かべる。

「ユファイ姉様、スザクさんと上手くいったんですって。」

「え……？」

アルカ、ナナリー、ユーフェミアでお茶をしたあの時、ユーフェミアは話した。キュウシユウ戦役での出来事を。

スザクに対し告白をし、彼がそれに応えたことを嬉しそうに、幸せそうに。

「きつとお2人なら、幸せになれますよね。」

「ナナリー…、お前……。」

言葉とは裏腹に、眉を下げ、寂しそうな表情をするナナリー。

妹のその表情にルルーシユは顔を険しくし、ユーフェミアを睨みつける。

そんなルルーシユの心情を知らずに、3人の無事を確認したユーフェミアは笑みを浮かべる。

（良かった、無事で。）

私の所為で彼らの平穏が壊れてでもしたら大変ですもの、と内心でそう呟く。

「ユーフェミア様！一言お願いします！」

ふと、ガニメデの足元から声がした。

視線を下げると、そこにはトウキョウ租界を代表するメディア会社のアナウンサーとカメラマンの姿。

「この映像を、エリア全域に繋いで頂けますか？」

「は？ ライブですか？」

ユーフェミアは決心に満ちた顔で口を開く。

「私から、大切な発表があります。」

必死に考えて、ようやく形になった方法。

「神聖ブリタニア帝国、エリアー副総督、ユーフェミアです。」

今日ナナリーに会って、ようやく覚悟が決まった。

「今日は私から皆様に、お伝えしたいことがあります。」

誰もが幸せに過ごせる、私の理想郷。

「私、ユーフェミア・リ・ブリタニアは、富士山周辺に行政特区日本を設立する事を宣言致します！」



「何？ ブリタニアが!？」

「日本を…認める……?」

人々の困惑の声が上がる中、ユーフェミアは続ける。

「この行政区日本では、イレヴンは日本人という名前を取り戻す事になります。イレヴンへの規制、ならびにブリタニア人の特権は特区日本には存在しません。」

やめろ、ユファイ。ルルーシユの心がそう悲鳴を上げる。

「ブリタニア人にも、イレヴンにも、平等の世界なのです!」

全てを抱擁する聖母の様な笑みを浮かべ、ユーフェミアは高らかに宣言する。

しかし、少なくともルルーシユとアルカには悪魔の様に見えた。

「聞こえていますか？ ゼロ！ 貴方の過去も、その仮面の下も、私は問いません。ですから、貴方も特区日本に参加してください!」

ルルーシユとアルカは顔を見合わせる。

お互い驚きと怒りが入り混じった様な表情を浮かべ、目を震わせている。考えている事は同じなのだろう。このままでは黒の騎士団が無くなってしまう、と。

行政区日本、聞こえは良いが、要するに、ブリタニアの領土内に新しくエリアを設

けるといふ事。

特区日本に指定されたエリアに中に居れば確かに安全なのだろう。しかし、それでは今と何も変わらない。

ブリタニア領土内に作るという事は、言い換えればブリタニアの気分次第でどうともなるという事。常にブリタニアに首根っこを掴まれている状態になるのだ。加えて特区のトップになるユーフェミア自体がブリタニア皇族。ブリタニアの庇護下で生かされるという事実は変わらない。

それでも、作ると宣言しただけならまだ良かった。無視を続け、裏で工作をし、頓挫させればいいのだから。

しかし、ユーフェミアはゼロへ、黒の騎士団へ参加を呼び掛けてしまった。

今のイレヴンの意見は真つ二つに割れている。

黒の騎士団の様にブリタニアと戦い、自由を勝ち取る反逆を支持する声と、枢木スザクのようにルールの中で生き、正当な評価を狙う恭順を支持する声。

この状態で黒の騎士団がユーフェミアの声を無視したらどうだろうか。

日本人の解放を目標とする黒の騎士団の信用は失墜し、空中分解。良くても戦力が大幅に下がり、ブリタニアにそのまま反逆者として叩き潰される。

それではもう一つの見解、ユーフェミアに応じた場合はどうだろうか。

ユーフェミアは争いを良しとしない。十中八九、武装解除を求められ、戦う大義名分すら失うだろう。

黒の騎士団が形として残っても、せいぜい特区内の自警団止まりだろう。

(違うんだよ、昔とは……………)。

ルルーシユの目に怒りが、憎しみが。

(俺達は顔を隠したテロリストで、君は……………！)

ユーフェミアに対して、一度も向ける事の無かった敵意。

(……………ユーフェミア!!!
!!!)

Stage 27 行政特区日本

アツシユフオード学園 クラブハウス リビング

ルルーシユは酷くイラついていた。

理由は言うまでもない、行政特区日本の影響である。

絶対強者であったブリタニア人と奴隷同然であるイレヴンを平等に扱うこの政策は、大きな話題を呼び、日夜テレビやラジオで話題にされている。

エリアーの安定に繋がるのか。特区に参加しなかったイレヴンの扱いは。黒の騎士団が反抗してきた場合は。皇族殺しのゼロの処遇は。黒の騎

耳に入る情報は、憶測でのみ語る専門家の無駄話のみ。

(上から眺めるだけのやつらは呑気なものだな。)

不機嫌な様子を隠そうともせず、ルルーシユは内心で吐き捨てる。

「お兄様？ 何か、心配事？」

「え？」

思考に更けていたルルーシユは、ナナリーに声を掛けられ、思考を現実に戻す。

「ユファイ姉様の事？」

ナナリーという少女は、目が見えない分、人の感情の変化に敏感である。

ルルーシユであってもナナリーの前では嘘を付けないし、付いたとしてもすぐに見抜かれてしまうだろう。

「…また会いたいなんて我儘は言いません。お兄様やアルカ、ユファイ姉様に迷惑が掛かりますもの。ただ……。」

「ナナリー。ユファイの事、好きかい？」

彼にしては珍しく、ナナリーの言葉を遮り、口を開いた。

「ええ、勿論。お兄様だつて好きでしょ？」

ナナリーは柔和な笑みを浮かべ、当然の様に答える。

ユーフェミア・リ・ブリタニア。

ルルーシユ達に対し、初めて優しさを向けてくれた人物。ルルーシユと共に学び、ナナリーと共に離宮内を駆け、アルカの面倒を良く見てくれていた少女。

当然ルルーシユだつてアルカだつて、彼女に対して敵意も悪意も無かった。

しかし、それはついこの間までの話だ。

「ああ……、好きだつたよ。」

「ん、……はあ、あ……」

ねっとりとした蛇の様な舌が口内を犯す。

口が塞がれた事により、息が苦しくなった私は覆いかぶさっている彼女の肩を叩く。意図が伝わったのか、彼女は身体を起こし、私の口内を蹂躪するのを止めた。

引き抜かれた舌からは混じり合った唾液が垂れ、私と彼女を繋ぐ橋にも見えた。

「はッ、……はッ、は……。どう、したの……。し、しーっ……。」

「……………」

行政特区日本開催記念式典を明日に控えた夜。明日に備え、早めに眠りにつこうとしたところ、彼女に襲われた。

何時もだったなら嗜虐的な笑みを浮かべながら、その言葉とその手で私を弄ぶくせに、今日のC・C・は表情を変えず、何も語らない。

「……しーっ……んっ、……んうんっ。」

どうかしたのかと何回か呼び掛けるも、やはり彼女は何も語らず、また舌を私の口内へとねじ込んできた。

零距离から聞こえるC・C・の息遣いと、絡み合ってくる舌の挙動に、脳が甘く痺れる。

麻酔の様な恍惚感に流されそうになるも、何時に無く荒い彼女の息遣いに疑問を覚える。

再びC. C. は舌を抜き、呼吸を整える。

「…はあ、は、ん……。しー、つー……。なにを、あせつて、るの?」

先ほどの余韻から上手く回らない舌を必死に動かし、彼女に問う。

「は、はッ……。 わた、しが、焦っている、だど?」

やっと聞いた彼女の声。大好きなC. C. の声を聞いた私は、幾分か落ち着きを取り戻す。

「だって、いつもより、荒々しいもの……。」

私にそう言われ、C. C. はハッとした顔をする。

「…そうか、すまない……。 全く、私らしくも無い……。…」

C. C. は自虐的な笑みを浮かべながら、私の頬を撫でる。

珍しくしおらしい彼女の首に腕を回し、彼女の身体を引き寄せる。

「そんなに落ち込まないで。 良いんだよ? 少し位、乱暴に扱つても。 貴女に貰った命ですもの。」

C. C. に一字一句ちゃんと伝わる様に、耳元で囁く。

「……なあ、アルカ。 お前は明日…、記念式典を終えたらどうするんだ?」

「どうつて…、今までと変わらず黒の騎士団の一員として活動していくけど……。」

「……今ならまだ間に合うぞ。明日の式典が終わってしまえば、間違いない世界は動く。」

お前の命が、お前の見る風景が戦いに染まってしまふ。望もうと望むまいが。」

「ここまで会話して私はやっと理解した、私の事を心配してくれている事を。」

「私は…。私はな、アルカ。お前を失うのが怖いんだよ…。お前を失う位なら、

いっそ……。」

「……ふふ、告白してくれてるの?」

弱々しいC・C.の背中を、子どもをあやす母親の様に、優しくさする。

「私はね、C・C.。貴女に感謝しているの。貴女から名前を貰った。生きる術も

喜びも。貴女が居なければ今の私は無かったし、貴女と共に居なければ、私は私で居

られない。」

「……………」

「言われなくても、私はC・C.の傍から居なくなならない。離れてやるもんですか。」

C・C.は今、どんな顔をしているだろう。彼女の息遣いだけが、首に掛かつてくす

ぐつたい。

彼女が欲しかった答えが出来たかは分からない。もしかしたら彼女が望んでない返

事だったかもしれない。

それでも私は、今の私を、私の想いを受け止めて欲しかった。

C. C. は何も言わぬまま顔を上げ、私を見つめる。

彼女の金色の瞳に私の顔が映ったのを確認し、私は笑みを浮かべた。

「大丈夫、私は死なないよ。」

「…ああ、そうだったな。」

C. C. は安心したような、しかしどこか悲しそうな表情を浮かべながら微笑んだ。



行政特区日本開設記念式典

ブリタニア国旗と日本の国旗が風に揺れている。

日本人の誰もが一度は夢に見た光景だろう、こうして日の丸が再び掲げられることを。

誰もが有耶無耶になると思っていたこの政策は、世論を裏切り、迅速に準備が進められた。

裏で後押しをした人物が居る、これがルルーシユの見解であった。

ユーフェミアを上手く退いたとしても、その次の障害がすぐに立ちはだかるのは、容

易に想像出来る。

だからこそ、ルルーシユはこの日の準備を怠らなかつた。最後まで渋つていた妹を説得し、ユーフェミアが取りうる行動を分析し、何も知らない黒の騎士団メンバーを丸め込んだ。

そう、ここが正念場なのだ。彼の反逆にとつて。

ルルーシユは覚悟を決め、C・Cと共にガウエインへ乗り込む。

(……ああ、やってやるさ。これが俺の答えだ、ユーフェミア！)

メイソカメラに映るのは会場に入りきらなかつた大勢の日本人。コックピット内に響くのは式典の様子を知らせる中継ラジオ。しかし、コックピットに乗り込んだ少女はそれらに見向きもしない。

少女——、アルカのアメジスト色の瞳は中央のモニターに注がれ、無窮の武装を一つ一つ確認していく。

『……なあ、アルカあ。何をそんなにチエックしてやがんだあ？んなことしなくても今回は戦闘なんて起きねーって。』

待機命令に飽きたのか、玉城がアルカに対して通信を飛ばす。

「……何が起きるか、分からないから。」

流石、エースパイロット様は違うぜ、と言い残して玉城は通信を切った。これ以上は会話が続かないと判断したのだろう。

アルカとしても玉城のこの判断は有り難かった。こちらが被害者になるとは言え、大勢の人々が死ぬ可能性が高いのだ。そんな作戦の前に、あんな能天気な男とは話したくなかったのだ。

一通り確認を終えたアルカは一息つき、座席の背もたれに体重を掛ける。

「上手くやってよね、兄上……。」

◇◇◇

ユーフェミアは補佐役のダールトンに時間を告げられ、席を立つ。

記念式典の開始時刻だ。

(ルルーシユ……。)

ユーフェミアはふと、未だに埋まらない席に視線を向ける。

自らが参加を呼び掛けたゼロの為に用意した席だ。

(協力、してくれないのね。)

気分が沈みかけたその時、会場を警備するブリタニア軍人や、日本人の来場客からどよめきの声が上がった。

空に一機の黒いKMFが現れたのだ。ゼロが神根島で強奪し、キュウシユウ戦役において凄まじい制圧力を見せた元ブリタニア軍最新鋭KMF「ガウエイン」。

そしてその肩に乗るのは。

「ゼロ…、来てくれたのですね!」

ユーフェミアは無邪気に喜んだ。

隣に座るダールトンは勝ちを確信した。

日本人の代表として招かれた桐原は困惑した。

彼の登場に、この式典会場に居る全員が、反応を示した。

ガウエインはゆっくりとした動作で、会場のステージへと高度を下げる。

「ようこそ! 行政特区日本へ!」

ゼロの正体を知るユーフェミアは、友人を迎えるような表情でゼロに歓迎の言葉を掛ける。

対するゼロは、そんなものはどうでもいいと言わんばかりに、告げた。

『ユーフェミア・リ・ブリタニア。折り返してお話したい事があります。』

「私と?」

『はい、貴女と2人きりで。』

2人きりで、その言葉を聞き、ユーフェミアは察した。ゼロとユーフェミアとは無く、ルルーシュとユファイで話したいのだと。

「…特に、問題は無い様です。」

「では、こちらへ。」

SPの金属探知機によるボディチェックを終えたゼロをG―1ベースへと促す。

「ユーフェミア様。やはりこの男と2人になるのは危険です。せめて、自分だけでも…。」

彼女の傍に居たスザクが、自身の主に警鐘を鳴らす。

ユーフェミアがいくら大丈夫と言っても、民衆がいくら支持しようと、スザクはどうしてもゼロを信用することが出来ないのだ。

「もう、スザク。前にも言ったでしょう？ 大丈夫です、私に任せて下さい。」

いくら警鐘を鳴らそうとも、彼の立場は騎士。主の決定には逆らえない。心に不安を募らせながらも、スザクは自らを律し、ユーフェミアとゼロの背中を見送った。

この時の事を、スザクは後悔し続ける事となる。この時、無理矢理にでも一緒に居れば、未来は変わったのではないかと。



促されるままG――ベースへと足を運んだゼロは、真つ先にG――ベースの動力を落とし、完全に電気が切れたのを確認してから仮面を外す。

「用心深いよね、カメラならオフにしてあるのに。」

「ずつと隠れてきたからな、何処かの帝国のせいだ。」

ルルーシユは皮肉を交えながら、懐から銃を取り出し、ユーフェミアへ銃口を向ける。

「セラミックと竹を使用したニードルガン。これは検知器では見つからない。」

「ルルーシユ、貴方撃たないでしょう。」

ユーフェミアは銃口を向けられても、動じることなく口を開く。

そう、ここでルルーシユが撃つ筈がない。

仮にここで、ゼロルルーシユがユーフェミアを撃つとしたらどうなるだろうか。

ブリタニア軍からは捕縛され、日本人からは裏切り者とされ、信用は地に落ちる。

単純に、ユーフェミアを撃つメリットがゼロルルーシユには無いのだ。

「そう、俺は撃たない。撃つのは君だよ、ユフィ。」

「……………え？」

「この式典は世界中に中継されている。そこでブリタニアの皇女である君がゼロを撃つ。どうなると思う？」

「暴動になるんじゃないかしら？」

簡単な問答だ。誰もが容易に想像できるだろう。

「ああ、騙し撃ちされたとなれば、ゼロは殉教者となり、君の信望は地に落ちる。」

「何ふざけているんですか!?! 私と一緒に日本を……。」

まるで話を通じないルルーシュに、ユーフェミアは声を上げる。

彼女からしたら、手を取ってくれると思っていた矢先に、このような事を言うのだ、無理も無いだろう。

「全ての条件はクリアされた。ゼロは生死をさまよい、奇跡の復活を遂げ、称えられる。人は理屈では無く、奇跡に弱いものなんだよ。」

そう語るルルーシュの顔は、ユーフェミアの知る優しい彼のものでは無かった。

「メシアは一人でなければならぬ。」

同時刻、G-1ベース前。

ガウエインのコックピット内でゼロを待っている所、下から向けられる視線に気づいた。

「ん? あいつは……。」

枢木スザク、彼は何かが見えているかの様にガウエインを、いや、ガウエインに乗る

C・C・を見ていた。

「見えているようだな。間接接触と神根島の件がきっかけになったか。それともあいつか?…だとしたら——。」

ガウエインのハッチを開き、C・C・はコックピットを後にする。

「枢木スザク、といったか。」

「どうして、君が、ゼロと一緒に……。」

スザクの動揺を気にもせず、C・C・はスザクの方へ足を運ぶ。

「ふん、気に食わんな。守護者のくせに、仕えるべき主を間違えるとは。本来、お前が守るべき血はそっちでは無いだろうに。」

「何を言つて……。」

やはり彼女はスザクの事にも留めない。

「1つだけ答えろ、お前は——、うッ!!」

スザクに問いを投げようとしたその時、C・C・の顔に苦悶の表情が浮かんだ。

熱い、痛い。鈍器で殴られたような痛みが頭に響く。

自立する事が困難になったC・C・はその場で頭を抑え、しゃがみ込む。

「おい、どうした!?!」

目の前の少女の異変に動転したスザクはC・C・の元へと駆け寄り、肩を掴む。

その瞬間、スザクの脳内に様々な情報が、光景が流れ込んできた。

(これは、どこかで……)

あまりの密度に脳の処理が追い付かなくなり、スザクの意識は途絶える。

「まさか、もう……。」

動揺を隠せない様子で、C・C・は呟いた。

時を同じくして、ルルーシユもC・C・と同じように左目を抑え、その場で片膝を付いていた。

「ルルーシユー！」

それを心配したユーフェミアは彼の傍に駆け寄るが――。

「やめろっ！」

自身を哀れみ、手を差し伸べたユーフェミアの手を振り払い、ルルーシユは激昂する。

「これ以上俺を哀れむな！ 施しは受けない！」

もう他者に自身の運命を握らせてたまるか、そんな強い意志がルルーシユの中を駆け巡る。

「俺は自分の力で手に入れて見せる！ その為にも穢れて貰うぞ！」

ルルーシユは抑えていた手をどかし、左目を解放させる。

「ユーフェミア・リ・ブリタニア!!!」

ジェレミアに掛けた様に、マオに掛けた様に、そしてスザクに掛けた様に、彼女にも命令を下そうとした。

しかし、彼女の予想外の返答によって、それは阻まれた。

「その名は返上しました!」

「な……。」

「いずれ本国から発表があると思いますが、皇位継承権を放棄しました。」

「何故……、まさかゼロを受け入れたから……。」

「私の我儘を聞いてもらうのですから、それなりの対価は必要でしょう?」

さも当然の様に、彼女は言う。

皇位継承権の放棄、すなわち次皇位争いから身を退く事。これはそんなに簡単な事では無い。

皇族において、自ら負けを認め、放棄するという行為は死に等しい。

後ろ盾の貴族は支援を止め、別の皇族へと乗り換える。世話をしてくれるメイドも、警備してくれるSPも離れる。それは当然だろう、その皇族には将来性が無いのだから。

そして敵対する他の皇族は、ここぞと言わんばかりに攻撃の苛烈さを増してくる。ルルーシユ達もかつて経験した事だ、あの時の惨めさと、苦しみは誰よりも分かっている。

それを彼女は分かっているのだろうか。

「随分と簡単に捨てられるんだな、君は…。俺の為とでも言うのか。」

「ふふ、相変わらず自信家ね。ナナリーの為よ。」

ナナリー、その名を聞きルルーシユはハツとする。

「あの子言ったの、お兄様とアルカさえ居れば何も要らないって。貴方とアルカ、昔から一人で考えて行動しちゃう所あったから、私が気付かせてあげないと。」

「そんな事で……?」

「そんな事で決心がついちゃったの!」

あつけらんかと、さも気にして無いと言わんばかりに、ユーフェミアは明るい表情を浮かべる。

「私にとって、本当に大事な物って何だろうって。だからルルーシユ、本当の本当に大切なものは一つも捨てていないわ。ああ、安心して? 貴方達の事は誰にも——。」

大事なものを捨ててきたのに、先ほどまで脅してた人物が今も目の前に居るのに、昔と変わらない態度でユーフェミアは語る。

「ふん、…ハハハっ！コーネリアは？」

「別に会えなくなる訳じゃ……。」

「馬鹿だよ、君は。大馬鹿だ。」

「そりゃ、ゲームでも勉強でも、ルルーシユに勝つたことは無いですけどー！」

ルルーシユの肩に入っていた力が抜ける。肩の荷が下りた様だった。

「しかし、無茶なやり方なのに、結局全てを手に入れてしまう。考えてみれば、君はいつも副総督や皇女殿下である前に、ただのユフィだったな。」

思えば簡単な事だった。

世界が変わった、人が変わったと思いついていたが、結局変わったのは自分だったのかもしれない。

「ただのユフィだったら、一緒にやってくれる？」

ユーフエミアは顔を引き締め、ルルーシユへ手を差し伸べる。

「……………」

長い様で一瞬の沈黙。

ユーフエミアの決意を固めた顔を見つめ、口を開く。

「君は、俺にとつて最悪の敵だったよ。…ふっ。」

ルルーシユは差し伸べられた手を取る。

「君の勝ちだ。この行政特区を生かす形で策を練ろう。」

言葉を噛み砕いていたのか、少し反応が遅れたものの、ユーフェミアは満面の笑みを浮かべる。

「ああ、部下になるわけじゃないからな？」

「ええ！」

2人に間に柔らかい雰囲気漂う。

彼らの脳内には今後の展望が早速広がっていただろう。

お互いの大切な人達を招き、人種関係無く手を取り合いながら生きていく平和な世界。

行政特区という小さなスタートにはなったものの、ゆくゆくは――。

「でも私って信用無いのね。」

「ん？」

「脅されたからって、私がルルーシユを撃つと思ったの？」

ああ、その事か。とルルーシユは思考を中断する。

もう話してしまっても良いだろう。これからの未来、そうそう使う事も無さそうだとルルーシユは結論付ける。

「ああ、違うんだよ。俺が本気で命令したら、誰だって逆らえないんだ。俺を撃て、スザ

クを解任しろ、どんな命令でもね。」

「もう、変な冗談ばかり。」

そういう年頃なのかしら。今度アルカにでも聞いてみましょうか。つとユーフェミアは彼を見つめながら考える。

「本当だよ、例えば——。」

ユーフェミアの顔から視線を外していたルルーシュは、再度彼女の顔を見つめる。

「例えば、日本人を殺せて言ったら、君の意志とは関係無く——。」

ルルーシュは冗談のつもりだった。ユーフェミアが到底取りそうもない行為をチョイスしただけだった。

「い、いやあ…私が、嫌っ！」

「ユフェイ？」

明らかに様子が可笑しいユーフェミアに、ルルーシュは怪訝な表情を浮かべる。

「殺したくない！……いや、う…、ううう……。」

ユーフェミアは悲しみに満ちた表情で、自らの身体を抱き崩れ落ちる。

「なっ…まさか！」

ルルーシュはある人物を思い出した。

常に周囲の心の声が聞こえてしまうギアス能力者。

暴走するその力でルルーシュを、アルカを追い詰めた男、マオ。

「俺もマオと同じように……!!」

ギアスの暴走。

力を行使し続ける事で、ギアス能力者は次第に力に飲まれ、その力を制御出来なくなってしまう。

ギアス能力者の末路。

「……ユファイ!!」

震える身体を抱きしめながらうずくまっていたユーフェミアは、ピタリと震えを止め、顔を上げた。

先ほどの苦悶の表情が嘘の様に、涼しい顔をして、さもそれが当然の様に、彼女は口を開いた。

「そうね、日本人は殺さなきゃ。」

Stage 28 血染めのユファイ

「ユファイ！今の命令は忘れろ！」

ルルーシユのギアスに掛かった者は、その命令が完遂するまで行動を終える事は無い。

そのことを理解しつつも、ルルーシユはそう言わざる終えなかった。

そんなルルーシユの声が聞こえてないのか、足元に転がっているニードルガンを手に取り、ユーフエミアは駆ける。

「待ってくれ！ユファイ!!」

残されたルルーシユの悲痛な叫びがG―1―ベース内に木霊した。

ユーフエミアはドレスを持ち上げながら走る。舞踏会を後にする童話のお姫様の様に。

長い様で短い廊下を抜け、ユーフエミアは再び壇上へと戻った。

「副総督、ゼロは……。」

何の連絡も無く突然ユーフエミアだけが戻ってきたことから、ダールトンは不思議に思い問いかける。

やはり、そんな彼の声も聞こえていないのか、ユーフェミアは足を止めない。

ステージの中央に立ち、何時もと変わらない優しい表情で、何時もと変わらない明るい声で、彼女は高らかに告げた。

「日本人を名乗る皆さん、お願いがあります！死んで頂けないでしょうか？」

ユーフェミアの言っている意味が理解できず、会場に居る日本人達は皆一様に眉をひそめる。

今何と言った？

嘘だろ？

何かの冗談だろうか？

そんな困惑した声が辺りから上がる。

「えーっと……、自殺して欲しかったんですけど、ダメですか？じゃあ、兵士の皆さん皆殺しにしてください！虐殺です!!」

今度こそ会場から明確なざわめきが、悲鳴が上がる。

「マイクとカメラを切れ!!」

この異様な光景に戸惑いつつも、ダールトンは兵士に指示する。

全世界に中継されている以上、ユーフェミアの乱心にしろ、ゼロの策略にしろ、放送する訳にはいかないからだ。

『やめろ！ユファイ!!』

取り乱した様子のゼロがステージに向かって走ってくる。

「止まれ！テロリストが……!!」

ゼロがユーフエミアの元へ行くのを阻止する為、近くに居た近衛兵が足止めをする。

『退け……退くんのだ!!』

一刻を争う事態に、手段を選んでいる暇は無い。

ゼロはすかさずギアスを掛け、兵を退かそうとする、が。

『あつ………』

一発の乾いた銃声が会場内に木霊した。

最前列の席に座っていた老人は、胸から血を流しながら、力無く椅子から滑り落ちて

いく。

周りに居た日本人は崩れていく老人からユーフエミアへを視線を映していく。

笑顔を崩すことなく、こちらに銃口を向けるブリタニア皇女。

「わああああ!!」

老人の隣に居た女性が悲鳴を上げた。

「さあ！兵士の皆さんも早く!!」

「ユーフエミア様！一体、どうなさったのですか!?!おやめください、この様な事は……」

ぐっ………!!」

ダールトンの身体から力が抜け、片膝を付く。

彼が撃たれたと認識したのはその後の事だった。

それくらい信じられないのだ、ユーフェミアのこの異常な行動が。

「さあ、ブリタニアの皆さん!!」

突然の虐殺命令に戸惑っていたブリタニア軍人達は気づかさされた。

命令に従わなければ殺される、と。

華々しい記念式典は、狂気の渦に飲み込まれた。

◇◇◇

日本人の、いや、だった者達の、夥しいほどの死体が辺り一面に転がっている。

会場に響くのは鳴りやまない銃声と人々の悲鳴。漂うのは硝煙の香りと血の臭い。

子どもを抱いたまま死んだ母親の死体。

ナイトメアに頭を撃たれ、顔が判別出来ない程抉れた死体。

死体、死体、死体、死体死体死体死体死体死体死体。

「やめろ、ユフィ!!」

会場の真ん中で、踊るように身体の向きを変えながら、その手に持つマシンガンで命

を刈り取るユフィ。

彼女の意識は日本人を殺す事だけに向けられており、ゼロルルーシユの叫びは届かない。

「これを……、俺のギアスが……。」

「ぜ、ゼロ……。」

足元から声が聞こえ、視線を声の主へ向ける。

そこには老婆が居た。全身を血の色に染め、その目に涙を貯めながら、ゼロのマントに縋りついている。

「私達の……、日本の……救世主……、希望は、あな、ただ……け……。」

そう言いながら老婆は息絶えた。

「……やめろ……、私は救世主じゃ、メシアなんかじゃないんだ……。」

やめろ、俺に押し付けるな。

罪を償えと、全てを背負えというのか。

静かにルルーシユの心は壊れていく。

・
・
・

『さて、アルカ！ゼロの指示も無しに!!』

「だからと言って異常でしょう！こんな時でも貴方は自分で行動出来ないのですか!!」

少女は激昂する。

指示をただ待ち、突入を渋る副指令の扇要に。

「付いてこないのならば、私一人でも突入します!」

『待つてアルカ!』

カレンの制止を無視して、アルカは無窮を最大速度で走らせる。

虐殺、その言葉を皮切りに、ラジオの放送が途絶えた。ブリタニア側の情報規制だろう。

そしてその後すぐ、会場から上がった黒煙。

今の状況は、事前に聞いていた作戦の概要から、乖離し過ぎている。

「……虐殺……」

会場に近づくにつれ、ハッキリと聞こえてくる銃声と人々の悲鳴。

アルカの無窮を目にし、歓声を上げる場外の日本人。

ブリタニアを壊せ、ユーフエミアを殺せ。

憎しみに満ちた声ばかりが、アルカの耳に入る。

「……いったい何が……」

式典会場の封鎖されている門を突き破り、彼女は式典会場へと足を踏み入れた。覚悟はしていた、犠牲は出るだろうと。

覚悟はしていた、ユーフエミアを穢す事になると。

覚悟はしていた、筈だった。

「……っ!!なに、これ……………」

そこには、想像以上の死体の山が築かれていた。

そこには、想像以上の狂気が渦巻いていた。

そこには、この世のモノとは思えない光景が広がっていた。

「……………うっ……………、うう……………」

口を抑え、胃から込み上げてきたモノを無理矢理飲み込む。

口内に不快感が残ったが、今の彼女にそれを気にする余裕なんて無かった。

「……はあ、……はっ……………。これじゃあ、まるで……………」

——あの時みたいだ。

アルカの脳裏にかつて過ごした村の情景が、村民の顔が、彼らが命を散らしていく様
が浮かぶ。

止まらない冷汗を拭いながら、彼女は周囲を見渡す。

「あ、あれは、ユフイ……ね、え……………」

一人の人物が目に残った。

アルカも良く知る、心優しい少女だった。

分け隔てなく誰に対しても笑顔を振りまき、争いを好まない少女。銃や血などとは無縁な存在、だった人。

そんな彼女が、ユーフェミアが。その全身を返り血で染め上げながら、殺戮の限りを尽くしていた。

「……やめて、よ……………」

アルカの悲痛な眩きが、コックピット内に響く。

私達は彼女に何をさせようとしていた？

ゼロを撃たせ、彼女を悪として演出しようとした。

彼女の善意を捻じ曲げてまですることだった？

それは——。

この光景と本来やろうとしていた事、何が変わらない？

「……何も、変わらない……………」

ユーフェミアに銃を持たせ、彼女の善意を悪意として世界に錯覚させる。

結局、出来上がる構図は一緒だ。被害の規模が違うだけ。

これをやろうとしていたのか、私達は。

「……ユファイ!!」

無窮をユーフェミアの元へと走らせる。

『イレヴンがつつ!!!』

「邪魔なんだよ!!!」

途中、無窮の進行を阻止する為にと数機のサザーランドが立ちはだかるが、アルカは気にも留めない。

サザーランドを駆るブリタニア軍人からしたら一瞬の出来事だっただろう。

無窮が接近してきたと思ったら、その次の瞬間にはコックピットごと貫かれているのだから。

目にも止まらぬ閃光の様に、アルカは無窮を走らせ、サザーランドをなぎ倒していく。

『ユファイ……ユーフェミア!!!』

ユーフェミアの元へ辿り着いたアルカは、コックピット内から彼女へと呼びかける。

「日本人ですね!」

ユーフェミアは呼びかけには応じたものの、その手に持つマシンガンは無窮に向け、発砲する。

当然、マシンガン程度ではKMFの装甲は貫く事は出来ず、全て弾かれる。

「なんで、どうして……!」

弾を全て使い切ったのか、ユーフェミアは焦った表情を浮かべながら銃を弄る。

そんな歪んだ彼女に対して、恐怖心と少しの嫌悪感を抱きながら、アルカはハッチを開け、素顔を晒したまま無窮を降りる。

「……………やめて、止めなさい！ユーフェミア!!」

ユーフェミアの元へと駆け寄ったアルカは、マシンガンを持つ彼女の手を掴み、懇願した。

優しい彼女がギアスによって歪んでいくのを見てられなかったのか。

それとも自身がやろうとしていた事を思い出し、自責の念に押しつぶされそうになっているのか。

どっちかは定かでは無いが、アルカは酷く取り出した様子だった。

「あら、アルカだったのね。てつきり日本人かと……………」

ユーフェミアはそんなアルカの様子を気にも留めずに、何時もと変わらぬ口調で、表情で口を開く。

「ねえ、どう？私が行政特区日本は？きつとみんなも喜んでくれると思うの。」

アルカの顔に、絶望宿る。

（こんなになっても、まだ……………!）

この行政特区日本が、彼女にとってどれほど大きいものだったか、アルカは思い知ら

される。

アルカはその場で首を垂れ、強く歯を食いしばる。

「……今すぐやめて、」

「なあに？」

顔を上げ、ユーフェミアの目を見つめる。

「お願いだから、虐殺を止めて」

アルカの赤黒く染まった右目から、鳥の様な模様が羽ばたく。

彼女の願いのギアスだ。

「そう言われても聞けないわ、命令だもの。」

「……………!!!」

アルカも頭では分かっていた。命令に対して願いでは上書きが出来ないと。

それでも、分かっているながら、試さない訳にはいかなかった。自分に出来る全ての手段を試さなければ、心が壊れてしまいそうだった。

「アルカ、私はまだ場外に居る日本人の皆さんを虐殺しないとイケないの」

彼女は華麗にその場でその身を反転させながら、あつけらかんと言い放った。

アルカが知らぬ間に無窮で突き飛ばしたであろう兵士の死体から銃を取り、ユーフェミアは再びアルカを見つめる。

「……お願いだから、止めて。止めなさい……!!」

「……流石に怒るわよ？ 何度も言っているでしょう？ やらなくちゃいけないの。」

「どうしても言うなら、今ここで……、私がつ!!」

懐から銃を取り出し、ユーフェミアに向けようとした、その時。
パンツと乾いた音が響いた。

「……がつ……」

熱い。

アルカが最初に感じたのは身体に発生した熱だった。

腹部から徐々に、熱と痛みが全身へ広がっていく。

彼女は熱が集まるお腹へと震える手を伸ばす。

その手には赤黒い血がべつとりと付いていた。

これは誰の血だ？

日本人？

ユーフェミア？

いや、違う。

これは私の血だ。

撃たれた。

そう認識したのは痛みを感じてから数秒後の事だった。

「……ゆ、ゆ、ふい……ゴホッ……ハッ……」

口から大量の血を吹き出しながら、アルカはその場へと倒れる。

「ごめんなさいね。どうしても日本人は殺さなきゃいけないの。」

申し訳無さそうにそう言い残し、ユーフェミアはその場を後にする。

何だこれは。

私への罰なのか。

自身の都合で多くの人を殺めた私への。

薄れ行く景色の中、彼女は不可思議な光景を目撃する。

黄昏の空に囲まれる神殿で、高笑いをするブリタニア皇帝。

その空の遥か上に存在する、球体上の何か。

そしてその球体に記された、ギアスの模様。

「……嗚呼……、醜い……。」

アルカの意識はそこで途絶えた。

stage 29 去った者、残った者

アルカが凶弾に撃たれる数分前。

記念式典の舞台裏で待機させていたC・C.と合流し、ガウエインに乗り込んだルーシユは、忌々し気に舌打ちをしながら仮面を取る。

「驚いたぞ、まさかここまでするとは。」

「俺じゃない……。」

「何?」

予想をしていなかった返答に、前席に控えているC・C.はルーシユの方へ視線を向ける。

そこには左目を赤黒く染めたルーシユ。

「そうか、やはり……。」

「俺はギアスをかけていない。いや、かけたつもりは無かった。…分かっている契約した、これがやばい力だつて。なのに!!!」

自身への怒りか、ギアスへの憎悪か。

ルルーシユは声を荒げる。

「…アルカのギアスは……………」。

「あいつのギアスはお前のより強制力が無い。アルカも言っていただろう？命令に上書きは出来ない。」

「そうではなく！アルカは俺の様に暴走しないだろうな!？」

C. C. は静かに目を伏せ、口を開く。

「確かにあいつはお前より契約期間は長いが、お前ほど高い頻度で使っていない。…後は、あいつの意思次第としか……………」。

「……………そうか。」

C. C. に言いたいことがまだあつたルルーシユだが、言葉を飲み込み、会場へと目を向ける。

「おい、それよりどう治めるつもりだ？この状況を。」

「こうなつたらユーフェミアを最大限利用するしかない。……………それが、せめてもの…。」
ルルーシユはその目に涙を貯める。

彼女と手を取り合う未来を選択した筈だった。

アルカとナナリーが、ユーフェミア、スザクが、皆が幸せに過ごせる世界を共に作るうと。

しかし、そんな未来を自身に提示してくれた心優しき少女を今から殺さなければならぬ。自らの野望の為、踏み台にしなければならぬ。

そんな事実がルルーシュに心を締め付ける。

「黒の騎士団、総員に告げる！ユーフェミアは敵となった！行政特区日本は、我々をおびき出す卑劣な罠だったのだ！自在戦闘装甲機部隊は式典会場に突入せよ！ブリタニア軍を壊滅し、日本人を救い出すのだ！」

ゼロの声に、ある者は怒りに震え、ある者は絶望し、ある者は涙を流した。

それぞれの感情に違いはあるが、この場に居る全員が同じ想いを抱いていた。

ブリタニアが憎い、と。

「必ず、必ずユーフェミアを……。」

ルルーシュの瞳に溜まっていた涙が、彼の頬を濡らす。

「見つけ出して殺せ!!」



「アルカ！良かった、無事だつ、た……？」

ゼロの指示で式典会場に突入したカレンは、真っ先にアルカを探した。

一人先行して突入した大切な友人。

いくら操縦の腕前が良かろうと、いくら無窮のスペックが高かろうと、心配だったのだ。

式典会場の丁度真ん中辺りで、無窮を見つけたカレンは安堵の溜息を吐くものの、すぐさま異変に気付く。

「……ハッチが開いている?」

そう、コックピットのハッチが開いているのだ。

この地獄の様な会場のど真ん中で、今もブリタニアの兵士が闊歩するこの場所。

先ほどの安堵とは打って変わり、カレンの中に焦りが生じる。

慌てて紅蓮を前進させ、無窮の元へ向かう。

遠目では見えなかったが、近づくにつれ、無窮の足元に広がる光景が見えてきた。

夥しい程の死体と血、その中に紛れる様に、一人の少女が横たわっていた。

その淡いミルク色の髪を、身に纏うパイロットスーツを血に染めたカレンも良く知る人物。

「そんな、嘘、でしょ……? アルカ!!」

カレンは紅蓮のハッチを開け、飛び降りる。

着地時の衝撃に、膝を付きそうになるも、彼女はそのまま足を走らせ、アルカの元へと向かう。

自身が汚れてしまうのにも関わらず、血だまりに沈む彼女の身体を抱る。

血を吸ったパイロットスーツと力の抜けたアルカの身体の重さに驚きつつも、彼女は必死に呼びかける。

「アルカ！アルカってば!!」

そうこうしている内にもアルカのお腹からは血が流れ出ており、血だまりを広げている。

「ねえ、返事しなさいよ……。貴女言っていたじゃない…。死なないって……。悪い冗談やめてよね……………」

カレンの大きな瞳に涙が浮かぶ。

頬を伝って零れ落ち、アルカの顔を濡らす。

カレンの嘆きなど届く筈も無く、無情にもアルカの容体は悪化していく。唇は青く染まっていき、陶器の様に白い肌は、さらに色を失っていく。

「い、このままじゃ……………」

アルカの命が亡くなってしまう。

彼女の存在が、無に、零になってしまう。

「…そうだ、ゼロ……………」

カレンは懐から通信機を取り出し、一縷の望みをかけてゼロへ繋ぐ。

不可能を可能にしてきた奇跡の男。

日本の、自分達の希望。

その彼ならアルカを助ける事が出来るかもしれない。

「お願い…、助けて、ゼロ!!」

・
・
・

同時刻、上空。

ブリタニア軍の最新空港艦、アヴァロンから発進したランスロットを最大速度でスザクは式典会場へと向かわせる。

フロートユニットにより、空中での活動を可能にしたこの機体は、ユーフェミアを助けるべく、空を切る。

「絶対に、ユフィを救い出す!」

自身の主であり、恋人でもあるユーフェミアを救い出す。今のスザクにはそれ以外の考えは無かった。

だから、向かっている途中で目撃した、友人の妹すらも見殺しにしようとした。してしまった。

「あれは……！」

ランスロットが二つの熱源反応を捕らえた。その傍には赤と青の二機のKMF。この距離でも様子がハッキリと分かった。

少女が二人、一人は全身を赤く染めながら倒れ、もう一人はその少女を支えている。

「カレンと、まさか……！」

ルルーシユに似て勝気な性格を持ちながらも、ナナリーに似て人の心に敏感な優しき少女。

「アルカ……!! やつぱり、君は……！」

神根島の遺跡での出来事を思い出す。

あまりにも不可思議で、常識に当てはまらない光景だった為、何かの間違いだと自分の中では片付けたものの、ずっと心の中にしこりを残したままだった。

「……撃たれたのか？ いや、しかし……。」

素人目から見てもアルカの状況は酷いものだった。

今すぐ処置をしなければ助からないだろう。

——しかし。

彼女の事だ、黒の騎士団の参加も覚悟を決めての事だろう。

こうなる未来が起きる可能性が存在するのを知りながら、彼女は那道を選んだんだ

ろう。

正義何て結局は、その人次第何だから。自身の正義に準じればいいと思うよ。いつの日か、彼女に言われた言葉を思い出す。

自分の正義と彼女の正義が、進むべき道が交わらなかつただけの事。今の自分は軍人だ、ユーフェミアの騎士だ。

目的を見失うな。

スザクは自身にそう言い聞かせる。

生徒会に皆は悲しむだろう、ルルーシユやナナリーだつて…。

でも。

(……ルルーシユ……。)

スザクは覚悟を決めた。

アルカを見捨て、ユーフェミアを救う覚悟を。

(すまない、これも一つの結果だ、ゼロ……)

スザクは目線を逸らし、ランスロットを場外へと向かわせた。

◇◇◇

式典会場の外に居る日本人を虐殺する為、場外へ出ていたユーフェミアと対峙するル

ルーシユ。

ユーフェミアとの睨み合いが続く中、カレンから通信が入り、その内容に驚愕する。

『…何？アルカが!？』

アルカが撃たれ、今にも死にそうだ。

半狂乱になったカレンが息を切らしながらそう言った。

「どう？一緒に行政特区日本を……。あら？日本……。う？」

自身が口にした日本という言葉に違和感を覚え、首を傾げるユーフェミアをゼロールルーシユは見つめる。

(アルカは…、あいつは…！ユーフェミアを止めようとして…！)

自身の妹の事だ、彼女の性格、行動原理は全て分かる。

(そして、この状況を作り出したのは……。)

自身のギアス。

『C・C・!!』

後ろに待機するガウエインに乗っているC・C・に呼び掛ける。

確信があったのだ、彼女ならアルカの状況が分かるだろうと。

『ああ…！分かってる！私も今気づいたよ！』

普段はこんな事無いんだが…、とC・C・は珍しく焦った表情を浮かべながら呟く。

『あいつは死んではいけない！カレンが傍に居るんだろう！？すぐにラクシャータの元へ連れて行けば助かる！あいつらに任せてお前はユーフェミアに集中しろ！』

今すぐにでも駆け付けたい。

ルルーシユもC・C・も同じ想いを抱いている。

しかし、ルルーシユにはゼロとしての立場が、C・C・にはこの場に居るもう一人の契約者を守る必要がある。

動揺を必死に抑えながら、ルルーシユはユーフェミアに銃口を向ける。

「ルルーシユ、聞いているの？一緒に行政特区を……。」

『……ああ、出来ればそうしたかったよ。………君と共に……!!』

全てがスローモーションに見えた。

響く銃声も、重力に従って倒れていくユーフェミアも。

(どうして……、ルルーシユ……?)

そうユーフェミアの口が動いた。しかし、音としてルルーシユに届くことは無かった。

(さようなら、ユファイ……。多分、初恋だった。)

こうしてまた一人、ルルーシユは肉親をその手で殺めた。

「ユフイ、良かった……!」

ゼロと対峙するユーフェミアを見付け、彼女の無事に安堵の表情を浮かべたスザクだったが、残酷なこの世界はそんな彼を裏切り続ける。

「そんな……ユフイつ!!!」

自身の主が、恋人が、ゼロの凶弾によって倒れていく。

「うああああああああ!!」

絶叫しながらランスロットを彼女の元へと向かわせる。

存在に気付いたガウエインや、周りの無頼が迎撃しようとランスロットに対し攻撃を加えるが、ブレイズルミナスを展開させ、無理矢理攻撃を流す。

「邪魔をするなあ!!!」

武器も使わず、**!!**ランスロットの拳をガウエインに叩きつける。

金属がひしゃげる音と共に、右手が潰れていくが、そんなものは些細な問題だった。

そのままガウエインを退き、残った左手でユーフェミアを拾って、この場を離脱する。

「早く、早くしないと……!」

ユーフェミアの容体が悪化しない様に気を使いながら、急ぎアヴァロンへ向かう。

ブリタニアの技術力なら、助かるかもしれない。

アヴァロンへ着艦したスザクはユーフェミアを横抱きにして艦内の医務室に向かう。

ユーフェミアの胸の中央からは、とめどなく血が流れ、スザクの着る白い正装やヴァロンの廊下を汚す。

その光景を見たロイドとセシルは驚愕した。

自分たちの想定以上にスザクは取り乱し、ユーフェミアの容体が悪かったからだ。

「お願いします……ユフィを、ユフィを助けて下さい!!!」

スザクの悲痛な叫びが艦内に木霊した。

・
・
・

紅蓮の腕の中で、今もうずくまるアルカを横抱きにして、カレンは走る。

ラクシャーター・チャウラー。

黒の騎士団専属の科学者。

ゼロは言っていた、彼女は医療技術の面でも優秀であり、彼女に任せればこの子は助かるだろう、と。

「ラクシャーターさん!!」

黒の騎士団のトレーラーで待機しているという彼女の元へとたどり着いたカレンは声を荒げる。

ソファで寝そべっていたラクシャータと、彼女と話していたディートハルトがカレンの方へ視線を向ける。

「ん？ あら、カレンちゃん。ブリタニア軍の制圧は終わったのかし、ら……。」

「これは、皇、様……？ 一体……。」

何時もの妖艶な笑みと、薄暗い笑みを浮かべていた二人だったが、アルカを目にした途端に、表情をこわばらせる。

「この子を……、アルカを助けて下さい!!」

◇◇◇

「コーネリア様への報告は、私が……。」

「政庁までは？」

「……持ちそうにありません……。」

アヴァロン内に設けられた医務室から出てきた医師達は、暗い顔を見合わせながら、今後の対応について話し合う。

内容は言うまでもない、ユーフェミアの事だ。

医務室の椅子に座り、首を垂れていたスザクは顔を上げる。

さつきまで決して開くことの無かった瞳が開いていたからだ。

ユーフェミアはスザクと話したいのか、口を動かす。しかし、医療用のカプセルがその声を遮断して、言葉はスザクに届かない。

見かねたセシルがそつと、カプセルの蓋を開け、そのままロイドと共に退出した。

今のユーフェミアは何とか意識を取り戻したものの、その命は死へと向かっている。せめてもの優しさだろう。最後にスザクが彼女と会話出来る様に。

「……ユフィ、教えて欲しい。君はどうして…あんな命令を？」

「…命令……？なんの、こと……？そんなことより、スザクは、日本人でしたよね……？」
「え、ああ……。」

ユーフェミアの瞳が赤く染まる。

ギアスだ。ルルーシユが意図せずかけてしまった絶対順守の力。

しかし、

「うっ、…違う……、だめ、そんなこと……考えちゃ、いけないっ……！」

ユーフェミアの心拍数が上がっていくのが心電図から確認できる。

日本人を殺せという命令と、それを否定する彼女の意志が、ユーフェミアの中でせめぎ合う。次第に彼女の脳内から殺害の衝動が消え失せていく。彼女の意志が強かったのか、それとも彼女の身体がもう実行出来ない状況なのか、それは分からない。

「…スザク……。式典は…日本は、どうなった、かしら……？」

「ユフイ…、憶えていないのかい…?」

「日本人の皆さんは、喜んで…くれた…?」

スザクの瞳が大きく開かれる。

彼女はこの状態になっても、日本人の、皆の幸せを願っている。自身の命の灯が、消えてしまいそうになっているのに。

「…ユフイ…、行政特区は…。」

その場に居ないスザクでも、容易に想像ができる。

彼女の願いとは裏腹に、日本人の間には怒りが、恨みが、憎しみが、渦巻いているだろう。今回の一件で、日本とブリタニアの間には深い溝が出来てしまった。もう誰にも止めることは出来ないだろう。この先に待っているのは戦争だ。

しかし、とスザクは考える。

それをこの少女に伝えるのか、死を目前にした、心優しき少女に。

「私は、うまく出来た…?」

「大成功だよ…!皆、とても、喜んでいたよ…!」

スザクは初めてユーフェミアに対して嘘を付いた。彼女を安心させる為の、優しい嘘。

「…よかったあ…!」

ユーフェミアは目を細め、安堵の表情を浮かべる。しかし、その表情とは裏腹に、段々と手足の感覚が失っていき、身体も冷えていく。

「…おかしいな、貴方の顔、……見えない……………」

「ユファイ……………」

震える手をスザクに伸ばし、彼はそれを受け止める。

本来温かい筈の彼の手も、ユーフェミアは感じる事が出来なかった。

「学校、行ってね。私は…、途中…………辞めちゃった、から……………」

「ユファイ…、今からでも行けるよ…。そうだ！一緒にアツシユフオード学園へ行こう！楽しい生徒会があるんだ、君と……………」

「…………私の分、までね……………」

ユーフェミアと、生徒会の皆と、ルルーシユ達と。人種や立場を全て取っ払い、皆で平和に過ごせたら、どんなに良かっただろう。

しかし、それはもう、叶わない。

ユファイの手が死体の様に冷たくなっていく、白い肌が青ざめていく、その手から力が抜けていく。

大好きな人が、自分に生きる意味を与えてくれた少女が、自身の手の中で緩やかに死んでいく。

「…ユフィ、ダメだ……!!」

「…スザク、貴方に……あえ、て……よかつ……。」

最後まで言葉を告げる事無く、ユーフェミアは息を引き取った。

「ああああああああああああああああああ!!!」

その部屋に残ったのは、少年の絶望だけだった。

◇◇◇

「取り敢えず、一命は取り留めたわあ。ただししばらくは活動もNG。生きているのが不思議な位なんだからあ。」

医務室から出てきたラクシャータはカレンとC・C・にそう告げた。

「よかつたあ……!!」

カレンは腰が抜けたのか、その場でしゃがみ込み、安堵の息をつく。

対するC・C・は何も言わずに、焦りの表情を浮かべながら、医務室で眠るアルカの元へ駆け寄る。

「ちよつと、C・C・!」

「顔見る位なら大丈夫よお、でも程々にねえ。」

キセルで手遊びしながら、アルカの元へと向かったC・C・を見送る。

「…彼女、本当にアルカちゃんの事、大事なのねえ。あんなに焦った顔、初めて見たわあ。」

「アルカが小さい頃から、一緒に居たらしいです。」

「ふうん。……それにしても、アルカちゃんの生命力の高さには驚かされたわあ。普通なら死んでも可笑しくないのにい。」

カレンはラクシャータの言葉を聞き、出会った当初の事を思い出した。

「昔から傷の治りが早い、とは言っていたましたけど。」

「うーん、傷の治りが早いというか……。少しずつ巻き戻っている様な感じなのよねえ。」

まあ、生きているのなら何でもいいけど。と一人呟き、ラクシャータはこの場を後にした。

「アルカ……。」

汗で額に張り付いた彼女の髪をC・C・はかき分ける。

「私は分からなくなってしまうたよ、自らの願いが。」

C. C. は自嘲するような笑みを浮かべ、アルカの額を優しく撫でる。

「…なあ、お前はもうどうしたいんだ？」

その問いに答えるものはこの場には居なかった。

◇◇◇

ユーフェミアを許すな、ブリタニアに死を。

彼女を、ブリタニアを、世界を憎む日本人達の怨嗟の聲が、そして英雄を称賛する聲が会場を満たす。

その日本人達の前に、一人の男が立った。

『日本人よ！ブリタニアに虐げられた全ての民よ！私は待っていた！ブリタニアの不正を影から正しつつ、彼らが自らを省みる時が来るのを。』

全世界に訴える、ブリタニアの非道を、自分達の正義を。

『しかし…、私達の期待は裏切られた。虐殺という蛮行で！』

ゼロに合わせて、日本人達の憎しみの声が増す。

『そう！ユーフェミアこそブリタニア偽善の象徴！国家という体裁を取り繕った人殺しだ!!』

もう戻れない。凶弾に撃たれたアルカの為にも、自身によって穢れたユーフェミアの

為にも、ここで死んでいった日本人達の為にも。

『私は今ここに、ブリタニアからの独立を宣言する。だがそれは、かつての日本の復活を意味しない。歴史の針を戻す愚を、私は犯さない!』

今のゼロルルーシユの胸の中にあるものは哀しみのみ。

『我らがこれから作る新しい日本は、あらゆる人種、歴史、主義を受け入れる広さと、強者が弱者を虐げない、享受を持つ国家だ!!』

だから、せめて哀しみとともに。ルルーシユは高らかに宣言する。

『その名は、合衆国日本!!』

人々のゼロを支持する歓声が、彼を求める声が、会場を震わせた。

stage 30 崩壊の始まり

「アルカの容体は安定した様だ、まだ意識は戻らないが……。」

「そうか。」

「……お前の言う通り、ラクシャータにも伝えたぞ。面会は極一部の人間のみ、と。」

「そうか、すまないな……。」

黒の騎士団が制圧した式典会場の一室、恐らくユーフェミアやダールトンといったブリタニア側が控室として使っていたであろう部屋で、ルルーシュは項垂れていた。糸が切れたのだろう。

C・C. の言葉に対しても、覇気の無い返事が続く。

「……様子を見に行かなくていいのか？」

「ああ……、行きさ。仮面を付けてな。……ふっ、実の妹の見舞いにすら、素顔を晒せないとはな。」

ルルーシュの自虐する様な笑みに、C・C. は表情を曇らせる。

「……現在、各地で日本人による暴動が起きているそうだ。他のプロックのブリタニア軍はその対処で動けない。正真正銘、コーネリア軍との一騎打ちだ。」

「……………」

「黒の騎士団側に加勢するテロ組織の残党や民間人を含めるとこちらの戦力は数万を超えるという。今も各地の日本人を吸収しながらトウキョウ租界に向け、進軍中だ。…文字通り戦争だな、これは。」

「……………」

ルルーシユは相変わらず項垂れたまま、反応を示さない。

「…………ルルーシユ、今ならまだ戻れるぞ。仮面を取らないのなら、アルカを連れ、ナナリーと共に身を隠せ。お前達なら生き残る事は容易いだろう。…………そうでないのなら……………」

「覚悟を決めろ、か。…………ふん、言われなくても分かっているさ。ここで逃げてしまえば、ユフィを殺した意味が、アルカが撃たれた意味が、今までの犠牲が、全て無意味になってしまう……………」

彼の言葉に段々と力が入る。

「ああ、そうだ。俺はゼロだ、力ある者に対する反逆者だ。元より引き返す道など無かつたんだ…………、だから!!」

自身の横に置いてあった仮面を手取る。

顔を上げたルルーシユのその瞳には、強い意志が宿っていた。



トウキヨウ租界 ブリタニア政庁 会議室

「駄目だ！」

ギルバード・G・P・ギルフオードの一喝が、会議室に響く。

各将官から、現状の報告を受けていたギルフオードは決断を迫られていた。トウキヨウ租界に進軍している黒の騎士団及び、加勢したイレヴン達をどう対処するか。

現在、エリアーのトップであるコーネリアは、ユーフェミアの自室に籠ったまま、応答が無い。

無理も無いだろう、最愛の妹を失ったのだから。彼女の中には、ユーフェミアが行った虐殺に対する困惑と疑念、妹を失った事による虚無感で一杯だった。

そんな状態の中で、コーネリア不在のまままで対処しようと提案した将官達の意見を一刀両断した。

彼は信じているのだろう、コーネリアが喪失の海から脱出し、再び指揮を執ることを。「良く言った！ギルフオード卿。それでこそ、コーネリア様の騎士！」

会議室の扉が開かれ、会議に新しい声加わった。

「貴女は……！戻られていたのですか！」

騒然とする会議室の中、ギルフオードが驚きを口にする。

そこには紫色のマントを身に着けた女性が居た。声は普段と変わらぬものの、その雰囲気は抜き身のナイフの様に鋭く、何時もの気さくな雰囲気は身を潜めている。

「ああ、つい先程な。本国から新型を持ってくる為の手続きで少し時間はかかってしまったが……。」

ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラム。皇帝直属の騎士であり、帝国最強の一角。

そんな彼女がここ、エリアーに戻ってきた。

「ギルフオード卿の言う通りだ、殿下を信じて待て。彼女を信じて、防衛の準備を進めろ。貴公らは殿下に命を預けた軍人だろう？」

ノネットはそう語りながら、会議室に居る軍人達を一人一人見渡す。

「なに、彼女はここで止まる様な女性じゃないさ。……私が保証しよう、軍人としても、士官学校の先輩としても、な。」

彼女の言葉を聞き、決意を固めた将官達は顔を見合わせ頷く。

「ほら、覚悟を決めたなら会議室（この場所）にたむろってないで、部下達に指示を出してくるんだな。」

「Yes, My Lord」

将官達が口を揃えてノネットに敬礼を行い、それを見て彼女は満足そうに頷く。

「エニアグラム卿はどうするおつもりですか？ 政庁に残るのなら、ここの指揮を執って欲しいのですが……。」

「ん？ 私か？ 出撃するさ、騎士として。その為の新型だしな。殿下にもそう伝えておいてくれ。」

それに、と彼女にしては珍しく、曇った表情を浮かべ、言葉を紡ぐ。

「確かめたい事もあるしな。」

◇◇◇

記念式典会場に止まっていたユーフェミアのグーベースは今や、黒の騎士団の移動拠点として使われていた。

正面に掲げるブリタニア国旗は赤く塗りつぶされ、トウキョウ租界侵攻の旗印になっていた。

そんなグーベースに設けられた医務室にカレンは居た。

視線の先には、未だに意識の戻らないアルカ。

室内には、アルカの心臓の動きを知らせる電子音だけが響いていた。

「…………アルカ……」

ベッドの前に設けられた椅子に座り、お守りを握りしめている。

シンジユク事変の前に、KMFで出撃するカレンが無事で帰れる様に、と神社から持ってきた交通安全のお守りだ。

廃墟同然の神社から出来るだけ綺麗な物を持ってきたらしいが、今までずっと持ち歩いてきたのもあって、所々布が解れ、洗っても落ちそうにない汚れが付いている。

「初めて会った日から、思えば随分遠い所まで来たわね。貴女と出会って、ゼロと会って、私達は変わった。」

レジスタンスでも、学校でも、戦場でも。仲間として、友達として、戦友として、時には本当の姉妹として、カレンとアルカは過ごしてきた。

兄を失い、母の事も嫌っていた当時のカレンからすれば、初めて心の底から背中を預けられる友達だった。

「何時も貴女は一生懸命だった。私達に物資を調達して、操縦訓練をして。黒の騎士団結成後も率先してナイトメアの整備をして、戦場では誰よりも敵を倒して……。その小さい身体の何処に、そんなパワーがあるんだろう、って皆不思議に思っていたわ。」

でもね、とカレンは言葉を続ける。

「貴女は頼りになるけど、本当は私、アルカにそんな事して欲しくは無かった。最初は全

然そんな事思っていなかったのに、次第にそう考える様になった。貴女は陽だまりの中でルーシユやナナリー、学園の皆と過ごしているべきだわ。……だから、次に目を覚ました時は、アルカがそんな世界で過ごせる様に、私達がここで……!」

カレンは優しくアルカの頭を撫でる。相変わらず、彼女からは反応が無い。

「…行ってくるね。」

お守りを強く握りしめ、カレンは部屋を後にした。

◇◇◇

トウキョウ租界 上空

「…ユフィ、僕には分からないよ……。どうして君は、あんな事を……。」

ユーフェミアを失ってから数時間。

スザクは今も変わらず、医務室で項垂れていた。そんな彼の背中は飼い主に捨てられた犬の様に小さく、普段の頼もしさは息を潜めている。

「教えてあげようか?」

そんなスザクに声を掛ける者が居た。いや、現れた。

声の主の方へスザクは振り向く。

「え…、子ども……? どうしてアヴァロンに……。」

そこにはスザクの言う様に子どもが居た。

脚まで届く緩いウエーブがかかった金髪、どこか超常的な雰囲気纏った少年。

「初めまして、枢木スザク。僕の名前はV. V.。」

「…V. V. ……?」

少年の紡ぐ言葉には一切の感情が込められておらず、機械の様に淡泊だ。

「教えてあげるよ、ユーフェミアの身に何が起きたのか。そしてゼロと、君が目撃したアルカの特異な力について。」

少年は口元に笑みを作り、言葉を紡ぎ始めた。

◇◇◇

『聞くがよい、ブリタニアよ！我が名はゼロ。力ある者に対する反逆者である！』

ガウエインに乗り込んだゼロ。ルルーシュは、上空からトウキョウ租界を見下ろしながら呼びかける。

『0時まで待とう、降伏し、我が軍門に下れ。』

トウキョウ租界の外縁にはコーネリア軍。ゲッターの方面から攻めてくる黒の騎士団を迎え撃とうとしているのが分かる。

『これは最終通告だ、0時まで待つ。我が軍門に下れ。』

言い終わると、ゼロはマイクを切り、仮面を外す。

現在の時刻は23:57分。

外縁に陣を敷くコーネリア軍との睨み合いが続いているが、それもあと数分で終わる。

数分後には大勢の人間が死に、多くの物が破壊されていく事になるだろう。

ルルーシユは眼下に映るトウキョウ租界を眺めながら改めて覚悟を決める。が、その時。

「……………」

彼の携帯が突然鳴り出した。

ナナリー、もしくは生徒会の誰かかと思っていたが、ルルーシユの予想は大きく裏切られた。

ユーフェミア。

携帯の画面には、そう表示されていた。

(馬鹿な、あいつの番号など…。…………いや、騙っている奴がいる。)

ブリタニア軍関係者か、皇族か、それとも――。

現在の時刻は23:58分。

「……………」

ルルーシユは舌打ちをしながら、電話に出る。

『ルルーシユ、僕だよ。』

電話の相手は、ルルーシユも良く知る人物であり、想定内の人物でもあった。

「スザクか、どうした？こんな時に。」

『ルルーシユ、今学校？』

「いや。でも、もうすぐ帰るよ。」

『そう…、電話をしたのは皆に伝えて欲しい事があつて。』

「何だい？こんな時に。」

二人の少年は、戦争前とは思えない程の穏やかな声音で会話を続ける。

しかし、その二人の穏やかな声音の裏には、激しい怒りが見え隠れしていた。

『空を、空を見ないで欲しい。』

「え？」

『ルルーシユ、君は殺したいと思う程、憎い相手が居るかい？』

スザクの問いに、ルルーシユは静かに目を瞑り、考える。

瞼の裏に浮かぶのは、自分達を切り捨て、殺そうとした父の姿。

「……ああ、居る。」

スザクはその内から溢れんばかりの怒りを必死に抑えながら、言葉を紡ぐ。

『そんな風に考えてはいけないと思っていた。ルールに従って戦わなければ、それはただの人殺しだって。……でも、今、僕は憎しみに支配されている。人を殺す為に、戦おうとしている。皆が居るトウキョウの空の下で、人殺しを……。だから……!!』

「憎めばいい。」

『……………』

「ユフィの為だろ？それに、俺はもうとつくに決めたよ。引き返すつもりはない。」

『妹達の為？』

「ああ……。」

二人がこうして会話をしている間にも、時は進む。

後数秒。もう少しでゼロが提示した時刻になる。

「切るぞ、そろそろ。」

『ありがとう、ルルーシユ。』

それは何に對してのお礼だったのか。

単純に相談に乗ってくれた親友に對するお礼か、それとも。

「気にするな、俺達、友達だろ？」

『7年前からずっと。』

「ああ、じゃあな。」

『それじゃ、後で。』

通話の終了と同時に、時計の針は頂点へと辿り着く。

0時を回ると共に激しく音を立てて、トウキョウ租界外縁部の道路が、ビルが、全てが崩壊していく。

正面から迎え撃とうと、外縁に陣を敷いたコーネリア軍は崩壊に巻き込まれ、その機能の大半を失った。

そんな光景を見下ろしながら、ルルーシユは顔を歪める。

「スザク、俺の手はとづくに汚れているんだよ……。それでも向かってくるのなら構わない。歓迎してやるさ、俺達は友達だからな。……フフフ……。ハハハハハハハハ!!!」
激しい崩落音と共に、ルルーシユの笑い声が夜空に響いた。

◇◇◇

ああ、分かる。全てが、分かる。

このエリアーに渦巻く怒りが、哀しみが、憎悪が。全てが私に流れ込んでくる。気持ち悪い、不愉快だ、反吐が出る。

これは、なんだ。人々の意思か、世界の意思か。

こんなものを一人で、背負っているのか。兄上は。

それなら、私は――。

「っ!!」

意識が覚醒する。

眼前に映るのは知らない天井。

最後に意識があつたのは何時だ？今の状況は？ここは何処だ？

身体を起こし、呼吸器を外す。

清潔なベッドに、横に設置された心電図、そしてさつきまで取り付けられていた呼吸器。ここが医務室だというのが分かる。

「ああ、そうか。私、撃たれたんだっけ。」

記念式典の出来事を思い出しながら、お腹を摩る。

少し痛みがあるものの、どうやら傷は塞がっているらしい。

上から包帯が巻かれていて、目では確認できないが、恐らくこうして生きているという事は、上手く誰かが処置してくれたのだろう。

静かに足を下ろし、ベットから降りる。

「……………」

どれくらい寝ていたのかは分からないが、相当身体に負担がきていたのだろう、少し

フラついてしまった。

しかし、それだけだ。問題無い。

医務室の扉に手を掛けようとして、ある事に気付く。

「……服……」

意識が覚醒したばかりでそこまで気に掛けていなかった。

流石にこのまま外に出る訳にはいかない。

部屋を見渡すと、ベッドの横にある椅子の上に、服が畳まれて置いてあった。

「パイロットスーツ……」

私が普段着ている青いパイロットスーツだ。

腹部に血が付いていない事から、予備の物だと分かる。

「……まあ、都合は良いか……」

普段だったら、病み上がりの人間にこの服はどうなんだろう、と文句を言う所だが、事態が事態だ。

パイロットスーツを身に着け、医務室を出る。

見慣れない廊下に少し戸惑ったが、それも一瞬の事、すぐにここが何処か分かった。

「ブリタニア軍のG—1ベース……」

廊下の壁に記されたブリタニア国旗、目立ちにくい壁の下の部分に記されたモデルN

0。

何時かの作戦前に、ブリタニア軍から拝借したG-1ベースの見取り図の記憶を頼りに、指令室へと歩を進める。

(ブリタニア軍に捕縛されたのなら、医務室に監視が居ないのはおかしい。ということ
は少なくとも、黒の騎士団が私を見付け、あの式典会場を制圧したと考えるのが自然
しかし、そうだとすると……。)

黒の騎士団とコーネリア軍の全面戦争中、もしくは開戦の秒読み段階。

怪我している事を忘れ、歩みを速める。

(もし、今が戦争中なら……、兄上はたった一人で全てを背負って、戦場に……！)

ユーフェミアによる日本人虐殺は兄上のギアスによるもの。それは間違いない。

しかし、果たして意図してやった事だろうか。

私はそうでは無いと思う。もしあれが、兄上が望んだことだとしたら、この哀しみは
どうやって説明する？

兄上の心に渦巻く哀しみが、絶望が、私には分かるのだ、感じるのだ。

「こんな重荷、一人で背負わせる訳には……、何時までも守られている訳にはいかない

!!

少女はその幼い顔に決意を宿す。

自らの願いの為、兄と共に前に進む決意を。

stage 31 剣として

少年は戦場を駆ける。

純白のスーツを身に纏い、その身を怒りの炎で焦がしながら。

「どけええええ!!!」

立ちふさがる障害を、荒々しく、鬼神の如く、打ち払いながら。

その戦い方に、彼が持っていた本来の優しさなど無かった。

その太刀筋は無慈悲に命を刈り取り、彼の目に入ったものは悉く、その命を散らしていく。

「ゼロは何処だ！俺はゼロを!!!」

少年——、今の枢木スザクを突き動かすのはブリタニアに対する忠誠心でも、軍人としての責務でも無い。ユーフェミアを殺したゼロへの憎しみ、それだけだ。

だから彼は気にしない。殺したのが同じ日本人だろうと。

荒々しくも精密に、敵対するKMFを駆逐しているその時、ランスロットの死角からナイフが飛んでくる。

怒りで我を忘れていようと、操縦の腕前が落ちる訳では無い。

持ち前の反射神経を活かし、そのナイフをMVSで弾き返す。

俺の邪魔をするな、そう言わんばかりの鋭い視線が投擲された方向へ注がれる。

そこには――。

『スザク!!!』

『カレンか!!!』

そこには幾度となく対峙した、赤いKMF、紅蓮二式が居た。

『戦場で会った以上、悪いけど、死んでもらう……!!』

『皆馬鹿だ！君も日本人も、あんな男に騙されて!!』

『その言い方ムカつくね……! あんたにゼロの何が分かるって言うのよ!!』

KMFを通して、それぞれの鋭い視線が交わる。

お互いのその目は最早、友人に向けるものでは無かった。

溢れんばかりの殺意が込められている。

同じ生徒会のメンバーだろうと、クラスメイトだろうと、敵は敵。

とつくに振り切れているのだ、スザクも、カレンも。

『じゃあ、教えてくれ!!ゼロを！ゼロは今、何処に居る!?!』

ゼロに対する憎しみが強すぎるのか、スザクの言葉は返答にすらなっていない。

ただ伝わるのは、彼の異常なまでのゼロへの執着。

言葉と同時に、ランスロットはスラッシュハーケンを用いて距離を詰め、紅蓮に向け、MVSを振り下ろす。

対する紅蓮は、輻射波動を展開し、受け止める。

『言うはず無いだろ！裏切り者があ!!!』

こうして幾度目かの、スザクとカレンによる、激しい戦闘の火蓋が切つて落とされた。



「紅蓮二式、ランスロットとの交戦に入りました!!」

「よし、すぐにゼロへ報告しろ!」

Gーベースの指令室はオペレーターの女性達と、古参の幹部で運営されていた。

(カレンとスザクが交戦……。私の想定よりも事態は進んでいる……。)

戦闘の激化により忙しいらしく、誰もアルカ存在には気付かない。

「あの白兜…、ランスロットでしたっけ?ゼロ様にはあれを対策する策が有るのですね!!」

本来はブリタニア皇族が座る筈の中央の椅子に、皇神楽耶が腰掛けている。

キョウト六家は早々に富士に逃げ帰っているものかと思つたが、そうでは無いらし

い。

入口の辺りで立ち止まっていたアルカは、再び足を進める。

足取りはしつかりしているものの、その顔は何時も以上に白く、眼も若干虚ろの事から、本調子では無いことが分かる。

「……戦況は？」

静かにアルカは口を開く。

「ア、アルカちゃん……!？」

「す、皇様……。」

この場に居る全員、オペレーターも、神楽耶も、井上や南といった幹部も、まるで亡霊を見たのかの様な表情でアルカを見つめる。

そんな視線を気にも留めず、アルカはモニターに映るトウキョウ租界のマップと、その上の赤と青の点に視線を向ける。

(仕込み通り租界の多重構造は崩壊。行政、メディア、学園地区は制圧……、後は政府か。)

行政特区日本が交付される少し前、アルカとルルーシュは学校に通いながら、クーデターの準備を進めていた。

日本……、エリアーは地震が絶えない国である。

長い歴史の中で、幾度と無く災害に襲われ、様々な町、人、文化が消えていった。そんな地域を植民地に置くのだ。当然、ブリタニアは対策をした。

強い揺れに耐える為の階層構造。それがトウキョウ租界の基盤となっている。

外からの衝撃には強いが、それを内側から崩してしまえば――。

要するに二人はトウキョウ租界の基盤を管理する者にギアスを掛けたのである。

ある言葉を聞いたら、一斉にパージしろ、と。

上手くいつてくれたようで何よりだ。何時もだったらそう思っている所だが、生憎今はそんな時間は無い。

「……ルカ、……アルカ!」

声を掛けられていることに気付き、アルカは思考を現実に戻す。

「……何、神楽耶?」

「何? じゃないですわ! 貴女撃たれた場所は!? 大丈夫ですよ!」

神楽耶は仰々しく、しかし異父妹いもうとの身を案じる姉として、アルカに問いかける。

「……血は出てない。」

「そうは言っても……!!」

神楽耶とアルカの会話を見かねて、オペレーターに指示を出していた南と井上が持ち場所を離れて二人の方へやって来る。

「神楽耶様の言う通りよ、アルカちゃん。貴女、数時間前に撃たれたばかりなのよ？ 普通だったら意識が戻る事すら奇跡なの。今は大人しく……。」

論すように言葉を紡ぐ井上に、若干の鬱陶しさを覚えながら、アルカは口を開く。

「……無窮は？」

「え？」

「持つてきてるんでしよう？ 無窮。私のナイトメア。」

まさか、とこの場にいる全員が顔を青ざめた。

「貴女……、出撃する気なの!？」

「ええ。」

悲鳴にも近い井上の問いかけに、アルカは機械的に答える。

そんな彼女の頬を神楽耶は叩いた。出来の悪い妹を叱る姉の様に。

肌と肌がぶつかり合う音が、指令室に響く。

「冗談も休み休み言ってください。アルカ、貴女そんな状態で出たら死にますよ。藤堂も、カレンさんも、そしてゼロ様も戦っております。彼らを信じて——。」

「……ゼロ、ゼロ、か……、ふふ。」

叩かれた頬を摩りながら、小さくゼロの名を呼び、微笑む。

「……………っ！」

指令室に居る誰もが身震いをした。

室温が急激に下がった様な錯覚に陥った。

それほどまでに、アルカの笑みは歪んでいた。

表面上だけ見れば、何時もと何ら変わらない、芸術作品の様な笑みだった。

しかし、違う。

それは何処か妖艶で。

それは何処か全能的で。

それは何処か狂氣的だった。

ここに居る全員がその肌で感じ取った。今の彼女の異質さを。

「ゼロが戦っているから、大丈夫？ 違う、そうじゃない。戦っているからこそ、私が行かないやダメなんだ。」

神楽耶も井上も、思わずアルカから後ずさる。

「本来は私が、私が一緒に背負うべきだった。いや、私一人で背負うべきだった。それが本来の、私の役割なのだから。」

誰一人、アルカの言っている事は理解できなかった。彼女が言う役割も、背負うべきモノも。

「…嗚呼、理解してもらおうなんて思っただけ無いです…。ただ貴方達は、己が思うままに、私

を戦場に送り出してくれればいい。」

彼女に異を唱える人間は、この場には居なかった。

◇◇◇

G-1ベースの出撃ハッチから、一つの青い閃光が飛び出した。

それは戦闘機よりも速く、ファクトスファイアでも追えない程の速度を有していた。

『うわああああ!!』

野太い悲鳴を上げながら、サザーランドは爆発する。

それを近くで見えていた僚機も、その悲鳴を聞き駆け付けた別部隊も、一瞬の内にスクラップと化した。

その閃光は無数の敵を散らしながら、ブリタニア政庁へ向かう。時には地を駆け、時には空を舞いながら。

無窮むきゆうてんしき天式。

ガウエインに装備されているフロートユニットを解析し、独自に開発した飛翔滑走翼を装備した無窮の事を、ラクシャータはそう呼んだ。

空中での行動を可能とした半面。まだ開発してから間も無い為、最適化されておらず、エナジーの燃費が悪いこと。また、外部装甲や武装を完全装備した無窮を飛翔させ

るのに必要な出力に至っておらず、現状、空を飛ぶには外部装甲と一部の武装をパージしないといけないこと。この2点が欠点として残っている。

今の無窮の武装は両手に持つ二本の太刀のみ。

装甲は通常よりも薄く、少し頼り無い。

(……だから、何だ。)

そんなことでは彼女は止まらない。

武器が太刀しかないなら全てを叩き切れば良い。

装甲が薄いなら全て避ければ良い。

それを可能とするだけの力と覚悟があるのだから――。

腹に宿る熱に耐えながら、アルカは戦場を鳥瞰する。

(……あれは……?)

ブリタニア政庁の屋上に向かって進む一機の黒いKMF、ガウエインだ。

「兄上……!」

アルカはその顔に安堵の笑みを浮かべ、無窮を前進させようとするが、ある事に気が付き、その手を止めた。

空を飛ぶガウエインに向かって、一機のKMFが向かっているのだ。

黒の騎士団が所持するKMFの中で、フロートユニットが取り付けられているのは現

状、ガウエインと無窮のみ。要するに、敵だ。

ガウエインはまだ、その機体に気付いている様子は無い。

「…っ。させない…！」

身体にかかる負担、知るもんか。

エナジーの消費が激しい、だからどうした。

アルカは最大出力で空を翔ける。大事な人を守るために。

◇◇◇

遡る事、数刻前。

「本当に彼女なら、真っ先に政庁を攻め落としくると思っただが、あてが外れたか？」

ブリタニア政庁の前で、帝国最強の騎士、ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラムは呟く。

ノネットの知るアルカ・ヴィ・ブリタニアは、戦いに置いては実にシンプルな人間だった。

先手必勝、疾風迅雷。この言葉がよく当てはまるだろうか。

兎に角、彼女は戦闘を早く終わらせる事に重点を置いていた。

可能であれば敵の頭を叩く。目の前の敵をなるべく一撃で葬る。常に最短距離で勝

利をもぎ取ろうとする、それが彼女の在り方だった。

それをある人は単純と言った。

それをある人は死に急ぎと笑った。

しかし、彼女にはそれを可能にするだけの実力があつた。

実力がある人間が取る正攻法は、時には全てを上から叩き潰せるほどの力を発揮する。

枢木スザクが良い例だろう。

黒の騎士団に四方八方から攻められ、防戦一方なこの状況。

昔の彼女なら真つ先にチエックを掛けてくる、それがノネットの考えであつた。

(別の目的があるか、この戦場に居ないか、それとも……アルカでは無く別の人物、か。)

いや、よそう。とノネットは首を振る。

(どれかにしろ、私が取るべき行動は変わらない。)

あくまでも彼女はナイトオブナインとしてこの戦場に立っている。ノネット・エニアグラムとしてでは無い。

政庁の前を防衛しているのも、自身の希望もあるが、コーネリアに依頼されたからだ。

どの道、黒の騎士団は政庁へと集まってくる。遊撃は枢木に任せて、ノネットは火に飛び込んでくる虫達を払えばいい、と。

(…ん……?あれは……。)

その時、自身の乗るKMFが一つの熱源を捉えた。

ブリタニア政庁の屋上へ向かう、黒い巨人。ガウエイン。

ゼロ。黒の騎士団のリーダーにして、皇族殺しの大罪人。

黒の騎士団のメンバーの殆どは、元一般人だと聞く。一部、藤堂を始めとする旧日本解放戦線のメンバーも居るらしいが、それもほんの一握り。

つまりはゼロと一部のメンバーが組織として無理矢理纏めている烏合の衆。

それがコーネリア、そしてノネットの見解だった。

ゼロのカリスマ性は圧倒的だ。それは認めよう。

しかし、それが偉大であればあるほど、失った時の動揺は計り知れない。

そして――。

「私も、結果を追い求める質なんでね……」

ノネットは目を鋭くし、自身のKMFをゼロに向かって上昇させる。

ナイトオブブラウンズとして、勝利を掴む為に。

コックピット内にけたたましい警告音が鳴り響く。

「おい！とんでもない速度で此方に向かってくる奴が居るぞ！」

「ああ……！分かってる!!」

ブリタニアによる空爆を阻止する為、ブリタニア政府の屋上へと向かっていたルルーシュとC・C.は、その進行を一機のKMFによって阻まれようとしていた。

「目障りなんだよ……!!」

向かってくる金色のKMFに向かってハドロン砲を放つも、円を描く様に躲かれてしまい、一瞬で距離を詰められる。

「つ!!何なんだこいつは!!」

迫ってくる敵に対し、ハドロン砲、スラッシュハーケン、あらゆる武装を用いるが、その姿を捉える事は出来ない。

そもそも、ガウエインというKMFの性質上、接近戦は不向きなのだ。

最低限の動きは出来るものの、コンセプトは指揮官機。

このように近距離に持ち込まれると、どうしても機動力の無さが仇となってしまう。

「ええい！こんな奴が二機もいてたまるか！」

ガウエインの目の前にはランスロットと同じ、赤い剣を構える黄金の機体。

「チエックメイトだ、ゼロ。案外、大したこと無かったな。」

その機体を駆るノネットは、笑みを深くする。

彼女はそのままガウエインのコックピットに向かってMVSを振り下ろす——。事は叶わなかった。

一機のKMFがMVSを受け止めたからだ。

激しい金属音と共に、火花が両者の機体の間で発生する。

「やはり来たか……！」

その機体を見て、ノネットはより一層、笑みを深くした。

「お、お前は……。」

その機体を見て、ルルーシユは驚愕を隠せない様子だった。

「……アルカ……。」

その機体を見て、C・Cは悲しそうな、しかし何処か安堵した様な表情を浮かべた。

一般的なKMFよりも高い等身。額から伸びる一本の角。外部装甲の代わりに、新に取り付けられた飛翔滑走翼フロイトユニット。

そんな深い青色のKMFが、黄金のKMFの攻撃を受け止め、そしてそのまま弾き返す。

弾き返された黄金のKMFは勢いに押され、後退し、距離を開けた。

青いKMF、無窮を駆る少女は、何処までも静かだった。

その端正な顔に表情を浮かべる事無く、黄金のKMFを見据える。

「見た事の無い機体…、新型か……。」

大切な人達の障害を全て切り伏せる剣として、自身の本来の役割を果たす為、少女、アルカ・アングレカムは呟いた。

「潰す。」

Stage 32 少女の在り方

『ア、アルカ…、お前……。』

動揺を隠し切れないルルーシユの声が、無窮のコックピット内に響く。

まあ、無理も無いだろう。

アルカがユーフェミアに撃たれたのが、ほんの数時間前。

ルルーシユが見舞いに行った時も、容体は安定していたものの、意識を取り戻す気配は無かったのだから。

「行つて。」

兄の戸惑いに対し、彼女は短くそう呟いた。

「私がここで押さえるから。兄上は政庁へ。」

『し、しかし、お前……。傷は……。』

傷の具合を聞かれたアルカは、自身の腹を押さえ、苦笑しつつも、悟られない様振る舞う。

「大丈夫。血は止まっているし、痛みも無い。それよりも……。」

目の前の黄金の機体を彼女は見据える。

ランスロットに似た形状を持つこの機体は、こちらの様子を傍観するばかりで、動く気配は無い。

「この人を野放しにしている方が、危険だよ。だから、ここは私に任せて。ね？」

『おい、ルルーシュ。早くしないとブリタニア軍による空爆が始まるぞ。』

アルカとルルーシュの会話に、C・Cが割って入る。

『……………分かった…。ここは任せよう……………。』

渋々と言った様子で、ルルーシュは了承した。

『アルカ、無茶した分、後で…。分かってるな？』

「ええ…。お説教は勘弁……………」

戦場に似つかわしくない会話。

ただのルルーシュと、アルカの会話。

それが幾分か緊張を和らげる。

式典が始まる数日前から、空気が張り詰めていて日常とは程遠かった為、自然と身体に力が入りっぱなしだったのだろう。

久しぶりに触れた日常の雰囲気、アルカは笑みを零す。

(ああ…。負けられないな。)

政庁の屋上へ向かって行くガウエインの背中を見送りながら、笑みを浮かべる。

『……もう、いいのか?』

その時、タイミングを見計らった様に、黄金のKMFのパイロット、ノネット・エニアグラムが話しかけてきた。

『ええ。それにしても意外ですね、ゼロを見逃すなんて。』

『ふっ……何、優先順位の話さ。私からすれば、戦場における脅威度はゼロよりお前の方が上だからね。』

無窮のパイロットがアルカであっても、そうでなくても。無窮のパイロットには、一人で戦況を覆すほどの実力と覚悟がある、とノネットは考えている。

ゼロがスザクに手を焼いていた様に、そういう手合いは実に危険だ。

司令塔が居なくとも、自身の判断で戦闘が続行可能、尚且つ勝利を掴む為の実力が付随している。

チヨウフで一戦交えた経験と、今までの戦闘データから、ノネットは、無窮のパイロットはそういう人種だと判断した。

『そりゃ、どうも……!!』

先に動いたのはアルカだった、最大出力で後ろに回り、コックピットに向かって太刀を振り下ろす。

「ああ、やはり。お前ならこうするだろうよ!」

それを読んでいたのか、すかさず振り向き、その太刀をMVSで受け止める。

(早い……。サザーランドと比べ物にならないくらい……。それに、出力も違い過ぎる。) サザーランドだったら悲鳴を上げていたであろう動きにも問題無く付いていき、無窮の太刀も危うげなく受け止める。

(間違いないこのKMF……。無窮と同等のスペックを持っている……。)

押しきれそうに無い。そう判断したアルカは、空いているもう一本の太刀を、今度は脚部に目掛けて、一閃――。

しかしそれも、もう一本のMVSで受け止められた。

(クソっ……。)

決めきれなかった焦りか、腹から滲み湧く痛みか、アルカは苦悶の表情を浮かべながら、無窮を後退させる。

「ああ、今の、攻防だけで、これか……。情けない。」
腹に手を当て、痛みに耐える。

鈍い痛みと熱が、全身を蝕み、思考が絡め取られる。

『凄まじいだろう？サザーランドとは訳が違う。』

とその時、ノネットが言葉を紡ぎだした。

『ランスロットを元とした量産型KMF。ヴィンセント、というらしい。あいつの活躍

が評価された、という事だろう。』
らしくない、とアルカは思った。

今の状況、間違いなく詰められれば対応出来なかった。

絶好の好機だというのに、彼女はそれをしなかった。

『随分とお喋り、ですね…。らしくもない…。』

『ん、ああ……。昔を思い出したんだよ……。』

黄金のKMF——、ヴァインセントが距離を詰める。

二本のMVSの柄を繋ぎ、バトンの様にクルクルと回しながら。

まるで踊る様にMVSを回転させながら、無窮に切り掛かる。

一つ刃をいなしでも、もう一方の刃が、すぐさま襲う。

二つの刃を掻い潜れば、次に待つのはスラッシュハーケンか、別の軌道からの一筋。

(……やりにくい……！)

アルカは防戦一方だった。

二つの致死の刃を受け流しながら、反撃の機会を伺う。

振り下ろされるMVSを、二本の太刀で受け止め、そのまま弾き返す。

ヴァインセントの手から離れたMVSは、クルクルと円を描きながら、宙を舞う。

反撃の絶好の機会かと思えた、しかし——。

『ほおら、どうした？こちらがお留守だぞ。』

『!!』

それを許す程、ノネットは甘くない。

ヴァインセントの腕を折り曲げ、吐出した肘を無窮に押し付けようとする。

それを右手の太刀で受け止めようとする、が。

太刀は音を立てて折れた。

KMFの鎧をも切断し、MVSとも渡り合った太刀が、こうも簡単に。

ニードルブレイザー。

新型であるヴァインセントに標準搭載された新武装。

両肘部分にブレイズルミナスを展開させる機構があり、それを収束させる事で、防御装置であったブレイズルミナスを、打突武装として変換させたもの。

ノネットが乗るヴァインセントは試作機であり、ブレイズルミナスを展開させるまでに至っていないが、武器としての利用は可能らしい。

「ク、ソ……!」

何度目か分からない悪態を付きながら、アルカは宙を舞っている折れた刀身をヴァインセント目掛けて蹴り飛ばす。

『器用なやつだな!!』

至近距離からの反撃。

さすがのノネットも反応しきれず、そのままヴァインセントの肩に突き刺さる。その間に距離を取ったアルカは、身体を震わせながら、痛みに耐える。

「……がッ、……(ぐ)ほっ…、っ……!」

湧き上がる痛みに耐えきれず、口に手を当て、咳込むアルカ。

咳が収まり、手を放すと、そこには赤い血がベツトリと付着していた。

気づけば、自身のパイロットスーツも傷口の部分が赤黒く染まっている。

(そろそろっ、限界…か。)

額に汗を浮かべながら、ヴァインセントを見据える。

(もう左腕は使えん、か。)

狙ったのか、たまたまなのか。

恐らくは前者だろうが、無窮が蹴り飛ばした破片は、ヴァインセントの肩の駆動部分に見事に突き刺さり、機能しなくなっていた。

対する無窮は、武器が一つ減ったものの、五体満足。

(次で終わらせる。)

宙に舞っていたMVSを取り、無窮に向かって翔けるヴァインセント。

「そう安々と、何度も接近を許すと思っっているんですか!!」

無窮に装備されている飛翔滑走翼の上部、そのハッチが開いた。そこには無数のミサイル。

その全てが、向かってくるヴァインセントに向かって射出された。

追尾式小型ミサイル。

無窮の、というよりは飛翔滑走翼に搭載された、遠距離武装。

「そんなものまで隠し持っていたとはな……だがっ!!」

それでノネットを倒せる程、ナイトオブライインズは甘くない。

ミサイルはヴァインセントに捉える事は無く、全て後ろのビルへと着弾した。激しい音を立てて、ビルは無窮とノネットの方へ倒れていく。

倒壊に巻き込まれては、流石のKMFも人溜まり無い。

両者は倒壊するビルを挟む様に、位置を変え、視界が晴れるのを待つ。

お互いのKMFに遠距離武装が無いと判断した為だろう。

そして、その判断こそが間違いだった。

倒壊するビルを挟んで対峙するというこの構図に、アルカは口角を上げる。

太刀を逆手に持ち替えて、投擲態勢に移行する。

狙うのは、倒壊するビルの残骸の、僅かな隙間。

瓦礫の隙間とヴァインセントが重なる、ほんの一瞬。

「……………！！」

太刀は無窮の手を離れ、ヴァインセントに向かって投擲された。空気を切り裂く程の速度を保ちながら、瓦礫の隙間を掻い潜っていく。

ノネットが気付いたのは、投擲されてから数秒後の事だった。

しかし、もう、太刀は無窮の手を離れている。

鋭い刃が、ヴァインセントに向かってきている。

「しまっ——」。

凶刃は腹部を貫き、ヴァインセントは完全に沈黙した。

◇◇◇

万能と謳われた少女が居た。

皇歴2009年。

ナイトオブナインに着任して、数年経ったある日、ノネットは噂を耳にした。

「万能？」

皇族の末端に、万能と言われる少女が居ると。

聞けば、筆を取れば聡明さを周囲に見せつけ。剣を取れば悉く障害を打ち払う。そん

な少女。

ノネットも話は聞いていた、非情に優秀な皇族が居ると。

だが、その様な呼ばれ方をしているという事は知らなかった。

「ええ、マリアンヌ様の家の次女なのですが、最近シユナイゼル兄様も目を張るほど、頭角を現してしまして。卿も——、ノネットさんもどうかと。」

目の前の少女、コーネリアは嬉しそうに語る。

シユナイゼルが、と建前を付けているが、その実、コーネリアのお気に入りという事が目に見えて分かる。

「ああ、殿下が良くヴィ家に足を運んでいるのは知っていましたが、目的はマリアンヌ様のお子様でしたか。」

「ふふ、まあそれもあります。」

コーネリアは柔らかに笑みを浮かべる。

本当に目に掛けているのだらう。マリアンヌ王妃の子ども、というのもあるが、騎士として優秀な義妹が居る事が。

数ある皇族の中でも、やはり優秀な者と、そうでない者が居る。

シユナイゼルは特にその部類だらう。次期皇帝に一番近いとまで言われているのだ。まさにその体現である。

ノネットの個人的な見解をしてはルルーシュ、クロヴィス、ユーフェミアもその部類に入るだろう。コーネリアについては最早言うまでもない。

しかし、ルルーシュとシユナイゼルは指揮官として、クロヴィスは芸術面、ユーフェミアは民を導く象徴として。

それぞれが輝かんばかりの才能を持っているが、コーネリアの様に、騎士として優秀な皇族は殆ど居ない。

ある種の孤独感を覚えていたのだろう。そこに剣をとつても非凡性を発揮する義妹が現れたのだ、無理も無い。

「それで?どう、とは?」

「丁度今の時間、その子は他の貴族と訓練をしまして、見に行ってみませんか?」

聞けば、その万能の少女――、アルカ・ヴィ・ブリタニアは次期皇帝争いには参加せず、騎士の道を歩むらしい。

そこでノネットが、帝国最強の騎士の一角として、少女の訓練を見てあげて欲しいとの事だった。

相変わらずの身内に対する面倒見の良さに微笑ましさを覚える。

「…うん、そうだな。折角の休みだ。後輩に付き合うのも悪くない。」

ノネットは口調を幾分か柔らかくし、そう呟いた。

「ふふ、アルカもきつと喜びます。」

驚く程、その少女は麗しかった。

神に愛されているのではないか、と思わず錯覚する程、彼女の容姿は整っていた。ノネットとコーネリアは、訓練の様子を少し遠くから眺める。

少女の相手は、歳にして倍はあるだろう貴族の少年。

誰が見ても、少女が勝てる未来など想像出来ないだろう。

もしかしたら一種のいじめとも捉えられるかもしれない。

それでも、この場に居る全員、少女の事を軽く見る様な真似はしなかった。

対峙する少年の後ろには、少女に打ち負けたであろう、同年代の貴族達が座り込んでいた。

少女の後ろには、勝ちを確信しているかの様に、微笑むマリアンヌが居た。

少年は模造刀を、少女に振り下ろす。

少女はそれを最低限の動きで躲し、そのまま少年の鳩尾に肘を入れる。

別に少年が弱い訳では無い。むしろ良い線を行っている。伝統を重んじる貴族らし

く、正しい型で、マニュアル通りの忠実な動き。故に、読みやすい。対する少女はどうだろう。

急所を当てられ、悶絶する少年の目に向かって土を蹴り上げ、視界を奪う。すかさず顎に向かって、一閃——、模造刀を叩き込んだ。

顎を強打され、倒れ伏した少年の首に、模造刀の切っ先を向ける。

「終わりです。」

少女の凜とした声だけが響いた。

それ以降、少女は何も言わぬまま、身を翻して、自身の母の元へと向かう。

そんな時だった、後ろの少年達が声を上げたのは。

卑怯者。

正々堂々戦え。

騎士の恥。

魔女。

思いつく限りの罵倒や非難の声が少女に浴びせられる。

後ろの少年達も同じ様にやられたのだろう。

見るに、少年達の戦い方は伝統を重んじた騎士そのもの。

伝統を重視しすぎるのは、貴族の出の子ども達に多い傾向だ。

それも仕方無いことだろう。少女程では無いが、少年達もまだ子ども。貴族という立場そのものが、彼らのプライドなのだから。

対する少女の戦い方は、無法者、つまりはルール無用の戦場を想定した戦い方だった。使えるモノは何でも利用し、敵の排除だけを重視した戦い方。

平民の出のマリアンらしいと言うべきか、それとも少女に元から備わった資質か。

実際の戦場に置いて、どちらが理にかなっているかは言うまでもない。

少年達も、実際に戦場に出れば分かるだろう。

理想だけでは世界は動かない、と。

後ろからの罵倒や非難に、少女は足を止め、振り向く。

その顔に、表情は無かった。

その顔は、何処までも機械的だった。

その顔は、人形の様だった。

「戦場でも同じ事が言えますか。」

ただ一言、その一言だけを言い放ち、再び歩を進めた。

先程まで、わめき散らかしていた少年たちは、返す言葉が無いのか、嘘の様に静かになり、それ以降は口を開かなかった。

「あれが、アルカ・ヴィ・ブリタニアです、どうですか？面白いやつでしょう？」

コーネリアは誇らしげにそう語る。

少女はマリアンヌから何かを言われている様だった。

俯く少女の顔には先程まで無かった、寂しさと悲しさ、そういった表情が浮かんでいた。

ああ、とノネットは納得した。

褒められたかったのだな、と。

しかし、あの感じを見るに、マリアンヌが掛けた言葉は、アドバイスともほど遠いダメ出しの類だろう。

「マリアンヌ様はやはり厳しいお方ですね…、あれではまたアルカが泣いてしまう。しかし、これも彼女の事を思つての事なのでしょう。」

また、という事は、今まで何度も見てきた光景なのだろう。

確かにマリアンヌの指導は厳しい。

ノネットも受けた事があるからそう言えるのだが、自身でも思わずそう感じてしまうほどスパルタだったし、騎士の頂点のビスマルクすら、コテンパンにされていた。

しかし、それは自分達、大人に向けているから良いのであって、5にも満たない幼子に向けてるものではない。

ノネットは理解した、少女の万能性は先天的なものでは無く、たゆまぬ努力の成果な

のだと。

それと同時に、情も湧いた。

少しの同情と、言葉では言い表せない庇護欲。

それは、マリアンヌからある提案をされる、少し前の出来事だった。

Stage 33 母として

「最後の一撃…、あれは肝を冷やしたぞ。」

座り込むノネットの傍らには、もう使い物にならない程、大破したヴィンセント。そんな彼女達の前に、1人の少女が立っていた。

出血する腹を片手で押さえ、生気を感じられない程、肌を青白くしている少女。

「その割には、元氣そうじゃない、ですか……。」

「いやあ、誰かさんがコックピットを狙わず、ドライブを狙ってくれたお陰だなあ！」

無窮が投擲した太刀、確かに勝負を決める決定打だった。しかし、命を奪うものではない。

ヴィンセントに採用された動力部、ユグドラシルドライブを貫いたのだ。

「さあ、何のこと、やら…。私はより、確実な方を選択した、だけ。」

「ふ…、まあそういう事にしといてやろう。」

ノネットは笑みを浮かべ、少女を見据える。

「よくも、まあ、そこまで綺麗に成長したものだ。なあ、アルカよ。」

「何ですか、それ…。皮肉……?」

今のアルカはお世辞にも綺麗とは言い難い。

腹部からは血が垂れ、淡いミルク色の髪は汚れ、その端正な顔も血と汗でベツタリだ。そんな彼女を懐かしむ様に眺めつつ、ノネットは口を開く。

「そうでは無い。今の姿を持ってして、美しいと言っているのだ。お前は昔から、ドレスに身を包まれている姿よりも、泥臭く汚れている姿の方が私には綺麗に見えたよ。」

「……はは、何、それ……。全然、嬉しくない……。」

苦悶の表情を浮かべながらも、その顔は何処か安らかで――。

アルカはノネットの傍に座り込む。

「それにしても、そんな状態で私と戦い、勝ったのか。私も腕が鈍ったかな。それとも――」

「私が、強くなった……か……。残念ですけど、どちらも、違う……。」

対照的な二人だった。

一方の少女は、戦いには勝ったものの、満身創痍。

一方の女性は、戦いには敗れたものの、五体満足。

この場で取り押さえようとすれば、アルカは何の抵抗も出来ず、ブリタニア軍に身柄を確保されるだろう。

しかし、ノネットはそうしようとはしなかった。

——完全に戦意を失っている様だった。

「手を、抜きました、ね……？」

アルカの言葉にノネットは目を見開く。

アルカとて、不思議に思っていた。

戦場だというのに、敵であるアルカにヴァインセントの情報を教えた事。

間違いなく、攻められれば対応が間に合わなかった場面で、攻めてこなかった事。

要所所で距離を取り、無窮の様子を伺っていた事。

戦場での行動全てが、アルカの知るナイトオブナインに一致しなかった。

それは、どちらかというと——。

「ノネットさん、と戦っている、ようでした。」

戦う、というよりは訓練かな。とアルカは呟く。

ノネットがアリエスの離宮に足を運ぶ様になってから、マリアンヌが死ぬまでの一年も満たない時間。

アルカとノネットは定期的に訓練を行っていた。

対人訓練からシミュレーター上でのKMFの訓練。

アルカは言っているのだ、まるでその時の様だった、と。

「ふ…、アッハッハッハ！」

ノネットは思わず、といった様子で笑い声を上げた。

その声は何処までも明るく、戦場に似つかわしくない声だった。

「私がそんな優しい女だと？まさか、いくらお前が相手だろうと、それは無い。お前は私に勝ったんだよ、誇れ。」

「……………」

アルカは釈然としない様子で、ノネットを見据える。

「いつから、気づいて、いたんですか？」

「いつから、か。それを言うならきつかけはチョウフの時だな。戦い方があまりにも似ていた。」

「よく、憶えていましたね。私の、こと……………」

アルカの言葉に対し、少し寂しそうな笑みを浮かべ、ノネットは口を開く。

「それはそうさ、お前のことなど一度も忘れた事など無い。私の娘になる予定だったのだから、当然だろう？」

「……………は？」

その時、世界の時間が止まった様に思えた。



「私が、あの子の母に、ですか。」

マリアンヌに呼び出されたノネットは、紅茶を口に運びながら、戸惑いを隠せない様子で呟いた。

「そう、アルカの母親。私達って後ろ盾少ないでしょう？あの子も貴女に懐いているし、丁度良いかなって思ってた。」

平民の出であるマリアンヌの家を支持する貴族は少ない。

それこそマリアンヌの出身母体であるアッシュフォード家か、ゴッドバルト家位だ。

「確かに、私の家も貴族階級ですが……。何も養子に出さなくなっちゃって……。後ろ盾が欲しいなら、私が彼女の後ろ盾に……。」

アルカの兄と姉に対する愛情の深さはノネットとて、十分に理解している。

訓練の合間に話すことが殆ど、その2人に関する事なのだから、嫌でも分かる。

騎士を目指すのも、2人を守る為だとか。

それはとても良い心掛けだし、そんな少女の在り方を、ノネットは好いていた。

それを、彼女の源を、母親自ら遠ざけるなんて……。

「あら、それはダメよ、ノネット。あの子を何時までも皇族として、置いておく訳にはかないの。」

さも、当然の様にマリアンヌは言った。

「貴女は口が堅いから、話すけど、あの子皇族じゃないの。」

「……………は？」

頭を叩かれた様な衝撃が、ノネットを襲う。

あまりの驚愕っぷりに手からティーカップが離れ、音を立てて割れた。

「私の子どもである事には変わりないわ。だけど、あの子にはシャルルの血は入っていない。入っているのは日本における王の血。」

「……………道理で、次期皇帝の座を……………、いや、しかし、だとするなら何故貴女は……………」

皇族でありながら、騎士をを目指す。

それは良い。コーネリアの様な在り方だつてあるし、何も皇族から騎士になる例が無かつた訳でも無い。

しかし、まだ5にも満たない幼子の段階で、皇位継承を諦めると明言するのは前代未聞だつたが——。

「色々とあるのよ。色々と。」

マリアンヌの目が細まり、ノネットを見据える。

その目は王妃の目では無かつた。戦場で敵を打ち滅ぼす、閃光の目。

聞くな——。

マリアンヌから発される大きなプレッシャーに、ノネットはそれ以上踏み込む事は出

来なかった。

ノネットは落としたティーカップを拾い上げ、口を開く事無く、座り直す。

「あら、流石はノネット。気の使える女はモテるわよ?」

マリアンヌは何も無かつたように、聖母の如く笑みを浮かべ、紅茶を啜る。

「……まで言えば分かるでしょう?このままだと間違いなくあの子は、皇族としての立場を上げる。でも、立場を上げれば上げる程、その土台は揺らいで行く事になる。だったら騎士侯なら?異国の血が入った騎士なんて五万と居るし、ラウンズまで上り詰めれば、異を唱えられるのは皇帝陛下ただ一人。」

「それで、あの子を養子に……。」

別にアルカの事は嫌いではない。寧ろ好きだ。

面倒を見るのも構わない。

何なら、自ら率先して行きたい位だ。

しかし、それ以上に、マリアンヌの手元に彼女が居る事自体が、不安だ。

そうノネットは考える様になっていた。

マリアンヌの姿がぶれる。

何かを企てている様子ではあるものの、その言葉は実に理に叶っていた。自らの娘を安じた母親そのものだった。

歪んでいる。

歪んでいる。

歪んでいる。

その歪さが、ノネットを不安へと駆り立てる。

「そう、あの子の為に。ね？」

マリアンヌはノネットの手を包み、小首をかしげる。

「定期的に私達に合わせてくれれば、貴女の思う様に育てて構わないから。貴女だって子どもが居ても可笑しくない歳何だし。」

私なんて20の時にルルーシユを産んだのよ。とマリアンヌは胸を張る。

「無理にとは言わないわ。貴女がダメなら他を当たるもの。そうねえ、ルキアーノの所なんてどうかしら。きつと頼もしく成長するわ。」

それは脅迫に近かった。

それは命令にも等しかった。

「……分かりました。喜んでお受け致します。」

「それは良かったわ！んー、そうねえ、正式な受け渡しは…、あの子が5歳になったら、でどうかしら？」

そして、アルカの5歳の誕生日を迎える前日、マリアンヌは死亡し、ヴィ家は崩壊し

た。

◇◇◇

アルカの目が、驚愕で大きく見開かれる。

「それで、貴女は……。」

「ああ。まあその話が無くとも足は運んでいただろうがな。それ位、私はお前の事を気に入っている。」

スツキリした様な表情を浮かべ、ノネットは続けて口を開く。

「あの時のマリアンヌ王妃には確実に何かがあった。だが私はな、アルカ。それ以上にお前を守ってやりたいと思っていたよ。」

痛みも忘れ、アルカは驚愕を隠せない様子でノネットを見つめる。

「お前、訓練の後のマリアンヌ王妃との会話。あれ、寂しそうにしてたよなあ。私はあの光景が嫌いだった。私なら褒めるのに、私なら……。そんな事ばかり考えていたよ。」

「……だからって、今、そんな昔の話をしたところで……！」

その時、政庁の屋上から激しい爆発音が聞こえた。

アルカとノネットは言葉を切り、視線を屋上へと向ける。

「あっちも終わったのだろう。……行け。ゼロはルルーシュ様、何だろう？お前の役割

を果たせ。」

ルルーシユ、兄の言葉に咄嗟に反応し、ノネットにギアスを掛けようとする、が。

「そう怖い顔で睨むな、安心しろ、誰にも話したりはせんよ。…それよりも早く行け。お前の戦う理由なのだろう?…それとも、行かないのなら私と本国にでも戻るか?」

そう言い、挑発的な笑みを浮かべながら、ノネットはアルカに手を伸ばす。

この手を取れば、戦場から離れ、エニアグラム家で平穏に暮らすのだろうか。それとも、ブリタニアの騎士として、道を進むのだろうか。

アルカは一瞬考え込んだものの、ノネットの手を振り払った。

「ふざけないで下さい。」

アルカは立ち上がり、ノネットを見下ろす。

その目には確かに覚悟が宿っていた。

「もう道は完全に別れたんです、10年前のあの日から……!私には……、私の戦う理由がある!貴女の手を取ることは出来ない!」

痛みも忘れ、自身の想いを吐き出したアルカは、無窮へと乗り込む。

「…ああ、それでいい。」

ノネットはそんな彼女の行動に、満足気に笑みを浮かべた。

コックピットのハッチを閉める直前、ノネットと少女の視線が交わる。

少女のその汚れた顔は何処までも美しく、何処までも人間的で、ノネットには芸術作品の様に思えた。

視線が交わる中、戦場にそぐわない少女の声が、ノネットに向けられた。

「……………さようなら。——」。

「っ!!」

アルカが最後に言い残し、無窮を政庁へと向かわせた。

段々と小さくなつていく無窮を、ノネットは目を見開いたまま、見つめる。

しかし、それも一瞬の事、ノネットは再び何時もの様な快活な笑みを浮かべ、口を開いた。

「ああ、それでこそ私の見込んだ少女だ。はっ、実に良い!」

彼女は何処までも、満足気だった。

「ぶれるなよ、アルカ。お前は自身の信じる道を歩めばいい。そしてその先にある世界を私に見せてくれ。」

彼女は何処までも、満足気だった。

「……………道は交わらずとも背中を押してやる。」

それが母親というものだろう——。

彼女は何処までも、満足気だった。

Stage 34 そして、終幕へ

「そうか…、お前がゼロか……。」

朦朧とする意識の中、コーネリアは呟く。

彼女に対峙するのは、仮面を外し、自らの左目を押さえたルルーシユ。

隠されていない方の目から注がれる視線は、最早肉親に向ける様なものでは無かった。

「そうなるよ、仮面の少女は……。エニアグラム卿の言う事は…当たっていたな……。」

妹達の為にこんな事を……？」

「そうです。私は今の世界を破壊し、新しい時代を創る。」

ルルーシユは極めて機械的に、感情を表に一切出さず、答える。

「そんな世迷言の為に殺したのか……!? クロヴィスを…、ユファイまで！」

「……………」

ルルーシユは何も答えない。

それだけで十分にコーネリアは理解した。

もう、道が変わる事は無い、と。

「どうやら、これ以上の会話に、意味は無い様だな……。」

そういうコーネリアの表情は、何処か悲し気にも感じる。

「そうですね。…ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが問いに答えよ。」

左目から手を離し、コーネリアの瞳を見つめる。

ルルーシユから放たれたギアスは、コーネリアの脳内を蝕み、支配した。

「……っ、はっ、きつつ…。」

朦朧する意識の中、アルカは政庁の屋上へと辿り着いた。

ノネットとの戦闘による負荷が、今になって身体に現れており、ルルーシユと合流するのに時間が掛かってしまった。

屋上には満身創痍のコーネリアと苛立ちを隠せない様子のルルーシユ。

仮面を外し、素顔を晒しているものの、アルカが来たと知り、再び仮面を身に着けた。

ギアスを掛けないようにする為だろう。

しかし、分かっているても、兄の素顔を見れないことに、アルカは寂しさを覚えた。

「兄、上…、大丈夫…？」

そうルルーシユに問いかけながら、アルカはコックピットからゆつくりとした動作で

降りる。

その姿にルルーシユは怪訝な表情を浮かべた。

何せ、腹部を血に染めながら、今にも倒れそうな足取りで近づいてくるのだから無理も無い。

『おい、アルカ！』

ゼロルルーシユはすぐさま駆け寄り、アルカを支える。

耳元で聞こえる息遣いも荒く、体温も高い。

相当無茶をしたのだろう。

兄の心配も余所に、アルカは言葉を紡ぐ。

「コウ姉様は、なんて……？聞いたのでしょうか……？」

『お前……、そんな状態で……！後でいくらでも話すから……！』

ルルーシユの言葉に、アルカは首を横に振った。

「……だ、めつ。今、聞きたい……。傷は、大丈夫。放っておけば、どうか……。」

『……つ。コーネリアは何も知らなかった。首謀者も、お前の出生についても……！』

ルルーシユは語る、新たに得た情報は、マリアンヌの指示で警備を下げたという事と、シュナイゼルが皇帝に指示され遺体を運び出した、と。

「……そ、つか。やっぱり、シュナイゼルか、皇帝本人じゃないと、知らないのかも、ね

…。」

『おい、そんな事より、早く…。ええい、一先ずラクシャータの元へ…………。』

その時、珍しく焦った様子のC・C。が、ガウエインから2人へ声をかけた。

『おい、戻ってこい!』

『分かってている!そろそろ政庁の守備隊が…。それにアルカも放っておく訳には…………。』

『違う!ナナリーが攫われた!』

その一言に、アルカとルルーシユは怪訝な表情を浮かべる。

『私には分かる!お前達の生きる目的なのだろう!今は神根島に向かっている!』

「神根、島…………。」

明らかにギアスに関係があると思われる遺跡、そしてC・C。の分かるという言葉。

それがより、C・C。の言っている事が真実だということが、嫌でも分かる。

「…行こう、兄上。行くしか、ないよ…。」

『しかし、お前、傷が…………。』

『アルカも連れて行け!ここに置いていった方が危険だろう!』

忌々し気な表情を浮かべ、アルカと共にガウエインに乗ろうとする——が、それは叶わなかった。

激しい揺れと共に、政庁の屋上庭園は崩壊し、その下から新たな障害が顔を覗かせた

からだ。

「きゃっつ！」

政庁全体に響く振動にアルカはバランスを崩し、ルルーシユの傍を離れ、倒れ伏す。

『オオオオルハイル、ブリタアアニアニア!!』

それは巨大な円状の兵器だった。

四肢の概念は存在せず、あるのは五基の巨大なスラツシユハーケン。

それを操るのは――。

『おや？ 貴方様は、ゼロ!! 何たる僥倖！ 宿命！ 数奇!!』

その男は狂った様に言葉を紡いだ。

その言葉の選択はとても正気の者の言葉は思えない程、支離滅裂で、狂氣的だった。

『まさか、オレンジか!？』

その単語に、オレンジ――、ジェレミア・ゴツドバルトは身体を震わせ、怒りを露わにする。

『オ、オオオ、オオオオ…、お願いです。死んでいただけますか?』

ジェレミアの怒りを体現するかの様に、その円状の兵器は自らを回転させながら、ガウエインへと迫る。

『あいつを叩いてアルカの安全を確保する!!』

「分かっている!!」

正面から突っ込んでくるジエレミアを、ハドロン砲で迎え撃とうとするが、速度はあちらの方が上。

反応しきれず、ガウエインはそのまま、上空へと押し出された。

『ゼロ、私は、帝国臣民の敵を排除せよ。ならばこそ、オールハイルブリタニア!!』
『ええい、邪魔をするな!!』

「……、今のは……」

倒れた衝撃で少しばかり意識が飛んでいたらしい。

アルカはゆっくりと立ち上がり、空を見上げる。

「確か、ナイトギガフォートレス……。」

嚮団に居た頃、何処かで資料を見た気がする。

操縦を生体電気で行う、機動兵器。

「……早く、加勢しない、と。」

自身の身体に鞭を打ち、無窮へと向かう。

コックピットの席に座り、起動させると、丁度ルルーシユからの通信が入ってきた。
『アルカ、無事か!?今そっちに向かっている!大人しく…。』

「ナイト…、さっきの、機体は?」

『ん?ああ、ジエレミアなら撒いた。それよりも——。』

「なら、先に向かつて、神根島に…、後から、私も行くから。」

『何…?』

「今から、こつちに戻ってちゃ…、時間、かかっちゃうよ。……大丈夫、今の私でも、移動位は、出来るから。」

『……………。』

時間にして一瞬の間。

しかしアルカにとっては、長い時間が経ったような、そんな気がした。

『——分かった。』

「ふふ、ありがとう……。」

結局、ルルーシユはアルカの提案を受け入れた。澁々と言った様子ではあったが。

アルカが頑固な事を理解しているのか、はたまたC・C・に何か言われたのか。

それをアルカは知る由も無い。

それでも、自然と感謝の言葉が零れた。

妹の我儘を聞いてくれた兄に対しての。

アルカのお礼を皮切りに、通信は切れ、コックピット内に沈黙が訪れる。

「…今から行くよ、姉上……………」。

理から外れた二人の兄妹が、今、神が根付く島へと向かう。

◇◇

アルカが去った数刻後、崩壊した政庁の屋上に、1人の青年が降り立った。

純白のパイロットスーツ、日本人にしては色素の薄い髪、緑色の瞳。

枢木スザクだ。

先程とは打って変わり、その顔から怒りは幾分か削ぎ落され、何時もの彼が垣間見える。

それもその筈、今の彼は様々な人の想いを背負って、この戦場に立っている。

怒りのままに、その力を振るっていた時とは、違う。

ロイドやセシルに助けられ、生徒会のメンバーに背中を押され。

独り善がりの戦いでは無くなったのだ。

そして、彼をこの場に呼び出した人物も、また——。

「せ、戦況は、我が軍に有利だ……………」。

コーネリアは息を切らしながら、そう告げる。

確かに彼女の言う通りだろう。

司令塔であるゼロはこの場から離脱し、黒の騎士団の主力である藤堂達は、政庁の防衛装置に手間取っている。

他のエリアからの増援も間もなく到着する事を考慮すると、ブリタニアは戦線を維持し続ければ勝てる状態だ。

「いいか……、私の負傷は、極力伏せろ……、動揺する……。ギルフォードや、グラストンナイツが……。」

コーネリアに対する忠誠心の高さ。

どの戦場に置いても、有利に働いていたが、それはコーネリアが居るからこそ成り立つ事。

彼女が満身創痍だと知れば、その動揺は軍全体に侵食し、付け入る隙を産んでしまうだろう。

「しかし、お前にだけは……。」

それでもそんな状況で、日本人である——、いや、ユーフェミアの騎士であるスザクに伝えたかったこと。

「神根島……、そこに、ゼロが……。」

「っー」

「それ以外は…、ダメだ、思い出せない……。」

一時的な記憶の欠落。

枢木スザクは、この現象を知っている。

「…ギアス……。」

聞きなれない単語に、コーネリアは一瞬疑問を浮かべたが、再びスザクを見つめ、口を開く。

「お前は、ユフィの騎士なのだろう？ ならば、行ってユフィの汚名をすすぐのだ。」

彼女は信じている。自身の妹を。

ギアスという超常の力の存在を知らないながらも、愚直に。

「…貴公に、略式ではあるが、ブリタニアの騎士侯位を授ける…。これで名実共に、お前は騎士だ……！」

ユーフエミアの汚名をすすぐ為か、弟と妹の行動を止める為か、それとも本当に彼を認めたか。

彼女の真意はスザクには知る由も無いし、今後知る事は無いだろう。

しかし、スザクにはその言葉だけで十分だった。

「行け、枢木スザクよ……！」

「……Yes, Your Highness!」
スザクは、また一人分の想いを背負った。

◇◇◇

黒の騎士団は混乱の渦に落とされていた。

「ゼロ、私はどうすれば……。」

赤いKMFを駆る少女も、その1人。

副指令の扇が凶弾に撃たれ、重傷。

後方のG-1ベースの医務室で、治療中だった筈のアルカの行方が不明。

そして、ゼロの戦線離脱。

度重なるイレギュラーと司令塔の不在により、黒の騎士団の指揮系統は崩れ、徐々に

ブリタニアに押されていた。

「アルカもアルカよ……、どうして戦場になんか……。」

アルカについて分かっているのは、無窮に乗って戦場に飛び出した事のみ。

G-1ベースに居た神楽耶や南達も、行った場所までは知らない様だった。

憧れの対象、旧知の仲間、友人。

今まで彼女を支え、共に歩んできた3人が、一度に離れた事により、カレンはどうし

ようもない孤独感と焦燥に駆られていた。

そんな中、彼女のコックピットに男の声が響く。

『カ、カレン……。』

「扇さん!?大丈夫なんですか!」

息も絶え絶えで、今にも意識を落としてしまう様な、そんな弱々しい声。

『ああ……、それより、カレン……。ゼロを、追え……。』

「あつ……。」

『彼の行動には、意味が、ある筈……。おそらく、アルカも…、彼と……。』

言われなくても追いたいのには山々だ。

しかし、その2人の行き先が、カレンには思いつかない。

「でも、どうやって探せば!」

『そろそろ、見えるだろう……。』

扇の言葉に疑問を持ったカレンだが、その疑問はすぐに解消された。

上空の熱源を捉えたのだ。

そこには、トウキョウ租界を離れていく白い騎士。

「あれは…、ランスロット…?あいつがここを離れる理由なんて……。」

カレンは知っている。

ゼロと枢木スザクの確執を。

スザクのゼロに対する強烈な憎しみを。

『ラクシャータが、中に、発信機……。』

「分かりました。」

余程無理していたのだろう。

先程よりも息が荒く、苦しそうだ。

「補給部隊、接收した空輸機を私に回せ！最優先だ!!」

舞台袖に控えていた少女が、壇上へと続く階段に足を掛ける。

stage 35 照らすは少女、導くは魔王

「やはりここだろうか……。」

神根島の遺跡。

その入口にガウエインを着陸させ、ルルーシユは遺跡を見据える。

「何かお前に関係がある場所か？」

ギアスの模様が描かれた扉の様な石碑。

その石碑に反応したルルーシユとアルカのギアス。

誰がどう考えても、ギアスに、そしてC・C・に關係していると考えるだろう。

ギアスを暴走させるまでに使い続けたルルーシユでさえ、ギアスについて知らない事

は多い。

目の前の少女が口を開けば、その問題も解決するのだが……。

「()は知らない。」

予想通りと言うべきか、少女の口から紡がれた言葉は、ルルーシユの疑問を完全に解決するものでは無かった。

「……ふん、他にもあるという事か。」

長いとも短いとも言えない期間だが、ルルーシユはC・C・の事がある程度は理解している。

この口ぶりの、これ以上聞いても何も喋らないだろう。

「ナナリーを攫ったやつはギアス能力者か？」

「そこまでは分からない。」

彼女の言葉を聞き、ルルーシユは疑いの視線を一瞬向けるものの、すぐに取りやめた。

「本当だ。」

彼女のその瞳に、声音に、彼女の全てに、真実味が帯びていたからだ。

それに彼女は、共犯者である限り、嘘を付かない。

そこだけは、ルルーシユも最初から信用していた。

「信じよう……。少なくとも、我々の共犯関係はまだ続いているのだから。」

一言で済む事に、あれこれと理屈をつけるのは彼の性格故か——。

C・C・はそんな彼を見て、ほんの少しの笑みを浮かべ、「ありがとう」と呟いた。

その時、遺跡の方から、何か伸びてくる。

それは地に這う蛇の様にも見えるし、浜辺を覆う波の様にも見えた。

「っ!!」

一早く気付いたのはC・C・だった。いや、彼女でなければ気付けなかった。

「どうした?」

そう疑問を口にした時、もう既にルルーシユの思考は絡めとられていた。

「何?!これは!!」

精神が肉体から切り離される。

全身から力が抜けるような感覚に襲われ、深い海の底に沈んでいく様だった。

「落ち着け……これは侵入者に対してのトラップ……。作動させた奴が……。」

ナナリーを攫った犯人だ。

そう口にしようとした時、C・Cの表情は悲痛に染まった。

(…開かれ、る………)

ルルーシユの見ていた光景が、巡るましく変化する。

まず最初に見た光景、そこは戦地だった。

沢山の人々が命を散らし、硝煙の臭いが立ち込める戦場。

そこだけ見れば何も珍しいことでは無い。

現代に置いても、戦争が続いている国だって幾つもあるし、ルルーシユ本人だってこうしてブリタニアと戦っている。

しかし、現代の戦場とはあまりにもかけ離れていた。

戦車や飛行機、歩兵の持つ銃、様々な兵器の形式が古いのだ。

ルルーシユが持ちゆる知識の中で、この兵器の形式が当てはまる時代は約100年前、第一次世界大戦。

その硝煙と土埃が充満する戦場で、この場に似つかわしくない1人の少女が居た。

(あれは、C. C. !?!いや、しかし……。)

砲撃による爆発から逃れる為、少女は塹壕ざんごうへと飛び込む。

先程まで少女が居た地上が爆風に晒され、少女へと土の雪崩が降りかかる。

一命を取り留めた、安堵の息を吐くものの、ここは戦場。すぐに次の死が、少女の前に現れる。

「何だお前はー」

それは兵士だった。

何処の国の兵士かは分からない。

だがその兵士の手には銃が握られ、その目は殺意で満ちていた。

ここは戦場だ、兵士がその後に取った行動は咎められるものではない。

自分達の領域に、少女とは言え、見知らぬ人間が入り込んだのだ。

当時の誰もが同じ行動を取るだろう。

それが戦争の、戦場のルール。

理不尽なルールが弾丸となって、少女の額を貫いた。

「あつ、あああああああああ!!!」

少女の絶命と共に、その光景は終わりを告げた。

その後も目まぐるしく視界は変化していく。

火刑に処される少女。

首を切り落とされる少女。

アイアンメイデンに詰められる少女。

民衆に擲り殺しにされる少女。

全ての光景が、同じ少女だった。

全ての光景が、少女の悲鳴に満ちていた。

「やめろ……、やめろおおおおお!!!」

ルルーシユの絶叫が響く。

彼は悟った。

これは記憶だ、と。

C・C が今まで経験してきた、死の記憶。

あまりにも見るに堪えない光景に、ルルーシユは目を背ける、が。

「……な、に……。これは……。」

次に待ち構えていたのは、今までの死に溢れたものでは無かった。

それはとある一室だった。

広めのベッドと机、それと部屋の隅に本棚。

なんでもない素朴な部屋だった。

その部屋のベッドの上に、2人の少女が向かい合っていた。

1人は言うまでも無く、先ほどの光景から何度も目撃した少女。

もう1人は――。

「あれは、アルカ……？」

少女、と呼ぶにはあまりにも幼かった。

淡いミルク色の髪を揺らし、笑みを浮かべながら少女に向き合っている。

目の前の幼いアルカはルルーシユの知る彼女そのものだった。要するに、母であるマリアンヌがまだ生きていた頃の出来事だろう。

「ありがとう。」

それは何でもない、純粋な感謝の言葉だった。

「またね、C. C. !」

それは何でもない、別れの挨拶だった。

「最近C. C. に会える時間が、私の楽しみなんだ！」

それは何でもない、少女の純粋な――。

そこから先の記憶には、常にアルカが居た。

彼女に言葉を投げかけるアルカは、常に笑顔だった。

その笑顔にも、言葉にも、決して裏は無く。純粋に、少女と過ごす時間を楽しむものだった。

「不老不死？ふふ、なにそれー。」

「私は冗談で言った訳では無いんだがな。」

ケラケラと笑うアルカに、少女は呆れた表情を浮かべながら、笑みを作る。

「まあいい。もし、もしもだぞ、アルカ。私が本当に不老不死だとしたら、お前はどうかする？」

そういう少女の顔は、何処か不安げだった。

そんな少女の様子を気にすること無く、アルカは口を開く。

考える素振りも見せず、即答だった。

「C. C. が死んじゃうその日まで、一緒に居るよ。」

さも当然と語るアルカの言葉に、C. C. は言葉を詰まらせた。

「おい…、人の話を聞いていたか…？不老不死だぞ、死なないんだ。歳をとつても、誰かに撃たれても、決して。私が不老不死である限り、お前の方が先に…。」

「甘い、甘いね、C. C.。」

「は？」

「不老不死がこの世界に本当に存在するだとしたら、なる方法も、逆に殺す方法もある筈なんだよ。この世に説明のつかない事象なんて無い、って兄上も言っていたし。」

それは幼子ながらの夢物語だったのだろう。

「もしなれるのなら、私もなつて世界が朽ちるその日まで一緒に居る。もしなれないのなら、殺す手段を見つけてあげる。貴女を殺して、私も死ぬ。」

「……………」

ああ、勿論。C・C. が生きていっていうなら殺さないよ！つとアルカは慌てて自身の言葉に補足を入れる。

「そんな事考えちゃうくらい、C・C. と過ごす時間が好きなんだ。私は。」

「そうか。……………」

視線を外し、C・C. は俯く。

アルカからは見えなかっただろう、その瞳には確かに、濡れていた。

C・C. はアルカに悟られない様、涙を拭い、いつも通りの笑みを浮かべて彼女を見る。
据える。

「ふ…、お前……。将来、重い女になりそうだな。」

「な、なんですと…!？」

それは魔女と少女の、何でもない光景。

この光景以降も、C・C・とアルカの軌跡は続く。

全てが良い事だけでは無かった。時にはアルカが顔を曇らせる出来事もあった。

それでも、何が起きててもアルカはC・C・の傍からは離れなかつたし、C・C・もまた同様だった。

アルカの声が、C・C・を呼ぶ声だけが、この場に満ちていった。

「C・C・…、これは、お前の……………」

気づけばルルーシュは何もない世界に居た。

地平線も無く、空も地も無く。

ただただ続く真つ白な世界。

彼のすぐ目の前には、記憶の主、C・C・。

「私には人間としての記憶はもう残っていない。もう亡くしてしまっただよ、果てる事のない時の流れの中で。」

C・C・はただただ、寂しそうに語る。

「私は独りだった。優しくしてくれた人も、お前の様に契約した者も、最終的には私の手を振り払った。私に憎しみの言葉を投げ掛けながら朽ちていった。本当の意味で、私と共に歩んだ人なんて居なかつた。…そう、あいつに出会うまでは……………」

C・C は笑みを零す。

作った笑みでは無い。本当に、自然と零れた笑みだった。

「分かるだろう？ ルルーシユ。あいつは、私の全てなんだ。この長い時間の中で初めて出会った光。マオに私が居た様に、私にとってはアルカが、アルカだけが……。」

「アルカだけでは無いだろう。」

ルルーシユの言葉に、C・C は目を見開く。

「俺とお前は共犯者。在り方は違えど、俺もお前と共にある。……それに、お前にやるにはアルカはまだ幼過ぎる。兄としてはまだまだ不安が残るからな。」

C・C の業をアルカー人に背負わせたく無かったのか、はたまた契約からの義務感なのか。

それはルルーシユ本人にしか分からない。

いや、もしかしたら彼も明確に言語化は出来ないかもしれない。

「ふ……、こんな時によく言う……。……この、シスコンめが。」

暗がりを進む二人の少女を導く様に、少年が加わった。

次に目を開けた時には、現実の光景が広がっていた。

「C・C、無事か？」

「誰に向かって言っている。」

お互いの安否を確かめるだけの問答。

いつも通りの口調に声音。

しかし、そこには確かに信頼があった。

共犯者としての信頼が。

トラップを掻い潜り、遺跡に意識を向けたその時、後ろから迫る死をC・C・は察知した。

視線を後ろに向けると、ガウエインに向かって伸びてくる一基の巨大なスラツシユハーケン。

「ゼロ、私です！ 懺悔は今!!!」

そこにはトウキョウ租界で撒いた筈のジエレミアが、KGFが居た。

（間に、合わない——!）

トラップに気を取られ、気付くのが遅れた。

スラツシユハーケンは、機械の様に正確に、ルルーシユ達の居るコックピットへ向かい、それを貫く——。

「ぬ……う？」

事は無かった。

スラッシュハーケンがガウエインを貫く事無く、ケーブル毎切断された。

『……間に、合った……………!!』

少女の苦しそうな声が、コックピット内に響く。

「アルカ!!」

ガウエインをKGFから守る様に、無窮は二機の間に立つ。

『……ああ、良かった……………、はっ、ぶ、じ……………?こっち、に来る、途中、あいつが、見えた……………、飛ばして……………、ゴホッ、っ……………、ハッ、ハッ……………。』

何とか言葉を紡ごうとしているものの、身体が限界なのだろう、トウキョウ租界に居た時よりも、調子が悪そうだ。

『私の、素晴らしき、雪辱!邪魔するお人は!』

ジェレミアの声に呼応するかの様に、KGFの動きは苛烈さを増し、こちらに迫ってくる。

「っ!っ!こいやっ!!」

アルカの状態を考慮すると、このまま戦闘を行うのは得策とは言えない。

そう判断したルルーシユは操縦桿についているボタンを押し、出力を最大まで上げる。

「C・C!!」

「ああ、分かっている!!!」

ガウエインは一瞬の内に、無窮を底う様に前へ移動し両肩の砲門を開ける。
ハドロン砲。

全てを破壊する黒閃が、KGFに向かって放たれる。

『姑息！孤立！小癩！』

恨みが強すぎる故か、ガウエインに真つ直ぐ向かっていたジエレミアは反応しきれず、ハドロン砲をまともに正面から受ける。

その衝撃から浮力を失い、KGFは海へと落ちていく。

「……まともに喰らって原型を保っているとはな……。」

感心した様にC・C・は声を漏らす。

『……………あの、兵器……………、ランスロットと、同じ…、防御装置が、ある…、らしい、から……………』

「それならまだ動ける余力がある、ということか。」

C・C・はしばらく考えるような素振りをした後、再び口を開いた。

「お前達、先に行け。あいつは私が抑える。」

『……………しー、つー……………?』

「しかし、それでは!!」

アルカとルルーシユの、困惑の声が上がる。

「大丈夫だ。……………いや、少し不安だな。」

『……………はっ、しー…っー……………!!私も、一緒に!!』

力の入らない身体に鞭を打ち、アルカは叫ぶ。

アルカの声に、C. C. は少し寂しそうな表情を浮かべたものの、彼女はそれを否定した。

「駄目だ……………アルカ、お前言っていたじゃないか。兄と姉を守りたい、と。その想いを、私は好ましく思っている。今のお前には、やるべきことがあるだろう?」

『……………!』

「大丈夫さ、私は死なない。」

『……………わか、った……………。』

最後まで健気な少女の姿に、C. C. は笑みを深くする。

「勝てよ、お前達。自らの過去に……………。そして、行動の結果に。」

それは純粋な彼女の願いであった。



この場を去っていくガウエインを2人は見送る。

彼女は死なない。それは分かっている。

ただ、死なないから、と言って切り捨てる程、2人は非情では無かった。

『……行くか。』

仮面を被ったゼロルルーシユは、自身に横抱きにされている少女に声を掛ける。

「う、うん……。な、なにも、お姫様抱っこ……。じゃなく、ても……。」

弱々しく抗議する少女を気にも留めず、アルカを見つめた。

『そう気にするな。立つのもやつとの状態だろう……。そうだ、アルカ。』

「……。？な、に」。』

呼びかけられたアルカは、ゼロの方へ顔を向ける。

そこには無機質な仮面が広がっていた。

しかし、その左目の部分。

その一部分だけ、本来の彼の顔を覗かせ、赤い瞳がアルカを見つめていた。

』

・
・
・

石碑へと続くトンネルに、2人分の足音が響く。

『大丈夫か？』

「大丈夫です……、だから、先行って……。」

先に行くのは仮面の男。

その足はやや急ぎ気味で、奥に佇む遺跡へと向かっている。

それを追うのはまだ幼い少女。

苦痛に顔を歪めながらも、ゆっくりと足を運んでいる。

少女——、アルカが壇上へと続く階段付近に辿り着いた頃、仮面の男——、ゼロは石碑へと到達した。

『そこで休んでいるんだ。』

機械交じりの、しかし少女を気遣う声が響く。

(目的は俺かアルカか……、C. C. という線もあるが……。)

ゼロは石碑を見上げながら、考える。

自身の妹を攫ったやつ目的は？

现阶段の情報量だとどうしても犯人の目的が不鮮明なままだ。

考えるのを止め、ゼロは石碑に触れようとする、が。

「……………あつ……。」

一発の銃声と共に、少女が地に膝を付いた。

少女の短い悲鳴と銃声に、ゼロは石碑に向けていた身体を翻す。

そこには血が流れ出る肩を抑えながら、苦痛に顔を歪めているアルカ。
そして、その後ろには。

「ゼロ。」

枢木スザクが居た。

S t a g e 3 6 二人だけの舞台

「ゼロ。」

少年の憎しみが込められた静かな声が木霊する。

その手に持つ銃は、仮面の男に注がれていた。

『ユーフェミアは罪無き日本人を皆殺しにした、君はそんな女を……。』

「便利な力だな、ギアスとは。」

ゼロの言葉を遮り、スザクは確かに口にした。

ギアス、と。

『何……？』

「……！」

知る筈の無い少年から発せられた言葉に、ゼロとアルカは驚愕を露わにする。

「自らは影に隠れ、責任は全て他者になすりつける。傲慢にして卑劣。それがお前の

……、いや、お前達の本質だ。」

スザクはそう言葉を紡ぎながら、ゼロが佇む壇上へと上がる。

彼の言葉の矛先はゼロにだけ向けられたものでは無かった。

階段の手前で痛みに悶えている少女——、アルカに対しても向けられていた。

「……いか、せるか………!」

震える身体を必死に抑えながら、アルカは懐から銃を取り出し、スザクへと向ける。

しかし、スザクは一瞬の内に振り向き、銃を持つアルカの手に向かって発砲した。

彼女の手から銃は弾き飛ばされ、取りに行く体力も残っていないおアルカは、ただただ、唇を噛みしめながらスザクを見つめていた。

「……君は何で生きているんだろうね。」

『何……?』

スザクの言葉はアルカに向けて放たれていた。

「式典会場で僕は君を見た。瀕死の状態で、カレンに抱えられていた。そう、君はユフィと同じ状況だった筈だ。なのに被害者であるユフィは死に、加害者側である君は生き残った。何故、逆では無かった。」

『スザク……、貴様……!!』

「純粋な者だけが哀しみ、卑劣な君達は影で笑う。何時もそうさ、お前達が、ゼロが関わると。」

しかし、とスザクは言葉を続けた。

「俺はそんなお前達の世界を、認めない。」

その声音は相も変わらず淡々としていて、静かなものだった。

しかし、そこには確かに存在していた。怒りが、哀しみが、憎しみが、絶望が。

「カレン、君もゼロの正体を知りたくないか？」

ここにもう一人、新たな人物が加わった。

赤いパイロットスーツに身を包み、スザクを追うような形でこの場に足を踏み入れた

少女、紅月カレン。

「何を今更……！」

「君にも立ち会う権利がある。」

スザクは躊躇いなく、引き金を引いた。

放たれた銃弾は、真っ直ぐとゼロの仮面に向かっていき、そしてその仮面を打ち砕いた。

仮面の下から出てきた素顔は、この場に居る全員が、良く知っている人物であった。

その人物はカレンにとって、学友であった。

その人物はスザクにとって、親友であった。

その人物はアルカにとって、兄であった。

ルルーシユ・ランペルジ。

「信じたくは、無かったよ……………!」

その顔を見て、スザクは初めて感情を表に出した。

その表情は哀しみに満ちていて、今にも泣きだしそうだった。

「何で……………! どうして……………!?!」

その顔を見て、カレンは驚愕のあまり、その場に座り込んだ。

最早、銃を構えることも叶わず、その注意はスザクから外された。

「…お、おにい、ちゃん……………?」

その顔を見て、アルカは自身の身体の傷の事も忘れ、呆然としていた。

その意識はルルーシュに、そして共に過ごしてきた日々の記憶に向けられていた。

「そうだ、俺がゼロだ。黒の騎士団を率い、神聖ブリタニア帝国に挑み、そして、世界を手に入れる男だ。」

三者三葉の反応を見下ろしながら、ルルーシュは笑みを作り、雄弁と語る。



世界。

この男は何を言っているの？

カレンはそう思った。

日本の為に戦っていると思っていた。

ブリタニアを憎む気持ちも同じだと思っていた。

しかし、彼は今、何と言った。

「世界を手に入れる」

確かにそう、口にした。

違ったのだ、最初から。

ゼロ、ルルーシュは、カレン達に手を貸したあの時から。

決して同じものを見ておらず、同じ意志も持っていなかった。

言わば、カレンは…、黒の騎士団は彼の野望の為の道具。

その事実には、カレンの覚悟は、ゼロへの忠誠心はブレる。

「貴方は私達日本人を利用していたの…？私の事も……。」

「結果的に日本は救われる、文句は無いだろう。」

カレンの疑問にルルーシュは間髪入れずに答えた。

否定して欲しかった。

仲間と言って欲しかった。

そんなカレンの想いは、当の本人によって一蹴された。

「っ……………！」

声にすらならない哀しみが、カレンを支配する。

少女はまた一つ、絶望を知った。



「な、なんで…………、お兄ちゃんが…………。」

アルカは困惑の色を隠そうともせず、震える声で言葉を発する。

「……………」

そんな妹に対し、ルルーシユは何も語らない。

(ゼロの、正体を知らなかった…………？いや、しかし。だとしたら…………。)

そう、ここでスザクにとって意外だったのは、ゼロがルルーシユである、妹のアルカが知らない事だった。

カレンの絶望に気にも留めなかったスザクは、意識を僅かにアルカへと向ける。

(ゼロの正体を知らないにも関わらず、ギアスの事は知っている様子だった…………。)

アルカの持ちゆる情報が、事実が、全てがちぐはぐだった。

歪んでいた。

何故気付かなかった。

アルカはそう思った。

誰よりも気付ける立場に居た筈だ。

ゼロの活動と、ルルーシユのスケジュールの一致。

C・C・の存在。

そして、ギアス。

いくつも要素はあった、それにも関わらず、今の今まで気づく事が出来なかった。

ナリタでの戦いは？

神根島で、ユーフェミアとゼロと共に行動していたあの時は？

そして、マオの襲来の時は？

思い返せば幾つもの、決定的な瞬間があった。

それなのに。

「……………うっ……………！」

頭が痛い。

身体が重い。

気を抜けばそのまま意識を手放してしまいそうだった。

考えれば考える程、思考は混乱していく。

ハンマーで殴られたような、鈍い痛みが続き、意識が朦朧とする。何か足りない。

そう、何かが。

頭に靄が掛かっている様だった。

肝心な部分が、不鮮明だった。

痛みの感覚が、段々と狭くなっていく。

「……おにい、ちゃん……」

最後に見た光景は、壇上で対峙する兄とスザク。

そこでアルカは意識を失った。



「アルカ……」

目の前で倒れた少女に、カレンは弱々しく声を掛ける。

しかし、反応は無い。

肌は青白く、呼吸も弱々しい。

死体と錯覚しても可笑しくはない程、アルカは弱っていた。

そんな二人の光景を、壇上上がったルルーシユとスザクは一瞥する。

二人の少女は舞台から外れた。

残るは二人の少年。

終幕に向け、少年達は口を開く。

「早く君を逮捕するべきだったよ。」

「気づいていたのか？」

「確信は無かった。だから否定し続けてきた。君を信じたかったから。」

ゼロと初めて言葉を交えたあの時。

式根島でゼロが発した「分からず屋」という言葉。

ゼロの言動、行動が、スザクの知るルルーシユに似通う所がある、というのは早々に気付いていた。

しかし、スザクにとってすれば、ルルーシユは大切な親友。

一縷の望みに掛けたのだ、しかしそれも徒勞に終わった。

「だけど君は嘘を付いたね。僕とユフィに、ナナリーに……!!」

「ああ、そのナナリーが攫われた。」

「えっ?」

ルルーシユが仮面を取った理由。

戦う理由。

それは全て、妹達が平穩に暮らせる世界を創る為。

アルカはルルーシユと共に歩み、今もこうしてこの場に居る。

しかし、もう一人の妹、ナナリーは？

他者の悪意に巻き込まれ、ルルーシユの前から姿を消した。

どちらが欠けてもダメだった。

その点だけは、ルルーシユは何処までも強欲であり、人間そのものだった。

「スザク、一時休戦といかないか？ナナリーを救うために、手を貸して欲しい。俺とお前、二人一緒なら、出来ない事なんて……。」

学校で言葉を交える何時もの調子で、ルルーシユはスザクに語り掛ける。

それにスザクは我慢ならなかった。

周りの人間を、自分自身を裏切り続け、他者に罪を擦り続けてきた男が、手を取らないかと誘ってくるのだ。

スザクは彼の在り方を、認める事は出来なかった。

「甘えるな……！」

「っ!!」

「その前に手を組むべきは、ユファイだった！君とユファイが力を合わせれば、世界を……。」

変える事が出来た。

スザクに言われなくとも、ルルーシユが一番分かっている。

分かっているからこそ、手を取るつもりだった。

しかし、それを、世界は許さなかった。

「全ては過去、終わった事だ。」

そう、もう過ぎ去ってしまった出来事だ。

今更そんなたればを語ったところで、何も変わらない。

せめてもの贖罪だった。

自らが起こしてしまったあの事件への。犠牲になったユーフェミアや、日本達への。

「過去!？」

ルルーシユの言葉に、スザクは驚愕を露わにする。

この男は今、何と言った。

あの出来事を、大勢の人間が、ユファイが犠牲になったあの地獄を、そんな簡単な言葉で切り捨てるのか。

「お前も父親を殺しているだろう! 懺悔など、後でいくらでも出来る!!」

父親を、枢木ゲンプを殺めた事を、スザクはずっと後悔しながら生きてきた。

自身の命を蔑ろにしても、罪を償おうとしていた。

……！」

ルルーシユの願いを、妹達に対する想いを、スザクは好ましく思っていた。しかし、その実態は違った。

この男の願いは、それが行きつく先にあるものは崩壊のみ。そんな願いを、誰が認めようというのだろう。

「馬鹿め、理想だけで世界が動くものか！」

純粹な願いだけでは何も変わらない。

ルルーシユは母を失ったあの日、世界は残酷である事を知った。

だからルルーシユは非情を貫き、人間性を捨てた。

それに対してアルカは理解を示し、願いを叶える為、共に歩んだ。

それを当事者でもないスザクに、傍観者であった男に否定された。

比較的冷静であったルルーシユの頭にも血が昇る。

「さあ、撃てるものなら撃つてみる！この流体サクラダイトをな！」

懐から取り出した小型爆弾を、自身の身体へと取り付ける。

そう、ルルーシユにとって、人間とは妹達のみ。

黒の騎士団も、カレンも、ルルーシユ自身すらも、願いを叶える駒に過ぎない。

「俺の心臓が止まったら爆発する。お前達もおしまいだ！」

「貴様……!!」

「それより取引だ。お前にギアスを教えたのは誰だ？そいつとナナリーは!?」

継る様な思いで、自身の命を差し出しても、スザクに問う。

それほどもまでに、ナナリーの存在は、ルルーシユにとって大きいものであった。しかし。

「ここから先の事は、お前には関係ない!!」

スザクはそれを一蹴した。

「お前の存在が間違っていたんだ！お前は世界から弾き出されたんだ!!」

初めて友達として、自身の存在を認めてくれた男からの否定。

自身の身を呈してでも、ルルーシユの命を守ろうとしたアルカの想いの否定。

そして――。

「ナナリーは俺が!!」

妹の隣に居たいというルルーシユの願いの否定。

スザクの放つ言葉の全てが、世界が、ルルーシユと言う個を否定する。

それにはルルーシユも怒りを露わにした。

スザクと同様に、その顔は怒りに歪み、殺意に溢れていた。

「スザク!!!」

「ルルーシユ!!!」

怒りに支配された二人の少年は、それぞれに銃口を向け――。
二つの乾いた銃声が、洞窟内に木霊した。

▼
ルルーシユの放った弾丸は、スザクが身に着けているインカムを掠めた。

スザクの放った弾丸は、ルルーシユが手に持つ銃を掠めた。
手から伝わる衝撃に、ルルーシユは僅かに後ずさる。

それをスザクは見逃しはしなかった。

一瞬の内に距離を詰め、ルルーシユを組み伏せる。

「……………ゼロ!!」

思考が現実に取り戻されたカレンは、思わず口にした、己が先導者の名を。

「こいつはルルーシユだ!!」

「うっ……………」

スザクの一喝が、再びカレンの動きを止める。

「日本人を…、君を利用した男だ！そんな男を守りたいのか、君は!!」

スザクはルルーシユに取り付けられた爆弾を取り外しながら、カレンに問う。

そこまでの覚悟はあるのか、と。

「カ、カレン……………」

取り押さえられているルルーシユは、息を絶え絶えに、彼女の名を呼ぶ。

「な、何をしている……………、君はゼロの、俺の親衛隊の隊長だろう……………。役割を果たせ……………」

さあ、早く……………」

「ルルーシユ！君はそうやって、まだ……………!!」

呼びかけられたカレンは、一瞬困惑の色を浮かべた者の、身を翻して走り出す。

壇上の下で、今もなお意識を失っているアルカを抱え、洞窟を後にする。

「フ……………」

そんな彼女を見て、ルルーシユは何処か満足気な笑みを浮かべた。

「ゼロ……………、君を終わらせる。」

親友を見下ろすスザクの瞳には、何処までも冷たかった。



ユーフェミアによる大量虐殺によって引き起こされた第一次トウキョウ決戦——

——通称、ブラックリベリオンはゼロの捕縛により終息した。

日本は二度目の敗北を味わい、とりわけ他エリアよりも活発だった反ブリタニア運動も息を潜めた。

その後のエリアーでは、日本人を徹底的に排除する選民思想が根強く反映され、日本人達に対する扱いは、クロヴィス生前よりも苛烈さを増した。

その当時、全ての日本人が地獄を味わい、世界を憎んだ。

日本は完全に、ブリタニアに屈したのだ。

英雄が復活する、その日まで。

—— A・A 著書 「帝国の崩壊」第5章より

last stage 愛シキ世界二、喝采ヲ

神根島には、夕日が差していた。

戦地から遠く離れたこの場所で、カレンは浜辺に座り込み、海を眺める。

カレンの隣には少女が眠っていた。

先程よりも、幾分か表情は穏やかだった。

どれくらいの間が経ったのだろう。

カレンは考える。

▼

日が完全に昇った頃、ランスロットは神根島を飛び立ち、それをカレンは目撃していた。

ゼロを、ルルーシユを完全に捕らえたのだろう。容易に想像出来た。

ランスロットが完全に視界から消えたのを確認し、カレンはアルカを連れ、湖へと足を運んだ。

彼女の服を脱がし、傷口を水で濯ぐ。

アルカの身体は酷いものだった。
腹と肩に出来た銃創。

ラクシャータのが施した処置は最早意味が無く、完全に傷口が開いていた。

「……………」

黙々とカレンは彼女に応急処置を施していく。

素人目にも分かるほど、彼女の応急処置は的確で、手早かった。

「貴女に教えてもらった応急処置が、まさかこんな形で役立つなんてね……………」

そういうカレンの表情は、見るに堪えないほど、やつれていた。

それでも、彼女は手を止めない。

目の前の少女を救うため、自らの役割を果たす為。

日が暮れるまで、カレンは一心不乱に、応急処置を施していった。



今もなお、目を覚まさないアルカを見つめ、カレンは呟く。

「アルカ、貴女は何の為に戦っていたの……？ 私達の為？ 自分自身の為？ それとも——

——」

ルルーシユの為？

そう問いかけようとした時、この場にもう一人の人物が加わった。

「全く、守る為とはいえ、無茶をするものでは無いな…。水圧に押しつぶされるなんて二度とごめんだ。」

そう文句を口にしながら向かってくる人物——、C. C. にカレンは意識を向ける。

そのパイロットスーツと髪は水を含み、身体に張り付いている。

不快感を前面に出しながら、C. C. はカレンの元へと歩を進める。

「C. C. ……。」

「何だ、お前も来ていたのか。……ゼロはどうなった？」

「……………彼は、…ルルーシユは……………」

カレンは歯切れ悪く、自身の身体を抱きしめながら呟く。

「そうか…。お前は知ったのだな、全てを。」

僅かに目を伏せながら、C. C. はカレンの横で眠るアルカを横抱きにし、再び歩み始めた。

「何処へ…………？」

「いつまでもこうして、黄昏ているつもりか？場所を移すぞ。その方が、ゆっくり話せる。」



「……は……。」

目を覚ました時に視界に入ったのは、品のある装飾が施された天井であった。

この天井を、少女は、アルカ・アングレカムは知っている。

「カレンの、家……？」

「気づいたのね。」

すぐ横から声を掛けられ、アルカは身体を起こし、声の主へ視線を向ける。

「カレン……。」

そこにはカレンが居た。

伸縮性のある部屋着に身を包み、落ち着いた様子であった。

「私はどうして、ここに……。」

「……それは——。」

「おい、カレン。」

アルカの疑問に、カレンは答えようとするも、もう一人の声に遮られ、それは叶わなかった。

「ルルーシユのクレジットカードが止まった。これではピザが頼めない。お前のを寄越せ。」

C・C・だ。

ぶつくさ文句を言いながら、カレンの私室へと入って来る。

「渡す訳無いでしょ！このピザ女!!」

そんな彼女の横暴に、カレンは怒りの声を上げる。

アルカが良く知っている光景だった。

彼女にとっての何でもない日常。

C・C・の横暴にルルーシュが怒り、それを苦笑いしながら眺める自分。

「……お兄ちゃん……」

ふと、そう口にしていた。

自然と零れた弱々しい声だった。

そんなアルカを見かねて、C・C・はアルカの居るベットへと足を運び、腰掛ける。

「アルカ、傷の具合はどうだ？身体の調子は何とも無いか？」

先程までの横暴な態度からは想像出来ない程優しく、C・C・はアルカの頭を撫でながら問う。

「……傷……」

そう呟きながら、自身の身体へと視線を向ける。

ユーフェミアに撃たれた箇所。

石碑でスザクに撃たれた箇所。

行政特区、ギアスの暴走、神根島、ナナリー、スザク、ゼロ、そしてルルーシュ。傷を見て、様々な光景が、アルカの脳裏に過ぎる。

「…そうだ、ゼロ……、兄上……。」

声を震わしながら、アルカはそう呟き、C・C.に縋り付いた。

その姿は主に捨てられた犬の様に、弱々しいものであった。

「なんで、私、気づかなかったんだろう……。兄上……。C・C.、ゼロの正体は、兄上、だったの……。なんで、どうして……。。」

「お前……。何言ってる……。。」

要領の得ない少女の言葉が、部屋に木霊する。

そんなアルカを見て、C・C.は怪訝な表情を浮かべた。

「…いや、待て。そうか、ルルーシュめ。回りくどい事を。」

何かを納得した様にC・C.は独り言をつぶやく。

「落ち着け、アルカ。今戻してやる。」

そう言ってるC・C.はアルカの顔に手を沿え、その唇を彼女のものへと近づけ――

「…え、え？ちよつと、こんな時に何やってるのよ！しかも女同士で!!」

その距離を零にした。

突然の奇行に、カレンは顔を赤く染めながら、声を上げる。

カレンの困惑を余所に、二人は口づけを続ける。

(……………これは……………)

アルカの頭に掛かっていた靄が晴れていく。

抜けていた重要な記憶が、彼女の元へと帰る。

ゼロの正体に関する記憶を、一切忘れろ——。

洞窟に入る前、確かにそう、ルルーシュに言われた。

その赤く光る瞳を、こちらに向けながら。

タイミングを見計らって、C・Cは唇を離す。

「ハッ……、ハハハ……………。そっか、兄上のギアスか…………。」

乾いた少女の笑い声だけが、室内に響く。

「……………それで、どうして私は……………?」

「私があの場合から連れ出したの。ゼロ……………、ううん。ルルーシュから役割を果たせ、って言われてね。正直、今でもルルーシュの事は信用していないわ。でも、あいつの貴女に対する気持ちだけは、信じてても良いって、そう思えたの。」

開戦を目前に控えた最後のブリーフィング。

カレンはゼロルルーシュにとある任務を任されていた。

それは何が起きようとも、例え、ゼロを見殺しにしても、アルカを守る事。

それが、ゼロから与えられた、カレンの役割であった。

それを聞いたアルカは、驚愕を表情に浮かべていたものの、すぐに笑みを作った。

その笑みは少女らしいものではなく、何処か壊れた人形のような笑みだった。

「…フフツ、ハ、アハハハハハ!!」

少女は笑った。

それはまるで喝采の様だった。

その笑みは何処までも皮肉に満ちていて、何処までもルルーシュに似ていた。

「そうなるよ、私が意識を手放すのも織り込み済みか……。それはそうだよ、意識があつたらカレンにギアスを掛けてでも、残ろうとするだろうし。」

流星は兄上、私の事を良く分かつてる。と、少女は言葉が続ける。

「ああ…、何が二人を守るだ、何がどんな手を使つても、だ。結局、私は、何も出来ず、守られているだけじゃないか……!!」

少女が本来守るべきだった対象は、もう少女の傍には居ない。

兄も姉も、その姿を少女の前から消した。

「ハハツ、そうだ、まだ私は甘かった。自分自身の責任を、全て兄に任せ、流れに身を任

せていた……。ハッ！」

少女は嘲笑う。

自身を、そしてこの世界を。

「ああ、良いよ……。これが世界の選択なら、私はこんな世界、要らない。」

◇◇◇

黒の騎士団は壊滅した。

幹部の殆どは捕らえられ、残る幹部も中華連邦へ亡命。象徴を失った団員達は、その殆どは身を隠し、息を潜めた。

そんな状況の中でも、一部の者はまだ諦めていなかった。

藤堂直属の部下、四聖剣の卜部。

ゼロの懐刀、紅月カレン。

その二人に釣られるようにこの場に参加した複数名の団員。

そして――。

「黒の騎士団は、日本は敗北しました。」

その者たちの前で、口を開く一人の少女。

「ブリタニアが強大だから？それとも、ゼロが戦場が離れたから？……いいや、どちらも

違う。」

淡いミルク色の髪を靡かせ、彼女は雄弁と言葉を紡ぐ。

「私達に覚悟が足りなかったのです。……世界を相手取る覚悟が。」

誰よりもうら若い少女の声に、異を唱える者は居なかった。

「ブリタニアという国は世界そのもの。そうにも関わらず、あの場に居る誰もが、目の前の勝利を掴む為、必死だった。扇も、藤堂も、私でさえも。それでも、ゼロは違った。」

この空間の支配者は少女だろう。

誰が見てもそう思う程、少女の存在感は圧倒的だった。

「私はあの時、ゼロを追いました。そして見た。彼は確かに、次の勝利を得るために行動していた。目先では無く、誰もが想定していなかった、その次を。」

カリスマ。

10も過ぎたばかりの少女の言葉に、大人達が耳を傾けているのだ、少女には確かにそれがあつた。王としての器が。

「戦うだけなら誰もが出来るでしょう。しかし、世界を見据えながら、次への布石を打ちながら戦える人間など、そうは居ない。」

意を決した様に、少女は叫ぶ。

「私達には、日本には、ゼロが必要です！彼無しでは、世界の破壊は叶わない！」

少女の訴えに、誰もが首を縦に振った。

「今日、この場より。黒の騎士団は、日本は再び、反抗の狼煙を上げる。当面の目標は、ゼロの奪還——。」

少女——、アルカは告げた。

「皇アルカの名の下に命じます。その命、私に預けなさい!!」

「「承知!!!」」

物語は次なるステージへ——。

O f f s t a g e

メイドたる者

それはとある一言から始まった。

「メイド？そんなに、あれ、良かった？」

珍しく黒の騎士団の活動も無く、学校も休み。

久しぶりの休日を自室でのんびり過ごしていたアルカは、C・C.の言葉に首を傾げた。

「ああ。普段のお前とはまた違った魅力が出ていて、実に刺激的だったぞ。」

C・C.の言うメイド、というのは、先日の学園祭でアルカが着ていたメイド服の事だ。

「……あの時は恥ずかしかつたけど、そう真正面から褒められると、悪い気はしないなあ……。」

知つての通り、C・C.は素直じゃない。

そんな彼女から、珍しくストレートに褒められたのだ。アルカが浮足立ってしまうのも仕方ない事だった。

「そんなに奉仕、してもらいたいの？」

「それはそうだろう。奉仕こそが、メイドの本懐だ。」

だからC・C・とアルカの意見に妙な食い違いがあるのも、C・C・の厭らしい視線に気づかないのも、仕方のない事だった。

（最近忙しかったもんね……。C・C・がそう言うのも仕方ない事かもしれない…。）

アルカの思考は、実にポンコツであった。

（ああいう従順なやつが乱れるのも、実にそそる。）

C・C・の思考は、実に変態的であった。

「…分かった！ 普段のお礼として、ここは私、アルカが人肌脱ぎましょう！ しばしお待ちを！！」

アルカは無い胸を張って部屋を飛び出す。

そんなアルカを見送り、C・C・は不思議そうな表情を浮かべ、首を傾げた。
「何時に無く、ヤル気だな……。」

◇◇

メイド——。

歴史は古く、それは古代ローマまで遡る。

現代とは違い、奴隷と言う意味合いが強かったが、歴史が進むにつれ、その立場は用人人という形に変化していった。

「まあ、ここら辺の知識はそんなにズレは無いか。」

アルカは先程まで読んでいた本を閉じ、本棚へとしまう。

C・C・C が満足する奉仕をする為、アルカは図書館へと足を運んでいた。

まずは知識としてメイドの事を知っておきたかったのだ。

自身の持っている知識と、世間一般的なメイドの知識にズレが無いことを確認したアルカは、図書館を後にする。

「C・C・C の言うメイドと、私の知るメイドに差は無かった。だとすれば、必要なものは、服と技術——。」

「あれ〜？アルカちゃんじゃん！」

「貴女は……。」

考え事をしながら歩いてきたアルカだが、声を掛けられたことにより、その歩みを止めた。

「こんな所で何してるの〜？」

そこにはアルカのクラスメイドが居た。

名前は——、アルカが憶えている訳が無い。

兎も角、名前は分からないが、顔を見れば誰かは分かる。
彼女は確か、そう。

学園際で行ったメイド喫茶を運営していた中心核の一人。

確か、メイド服を用意したのも彼女——。

「……………メイド服って、残ってますか？」



(良し、首尾は上場。)

手元にメイド服が入った紙袋をぶら下げ、アルカはクラブハウスへと歩を進める。

(後は技術を磨けば——。)

確かこの時間は二階の掃除をしていた筈だ、と彼女は二階へと足を踏み入れる。

そこには——。

「あら、アルカ様。どうかされましたか？」

アツシユフオード家に仕える日本人メイド、咲世子が居た。

「咲世子さん……………、私を…。」

「はい。」

「私を弟子にしてください！」

「……………はい？」

予想もなかったアルカの言葉に、咲世子は気の抜けた声を漏らした。



「よろしいですか、アルカ様。メイドとは、何時いかなる時も、動じてはいけません。」

「はい！」

眼鏡を掛け、教鞭を振るう咲世子の前で、正座をし、熱心に話を聞くアルカ。

「メイドは言わば、ご主人様の抛り所。第二の家の様なもの。必要とあらば馳せ参じ、変わらぬ奉公を提供する……。そういう生き物なのです。」

「はい！」

「アルカ様にはそのお覚悟が垣間見えます……。ならば！後はその技術を身に着けるのみ！」

「宜しく願います！」

アルカはすつと立ち上がり、深々とお辞儀をする。

その姿を見て、咲世子は満足気に笑みを浮かべ、彼女を連れ、この場を後にした。

「何やっているんだ…、あいつらは……？」

その光景を見ていたルルーシユの表情には困惑の色が浮かんでいた。



「アルカ様、いけません。それでは紅茶の味が均等では無くなってしまいます。」

「アルカ様、身体的な疲れを取るのもメイドの務め、私が編み出した秘蔵のマッサージ術をお教えしましょう。」

「アルカ様、メイドとは足音を立ててはいけません。貴女にはこの篠崎流・歩行術を伝授いたしましょう。」

長年の経験で培った自身の技術を、咲世子はアルカに伝授する。

アルカはこれでも、幼い頃は万能と謳われ、数多くの才能を開花させてきた。

常人では考えられない程のスピードで、教えられた技術を自分の物へと昇華させていく。

そして――。

「見事です、アルカ様。見事、たった一日……、いや数時間でここまで……。もう、私に教えられるものは何ありません。後はその定着した技能を培い、仕える主に応じて、

変化させていくのです。」

「ありがとうございます、師匠！」

自身の弟子の成長に感動した咲世子は、思わず感極まってアルカを抱きしめる。

急な咲世子の行動に、狼狽えつつも、アルカはしっかりと、その抱擁を受け止めた。

「何か演劇の練習かしら？」

その光景を見ていた、いや聞いていたナナリーは、一人疑問を浮かべた。

◇◇◇

「お嬢様。ご飯の用意が出来ました。」

「おい、なんだ、そのお嬢様というのは……。」

「では、ご主人様、と。」

「そうではなく!!」

学園祭で着ていたメイド服を再び身に着け、アルカは私の前に現れた。

それは良い。

律儀にアルカは、今日の夜ご飯を用意してくれた様だった。

まあ、それも良い。

こいつの料理は美味いからな。

だが、こいつのメイドとしての在り方は何だ。

常に私の数歩後ろを音も無く追従し、私が立ち止まれば、その後ろに控える。常に一定の距離を置き、必要以上の接触をしない。

これでは――。

(本当の意味でのメイドでは無いかつ!!!)

アルカの姿を再び見ると、実に伝統的なメイドの姿だった。

似合っていない、訳では無いが、学園祭の時よりも華やかさが足りない。

C・C・はここで気が付いた。

アルカの真面目さが、全く違う方向に向いてしまった、と。

(誰だ……こいつに余計な事を吹き込んだのは……。)

C・C・が求めるのは淫らに乱れるメイド姿のアルカ。

何もここまで本格的に、ガチガチにメイドをして欲しいという訳では無かった。

ただの享楽の一環として、着て欲しかっただけだ。

そう脳内で考えつつも、C・C・はアルカの作った料理を口に運ぶ。

「ん、美味い……。」

「恐れ入ります。」

アルカの手料理を、C・C・は全て平らげた。

▼
「ご主人様、お風呂の用意が整いました。」

「ああ……。」

「ご主人様、ハーブティーは如何ですか？」

「頂こう……。」

「ご主人様、具合は如何でしょうか？」

「……んっ。ああ、丁度良い……。」

「では、おやすみなさいませ、ご主人様。」

「お前は どうするんだ？」

「ご主人様が、眠りに落ちるまで、ここに居ます。」

そして、C・C・は静かに目を閉じ――。

(る訳無いだろう!!)

C・C・の意識は、横で佇むアルカへと注がれる。

「ご主人様……？」

アルカは可愛らしく、小首を傾げる。

食事の後、アルカに言われるまま風呂に入り、ハーブティーを飲み、マッサージを施

してもらった。

その全ての奉仕が、所作が洗礼されたものであり、実に居心地が良かった。

(ああ、流された私も悪いさ。しかし、しかしだな！)

本来、満たす筈だった欲を、C・C・は満たしていない。

それが、我慢ならなかった。

「アルカ……、ちよつとこつちへ……。」

「はい……？」

C・C・の言われるがまま、アルカはその身体をC・C・に近づけ、

「わっ……きやつ!!」

そのままベッドに引きずり込まれた。

ベッドに無理矢理引きずり込まれ、髪が乱れたアルカを、C・C・は見下ろす。

「ご主人さ、ま……う？きやつ……。」

アルカはキョトンとした顔を浮かべていたが、それも一瞬の事。

すぐに顔に赤みが差した。

C・C・がアルカの脚の間に、自身の膝を差し込み、奥へと押し当てたからだ。

「ちよ、ま……、つて……。」

アルカの制止の声に気にも留めず、C・C・は膝を押し当てる。

「あ、いや……、ンツ！」

一瞬、アルカの身体が飛び跳ねた、そんな気がした。

「……私が、したかったのは、こういう事なんだけどな……。」

「……え、……えええ、こういう事、つてつまり……、へ、変態……！」

アルカは顔を真っ赤にし、C・C・にそう抗議する。

ああ、そうだよ、これが見たかったんだよ。

C・C・はより一層、笑みを浮かべた。

「おい、何だ主人に向かってその言い草は。これは……。」

お仕置が必要だな――。

アルカの耳元で、C・C・は愉快そうに囁いた。

▼

「おい、舌が止まっているぞ。」

C・C・は自身の前で跪くアルカを見下ろしながら、言葉を投げた。

脚を軽く動かすと、それに反応してアルカの身体が跳ねた。

「……これでは、どちらが奉仕しているか分からんな。」

「も、申し訳、ごいません……。」

アルカはその場に座り込みながら、謝罪の言葉を紡ぐ。

それを見るC・C・はどこまでも楽しいそうで、活き活きとしていた。

「まあ、良い。…ほら、ベッドに上がってこい。特別に、私が手本を見せてやろう。」

「…は、はい……。」

震える身体に鞭を打ち、アルカはベッドへと身体を倒す。

C・C・に押し倒される構図に、身体を震わすも、その瞳はC・C・に注がれ、何処か期待を孕んでいる様にも見えた。

「……さあ、この場合、何て言うんだ？教えただろう？」

C・C・は口角を上げながら、嗜虐的に言葉を紡ぐ。

アルカは震える唇を開き、弱々しい声音で言葉を紡いだ。

「……だ、ダメなメイドに…、お仕置き……して、ください………。…ご主人様……。」

満足気な笑みを浮かべ、C・C・はアルカに覆い被さった。

・
・
・

翌日、アルカはルルーシユとナナリーとお茶を楽しんでいた。

時刻は正午過ぎ。

先程起きたのか、アルカは時折欠伸を混ぜながら、瞼を擦っている。

「アルカ、昨日咲世子さんと何をしていたの？」

「ああ、そういえば。何か指導を受けていた様だが……。」

兄と姉の疑問に、アルカは昨日の事を思い出しつつ、答えた。

「もうメイドはやらない……。」

「ん？」

妹の呟きに、二人は首を傾げた。

騎士最後の日

崩壊したビル、立ち込める黒煙、立ち塞がる蒼いKMF。

「……………はあ。」

退屈過ぎて思わずため息を吐いてしまう。

「…遅いな、遅すぎる。」

エリアーに伝わる刀を模したであろう武器を構えながら、蒼のKMF「無窮」は距離を詰める。

「そしてその動きも、単調だ。」

自身の装備であるMVSで刀を弾き、体勢が崩れた無窮に向けてニードルブレイザー

を押し当てる。

それに対し無窮はコックピットを構う様に、両腕をクロスさせそれを受け止める。

「ほう！ 流石に防ぐか！ だが……！」

そのまま操縦桿のスイッチを押し、攻撃を受け止めた無窮の両腕を破壊する。

「あいつなら腕を一本も失わずに対応していただろう、な！」

両腕を失い、防御の手段を失った無窮のコックピットを目掛けてMVSを投降。空を切り裂くその刃はあっけなくコックピットを貫き、そのまま無窮は爆発した。

「……はあ。」

今日何度目か分からない溜息を吐き、モニターの電源を切ってハッチを開ける。

「お疲れ様でした！ エニアグラム卿！ 如何でしたか？」

KMFのコックピット…、を模したシミュレーターから出てきたノネットを、彼女の専属の研究チームである「ピクシー」所属の研究員「マリーカ・ソレイシイ」はその顔に笑顔を浮かべて駆け寄る。

「エニアグラム卿の戦闘データを元に動きを再現してもみたのですが…。何かフィードバックがあれば是非！ 今後のブリタニアの為にも！ さあさあさあ！」

言葉が後半になるに連れて段々と声が大きくなつていくマリーカに対し、苦笑を浮かべつつもノネットは口を開く。

「分かった、分かったから落ち着け、この研究バカ。」

「バカ、とは心外ですね。私はちよつと熱心なだけで……。」

「尊敬する研究者は？」

「ロイド・アスプルンド伯爵！」

間髪入れずに、マリーカは興奮しながらその名を叫ぶ。

(ダメだこりや。)

自分で言うのも何だが、階級が上の人間に対しても崩す事の無いこの態度。かつて純血派に所属していた兄とは似ても似つかない。とノネットは思った。

「ああ、それで所感だったな。そうだな、まずに動きが単調過ぎる。実際の戦闘のあいっはここまで分かりやすくは無かったぞ。自身の武器のみならず、相手の武器、周りの瓦礫に至るまで利用してこちらの優位を崩そうとした。その柔軟性があれには無い。次に機動力。あれは何だ？ 遅すぎる。遅すぎて欠伸が出たぞ。後は勝ちに対する執着。あれにはそれが感じられない。実際の戦場ではな——。」

「ちよつと、ちよつと待つてくださいい！」

「何だ、お前がフィードバックが欲しいと言ったんだぞ。」

ノネットの言葉を遮り、マリーカはストップを掛ける。

「その、機体のスピードは調整しようと思えますが、あくまでもこれは一般兵士向けのシ

ミュレーター……。エニアグラム卿基準で設計したら心が折られる兵士が続出します！」
「何だ、人を人外みたいない方をして。」

実際そうだろう。流石のマリーカもその言葉を口には出さなかった。

「あと仰っていた柔軟性に、勝ちへの執着……ですが……。これはあくまでも機械的なシミュレーターであり、そこまですを再現しようとすると……。」

「あと数十年は待たなきゃいけない、か？ ……ふっ分かってるさ、そんな事。」

「なら意地悪しないで下さいよ！」

「はっはっはっは！ ……まあ、そう言うな！ ……最後にお前の困る顔が見たかったんだよ！」

豪快に声を上げながら、マリーカの背中をバシバシと叩く。

「何、シミュレーターとしては十分だろう。流石は私の研究チーム。……にしても案外早く完成したな。私を知る限り、シュナイゼル殿下から指定された納期はまだ先だった筈だが……。」

「それが……、一部、急かす方達がいまして……。」

「ん？ 誰だそれは？」

「グリーンダ騎士団……」

「……ああ、あいつらか……」

最近結成されたト部隊であり、ブリタニアに対するテロ活動を根絶すべく創設された部隊。トップのテロ活動アレルギーの影響もあり、非常に血の気が多い事で有名。

「まあ、この出来なら奴らも満足するだろう。それにお前達の面倒を任せた人は非常に優秀な科学者だ。シユミレーターの改善も朝飯前だろうよ。」

さて、と言葉を紡ぎ、ノネットは研究室を後にしようとする。

扉に手を掛けたその時、マリーカを始めとする大勢の研究員達からの視線を感じた。

「エニアグラム卿……！ 今まで大変お世話になりました！ どうか……、どうかお元気で！」

マリーカの言葉と共に全員がノネットに向けて敬礼を取る。その光景に寂しさを感じ

じつつも、ノネットはそれを表に出さず、何時もの調子で手をヒラヒラと振った。

「次からは敬称は不要だ。親しみを込めてノネットさん、と呼ぶが良い。……ではな、お前達。息災でな。」

ノネットはそう言葉を言い残し、もう二度と訪れる事の無い「ピクシー」の研究室を後にした。



「はあ!? ラウンズを辞める!?!」

「ああ、そうだ。聞いてくれ、モニカ。ラウンズとしての最後の仕事が生シユミレーターへのテストなんて笑えるよなあ!」

ナイトオブラウンズに宛がわれた宮殿のリビングに当たる大きな部屋で、ノネットは何時もの笑い声を上げる。

「ああ、確かに笑えるなあ。しかし、負け犬のラウンズに相応しい仕事と言える。」

そんなノネットの言葉に対し、ナイトオブテン「ルキアーノ・ブラッドリー」は意地悪い笑みを浮かべた。

「ルキアーノ！」

彼の態度が気に障ったのか、ナイトオブトウエルブ「モニカ・クルシェフスキー」は怒りの形相を浮かべる。

「いや良いんだ、モニカ。ルキアーノの言う通りだよ。私はあいつに二度負けた。情けない話だがな。一度目はチョウフで。二度目はブラックリベリオンで。」

「エニアグラム卿……。」

モニカの言葉にモニカは黙り、入れ替わるようにナイトオブセブン「枢木スザク」が悔しそうに呟く。

「おっと、お前が気に病む必要は無い、枢木。私は無窮に一騎打ちを申し込み、そして負けた。お前の戦いは関係無いさ。」

「……………」

それ以上、紡ぐ言葉が見つからないスザクは口を閉ざす。

自分ももっと早くゼロを捕らえておけば。もっと早く、アルカの事に気付いていれば。

一番身近に居ながら、止める事の出来なかつた過去の自分の行動の結果に、自責の念を積もらせていた。

そんなスザクの心境を見抜いてか、いつもの明るい様子でノネットは再び口を開く。

「何、ラウンズを抜けるのは皇帝陛下の指示では無く、私の判断だ。誰の所為でも無いや。」

まるで気にしていない、とも言う態度にこの場に居る全員が口を閉ざす。

部屋に訪れた少しの静寂。

それを破つたのはナイトオブスリー「ジノ・ヴァインベルク」だった。

「それにしても、何でこんな大事な事黙っていたんですか？」

「事前に辞めると言ったら、お前達騒ぐだろう。」

「ああ、なるほど。」

ジノは納得がいった様子でモニカとルキアーノを見つめる。

「…ジノも、その一人……。」

「ん？　そうかあ？」

そんなジノの様子に溜息を吐きながら、ナイトオブシックス「アーニャ・アールストレイム」は小さく呟く。

「エニアグラム卿。この後はどうするつもりかな？」

重苦しい男の声が部屋に響く。

声の主に視線を向けると、そこには片目を閉ざした大柄な男が居た。

古くからラウンズに席を置き、皇帝の懐刀とも謳われている騎士の中の騎士。ナイトオブワン「ビスマルク・ヴァルトシュタイン」。

「ああ、ヴァルトシュタイン卿。貴殿も来ていたのか。」

「円卓の騎士がまた一つ欠けてしまうと聞いて、な。」

「ふ、心遣い感謝する。∴して、この後とは?」

ナイトオブワンにのみに認められた特権。それはブリタニアの植民地であるエリア1から18までの内の一つを自身の領土として貰えるということ。

皇帝の側近中の側近であり、一つのエリアを統治する彼は多忙極まる。そんな彼がわざわざ自分の見送りに来てくれたとなれば、自然と笑みが浮かぶというもの。

「簡単な話だ。貴公には命がある。命を残したままラウンズから抜けるのだ。余生はどう過ごすつもりかと思つてな。なに、ただの興味本意だよ。」

常に戦場に身を置くナイトオブラウンズにとって、死は隣り合わせ。

命を落した事によって欠員が出た事はあつても、ノネットの様に生きたまま抜けるも

のは非常に少ない。

「ふむ、そうだな。折角戰場から離れるんだ。穏やかに過ごすのも悪くは無い。私の家の敷地は無駄に広いからな。そこに引き籠るのも良い。……ああ、旅も良いな。国捧げていた身だ。軍人としての世界は知っていても、ただ人としての世界は知らない。」

「……国に捧げていた身、か。」

「おっと、今のは騎士らしからぬ発言だった。失礼。」

「いや、貴公の心境が良く分かった。もう既に忠義が無いことも。」

「……………」

ビスマルクの言葉に、ノネットは肯定も否定もすることは無かった。

「…何、気にすることは無い。それぞれの人生だ。私がとやかく言う資格は無い。——
——ではな。」

そう言葉を言い残し、ビスマルクは宮殿を後にする。

ノネット以外の誰もが、あのルキアーノさえも驚きの色を浮かべた。ノネットを気遣うような言葉が出るとは予想していなかったからだ。

「ヴァルトシュタイン卿も案外ああいう気遣いをするんだな。」

ジノが思わず、と言った様子で感想を述べる。

(……気遣い、とは少し違うな。)

ビスマルクが自らに向けていたあの目には、見覚えがある。

アリエスの離宮で出会った庶民出の王妃。自分の娘に向けていたあの目にそっくりだった。

(……まるで人に興味が無い。そんな目をしていたぞ、ヴァルトシュタイン卿。)

・ ・ ・

皆との別れも済ませ、宮殿内の長い廊下を一人歩くノネット。

「さて、部下と同僚とも別れも済ませ、私物は全て家に送った。いよいよやる事が無くなってきたな。——ん？」

そんなノネットを追う様に、軽快に廊下を駆ける音が耳に入った。

「なんだ、廊下を走るとは騎士らしくないぞ、枢木。ジノの影響を受けたか？」

ノネットの元に訪れたのはゼロを捕らえた功績でラウンズに加わった少年、枢木スザク。

「あ、すみません……。どうしても聞きたい事があつて……。」

「何だ突然改まつて、皆に聞かれたくない事か？」

「あはは、まあそんな所です。」

以前と変わらない人懐っこい笑みをぎこちなく浮かべて、スザクは頭を掻く。

「それで、何だ？」

「……エニアグラム卿。」

「枢木、卿はよせ。ノネットさんで良い。」

スザクはキョトンとした顔を浮かべた後、諦めた様な表情を浮かべながら、ノネットさんと言い直す。

「……貴女が、ラウンズを抜ける理由を教えてくださいませんか？」

「……お前も変な奴だな、枢木。負けたからだよ。ラウンズの戦場に敗北は無い。ジノも良く言っているだろう？ 負け犬の私がここに身を置くのは場違いだと——。」

「僕の知るノネットさんは、敗北を理由に戦いから逃げる人ではありません。」

「……逃げる、か。」

ノネット自身、逃げているつもりは毛頭無かったが、スザクに言われて改めて考え直す。

「貴女は風当たりが強い僕の背中を押してくれました。折れるな、と。ユーフェミア様の騎士を辞退しようとした時も同じようにしてくれた。」

ああ、そんな事も合ったな、とエリアーでの出来事を思い出す。

「そんな貴女が、たった二度の敗北で軍から退くなんて……。」

「枢木、お前の戦う理由は何だ？ ラウンズになった理由は？」

「それは……。」

スザクは言葉を詰まらせ、僅かに視線を逸らす。

「言いたくないなら言わないでいい。ただしその時は私もお前の疑問に答える事は無い。何、立場なら気にするな。お前の目の前に居るのはただのノネットさんであり、騎士でも何でも無い。」

「……………エリアーを貰うためです。ナイトオブワンの座に付き、エリアーを…、いえ、日本を取り戻す。」

そう言ったスザクの瞳の奥には決意の色が宿っている。

「それがお前の答えか。中から変えていく、と言ったお前の。……強い目になった。前のお前じゃ考えられん程に。しかし、嫌な目だ。」

「……………え？」

「いや、これは私から言うべきことでは無い。お前が自ら気付く事を祈っているよ。……さて、私の話をしないと。」

ノネットは肩を竦めながら、口を開く。

「私には娘が居てな。……ああ、血の繋がった娘では無い。あくまでも義理の娘だ。……最も、読み書きと戦い方を教えた程度だし、私が勝手にそう言っているだけだけどな。」

「……………」

「その娘は地位は高いが立場が低い。そんな娘でな。彼女自身も幼いながらもそれを理解し、健気に立ち回っていたよ。」

何処か優しい目で、懐かしむ様に、ノネットは語る。

「彼女の母親は考えた。弱者に敵しいこの国で、娘が生きていく方法を。枢木、何だと思
う？」

「……………騎士になる事、ですか。」

「そう、お前と同じ様に。勝ち続けて、誰もが認める力を手にして、その立場を獲得しよ
うとした。それで白羽の矢が立ったのが——。」

「エニアグラム家…………。」

「そうだ。とノネットは笑みを深くする。」

「幸いな事に彼女は私に懐いていてな。その話はすぐにまとまった。何事も無ければ彼
女が5つになると同時に迎え入れる予定だった。」

「……………しかし、そうはならなかった。」

「…ああ。死んだ、いや殺されたんだよ。無残にも。顔の判別が出来ない程無残に殺さ
れた。——悲しかった。年甲斐もなく憤りもした。そして疑問を覚えた。何故彼
女が殺される必要があつたか、と。」

「それを知る為にラウンズに？」

「まあ当時からもう既にラウンズだったけどな。私がラウンズの地位にしがみついていた理由がそれだ。意外と単純だろう？」

スザクは否定しなかった。

貴族としての責任、祖国に対する愛情、皇帝への忠誠心、そういうありふれたもの、スザクには無いものばかりだと思っていたからだ。

「彼女は本当に地位だけは高くてな。そんな彼女が死んだのにも関わらず、特に詳しい捜査もされずに流された。」

——そこで私は悟ったよ。彼女は上の権力争いに巻き込まれてしまったのだと。

だから私はここに居続けた。全てを知る為に。ブリタニアの最高戦力と言われるここに。嘘で忠義を固めて。

……少なくとも、この前まではそうだった。」

「……この前まで？」

「ああ、生きていたんだよ。名前を変えて。過去に縛られ、戦いを続ける私とは対照的に、前だけを見ていた。そして、私の前に立ち塞がった。」

「っ！ エニアグラム卿、貴方は……！」

「その時の彼女は私にとつて眩しすぎた。自らの心に蓋をし、嘘の忠義を掲げていた私にとつて。……そして分からせられたんだ。そろそろ現実を見ろつてな。」

だから私はラウンズを抜ける。虚飾でしがみついていた立場を捨てて、ただのノネットとして世界を見る為に。」

さて、お喋りが過ぎたな。つとスザクの肩を叩きノネットはラウンズのマントを脱ぎ捨てる。

「それはお前にやるよ。もう私には要らないものだ。そうだな、もし私の娘に会う事があつたら渡してあげてくれ。」

ああ、そうだとノネットはスザクの方へ振り向く。

「私の部下達のこと、よろしく頼む。個性が強いやつばかりだが、腕は保証する。カメラロットでも良い働きをするだろうよ。」

そう言い残して、ノネットはナイトオブラウンズから姿を消した。



エニアグラム家の広い屋敷の一室。当主であるノネットの部屋。その部屋の隅に置いてあるタンスの上にある写真立てを手に取り、穏やかな笑みを浮かべる。

そこには在りし日のノネットと、泥だらけの幼いアルカ。

「また感傷に浸っているのですか？」

部屋の扉に寄り掛かりながら、呆れた顔を浮かべて紫色の髪的女性は呟く。

「……声も掛けずに観察するなんて、殿下も人聞きが悪い。」

殿下、と呼ばれた女性「コーネリア・リ・ブリタニア」はバツが悪そうな表情を浮かべる。

「殿下はやめてください。今の私は追われる身。戻ったとしても皇位継承権なんて無い

んですから。」

「……それも、そうですね。」

持っていた写真立てから写真を抜き取り、胸にしまう。

「……さて、行きましようか。真実を見極めに。世界を知る為に。」

彼女は歩き出す。

地位も名誉も殴り捨てて、ただのノネットとして。

全ては前に進み続ける娘を知る為に。

第2期

TURN 1 偽りの世界

「ルルーシユ…、いえ、ゼロは明日、租界外縁部にあるバベルタワーへと向かいます。」

少女の声が木霊する。

「目的は上層部に位置するカジノ。ゼロが機密情報局に監視下にある事から、ブリタニア軍との戦闘も考えられます。」

少女は極めて機械的に、淡々と言葉を紡ぐ。

「作戦内容に変更はありません。カレンはカジノの従業員として潜入。ゼロと接触し次第、彼を監視役の弟から遠ざけて下さい。場合によっては、殺害しても構いません。」

「ええ。」

「卜部さん率いる人型自在戦闘装甲機部隊は飛行船から強襲。ブリタニア軍を掃討した

後、所定の箇所に爆弾を取り付けて下さい。」
「ああ。」

少女の声に、二人は力強頷いた。

「紅蓮の引き渡しは地下一階の搬入口で行います。人払いは済ませておきました。担当の者は、所定の時間にカレンに引き渡す様に。」

「承知！」

カレンとト部の後ろに控える団員達も、皆一様に頷いた。

「ゼロを奪還後、所定のルートを通って中華連邦総領事館へ。そちらの方も事前に話を通してあります。高亥ガオハイという男に取り次げば、匿ってもらえるでしょう。」

少女は目の前に居る団員達、一人一人に目を配る。

「私達の用いる全戦力を投入します。失敗は許されません。……明日の、飛燕四号作戦

をもって、黒の騎士団は完全に復活する。」

皆同じ顔をしていた。

覚悟を決めた、戦士の顔だった。

その仲間達の顔を見て、少女、アルカは僅かに微笑む。

「……命を懸けなさい！ 私達は黒の騎士団！ 力ある者に抗い続ける反逆者!!」

少女の号令が、空間を震わす。

「私が、私達が……、この世界を破壊する!!」

魔神が目覚めるその時まで、もう少し。

◇◇◇

ゼロによる反逆——、ブラックリベリオンからもうすぐ一年。

黒の騎士団により破壊された街並みも今では元通り。

一年前の出来事とは思えない程、エリアーはすっかり落ち着いた。

そう、あの大規模な反乱も、超大国ブリタニアにとつてすれば、些細なものだった。何も変わらない。

ブリタニアという国も、世界も、何もかも。

強いてあげるとするならば、エリアーにおけるイレブンの扱い位だろうか。

以前から酷かったが、今はより、見るに堪えない。

イレブンの公開処刑の中継なんて日常茶飯事。

名誉ブリタニア人ですら、ゴミ同然の扱いを受けている。

まあ、それも当然の帰結だ。

日本は二度敗北した。力が無かったから。

ただ、それだけ。

「……ゼロ、馬鹿な男だ。」

サイドカーに乗り、その黒い髪を靡かせながら、ルルーシュ・ランペルージは呟いた。その呟きは、隣でバイクを運転する弟、ロロ・ランペルージには聞こえなかっただろう。

二人が向かうのはトウキョウ租界外縁部に位置する複合商業施設、バベルタワー。道楽好きの新総督、カラレスが作ったトウキョウ租界における新たな名物だ。

二人はバベルタワーに続く道を真っ直ぐ進み、地下駐車場へと向かう。

「本当に行くのか？送ってくれるだけで良かったのに。今日のは非合法だし……。」

サイドカーを降りたルルーシユは、困ったような表情を浮かべる。

「兄さんが心配だから、一緒に行くよ。」

それに応じるのは弟の口口。

「それにしてもどうして？兄さん、お金が欲しい訳では無いでしょう？」

二人の生活は裕福、とまではいかないが、貧乏でもない。

非合法カジノに興じる程、生活が苦しいという訳ではない。

にも関わらず、ルルーシユはこの場へと足を運んだ。

「決まつてる。もつと強いやつと戦いたいからさ。」

そう言いながら歩を進めた兄に対し、呆れた様な表情を浮かべながら、ロロはその後ろに追従した。

ルルーシユは刺激を求めていた。

何も今の生活が嫌い、という訳では無い。

学園の生徒からは慕われているし、弟だつて一緒に居る。

それでも、ルルーシユは何処か、苛立ちを覚えていた。

(何かが足りない。)

自分自身でも分からない心にかかる靄。

それを晴らす方法を見つける為、ルルーシユはカジノへと足を踏み入れる。

煌びやかな内装。

上品な恰好に身を包んだ大人達が、各々が思う様に遊んでいる、至つて普通のカジノ。

——ただ一点を除いては。

『さあ、本日注目の兄弟対決！生き残るのは兄か、弟か。』

カジノフロアの中央に位置する吹き抜け、そこにルルーシユは足を運んだ。
見下ろすとそこには闘技場の様な施設。

そこで涙を流しながら殺し合うイレブンの兄弟。

「兄さん、帰ろう？やっぱここは……。」

怯えたような口口の言葉に、ルルーシユは諦めた様な笑みを浮かべた。

「良いじゃないか、分かりやすくして。」

その笑みには、微塵も楽しんでいる様子など伺えなかった。

ただ、ただあるのは諦め。

何処までも乾いた笑みだった。

「見ろよ、笑って遊ぶのは俺達ブリタニア人。笑われて働くのが、イレブン。見ないふりをしたって、結局は——。」

何も変わらない。

「だからって……！」

「分かってる。でも事実だろ。イレブンは二度負けたんだ。」

詰まらそうに言葉を紡ぎながら、ルルーシュはその場を離れ、奥へと進む。

「枢木首相とゼロの時、力が無い癖に反乱なんか——、あつ。」

ルルーシュの言葉はそれ以上、紡がれる事は無かった。

進んだ先で、酒を運んでいたバニーガールとぶつかってしまったからだ。

衝撃から、そのバニーガールのバランスは崩れ、持っていた酒が、ルルーシュの制服へと降りかかる。

「ああっ！申し訳ありません！」

バニーガールは必死の様子で謝罪を繰り返しながら跪き、ルルーシユの制服をナフキンで拭う。

日本人離れた赤毛を持っているが、こうしてブリタニア人であるルルーシユに対して媚び諂う様子から、彼女はイレヴンの出だという事が分かる。

「いや、いいって……。」

「私はイレヴン、貴方はブリタニアの学生さんですから……。」

彼女の言う事は正しい。

少なくともこのエリアーレにおいて、日本人である以上、ブリタニアに頭を下げ続けない限り、まともに生きていけないのだから。

そんな彼女の様子を見て、ルルーシユは不快そうに顔をしかめながら、膝を折り、視線を合わせる。

「なら尚更だ。嫌いなんだ、立場を振りかざすのは。」

「…でも、力の無いの人間は我慢しなくちゃいけないんです。…例えば、相手が間違っても………」

彼女の言葉に、ますますルルーシユの表情は険しいものとなっていく。

「君達の価値観を、俺に押し付けないでほしいな。」

「も、申し訳ございません…。」

彼女——、紅月カレンは謝罪を述べながら、ルルーシユへと手を伸ばす。

その指先にはコイン程の大きさの発信機。

周りに居る従業員も、客も、口口も、当の本人のルルーシユすらも、カレンの持つ発信機には気付かなかった。

その発信機が、ルルーシユの着る制服に付くまで数cmという所で、第三者の介入が入った。

「顔を見せてくれないかあ、んん？」

顎髭を蓄え、下劣な視線を隠そうともしない、恰幅の良い男。
通称、黒のキング。

ブリタニアにおいて名の知れたチエスプレイヤーであると同時に、マフィアのボス。
そんな男が、後ろからカレンの髪を無造作に掴み、品定めをするかのように、彼女を
吟味していた。

「ふうん、良い商品だ。」

そう満足そうに呟く彼の後ろには、同じ様に目を付けられたであろうイレヴンの少女
達、彼のSP、彼に媚び諂うカジノのオーナーが居た。

この世界、特に裏社会においては、良く見る光景だった。

力有る者が、力無き者を虐げる。

これが今の世界のルールであり、真理だった。

ルールシユは目の前でそんな光景を目撃し、不快感を露わにする。

「私は…、売り物じゃない！」

「売り物だよ。勝ち取らない者に、権利など無い。力無き自らの生まれを悔やみたま

え。」

黒のキングに異を唱える者は居なかった。

周りでもこの光景を見ている客も、従業員も。

皆が見て見ぬふりをしていた、皆が、他人事の様子に振る舞った。

ただ一人、この少年を除いて。

「傲慢だな。」

ルルーシユの一言がホール内に木霊した。

「自分は食べる側に居るつもりか。」

「……学生君、これが大人の世界だよ。」

相も変わらず、ルルーシユの表情は、声は穏やかだった。

この場に居る二人を除いて、彼の本心は誰にも分からないだろう。

ルルーシユの瞳の奥には、確かに怒りが宿っていた。

「どちらが食べる側か、取り敢えずこれでハッキリさせよう。」

そう言うと、ルルーシユは自身が持つアタッシユケースを開く。

入っていたのはチェス盤と駒。

「……………へえ……………」

その光景を少し離れた所から眺めていた少女は、嬉しそうに笑みを浮かべた。



「チェックメイト。」

ルルーシユの静かな声が、ホールに響く。

彼の駒達が、相手のキングを捉えた。

どの駒を動かしても、キングを逃がそうとも、黒のキングは包囲網を突破出来ない。

誰がどう見ても、ルルーシユの完勝だった。

「バ、馬鹿な……。」

「食べられるのは、そちらでしたね。」

この結末に、試合を見守っていたギャラリー達からも動揺の声が上がる。

ギャラリー達の誰もが、黒のキングの勝利を確信していた。

ただ一人を除いて。

「……………」

この場に似つかわしくない、まだ幼い少女だった。

歳は10を超えたばかりか。

整った顔立ちに染み一つ無い白い肌。

精巧に造られた人形の様にも見える。

普段は下ろしているであろう髪を纏め、チャイナドレスを身に纏った、そんな少女。

少女——、アルカは何処か嬉しそうな笑みを浮かべながら、自身の持つ携帯に目

を落とす。

その画面に映されていたのは、彼女の居る、バベルタワーを中心にした地図。

その地図上に、バベルタワーに重なる様に点滅するポイントを確認し、アルカはカレンの方へ視線を向ける。

(……そろそろ、か……。)

アルカの視線に気づいたカレンは、彼女の視線に対し、頷きを返す。

丁度会場は、黒のキングのいちやもんによって、騒ぎが起きていた。

薄汚い大人、と抗議するルルーシュを、黒のキングのSPが取り押さええている。

駆け付けたい衝動に駆られるも、アルカはそれを抑え、騒ぎに紛れてこの場を後にする。

『アルカ、何時でも行けるぞ。』

耳に着けているインカムから、C・Cの声が響く。

彼女の言葉に笑みを深めたアルカは、愉快そうに声に応じた。

「ええ、始めよう……。魔王の復活を。」

アルカの声に応じる様に、バベルタワーは激しい揺れに襲われ、人々の悲鳴に包まれる。

そんな中、彼女はまるで舞踏会へと向かう童話のお姫様の様な軽やかな足取りで、その歩を進めた。

TURN 2 魔神が目覚める日

「アハッ、アハハハハハ!!」

激しい振動に襲われる中、アルカは歓喜の声を上げながら歩みを進める。

誰もが悲鳴を上げている今の状況に、場違いな程の明るい笑い声。

そんな彼女を不審がる人物は、この場には居なかった。

それもその筈、彼女が進むのは従業員専用の区画。

この騒動で従業員は全員、客の非難誘導に駆られており、この区画に残っている者はほんの一握りだ。

「あー、本当に最高、ハハッ！やっぱり、記憶を失っても兄上は兄上だ！」

彼女がこうも嬉しそうにしている理由はルルーシユの行動にある。

黒のキングに目を付けられたカレンを、彼はチェスという形で助けようとした。力ある者に対する反抗心。

それを記憶を失っている状態のルルーシユから、行動として確認出来たのだ。こんなに嬉しい事は無い。

アルカは愉快そうに笑みを浮かべながら、とある一室の扉に手をかざす。

彼女の手の平を認識すると、電子音が響き、扉が開いた。

その部屋の中に居るのは、軍服に身を包んだ一人の男。

「お待ちしておりました、皇様。」

アルカの入室と同時に、男は礼儀正しく頭を下げる。

「ここまで協力してくれてありがとう。……預けた物、返してくれる？」

「はい、こちらに。」

アルカの言葉に、男はとあるアタッシユケースを差し出す。

渡されたアタッシユケースを開けると、そこには仮面と銃が入っていた。

彼女はその二つを取り出すと、もう用済みなのかケースをその場にほっぽりだす。

彼の名前を、アルカは憶えていない。

それもその筈、彼はアルカが適当にギアスを掛けた機密情報局の軍人だ。

別に、ここにこうして誘導してくれれば、彼じゃなくても良かった。

たまたま。

そう、たまたま彼は彼女の目に捕まったのだ。

ブラックリベリオン以後、ブリタニアの手から逃れる事が出来た黒の騎士団は、C. を除いて世界的に指名手配されている。

それはこの少女、アルカも例外では無い。

しかし彼女の場合、指名手配と言っても素顔は公表されておらず、世界に知れ渡っているのはゼロと同じく仮面の姿のみ。

どうやらノネットは、本当に誰にも話していないらしい。

「やっぱり仮面こゝれが無いとね。素顔バレる訳にもいかないし。それに——、世界に知らしめないと。黒の騎士団はまだ死んで無い、って。」

アルカは手元にある仮面で手遊びしながら呟く。

誰に対して語っている訳では無い。

ただ単純に、上機嫌故に口を開いている様子だった。

「…皇様、私はこの後何を……………」

傍に控えていた男が、困ったような表情を浮かべて指示を仰ぐ。

それに対し、「ああ、そっか。」と何かを思い出したかの様にアルカは呟いた。

「そういえば、貴方には私のお願いを聞いて、つてギアスを掛けたんだっけ。うん、もう良いよ。ありがとう。」

—— さよなら。」

アルカは何のためらいも無く、彼の眉間に向かって銃口を向け、その引き金を引いた。目の前のアルカの傀儡だった人間は、夥しい血を吹き出しながら、力無くその場に倒れる。

「—— さてと、行きますか。」

アルカは目の前の死体を一瞥する事無く身を翻し、仮面を被り部屋を後にした。



『ゼロを見失った？』

『ごめん！気が付いたら彼の弟役に奪い取られてて……！』

カレンにしては珍しい、とアルカは思った。

彼女の身体能力はハッキリ言って人の域を超えている。

並の軍人等、相手にすらならないし、何より紅蓮を乗りこなせるんだ、言うまでも無いだろう。

だから彼女を従業員として忍び込ませ、兄上の護衛に任命した。

しかし実際、彼女は兄上を監視の弟役に奪い取られ、見失った。

余程、監視の弟役の腕が立つのか。

それとも、何か別のイレギュラーか。

『気にするな、紅月。今、俺達が探している。』

通信を聞いていたト部が、割って入る。

『ええ、そうですね。カレンはこのまま地下の搬入口へ。紅蓮を受け取って。その後はト部さんと合流。ト部さんは僚機と共にブリタニア軍の掃討、及びゼロの搜索。

私はこのまま、予定通り機情局の支部に向かいます。』

『分かったわ。』

『承知。』

二人の返事を皮切りに、アルカに再び静寂が訪れる。

『はい、かな。』

運んでいた足を止め、目の前の扉を眺める。

特に変哲もない普通の扉。

取り付けられている電子ロックに、先ほどの軍人が持っていたカードを翳す。

電子音と共に、鍵は解除され、扉が開いた。

部屋の中には、複数の軍人と巨大なモニター。

部屋の様子を眺めていると、アルカの存在に気付いた軍人達がこちらに銃を向ける。彼女は知る由も無いが、ブリタニア軍において皇アルカという少女は、ゼロに次ぐ危険人物として知れ渡っている。

元ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラムを二度下し。

ゼロの死後は、壊滅状態の黒の騎士団を纏め、新たな先導者として一年間ブリタニア軍の追跡から逃れ続けてきた。

そんな規格外と言ってもいい人物が、この場に現れた。

軍人から見て、皇アルカという人物は何とも不気味な存在だった。

華やかなチャイナドレスを身に包み、そのスリットから時折見える脚は、幼いながらも何処か妖艶な雰囲気を出していた。

首から下だけを見れば、何処かの貴族の令嬢の様でもあったし、精巧に造られた人形の様に可憐であった。

しかし、それを台無しにするかの様な、仮面。

仮面と身体のみスマツチさが、軍人の不安を、恐怖を煽る。

「お前は…、皇アルカ……！」

1人の軍人が、この場の雰囲気になえきれず声を荒げた。

その声に意識を戻したアルカは、何も語らぬまま自身の仮面に手を掛ける。

その行為に軍人達は、テロリストが目の前に居る事実を忘れ、アルカの被る仮面に意識を向ける。

それもその筈、晒される事の無かった素顔が、仮面が取り払われるにつれ、あらわになつていくのだ。

その光景に目を奪われている軍人達は、何とも言えない背徳感の様な気持ちに襲われた。

その晒されていく素肌は、染み一つ無く、陶器の様だった。

その唇は、甘い果実の様だった。

その目は、何処までも深く、宝石の様でいて、真つ赤に染まっていた。

「死ね。」

少女の死を告げる声が、室内に響いた。



その室内は、血の臭いに満たされていた。

少女の足元には、先程までは命のあった人間達。

普通の感性を持ち合わせている者ならば、不快感をあらわにするだろう。

しかし少女は最早、普通の感性等持ち合わせてはいない。

少女にとって、部屋を満たす血の香りも、足元に転がる死体も、全てが供物にしか見えなかった。

魔王を復活させる為の、供物。

少女、アルカはモニターに映し出されているバベルタワーの地図と、それに重なる様に点滅するポインターに視線を向ける。

「C・C、兄上は地下の駐車場の近くに居る。」

『ああ、分かった。すぐに向かおう。場合によっては今この場で、記憶を戻す。いいな?』

「うん、構わないよ。」

『お前は どうする?』

「ここにあるデータを全て消してから行くよ。その為に来たんだし。」

そうか、と小さく呟いてC・C・は通信を切った。ルルーシユの元へ向かったんだろう。

機密情報局によるルルーシユの監視は徹底している。

授業や放課後、風呂やトイレに至るまで、彼の全てを監視している。

ルルーシユの行動範囲に合わせて支部を設置し、その全てを記録しているのだ。

それはここ、バベルタワーとて例外では無い。

こここの支部にはバベルタワーにおけるルルーシユの行動が全て記録されている。

アルカ達、黒の騎士団はこの一年で今日初めて、ルルーシユに対して明確な行動を起こした。

それこそアルカやカレン、C・C・がこうして表に姿をあらわすほど。

今後の活動の為に、ブリタニアの思い通りにならない為にも、今回の作戦に関する情報は可能な限り抹消しておかなければならない。

特にルルーシユ、C・C・の2人に関しては入念に。

「思い通りになると思うなよ、シャルル・ジ・ブリタニア……!」

そう呟く少女の目には、明確な怒りが宿っていた。



(テロリストの、仕業……………?)

ルルーシユの前には、夥しい程の死体が転がっていた。

カジノに居た従業員、客、殺し合っていた兄弟、黒のキング。

人種も、立場も関係無く、ただただ無情に、平等に、その命を失っていた。

黒の騎士団による犯行かと一度は考えたが、ルルーシユの頭に一つの疑問が浮かぶ。

(いや、しかし。イレヴンまで……………。)

イレヴンを、自分達と同じように虐げられている立場の人間を、こうも簡単に殺すだろうか。

違う。とルルーシユの心が叫びを上げる。

彼の記憶にある黒の騎士団は、そんな事はしない筈だ。

違和感。

ルルーシュが感じたのは不快感よりも違和感の方が強かった。こんな状況だと言うのに、つつい意識を思考に回してしまうのは悪い癖か。だから気づかなかった。彼の目の前に、一機のKMFが佇んでいるのを。

「はっ！黒の騎士団……!?!」

ブリタニア軍のグラスゴーを基にした改造機、無頼。

ブラックリベリオン時には黒の騎士団の主力として使われていた第四世代相当のKMF。

ルルーシュは思わず後ずさる。

黒の騎士団の敵は言わばブリタニアそのもの。

軍属では無いにしろ、ブリタニア人である自分は敵なのだ。

ゼロが生きていた頃はブリタニア人であろうと、民間人には手を出さなかった。

しかし、ゼロの死後、彼らの代表として現れたのは皇アルカという仮面の少女。

上が変われば組織も変わる。

それをルルーシュは、学生でありながら理解している。

怯えるルルーシユを余所に、無頼はそのハッチを開ける。

コックピットの座席が飛び出し、中から一人の少女が現れた。

「ルルーシユ。」

その声は何処までも無感動で、機械の様だった。

白いパイロットスーツを身に纏った、人形のように整った少女。

緑色の髪を靡かせ、黄金の瞳をルルーシユに向けている。

「迎えに来た、ルルーシユ。私は味方だ。お前の敵は、ブリタニア。」

「……………え？」

殺す訳でも無く、助ける訳でも無い。

ただただ少女から紡がれる言葉に、ルルーシユは先程とは違う動揺をあらわにする。

「契約しただろう、私達は共犯者。」

「契約？ ……共犯者？」

「私が、私達だけが知っている…。本当のお前を。」
「本当の、俺。」

ルルーシユの記憶には存在しない少女。

知りもしない少女の言葉が、ルルーシユの中で溶ける。

嘘を言っている様には思えなかった。

日常に感じていた違和感に対する解を、この少女は知っている様に思えた。

ルルーシユは少女に意識を奪われたまま、歩みを進める。

近づく彼を見て、少女は僅かに笑みを浮かべて、手を差し伸べた。

舞踏会へ誘う魔女の様に。

しかし、その差し伸べられた手をルルーシユが取ることは無かった。

ルルーシユと少女しか居なかったこの場に、一発の銃声が響く。

誘われるがままに歩みを進めていたルルーシユは、上の空だった意識を戻す。

無頼のコックピットに足を掛け、見下ろしていた少女が、ゆっくりと落ちていく。

その胸を、真つ赤に染めながら。

「お、お、おー！」

落下する少女を、なんとか受け止めたルルーシユは声を荒げる。
撃たれた少女は、彼の腕の中で脱力し、意識を失っている様だった。

「あ……、ブリタニア軍……？」

意識を腕の中で眠る少女から、銃声がした方へと向ける。

そこには一機のサザーランドと、それを囲う様に整列したブリタニア軍人達が居た。

一瞬、ブリタニア軍による救助隊かとルルーシユは期待を寄せたが、それもすぐに裏切られる。

炎放射器を持っていた軍人が、一斉に辺りの死体を燃やし始めた。

「おい、待てよ……。何を……！」

炎は激しく燃え上がり、死体を飲み込んでいく。

人の皮膚が燃える臭いと、喉を焼くような熱だけが充満した。

「お役目ご苦労。ルルーシユ・ランペルージ君。」

サザーランドに乗っていた男が口を開く。

「役目…？ 何のことだ!？」

貴族でも軍属でも無いルルーシユに、ブリタニア軍から役目を与えられた記憶など無い。
い。

そう、今のルルーシユは何も知らない。

この世界を。

「私達はずっと観察していた。」

困惑するルルーシユを余所に、男は言葉を紡ぎ続ける。

懐から取り出した手帳に目を落としながら、男はそこに記載されている内容を読み上げる。

その内容は、ルルーシユが起きてから今に至るまでの行動の記録であった。

「今日の、俺だ……。」

「飼育日記という所かな。餌の。」

「餌……？」

「罨と言ってもいい。その魔女を、C・C・を誘い出す為の。」

「待ってくれ！ 何を言っているんだ!？」

何も分からない。

餌の意味も、魔女も、C・C・も。

男の言っている事は何一つ、ルルーシユには分からなかった。

「私は男爵だからね。これ以上、餌と話す事は無い。」

そんなルルーシユの声を鬱陶しいと言わんばかりの態度で、男は吐き捨てる。

「さ、処分の時間だ。これで目撃者は居なくなる。」

何一つ理解出来ないルルーシユであつたが、ただ一つ。分かつた事があつた。それは自分ももう、この男達にとつて用済みであるという事。軍人達の持つ銃が、一斉にルルーシユへと向けられる。

(俺が、終わる？ 何も分からずに。…こんな、簡単に……？)

理不尽だ。

(ふざけるな……！)

理不尽だ。

(力、力さえあれば……！)

この世界は、理不尽だ。

(ここから抜け出す力！ 世界に負けない力が!!)

ルルーシユは怒り、憎んだ。

この理不尽な現実を、思い通りにならない世界を。

そんな彼の気持ちに呼応するかの様に、意識を失っていた少女は、再び意識を取り戻し――。

ルルーシユの唇と自身の唇を合わせた。

ただ触れるだけのキスだった。

恋人同士が、家族が、スキンシップで行うような、そんなキス。

しかし、彼女のキスは、そんな優しいものだとは、ルルーシユは到底思えなかった。

ルルーシユの意識は現実を離れ、別の何かに絡めとられる。

なんだ、これは。

ルルーシユの脳内に、様々な情報が流れ込む。

(力が欲しいか。)

少女の声が響く。

(力ならお前はもう持っている。)

(忘却の檻に閉じ込められているだけだ。)

(思い出せ、本当のお前を。王の力を……!)

(今こそ、封印を…、解き放つ!!)

ルルーシユに掛かっていた霧が取り払われ、様々な記憶が溢れ出す。

母の死。

二人の妹。

王の力。

黒の騎士団。

ゼロ。

(そうか……。)

(俺の日常に、棘の様に突き刺さっていた苛立ち。ああ、全ては偽りの記憶。

思い出した。)

(俺は…、俺は………！)

(俺が、ゼロだ!!)

ルルーシユ、許しは請わないよ。

友達だろ、俺達は。

目に浮かぶのは自身に銃口を向け、そう呟く親友だった男。

(…ああ、それがお前の答えか、スザク………!!)

再び意識は現実へと引き戻される。

何も変わらない。

燃え続ける死体も。

銃を向ける軍人達も。

理不尽な世界も。

しかし――。

「私を処分する前に、質問に答えてもらいたい。」

ルルーシユはゆつたりとした動作で、少女、C・C・Cを下ろす。

心臓を撃たれた筈のC・C・Cは、確かに自分の脚で立ち、ルルーシユに道を譲るよう
に彼の後ろへと移動した。

「無力が悪だと言うなら、力は正義なのか？」

復讐は悪だろうか。友情は正義足り得るだろうか？」

ルルーシユはゆつたりとした足取りで、前へと進む。

銃も何も持たないただ学生。

それが油断を招いただろう、男は余裕のある表情を浮かべたまま、口を開く。

「悪も正義も無い。餌にはただ、死という事実が残るのみだ。」

「……そうか、ならば君達にも事実を残そう。」

ルルーシユは最早、ただの学生では無い。

何も変わらないこの場で、唯一変わったもの。
それを彼は行使する。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる。」

その一言に、男は初めて恐怖をあらわにした。
しかし、もう遅い。

「貴様達は、死ね!!」

絶対順守の力。

それに抗う事は、何人たりとも不可能。
死が言葉となって、軍人達に降りかかる。

「「「Yes, Your Highness!!」」」」

目の前で自らの命を絶つ男達を、ルルーシュは詰まらなそうに眺める。

(あの日から、俺の心には納得が無かった。噛み合わない偽物の日常、ずれた時間。別の記憶を植え付けられた、家畜の人生。

しかし、真実は俺を求め続けて……。)

(そう、間違っていたのは俺じゃない。世界の方だ!!)

ルルーシユの目の前の天井が崩れ、二機のKMFが現れる。

黒の騎士団の主力、紅蓮と月下。

その紅蓮の肩には、チャイナドレスを着た一人の少女。

「お兄ちゃん!!」

紅蓮の着地と同時に、少女、アルカは紅蓮から飛び降り、ルルーシユの元へと駆け付け抱き着いた。

「世界は変わる……、変えられる……!!」

妹の抱擁を受け止めながら、ルルーシユは笑みを浮かべて呟く。そんな兄妹、二人の王に対して、従者の様に跪く二機のKMF。

「壊そう、この世界を。一緒に。」

ルルーシユに力強く抱き着きながら、アルカは願いを口にする。

その願いは、人によつては呪いの様だと感じるだろう。

人を混沌へと誘う何処までも純粹で、悪辣な呪い。

しかし、ルルーシユが求めていたものこそ、この呪いにも似た少女の願い。

「ああ、いいだろう……。なぜならば私はゼロ。」

「世界を壊し、世界を創造する男だ!!」

TURN 3 世界は再び動き出す

歳を感じさせない威厳に満ちた男の前に、ルルーシユは引きずり出された。

自身の髪を乱暴に掴み、床に押さえつけているのは親友であった筈の青年、枢木スザク。

その光景を男は、まるで演劇を眺める観客の様に笑みを浮かべていた。

「……元第17皇位継承者、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア……。久しいな、我が息子よ。」

「……っ！ 貴様あ……！」

憎き相手であるブリタニア皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアを前に、ルルーシユは射殺さんばかりの鋭い視線で彼を視界に入れようとする、が。

「ギアスに使わせない。」

枢木スザクにそれを阻まれてしまう。

ギアスは封じられ、身体も拘束されてしまっている現状、ルルーシユに出来る事はされるがままに、床に這いつくばる事だけだった。

そんなルルーシユの頭を床に押さえつけながら、スザクは静かに口を開く。

「恐れながら申し上げます。……陛下、自分を帝国最強の12騎士、ナイトオブブラウズにお加えください。」

「ゼロを捕らえた褒美をよこせと?」

スザクの進言に、ルルーシユは思わず目を見開き、彼を見つめる。

「お前……!!」

「言った筈だよ、ルルーシユ。俺は、中からこの世界を変えると。」

「友達を売って出世するのか!?!」

「そうだ。」

ルルーシユの問い掛けにスザクは酷く冷たく、淡々と言葉を紡ぐ。

変わった。

以前の彼には陽だまりの様な温かみが、温和な雰囲気があった。

目的の為に努力はすれど、人他者を犠牲にする様な真似はしなかった。

そんな彼を見つめながら、ルルーシユは自虐的に僅かに笑みを浮かべる。

いや、変えたのは俺か、と。

「……良からう、今の答え気に入った。」

愉快そうにシャルルは笑みを浮かべながら、玉座から立ち上がり、ルルーシユの元へと歩を進める。

「では、ナイトオブラウンズに命じる。ゼロの左目をふさげ。」

「……イエス、ユア・マジエステイ。」

スザクは床に押さえつけていたルルーシユの顔を無造作に持ち上げ、左目を塞ぐ。

「皇子でありながら反旗を翻した不肖の息子……。だが、まだ使い道はある。」

そう口にしながら、ゆっくりと近づいてくるブリタニア皇帝を、ルルーシユは見据える。

血の繋がりを嫌でも実感させられる、ルルーシユと同じアメジスト色の瞳。その瞳が徐々に赤黒く、変化していった。

「…な、何?！」

その瞳を、ルルーシユは知っている。

人の理から外れた超常の力。

ギアス。

「記憶を書き換える。ゼロである事、マリアンヌの事。ナナリーとアルカの事。全てを忘れ、ただ人となるがよい。」

「やめろ!!!」 また俺から奪うつもりか!? 母さんを……、あいつらの事まで!!!!!!

ルルーシユの戦う理由であり、生きる目的。それが今、奪われようとしていた。

しかし、必死に抵抗するルルーシユを、彼の親友であった筈のスザクが押さえつける。

「シャルル・ジ・ブリタニアが刻む……。新たなる偽りの記憶を……。」

「やめろおおおおおおおおおおお!!!」

ルルーシユの記憶が、一つ一つ砕かれていく。

マリアンヌが、ナナリーが、アルカが、ゼロとしての己が。ルルーシユの中で崩れ落ち、そして全てが書き換えられた。



「C. C. ……。」

記憶と共にブリタニアに対する怒りが、皇帝に対する憎しみが、ルルーシユの心につつと湧いてくる。

不機嫌な様子を隠そうともせず、低い声でC. C. に問い詰める。

「私では無い、あの男にギアスを与えたのは。」

彼女の我関せずという様な口振りに、ルルーシユは顔を顰める。

(この女……、最初から知っていたな……。)

何処までも秘密主義な彼女に対し、一言言つてやりたい気分だが、状況が状況だ。アルカもこの場に居る。文句は後からでも良いだろう。

「……ふん。ナナリーは何処にいる？」

「探してはいるんだけど、難航中……。黒の騎士団が壊滅状態じゃあ……。ね？」

形の良い眉を下げながら、アルカが小さく呟く。

「そう責めてやるな。こいつが居なければこうして戦力さえまともに残らなかつたんだ。この一年、アルカは良くやってたよ。」

「いや、そういう意味で言っただんじや……。」

C. C. はアルカを庇う様に言葉を紡ぎながら、腰に手を回し、自身の胸に彼女を寄せながら、頭を撫でる。

「いや、あの……、C. C. ……。兄上の前で……、恥ずかしいよ……。」

「良いじゃないか、減る訳でもあるまいし。」

そんな二人の様子に呆れた表情を浮かべ、ルルーシュは頭を抱える。

「……お前らなあ……。」



「弾けるブリタニアあ!!!」

カレンの言葉と同時に紅蓮の右腕が熱を帯び、掴んでいるサザーランドへと伝播する。

内側から膨れ上がり、次第に元の形状を保てなくなったサザーランドは、激しい音を立てて爆発した。

その様子をモニタールームから見ていたルルーシユは、口角を僅かに上げる。

「よくやったQ1。次は21階へ向かえ。P4は階段を封鎖しろ。R5は——。」

この感じだ、自分が求めていたのは。

自分の思い通りに事が進み、バベルタワーに蔓延るブリタニア軍が順調に数を減らし
ていく。

「——順調だな。流石と言うべきか。」

刻一刻と変わる戦局に目を配りながら、ルルーシユは感嘆の声を漏らす。

指揮系統がアルカからルルーシユへと引き渡され、作戦の目的が奪還から脱出へ変わった現在。

適度に張り詰めていた緊張感も身体から抜け、不敵な笑みを浮かべていた。

「脱出ルートはアルカが事前に用意していたポイントを使えば良い。戦力も物資も十分。欲を言えば無窮が欲しかったという点くらいか。」

今回の作戦に無窮は無い。

機体の大きさ自体が一般的なKMFの規格を超えていて、屋内戦闘に向いていないからだ。

そんなアルカは今、C・Cと共に狭い無頼のコックピットの中に居る。

「俺に指揮を任せなくても良かったんじゃないか？」

『相変わらず意地悪……。私は事前の段取りと準備をしただけ。実際の戦場で全体に指揮出せる程、戦略には長けてないよ。分かってるでしょ？』

意地悪そうに笑みを浮かべながら揶揄うルルーシュに、アルカは不貞腐れた様子で答える。

『まあお前、器用貧乏な所あるからな。』

『うぐっ……………。』

「冗談だよ、ブリタニア軍の相手は俺達に任せておけ。お前達は引き続きそっちの作業を頼む。」

『ああ、分かっているよ。』

『うん、じゃあまた後で。』

アルカ達からの連絡が途絶え、部屋に静寂が訪れた。

「また後で、か。」

この一年、別人として過ごしてきたルルーシュからしてみれば、こうして記憶を取り戻すまでの日々は一瞬の事の様に思えた。

しかし、アルカはどうだ。

不安だっただろう、寂しかっただろう。さぞかし世界は残酷に映っただろう。

「ああ…。そんな思い、もうさせてやるか。」

ルルーシュの瞳に再び決意が宿る。

全ては自身の願い、妹達の幸せの為。
少年は再び覇道を歩む。



ブラックリベリオン以後、ブリタニアからの追跡を逃れていた黒の騎士団残党によるバベルタワー襲撃事件。

ブリタニア軍からも複数のKMFが投入され、現エリアーの総督であるカラレスも自ら出陣した事から、黒の騎士団による反抗もここまでかと思われていた。
しかし。

『日本人よ！ 私は帰ってきた!!』

一人の男の手によってブリタニアは再び土の味を知る事となる。

『聞けブリタニアよ！ 刮目せよ！ 力を持つ全ての者達よ!!』

……私は悲しい。戦争と差別、振りかざされる強者の悪意。間違ったまま垂れ流され

る悲劇と喜劇。世界は、何一つ変わっていない。

———だから、私は復活させねばならなかった!!」

英雄の復活。

『私は戦う！ 間違つた力を行使する全ての者達と！

故に、私はここに合衆国日本の建国を再び宣言する！

国民たる資格はただ一つ、正義を行う事だ!!』

ある者は歓喜した。

ある者は恐怖した。

ある者は憎悪した。

世界は今、再び一人の男を中心に周り始めた。



中華連邦総領事館 ゲストルーム

赤を基調とした煌びやかな装飾が施された部屋で、カレンとアルカはテレビを眺めていた。

『黒の騎士団の残党とゼロを名乗る人物は、未だに中華連邦総領事館の一部に立てこもっています。』

しかしご安心ください。負傷したカラレス総督に代わって、ギルフォード総督代行が率いる軍が——。』

カレンは喰い入る様に、アルカは読書をしながら横目で、テレビに映し出されている総領事館周辺のライブ映像を見ている。

「負傷、ねえ……。」

「カラレスが死んだこと、公表しないのね。」

「無用な混乱を避ける為か、他国に弱みを見せない為か。まあ、どっちでもいいけど。」

ふわあ、と呑気に欠伸をしながら、アルカは本を閉じて軽く身体伸ばす。

「それにしても、すごい騒ぎだね。」

テレビの映像を眺めながら、カレンは他人事の様に感嘆の声を漏らす。

現在、アルカ達が滞在する中華連邦総領事館の周りには、無数のKMFが四六時中睨みを効かせている。

ブリタニアの領土内と言えど、ここは総領事館。

国際問題という壁に阻まれ、膠着状態が続いているが、このままという訳にはお互いいかないだろう。

アルカ達は今まさに、喉元に銃口を向けられているのだ。

「当然だろ。」

二人しか居ない筈のこの部屋に、新たな声加わった。

アルカは勿論の事、カレンにとっても馴染みのある声だった。しかし、何かに遮られたかの様にその声はくぐもっていて、少し聞き取りづらい。

その人物は仮面を身に着けていた。

今まさに、ブリタニアから狙われている渦中の黒い仮面。

「演説お疲れ様！」

その声にいち早く反応したのはアルカだ。

先程まで退屈そうに欠伸をしていた面影は無く、その顔はハツラツとしていて満開の笑みを浮かべている。

「ああ、本当に疲れたよ。手振りだけとは言え、あいつの動きを真似するなんて……」

言葉が後ろになるにつれ、段々と言葉がクリアになっていく。
身に着けている仮面を外したからだ。

仮面の中が息苦しかったのか、先程まで身に着けていた少女、C・Cは「ふう」とため息を吐きながら、肌張り付いた髪をかき上げる。

「あんた……、何時の間に入れ替わって……。」

仮面の下の顔がルルーシュだと思いついていたカレンは、口をぽかんと開けたまま唾

然としている。

「演説の前だ。声は録音、現れた時点で既に別人。マジックショーと同じだな。」

「……気に入らないわね。私達にまで秘密にするなんて。」

「私達？ 私に、だろ？」

「アルカ！ あんたも知っていたの!？」

カレンは顔を険しくしアルカを睨みつける。

「いや、ほら。話している時間が無くて、ね？」

「罰が悪そうに頬を掻きながら、鋭い視線を向けてくるカレンからアルカは目を逸らす。」

「落ち着けカレン。アルカをそう虐めてやるな。実際、時間が無かったのは本当だったんだ。記憶を取り戻したとはいえ、ルルーシユは未だに囚われのお姫様。」

（お姫様……？）

「さっさとアツシユフードに戻らないとアリバイが作れないだろ？」
「それは、そうだけど……。」

カレンと言葉を交えながらマントを脱いだC。C。は、ソファに座っているアルカを後ろから抱きしめ、身体を摺り寄せる。

「そんな事より私は疲れたよ、アルカ。とつとと風呂に入つて床に就こう。」

「それは良いけど…、本当にそれだけで終わるの？」

「さあな。」

C。C。は妖艶な笑みを浮かべながら、アルカの耳に口を近づけ、それを啜える。
その光景を見ていたカレンは少し頬を赤らめながら口を開く。

「あ、あんた達ねえ……。こんな状況なのに……。」

「何だ、また嫉妬か？ 混ざりたいのか？ まあお前も年頃だからな、そういう事に興味を持つのも仕方ないが——。」

「そういうのじゃないわよ！ 大体アルカつてまだ13とかでしょ!? 私は犯罪に手を

染めるのは勘弁……。」

「はっ、今更犯罪がどうか言われてもな。それ以上の事をやってきているだろうに。」
「それ以上の事、って……。」

カレンはゆでだこの様に頬を赤らめる。

「黒の騎士団の事だ。何を想像している？ むつつりめ。」

頭上で繰り広げられる言い合いも慣れた様子で、アルカは収まるのを静かに待っている。
る。

彼女は知っている。経験則で知っている。ここで口を開いても、事態は何も変わりはない。
しない。

だったらそこに労力を使わなくても良いでしょ、この後の事考えると体力残しておかないと意識飛びそうだし。というのが彼女の今の心境だ。

「ふん、相変わらず五月蠅いやつだ。行くぞ、アルカ。」

「あ、うん。」

カレン弄りに満足したのか、C・C・は声かけるや否や、彼女の手を取り立ち上がり、部屋の出口へ向かう。

「じゃあ、今日はお疲れ様。おやすみ、カレン。」

「え、ええ…、おやすみ……。」

会話に体力を持っていかれたのか、作戦の後よりも顔に疲労の色を浮かべているカレンは、覇気の無い声で応じる。

そんなカレンに苦笑いを浮かべながら、アルカは部屋を後にした。

．．．

風呂も済ませ、火照る身体を冷ましているアルカは、ふと険しい表情を浮かべてC・C・に問う。

「今回の、生き残りは……?」

「……………話にも聞いているだろうが、ト部は死んだ。ルルーシュを庇ってな。他の団員達もブリタニア軍にやられたり、タワーの崩壊に巻き込まれたり……。損失は6割ってところか。」

「……………そつか。」

少し悲しそうに、それでいて何処か安堵した様に。アルカは複雑な表情を浮かべる。

「生き残った団員達のギアスの効果は確認済み。ゼロがルルーシュだという事は憶えていない。」

「……………そう、なら良かった。」

「複雑そうだな。無事に成功したと言うのに。死を悼んでいるのか?」

「…どうだろうね。ギアスを掛けずに済んで安堵している自分が嫌なのかも。死を悼むとか、もう出来なくなっちゃったよ。」

自嘲する様な表情を浮かべ、アルカはそう語る。

そんな彼女の笑みはどこまでも綺麗でいて、何処までも人間離れしていた。

TURN 4 逆襲の処刑台

「改めて状況の確認をしようか。新しく分かった事もあるし。」

バベルタワーの作戦から二日後の正午過ぎ。

アルカ、カレン、C・C・はトウキョウ租界の地図を囲んでいた。

本来は昨日行いう筈だったが、アルカが腰痛に襲われ動けなくなった為、今日までもつれ込んだのだ。

その原因を作った魔女はまるで他人事の様に知らん顔。

アルカが寝ている間、C・C・とカレンのいつもの言い争いが絶えなかったという。

閑話休題

「兄上は今、皇帝直属の機密情報局に監視中。本部はアツシユフオード学園の地下。このトップは元純血派の騎士、ヴィレッタ・ヌウ。彼女は一度、兄上のギアスに掛かっているからギアスは効かない。まあ順当な配役ね。」

学園の機報局の監視員は確認できるだけで50名ほど。ヴィレッタを含む教師役が40名以上。生徒役は1名…、偽兄の事ね。その他は外部の業者に偽装していたり、用務員だったり。」

「針を通す穴すら無いって感じだな。窮屈そうだ。」

「C. C. の言う通り、学園中にカメラが設置されていて常に記録されている。現状、兄上との接触はほぼ不可能。」

それと、これは昨日分かった事なんだけど。やっぱり私と姉上の記録は消されているみたい。生徒の記憶も、生徒会で撮った写真も綺麗さっぱり。私の変わりは居ないけど、姉上に関しては偽兄にそのまま入れ替わっているみたい。その事から——。」

「ナナリーの身はブリタニアが確保している可能性が高い、と。」

「わざわざ代わりまで用意しているからね、ほぼ間違いないと思う。私の事に関しては、まあ、記録を消去される覚えはあるかな。」

カレンについては特に何も。シユタットフェルト家のご令嬢で、元生徒会メンバーで、絶賛指名手配中のテロリスト。学園に戻らなかつたのは正解ね。」

学園について分かったのはこんなものかな、とアルカは表情を柔らかくして背をソファの背もたれに預ける。

「何処でそんな情報を……。」

口を閉ざしたままアルカの話聞いていたカレンが口を開く。

「兄上から。昨日メール来た。」

携帯をヒラヒラとカレンに見せながら、アルカは悪戯が成功した子どものような笑みを浮かべる。

「携帯、渡しておいたの。兄上が使っているものと全く同じ型番のやつ。学園の状況、どうなってるか知りたくて。」

「でも貴女さつき、常に監視されてるって……。」

「兄上の事だからポケットのの中とかで文字打ったんじゃない？」

「……相変わらず器用なやつね……。」

カレンは何処か呆れた表情を浮かべている。

「それで？　ここまで分かって私達に出来る事は？」

「何にもない。監視の穴を掻い潜るのも、自由を手にするのも、全部兄上次第。情けない話だよ、待つてることしか出来ないなんて。」

「ここを出る訳にもいかないものね……。」

歯がゆい気持ち在必死に抑えながら、カレンは弱々しく呟く。

「精々、中華連邦との取引を上手く進めておくしか無いんじゃない？」

アルカはそう言いながらカメラの映像が映し出されているモニターを見る。

そこには廊下を進む二人の男が映し出されていた。

一人は顔に白粉を塗った大宦官、高亥。

もう一方は彼の少し後ろを歩いている長身長髪の武官、黎星刻。

「お出迎えする必要があるな。」

「碌な歓迎も出来ず、申し訳ございません。」

謝罪を述べながら目の前の中華連邦からの使者に紅茶を出す。

「お口に合うかは分かりませんが。」

「構いません。寧ろあなた方こそ、私達の客人。碌な支援も出来ず……。」

「いえ、こうして匿ってくれるだけでも十分です。それと、バベルタワーの時に借りした服、ありがとうございます。お返しいたします。」

綺麗に折り畳まれたチャイナ服をアルカは差し出す。

「これは差し上げますよ。この煌びやかな装いは、貴女にこそ相応しい。」

齒の浮く様なセリフを平然と口にしながら、星刻はアルカに微笑みかける。

「ほう、中々分かる男じゃないか。深く入ったソリッド。浮き出る身体のライン。ああ、実に良かった。有り難く貰っておこう。」

「あんたが言うのと、厭らしく感じるのは私だけ？」

「……………二人は少し黙ってて……………。話が進まないから…………。」

二日前の晩の事が脳裏に過ぎる。

恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい。

「えっと。ほ、本題に入りましょうか…………。ブリタニアからの要求は？」

頬を赤らめながら、手に変な汗をかきながら、アルカは高亥に問う。

今まで口を開いていた星刻はあくまでも武官。この総領事館の主であり、ブリタニアと交渉しているのは高亥だ。

「変わらず身柄の引き渡しを要求してきていますが遅滞させています。一週間は持つか

と。」

「中華連邦政府は何て?」

「今は何も。」

高亥の言葉に星刻はほんの少し顔を曇らせる。

「この事はゼロにも伝えておきます。……それと、これ今回の分です。」

アルカはカレンに目配せをして、彼女はそれに応じ、懐からCDの様な形をした記録媒体を取り出す。

「紅蓮と無窮の戦闘データ……、助かります。」

受け取ったのは高亥の傍で控えていた星刻。

「今回はチョウフ基地での……。」

「ああ、あの藤堂奪還の時の。」

「こんな事をして下さらなくても、助力は惜しまないと申しておりますのに。なあ、星刻？」

上機嫌な様子で、高亥は星刻に同意を求める。まるでそれが幸せかのように。協力するのが当たり前だと刷り込まれた様に。

「いえ、貰つてばかりでは……。」「……………」

星刻は何も答えない。

眉間に少し皺を寄せ、黙ったままディスクを眺めている。が、それも一瞬の事。すぐに柔和な笑みを浮かべて、再び口を開く。

「そんなに小出しにしなくても、助力は惜しまないと言うのに……。そんなに我々は信用無いですか？」

自嘲気味に、それでいて何処か自信ありげに、星刻は言葉を紡ぐ。

「そんな事……。信用が無かったら、こうして揃いも揃って身を預けません。ただ……。」

「ただ？」

「手数が減るの、嫌いなんです。」

アルカと星刻。お互いがお互いの顔を見据え、笑みを浮かべている中、1人の団員が焦った様子でこの部屋に入ってきた。

「何ですか、騒々しい。」

「た、大変です！ 扇さん達が!!」



カラレスという統率者が居なくなったエリアーのブリタニア軍。

混乱の中、軍を治めたのはコーネリアの騎士、「ギルバード・G・P・ギルフォード」。

そして今は亡きダールトン将軍の子ども達、「グラストンナイツ」。

忠義に厚く、騎士としての振る舞いもさることながら、実力も折り紙付き。

国民、そして軍内部からの信頼も非常に厚く、今や誰もが認める総督代理だ。

そんな彼が要求してきたのは、ゼロとの一騎打ち。

捕縛している扇を含む黒の騎士団幹部、その他の団員達。合計256名の公開処刑を明日に決行。

部下を救いたければ、1人で姿を表せ。

そんな彼の声明が発表されたのがつい数時間前。

「どごうしよつ……。」

カレンが重々しく口を開く。

その顔は何処までも悲痛に満ちていて、見るに堪えない。

「どうする、って言われてもな。公開処刑が行われるのは総領事館の敷地の真ん前。つまりはブリタニアの領土内。国際問題という壁で今まで手を出してこなかったものの、私達が一步でも踏み出してしまえばそれも無くなる。どうにか出来るのはただ一人、外に居るルルーシュだけだ。」

「ルルーシユからの連絡は？」

「無い。そもそも連絡手段がもう無いよ。」

「渡した携帯はどうしたのよ。」

「携帯の2台持ち何て怪しすぎるでしょ…。兄上には一度連絡したら破棄してつて言つて渡したから……。」

「八方塞がり、というやつだな。」

C・C・の言葉に何も言い返せず、アルカもカレンも再び口を閉ざす。

空調の音のみが耳に入る静かな部屋。

そんな静寂が続いたのも一瞬の事。

沈黙はすぐに破られた。誰かが声を発した訳でも無い。この空間に新しい人物が加わった訳でも無い。

外から鳴り響いた爆発音。

激しい音が総領事館中に響く。

「!!」

突然のイレギュラーに、三人は顔を引き締めて立ち上がる。

・ ・ ・

その騒ぎの中心で、1人の男が黒の騎士団員に刀の切っ先を喉元に向けていた。

「黒の騎士団は滅ぶべし！」



「アオモリを思い出すわね。」

分解された銃を組み立てながら、カレンは口を開く。

「本当、何時も突然。人気者も辛いね。」

「あれよりはマシだろ。全員、服を着ているからな。」

ト部さんが見つけた秘境の温泉。

久しぶりに一息付けると思って一同舞い上がっていたあの日のアオモリ。

まさか全員がお風呂に浸かっている時に、ブリタニア軍の襲撃を受けるなんて思っても無かった。

あの時は焦りに焦った。

皆が服も着ずに荷物を抱え、私は顔にタオルを巻かれてカレンに担がれて。

それを考えると、こうして襲撃が来るのが分かっている今の方が確かにマシに見える。

「高亥にはギアスを掛けたんでしょ？　なのはどうして。」

「さあな。ただ、ここを取られると——。」

「私達と兄上は、再び離れ離れに……。」

そんな事は許容出来ない。

私はもう、失いたくない。何も、手放したくない。

考えに更けていると、ふとドアが開く音が部屋に響く。

「意外だな、1人で来るとは。」

「中華連邦の総領事は、合衆国日本を承認した筈だけど？」

「その方は亡くなられる予定だ。」

星刻の口から語られる物騒な響きにアルカとカレン、C・Cは驚きの表情を浮かべている。

「それとも黒の騎士団が潰える道を選ぶか。」

「待て！ いきなりそんな!!」

カレンは持っていた銃の口を星刻に向ける。

「戦闘データだけじゃ満足出来ませんでした？」

声を荒げるカレンとは対照的に、アルカは静かに、それでいて何処か諦めた様な笑み

を浮かべて問う。

「いえ、非常に役に立っています。ただ……。」

「……………」

「私も手札は多い方が好みでしてね。」

アルカとC・C・は顔を見合わせ、お互いの意思を確認する。

「分かった。高亥は私達と戦って、死んだことにすればいい。」

「C・C・……………」

これは単純な話では無い。

高亥の意向に沿えない部下が、武力行使に出た。というようなシンプルな構図では収まらない。

自らの野望、願望を叶える為に。お互いがお互いを最大限利用し合う。

その為なら相手に罪を被せる事も厭わない。

そういう類の政治的な話だ。

「私達は思わぬ引き金を引いたらしいな。高邁なる野望か、俗なる野心か。」

そういうC. C. の言葉を聞きながら、星刻はその端正な顔に笑みを浮かべた。

◇◇◇

翌日 公開処刑当日

「これはどう受け取ったらいいのかしら？」

馴染みのある赤いパイロットスーツを身に着けながら、カレンは疑問を口にする。

昨日の夜、黒の騎士団を襲撃した当の本人が、今はこうして支援を行っている。

「ゼロが現れたら動いてくれていい。」

星刻が用意したのは潤沢な物資に、数機のKMF。

そして、無窮と紅蓮。

「しかも整備済みだなんて、至れり尽くせり。」

「君達は昨日、誠意を見せてくれた。ならばこちらも、そうするべきだろう。」

「我々ならブリタニアに発砲しても知らん顔を決め込めると?」

カレンと星刻の会話を少し離れた場所で聞いていたC・C。が会話に混ざる。

「悪い取引では無い筈だ。」

「武官と聞いていたが、政治も出来る様だな。」

星刻に興味を持ったのか、僅かに口角を上げるC・C。

「ブリタニアは嫌い。上の老害達はもつと嫌い。その二つを相手取れる私達を最大限利用する。しかも自分の手は汚さずに。高亥に従つてたのは演技でこつちが本心、か。」

カレンと同様に、パイロットスーツに身を包んだアルカが3人に寄る。

「良いじゃないですか、そっちの方がカッコいいですよ。良く似合っている。」

「そういう君は無理をしていないか？ 非凡な才能を持つているがまだ若い。こういう事に関わるよりも花を愛でている方が可愛い。昨日の2人に揶揄われている姿が年相応で好ましく映ったが。」

「……あれは……、忘れて下さい……。」



中華連邦総領事館 外縁部

『皆……！』

少し手を伸ばせば届く程の僅かな距離。

総領事館に居るアルカ達はただ眺める事しか出来なかった。

『動くな。ここから出れば、お前も殺されるぞ。』

『分かってる……！　でも………！！』

カレンの気持ちはよく分かる。

目の前に助けた人が居るのに届かない。

私もよくその屈辱を味わってきた。

それでも私は信じている。

兄上を、ゼロを、ルルーシュを。

今の私達に出来る事は、ただ信じて待つだけ。

「……自在戦闘装甲機部隊は戦闘準備を。ゼロの起こす奇跡を信じましょう。」

・ ・ ・

ギルフォードの要求通りゼロは一人で現れ、ギルフォードの一騎打ちに応じた。しかし。

『悪を成して、巨悪を打つ!』

ゼロがそう口にした途端、激しい音を立てて処刑場の足場が崩れた。

それが合図だったのかの様に。

ブラックリベリオンの時と同様、租界の階層構造の分解。

処刑場の位置は総領事館の敷地よりも上に位置している為、そこに居たブリタニア軍、黒の騎士団員達はそのまま雪崩の様に敷地へと滑っていく。

総領事館の敷地、つまりは中華連邦の領土内。

『アルカ! 突入指揮を執れ!!』

「全く、苦手だと言っているのに……! 先導は紅蓮二式、自在戦闘装甲機部隊は紅蓮に

続いて! 人質の救出が最優先!」

『了解!!!』

「ここは私達の領土内! この場にいるブリタニア軍は殲滅してください!」

総領事館の敷地内に引きずり込まれたブリタニア軍は素早く態勢を立て直し、迫って

来る黒の騎士団を迎え撃とうとする。

しかし。

『撃つな！ ここは中華連邦の治外法権区だぞ！』

国際問題という障害が、ブリタニア軍の動きを抑制する。

領土内に堕ちたブリタニア軍は手出しできず、ただ人質が解放されていくのを傍観することしか出来ない。

ギリギリ踏み止まったブリタニアの戦力も、ブリタニア領土内から射撃を行うのみ。その射撃も紅蓮と無窮に阻まれ、意味を成さないものとなっている。

この場にいる誰もが、黒の騎士団の、ゼロの一人勝ちで終わるかと思った矢先、イレギュラーが現れた。

物理法則を無視しながら、いや。無視している様に錯覚させながら移動する金色の機体。

ブラツクリベリオンの時に初めて戦線に導入された後、量産が正式に決定した次世代機「ヴァインセント」。

立ちただかる無頼を切り伏せながら、真っ直ぐゼロへと向かっている。

(あれが噂の……………。)

バベルタワーの時には現れ、ト部を始めとする何人かの団員達を殺害したイレギュラー。

話には聞いている。そして手出し無用とも。

(ロロ・ランペルージ。私にとっての偽物の兄か。)

ゼロルルルーシユから、つい先程連絡が来ていた。

ヴァインセントは自分が対処するから手を出すな、と。

何か考えがあつての事だろう。

「人質の救出が最優先。イレギュラーは手出し無用です。」

結果的にヴェインセントはあれ以上、私達の邪魔をしなかった。

ヴェインセントの窮地を兄上が身を呈して救い、同じ様に兄上の窮地をヴェインセントが救ったのだ。

そして。

『どうして、僕を……。』

『お前が、弟だから……。』

私に対してのみ、オープンにされたチャンネル。

コックピット内に響く二人の声。

幼さが残る少年の声には、動揺が見える。

対する兄上の声には、論ずような穏やかさが。

『植え付けられた記憶だとしても、あの時間に嘘は無かった。』

畳みかける様に兄上は言葉を紡ぐ。

家族、大切、弟。

しつかりと染み渡る様に、強調して、口説く様に、兄上は言葉を続ける。

その光景はまるで、本当の兄弟の様で。理想の兄の様で。

そして、ひどく歪な形をしていた。

本当はそんな事、思っても無い癖に。

『お前の居場所は、ここにがある。』

ロロ・ランペルージ。

記憶を失った兄上の監視役として配置された偽りの家族。私にとっての偽物の兄。

姉上の居場所を奪った男。

「……ああ、気持ち悪い。」

彼と私、今後の事を考えると気が重くなる。



特一級犯罪者。つまりは黒の騎士団の団員達が解放され、逃げおおせたその日の夜の事。

一人の青年がアツシユフオード学園を眺めていた。

決して懐かしむ様な優しい目では無い。

その眼差しは鋭く、険しかった。

「……ルルーシユ……………」

枢木スザク。

ブラックリベリオンでの功績で、ナイトオブブラウズまで上り詰めた、元ユーフェミアの騎士。

初のナンバーズ出身者の騎士侯であり、ナンバーズにとっての英雄。同時に裏切り者。

そんな青年が今、アツシユフオード学園の制服を着て、静かに佇んでいた。

TURN 5 混沌の中で

「黒の騎士団……、ばんざああああ!!!」

玉城が高らかにそう叫び、拘束着を脱ぎ捨てる。

周りの団員達、藤堂までもが彼に続いて雄たけびを上げる。

囚人生活から解放された団員達は、その空いた期間を埋めるかの様にお祭り騒ぎをしている。

そんな彼らの様子をモニターで眺めながら、ルルーシユ、アルカ、C. C.、カレンの4人は総領事館の中で、今後の事について話し合っていた。

「ゼロを助けたナイトメアは？」

「星刻の良図で外に出した。」

いくらゼロを助けた実績があるとは言え、バベルタワーやト部の件もある。そのまま仲間に入れて、はいそうですか、と受け入れて貰えるほど、黒の騎士団は優しい組織で

は無い。あの手のタイプは組織に馴染むのに時間が掛かる。

星刻の案は実に合理的で理に叶っていた。

「星刻？」

聞き覚えの無い名前に、ルルーシユは疑問を浮かべる。

「さつき話した中華連邦の人。武官だけど…、まあ実質ここのトップ。」

「そうか、なら私也使わせて貰うとしよう。」

「ロロ……、偽兄の事は？」

彼の言葉を口にした後、一瞬顔を顰め、改めて言い直す。

ロロ・ランペルージの存在を認められない、そういった様子が目に見えた。

「卜部の件が有るからな。しばらくは伏せよう。知っているのは我々だけでいい。」

「裏切りの可能性は？」

「無い、と考えていい。今のところはな。」

「ギアスを使ったのか？」

C. C. の問いに得意げな笑みを浮かべて、ルルーシユはその手を左目に添える。

「当面は必要無くなった。」

彼の目には毒々しく光るギアスの模様。

ルルーシユが自身の左目にコンタクトを嵌めると、そのなりは身を潜め、彼本来の色が戻った。

「ゼロの正体は？ 組織内で知るのは私達だけとなったが。」

「それも伏せよう。」

「ルルーシユ、私は今まで通り、ゼロの親衛隊隊長で良いのかしら？」

「ああ、引き続き頼む。アルカの事も。」

ルルーシユの言葉にアルカはムスつとしながら、異を唱える。

「兄上！ まだ私子ども扱い!？」

「実際子どもだろ。」

アルカの声に、C・C・は呆れた様に口を開く。

「お前が心配なんだよ、分かってくれ。」

「……本来は、私が……。」

「あーはいはい。いじけていないで皆の所行くわよ。あんたからも話す事、あるでしょう?」

ボソボソと文句を言うアルカを担いで、カレンは部屋を後にする。

「…ギアスの事は後で話そう。アルカの事も。それよりも今は……。」

「ああ……。」

C・C・の言葉に同意する様に、ルルーシユは仮面に手を伸ばし身に着ける。

ゼロとして、先導者として、再び皆の前に立つ為に。

▼
「おお！ 懐かしの団員服!!」

用意された服を手に取りながら、興奮した様に声を上げる杉山。

「よくこんなの用意してたよなあ。」

感心した様に南が声を漏らす。

「中華連邦の人に協力してもらったんです。向こうにはラクシャータさん達も居るので。」

「アルカちゃん。」

皆と同じように黒の騎士団の制服に着替えたアルカが少し得意げな顔をしながら、二人に近づく。

黒を基調にした深いスリットの入ったワンピース型の服。

どちらの希望かは分からないが、C・Cの団員服に非常に酷似している。

「話は聞いたよ、この一年大変だったそうだね。」

「皆さんに比べたら、私は何も……。あ……。」

久しぶりの再会に顔を綻ばせていると、周りの団員達が感激の声を上げた。

「ゼロだ!!」

誰もが話を止め、ゼロの居る方へ視線を向ける。

大体数を占めるのは尊敬の眼差し、そして彼を称賛する声。

「待て待て!」

しかし、その様子に異を唱える人物が居た。

元日本解放戦線の軍人であり、藤堂の懐刀、千葉。

元々彼女を始めとする藤堂一派はゼロに対して忠誠心が有る訳では無い。彼女の反応はそれを踏まえれば、極自然な事だった。

「助けて貰った事には感謝する。…だが、お前の裏切りが無ければ私達は捕まっていな
い。」

「一言あつても良いんじゃない?」

彼女に続く様に、同じく藤堂一派の朝比奈が声をあげる。

「ゼロ! あの時、何があつたんだ!」

扇の言う「あの時」。

ブラックリベリオンでの敗北を招く事となった、突然の戦線離脱。

『全ては、ブリタニアに勝つ為だ。』

団員達の疑問に対して、ゼロは当然の様に、静かにそう語る。

誰もが言葉の続きを待った。しかし、一向に彼からその続きが語られる様子は無い。

「ああ、それで？」

『それだけだ。』

「他に無いの？ 謝罪とか、言い訳とか。」

ゼロの態度に非難の声が上がる中、藤堂がそれを制止した。

「やめろ！」

彼の制止に視線が集まる中、藤堂は静かにゼロの元へと歩を進める。

「ゼロ、勝つために手を打とうとしたんだな？」

『私は常に結果を目指す。』

「……分かった。」

たったそれだけの問答。

それだけで、藤堂には十分だった。

「作戦内容は伏せねばならない時もある！　今は、彼の力が必要だ！　私は、彼以上の才覚を知らない！」

藤堂の力強い宣言に同意するように、扇が壇上へと上がる。

「俺もそうだ！　皆、ゼロを信じよう！」

元々人望は有る男だ。

扇の言葉に団員達は決意の色を顔に浮かべ、次第にゼロを支持する声が再び上がった。



「ルルーシユは何て？」

風呂から上がったアルカの髪を、カレンがワシワシとタオルで拭きながら口を開く。

「ロロ・ランペルージと一緒に監視の穴を付いてゆつくり攻略中だつて。ただ障害は――」。

「学園に戻ったスザクと、ヴィレッタとかいう女軍人？」

「そ、二人ともギアスは効かないからね。」

もうちよつと優しく拭いてよ、と小言を垂れながら、ルルーシユから来た報告をそのまま伝える。

「中華連邦の方は？」

「向こうでディートハルトが上手くやつてくれてるみたい。ラクシャータさんもこつちに合流出来るとか。」

「上々ね。」

「お陰様で。」

よし、終わり。と拭いていたタオルをアルカの頭に被せたまま、背中を叩く。

「雑過ぎない？」

「贅沢言うなら、自分でやりなさい。」

「そうだぞ、カレン。やるならしつかりと乾かしてやれ。」

「アンタはこの子を甘やかし過ぎ……。」

全く、と言いながらC・C・はアルカの後ろに立つて、ドライヤーを掛け始める。

気持ち良さそうに目を細めながら、アルカは再び口を開く。

「しばらくはまた待機かぁ。退屈だね。お祭りでも行く？」

「三日後にやるスザクの復学祝いのやつ？ 捕まるわよ。」

「冗談だよ。」

「なんだ、それ？」

聞き覚えの無い単語に、C・C・は疑問を浮かべる。

「スザクが学校に戻ってきたから、それのお祝いに学園総出でパーティー開くんだって。」

内容的には殆ど去年の文化祭みたいなものらしいよ。」

C・C は去年の事を脳裏に蘇らせる。

世界一オーブんな文化祭。

外部からの沢山の客。

巨大オーブン。

巨大ピザ。

ピザ。ピザ。ピザ。ピザ……………。

「ほう……………」

C・C の目が怪しく光っていたのを、アルカもカレンも見逃していた。

◇◇◇

三日後。

朝、目が覚めると寝る前には着ていた筈の服は身に着けておらず、ベッドの下に丸

まっつて転がっていた。

……まあ、大体何時もの事だ。

しかし、身体の調子が何時もと違う。

「……痛く、ない……。」

主に腰が。

何時もだったら文句を垂れているアルカも、久しぶりにすつきりとした目覚めに困惑の色を浮かべる。

調子が悪いのか。

もしかして飽きられたか。

色々な不安が頭の中を一気に駆け巡る。

「……ねえ、C. C.。……?」

居ない。

隣を見ても、部屋を見渡しても、どこにも居ない。

何時もは居る筈の、少女が。

頭に疑問を浮かべながら、アルカは服を着る事も忘れ、ベッドを降りる。

もう一度部屋を見渡すと、何時もと違う光景に気付いた。

部屋の中央にあるテーブルの上にはポツンと置いてある紙切れ。その紙を手に取り目を通した途端、アルカは顔を青くし、部屋を飛び出した。

「カ、カレン！ 起きて!! カレン!!!」

アルカとC・Cの隣に割り振られたカレンの部屋。

彼女は部屋に入るや否や、まだ寝ているカレンの上に飛び乗り、身体を揺らす。

「……………ん、あ。…な、何よ…。こんな朝早くに……………」

まだ完全に覚醒していないのか、目を擦りながらカレンは目を開ける。

「……………つて、あんた！ 服！ 服はどうしたのよ!!」

目を開けてみれば自身を馬乗りしている裸の美少女。

身体に張り付いた髪が、所々跳ねた寝癖が、赤く染めた頬が、色つぼく見える。カレンの頭は混乱した。

実に混乱した。混沌だった。

何かの扉を開きそうになった。

こういうのを夜這いと言うのか。いや、朝だから違う？

そもそも何でここに？

もしかして私の事……、そうしたらC・C・Cは？

様々な考えが、カレンの頭に浮かぶ。

「そんな事より大変なんだって！ C・C・Cが!!」

カレンのそんな考えも、話を聞いた途端に吹き飛んだ。

「アツシュフォードへ行ってくる。」

紙にはそう書かれていた。

▼
「あつっ……………」

「流石に、密閉空間だと、きついね……………」

二人の少女が汗だくになりながら、不満を吐露する。

「もうちよつと、どうにかならなかつた訳……………」

「急造にしては、良く出来てる方だと、思うけど……………。このラッコ。ほら、2シートだし。」

「2人乗り、つて言つたて、私が肩車しているだけじゃない……………」

「カレンは下半身担当、私は上半身。こう、胸に滾るモノあるでしょ？ 昔の日本に無

かつたけ？ 複数人で1つのロボット動かすやつ！ J a p a n e s e p o p c

u l t u r e !!」

「……………どこで覚えたその知識。」

アッシュフォード学園へと向かったC・C。を連れ戻す為、2人が、主にアルカが考えた作戦。

それは、背の高いラッコのぬいぐるみを着てマスコットとして学園に潜入する事。

女性1人では着こなせない高さである為、アルカが言った通り、2人で役割分担をして動かしている。

肩車しているカレンの負担が大きいのが欠点だが。

「それで？ 今どの辺り？」

「クラブハウスの裏辺り。C・Cの目的がアレならこっちの方に来てそうだけど……。あ、そこ右ね。」

前の見えないカレンは、アルカの指示で足を進める。

ガウエインを操縦していた時のC・C。ってこんな気持ちだったのか、と少しだけ去年のC・C。に同情した。

「……で？ 皇帝にギアスを与え、スザクに教えたのは同じ人物なのか？」

能天気にもコノコと学園内をふら付いていたC・C。C。を捕まえたルルーシュは、人気の無いクラブハウス前で話し込んでいた。

「……………そうだ。しかし、これ以上知ると——」。

「もう巻き込まれている。」

たつぷりと時間を置いて、C・C。は意を決した様に口を開く。

「V・V。」

「V・V・？ まさか、スザクにギアスを……。」

「いや、それは無い様だ。」

「アルカはそいつの事……。」

「ああ、知っている。話さなかったのはお前の為だろう。」

ルルーシユは苦虫を潰した様な表情を浮かべる。

隠し事をされたからではない。妹の抱えている物に気付かなかつた自分を恥じているのだ。

「どういう関係だ？」

「話せば長くなる。」

その一言にルルーシユは悟った。

浅からぬ因縁を、そしてこの魔女が今はこれ以上話す気が無いという事を。

聞くのを諦めてC・C・の脱出ルートを模索する中、自分の名前を呼ぶ少女の声が聞こえた。

「ルル〜!!」

「何だい？ シャーリー。」

穏やかにそう言いながら、C・C・を傍にあるトラックの積み荷へ突き落とす。

中には巨大ピザ用の大量のトマト。

「何か用でも?」

シャーリーがこちらに駆け寄ってくるのを確認し、ルルーシユはすかさず積み荷の扉を閉める。

ブリタニア軍とは何も関係な彼女が相手でも、面倒事は避けたいのだ。

「あのね、ヴィレッタ先生が私を避けてるみたいなの。だから、ルルの方から――」。

あれ? 1人?」

「ああ。」

「……? 今誰かと話してなかった?」

「いや? ここは俺と君、2人つきりだよ?」

積み荷から時折感じるC・Cの気配に冷汗をかきながら、言葉巧みにシャーリーの気を逸らす。

ルルーシユの思惑通り、思考が別の方向へと向かったシャーリー。

恰好のチャンスに思わず視線をルルーシユから逸らしていたシャーリーは、意を決して彼へと視線を戻す。

「あのね、ルル……。私と……。つて、え？」

2人きりだと思っていた、絶好の機会。

しかし、そのチャンスとはある生き物によつて失われた。

大きな、女性なら2人は入れそうな程大きいラッコ。の着ぐるみ。そんな謎の存在が、ルルーシユを啜っていた。

「す、すまない……。ちよつと聞き取り辛いんだけど……。」

「な、何ですか、あなた!!」

突然の来訪者に、怒り半分、困惑半分でシャーリーは声を荒げる。

「ど、どいうつもりだ……。お前達も人に見られたら……。」

「あのピザ女を連れ戻しに来たのよ……。」

「ごめんね？ お邪魔しちゃって。」

突如放り込まれた着ぐるみの中。

そこには汗だくのカレンと、カレンに肩車された同じく汗だくのアルカが居た。

「だったらトマトの中だ。コンテナごと運び出し、藤堂か扇の指示をうおおおおっ!？」

素っ頓狂の声をあげながら、ルルーシユの身体が外へと引っ張られる。

シャーリーが思いつきり彼を引っ張っているのだ。

（ああ、やばいやばい！ 何処かに行ってシャーリーさん!!）

小声でそう言いながら、引っ張り出されない様に、ルルーシユを必死に抑えるアルカ。

「誰ですか!?! 失礼でしょ!!!」

暑さによる疲労と不安定な土台（カレン）。

上手く力が入らず、ルルーシユは引っこ抜かれ、その勢いそのまま地面に転げ落ちていった。

意識をルルーシユの方へと向けると思いきや、シャーリーはそのままアルカ達へ興味を向ける。

「黙ってないで何か言いなさいよ!!!」

そのままシャーリーは力一杯にラッコの頭を引っこ抜こうとする。

(喋ったら私だってバレちゃうじゃない……………!)

(何で、こんなに力強い……………!?)

想像以上の力強さに驚愕しながら、アルカは頭を押さえつけ、カレンは踏ん張る。

(こんな間抜けな事で、バレてたまる、かつ!!)

いくらシャーリーの力が強かろうと、アルカは訓練を受けた人間。

素早く彼女の腕を振り払う。

(良し！ カレン、方向転換!! 撤退準備!!!)

(あんた、人使い荒らすぎ……!!)

「こら！ 待ちなさい!!!」

逃げようとしたアルカ達を、持ち前の反射神経で捕まえ、その拳を顔にお見舞いする。

「痛あ!!」

着ぐるみ越しとは言え、与えられた衝撃に着ぐるみ全体が揺れ、アルカは頭をぶつけ、思わず声を出してしまう。

「……くっ……、シャーリー！ その生き物は!!!」

「ルルーシュ！」

「アーサー見なかった？」

混沌としてきたこの場に、また新たな人物声が加わった。

このパーティーの主役である、枢木スザク。

そしてこのパーティーの主権者、ミレイ・アッシュユフオード。

「大事にしていた羽ペンを取られちゃって……。」

スザクは本当に困った様に眉を下げる。

彼が取られた羽ペンは生前、ユーフェミアが愛用していた物。数少ない彼女の遺品なのだ。

「いや、見ていな……。」

その時、積み荷の中から激しい物音がした。

ドン、ドンと何回も。内側から何かがぶつかる物音が鳴り響く。

ルルーシユはそれの正体を知っている。

そして。

「まさか、この中に!？」

それが決して見られてはいけない、という事を。
特にこの、枢木スザクには。

「いや、猫とトマトはセットでは無い!!」

度重なるイレギュラーの発生に、最早ルルーシユの言語能力すら失われかけている。
そして、とどめに。

「はっ?」

「やっぱ…」

突如、C・Cの居るコンテナが持ち上げられた。

『スタート地点はここなんだろう?』

感じの良い青年の声に釣られて、全員が新たに加わったイレギュラーへ視線を向ける。

そこには黄色のKMFが居た。

第3世代KMF「ガニメデ」と同じ骨格をした、アツシユフォード家が有するクラシックナイト。

今回の祭りの目玉。世界一のピザ作りに用いられる機体だ。

「まさか、ジノ!?!」

『ああ! 面白いなあ! 庶民の学校は!!』

そう言い残し、ジノと呼ばれた青年はC・Cの居る荷台を抱えたまま、颯爽と走り出す。

「おい、待て!!」

それを追うルルーシュとアルカとカレン。

ラッコを追うシャーリー。

騒動に巻き込まれ、KMFから逃げるアーサーを追う、スザクとミレイ。そんな事はつゆ知らず、目的地に向かって機体を走らせるジノ。

相も変わらず、アツシユフオード学園で行われる祭りは混沌を極めていた。

祭りとは、カオスであればある程、面白い。

By ミレイ・アツシユフオード

◇◇◇

「疲れた……。」

「ああ、全くだ。あいつ、トマトの中に落としやがって。」

「誰の所為で……。」

星刻の手配した車の中で、アルカとカレンは項垂れていた。

猛暑の中、半日以上も着ぐるみを着て動き回っていたんだ。無理も無い。

「まあそう固い事言うな。こいつがどうしても欲しかったんだよ。」

そういうC・C・は嬉しそうに笑みを浮かべながら、抱いているぬいぐるみに頬ずりをする。

黒いシルクハットを頭に乗せた黄色い謎の生き物。

C・C・が良く利用していたピザ屋のマスコットキャラクターだ。

「何でそんなものの為に……。」

カレンは呆れた様子を隠す事無く、うんざりとした口調で口を開く。

「ふん、お前には分からないだろう。こいつはな、アルカと私で一生懸命貯めたポイントで引き換えた逸品だ。思い出深いんだよ。」

「C・C・……。」

先程とは打って変わり、何処か感激した様子で顔をキラキラさせてアルカは顔を上げる。

「いや、貴女ちよろすぎ。」

一見、何も収穫が無かった一日の様にも見えるが、そうでは無い。

今日を持って、アッシュフォード学園の機密情報局は、全てルルーシユの物となったのだ。

というのも、例の騒動の中でたまたま顔を合わせたカレンとヴィレッタがきっかけである。

カレンは見たことがあるのだ、ヴィレッタと扇が仲睦まじく一緒に居るのを。

ブリタニア軍人であり、現貴族のヴィレッタとイレヴンである扇の接点。

思いがけず、彼女の弱みを握れたルルーシユは、早速彼女に取引を持ち掛け、手中に収めた。

そして、もう一つ。

「ん？」

車内に軽快な電子音が響く。

アルカの携帯だ。

送信元は彼女の兄、ルルーシユ。

「兄上から？」

送られてきたメッセージを開き、目を通す。

そこに書いてあったのは非常にシンプルだった。

ただ一文、簡潔に記載されてあるだけだった。

しかし、アルカを動揺させるのは、その一文だけで十分だった。

「つ!!!」

あまりの動揺にアルカの身体からは力が抜け、携帯がその手から零れ落ちる。

車が揺れるのと同時に、落ちた携帯が僅かに跳ね、カレンとC・C・からも画面が確認出来る様になった。

そこに書かれていた内容は、カラレスに次ぐ次の総督の名前。

—— ナナリー・ヴィ・ブリタニア。

ルルーシユの妹であり、アルカの姉、その人だった。

TURN 6 天翔ける双壁 ※挿絵あり

中華連邦 首都「洛陽」 朱禁城

「外の世界はどうなっているのですか？ 私は、この城から出たことが無いから……。」

ブリタニアに次ぐ広い国土を持つ中華連邦のトップ、天子は興奮した様に神楽耶に尋ねる。

そんな天子をなだめる様に、近くに控えていた大宦官が口を開く。

「天子様、この洛陽が、朱禁城こそ世界の中心ですよ。」

口調こそ穏やかだが、言葉の裏が丸見えだった。

天子には今のまま、何も知らない子どもでいて欲しいのだろう。そうした方が政治を思い通りに出来るのだから。

「でも……。」

生まれながらの君主。中華連邦の治める盟主になる事を定められた少女、天子。より良い国を作る為に必要な事を、彼女は本能的に理解している。

それは、外の世界の事を学び、取り入れること。

彼女の外に対する渴望は、大宦官の言葉だけでは消えない。

そんな天子に過去の自分を重ねた神楽耶は、優しく笑みを浮かべた。

「では、私が外を見てまいります。そしてそれを貴女に伝えましょう。」

「え?」

「…実は、今日はお暇を告げに参りましたの。」

神楽耶の言葉に、天子はその大きな瞳に涙を貯める。

「そんな…、折角初めてお友達が出来たのに……。」

幼い頃から大人に囲まれ、朱禁城の中でずっと暮らしてきた天子。

当然、友人には恵まれず、一年前にやってきた神楽耶が初めての対等な相手だった。

「申し訳ありません…。でも、夫が待つておりますので…。」

天子の涙に若干の罪悪感を覚えつつも、神楽耶は「それに」と言葉を続ける。

「私の妹に渡さなきゃいけないものがありますの。あの子、危なっかしいから。」



中華連邦から譲り受けた黒の騎士団専用の潜水艦の中で、1人の少女と科学者が顔を合わせていた。

鋼鉄の巨人が見下ろす中、お互いに笑みを浮かべる。

「ひっさしぶり〜。元氣してたあ？」

褐色肌、キセル、白衣、間延びした口調。

以前に会った時と何一つ変わっていない彼女の姿に、思わず笑みを零しながらアルカは応じる。

「お久しぶりです、ラクシャータさん。」

「私が離れている間、無窮を壊していないか心配していたけどお。言いつけ守ってくれた様で安心したわあ。」

「あはは…、あれだけ口酸っぱく言われたら流石に……。」

中華連邦からの支援があるとは言え、今の黒の騎士団には人手も物資も足りておらず、カツカツの状態だ。そんな状態で新規兵装も開発もしていたとなれば、修理に回せる物資も限られてくる。カレンとアルカはラクシャータから無理しない様にと口酸っぱく言われていた。

「それで、あっちの方は？」

「完璧よお。貴女の分も、カレンちゃんの分も。」

得意げに笑みを浮かべながら、ラクシャータは手に持つキセルをそれへ向ける。

「……すごい、これが……」

「正真正銘、貴女専用の第八世代KMF。名を――」。



太平洋奇襲作戦。

本国からエリアーへ向かう空中戦艦を奇襲し、新総督であるナナリーを攫う作戦。

参加メンバーはカレンと藤堂、四聖剣の面々。

航空戦力が無い黒の騎士団は、KMF用の輸送機から戦艦に取り付き、着実にブリタニアの戦力を削っていく。

ゼロも無事艦内に潜入し、順調に事が進んでいたその時、戦局は一気にブリタニア側に傾く事になる。

「……！ ナイトメア！」

紅蓮式式のモニターが、複数の機影を捉える。

ランスロットを元にした量産機「ヴィンセント」。それに付き添う様に空を駆る3機のサザーランド。

「全機、弾幕を張れ！」

藤堂の掛け声と同時に、黒の騎士団は一斉に射撃を開始する。

しかし、相手は宙を自在に舞う翼を持った騎士。

張った弾幕も全て避けられ、瞬く間に距離を詰められてしまう。

一機、また一機と確実に戦力を削がれていく黒の騎士団。

銃で応戦しようとしても、ひらりひらりと避けられ、接近戦に持ち込もうとしても、宙へ逃げられる。

「キッツいねえ、これ。」

声は飄々としながらも、顔を顰めながら朝比奈が呟く。

「しかし、ここを持ち堪えなければ——。」

この不利な状況に置かれた自分達を鼓舞する為に口を開いた仙波だったが、その言葉が最後まで続く事は無かった。

貫かれたのだ。

仙波の乗っている月下のコックピットに、巨大なスラッシュハーケンが突き刺さっていた。

「仙波大尉！」

千葉の絶叫が各々のコックピット内に響く。

彼女の声に答える事無く、月下はそのまま爆発した。

『弱い物虐めは好きじゃないけど、や。』

スラッシュハーケンの射出先に目を向けると、一機の戦闘機の様な期待が浮かんでいた。次第にその機体は変形を繰り返し、一つの騎士の姿と変貌した。

第八世代可変型kMF「トリスタン」。

そしてそれを駆る帝国最強の騎士、ナイトオブスリー「ジノ・ヴァインベルグ」。
そんな存在が、黒の騎士団の前に敵として立ち塞がる。

加えて。

『かくれんぼは、もうお終い。』

通常のKMFよりも大柄なボディ。全身を赤い鎧に包んだナイトオブシックス専用機。

第八世代KMF「モルドレット」。

そのパイロット「アーニャ・アールストレイム」。

「ナイトオブ…、ラウンズ……………！」

忌々しそうに藤堂が呟く。

本国から遠く離れたエリアーでも、その活躍は度々耳にしていた。

ブリタニア皇帝直属の騎士達。ラウンズの出た戦場に決して敗北は無く、その実力は

正しく一騎当千。

そんな存在が、ここに二機。

そして、もう一機。

トリスタンよりもさらに速い速度で、この戦場に向かっている一つの機体を紅蓮は捉えた。

「そんな…、まさか！」

幾度と無く黒の騎士団の前に立ち塞がり、最大の障害として敵対していた白騎士。試作段階のフロートユニットから、正式採用されたモノに換装した白き征服者。

「カレン、僕はナナリーを助けなくてはならない。……今更許しは、請わないよ。」

白い騎士は静かに銃口を紅蓮へと向ける。

「スザク!!」

新総督を守る為、黒の騎士団を根絶する為。最強の3人の騎士がこの戦場に集った。



『状況を確認します。』

普段の姦しさは身を潜め、静かな神楽耶の声のコックピット内に響く。

『戦況は私達が劣勢。残存戦力は月下二機と中破した紅蓮式のみ。対しブリタニアにはナイトオブブラウンズ専用機が3機。ランスロット量産型モデル、ヴェンセントが1機。』

操縦桿を握る淡いミルクの様な髪色をした少女は、静かに目を閉じて俯いている。

『紅蓮の方は私達の方で換装するから、アルカちゃんは気にせず戦いなさあい。』

『ゼロ様の乗る主艦は現在、エンジン部が損傷し徐々に高度を下げています。海面の到達までおよそ5分。つまりは——。』

神楽耶は穏やかな笑みを浮かべて、口調を柔らかくする。

『ラウンズ3機を相手取りながら、沈没するまでの間にゼロ様を救出する。ふふつ、言葉にすると無茶なオーダーですけど……、行けますね？ アルカ。』

「ハイハイ、承知致しました。お姉様。」

アルカは俯いていた顔を静かに上げ、その瞳を開く。

『飛翔滑走結束具、放射障壁共に動作正常。パイロットバイタル、良好。』

上部のハッチが開き、戦場の様子が目で確認出来る。

操縦桿を握る手に力が入る。

機体全体がドライブの振動に包まれ、僅かにコックピット内の温度が上がる。

『頼んだぞ、アルカ。』

「……無窮蒼天式、行きます。」

アルカの静かな言葉と共に、蒼い巨人が勢い良く真上へと射出された。



「カレン、これで君を……！」

海へと落ちていく紅蓮に止めを刺す為、再びスザクはハドロンプラスターの照準を紅蓮に合わせる。

フロートユニットの無い紅蓮が避ける術は無い。

一撃必死の破壊の光。その光が紅蓮に目掛けて放たれた。

「クソっ!!!」

頭上から降って来る赤黒い光線に目を顰めながら、カレンは悪態を付く。

ここまでか。

そう思った矢先。

下から凄まじい速度でその光に向かっていく蒼い閃光がカレンを通過した。

その閃光は僅かに赤い熱を帯びながら、ハドロンプラスターを弾いて上空へと高度を上げていく。

「何?」

スザクが異変に気付いたのはすぐの事だった。

放たれた筈の閃光は、何時まで経っても紅蓮を捉えず、それどころか何かに弾かれて
いる。

「一体何が——っ! 君は…!?!」

スザクの疑問の答えは直ぐに目の前に現れた。

それをスザクは知っている。

紅蓮に次ぐ、黒の騎士団の主戦力。

第七世代KMF相当の力を持ち、元ラウンズのノネットを二度も退いた永遠の名を冠する機体。

「アルカ!!」

無窮は畳んでいた背中のバインダーを広げ、その中から太刀を取り出し、そのままランスロットのハドロンブラスターを叩き切る。

「枢木…、スザク!!」

「くっ…!」

一瞬の間を見せたランスロットに畳みかける様に、コックピットに向かって横薙ぎに一閃。

しかし、その剣筋はランスロットを捉える事無く、宙を切った。後退し、距離を取ったランスロットにトリスタンとモルドレッドが加勢に来る。

『なあスザク。あれってブリーフィングであった一本角だよな?』

「ああ。」

『随分と様子が違うんだが。』

『記録と、違う……。』

アーニヤとジノの言葉に、スザクは再び無窮を黙視する。

確かに一年前とは違う。

腰に取り付けられていた燕尾服の様なバインダーは背中に取り付けられ、その数も増えている。

ブラックリベリオンの際は装備されて居なかった外部装甲も再び装備されており、遠距離武装も節々に確認できる。

無窮蒼天式。

一年前、ブラックリベリオンにおいて活躍した無窮天式の欠点を改善した第八世代相当KMF。

課題であったエナジーの燃費の悪さ、完全武装の無窮を浮かせられない出力の低さを、完璧に補った次世代機。

以前は腰に装着されていたバインダーの一つ一つにフロートシステムと輻射障壁を取り付けた「飛翔滑走結束具」。

それを背中に取り付ける事で安定した飛行性能と、高い防御力を手にした。

時にすればほんの数刻、一瞬の沈黙を破ったのはモルドレットだった。

「排除。」

何処までも冷たい声で、アーニヤは呟く。

肩に取り付けられた砲台を前に構え、激しい光が迸る。

「スザク！ ここは俺達に任せて、お前は総督を！」

「っ！ すまない！」

モルドレットのシユタルクハドロンの合わせて、ランスロットとトリスタンが散開する。

ランスロットは高度を下げる主艦へ、トリスタンは無窮を挟撃する為。

「私を囲む気…？ だけど！」

背中のバインダーで機体を覆い、上空へと勢い良く飛び上がり射線から離れる。

「逃がさないよつと！」

高度を上げる無窮に対し、メギドハーケンを連結させ、その先端からハドロンスピアーを放出する。

KMFの装甲すらも貫くほどの威力を持ったこの武装も当たらなければ意味を成さない。

鞭の様にメギドハーケンをしならせ、追尾を試みるもそれが無窮を捉える事は無い。

「クソつ、大柄の割に素早いな…。アーニヤ！」

「分かってる。」

全身のハッチが開き、モルドレッドから無数の追尾式ボマーが射出される。

ハドロンスピアーと大量の追尾式ボマー。

普通のパイロットなら音を上げていたであろう、激しい弾幕も、障壁で阻まれ、ギリギリで避けられ。

ついには無窮を追っていたメギドハーケンのケーブルも太刀で切断されてしまい、トリストアンは1つ武装を失った。

『ヴァインベルグ卿!』

「……ああ、ギルフォード卿か。」

主艦に取り付いていた千葉と藤堂の相手をしてきた筈のヴァインセントが、加勢に来る。

『あれは、ブラックリベリオンの時の……!』

「そうか、貴方は面識がありましたか。ただ貴方と記憶にある機体と同じだと思わない方が良いでしょう。恐らくこいつは——。」

ジノの言葉が最後まで続く事は無かった。

凄まじい熱量を持った光線が、下から向かってきたからだ。

その光線は真つ直ぐにヴァインセントを捉え、ヴァインセントは与えられる膨大な熱量により内側から膨れ上がっていく。

『何!?! 遠距離で!』

熱に耐えきれなかったヴァインセントは、凄まじい音を立てて爆発する。その光景を見てアルカはふわりと笑みを浮かべた。

「遅いよ、カレン。」

『ごめんって。』

無窮の隣に、フロートユニットを新たに換装した紅蓮が並ぶ。

「紅蓮可翔式、使い心地はどう?」

『悪くない。……私達がここで負けたら、もうおしまいね。』

「……なら、負ける訳にはいかないね。」

蒼と赤の機体。

二機はお互いの主武装を構えながら、ジノとアーニヤに対峙する。

その光景は正しく、高く聳え立つ双壁。

「まさかここまでやるなんてな…。なあ、アーニヤ。」

「…邪魔。」

紅蓮可翔式を新たに加えて、両者は再び激しくぶつかり合う。



「……埒が明かない。」

「そうね……。」

次世代のKMFによる攻防。実力は完全に拮抗しており、膠着状態になっていた。

『アルカ、ゼロ様の居場所が分かりましたわ。主艦後部の庭園エリアに！ただ、時間が

……』

チラリと視線を戦艦へと向ける。

黒々とした煙を立てながら、徐々に高度を下げっていく。

「…………つ。カレン、ここは私が。貴女はゼロを。」

『…………一人で戦う気?』

「空中戦では私の方が長いからね。」

『…………分かったわ。…………死なないでよね。』

そう言い残し、カレンはその場から去る、が。

「おいおい、行かせると思うのか…………?　　っておい、アーニャ!!」

カレンを阻もうとしたジノだが、横に居たアーニャが急にアルカに迫った事によって妨げられる。

迫って来る大腕を躲し、モルドレットに一太刀浴びせる。
しかし。

「無駄。」

機体全体を覆うブレイズルミナスに阻まれ、決定打にはならない。

(…何、こいつ。急に私を…?)

その時、モードレッドの全身が光り出す。

機体中に付いている訪問から無数の黒いボマーが射出される。

「やばっ。」

モードレッドから距離を取り、追尾してくるボマーを振り払う。

「あら、すばしっこい。そんな子には、これっ。」

高速で飛行する無窮を中心に捉え、両肩の砲門を構える。

シユタルクハドロン。

最新鋭のブリタニア浮遊戦艦をも一撃で沈めた程の威力を持つ兵器。それを飛んでいる無窮に目掛けて放つ。

「いつになくやる気だな、アーニャ。……まあ、細かい事は良いか。」

モルドレッドと無窮の戦闘をしばらく傍観していた彼も意識を無窮に向け、攻撃を開始する。

「ああ、もう！ 人気者は辛いなっ！」

ゴマーを切り捨て、シユタルクハドロンやハドロンスピナーを躲す。

全ての攻撃をギリギリで避けながら、アルカはバインダーから武装を取り出す。

それは銃身と砲門が分離した大型の銃。

機体を激しく揺らしながら、バラバラの銃を組み合わせる。

「超電磁式榴散弾銃砲……。日本解放戦線と同じものだと思うなよ？」

凄まじいエネルギーを持った一発の銃弾が、無窮から放たれる。

KMFのモニターですら追えない程の速度で、真つ直ぐモルドレットへと向かっていく。

「こんな直線的な攻撃、私が避けられないとでも……。何？」

弾の軌道は確かにモルドレットから外れた筈だった。しかし実際にはモルドレットのフロートユニットを翳め、それを破壊した。

「おい、アーニャー！」

翼を失ったモルドレットを支える為、トリスタンが駆けつける。

「これ以上は戦闘の継続は不可能だ！ 総督の救出も完了したみたいだし、退くぞ！」
『アルカ！ カレンさんがゼロ様を保護しましたわ！ 離脱してください！』

「……分かった。」

トリスタンとモルドレッドに向けていた銃口を下ろし、その場を後にする。戦場から離れていく無窮を眺めながら、ジノは感心した様に口を開く。

「ふうん、思ってたより手強いな。本気でやれば良かった。」

「……………ええ、面白い子。」

TURN 7 百万のキセキ

「どうだったあ？ 新しい無窮は？」

クルクルと。キセルを手で遊びながら、ラクシャータは上機嫌な様子で言葉を紡ぐ。

「以前よりも出力も上がってましたし、何より武装が多くて戦いやすかったです。」

「ふっふふ。そうでしょうともそうでしょとも。」

「超電磁式榴散弾銃砲はどうでした？ 日本解放戦線の物に手を加えたのですけど

……。」

超電磁式榴散弾銃砲。

カワグチ湖で起きたホテルジャック事件の際に、日本解放戦線が使用していた兵器。

本来は発射に膨大な電力が必要だったが、ガウエインのハドロン砲の制御に利用した技術の応用で単体での利用を可能にしたリアガン。

「威力と速度は申し分無いけど…、発射レートが……。」

「まああまり連射するようなものじゃないからねえ。ご希望とあればそういうやつも作るけどお……。」

「ありがとうございます。でもそれはまた別の機会に。私達の置かれた状況は未だに芳しく無いんですから……。」

「あなたにもゼロからの連絡は来ないのお？」

呆れた様な口調のラクシャータに、少し寂しそうな表情をアルカは浮かべる。

「……ええ、まあ。」



「……とは言ったものの、実際はどうなんだ？」

アルカとC・C・に割り当てられた個室。

簡素なベッドが一つあるだけの狭い部屋で、アルカを膝に乗せたC・C・は携帯を覗

き込む。

「連絡は来るけど、こっちの内容に関する返事だけ。そうか、分かった、つて。今後の動きに関する事も一切無し。」

「普段は偉そうにしてる癖に、メンタルは脆いからな。私が傍に居れば尻を叩いてやったものを。」

ぶつきらぼうながらも、何処か心配をしている様なC・C。

そんな彼女を見て、アルカは笑みを浮かべたが、それも一瞬の事。すぐにその顔に影を落とす。

「……気持ちは分かるけどね。兄上にべったりだった姉上が目の前で枢木スザクの手を取った訳だし、それにあの宣言でしょ？ 兄上の想像以上に姉上が自立出来ているっていうのがショックだったんだと思う。今までは狭い世界で完結してたから余計に。」

「行政特区日本……か。なあ、お前自身はどうなんだ？」

「特区の事？ うーん、私はちよつと……。」

「そうでは無く。ナナリーがこちらの手を取らなかつた事に対してだ。」

ああ、そつちか。と頬を搔きながらアルカは呟く。

「確かに少し寂しいけれど、兄上程堪えている訳では無いかな。最終的に幸せに過ごせるならそれで良いし……。」

「そうか。……全く、あいつも見習って欲しいものだな。」

「あはは……。まあ私が戦っていける理由は、こうして傍に居るからさ。」

ふふつと笑みを零しながらアルカは預けている背にさらに体重を掛ける。ベットが軽く軋む音と、C・Cの息づかいが耳に入った。さっきまで饒舌に喋っていたのに、打って変わって静かになったC・Cを不思議に思い、アルカは彼女の顔に目を向ける。

そこに感情は無かった。目を見開いたまま、顔を一切動かさず、ただただアルカを見つめている。

「C・C・?」

長い様で短い沈黙に耐えきれず、アルカは戸惑った様子で名を呼ぶ。

「お前は……。」

「うん……？」

「お前は本当に煽るのが上手だな。」

「……へ……？ ……きやつ！」

アルカのお腹に回していたその腕を、上へ上へと蛇の様に這わせ、胸部に達した辺りで服の中へと忍び込ませる。

「全く……折角人が我慢して寝かせてやろうと思ったのに……。もう遠慮はしないからな。明日のミーティング、まともに出席出来ると思うなよ？」

「え、いや……。ちよ……。」

引き攣るアルカに対し、怪しく、厭らしく、妖艶に笑みを浮かべるC・C。

幼い抗議の声もすぐに甲高い声へと変わり、ベットの軋む音と荒い息遣いが部屋に満ちた。



「うう、C. C. め……。加減を知らないんだから……。」

目の下に隈を作り疲労の色を浮かべ、アルカは腰を摩りながら廊下を歩く。

思い通りに動かない身体に鞭を打ち、ミーティングに時間通り参加したまでは良いものの、ここに来て限界が来たようだ。

「前々から思っていたけど…、前世があるとしたらC. C. は獣か何かなんじゃないか……」。ん、カレン？」

「アルカ。」

腰の痛みにはかり気を取られて気付くのに遅くなったが、カレンとばったり出くわした。

彼女は何処か思いつめた様子で、普段の覇気は身を潜めている。

「食堂、今荒れているわよ。特に玉城が。」

「ああ、だろうね。」

去年の特区以降、日本人達のブリタニアに対する反感は強まっている。それは黒の騎士団内部でも同様だ。それに加えて新総督のナナリーによる特区日本の再建宣言。そうなる事は容易に想像できる。

どうせ今頃、ブリキのお姫様なんて信頼するもんじゃねえよ。とか言っているところだろう。

「あれ、そういえば髪……。何処かにお出掛け？」

今のカレンは髪をストレートにしている。所謂、学園お嬢様スタイルだ。

「うん、ちよつと租界にね。」

そう言い残して、カレンは思いつめた様子そのままアルカの横を通り過ぎていく。

「…………ふうん。」



まだ日も昇っていない早朝の旧シンジユクゲットーの再開発地区にある建設現場で、一組の男女が言い争いをしていた。

いや、言い争いという表現は相応しくない。女が一方的に声を荒げているのに対し、男は顔を下げたままで、人形の様だった。

そして女は手を大きく振りかぶって、男ルルーシユの頬を思いつきり叩く。その光景を少し離れた所で眺めている一人の幼い少女。

(あらら…)

女ルルーシユはルルーシユに一言言い残すと、涙を流しながらその場を去った。

涙を拭いながら翔けるカレンを見送って、幼い少女アルカは自身の兄の元へと歩を進めた。

「今のは痛かったでしょ？」

「…アルカ、見ていたのか。」

「こうして落ち着いたところで会うのは久しぶりだね。」

ルルーシユの傍により、腫れた頬へ手を伸ばす。

「カレン容赦無く叩いたね……。後でちゃんと冷やしなよ？」

「何故俺に構う？」

「妹の私にそれ言う？」

「……………。今の俺は、ゼロではない。俺は仮面を——！」

「だったら尚更聞く必要無いよね。」

「——っ。」

カレンと話していた時とは対照的に、ルルーシユは眉間に皺を寄せて感情を露わにする。

「私は別に、兄上が仮面を棄てても棄てなくてもどつちでもいいの。兄上が舞台から降

りたなら、また別の誰かが上がるだけ。傍から見たら、仮面さえ身に着ければ誰でもセロなんだから。だから兄上は元の生活に戻って、私達の戦いを見てればいい。全てが終わったその時に、姉上を連れて戻ってくるから。」

「…っ！ どういう事だ!? お前は…。」

「私は戦いをやめないよ。元々は一人でやるつもりだったんだし。私が望む未来にはね。姉上は勿論の事、兄上も一緒に居なきやダメなの。皆が笑顔にならないとダメ。だから仮面を棄てるなら私を見送って、再び仮面を取るなら……。」

それに取り巻く皆の願いを纏めて背負う覚悟を決めて。私のも、勿論兄上自身のも。

「……!!!」

そう言い残して、アルカもカレンの様にここから去る。しつかりした足取りで、迷いの無い表情を浮かべて。

「……いふ……。」

ああ、そうだ。

ルルーシユは笑みを浮かべた。

何故、こんな簡単な事に気付かなかったのか、と。

「最早俺個人の願いだだけで収まる様な範疇では無い。」

あいつは、アルカはとづくに分かっていたのだろう。ゼロの仮面の意味を、重さを。だから、ナナリー奪還作戦の後も俺と違ってブレなかった。

「まだまだ甘いな、俺は。」

・ ・ ・

エリアーの新総督、ナナリー・ヴィ・ブリタニアが着任して早々に宣言した行政特区日本の再建。エリアーに住む日本人達は勿論、黒の騎士団やゼロに対しても参加を

促す声を掛けた。過去は問わないから手を取り合おうと。

当然、一年前の惨劇から支持する声は上がらず、黒の騎士団の参加も絶望的かと思われていた。

しかし。

『ゼロが命ずる！ 黒の騎士団は全員、特区日本に参加せよ！』

ゼロの一言が状況を一変させた。

そして。

『ゼロを国外追放するのはどうだろうか？』

ゼロから持ち掛けられた会合。その場に居合わせている枢木スザクを始めとする面々は驚愕の色を浮かべた。

「黒の騎士団は!?!」

「捨てる気だろ。自分の命だけを守って。」

確かにジノの言う通りだ。ゼロの言葉を鵜呑みにすれば、の話だが。スザクの心に迷いが生じる。

ゼロは保身に長けた人物だ。しかしそれ以上に計算高い人物でもある。懐に忍び込み、土台から崩す。彼の十八番だ。一年前の戦いで嫌と言うほど分からされた。相手がスザクの知るゼロなら、この提案に乗るのは危険だ。

だが、そうでなかった時の見返りが無視できない程大きい。

100万人の日本人、事実上の黒の騎士団の崩壊。

「あのさ、こんな話がバレたら組織内でリンチだよ?」

『だから殺されない為に内密に話している。』

「皇アルカは!? 知っているのか!？」

『何故君が彼女を気にする? 当然、彼女にも内密だ。』

ゼロの正体がルルーシュなら、真つ先に妹であるアルカを優先すると思っていた。少なくとも、一年前のゼロならナナリーやアルカのことを優先して物事を進めてきた筈だ。しかし、今はどうだ。

「……………」

「……総督の権限内でしたら、ゼロの国外追放は執行可能です。」

「ミス・ローマイヤ！ ゼロを見逃せと言うのですか!？」

「法的解釈を述べただけです。」

身体が不自由であるナナリーの為にと配属された総督秘書、アリシア・ローマイヤ。生粋のブリタニア人気質であり、冷たい現実主義者である彼女がスザクは苦手だった。

今もこうして、機械の様に事実を淡々と述べる彼女が。

『どうだろうか？ 式典で発表しても良い。君達にとつても悪くない取引だと思いがな。』

周りの面々は八割方、賛成の様子だった。唯一、セシルだけが困惑した様子で沈黙しているが。

「確かに悪くない。トップが逃げたとなれば、イレヴンのテロリスト共は空中分解だろ

うからな。」

「……………しかし、犯罪者を……………!!」

スザクが個人で動ける立場なら、彼はどのように行動しただろうか。彼はあくまでも軍人、組織の人間。それはナイトオブブラウンズになっても変わらない。個人の思想は大多数の人間の思想に流されていく。

◇◇◇

特区日本記念式典、当日。

ゼロの言葉に扇動され、会場に集まった100万人の日本人。無数の日本人達の合間にKMFも配備され、式典は問題無く始まった。

進行役のローマイヤが行政特区日本の概要を説明している間も、特に問題も起きず、ブリタニア軍兵士は拍子抜けしていた。

しかし、ゼロの法制的処分を説明し終えたところで、彼は姿を現した。

ゼロは問う。

日本人とは、民族とは何か、と。

枢木スザクは答える。

心だ、と。

その問答が何かの合図だったのだろう。会場は途端に白い煙に包まれた。

突然の異変に動揺が広がるブリタニア軍の前に、ゼロは現れた。何時もの仮面に、何時ものマントを羽織った、身体付きも、身長も違う沢山の、ゼロが。その数はおよそ100万。

この式典に参加した全ての日本人が、ゼロの姿に扮したのだ。

ゼロは煽る、全てのゼロは総督の宣言通りに国外へ逃げろと。

ブリタニア軍はそれを見逃すしかない。そもそもゼロというのは個人を指す言葉では無い。ブリタニア軍はゼロの正体を知らないのだから。手をこまねいている間にも、ゼロ達は続々と式典会場を去る。

「屁理屈。一休さんか。」

『良く知っているな。』

その様子を海氷船に乗るアルカは呆れた様子を隠さず眺めている。

「佐世子さんが教えてくれたの。ね？」

「はい。お久しぶりです、アルカ様。あまり……、お変わりないですね。」

「あまりというか、全く。これでも成長期なのに……。」

不貞腐れた様子のアルカを微笑ましい目で見つめながら、佐世子はゼロの横へと並ぶ。

彼はそんな佐世子を横目で流し見しながら、自身の仮面に手を掛け、それを外す。

端正な顔が晒され、艶やかな髪が風で靡く。

「ルルーシユ様も、お久しぶりです。」

「ああ。」

会場から逃げてきたゼロ達が、続々と海氷船へと乗り込んでいく。国外追放という処分を受ける為に。

目指すは中華連邦の領土内に位置する人工島「蓬莱島」。

舞台はエリアーから中華連邦へと移り変わる。

小さい島国から始まった戦争は、世界を巻き込み、拡大していく。もう誰にも止める事は出来ない。

「そろそろ、かな。」

「彼女も良い感じに仕上がってきた。そろそろ、蓋を開けてみようか。」

少女にも、魔女にも、仮面の反逆者にも。

TURN 8 優等生

蓬莱島を見渡せる監視塔へと続く窓に覆われた廊下を、島の様子を眺めながらアルカとC・C・は歩く。

目に映るのは物資を船から運び出す男達、昼食を用意する女達、その傍らで遊ぶ子ども達。ゲッターでも時折見られた光景だが、ここの方が皆の表情が活き活きとしている。ブリタニアの支配権から逃れ、自由になれた事が余程嬉しいのだろう。

「まあ、油断は出来ないけどな。」

「事前に話をつけてたとはいえ、無償でここを貸出……、つて訳は無いよね。」

「余程のお人好しじゃない限りはそうだろうな。」

中華連邦。

世界最大の人口を誇る連合国家。本来であれば世界を支配出来るほどの国力を持つが、その実態は老体そのもの。国家の象徴たる天子。その地位を影で操る支配層が専横跋扈しており、国民は貧困と停滞に苦しめられている。

「総領事館で嫌と言う理解したが、大宦官共は保身に長けているからな。ブリタニアが甘い蜜を垂らせばすぐに寝返るぞ。」

「その前に首都を私達の物に……、ね。世界有数の大国を同時に相手取るなんて骨が折れるなあ。」

「だが洛陽さえ落とせば——。」

「ブリタニアの倒す条件が揃う。頑張らないとね。」

ふわあ、と欠伸をしながら身体を思いつきり伸ばす。固まっていた身体がほぐされていくのがとても気持ち良い。

そんなアルカの様子をどこか観察する様な目で眺めていたC・Cは、何時もの様に起伏の少ない声で言葉を紡ぐ。

「あれだけ寝たのにまだ眠いのか？」

「最近寝ても寝た気がしなくてね。やけにリアルな夢とか見てさ。前も時々あつたけど、最近は特に多い。」

遠い昔の、本でしか見た事無いような村の風景、そこに住む人々の営み。

自身が本国に居た頃の記憶から最近の出来事まで。

まるでビデオテープを再生しているかの様な感覚で、瞼の裏に流れていくのだ。

「……………ねえ、C.C.。私って……………」

アルカが意を決して口を開いたその時、目的の部屋から大きな物音がした。人が2人ほど、床に倒れた様な音。ルルーシュに何かあったのかと思い、アルカはドアまで駆け付けて部屋に勢いよく入る。

「兄上っ！ だいじょ……………う……………ぶ？」

視線を下げるとカレンに押し倒されている構図で呆然としているルルーシュと、頬を赤らめて服をはだけさせたカレン。

年頃の男女。二人っきりの密室。押し倒し。はだけた服。赤らめた頬。

ぼわっと湯気が出そうな程、アルカは顔を赤らめて、2人から視線を逸らす。

「え、つと……。お邪魔……しま、した……。…」

「待て待て待て待て!!!」

そう小さく、弱々しく言い残し、部屋を去ろうとするアルカに、ルルーシユとカレンは慌てて声を荒げた。

「はあ、緊張感の無い奴らめ……。…」

目の前で練り広げられるコメデイに、C・Cは呆れた色を浮かべて、部屋に置いてある食べかけの冷めたピザを口に運んだ。

やはりピザは出来立てが一番だな、少し固くなった生地とチーズを咀嚼していると、慌ただしい神楽耶の声が響いた。

『ゼロ様、斑鳩に来てください！ 大変な事が……。!!』



斑鳩

ブラックリベリオン後、ラクシャータが建造した浮遊航空艦。

神根島近海に沈んでいたガウエインからハドロン砲とドルイドシステムを移植している新たな旗印。

そんな斑鳩の館内の指令室に、黒の騎士団の幹部の面々は顔を揃えていた。

『何？ 政略結婚？』

「ええ、皇コンツェルンを通して式の招待状が届いたのですけれど…。新婦はこの中華連邦の象徴、天子様。友人として、私達を招きたいと…。」

「私達……？ 神楽耶だけじゃなくて？」

神楽耶の含みを持たせた言い方に、アルカは眉根を寄せて尋ねる。

「ええ。アルカ、貴女にも。皇家に対しての招待状なの。」

「全く、神楽耶だけにしとけば良いのに、天子様っていうのは随分律儀な人ね。」

面倒くさいという態度を隠そうともしないアルカに、神楽耶は苦笑いを浮かべる。

『相手は？』

「ブリタニアの第1皇子、オデュツセウスとか言う人。」

「あいつか…。」

「あ？ 知ってんのか？」

「そりゃあね。ブリタニア相手にしてるんだから、敵国の情報位は…。まさか、知らずに戦ってた？」

アルカの呆れた視線に、玉城は思わず目を逸らして、頬を掻く。

「用意してた計画は間に合いません。まさか、大宦官が…。」

ゼロのすぐ後ろで控えていたディートハルトが、神妙な顔持ちで呟く。

『いいや、ブリタニア側の仕掛けだろう。』

「だとしたら、俺達は…。」

『最悪のケースだな。』

ある一人を除いたメンバーの顔に影が差す。それぞれが今後の事に対する事について頭を回していた。そんな中、玉城だけが状況を飲み込めず、疑問を浮かべていた。

「んだよ、皆して。俺達はブリタニアとは関係無いだろ？　俺達は国外追放されたんだしよー。」

「はあ!？」

「あの…、罪が許された訳じゃ無いんですけど…。」

「それに政略結婚ですし、中華連邦が私達を攻撃してくる事だつて…。」

この政略結婚の意図は、ブリタニアと中華連邦の劣悪だった関係を解消する為のみならず、中華連邦をブリタニア側に置く事にある。事実上、中華連邦に亡命している形である黒の騎士団と日本人達にとってすれば、ブリタニアの支配下に再び置かれる可能性が非常に高い為、到底無関係などでは無い。

「じゃあ、何か？　黒の騎士団は結婚の結納品代わりか!？」

「あら、上手い事言いますわね。」

「使えない才能に満ち満ちているな。」

「呑気こいてる場合か!? 大ピンチ何だぞ、これは!!」

どうやらようやく玉城にも事の重大さが伝わったらしい。彼の大騒ぎをBGMに、デイトハルトとゼロは話を進める。

「ゼロ、この裏には。」

「ああ、もう一人居るな。こんな悪魔みたいな手を打ったやつが…。」

良くも悪くも凡庸であるオデュッセウスがに、こんな事が出来るとは思えない。彼を駒に見立て、このシナリオを描いたものが居るはずだ。ゼロとアルカの頭には、同じ人物が浮かんでいるだろう。

「優等生…。」

玉城が騒ぎ立てているこの場では、誰の耳にも入る事は無いだろう。それ位の小さな声で、アルカはその言葉を口にした。

ああ、そういえば母上が彼の事をそう呼称していたな。

第2皇子、シユナイゼル・エル・ブリタニア。

ルルーシユが唯一勝てなかつた男にして、玉座に一番近い人物。

そんな彼が今、中華連邦に。



天子とオデュッセウスの結婚式を明日に控えた夜。

朱禁城の迎賓館では華やかな宴が開かれていた。

ブリタニアと中華連邦。それぞれを代表する貴族たちが華やかな装いに身を包み、会話や料理を楽しんでいる。

それは、警護役のナイトオブブラウンス達も例外では無かつた。

「スザク〜！ これだろ？ お前の言っていたイモリの黒焼き！ どうやって食べるんだ？」

何時も通りの人懐っこい笑みを浮かべたジノは、大皿を抱えて駆け寄って来る。

その手に持つ皿の上に乗っているのは、虎の様なフォルムをした生き物が。

「それは料理の飾りだよ。」

「飾り？」

ジノは不思議そうな、そして理解できないような表情を浮かべて、スザクの言う飾りを眺める。

そんなやり取りの裏で、アーニャはアーニャでカメラを回し、自身の記録の為の写真を撮り続ける。

世界中が絶えない戦争に疲弊している中、今この場に居る人間だけはそれを忘れて各々の時間を過ごしていた。

「神聖ブリタニア帝国宰相、シユナイゼル第二皇子様、ご到着。」

そんな中、今パーティーの中でも飛び抜けて重鎮であろう人物の到着を知らせるアナウンスが場内に響く。

皆一様に開いていた口を閉ざし、意識を会場の入り口へと向け、その姿を一目入れよ

うとする。

「おお……。」

誰かが感嘆の声を漏らした。

それほどシユナイゼルの姿はこの場に相応しく映ったのだろう。

2 m近くあるであろう身長、堂々とした風格、加えて誰もが羨む美貌。

そんな男が、部下であるニーナの手を引いて現れた。

「お久しぶりです。皇帝陛下から、この地ではシユナイゼル殿下の指揮下に入るようにと。」

先程まで自由にパーティーを楽しんでいた3人も、表情を公務に切り替え、シユナイゼルに膝を付く。

「ラウンズが3人も…、頼もしいね。ああ、ただ……。」

「あ、何か？」

「ここは祝いの場だ。もつと楽にしてくれないと。」
「分かりました。」

シュナイゼルの言葉に笑みを浮かべて、3人は立ち上がる。

シュナイゼルは決して自身の立場を振りかざしたりする人間じゃない。そういう人種であれば、今頃ロイドはKMFの開発に携わられていないだろう。

「行政特区日本ではご苦労だったね、枢木卿。」

「……申し訳ありません。私の独断でゼロを……。」

「構わないよ。ナナリーの信用が落ちた訳では無い。それに、ゼロの性格も知れたからね。」

柔らかな笑みを浮かべて、スザクの肩を軽く叩く。

「さあ、仕事の話はほどほどにして、君達もパーティーを——」

「皇コンツェルン代表、皇神楽耶様、皇アルカ様、ご到着。」

「……おや。」

シユナイゼルは言葉を遮り、自身も先程通ってきた入口へと意識を向ける。

皇神楽耶と言えばエリアーに伝わる古くからの名家であり、ブラックリベリオン後に処刑されたキョウト六家の生き残り。特級犯罪者であるゼロ、および黒の騎士団の支援者。中華連邦に亡命していなければ、今頃桐原と共に処刑されていたであろう人物。

それに皇アルカ。まあ彼女の紹介は不要だろう。彼女もまた、処刑されるに値する人物。

そんな彼女達が、指名手配されているのにも関わらず、こうして姿を現すのだ。興味を惹かれるのは必然だ。

「皇……、何?！」

皇の名を冠する2人が参加するというのは事前に聞いていた。ブリタニアからしてみれば犯罪者の彼女達も、天子様からすれば招待客。こちらから手を出す訳にはいかない。しかし、そうだからと言って、まさか。

「ゼロ……!」

「紅蓮のパイロットも居るじゃないか。」

「ほう、これはこれは……。」

会場がどよめき、皆それぞれの反応を見せる。

神楽耶と仮面を身に着けたアルカの後ろで控えるカレンと仮面の男。この場に居る筈の無い、招待される筈の無い人物。

「衛兵……」

狼狽えながらも声を荒げた大宦官に従って、槍を持った数人の兵士が4人を取り囲む。

「やめませんか、諍いは。本日は祝いの席でしょう。」

「ですが……。」

「皇さん、明日の婚姻の義では、ゼロの同伴をご遠慮いただけますか。」

あくまでも礼儀正しく、しかしながらも有無を言わさない覇気を纏って、シユナイゼ

ルは言葉を告げる。

「それは…、致し方ありませんね……。」

「ブリタニアの宰相閣下がそう仰るのなら……、引け！」

シユナイゼルの言葉に異を唱える様子も無く、大宦官は兵士を下げる。

（シユナイゼル…、目の前に姿を晒したな！）

ルルーシユの視線に気付いたのか、スザクがいち早くシユナイゼルの前に現れ、遅れて他のラウンズも立ちふさがる。

スザクの身体の位置は丁度シユナイゼルの視線を遮り、ギアスは届かない。

（ふん、流石に警戒しているか。）

険しい顔でゼロを見据えるスザクからその身を守ろうと、神楽耶とアルカもゼロの前へと乗り出る。

「枢木さん？ 覚えておいでですか、私を。」

「……当たり前だろ。」

皇家。

キョウト六家の盟主であり、枢木の宗家。

「キョウト六家の生き残りは、私達だけとなりましたね。」

「その生き残りっていうのは、彼女も含まれるのかい？」

「あら、当然ですわ。アルカは紛れも無く私の妹ですよ？」

「……妹……。」

皇アルカ。彼女が、アルカが皇の性を名乗り始めたのは丁度ナリタでの戦い辺りからだと言う事が、捕らえた黒の騎士団員からの証言で分かっている。それまでは学校でも使っていたアングレカムという性を名乗っていたそうだ。

つまり目の前の仮面の少女は間違いなく、ルルーシユの妹であり、僕の知る彼女だ。

(ブリタニア皇族と皇家の間に生まれたハーフ……。いやしかし、家系図に彼女の名前は……)

軍に入る前に、キョウト六家の事や家系図については洗いざらい調べた。皇家に神楽耶以外の子どもの名前は無かった筈だ。

(アルカが、血縁……。)

神楽耶のハツタリ、という可能性もある。しかし、自分でも不思議な程、彼女が血縁という事実をすんなりと受け入れられる。

『何か?』

無意識にアルカを見つめていたようで、スザクの視線に気づいたアルカは電子混じりの声を不愉快そうに上げる。

「気を付けてくださいいな、アルカ。きっと次の標的は私達ですわよ。枢木さんは、親族を

殺すのが好きなようですから。」

「…桐原さん達は、テロの支援者だった。死罪は仕方無かった。」

神楽耶の刺々しい言葉に、スザクは反論を述べる。

「お忘れかしら？ 昔、ゼロ様があなたを救ったことを。その恩人も、死罪になさるおつもり？」

「…それと、これとは……！」

恩知らず、という言葉が神楽耶の目の奥から聞こえてくる。

ここ一年で、スザクは変わった。一年前の出来事から人を想って行動する事よりも、合理的に行動する事の方が多くなっていった。それを自覚もしているし、多少の負い目も感じているスザクにとって、今の神楽耶の言葉は心苦しいものであった。

「残念ですわ。言の葉だけで、人を殺せたらよろしいのに。」

（…怒ってる。）

（…怒ってるわね。）

(…怒ってるな。)

元婚約者という立場か、それとも従妹だからか。スザクの事を嫌っているのは知っていたが、本人を目の前にして若干、リミッターが外れているらしい。

その証拠に表情は笑顔ではあるものの、その額には青筋を浮かべている。

(…あまり生意気言わないようにしよう。)

怒ると怖い、という点は姉上に似ているな、と呑気な事を考えていると、後ろにいるゼロが口を開いた。

『シュナイゼル殿下。一つ、チェスでも如何ですか?』

「ほう?」

興味深そうに笑みを浮かべて、シュナイゼルは言葉を漏らす。

『私が勝ったら、枢木卿を頂きたい。神楽耶様に差し上げますよ。』

「まあ！ 最高のプレゼントですわ！」

チエス、シユナイゼルとルルーシユ、共に得意とする盤上の遊戯。皇族時代からチエスでは敵無しだったルルーシユも、唯一シユナイゼルには勝てた事が無い。

これは挑戦なのだろう、シユナイゼルへの。そして、過去の自分への。

「…では、私が勝ったら、その仮面を外してもらおうとしようかな。そちらの彼女のものね。」

『……………っ。』

シユナイゼルに微笑み掛けられたアルカは、少し後ずさり、思わず神楽耶の服の袖を掴む。

「アルカ…?」

昔から、シユナイゼルの事が嫌いだ。

その人当たり良さそうな笑みも、丁寧な所作も、言動も、全てが計算されているよう

で、同じ血が通った人間だとは思えなかったから。

気味悪くて、薄ら寒くて、狂氣的で。

「楽しい余興になりそうだね。」

そんなアルカの様子を気にも留めず、シユナイゼルは楽しそうに呟く。



別室に移されたゼロとシユナイゼルがチェスを打ち始めてから数十分。

チェスにしてはスピーディーな展開で、試合は進んでいる。

そして。

「チェックメイト。」

シユナイゼルが静かに宣言した。自身のキングをゼロのキングの前に置いて。

会場に動揺が走る。素人目にも自殺行為だという事が分かるだろう。

次はゼロの手番、つまりは彼が駒を進めればシュナイゼルのキングはゼロに打ち取られ、敗北する。

『何ですか、これは？ 拾えと言われるのか、勝利を。』

(これじゃあ、兄上はキングを取れない。いや、取らない。)

ルルーシユはプライドが高い。他者からの施しは一切受けず、自ら未来を掴み取ることを信条としている。それは過去の出来事から来る彼の生き方であり、対立する父への父への反抗とも言える。

ゼロは駒を進める事無く、自身のキングを後退させる。

「皇帝陛下なら、迷わず取っただろうね。」

ゼロの行動に驚きの表情を浮かべる観客達とは対照的に、シュナイゼルは何もかもを見透かした様な笑みを浮かべてゼロを見つめる。

「君がどういう人間か、少し分かった気がするよ。」

(シユナイゼル……!)

シユナイゼルは続いて笑みを崩すことなく、アルカの方へ視線を向ける。

「どうだい、レディ。君も一局どうかかな？」

シユナイゼルの瞳には、2人の仮面の人物はどう映っているだろうか。もしかしたら、仮面の下の顔が見えているかもしれない。そう思わせる程、シユナイゼルは堂々と、不敵に笑っていた。

『わ、私は——。』

「ゼロ！ ユーフエミア様の仇！」

『っ！』

アルカの言葉を遮り、半狂乱になったニーナがナイフを突きつけてこちらへ向かってくる。

「やめるんだ！ ニーナ!!」

そんな彼女の行為を止めたのはカレンでもアルカでもなく、スザクであった。

ナイフを持つ手を取り押さえられたニーナは、抵抗しつつも呪詛を吐く。

ゼロにだけでは無く、止めたスザクや、ゼロを守るカレンに対しても。

「余興はここまでにしよう。」

場が持たないと悟ったシユナイゼルは、黒の騎士団の面々に退場するように促す。

「それと、確認するが明日の参列はご遠慮願いたい。次は、チェスなどでは済まないよ。」

これ以上この場に居ても何も得られないだろう。そう判断したゼロはアルカ達を連れてこの場を後にする。

ニーナの噁り泣く声と恨み言を聞きながら。

TURN 9 朱禁城の花嫁

少女の顔は今にも泣きそうだった。

「……………」

華やかな装飾が施された会場。祝福の声を上げる大人達。女の子なら誰もが夢見る舞台。だと言うのにも関わらず、彼女は今にも泣きだしそうだった。

「……………同情しているのですか？」

そんな少女の様子を眺めていると、隣に座っている神楽耶が口を開いた。

「……………どうして、そう思うの？」

「目は口程に物を言う、という言葉を知っていました？」

得意げな顔をして神楽耶は、古くから伝わることわざを紡ぐ。

「……確かに、この式に思う所はある、かも。」

「へえ、意外。アルカなら『人の上に立つ者なら当然です』ってキツパリ切り捨てするようなのに。」

少し意外そうに、そして茶化す様に私達の後ろに控えていたカレンが会話に入る。

「カレンの中の私ってどういう……。うん、まあ普段だったらそう言っていたかも。けど……。」

家の為の、民の為の、国の為の政略結婚。この世界では良くある事だ。上の立場になればなるほど、その機会は巡って来る。想い人と結ばれる事なんてほんの一握り。本来だったら泣きわめく様な事では無いだろう。

しかし、それは当人に十分な教育がされているなら、の話だ。

本来であれば家の者や側近が。この国では大宦官がその役割であろうが。その立場の大人達が教育する義務がある。家や国の為に身を捧げる覚悟を、その必要性を。

「天子様には十分な教育が施されていない。やるべきことを放棄した末の政略結婚なんて胸糞悪いだけ。」

苦虫を噛み潰した様に顔を顰めて、アルカは忌々し気に口を開く。

元皇族というのもあって、今回の事にそれなりに思う所があるんだろう。

しかし、本当にそれだけか、と神楽耶は考える。

アルカの言い分は一理あるが、彼女の目に宿る苛立ちを説明するのには不十分だ。他にも彼女が憤る要素がある筈だ。

だけどそれに行きつく欠片を神楽耶は持ち合わせていないし、本人に問いただす時間ももう無い。

本当にそれだけですか、という言葉を飲み込み、神楽耶は穏やかな笑みを浮かべた。

「ふ、ふつ、それを止める為に私達が居るのでしょう?」

神楽耶がそう呟いた時、会場の扉が勢い良く開かれた。

この場に居る誰もがその光景を見て、驚愕の色を浮かべていた。

「我は問う、天の声、地の叫び、人の心……。何を持ってこの婚姻を中華連邦の意思とするか！」

腰まで届く程の艶やかな黒髪、切れ長の目。

後ろに複数の兵を携え、その手に持つ剣を掲げて。

男、黎星刻は高らかに声を上げた。

「血迷ったか、星刻!？」

豚の様に太った大宦官。名前は、……ええと、忘れた。

とにかくその男が声を荒げる。

その答えが号令であった様に、会場の警備役として配置されていた兵士達が一斉に星刻に迫る。

「黙れ趙皓！ 全ての人民を代表し…、我はこの婚姻に異議を唱える！」

そんな彼らの問答の背後で、ミレイを始めとする来賓客達が会場を後にする。

ミレイが会場を後にするのを目で追い、完全に視界から外れるのを待つてから、アルカは口を開いた。

「私達も下がろうか。星刻の協力者だつてあらぬ疑い掛けられるのも面倒臭いし。」
「そうですね。私達も為すべきことを為しましょう。」

永続調和の契り。

中華連邦に古くから伝わる約束の形。

過去に星刻は天子とそれを交わした。命を助けられた礼として。狭い世界に囚われている天子を外の世界へと連れ出すと。

契りを交わしたその瞬間から、星刻の心は天子と共にあった。

例え、彼女がその事を憶えていなくても、全ては天子の為に。

だから星刻には迷いが無い。祖国を裏切る事となつても、世界を敵に回したとしても。

「星刻!!」

幼い少女の声が場内に響く。

大宦官達の怒号、金属がぶつかり合う音、それらの騒音に包まれているのにも関わらず、その声はハッキリと耳に届いた。

(覚えて、おられた……!)

天子は星刻の名前を頻りに呼びながら、右手を掲げる。あの日星刻と躲した約束の形を再びその手で作って。

「わが心に、迷い無し!」

星刻の顔に笑みが浮かべ、駆け付ける。自身の名を呼ぶ花嫁の元へ。あらゆる障害に

阻まれつつも、お互いを想い合う2人の男女。

そんな光景を、この男の目にはどう映っているであろう。

あと少し、あと少しで天子に手が届きそうだった。これが良く出来た創作物であれば、星刻は天子の手を取れたであろう。

しかし、そんな事をこの世界が、仮面の男が許す筈も無い。

天子の頭上、式場の中心に掲げられた中華連邦とブリタニアの国旗。それが舞台の垂れ幕の様に天子の姿を隠す。

突然の異変に、星刻も、ブリタニア軍も、中華連邦も、皆動きを止めた。重力に従って地に落ちていく二つの国旗。

その裏から二つの影が姿を現す。花嫁衣装に身を包んだ天子と、漆黒の仮面を身に着けた男、ゼロ。

『感謝する星刻。君のお陰で、私も動きやすかった。』

「……それはどういう意味かな？　ゼロ。」

怒り半分、困惑半分。といった様子で星刻は静かにゼロに問う。

『動くな!』

静かに歩み寄る星刻を、ゼロは制止した。その手に持つ銃を、天子に突き付けて。

「黒の騎士団には、エリアーでの貸しがあつた筈だが?」

『だからこの婚礼を壊してやる。君達が望んだ通りに。ただし、花嫁はこの私が貰い受ける。』

「……………! この外道があ!!!!」

星刻の怒りが、憎悪が、一身にゼロへと向けられる。普通の人間なら物怖じしてしまふだろう。もしかしたら腰を抜かして天子を解放したかもしれない。それほどの鬼気迫る迫力が彼にはあつた。

しかし、相手が悪い。ゼロは普通の人間でも無い。その精神はとつくに破綻してしまっているのだから。

『おや、そうかい? フフフフ…、ハハハハハハハハ!!!』

さもその視線が気持ちが良いとでも言う様に、ゼロは狂った様に笑い続けた。



KMF輸送用のコンテナの中。整備が行き届いてない荒道に揺られながら、アルカは困っていた。

「あの…、天子様。その、困ります…。」

「あ…、ごめんなさい…。」

式場から天子を連れ出す事に成功した黒の騎士団は、斑鳩に向けて移動していた。

ブリタニアからも中華連邦からも追われる立場となってしまった以上、一切の油断は許されない。現状、追手が来ていなくても、だ。

当然、アルカもそのつもりだった。何時でも出撃出来る様にパイロットスーツを身に纏い、無窮の傍らで待機していた。

そんな彼女を、神楽耶は呼び出した。何でも自慢の妹を天子に紹介したい、と。ただ、それだけの筈だった。

「珍しいんですよ、天子様にとつて。自分より歳が下の方と会った事無いんですから。」
「まあ、それは分かるけど……。」

私だつてC・C・と旅を始めるまで同じ状況だった。

でも、だからと言つて…。

「動物みたいにペタペタ触れなくても…。」

「うう…、ごめんなさい。」

さつきからずつとこの調子だ。

私は何を言つても、謝るばかり。だと言うのに私に触れるその手を止める様子は無い。若干の鬱陶しさを感じるものの、その手を振り払おうとも思わないし、強い言葉で拒絶も出来無い。

どうも私は天子様が苦手だ。実際に話してみてもハッキリと分かった。

この人には裏が無い。邪気も下心も打算も。ただただ純粹なのだ。

毒気が抜かれる。今まさにそんな気分を味わっている。どうも私は、この手のタイプ

の人間が苦手らしい。

え？ 姉上はどうかって？

いやいや、あの人は意外と計算高くて意地悪だよ。

私がそう考えている間にも、話はどんどん進んで行く。

「なんだか、物語に出てきた巫女様みたいで…。」

「巫女？ それって神社とかに居るあの？」

天子の言葉に神楽耶が興味深そうに尋ねる。

「うん…、子どものころに星刻に読んでもらったお話…。それに出てくる巫女様に似ているの。」

聞けばその物語は、特別な力で村を治めていた巫女の家系に生まれた少女が、自らを犠牲にして人々の争いを止めるという内容らしい。

「随分と物騒な内容ですね…。」

物語としては良くありそうな話ではあるが、少なくとも子どもに聞かせるような話では無い。

「まあ！ その話なら知っていますわ！ 巫女様の猷身の姿勢とその従者の覚悟…、素敵な話ですよね！ でも確か…、巫女様の容姿は黒髪ではありませんでした？」

「そうなの？ じゃあ全然私に似ても似つかないじゃん。」

「あ、うん…、見た目は、そうなのだけど…。その、雰囲気？ みたいなものが…。」
「ふふつ、物語上の人物に雰囲気似てるなんて、天子様も存外、ご冗談を仰るのですね。」

何とも曖昧で現実味の無い言葉に、今の状況を忘れて思わず笑ってしまう。

「あら、あながちそうでも無いと思えますよ？」

神楽耶は何処か得意げな顔を作り、胸を張る。

「皇家とは元々、神に身を捧げた巫女の家系ですもの。現代に近づくに連れ、廃れていったものではありませんが。」

「じゃあ、やつぱり！」

目をパツと輝かせ、天子が口を開いたその時、コンテナ内に向けたたましいサイレンが鳴り響いた。追手に追いつかれたのだろう。

「ゼロ！」

『ああ。君もカレン達に加勢してくれ。ここで追いつかれる訳にはいかない。天子様はこちらで手厚く保護しよう。』

そうと決まれば雑談に興じている暇は無い。

アルカは身を翻し、自身の相棒、無窮へと足を運ぼうとする。しかし。

「天子様？」

腕を掴まれ、引き留められた。

今日初めて会い、ほんの少し話をしたただけなのに、随分と懐かれたものだ。

私の腕を掴む彼女の顔には心配と寂しさといった感情が浮かんでいる。そんな彼女の手を優しく取り、下ろさせる。

「天子様、私は貴女が好きで巫女様に似てるとは思えません。私はそんなに出来た人間じゃない。だから、そんな顔をしないでください。貴女がそうするべき相手は、他に居るでしょう？」

渋々と言った様子ではあるものの、小さく頷いてくれた天子を背に、アルカは再び無窮へと足を運び、乗り込む。

キーを差し込み、寝ている無窮を叩き起こす。機体全体がドライブの微弱な振動に包まれ、コックピット内の温度が上昇していく。

「無窮蒼天式、皇アルカ。出ます。」

コンテナの天井が開いたのを確認し、勢い良く空へと羽ばたかせる。

『アルカ！ 加勢に来るの遅くない!?』

「これでも急いだんだけど……。」

カレンの乗る紅蓮と藤堂の乗る斬月。今の黒の騎士団において航空戦力として数えられる貴重な機体。

しかしその機動力も今は活かせていない。ゼロ達の乗るトラックを護衛するという名目上、離れる訳にもいかないからだ。つまり、守る事は出来ても撃退は出来ない。

「戦いにくそうね。」

『何か策でもある訳?』

「カレンと藤堂さんがトラックを守って、私が遊撃に回る。無窮の方が機動力高いし、そっちの装備の方が守りに向いてる。街中で超電磁砲ぶつ放す訳にもいかないしさ。」

『…任せて、良いんだな?』

斬月の主武装である刀で飛来する砲弾を切り伏せながら、藤堂は静かに問う。

軍人として、大人として、まだ子どもであるアルカに前線を任せることに若干の負い目は感じている。しかし、彼女の言い分はこの状況において実に合理的で理に叶っている。

る。

確かに機体性能的にも、パイロット特性的にも。

「当然。」

『……そうか、分かった。紅月君！』

『はい！』

『聞いた通りだ！ 攻撃は全てアルカ君に一任する。私達は防衛だ。一片足りとも通すなよ！』

『承知！』

カレンの声を合図代わりに、アルカは無窮を敵陣に向かって突っ込ませる。

背中の滑走翼と一体になったバインダーで機体を包み込み、銃弾を弾きながら閃光の如く迫る。

「遅い。」

遅い。全てにおいて。

敵の行動の一つ一つが。

「そら、もう一機。」

相手がこちらに対応する前に攻撃を叩き込む。

相手が照準を合わせる前に移動する。

相手より一歩先へ。一手早く。

母が教えてくれた戦いの基本。

「……つまらない事を考えた。」

もう何機目だったか。

追手のサザーランドを切り伏せながら頭に浮かんだ人物を記憶の片隅に追いやる。

「結局、私の思い違いだったのかな——。ん？」

無窮に向かって飛んでくる複数の熱源。

アルカはこれを知っている。

回避しても無駄だと判断したアルカは、傍で様子を伺っていたサザーランドを掴み盾にする。

無数の熱源はサザーランドに着弾し、辺りは黒煙に包まれた。

「全く、サザーランドが居る時点でおかしいとは思ったけど。」

太刀で煙を切り払い、視界をクリアにする。

目の前にはさっきの熱源の主であろう大柄な機体が佇んでいた。

「シユナイゼルは政治が下手になったのかな？ それとも、独断？」

両肩に巨大な砲門を身に着けたワインレッドの装甲。裏切りの騎士の名を冠したワ
ンオフ機。

「アーニャールストレイム！」

「……………」

モルドレットの中で、アーニヤは微笑む。
その笑みは年齢にそぐわない母性と妖艶さを兼ね備えていた。

TURN 10 アーニャ・アールストレイム

「何？アーニャが？」

「は、はい……。サザーランド一個小隊分を率いて出撃された様です……。現在、黒の騎士団のKMF『無窮』と交戦中で……。」

「おいおい……。」

部下からの報告を聞き、ジノは思わず頭を抑える。

婚礼の義に突如として現れ、天子を攫ったゼロ及び黒の騎士団。ジノとて皇族殺しであり、今や一番の反ブリタニア組織である彼らを見逃すつもりは毛頭ない。

しかし、そうも言っていれないのが現状だ。

いくら中華連邦のトップとブリタニア皇族の結婚が認められようと、中華連邦内でブリタニアの所属である自分達が軍事行動を起こす訳にはいかない。何故ならここはまだ、ブリタニアの領土では無いからだ。婚礼の後の細かい擦り合わせや取り決めを経て、正式に領土として認められる。

朱禁城でのスザクと藤堂の交戦は特例中の特例。あの場に居たシユナイゼルとオ

デユツセウスに危険が及ぶ可能性があったからこそ認められた行動であり、あくまでも天子の誘拐は中華連邦側の問題。

中華連邦からの正式な要請が無い限り、よそ者のブリタニア軍は大人しくするしかない。

だと言うのに。

「ふむ、それは困ったね。いくらラウンズと言えど、他国での勝手な行動は目に余る。」

共に報告を聞いていたシュナイゼルは、その端正な眉を僅かに下げて嘆く。

「すぐにアーニャに引く様に言ってくれ。」

身勝手な振る舞いで他国の市民を戦闘に巻き込みました、となればいくらブリタニアとて無傷では済まない。

アーニャには後でしつかりとお灸を据えなきやな、とジノが考えていたその時。

「一体何の問題がありますかな？」

ふと、新たな声がこの場に加わった。

声の主は中華連邦の実質トップである大宦官の内一人。

「……それはどういう意味でしょうか？」

スザクが眉を寄せて静かに問う。

「アールストレイム卿の行動は私達、中華連邦の事を思つての行動。非難すべき行動ではありませんまい？ 私達はもう、同盟国なのですから。」

「……それは中華連邦から我々に対する正式な要請と受け取つても？」

「……………」

シユナイゼルの言葉に対して、大宦官からの返事は無かった。あつたのはただの笑いだけ。意地汚くて厭らしい、保身に長けた笑い。

「ふむ、そうですか。」

シユナイゼルは静かに目を伏せ、思考に耽る。そして。

「ヴァインベルク卿、今すぐトウキヨウ租界み援軍を要請。部隊の編成に取り掛かってくれるかい？ 枢木卿は私と共に作戦のすり合わせを。黒の騎士団の事は君に聞いた方が良いからね。出撃は5時間後。2人とも、頼りにしているよ。」

「イエス、ユアハイネス。」

「アーニャは、そうだな…。」

シユナイゼルは言葉を止め、モニターに目を受ける。

そこに映し出されているのは先程、反旗を翻して捕らえられた星刻達。

「適当なところで引き上げるように伝えてくれるかい？」



「あーもう！ しつこい!!」

追尾式のボマーを躲し、隙を見てモルドレットに斬りかかる。しかし、強固なブレイズルミナスに阻まれ、その機体に傷一つ負わず事も叶わない。そんな状況がもう15分近く続いていった。

（明らかに前よりシールドの強度が上がっている…。機体の改造…。いや出力を上げたが正しいか？）

以前に交戦した時は太平洋の真上。お互いに補給も出来ず、援軍もほぼほぼ見込めない条件下だった。恐らくエナジーの消費を抑える為に出力を下げていたのだろう。

「……………っ…！」

押ししても押し切れない現状に、歯痒さを覚え力任せに刀を突きつける。

阻まれている刃を無理矢理押し込もうとしているその時、ブレイズルミナスと太刀の間生まれ続けている火花の合間から、巨人の手が伸びてくる。

「…………クソ……！」

無窮の頭に向かって伸びてきた手を紙一重で避け、再びモルドレッドとの距離を取る。

モルドレッドの出力は従来のKMFと比較が出来ない程に大きい。たった一掴みでKMFの装甲を握りつぶしてしまう程だ。

「…………つと…。全く、やりにくいっただらありやしない。」

アルカはその目を鋭くし、射殺さんばかりの視線でモルドレッドを見据える。

「まだまだ甘いわねえ。」

そんなモルドレッドのパイロットであるアーニャは、さも楽しそうに呟く。その様子と言葉遣いは普段の彼女からは想像が出来ない程明るい。

まるで遊び相手を探す童女のようにその顔に笑みを浮かべながらアーニャは無窮を見つめる。

「的の大きさは平均以上。早さはそれなり。遠距離武装は無し。パイロットは……まあ及第点かしらね。暇つぶしになると良いけど……、ん？」

アルカとアーニヤの間に生まれた一時の間。

品定めをするアーニヤの元に通信が入る。モニターに表示されている名はジノ・ヴァインベルク。

『アーニヤ。戦闘中に悪いが聞いてくれ。中華連邦から我々に正式な要請が出た。今から5時間後、エリアー1からの援軍と共に出撃となる。』

「……………」

『シユナイゼル殿下からの命令だ。……………つ……すぐに帰還するように、と。』

シユナイゼルからの言伝を聞いた途端、アーニヤは僅かに口角を下げ、小さく舌打ちをする。

『もう一度言う、戦闘を切り上げて帰還してくれ。…………アーニヤ、今回の独断先行は目に

余る。この後お説教してやるから、大事になる前に——。』

「あー、五月蠅い。口五月蠅い男って苦手なのよねえ。」

苛立ちを隠す様子も無く、アーニャは愚痴を零しながらジノとの通信を一方的に切断する。

「撤退、か。ホント、優等生君は私をイラつかせるのが上手いわね。このままアルカを倒して、トレーラーを破壊すれば全て済むことなのに。周りに求められる事を汲み取り、模範解答の結果を提示する……。ああ、気持ち悪い。」

べーつと舌を伸ばし、嫌いな物を食べてしまった子どもの様に苦々しい顔を作る。

「んー、まあいいわ。どうせずっとはこうしていられないんだし。我慢してあげる。」

そう言いながらアーニャは視線を落として表示されているモニターに指を滑らせる。一つ目のターゲットは無窮。二つ目のターゲットは——。

「ルルーシュ達の乗るトラック。」

アーニヤの声に応じる様に、モルドレッドは両肩の砲門を構える。

「っ！ シュタルクハドロン!? こんな街中で！」

太平洋での戦いにおいて、ブリタニアの浮遊戦艦を一撃で沈めた破壊兵器。

打ってこない、と思っていた。打つはずがない、と決めつけていた。市民の生活圏で
あるこんな市街地で、ましてや異国の地で。

だが認識が甘かった。相手は誰だ、中華連邦では無い。ブリタニアだ。

「クソ、カールレオン級を一撃で落とした威力……。どこまで吹き飛ばす……。？ 砲門の矛先
は……。」

天子とゼロの乗るトラック。

「カレンっ!! 今すぐ輻射波動をワイドレンジで展開して!! デカいのが来る!!」

『アカいのつて…、あんたはどうするのよ!？』

放射波動だけではあのハドロン砲は防ぎきれないだろう。だけど幸い、私達とカレン達には距離がある。放射波動の影響を受けずに、私が射線に割り込めるくらいの距離が。

「私が盾になる！ 放射障壁で威力を落とせば、紅蓮で打ち消せるでしょう？」

『あ、あんた…。』

「まあ、なるべくカレンの負担にならない様にはするから。それじゃ、よろしく。」

カレンのコックピットに、静寂が訪れる。

『……紅月君……。』

下を向き、項垂れているカレンの元へ、藤堂の通信が入る。

「藤堂さんは、前の警戒をお願いします。」

『……………』

「後ろは、私達が守りますから。」

『…分かった。』

操縦桿にぶら下げてあるお守りを握りしめ、カレンは祈るように額に当てる。

「……………死ぬんじゃないわよ、アルカ。」

カレンは覚悟を決め、紅蓮のその特徴的な鍵爪を開く。

「ふうん、案外人に頼める子なんだ。それとも使えるモノは何でも使う質？ どっちにしろ、そういう所はルルーシユ似なのね。」

標的のトラックを守るように追隨していた紅蓮の動きを観察しながら、少し失望したかの様な口調で呟く。

「でも、もう時間切れ。」

砲門が激しく光つたのと同時に、無窮はその場を飛び立つ。出せる限りの最高速度で、出来るだけの最短距離で。

そんな無窮を追う様に、モルドレットの全身から追尾式のボマーが一斉に射出される。

「っ！ 時間が無いというのに！」

追ってくるボマーを輻射障壁で防ぎ、ルートを変えて躲し、太刀で切り落とす。

激しい爆音と光の点滅に囲まれながら、アルカは思考を回す。

これじゃあ、間に合わない。

自身の進行を妨げる様に、的確に厭らしい所を突いてくるボマーに、進路を変更せざる追えなくなったアルカは、唇を噛みしめる。

「ああ、もう邪魔！」

全てのボマーを振り切ったアルカは、声を荒げながら、無窮のバインダーの中にある

武装を全て切り離す。

より軽く、より効率的に。

手に持っていた達も手放し、一切の武装を取り除いた無窮はさらに速度を上げる。しかし、まだシユタルクハドロンを追い越せない。あと一つ、あと一步届かない。カレンとの間に入る為には、あの光線よりも速い速度を――。

「一步、遅かったわね。」

市街地は激しい爆音と黒煙に包まれた。



煙が、晴れる。

「……へえ……！」

予想外の出来事に、私の心は驚きで満ちていた。

砲門から放たれたシユタルクハドロンは、紅蓮の輻射障壁に着弾し、飛び散った。

少なくとも、アーニャの視点からはそう見えた。

防がれる事に驚きは無い。当然だろう。出力を抑えて撃つたのだから。アルカが対応出来るか出来ないかのギリギリのラインで、死なない程度の威力で。

もう一度言うが、防がれた事に対しての驚きは無い。

「見直した…、見直したわ、アルカ！」

私が、驚いたのは

「どうやって間に合わせたのかしら？　ねえ!？」

視線の先には紅蓮を守るように立ち塞がり、バインダーに包まれている無窮。

展開していたであろう輻射障壁を解除し、徐々にバインダーを開いていく。次第に現れるその装甲は熱を帯びていて、周りの空気が歪んでいる様に見えた。

——ハドロン砲によって熱が伝播したか、輻射障壁の影響か。それはアーニャには分からなかった。でも今はそんな事、彼女にとってどうでも良かった。

「ああ、良いわ良いわ良いわ良いわ良いわ！ 無理して出張ってきた甲斐があったわ！」

歡喜に身を震わせながら、アーニヤはモニターに映る時間を確認する。

「まだまだ遊びたいけど。残念、今度は私が時間切れ。」

アルカ達の様子を見るに、追撃してくる気は無いらしい。

赤いKMFと黒いKMFは変わらずこちらを警戒しているが、無窮はコンテナ内へと格納されていく。

「また遊びましょう、ねえアルカ。」

モルドレッドは身を翻し、朱禁城の方へと飛び立っていった。

『アルカ!』

無窮の足元で座り込むアルカの元へ、ゼロとC・C・Cが駆け寄る。

「……ああ、ゼロ……。何とか振り切ったよ。」

弱々しく笑みを作り、手をヒラヒラと振るアルカに、C・C・Cは顔を顰める。仮面で素顔が見えないが、ルルーシユも同じような顔をしているだろう。

「大丈夫か?」

優しく花に触れる様に。C・C・Cは項垂れているアルカの頬に両手を沿え、目を合わせる。

その顔は何処か熱を帯びていて、頬を上気させていた。傍から見れば風邪を引いている様にも見えただろう。

……最もC・C・は、別の表情に重ねていたが。

「あーうん、…ちよつとのぼせただけ。お水、貰えれば大丈夫。……それより、運転は？」

作戦ではトラックの運転はC・C・の役目だった筈だ。しかし、C・C・は今ここに居る。アルカの疑問は当然のもの。

『玉城に任せてある。いくらあいつでも地図位は読めるだろう。』

「だと良いけど……、うわっ！」

アルカが何とも言えない不安な表情を浮かべたその時、車が急に止まり、彼女はC・C・にもたれる様にバランスを崩す。

「ご、ごめん…。まだ身体に力入らなくて…。」

「ああ、気にするな。…それより、止めたってことは……。」

『……着いたようだな。』

二人の様子を見ていたゼロは身を翻し、コンテナの出口へ足を運ぶ。

『C・C。彼女の傍に居てやってくれ。』

「言われなくてもそのつもりだ。」

「うう、面目ない……。」

落ち込むアルカを彼女なりに慰めるC・C。

そんな2人の会話を聞きながら、ゼロルルルシユは誰にも聞こえない小さな声で呟く。

『さあ、ここからが正念場だ。』

TURN 11 兄の気持ち、友への想い

「良いんですか？」

「何がだい？」

シユナイゼルの直属の部下であり、側近のカノン・マルディーニは不満を顔に浮かべながらシユナイゼルに尋ねた。

「指揮を全て中華連邦に託してしまつて。」

「それは少し違つよ、カノン。あくまでも向こうに主導権を握つて貰つただけ。細かい指示は変わらず私が出すさ。」

「そんな事なさらなくても、殿下が指揮を執れば黒の騎士団など……。」

「ここは中華連邦であつてブリタニアでは無い。土地、気候、人民、あらゆる要素がブリタニアとは異なる。ならば私より現地人である彼らに任せるのが合理的じゃないかな？」

シユナイゼルは優雅に微笑みながら用意されたティーカップを口へと運びながら、「それに」と言葉を続けた。

「どうやら中華連邦にも優秀な指揮官が居るみたいだしね。」

・ ・ ・

「追撃部隊が敗れたのだろうか？」

中華連邦軍に逆徒として捕縛された星刻は静かに口を開く。
視線の先には、中華連邦の実質的な支配者である、大宦官。

「何故分かる？」

「場所はシエンチョン溪谷。私ならそこに兵を伏せ、陸軍を足止めする。」

「それから？」

「シャオパイで本体と合流するだろう。」

星刻にとって黒の騎士団の、ゼロの行動は手に取る様に分かりやすいものだった。自分なら、ゼロならそうする。優秀過ぎるが故に、次の一手が容易に見える。

「ふむ。」

それを大宦官達も分かっているであろう。

満足そうに頷いた後、薄気味悪い笑みを浮かべて言葉を紡いだ。

「星刻、罪を許してもよい。天子様を取り戻せるならな。」

「あれを貸し与えよう。」

彼らの言葉に、一瞬の迷いは生まれたものの、星刻はその瞳に決意の色を浮かべた。全てはそう、天子の為に。



「はい、バイタルチェック終わり。特に問題は無し。水分補給だけはこまめにねえ。」

黒の騎士団が所有する浮遊戦艦「斑鳩」内に用意された医務室で、ラクシャータはキセルを手で遊びながらモニターに目を通す。

「ありがとうございます。」

アルカはベッドから身体を起こし、綺麗に畳まれたワイシャツに手を伸ばす。

「全く、アルカちゃんも無茶するよねえ。モルドレットのハドロン砲に無窮を突っ込ませるなんてえ。」

「すみません……。機体を雑に使ってしまっただけ……。」

「まあ、あそこの判断が無ければゼロ達もやばかったんだし？ 私の無窮の優秀さが証明された訳だから良いんだけどさあ……。」

ラクシャータは普段と変わらない口調で言葉を紡ぎながら立ち上がり、ベッドに腰掛

けるアルカに近づく。

「自分の身体に負担掛け過ぎじゃない？ もう少して貴女、死ぬところだったわよ？」

目つきを鋭くし、自身の顔をアルカに近づける。お互いの息づかいが手を取るように分かるほどの至近距離。

「……………守って死ねるなら本望ですよ。」

ラクシャータとは対照的に、アルカは笑みを浮かべながらはだけているシャツのボタンの手を伸ばす。

「……………アルカちゃんってさあ、何をそんなに焦っているの？」

キセルをアルカの顎に沿わせ、目線を自分と会う様に持ち上げる。

焦っている、と指摘された彼女の顔からは笑みが消え、僅かにその目が揺れていた。

「……焦ってる？ 私か？」

「質問を質問で返さないのお。…私からみたらそう見えるけど、自覚無かった？」

「……………」

ラクシャータの言葉を噛み砕いているのか、僅かに視線を逸らし黙り込むアルカ。

そんな彼女の挙動を一切見逃さない様に、ラクシャータは瞬きも忘れて見つめ続ける。

「——私は……」

しばらくの沈黙が部屋に訪れた後、アルカは震える声で口を開いた——と、その時。

『アルカ、身体の方は問題無い——か——。』

医務室の扉が開き、機械交じりの声、ゼロの声が新たに加わる。

突然の来訪者に、見つめ合っていた彼女達は視線をゼロへと移し、口をポカンと開けていた。

「ば……。」

急な来客に我に返ったアルカは、その顔をみるみると赤に染めていく。

はだけたシャツ、その間から見える素肌。角度によつてはキスしている様にも見えるほど近いラクシャータの顔。そして、配慮に欠けたゼロ^兄の行動。

羞恥と怒りとその他諸々。ごちゃ混ぜになつた感情のまま。

「馬鹿!!！」

『ほわあ!?!』

大きな声を上げて自身の横に合つた枕をゼロに向かつて投げた。



『蓬莱島の状況は?』

斑鳩の指令室。

そこで作業に取り掛かっていた扇達は、その手を止めて、ゼロ達の方へ視線を向ける。

「インドからの援軍は、既に到着しております。」

「後は帰って合流するだけだが——。」

デートハルトと扇が順に報告する。

その言葉に耳を傾けつつも、ゼロの後ろで壁に寄り掛かりながら、アルカは憤りを露わにする。

「……ゼロには配慮が足りないと思うの。」

彼女の隣に居るC。C。はアルカを見守る様な温かい目を向けながら、口を開く。

「そうやってやるな。あれはあれでお前を心配してたんだ。」

二人にしか聞こえない程の小声で、彼女達は会話を続ける。

「それは分かるけど……。それにしたって——。」

「女の扱いがなっていない、だろ？ 何、今に始まったことじゃ無いさ。」

「ああ、もう……。これじゃあ、シャーリーさんが浮かばれない——。」

脳裏にオレンジ髪を活発な少女の姿を浮かべ、溜息を吐いたその時。

「っ！ 敵襲?!」

茶色の髪をポニーテールにしたオペレーター、「日向いちじく」の声と共にけたたましい警告音が艦内に響く。

「先行のナイトメアが破壊されていきます！ 嘘、こんなスピードで……！」

彼女の視線の先には驚くべき速さで、次々とロストしていくナイトメアのシグナル。

「止まれ！ 全軍停止だ！」

扇の言葉と共に、蓬萊島に向かって進行していた斑鳩がその動きを止める。

(…おかしい。敵軍と遭遇するにしても、あと一時間は必要だった筈……。)

今の大宦官達に、混乱する軍をただちに整え、追撃する力は無い。

それがゼロの彼らに対する評価だった。

シユナイゼルなら可能であろうが、彼の性格上、中華連邦領土内で派手な行動を起す筈も無い。……モルドレッドの追撃は予想外だったが、その証拠にすぐに撤退していった。

ならば――。

(読んだやつがいる……。こちらの動きを。)

ゼロはこの時、中華連邦の評価を改めると共に、過去の自身の驕りに憤りを覚えた。

「あれは…、ナイトメア？」

「ズームだ、早く！」

日向と同時期に入団したオペレーター「双葉」が困惑の声を上げ、続いて幹部の南が指示を飛ばす。

この場にいる全員の意識が中央のモニターへと向いた。

ズームされたモニターには立ち込める黒煙とその奥に見えるぼやけた人型の影。

「ん…？ え…。」

次第に煙が晴れ、その陰の主が姿を現す。

無窮よりも濃い青色の装甲。道化師の様な顔立ち。そして、その背中にある飛翔滑走翼。

皆が同じように困惑の色を浮かべた。ただ一人、ラクシャータを除いて。

『あれは……。何故こちらと同じ、飛翔滑走翼を装備している…?!?』

ゼロの疑問は最もだった。

目の前の敵対するKMFはブリタニアに規格とは僅かに異なる。どちらかと言うと、黒の騎士団のが使っているKMF寄りの――。

「千葉隊所属のKMF『暁』三機。対象に攻撃を開始！」

この指令室の中で比較的早く意識を現実に戻したオペレーターの双葉が声を上げる。彼女の言う通り、三機の暁が新型を囲む様に展開していた。しかし。

『この神虎を甘く見たな！』

一機は何も出来ずスラッシュハーケンで潰され、残りの二機は弾幕を張るも全て避けられ刀で切断される。

『よーへー』

部下を一気に三人も失った事により、激昂した千葉が回転刃刀を構えて、正面から仕掛ける。

『道理無き者がほざくな!』

しかしその攻撃も正面から叩き伏せられ、あっという間に撃墜されてしまう。

『聞こえているか、ゼロ。』

その新型に乗るパイロット、星刻は先程の戦闘で消費した様子も感じさせない程の落ち着いた様子で呼びかけた。

『その声…、まさか星刻か!?!』

『ゼロ、(トト)は通さん!』



情けない。

無力な自分に嫌気が指した。

先程、星刻目掛けて斑鳩を飛び出し、目下交戦中の友達、カレンを見ながら自身の唇を噛みしめた。

「カレン……！」

病人は大人しくしていなさい。

困った笑みを浮かべながらそう呟き、自身の額を小突いたカレン。

エナジীর補給前だということにも関わらず、皆を守るために出撃したカレン。

「私も出撃する……！」

居ても立っても居られない、という様子でアルカは身を翻して指令室から出ようとする。

「いけません！ 無窮は今、ユニットを外したばかりで……！」

「無窮が無理でも、他があるでしょう！ 動かせる暁は!?」
「止めておいた方が良くわよお。あれには勝てない。」

ラクシャータの声が退出しようとするアルカの動きを制止する。

『知っているのか?』

「あれはうちのチームが作ったものだからねえ。」

「ラクシャータの?」

全員が彼女の声に耳を傾けながら、モニターに映るKMF「神虎」に注目する。

「紅蓮と同時期に開発したんだけど、高いスペックを追求し過ぎてねえ。扱えるパイロットが居なかった孤高のKMF。それが神虎。ある意味無窮の兄弟機、とも言えるわねえ。」

『無窮の?』

「無窮は紅蓮と神虎のデータを元に作った機体だから。」

「っ! ……ああ、クソ、そういう事か。」

総領事館に匿われていた時、黒の騎士団を強襲した星刻との会話を思い出す。

「戦闘データだけじゃ、満足出来ませんでした？」

「いえ、非常に役に立っています。」

ラクシャータに聞けば今まで神虎に乗ったテストパイロットは漏れなく搭乗中に死亡し、碌にデータが取れなかったという。参照するデータが無ければ満足に調整も出来ない。それ故、今まで無調整のまま放置されていた、と。

しかし、その機体がここに来て出てきたという事は。

（紅蓮と無窮のデータを使って調整した、ってことか……！）

あの時の黒の騎士団の立場は圧倒的に劣勢であり、中華連邦を味方に付けるのに必死だった。協力してくれる以上、何か考えがあるとは思っていたが、まさかこんな形で返って来るとは。

「暁で行っても戦力の浪費。それにアルカちゃんの体格的に無窮以外、満足に乗りこなせないでしょう?」

「そうだけど……!」

悔しそうに顔を歪めながら、再びモニターに視線を移す。

『喰らいなあ!』

紅蓮の右腕から、輻射波動を収束させた光線が放たれる。

ブリタニアの次世代量産機、ヴェンセントを一撃で破壊出来るほどの威力を持つ攻撃。それを神虎は真正面から迎え撃った。神虎の胸部から放たれる異常な熱量を持ったビームで。

二つの攻撃は二機の中央で激突し、お互いを打ち消した。その余波で凄まじい土煙と地響きが起こり、斑鳩全体が振動に包まれる。

「天愕霸王荷電粒子重砲…、あれも調整済みかあ……。やってくれたわね。」

ラクシャータは驚き半分、悔しさ半分といった様子で呟く。

『何故、その神虎が敵の手に渡っている!?!』

ゼロは苛立ちを隠そうともせず、机を叩きながら声を荒げた。

「インドも一枚岩じゃない、という事でしょう。」

「弱点は無いのか!?!」

デイトハルト、扇が順に口を開く。

「他のシリーズとは全く別の概念だからねえ。放射機構は無いんだけど、後はパイロツトが居なかつたってこと位。」

「そんな…。でも今、乗りこなしている奴がいるじゃないか!」

「……ねえ。」

結局、自分達は見守るしか無い。

そんな残酷な現実には、アルカは顔を険しくする。

『捕らえたぞ、勝敗は決した!』

神虎から放たれたスラツシユハーケンに足を取られ、紅蓮は振り回される。

『そうね、貴方の負け。』

神虎の武装の一つである、スラツシユハーケンを伝う電流。それが紅蓮に達しようとしたその時、紅蓮は左手でハーケンを掴み輻射障壁で電流を防ぐ。

『何?!』

『さあ、これで貴方は逃げられなくなった! 直に叩き込むよ!』

神虎を一撃で墮とせる様に。

その一身体、カレンは右手に帯びる輻射波動の出力を最大まで上げる。

……残りのエナジーを気にする事無く。

神虎に迫る紅蓮、放射波動が神虎を捉えたその時。紅蓮の放射波動機構から放たれていた膨大な熱は飛散し、糸の切れた人形のように機体からは力が抜けた。

『見誤ったな!』

その隙を見逃す程、星刻は甘い男では無い。

目にも止まらぬ速さで、紅蓮をスラッシュハーケンで拘束する。

「そんな…、カレン!」

「コックピットブロックごと巻かれています! これでは脱出が……。」

『残存部隊は今すぐ神虎を挟撃! ハーケンを切断しろ!』

『承知!』

ゼロの言葉に朝比奈と千葉が応える。

二機が刀を構え、神虎に斬りかかろうとした、その時だった。

『うつ、何!?!』

千葉の乗る暁が展開する輻射障壁に、砲弾が着弾した。

「後方より中華連邦軍！ 大部隊です！」

神虎を援護するように、黒の騎士団へ飛来する弾幕。

その弾幕の元には千にも及ぶ中華連邦軍の陸戦兵器『鋼體』。そしてその中央にはピラミッドの様な形をした地上戦艦『竜胆』。

朝比奈と千葉はそれらの射撃に足止めされ、紅蓮を連れて行く神虎を追えずにいた。

「無窮の補給は?!」

「もうすぐ、完了いたします……。」

「良いから、早く！ このままだとカレンが！」

悲壮に満ちたアルカの声が艦内に響く。

しかし、この場の誰もが、声を上げているアルカ自身も。頭では理解していた。

——もう間に合わない。

『カレン！ 無線はまだ生きているか!?』

『す、すみません……。失態を……。!』

普段の彼の様子とは打って変わり、感情的にゼロは声を上げた。

『そんな事は良い!』

ゼロの物言いに、デイトハルト達は当然の事、C. C. も驚きの色を浮かべる。

『諦めるな！ 必ず助けてやる、下手に動くな!』

『……。は、はい！ 分かっています、諦めません！ これ——。』

エナジーが完全に切れたのであろう。カレンの言葉は最後まで続く事無く、耳障りなノイズだけが残された。

「……。ごめん……。カレン……!」

その大きな目に涙を浮かべながら、力が抜けた様にその場に座り込むアルカ。そんな彼女を慰める為か、横に居たC・Cは足を折り、座り込む彼女の背中を優しく摩る。

「今すぐ斑鳩を回頭しろ！」

ただ一人を除いて、皆の考えている事は同じだった。

カレンを助ける。

その一心で扇は中華連邦の舞台に立ち向かう様に支持を出す。

しかし、それに異を唱える男が居た。そう、他でも無いデイトハルトだ。

「私は撤退を進言します。」

「何故です!?! カレンを助けないと!」

デイトハルトは黒の騎士団に所属しつつも、生粋のブリタニア人。ブリタニアに対する復讐心も無ければ、日本に対する思い入れも無い。彼が持つのはゼロに対する忠

誠、興味。その考えはトップのゼロが無事であればそれで良く、非常に組織的だった。

「紅月カレンは一兵卒にしか過ぎません。」

「見捨てろと言うのか!？」

当然、彼と反りの合わないメンバーは多い。

「南さん、これは選択なのです。中華連邦という国と一人の命。比べるまでも無い。ここは兵力を温存し、インド軍との合流に備えるべきです。」

——ゼロ、ご決断を。紅月隊長には、先程お掛けになった言葉で十分です。これ以上は、偏愛、鼻貞と取られ、組織が——。」

「ディートハルト!！」

ディートハルトの言葉を遮り、怒りをあらわにしたアルカが彼に迫り、頬を叩く。

「……何です? まさか貴女までもがこの場で戦うという妄言を仰るつもりですか?

いくら彼女が友人と言えど、ここは現実を見るべきでは? ここは友情を育む学校では

無いんですよ？」

「お前は——!! お前はゼロがどんな気持ちでカレンに声を掛けたか分かっているの!？」

「ええ、分かっていますとも。彼女を安心させる為の情けでしょう？ ゼロは分かっている筈です。彼女はもう切り捨てるべきだと。」

「……デイトハルト…、それ以上口を——。」

怒りで腸が煮えくり返りそうだった。

この男の物言いに。ブリタニア人らしい思考に。——過去、自分が似たような考えをしていた事に。

彼の言葉をこれ以上聞きたくなかった。彼に、兄の気持ちを踏みにじって欲しく無かった。

怒りの向くまま、彼の目を見つめ、ギアスを掛けようと私は——。

『決着を付ける！ 全軍、反転せよ！』

アルカの放つ雰囲気为重苦しいものに変わりかけたその時、ゼロはその場の空気を変

える様に声を上げた。

「何故です…!? 組織の為にも!」

『インド軍が裏切っている可能性もある。』

「っ! それ…。」

神虎を無断で中華連邦に横流しをしたという事実がある以上、完全に信頼することは出来ない。ゼロの言う事は最もであり、デイトハルトは押し黙った。

『千葉と朝比奈に鶴翼の陣を敷かせろ。アルカと藤堂は補給が済み次第出撃! 星刻に教えてやる、戦力と戦術の違いを…!』

ゼロの言葉を聞いたアルカは、デイトハルトから離れ、指令室の出口へと向かう。

「……ごめん、取り乱した。」

『いや、良い。寧ろよく言ってくれた。君が言わなきや、皆不満を貯めたままであつたらうからな。』

すれ違いざまに短く言葉を交わす。

そしてゼロ、いやルルーシユはアルカにしか聞こえない程の小さな声で「ありがとう」と呟いた。

TURN 1 2 一騎当千の兵

『黒の騎士団！ 全軍、戦闘準備！』

団員達の元へ、ゼロの指示が飛ぶ。

『地形は高低差が少なく、地理的有利は望めない！』

ゼロは的確に、戦場を分析する。

しかし、それはこの男も同様だった。

「……加えて敵の軍は急ごしらえ。指揮系統はゼロに集中させるしかない。しかし、KFの性能は敵が勝る。」

ゼロの策を読み、カレンと対等に渡り合い、そして捕縛した男、星刻。

奇しくも2人の男は寸分狂いも無いタイミングで、同じ指示を部下へと伝えていた。

それが意味することは。

『となれば、中華連邦軍の選択肢は——。』

「神虎を前面に押し立てての——。」

『「中央突破！」』

それぞれの指揮官の言葉を合図に、両軍が進行を開始する。

中華連邦を先行するのは、陸上戦艦「竜胆」。それに対抗するのは——。

「星刻！」

『無窮蒼天式！』

凄まじいスピードと共に突っ込んできた無窮の太刀を、神虎のハーケンで受け止める。

「第3竜騎兵隊！ 射程ではこちらが勝る！ 砲撃しつつ、突進せよ！」

無窮との攻防を繰り広げつつも、星刻は的確に指示を飛ばす。

『敵の指揮官は押さええ！ 藤堂！ 暁隊と共に、地上の敵を掃討せよ！』

『承知！』

『アルカ！ 露払いには藤堂に任せてお前は神虎と！』

『言われなくても……！』

地上に居る藤堂が率いるKMF部隊が、迫って来る大量の鋼體に向けて砲撃を開始する、が新型である暁にまだ慣れていないのか、その砲撃は当たらず突撃を許してしまう。

「星刻が動けずとも、こちらは無窮を押さええている。ならば後は、兵士の熟練度がモノを言うー！」

星刻の部下である恰幅の良い男「洪古」は言う。黒の騎士団の団員達は兵士と呼ぶにはまだ幼過ぎる、と。

その証拠にスペックでは圧倒的に勝っている暁部隊は、陣形を崩され、鋼體の突破を許してしまう。

「やはり紅蓮が居ないと一步遅れるか……!」

藤堂が遊撃に周っているものの、カバーしきれない。

「敵艦正面天仁区画を押さえろ! 敵軍左右両翼は無視していい! ……っ!」

無窮からの猛攻を防ぎつつも、部下の動きの把握に努める星刻。

しかし、それを見逃すほど、彼女は甘くない。太刀の鋭い切っ先が神虎のメインモニター…、では無く後ろの飛翔滑走翼に向かって放たれる。

「一撃で仕留めるのでは無く、足止めを優先してきたか!」

その無窮の太刀筋に、常人離れた反応速度で対応した星刻は、顔の横を素通りする太刀をハーケンで巻き取り、無窮の手から取り上げる。

「っ! 器用な奴だな!」

武器を失った無窮は、背中のバインダーを広げ、再び太刀を取り出し、再び斬りかかる。

「余所見が許される相手ではない、か……！ しかし！」

星刻は額に汗を掻きながら悪態を吐く。

だが星刻の表情とは裏腹に、状況は中華連邦側に傾きつつあった。

「中央が突破されました！」

オペレーターの一人、水無瀬が状況を報告する。

『敵の本陣は？』

「変わらず正面です！」

『よし…、条件はクリアされた！ 右翼千葉軍、左翼朝比奈軍！ パターニングマを適用

！ 後方射撃に備え、敵軍本体に弾幕を張りつつ、先行部隊を叩け！ 神虎をエナジー

切れに誘い込み、星刻を押さえればこちらの勝ちだ!』

黒の騎士団の中央部隊を突破した中華連邦は、斑鳩に向けて猛進する。中央部隊は左右に割られ、敵は斑鳩の真正面。この状況をゼロは待っていた。

割られた中央部隊は後ろを塞ぐ様に展開し、斑鳩からは第二の暁部隊。左右からは飛翔滑走翼を装備した航空部隊。神虎はその中央で無窮と交戦中。そして、敵は本陣から離れており、援軍は見込めない。

「増援!? ゼロめ、総力を上げてこちらを潰しに来たか!」

地上を走る鋼體が、次々と破壊されていく。

一機一機確実に。射程が勝る鋼體に砲撃されない様に、態々航空部隊を地に降ろし、近接戦闘を持ち掛けてまで。

「そろそろ観念して、捕虜にでもなったら?」

『勝ったつもりか、これで!』

太刀を振り払い、無窮の胸部へ蹴りを入れ、距離を取る。

『この勝負、神虎に気を取られたお前達の負けだ。』

「何を——。」

その時、黒の騎士団の右翼側の方から爆発音が響く。

「あの方角は……。」

事前に見た中華連邦の地図を脳内で照らし合わせる。確かそう、運河が流れていた筈だ。

答え合わせをするかの様に、黒煙が立ち込める方角から、大量の濁流がこちらに向かって流れ込んでくる。

しかし。

『フフハハハハハハ……！ 運河の決壊がお前の策か、星刻。しかし、事前に水量は減らしておいたんだよ……。』

大量と言っても、KMFの脚部を少し浸す程度。戦闘には問題無い、とゼロを始め誰もがそう考えた。

「……どうやら、ゼロが一枚上手だったようですね。」

『その言葉を聞いて安心したよ。取るに足らない、と考えたな。故に、君達の負けだ。』

「負け惜しみを……！」

『負け惜しみかどうか、君の目で確かめたら良い。』

「………なっ!？」

地上に展開する暁部隊に視線を向けると、ぬかるんだ地面に足を捕らえられているのか、身動きが出来ないまま、銃弾の雨に晒されていた。

『ここは灌漑開拓地だね。癒着による手抜き工事の結果は、流石の君達も知らないだろうっ。』

「じゃあ、ここで単騎で突撃したのは…。私達を足止めする、為……？」

『我らに勝利をもたらすは、我が国の大地そのもの！ 全軍、進行開始！』

星刻の言葉を合図に、後方に控えていた本体が、竜胆ごと移動を始める。

「ゼロー！」

『ああ、分かっている！ ……認めよう、星刻。先に貴様を落とすべきだった…！』

枢木スザク並みの武勇と、ゼロにも並ぶ知略。言葉通り、天は星刻に二物を与えたらしい。

『艦首拡散ハドロン重砲、セツト！』

星刻にこれ以上進軍させまいと奮闘するアルカの背後で、斑鳩の船首から二つの砲台が展開される。

海から引き上げたガウエインを元にして改造した砲台。

『敵軍両翼に向け、撃て！』

ゼロの号令と共に、二つの太い光線が鋼體目掛けて放たれる。

「流石だな、ゼロ。まだ手を残しているとは……！」

光線に飲まれ、次々と爆散していく鋼體。暁隊を囲んでいた鋼體を8割方殲滅した後、斑鳩は撤退に向けて回頭する。

『藤堂は部隊の救出と、再編成の指揮を執れ！ アルカは神虎を足止めしつつ後退！ 斑鳩は敵を迂回しつつ、引き付ける！ 第4予定地点へ先行せよ！』

後方へと下がる斑鳩を追い、神虎は無窮を振り切る。

『逃がすと思っているのか！』

神虎の胸部が開き、その中から砲門が顔を覗かせる。

天愕霸王荷電粒子重砲。紅蓮の攻撃を真正面から受け止め、相殺した超高火力兵器。

「それをみすみす見過ごすとしても!？」

砲門を構える神虎の後方から、凄まじい弾速で放たれる超電磁式榴散弾銃砲。

『無窮か!』

神虎は身を翻し、照準を向かってくる銃弾へと放つ。

「っ! 一瞬で照準の再設定まで! 本当に嫌になる…! けどっ!」

『ああ、今の一瞬、無駄では無かった! 藤堂!』

「承知!」

ぬかるんだ地面に足を捕らわれていた斬月は、ぬかるみから脱出し、神虎に向けてゲイオンネットを射出する。

『何、これは…!』

KMFの動力源であるサクラダイトに干渉し、その動きを止めるゲフィオンデイスターバーを搭載した兵器。

それが神虎を取り囲み、動きを止める。

「本家ほどの効果は無いけど、今はこれで十分！」

『…あと一步のところまで……！』

あと少し、あと少しで天子の手を取れたというのにも関わらず、結果を急ぎで最後の最後に無窮から意識を外してしまった。

その結果がこれだ。

神虎が身動きを取れない間に、斑鳩はどんどん後退し、藤堂と皇アルカはぬかるんだ地面から部下を救出している。

次第に足を捕らわれたKMFも居なくなり、まばらではあるものの、黒の騎士団のKMFは完全にこの場から姿を消した。

『星刻様！ 今すぐ追撃を！』

ゲフィオンネットの効果も切れ、神虎の主導権を取り戻したタイミングで、竜胆で第二の司令塔として指示をしていた香凜から通信が入る。

「……いや、良い。こちらも多く戦力を失った。」

『しかし……。』

「完全に見失った訳では無い。斑鳩の後退していった方角…、自ずと位置は絞れる。ただちに部隊を再編制。」

星刻は頭に回っていた熱を外へと逃がす。

「部隊編成後、直ちに攻撃する。今晚中に決着を付ける！」

「広大な中華連邦の大地に沈んでく夕日を眺めながら、星刻は改めて覚悟をその目に宿した。」



天帝八十八陵。

超巨大な岩山を削って作られた、歴代の天子を祀る墓所。

撤退を余儀なくされた黒の騎士団は現在、その聖域とも言える場所に籠城していた。

「本当、何処までも腐っているわね…。」

アルカは苦々しい顔色を浮かべながら、視線の先に映る光景を眺める。

「星刻達だけなら、まだ交渉の余地もあったかもしれませんが…、まさか…。」

アルカの言葉に同意する様に、日向が続いて口を開く。

斑鳩の前方、天帝八十八陵に続く道の中央で、先程も相対した中華連邦軍の大部隊が展開されている。

同じように神虎の部隊を中央に配置し、竜胆を始めとする陸戦兵器の砲門を、その中央に向けていた。

『動くな、と伝えた筈。』

『我らに反旗を翻した者など、許ししてはおけん。』

容赦無く星刻達に向けられた砲門は、その動きを制限するのに十分すぎる物だった。一步でも足を踏み出せば、指を一本でも動かせば、その砲門から弾が飛び出し、部下の命を奪う。

今の星刻達は、大宦官に命を握られているのも当然だった。

「こんな事をしている場合では！ それに、天子様を取り戻すのでは無かったのか!？」

陸戦要塞「竜胆」の指令室で、星刻と同じく香凜も同胞に銃を向けられ、身動きが取れずにいた。

「ここままで、十分。我々には強大な援軍も居るしな。」

大宦官共は媚びるような笑みを絶やすことなく、言葉を紡ぐ。

彼らの居る竜胆の後方、その上空。一機の浮遊艦と三機のKMFが待機していた。

「愚かな！ 我が国で他国に…、ブリタニアに支援を頼むなど！ それに、あの艦はアヴァロン……。」

星刻の視線の先には、ブリタニアが誇る最新鋭の浮遊航空艦「アヴァロン」と円卓の騎士の名を冠する三機のKMF。

「分かっているのか、大宦官共は！ 相手はE・Uの半分を奪い取った男…、第二皇子シュナイゼルだぞ！」

籠城をする黒の騎士団の前に現れたブリタニア軍。その意味は明白で、この場に居る誰もが悟っていた。

「大宦官は私達だけでは無く、星刻までここで抹殺するつもりだな。」

敵は強大、援軍も補給も望めず、退路も交渉の余地も無い。そんな劣勢の状況で、仮面の男「ゼロ」は――。

『デートハルト。仕掛けの準備を。』

「な……、ここで、ですか!？」

『全て揃った。最高のステージじゃないか。』

ゼロは豪語する。この状況でも勝ってみせると。奇跡を、起こしてみせると。

「私達も出るぞ。」

指令室の扉のスイッチに手を掛けながら、C・Cはアルカを連れてゼロに声を掛ける。

『…アルカ、C・C……。』

「ん?」

『不利になったら……、脱出しろよ。お前達だけでも……。』

ゼロの物言いに、アルカは何かを言いたそうにしていたが、それをC・Cが制止した。彼女の背後でアルカは不服そうな表情を浮かべながらも、吐き出しそうになった言

葉を飲み込む。

「…ふっ。その前に手を打っておけ。」

・ ・ ・

『あいつ、前に比べて随分と丸くなったじゃないか。』

斑鳩の格納庫。

暁と無窮。二機のKMFに乗り込み、戦闘前の最終チェックをしながら、幹部のみに許されたプライベート通信で彼女達は会話を続ける。

「……兄としては合格、指揮官としては及第点。」

『不服か？ 嬉しい癖に。』

「複雑なの。……また私は守られて……。」

あいつの妹である限り、その宿命からは逃れられないぞ、とC・Cは内心で苦笑する。

「まあいいや。ここで戦果を上げて、嫌でも認めさせてやるんだから。守るのは私だつて。」

『果たしてそれが叶うかな？ お前は危なっかしいからな。カレンも言っていたぞ、目を離せないって。』

「……、カレンもカレンで。子ども扱いをして！ 何回も言っているのに。私は死なないうって。」

『……』

質の悪い冗談だ。

C・Cは内心でそう考えた。

『……ああ、お前と話していたら僅かな緊張も無くなったよ。やはりお前は心地良い。』

「それは良かった。」

C・C・つて緊張するの？

アルカの疑問は抱いたが、この場で言葉にすることは無かった。

『さて、行けるか？』

「当然。」

斑鳩のハッチが開く。

眼前に広がるのは雲一つ無い夜空と、それに不釣り合いな大量の軍事兵器。

「無窮蒼天式、出ます！」

『暁直参仕様。出る！』

2人の少女が戦場へと飛び出す。

それぞれ譲れないモノをその胸中に抱いて。

TURN 13 想いの力

「大宦官め…、天帝八十八陵までもその欲で穢すか！」

星刻の眼前に広がるのは無数の砲弾の雨に晒される歴代の天子の墓所。

そこはこの国に住む者にとって神聖な場所であり、時に命にも代えがたいもの。それを、大宦官達は……。

「全軍攻撃を中止しろ！ あそこには天子様もおられる！」

『分かっておらぬな、星刻。あそこは歴代の天子が眠る所。つまりは墓。』

『今の天子は埋葬する。』

『既に新しい天子は手配したしな。』

『オデユツセウス殿下とも釣り合いの取りやすい人形だよ。』

大宦官達は厭らしい笑みを浮かべながら、さも当然の様に言葉を紡ぐ。

星刻の中には、ほんの少しではあるものの望みがあった。大宦官達にまだ人間として

の心を持っている事を。

しかし、彼の期待はあっけなく打ち砕かれる。

「貴様ら、天子様を！」

激昂した星刻は、怒りのまま大宦官達の乗る竜胆へと刃を向ける。しかし、その刃は新たに現れた刺客により阻まれた。

『君かい？ クーデターの首謀者は？』

可変型KMF「トリスタン」。そしてそれを駆る最強の騎士「ジノ・ヴァインベルク」。彼は好戦的な笑みを浮かべたまま、神虎と刃を交わす。

「ブリタニアは引け！ これは我が国の問題だ！」

『でも、国際的にはあっちが国の代表だから、さ。』

星刻は顔に焦りを浮かべる。

大宦官からは裏切られ、ブリタニア軍には敵として認識された。

まさに絶対絶命、言葉通りの袋の中の鼠。そんな彼の手を取るのには、果たして――。



戦場は混沌に満ちていた。

黒の騎士団、星刻の部隊に対して無差別に攻撃を行うブリタニアと中華連邦軍。

中華連邦の航空部隊を叩いたと思えば、ブリタニアからの攻撃が。ブリタニアを撃とうとすれば、地上から鋼體の砲撃が。

そしてその合間も天子の乗る斑鳩は弾丸の雨に晒され、ナイトオブブラウズ達の猛攻は続く。

「枢木スザク！」

『アルカ！ 君はまた……！』

蒼のKMFを駆る少女は、向かってくる敵を薙ぎ払いながら、ブリタニアの白騎士と相対する。

「各機、一騎当千の気構えで迎え撃て！」

奇跡と謳われた男は、斑鳩に向かう敵軍を食い止めつつ、部下に指示を出す。

「敵は、殲滅。」

裏切りの騎士の名を冠する機体を駆る少女は、その力を持つて破壊の限りを尽くす。そんな乱戦状態の中、黒の騎士団の指導者「ゼロ」は、大宦官達と最後の対話を試みていた。

『ほう？ 直々に敗北を認めるのかな？ しかし、もう遅いわ。』

『……どうしても攻撃を止めないつもりか？ このままでは天子も死ぬ。』

ゼロの言葉を聞いた大宦官達は、元々にやついていた笑みをさらに深くし、嘲り笑う。

『天子などただのシステム。代わりなどいくらでも居る。取引材料にはならぬな。』

『貢物として、ブリタニアの爵位以上を用意しろと?』

『実に安い見返りだったよ。』

『領土の割譲と、不平等条約の締結がか!?』

『我々には関係ない。ブリタニア貴族である我々には。』

天子とオデュッセウスの結婚。

その華やかな字面の裏で結ばれた条約は、ブリタニアに有利な内容だった。一歩間違えれば、中華連邦の名前は奪われ、新たに数字に代わっていた可能性すらある程の。

それを大宦官は、関係無いと切り捨てた。

そんな彼らにルルーシユは、激しい憤りを覚える。

『残された人民はどうなる!?!』

『ゼロ、君は道を歩く時、蟻を踏まない様に気を付けて歩くのかい?』

『国を売り、主を捨て、民を裏切り…、その先に何を掴むつもりか!?』

『驚きだな、ゼロがこんな理想主義者とは。』

『主や民などいくらでも湧いてくる。虫の様にな!』

その後の笑い声は聞くに堪えないものだった。怒りのまま通信を切り、ゼロは思わず立ち上がり、声を上げる。

『腐っている……！ 何が貴族だ！ ノーブル・オブリゲーションも知らぬ官僚が！』

こんな奴らが蔓延るから世界は一向に良くならない。
ルルーシユの胸中には激しい怒りと嘆きが渦巻いていた。



少女は嘆く。戦争を続ける者達に。

少女は駆ける。自らの目でその光景を見る為に。

少女は叫ぶ。この戦いを止める為に。

「やめて！ もうやめて！ こんな戦い！」

戦いが終わらない外の世界に行っても経っても居られなくなった天子は、友人である神楽耶の制止を振り切り、斑鳩の甲板で叫ぶ。

「きやつ……！」

激しい爆風にその軽い身体は煽られ、天子はその場に倒れ伏す。一步間違えれば命を落としてまう程に危険な場所にただ一人。それを彼は見逃す男ではない。

『天子様！』

戦闘中であるのにも関わらず、敵に背を向けてまで星刻は天子の元へと駆け付けようとする、が。

『……、ぐっ！ 翼が！』

『余所見なんてするから……。』

先程まで相対していたトリスタンからの攻撃によって、神虎は片翼を失う。しかし、それでも。

「今だ。天子を撃て。」

『『『『殺無許』』』』』
シャーモウシイ

世界の全てが天子の敵になろうと。

(もってくれ…、神虎……………。私の…、私の命をくれてやる…!!!)

天子が襲撃に晒されるその寸前で、神虎は天子の元へと辿り着き、一身に攻撃を受け止める。

手首のスラッシュハーケンを回し、天子に銃弾が通らない様に。

「お逃げ下さい！　天子様！」

例え弾を落とすきれず、機体に着弾しようとも。

「折角外に出られたのに、貴方はまだ何も見ていない。ここは私が防ぎますから！」

「で、でも、星刻！ 貴方が居なきや、私は、貴方と、貴方と………！」

天子はその目から大粒の涙を流しながら、ただただ叫ぶ。

それは紛れも無く、天子自身の気持ち。大宦官の操り人形としてでは無く、ただの天子としての。

「っ！ 勿体なきお言葉……。されど……。」

スラッシュハーケンの回転が弱まり、次第に被弾が増えていき、神虎が悲鳴を上げる。

（私には救えないのか？ 守れないのか？）

天子を守る為ならと、一度は命を投げ出そうとしていた。

しかし、天子の顔を見て、願いを聞いた時、一緒に行きたいと心から願ってしまった。だから星刻は願う。

「誰か、誰でも良い！ ……彼女を救ってくれ！」

そして、その声も虚しく、無数の巨大な砲弾が神虎諸共吹き飛ばそうとした、その時。

『分かった、聞き届けよう、その願い。』

星刻は確かに聞いた。仮面の男の声を。



斑鳩の甲板に向けて放たれた無数の砲弾は着弾し、神虎諸共吹き飛ばした。少なくとも、シユナイゼルの目にはそう映った。

「……ん？」

しかし、それは思い込みであつたと、彼はすぐに思い知る事となる。

「……あのナイトメアは……。」

神虎と天子の前に立ち塞がった漆黒のKMF。

そのフォルムはガウエインを彷彿とさせるも、件の機体よりもコンパクトである。

『中華連邦並びに、ブリタニアの諸君に問う。まだこの私と、ゼロと戦うつもりだろうか？』

そう雄弁と語るゼロの声に、アルカは顔を綻ばせる。

「…もう、遅すぎだよ。」

ゼロが自ら最前線に現れる。

保身に長けていると言われていた彼の行動に、ブリタニアも中華連邦も、誰もが驚きをあらわにする。

『何をしている!?! 一斉射撃で仕留めよ!』

動揺から一早く戻ってきたのは、意外にも大宦官だった。

『なるほど！　それが大宦官としての返答なのか！』

ゼロ＝ルルーシユはその反応が予想通りだったのか、愉快そうに声を上げながら操縦桿代わりのキーボードに指を滑らす。

その操作に反応して、漆黒のKMFの周りには防壁が展開され、飛んでくる砲弾を防ぐ。

その防御力の高さ到大宦官は思わず狼狽える。自身の攻撃が星刻達はおろか、前線を張るゼロにすら傷一つ付ける事が叶わなかったから。

「ふっふっふ。KMF『蜃気楼』。その絶対守護領域は、世界最高峰の防御力なのよお。」

ゼロ専用KMF『蜃気楼』。

ラクシャータが開発を手掛けた第八世代相当KMF。

ガウエインのドルイドシステムを流用することで高い演算能力と防御力を実現した

指揮官機。

それに加えて。

『さあ、チェックメイトだ！ 拡散構造相転移砲…、発射！』

蜃気楼の胸部からプリズム状の液体金属が射出され、それを追う様にレーザーが照射される。

放たれたレーザーは先行するプリズムに当たり、そして乱反射した。反射したレーザーはその熱量であらゆる敵性兵器のみを破壊していく。正確に、針に穴を通す様に。範囲攻撃にも関わらず味方に一切の危害を加えず。

「ふむ……。」

ゼロの乗る新型KMFによって中華連邦軍はほぼ壊滅、ブリタニア側の残存戦力はエリアーから連れてきた数機のヴァインセントとラウンス達。

戦局の把握にその目を動かしながら、シユナイゼルは疑問を口にする。

「ゼロはどうして、このタイミングで出てきたと思う？」
「は……？」

朱禁城の一件から今まで、黒の騎士団はずっと逃げ続けていた。当然、物資の補給、援軍との合流などしていない。

それならば、あの新型KMFは最初からあの艦隊に居たという事になる。

出てくる場面はいくらでもあった。無窮とモルドレットの交戦、紅蓮二式が捕縛された時…、挙げればキリが無い。

それでも彼がそうしなかった、という事は、何か別の意図がある筈だ。

シユナイゼルは頭を回す。この対局を、引き際を見極める為に。

「シユナイゼル殿下！ 報告が！ 現在、中華連邦各地で暴動が発生！ 上海、寿春、北京……、その他14か所で同時多発的に……！」

思考に更けていると、部下の一人がシユナイゼルの疑問の答えを報告する。
モニターに映し出されたのは怒りの声を上げながら街で暴れる臣民達。

「ゼロが待っていたのはこれか……。」

驚き半分、関心半分、と言った様子で彼は呟く。

「ゼロと大宦官との通信記録が横流しされた様です。」

アヴァロン内でオペレーターを務めていたセシルが、その横流しされたという通信記録を再生する。

その内容は、余りにもお粗末で酷いものだった。

ゼロと敵対するシュナイゼル達ですら、ゼロの味方をしたくなる程に。

「いつの間にか、形勢を逆転された様だね。」

黒の騎士団の全部隊が、攻勢へと転じる。

彼らは待っていたのだ。この状況が作り出されるのを。

「殿下、空爆すれば、まだこちらの……。」

「……いや、撤退する。国とは、領土でも体制でも無い。……人だよ。民衆の支持を失った大宦官に、我が国に入る資格は無い。」

これが盤上のゲームなら、シュナイゼルは迷わず攻めの一手を取っただろう。しかし、現実はそのような簡単なものではない。

「全軍、撤退準備。」

『イエス、ユアハイネス。』

無窮との交戦を止め、スザクは戦線から離脱していく。アルカも戦いを続ける気は無いらしく、その太刀を仕舞い上空へと上がっていくスザクを見送る。

「流石、優等生。引いてくれたか。……だけど……。」

「あの男……、皇帝なら……。」

「皇帝陛下だったらどうしていたかな？」

アルカ、ルルーシユ、シュナイゼルは奇しくも同じ人物の事を思い浮かべていた。

そこからはあつという間に事態は収束した。

シユナイゼルから見捨てられた大宦官達は、星刻によって肅清され、民衆の暴動も大宦官が死亡した事によって治まった。

大宦官という病も消え、名実共に盟主となった天子様は天子様らしく国を導いていくつもりだと言う。

まだまだ世界を知らない彼女にはこれからも苦難がふりかかるかもしれないけど、まあ大丈夫でしょう。頼りになる騎士が居るのだから。

誰もが喜びの表情を浮かべ、真の盟主を祝福した。

しかし、私は心から喜ぶことは出来なかった。

カレンを取り戻すことが叶わなかったからだ。どうやら天帝八十八陵での決戦の前にブリタニアに引き渡されたらしい。

——必ず取り戻す。

そう私は兄上と誓い、これからも抗い続ける事を共に誓った。

そして——。

「その場合、同時に日本人の誰かと結婚して頂くのが——。」

「貴方、またひっぱたかれないの？」

『……アルカ？』

私は今、憤りを感じていた。

冗談、にしては笑えない戯言を言うデートハルトを睨み付ける。

「……アルカ様、これは高度に政治的な——。」

そのデートハルトは面倒くさいといった様子表情を浮かべ、私を嗜めようとする。

ああ、本当にこの男は腹立たしい。

「違います！ 単純な恋の問題です！ 政治で語る事ではありません！」

「うん、そうだな。私もアルカ達と同意見だ。」

それ見た事か。

お前の考えに異を唱えるのは私だけでは無い。

『…なっ……。』

私やC・C・までもが反発するとは思っていなかったゼロ…、兄上は思わずと言った様子で同様の声を上げる。

…もう、相変わらさず物事を難しく捉えすぎなんだから。天子と星刻がお互いを見つめる視線、交わす言葉。今まで気づく要素は沢山あったというのに。

「良いですか、私達は戦争をしているんですよ？」

負け時とディートハルトは目付きを鋭くし御託を並べる、が。

「お前は黙っている。」

「お前…?! 参謀に向かつて！」

彼の味方をする者はこの場に居ない。

「……ゼロ、ご裁可を。」

「ゼロ様なら分かってくれますよね!？」

「…ゼロ。」

『…うつ……、それは…。』

ゼロに注がれる皆の視線。

その視線の圧……、主に私を始めとする女性陣からの視線に押され、ゼロは一步、また一步と後退していく。

「ゼロお！ 昨日の件だけだよ……。つて、まだ取り込み中？」

ゼロの言葉を待つ空気になり、文字通り逃げ道が無くなったその時、陽気な男の声が加わった。

『……いや、いい。』

「ゼロ！ こちらは——。」

『玉城の話も重要事項だ。』

そう言い残し、ゼロはこの場を後にする。

「逃げたな。」

隣で小さく呟いたC。C。の言葉に小さく頷きを返し、私は思わずため息を吐いた。

・ ・ ・

『天子よ！ 貴女の未来は——貴女自身のモノだ。』

大げさにマントを靡かせ、ゼロは天子に手を差し伸べる。

「流石ですわ、ゼロ様！」

「……しかし、力関係をハッキリさせねば……！」

『……力の源は心にある。大宦官達に対して決起した人々も、私達黒の騎士団も、心の力で戦ってきた！』

ゼロは言う。

その人の心を踏みにじる事は出来ない、と。

「ゼロ、君と言う人間が、少し分かった気がするよ。」

星刻は温和な笑みを浮かべて、ゼロと握手を交わす。

『進むべき道は険しいが——』。

「だからこそ、明日と言う日は我らにある。」

この瞬間、この時を持って、中華連邦は黒の騎士団にとっての強大な味方となる。

後の『超合衆国』。

ブリタニアに匹敵する連合国家の始まりは、この中華連邦の騒動が切っ掛けとなっ

た。

—— A・A 著書 「帝国の崩壊」 第7章より

・ ・ ・

斑鳩内のゼロの私室。

C・C は部屋に入るや否や、乱雑に服を脱ぎ捨て、部屋着となり、だらしなくソファに寝転がる。

そんな彼女の脱ぎ捨てられた服を、慣れた手つきで拾い上げ、綺麗に折り畳むルルーシユ。

何時もの日常の光景ではあるものの、その会話は日常とは逸脱していた。

「ようやく、これで本来の目を果たせる。」

「……嚮団、か。」

「ああ、ギアスの使い手を生み出し、研究している組織。嚮団を押しさえれば、ギアスの面

でも皇帝を上回れる。」

「利用する気、か。」

「使わない手は無い。敵は強大だ。手札は多い方が良さだろう。」

ルルーシユの言葉にC・C・は同意する事無く、複雑な表情を浮かべる。

「不満か？」

「……ああ、そうだな……。嚮団を探し出すのは賛成だ、だが温い。やるなら殲滅だ。徹底的に、後腐れ無く。さもないと、要らん重荷を背負わせることになるぞ。」

誰に、とは聞かなかった。

彼女にここまで言わせる人物など、ルルーシユの脳裏には一人しか浮かばない。

今、その人物はここには居ない。

「……なあ、そろそろ聞かせてくれないか。その…、お前とアルカが嚮団に居た頃の話
を。」

「駄目だ。」

取り付く島もない、とはこのことを言うのだろうか。冷たく、突き放す様に、彼女はただ一言言い放った。

「あの頃の話は私はいらない。」

「お前はまたそうやって……！」

「お前は生きる為に、戦う為に私と契約し、その力を行使している。これからも変わらず戦い続けるなら、この話は聞くな。一度踏み込んでしまえば——」

お前は多分、ギアスと言う存在そのものを、許せなくなるだろう。

C. C. はルルーシユの瞳を見つめながら、静かにそう言った。



「失われたコードの再現、ですか。」

かつて純血派のリーダーとしてその手腕を振るつた元軍人「ジェレミア・ゴットバルト」は手元の資料に目を通しながらそう呟いた。

「うん、そつちの方が僕らにとつても都合が良くてね。」

そんな彼の前にチョココンと座り、言葉を紡ぐ金髪の少年。

「なるほど。あなた方が何をしようとしているかは分かりませんが、彼女がどういった存在なのかは良く分かりました。しかし——。」

「うん、君が言いたい事は分かるよ、ジェレミア。資料が不足している、と言いたいんだろっ？」

常に一定の声音、変化の乏しい表情。人形の様な風貌をした少年「V・V」は退屈そうに淡々と述べる。

「それは前払いだよ。君が仕事を完遂すれば、より詳しい資料を渡すよ。だから——」

「分かりました。まずはエリアー、ルルーシユの元へ。……お任せください、このジエ
レミア・ゴツドバルト、ご期待には——全力で。」

人の歴史の裏で暗躍していた嚮団が、今動き出す。

TURN 14 最後の日常、嚮団の影

『……………どうしよう。』

「どうしよう、と言われても……………」

場所は斑鳩内のゼロの私室。

眼前に映し出されたモニターの向こうで、彼女の兄「ルルーシュ」は有り体に言えば、困っていた。

『アツシユフオードにナイトオブブラウンズがもう二人…。しかも生徒会に…。スザクだけでも頭が痛いのに…。ええい、ヴィレッタ！ 本当に裏は無いんだな!?!』

『少なくとも、機情にはそう伝えられていない、が…。ただのヴァインベルク卿の余興では…?!』

『いくら奴らの頭のネジが緩かろうと、相手は皇帝直属の騎士だぞ?! 一般の軍人では知りえない任務があるだろう!?! 何か俺を誘い出す策略が……………。』

『そういう意味では僕らも皇帝直属だよ？ 兄さん……………。』

彼女、アルカが口を開かなくとも、会話は進む。

(何? やけに馴染んじやって…。)

少し不貞腐れながら、アルカは自身のコップに注がれた紅茶を口へと運ぶ。

(少し前まではお互いに睨み合っていた癖に。ヴィレッタも、ロロも。)

彼らの順応性が高いのか、ブリタニアでは無くルルーシユに忠義が生まれたのか。どちらにせよ、ルルーシユの傍に居れない彼女からしたら、面白くない。

『加えて夥しい数の女達との逢瀬の約束…、そして俺が、シャーリーと…。』

『はい、キスさせていただきました。』

『言わなくて良い!』

ルルーシユが不在の時に影武者を務めている佐世子の天然発言に、ルルーシユは再び

頭を抱える。

「それで？ 困り果てた坊やは妹に泣きつく、と。変わらないな。」

『黙れ魔女！』

『ルルーシユ様、次のデートのお約束まで30分を切りました。場所はクロヴィスランドで——。』

『分かってる！』

佐世子に、ラウンズに振り回されるルルーシユ。

その姿はゼロとしての面影など存在せず、年相応の様にも見えた。

「えっと、デートの約束をした女性の数は何人だっけ？」

『総勢108人、残りは83名でございます。キャンセル待ちは14件で変わらず。』
(水滸伝か。)

アルカは考える、送られたルルーシユのスケジュールを眺めながら。

当面二週間、分刻みでスケジュールを組まれている彼の予定を見て、アルカは思った。

体力が無い兄上に、乗り切れる筈が無い、と。

（中華連邦との会談を欠席する訳にはいかない。だとすると、女の子達には悪いけどデートの約束を……。ん？）

女性の名前が隙間無く書かれている中で、一つ見慣れない言葉に引つ掛かりを覚える。

「この、キューピッドの日、ていうのは？」

『ん、ああ。何時ものイベントだよ。会長の卒業に合わせたモラトリアム。男女で違う色の帽子を被り、それを互いに交換する事で結ばれる、という。』

「じゃあ、そこで相手作っちゃえば？」

『……は？』

「ミレイさんのイベントって事は学校全体での行事でしょ？　そこで適当な誰かと交換してしまえば言わば学園公認カップル。他の人達も諦めが付くんじゃない？　108人の相手をするよりも1人の相手した方が楽でしょ。」

アルカの言葉を聞き、やつれていたルルーシユの顔に活気が戻る。

『なるほど。そうか、それで女共と一気に清算を……。よし、それでいこう。作戦名は『ラブ・アタック』。そうと決まれば——アルカ!』

『はい?!』

『今すぐエリアーへと渡り、作戦に備えアツシユフォードに潜入。作戦当日は、その機動力で先行し、俺の帽子を——。』

「ええ……」

「とうとうシスコンからも道を踏み外したか。」

『兄さん、流石にそれは……。』

『正直、引いたぞ。』

『ルルーシユ様、それは無いです。』

ルルーシユの提案に、皆一様に難色を示す。

『な、何故だ!? 何処の馬の骨かも分からない奴と交換するよりも、身内の方が安全だろう!? 幸い、アルカは顔も割れておらず、学園の生徒達もアルカ関する記憶は持ってい

ない。これ以上の適任者がいるか!？」

『いや、理屈は分かるが……。』

「傍から見たときの見た目が良くないな。」

『何……? お前達の目は節穴か? これ以上、可愛らしい生き物が居るか!』

「そういう意味の見た目じゃない! このシスコンめ!」

予想外の出来事と、妹達が絡むと途端に頭が緩くなるルルーシユの姿に頭を痛めながら、珍しくC・C・は声を荒げる。

「兎に角、アルカはダメだ。もつと身近にいる人間にしろ。ヴィレッタで良いだろう。」

『ヴィレッタ……? まあ……、ヴィレッタでも良いか……。』

『別にお前に対して好意的な気持ちを持っている訳では無いが、その物言いはどうかと
思うぞ。』

ルルーシユの後ろでヴィレッタは青筋を浮かべながら口を開く。

『ふむ……、まあ良い。粗方の作戦概要は決まった。アルカ、C・C・、助言感謝する。後

「はこちらで上手く立ち回ろう。」

ルルーシユは口早にそう言い、通信を切断した。

過密スケジュールの彼にとって、一分一秒でも惜しいのだろう。

ゼロの私室は途端に静寂に包まれた。

「……………なんか、疲れた。」

「あいつ、忙しすぎて頭でもイカれたか？」

はあ、とため息を吐き、C・Cは隣に座るアルカの膝に頭を乗せる。

アルカもそんなC・Cの行動に慣れた様子で、彼女の髪を掻き分け、頭を撫でる。

「……………暇だな。」

「まあ、やること無いからね。嚮団を探すと言ってもやる事はデータを解析に掛けるだけ。兄上はあの通り動けない——ひゃっ！」

「こんなに暇だと身体が鈍ってしまうな。太ってきていないか？」

C. C. は彼女のお腹を掴みながら、意地悪く笑みを浮かべる。

「そ、そんなことつ、無い、です…！ 私の…：…か、身体は、一年前から、うん、変化、ないんだか…：…らっ！」

そんな事、C. C. だって百も承知だ。

彼女の事は心身共にC. C. が一番よく分かっている。

これはただの口実。

「何。変化、という物は自分では気付きにくいもの。第三者の目で見て、初めて知る事もある。」

身体を起こし、アルカの小さな両手を片手で拘束し、彼女の着ているパーカーのジツパーに手を掛ける。

「私が、直接、確かめてやろう。」

「え、いや、ちよつと…。まだ、お昼…。」

これはそう。

決戦（キューピッドの日）を控えたルルーシュが知る由も無い前日譚。

斑鳩の一室で繰り広げられる小さな戦い。

その名をラブ・アタック（物理）。



ルルーシュとの混沌とした作戦会議から数日後。

数日前と変わらず、時間を持って余っていたアルカとC・C。はピザを囲み、談笑していた。

「そういえば、ルルーシュは上手く立ち回ったのか？」

ピザを頬張りながらC・C。は思いだしたかの様に呟いた。

「上手くやったみたいだよ。結局、シャーリーさんと帽子を交換したみたい。」

「何だ、結局収まるところに収まったか。でも珍しいな、あいつがプランを変更するな
ど。」

「女子生徒だけに留まらず、男子生徒、馬、果てにはモルドレッドにまで追われて辿り着
いた結果らしいよ。」

「……何故そこにモルドレッドが出てくる?」

「それは私にも分からない……。」

苦笑を浮かべつつ、アルカは当日の様子を話す兄の姿を思い出す。

「色々と慌ただしい一日だったらしいけど。それを語る兄上の表情は嬉しそうだった。」

「……そうか。」

「今度の週末は、シャーリーさんとデートだったてさ。」

「呑気なものだな。」

「そうだね。でも、それが終われば——。」

アルカは僅かに視線を落とし、自身の膝の上に置かれたモニターを見つめる。

そこに映し出されているのは広大な中華連邦の地図と、その中にポツンと赤く光る一

つのマーカー。

「もう日常には戻れない。」

そのマーカーが意味する事はただ一つ。

それはC・C・のアルカの古巣であり、ルルーシユが探していたギアス嚮団の本拠地。

最も、アルカにとって古巣と言えるほど良い場所では無かったが。

「中華連邦内のお金の動き、ライフラインの供給量、人と物資の流れ……。その全てをド
ルイドシステムで分析して、算出したのがこの場所……。ほぼ、確定だろうね。」

「どんな様子だった？ 偵察を送ったんだろう？」

「砂漠の中にポツンと遺跡があるだけ。特に見張りは居ないし、人の出入りも殆ど。」

「そうか。そのまま監視を続けておけ。新たに刺客が送り込まれる可能性もあるからな。」

C・C・は先程までピザに伸びていた手を止め、神妙な顔立ちでアルカの目を見つめ

る。

「……気負うなよ。お前は悪くない。」

「…うん。」

アルカは、目を伏せながら静かに頷き、ティーカップに手を伸ばした。

◇◇◇

雲に覆われ、激しい雨が降り続くトウキョウ租界。

「うん！ 観た観た。会長らしいよねえ。」

先日卒業し、その翌日からニュースアナウンサーとして新たに活動を始めたミレイの姿を思い浮かべ、シャーリーは笑みを零す。

「で、どうしよう？ ルーフトップガーデン。——うん、そう。分かった。じゃあ苗だ

け買って帰るね。」

ルルーシユとのデートを週末に控えたシャーリーは、学友との会話に話を咲かせながら歩を進める。

「園芸部の方は——。」

ふと、シャーリーは足を止め、言葉を詰まらせる。

突然の異常に、手には力が入らなくなり、さしていた傘を地面に落とす。

「あ……、ああ……。」

電話越しにシャーリーを心配する声があるが、今の彼女にその言葉は届かない。

「そうだ…、思い出した。」

動揺しているのにも関わらず、シャーリーは直ぐに指を通話の終了ボタンに運び、電

話を切る。

何故、こういう所だけ機転が効いたのか。それは彼女自身にも分からなかった。

「お父さんを殺したのは…。」

一年前の記憶が、再び蘇る。記憶の底から、蓋が外れた様に溢れてくる。

ゼロの正体、他人を操る特別な力、彼の妹達。

溢れてきた記憶と今の現実の相違に、シャーリーの思考は混乱する。

「ルルーシユ……。」

その名を呟いた彼女の瞳から涙が零れ落ちた。



中華連邦領土内に位置する嚮団を名乗る組織の本拠地。

そこを突き止めたコーネリアとノネットは、その施設の中で死亡したとされていた軍

人、バトラーと出会う。

ブリタニア軍の上層部が、この組織に肩入れしている事は容易に想像出来ていた二人は、彼に出会うや否や持っている剣を突きつけた。

しかし、その剣を突きつけられたバトラーから零れた言葉は、命乞いや懺悔では無く、安堵と助けを求める声だった。

お会い出来て良かった。助けて欲しい。

彼は確かにそう言った。

これが演技なら相当の役者だが、コーネリアの記憶上、彼はそんなに器用な男では無い。

敵では無いと判断した二人は剣を降ろし、彼の言葉に耳を傾ける。

そして、彼から出た言葉が――。

「神を殺す？ 随分と突拍子の無いことを言い始めたな。皇帝陛下はそこまで傾倒しているのか。」

神殺しに協力してしまった。と彼は言った。

「何かの比喩だとも思いましたが、少なくとも、彼らは本気で信じている様です。」

「おいおい、私の知るブリタニアは、宗教国家でも何でも無いぞ。」

「彼女の言う通りだ。馬鹿馬鹿しい。神など存在する筈が無い。」

ノネットとコーネリアは強い口調でその思想を否定する。

彼女達は元々軍人。近代兵器を用い、戦いによって自身の地位を築き上げてきた最たる存在。そんな彼女らが難色を示すのも無理も無い話だった。

「そうだね。」

そんな彼女たちの会話に割って入る一人の少年の声。

「っ！」

唐突に後ろから聞こえた声に、2人は身を翻し剣を構える。

「背中に翼の生えた女神様とか、長い髭の老人とか。確かに、そんな神様は存在しないね。」

立ち並ぶ柱の陰から現れたのは、精巧な人形の様な金髪の少年。

思わず警戒を解いてしまいそうな幼い風貌。常人であればここで武器を取る選択はしなかったであろう。

「——うっ……………」

少年の額に深くナイフが刺さり、彼は力無くその場に倒れる。

そのナイフを投降したのは、他でも無いノネット・エニアグラム。

「え、エニアグラム卿……………」

「…どんなギアスを使ってくるか分からないからな。少年には悪いが——。」

「うん、そうだね。正しい判断だよ。」

確実に息絶えたであろう少年の口から、再び言葉が漏れる。

「っ！」

少年……V・V・はゆっくりとその身体を起こし、額に刺さっているナイフを乱雑に抜いた。

抜かれた額からは大量の血が零れ、彼の顔を真っ赤に穢す。

「流石は音に聞こえたシャルルの騎士。僕も兄として誇りが高いよ。」

「……一体どんなトリックだ？ 流石の私も、殺しても死なない相手は初めてだぞ……。」

全くの道の存在に、ノネットとコーネリアは冷汗を流し、僅かに後退する。しかし、それでも彼女達は警戒を辞めない。

何か裏がある筈だ。能力の発動条件は一体何だ。2人は頭を回す。

そんな彼女達を嘲り笑う様に、V・V・は笑みを深くし、再び口を開いた。

「僕らは誓ったんだ。人々を争わせる神なら——、殺してしまおうって。」

人の歴史の裏に蔓延る嚮団の意志。
それをまだ、彼女達は知らない。

TURN 15 少女の真実

この世界は嘘にまみれている。

シャーリー・フェネットは真実を知った。

記憶を取り戻したあの日から、周りの人間を信頼することが出来なくなった。

どうして誰も、ロロの存在に違和感を感じないのか。

どうして誰も、ヴィレッタが教師であることを不思議に思わないのか。

どうして誰も、ナナリーやアルカの事を憶えていないのか。

どうして。どうして。どうしてどうしてどうしてどうしてどうして
て

全員が嘔吐きのように見えた。全員が敵に見えた。

街の住人も。軍人も。先生も。友人すらも。

だから自分で呼び出した筈のスザクと会うのも、最後まで迷っていた。

それでも今日、彼女がこうして足を運んだのは、彼女なりに真実を見極めようとした

のだろう。

そして――。

(ああ、そっか。)

彼女はまた一つ、真実を知った。

彼女と約束をしていたルルーシユと、たまたま居合わせたスザク。

シャーリーはその二人に命を救われた。

ビルの屋上から足を踏み外した彼女を、ルルーシユとスザクは身体を張って助けたのだ。

その時の2人の、ルルーシユの顔を見て、シャーリーの見方は変わった。

重力に引っ張られる彼女の身体を必死に手繰り寄せながら、ルルーシユは言ったのだ。

――もう、誰も失いたくない、と。

二人によって引き上げられた後、会話を交えながらルルーシュとスザクの様子を観察したシャーリーは、確信する。

(そっか、ルルは一人で戦っているんだね。)

親友である筈のスザクとも笑い合わず、誰にも背負っているものを打ち明ける事無く。

全て一人で背負い込んで。

そう思った瞬間に、シャーリーの世界に対する不信感は、ルルーシュに対する疑惑が、全て晴れた。全てを、許そうと思えた。

それと同時に、こうも思った。

独りぼっちのルルーシュに、寄り添ってあげたいと。

・ ・ ・

突如訪れた異変。

現在のイケブクロ駅は、軍によって封鎖されていた。

唐突に駅構内に立ち込めた白煙。息絶えている数人の警備員。

テロの可能性があるとスザクは言い、彼はシャーリーを警察に預けて駅構内へ消えていった。

彼女達と先程まで一緒に居たルルーシユとは連絡が取れず、生死が不明。

そんな状況でも、シャーリーは確信していた。

また一人で戦っているんだ、と。

そう思った時、彼女の身体は自然に動いていた。

自身から視線が外れた隙を狙って、封鎖されている駅へと入り、落ちていた銃を護身に持って、助きたい一心でルルーシユを探した。独りぼっちのルルーシユを。

人気の無い駅を駆け回り、ただっ広い駅のテナントスペースに踏み入れた時、シャーリーは初めて生きた人間と対峙した。

それは――。

「ロロ！」

「シャーリーさん!？」

ナナリーと入れ替わる様に現れたルルーシュの弟を名乗る少年、ロロ・ランペルージだった。

今となつてはロロは皇帝を裏切り、ルルーシュ側に付いた味方と言える存在だ。

しかし、シャーリーがそんな事を知っている筈も無い。

だから彼女は確かめる。彼の真意を。

「ロロ…、貴方はルルが好き？」

「……好きだよ、たった一人の兄さんだもの。」

予想出来無かったのか、一瞬戸惑いを見せたものの、ロロは神妙な顔持ちで愚直に答える。

ルルーシュが好きだという彼のその目は、本当の妹であるアルカと同じ目をしていて。

「そう、貴方はルルの味方なのね…。」

シャーリーには、その目だけで十分だった。

「え？」

「……お願い、私も仲間に入れて！ 私もルルを守りたいの！」

彼女は自身の胸中を叫ぶ。

真実を知る者として、彼の傍に寄り添い、支えたいと。

「……」

必死に、敵では無く味方だという事を、ロロに訴えることに意識を置いていた彼女は
気づかなかった。

僅かにロロの目つきが鋭くなったことに。

「取り戻してあげたいの！ ルルの幸せを！ 妹のナナちゃんだって、一緒に——
——」

その名を口にした途端、シャーリーの時は文字通り止まった。

「……………」

絶対停止のギアス。

V・V・と契約したロロが所有する、範囲内の人間の体感時間を止めるといふ能力を持つ力。

効果発動中は自身の心臓が止まってしまうというデメリットを持つが、幼少期より人を殺して生きてきた彼にとって、一般人であるシャーリーを仕留める事など容易い。

ロロは胸からナイフを取り出し、ゆっくりと近付く。

(どいつもこいつもナナリーとばかり…。僕の居場所を奪おうとする奴は、全員敵だ！)

ロロはシャーリーの首元にナイフを突きつける。

その凶刃はシャーリーの喉元へと勢い良く向かい――。



シャーリーとロロが対峙している同時刻。

嚮団からの刺客であるジェレミア・ゴッドバルトはルルーシュに手も足も出せなかった。

「…やはりその性能、やはりサクラダイトを使っていたな。」

「げ、ゲフィオン…、デイス、ター…、バー………い！」

嚮団によって改造され、文字通りの鋼鉄の身体と全てのギア能力を破壊するギアスキャンセラーを手に入れた彼にとって、生身のルルーシュは敵ではない筈だった。

しかし、今こうして彼は劣勢に立たされている。駅に停まる電車に仕込まれた兵器によって。

「サクラダイトに干渉するこのシステムが完成すれば、環状線内に存在するトウキョウ租界の都市機能が全て停止する。……ありがとう、君は良いテストケースになった。」

強靱な肉体を持っていようと、ギアスに対して耐性があるようと、動くことが出来なければマネキンに等しい。

価値を確信したルルーシュは、雄弁に語る。

「さあ、話して貰おうか。嚮団の目的を、V. V. の正体を！」

ジェレミアの敗因はただ一つ、運が無かったこと。

ルルーシュを襲撃した場所がここで無ければ、ゲフィオンデイスターバーの近くで無ければ、彼は問題無く目的を果たせたかもしれない。

「……話すのは……、そちらの、方だ……！」

しかし、運が無かったという理由だけで、彼は止まらない。

意志が届かない身体を、執念だけで動かし、一步、また一步とルルーシュの元へ歩を進める。

「何？」

「私には理由がある……。忠義を貫く、覚悟が……。確かめなければならない、真実が！」
「……馬鹿な……。動ける筈が無い！」

ジェレミアは進む。

どれだけ身体が悲鳴を上げようと、どれだけ苦しかろうと。その思いだけで。

「ルルーシュ……。何故お前は、ゼロを、演じ……。祖国ブリタニアを、実の父親を敵に回す？ 自らの、妹までも巻き込んで……！」

「——俺が……。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだからだ！」
「！」

ジェレミアの執念に圧されつつも、ルルーシュは力強く口を開く。
決して曲げる事の無い、自身の戦う理由。

「俺の父、ブリタニア皇帝は……。母さんを見殺しにした！ その為にナナリーは目と足を奪われ……。アルカはその未来までも……！」

ルルーシユの根底に根付く絶望。

彼の原動力。

全ての始まり。

その事を頭に浮かべ、唇を強く噛みしめながら、ルルーシユは激しい怒りをあらわにする。

「……知っています。私もあそこにおりましたから……。」

「っ！ 母さんの!?!」

「初任務でした……、敬愛するマリアンヌ王妃の護衛……。あの時の私の胸中は、喜びで満ちていました……。加えて、本人は憶えておられないと思いますが、アルカ様に言われた『がんばれ』の一言……。間違いなく、人生の絶頂でした……。これで忠義を尽くせる、と！ しかし……!」

自らの顔をひどく歪め、義眼から血の様な赤い涙を流しながら、遂げられなかった忠義を語る。

「しかし、私は守れなかった……。忠義を果たせなかったのです!」

「それで純血派を……」

その日を境に、ジェレミアは卑劣なテロ行為を、ナンバーズを許すことが出来なくなった。

その気持ちが暴走し、行きついたのが、ルルーシュもよく知る傲慢なジェレミア・ゴツドバルトの姿。

「ルルーシュ様、貴方がゼロとなったのは……。やはりマリアン様の為であったのですね……！」

「お前は……、俺を殺しに来たのではなく……!!」

「私の主君は、V・Vなどでは無く……、マリアン様……。」

ジェレミアが人間だった証である生身の瞳の部分から、歓喜の涙が溢れる。

「これで……、思い残すことは……、ない。」

「ジェレミア卿！」

動力源であるサクラダイトを止められたジェレミアが、その活動を止めようとしたその時、ルルーシユは手元のスイッチに手を伸ばし、ゲフィオンディスターバーの動力を切った。

「……、なっ！ 殿……下……。」

「ジェレミア・ゴッドバルトよ。貴公の忠節はまだ終わっていない筈——。」

サクラダイトが再び活動を始め、ジェレミアは文字通り息を吹き返す。

突然のルルーシユの行動に、驚愕をあらわにするジェレミアに、彼は手を差し伸べた。愚直に忠義を貫く、不器用な騎士に。

「そうだな？」

「……イエス、ユアマジエスティ。」

自身の忠義は真たる主君に。

ジェレミアは静かにその覚悟を口にした。



「何を、しているんですか。」

シャーリーの喉元に向かっていた凶刃は、届く寸前でその動きを止めた。

「……………」

ロ口は自身の腕を力強く掴む少女、アルカを恨めしそうに睨み付ける。

「何をしているか、って聞いているの!」

そのままロ口の腕を捻り、彼の細い身体を蹴り飛ばす。

彼の手から零れた落ちたナイフは、カランと乾いた音を立てた。その音を合図となつた様に、ロ口の瞳からはギアスの紋章が消え、止まっていた時間が動き出す。

「居たいと願って——、って……、え? アルカ……?」

シャーリーから見れば何が起きたか理解出来ない光景であろう。

さつきまで立っていたロ口は咳き込みながら地に膝を付き、ロ口とシャーリー以外居なかつた筈の空間には、もう一人の妹、アルカが突然現れたのだから。

「っ。私の名前……？　という事はシャーリー……、貴女、記憶が……。」

彼女の口からもう二度と聞くことが無いと思っていた自身の名前が出た事に、アルカは目を見開く。

2人の少女が互いに困惑している中、その手を血に染めようとした下手人であるロ口はゆっくりと立ち上がる。

「ええ……、記憶を取り戻していたんですよ。銃を持って兄さんを探し回っていた……。彼女は兄さんを殺す気なんだ。——だから僕は！」

再びロ口の目にギアスの模様が浮かび、絶対停止の結界が2人の少女を包む。

ギアスの発動と同時に、ロ口はナイフを拾い走り出す、が。

「そんな単調な動き！」

停止された時間の中で戦ってきたロロの動きは、平等な時の流れで生きてきたアルカには単純すぎるものだった。

瞬くの間に素手のアルカに組み伏せられ、彼は完全に動けなくなる。

「——っ！ やはり厄介なモノですね！ ギアスが効かないというのは……！」

「……………？ 何を言ってる？」

ロロの言葉に憶えないアルカは疑問を浮かべる。

時間があれば問いただしている所だったが、生憎そんな余裕が許される状況じゃない事は、到着したばかりのアルカも分かっていた。

「アルカ…だよね……？」

「……………うん、久しぶり。シャーリーさん。」

戸惑うシャーリーの呼び掛けに、一瞬迷ったものの、諦めた様な笑みを浮かべて彼女に応じる。

「…どうしてここに……。あ、そうだ…、アルカはあの手配書の皇アルカなの!? そもそもどうして貴女はルルと……!」

「答えてあげたいけど、今はそんな時間無いんだよね。」

ロロの手からナイフを取り上げ、自身の懐に仕舞う。

「まだ抵抗する? 貴方じゃ私に敵わないと思うけど。」

「……分かった。分かりました。もう早まった事しないから、手を離してくれないかな。」

「よろしい。」

ロロは観念した様に声を上げ、アルカも彼に殺意が無くなった事を感じ取り、その拘束を解く。

「全く、歳下に、しかも異性に手も足も出ないなんて……。」

「非力なりに色々勉強したからね。それより状況は？」

制服に付いた埃を払いながら、ロロは苛立ちを隠す事無く、愚痴を零す。

「嚮団からの刺客が兄さんと交戦していた所……、ただもう全部終わったみたいだ。兄さんからメッセージが来てる。」

「それで、貴方のさっきの行動は？」

「……僕の早とちりさ。彼女の記憶が戻っていたから。兄さんを恨む理由はシャーリーは持ち合わせているだろう？」

「シャーリー、記憶の方は、いつ？」

「自分でも良く分からない。街中を歩いている時、当然……。」

「僕からも聞いて良いかな？」

そう……。と考え込むアルカに、ロロは問う。

「何故君がここに？」

「嚮団がエリアーに向けて刺客を送り込んだのを知って、居ても経っても居られなくて。」

「それだけで君は危険を晒して…？ 咲世子も僕もそんなに信用無かったかな。」

「そうじゃないよ。私が来たのは刺客が一人じゃないから。どんなギアスを持っているか分からないし、人手が必要かと思つて。ただ、何事も無くて良かった。」

「刺客が一人じゃない…？ その情報は確かなのか……？」

ロロの顔色はどんどん青くなり、その声は震えていた。

彼の様子の変化に、怪訝な表情をアルカは浮かべる。

「嚮団を監視していた密偵からの情報だから間違いは無いと思うけど。」

「だとしたら不味い！ 兄さんは今一人で……！」

「…？ 貴方、さつき全て終わったって言つたじゃない。」

「僕らが、機情が把握していた刺客はジェレミア一人だ！ もし本当に、他にも居るんだとしたら——。」

アルカとロロ、そしてシャーリーが居るこの空間に、新たに複数人の足音が加わる。

「何、この人達……。」

三人を取り囲む様に現れた複数の人間に、シャーリーは怯え、アルカの背に思わず隠れる。

「……見たところ、嚮団関係者、かな？」

現れた人間達の風貌はそれぞれ異なっていた。性別も、人種も、国籍も。子どもから老人まで。

ただその中で、共通するのはその瞳。

彼らの瞳は薄暗く、ただただ一心にアルカを見つめていた。

TURN 16 帰るべき場所

「被検体：コード A^{アーカーシャ} ……久しいな。」

「…随分と懐かしい名前。そんな呼ばれ方した時期もありましたね……。貴女は私の事を知っている様ですけど。ごめんなさい、私には憶えが無い。」

「……ああ、そうだろうな。お前にとってみれば取るも足らない存在だろうよ。」

努めて声音を明るく、シャーリーに心配を掛けない様に。

そう思考しながら、アルカは周りを取り囲む嚮団関係者を観察する。

一挙手一投足も見過ごす事は出来ない。

敵はギアス能力者か、だとしたら能力は、発動条件は？

今のアルカ達は圧倒的に情報が足りない。

それをロロも分かっているのか、ギアスを発動する事無く、彼も観察に徹していた。

（ロロ、奴らを知ってる？）

（…うん、1人だけ。あそこの金髪の男。それ以外は僕も知らない。もしかしたら所属

が違うかも。」

（金髪の能力は？）

（そこまでは……）

敵に聞こえない様に小声で、アルカとロロは情報を交換する。

「目的は？ 私達の所に来たってことは、兄上では無いんでしょう？ 寝返ったロロへ

の報復？ 知り過ぎた彼女を口封じするため？ ——それとも。」

「お前だよ、コードA。お前を迎えに来た。」

リーダー格であろう褐色肌の女性が、真っ直ぐアルカに指を差し、淡々と告げる。

「嚮主様がお呼びだ。戻ってこい。」

「……私にとって戻る場所は彼女と兄上の所であって、貴方達の所じゃないんだけど

……。」

「お前の意志は関係無い。」

良い性格しているよ、とアルカは嘲り笑って僅かに後退し、後ろにいる口口に耳打ちをする。

(合図したらギアスで全員の動き、止められるかな。)

(その後は?)

(全員殺す。)

(……君もそういう事言うんだね。いいね、実にシンプルだ。)

話を終わると、アルカは懐から拳銃を取り出して、それを足元に置き、両手を上に上げる。

「抵抗しないから教えてくれない? 何故今になって私を?」

「さあな。私はただ命令を遂行するだけ。」

「……まるで人形ね。」

「否定はしない。…そう私達は人形。嚮団に拾われたあの瞬間から、嚮団の意志のままに動く事を運命づけられた。お前には分からないだろうな、逃げ出したお前には……!」

言葉が後半になるにつれて、女の語気が強くなる。

「私にとつてはそれが誇りであり、生きる意味。例え、どんな手を使つても任務を遂行する……!」

その時、女の瞳が赤黒く染まり――。

「……え? 何これ……。どうして私が、私達が見える、の?」

「……何?」

突如、異変を訴えるシャーリーだった。

困惑した様子で虚空を見つめたまま、その歩を進める。

「何これ、いや、気持ち悪い! 進んでいる筈なのに…、どうして!!」

(…っ! 視界を入れ替えた!?)

シャーリーの言葉、行動からアルカはそう結論付ける。

自分自身の姿がゲームの様に三人称視点で見える事、進んでいるのにも関わらず変化の無い視界。

分かっていれば、ある程度対応出来たかもしれない。

しかし、そんな異常が突如振りかかればどうなるか。

視界から入る情報は脳に多大な影響を及ぼすという。当然、脳が混乱する。距離感が計れなくなり、バランス感覚が崩れ——。

記憶が戻ったばかりというのもあるのだろう。

シャーリーの頭はキャパを超え、彼女は意識を落とす。

「ロロ!!!」

「分かってる!!」

アルカの声に応じ、ロロもギアスを発動する。

絶対停止の結果が展開され、この場において動けるものをアルカとロロのみ。

アルカはロロの声と同時に足元の銃を発砲。目の前居た褐色肌の女の額に銃弾は吸い込まれ、その額を割る。

仕留めた事を確認したアルカはすかさず銃を他の者へ発砲———することは出来な

かった。
しかし。

「めんどくせえから動くなよ。」

「…う、がつ！…は、はっ……………」

「っ！」

男の声に制止され、アルカはその動きを言われた通りに止め、視線を向ける。

そこには地面に這いつくばって心臓を抑える口口と、その頭に銃を突き付ける20代半ば程の金髪の男。

「…………どうやって口口のギアスの中で？」

「…問題だ。こいつの能力の弱点、知ってるよなあ？」

「心臓が止まる事、でしょ。」

「正解だ。んじゃあ、もう一つ問題だ。俺のギアスは触れた事のある人間の体温を上げる。こいつがまだ嚮団に居る時に、めんどくせえ発動条件を満たしていた訳だが…。何故こいつのギアスが続かなかったんだと思う？」

「……脈を意図的に早めたのか。」

「おお、正解だ。賢く成長していて俺は嬉しいぜ。」

走れば息切れをするだろう。

熱が出れば鼓動は早くなるだろう。

人間からとつてすれば、誰にでもある当たり前の生理現象だ。

対象の体温を上げる、とこの男は言った。

それが嘘偽りが無いなら、この男は口口自身が気付けない程、徐々に徐々に体温を上げていったのだろう。

丁度、口口の心臓がギアスに耐え切れないラインまで。

「……分かった。本当にもう抵抗しないから、その銃を退けて。」

「!? アルカ、何を……。」

「私が一緒に行ったら、2人には手を出さないと約束してくれる?」

手に持っていた銃を部屋の隅まで蹴り飛ばし、アルカは諦めた様に肩を竦める。

「俺らにはこいつらを殺さねえ理由が無いんだが。」

「待て……。」

「今この現場は枢木スザクが指揮を執ってる。彼がここに駆け付けるのも時間の問題。2人を殺したとして、死体を片付ける時間は無い。その女の死体も含めてね。」

「……だからどうした。」

「良いのかな。彼はギアスの存在もV・Vの事も、全てを知っている。そんな彼が、3人の死体を見たらどう思うかな？」

枢木スザクという人間は、学業に反して、存外頭が回る。

シャーリーとロロが死んだとなれば、関係者である彼はその下手人を探すであろう。そして辿り着く、このイケブクロ駅に誰が訪れ、何が起きたか。

「表舞台に引きずり出されるのは、本望じゃないでしょ？」

めんどくせえ、と頭を掻きながら、男は口を開く。

「……分かったよ。こいつらには手を出さない。」

「話が早くて助かるよ——。」

「……待てよ!!」

身体を蝕む熱で苦しいのか、頬を赤く染め、息を切らしながら口は叫ぶ。

「アルカ、どうして僕を庇う!? 君なら僕を見殺しにして、シャーリーだけを助ける事だつてできただろう!」

「……そうね。」

「なら何故! 君は僕の事が嫌いなんだろう!」

「ええ、嫌い。」

「それならどうして——。」

「貴方が、兄上の事を本当に好きだから。」

さも当然、と言った様子でアルカは口を開く。

「目を見れば分かるよ。私と同じ目をしている。嫌でも理解させられた。貴方は兄上の心からの味方なんだ、つて。助ける理由なんて、それで十分。」

「…なん、だと……………」

「……………ごめんなさい……………」

「…アルカが、連れて行かれた……………だど？」

身体から力が抜け、近くの椅子に乱暴に腰を掛けるルーシユに、声を掛けられる人間はこの場に居なかった。

「僕達を庇って…、それで……………」

「お前は…、お前は抗うだけの力を持ちながら！ 黙って見ていたのか！」

感情のまま、力強く机を叩くルーシユに、シャーリーは思わず肩を震わす。

「…それで、ロロ・ランペルージ。アルカ様はどちらに？」

荒ぶる主君とは対照的に、至って冷静な様子のジエレミア。

彼なりの従者としての姿勢なのかもしれない。

「V・Vの名前が出てたから、多分、嚮団の本部……」

「ふむ……、ルルーシユ様。本部の場所なら私が把握しています。今すぐに部隊を編成し、作戦を——。」

「ああ……。V・V。め、ふざけた真似をしてくれる。この俺から、アルカを……！　アルカを……！」

「あの、ルル……。私も何か——。」

シャーリーは震える声を必死に抑えながら、恐る恐る名乗り出る。

何か、手伝えることは無いか、と。

イケブクロの駅で起きた事は粗方聞いた。

アルカはシャーリーと口口を守る為に自らの身を差し出した、と。

あの時の彼女自身、何か出来た訳でも無いし、手伝えることも限られているのはシャーリー自身も分かっている。

それでも、じっとして居られないのは彼女の性格からなのだろう。

「シャーリー・フェネット。ギアスに翻弄された哀れな少女よ。君が力を貸してくれる

として、一体何が出来ると言うんだ。」

「……それは……。」

「ギアスも持たず、KMFも乗れず。戦う事が出来ない君に、アルカ様は救えるか？」

「……ジエレミア。良い。彼女には俺から話す。」

いくらか落ち着いたのか。先程の苛立ちは見せず、ルルーシユは口を開く。

「悪いが口口を連れて外してくれ。」

「御意。」

了承するや否や、ジエレミアは力弱く項垂れる口口を連れ、この場を後にする。

気まずい雰囲気の流れの中、ルルーシユは苦し紛れの笑顔を浮かべて口を開いた。

「……済まないな。悪い奴では無いんだ。きつと一般人である君を巻き込みたく無いんだと思う。」

ルルーシユの謝罪は言うまでも無く、先程のジエレミアの言動だろう。

「ううん…。何も出来ないのは、私が一番分かっているから…。」

でも、つとシャーリーは続ける。

彼女ははまだ諦めていないのだ。ルルーシユの平穩を取り戻す為に自分ができる事を、必死に彼女は模索する。

「な、何か私に出来る事とか無いかな。その、ほら戦いは出来ないけど、オペレーターとか…。あ、そうだ、私もルルみみたいに不思議な力が使えたら――」。

「駄目だ!!!」

シャーリーの言葉を遮り、ルルーシユは声を荒げ、彼女の提案を一蹴する。

「君はこの力の恐ろしさを身を持ってしているだろう？ 人を簡単に歪めることが出来る力だ。それを、俺は！――君に使うて欲しくない。」

「…………ルル。」

ルルーシユは両手で顔を覆い、項垂れる。

ここまで取り乱した彼を見たのは、シャーリーとて初めてのことだった。

「アルカは俺が連れ戻す。君が気負う必要は無い。」

顔を上げ、寂しそうな表情をしながらそう告げるルルーシユは、ぶつきらぼうに告げる。

それがシャーリーには我慢ならなかった。

気づけば彼女は右手を思いつきり上げ、ルルーシユの頬に向かって振り下ろした。

乾いた音が室内に木霊する。

「何も分かってない…。」

「シャーリー…?」

「ルルは何も分かっていない!」

シャーリーはルルーシユの瞳を真っ直ぐ見つめ、自身の胸中の想いを吐き出す。

「どうしてそんなに一人で背負おうとするの!? いつもいつもいつも!」

自分独りで背負い込んで! 本当は辛いのに仮面でその顔を隠して! 自分は平気だよって皆に、自分にまで嘘までついて!」

「……それは。」

「クラブハウスに残されたナナちゃんがどんな顔してルルを待っていたかと思っ
ているの!?」

記憶を取り戻した私が、どんな気持ちで……、ルルを……!!」

感情が抑えきれなくなったシャーリーはその場で泣き崩れ、呼吸を荒くする。

「……周りを信頼できないなら……、信頼出来る様になるまで私が傍に居てあげる。
ルルにとってこの世界が嘘なら、私が本当になってあげる……。」

——だから!!」

私を頼ってよ。

弱々しく、しかし力強く、シャーリーはルルーシュを見つめてそう懇願した。

「……、シャーリー……。どうして、そこまで……。」

「……そんな、簡単な事も分からないの？」

「俺は君の父親を殺したんだぞ……。」

「うん……。」

「俺は君に嘘を付いた。」

「分かっているわよ……。」

「それなら何故——っ！」

ルルーシユの言葉はそれ以上、続かなかった。

文字通り、唇を塞がれたからだ。

シャーリー自身の唇で。

「好きだから——」。私がルルの事、好きだから。」

「……シャーリー……。」

ルルーシユとて、彼女の気持ちには気付いていた。

気付いていながら、遠ざけていた。

自分には守る為と言いついて聞かせていた。

しかし、それはただ逃げていただけだったのかもしれない。

「…シャーリー。やはり俺は、君を巻き込みたくない。」

「……ルル。」

「それは君を信用出来無いからじゃない。君は俺にとつての日常だからだ。」

俺は、日常を守る為に仮面を取り、今は日常を取り戻す為に戦っている。」

「……………」

「最初は引き返す道んど要らないと思っていた。自身の望む未来に、自分の居場所など考えていなかったからな。」

でも改めて、様々な人と、君に触れて。俺自身を待つてくれている人が居るのだと知った。

俺はそこに帰らなければいけない、戦つて未来を勝ち取つて、そこに。

——君には、そこで待つていて貰いたいんだ。」

「…それって……………」

「全てを知った上で、俺の日常を支えて欲しい。」

俺を、俺の帰るべき場所を照らしてくれ、シャーリー。」

彼女が、シャーリーが了承の言葉を口にする事は無かった。

その代わり、二つの男女の影が再び重なった。



「……よろしいのですかな。」

「ああ、済まないな。汚れ役を買わせて。」

「…さて、何の事やら。」

シャーリーを寮まで見送ったルルーシユは、密かに護衛していたジェレミアに声を掛ける。

「アルカ様の事は、既にC. C. にも報告済み。騎士団の方も、零番隊が動けるそうです。強襲の際には、私やロロも。」

「ああ、頼む。」

ルルーシユは拳を強く握り締め、決意を瞳に宿す。

戦う理由をまた一つ、増えた。

帰るべき場所が新たに出来た。

「決行は明後日。目的はアルカの奪還。立ち塞がる障害は、全て薙ぎ払え。」

「御意。——して、ルルーシユ様。お耳に入れておきたいことが。」

「何だ。」

「その、あの事件の後の皇女殿下の足跡……、つまりは嚮団時代のアルカ様に関してです。」

ルルーシユは聞く。

決して明かされる事の無かった過去の話。

断片的にしか知らなかった魔女と少女の物語。

そして思い知る。

自身が考えていたよりもその闇は根深い事を。

TURN 17 曖昧な記憶

不思議な空間だった。

雲一つ無い青空の下に並ぶ無数の本棚。

棚の合間に浮かんでいる、何も入っていない額縁。

時間、という概念が感じられなかった。

この空間は何処までも異質で、何処までも非現実的だった。

「ここは……？ 私には確か——。」

「あれ、あれあれあれあれ。思ったより反応が薄いな。」

呆然と眺めるアルカの耳に、1人の少女の声が届く。

「……貴女は？」

視線を向けると和服に身を包んだ、肩口で切り揃えられた、何処か見覚えのある黒髪

の少女。

その容姿は少し幼さが残るものの、アルカよりは歳上であり、10代半ばから後半だと推測出来た。

「おつ、意外にも警戒しないね。頭が働いていないか、本能的に害を為す者じゃないと判断したか……。うん、まあ僕にとっては都合が良い。話がしやすい娘は好きだよ。」

「……………あの……。」

「ああ、ごめんね。人と話すの何て何世紀ぶりだからさ、嬉しくてね。」

コホン、と黒髪の少女は咳ばらいをし、改めてアルカの瞳を見つめる。

「僕の名前は、■■■■。■■■とも、お姉さんとも、隙に呼ぶといいさ。」

「……………えつと、何て?」

「え、君って耳が遠かったりするかな? ■■■だよ、■■■!」

別に耳が遠い訳でも、彼女の声が小さい訳でも無い。

単純に聞き取れないのだ。

その部分だけノイズが掛かった様に。

「ん、待てよ。そうか、そういう事か。」

一人で疑問を浮かべたと思えば、勝手に納得して考え込む。忙しい人だな、とアルカは呑気に考えていた。

「伝わらないから仕方無いとは言え、名称が無いのは大変だな。

——うん、そうだな。O・O・とでも呼ぶが良いさ。」

「おーっ……?」

「君達に合わせて名前を作ったんだけど、呼びにくいかな? 我ながら良く出来た名前

だと思ったが……。」

「呼びにくい何て事は無いけど……」

目を覚ましたら非現実的な空間に、謎の少女。

アルカが戸惑うのも無理は無い。

そうとも知らずに遠慮無く話を進めていく彼女は相当空気が読めないか、或いは。

「えっとそれでO. O. ?」

このままでは埒が明かないと、アルカは思い切ってO. O. を名乗る少女に呼び掛ける。

「何かな？」

その呼び掛けに、眩しいくらい笑顔で応じるO. O.。

彼女のその端正な容姿も相まって、アルカは一瞬だけ物怖じをしてしまう。

「貴女はその…、神根島に所縁があったり…する？ その、変に思わないで欲しいんだけど、貴女が祭壇で踊っているのを…。」

O. O. の姿を見た時、真っ先に神根島で見た光景を思い出した。

遺跡の扉の前に立った瞬間に、頭に流れ込んできたあの光景を。

あの時の映像の少女の、目の前の彼女は非常に容姿が似ていた。

「ああ、イエスだ。君が思い浮かべている人物と僕は同一人物さ。」

アルカの質問が予想通りだったのか、彼女は驚くほどあっさりと、肯定する。

「そう、やつぱり…。」

それで…、それを踏まえた上で聞くけど、…：貴女は一体、何者？」

「良く聞いてくれた！」

仰々しく、芝居染みた手振りで。

「僕こそは、日本に伝わる名家にして、その当主。物語にもなっている超有名な巫女様、さー！」

アルカの質問を待っていました、とでも言わん雰囲気、彼女は胸を張って雄弁に語る。

「……………巫女…。」

「あれ、思ったより反応薄いね。」

「えっと、何ていうか…。実感湧かなくて…。」

彼女の言う言葉が誰を指しているのかは分かる。

物語にもなっている巫女と言ったら、天子と神楽耶が言っていた人物と同一人物と見なしていいだろう。

ただ、その物語になってまで伝わっている人が、こんな剽軽な性格だとは想像していなかったから。

「まあ、無理も無いか。君はブリタニアの出身。日本には疎くて当然か。」

「あー…、すみません。」

「いいや、謝る必要は無いよ。第一、巫女という表現は重要では無い。君の分かる言葉に置き換えてくれて構わないさ。」

「私の分かる言葉っていうのは？」

「何でも良いさ。巫女でも、シャーマンでも、聖女でも、預言者、見者、魔術師、皇帝、女王、エトセトラエトセトラ…。」

それに代わる言葉は沢山あるさ。それこそ、魔女でも、ね。」

アルカの中に浮かんでいた疑問が、段々と確信へと変わっていく。

「それじゃあ…、貴女は…。」

O・O・Oはニコリと笑みを浮かべ、アルカの手を取る。

冷たい手だった。

人の温かみは無く、陶器の様な冷たい手。

「さあ、アルカちゃん。」

記憶の回廊巡りと洒落込もうじやないか。

自らをO・O・Oと名乗る少女は笑みを浮かべてそう呟いた。



嚮団の本拠地内部。

研究室へと続く長い長い廊下を、V. V. と青年は歩く。

「ご苦労だったね。どうだった？ 久しぶりの彼女との再会は。」
「別にどうってことねえよ。」

アルカをこの場に連れてきた金髪の青年は、欠伸をしながらぶつきらぼうに眩く。

「そうかな？ 君は彼女と仲良かったんじゃないのかい？」

「……ガキの頃の話だろ。それにあいつは俺らの事なんて憶えちやいない。」

それより聞いても良いか、嚮主様。あいつは今——。」

「ずっと眠っているよ。君が彼女を確保した時から、ずっとね。」

「……そうかい。」

アルカに興味があるのか無いのか。

彼の言動はチグハグだった。

「眠る、という行為は彼女にとって、とても大事な事なんだよ。僕が君に薬で眠らせる様

に指示したのも彼女の為さ。」

「……別に聞いてねえ。」

「そうかな。君の顔に気になるって書いてあったけど。」

「……っ。めんどくせえ。」

悪態を付く青年を冷笑しながら、V. V. は研究室と廊下を遮る扉に手を掛けて、青年はその足を止める。

「じゃあ、また任務があつたら頼むから、君は戻って良いよ。」

「……へいへい。」

V. V. は青年をその場に残し、研究室へと入っていった。

「どうかな、彼女の様子は。」

白で統一された無機質な部屋。

部屋の中央にある簡素なベッドの上には、服を着ておらず、目閉じたままの少女、ア

ルカ。

そして彼女を囲む様に立ち並んだコンピューターと研究員達。

「前回計測した時より、R因子、C因子共に上昇しています。特にC因子の伸び方には目を張るものがありますね。」

「そっか。順調そうだなにより。……うーん、でもまだ足りないな。そうだ、C因子の活性剤を投与してみようか。」

「宜しいので？」

「今の彼女なら大丈夫さ。」

モニターを眺めながら語る彼らの会話には、人間的な温かみなど持ち合わせていなかった。

嚮団の刺客がアルカを指して言った言葉が、ここでの彼女の立場を全て物語っていた。

V・Vはモニターから目を離し、アルカの元へと足を運ぶ。

身動き一つもせず、規則正しい呼吸を繰り返す彼女の額に手を乗せて、V・Vは優しく呟く。

「おかえり、アルカ。」

優しい声音とは裏腹に、その表情は何処までも冷たいものだった。



「さあて、何から見ようか。君の出生から？ それとも初めて言葉を発した時？ また君の初体験とか？ ここには君の全てがある。好きなものを——！」

「待って、待って、待って。」

興奮気味に語るO・O・Oに、思わずアルカは待ったを掛ける。

「……何だい。ノリが悪いなあ。」

話の腰を折られて不満、と言わんばかりの表情で、O・O・Oはアルカをじっと見つめる。

「まだ理解が追い付いていないの……。勝手に話を進めないで……。」

「案外、慎重なんだねえ。そういう所はお兄さんそっくりだ。」

やれやれ、と肩を竦めて、彼女は近くの椅子に腰かける。

「……流石に、現実って訳では無さそうね。」

アルカはO・O・が腰掛けている椅子を見つめながら呟く。

さつきまで、彼女の傍には椅子等存在しなかった。

現れたのは本当に突然。O・O・が座る動作をしたと同時に、彼女の元に出現したのだ。

「半分正解、半分外れ、かな。」

ああ、君の言う通り、確かにこの場所は現実世界には存在しない。だが、ここで見た事聞いた事、経った時間は紛れも無く現実だ。」

「……そう、それで。この場所は一体何？ 貴女はさつき、君の全てがあるって言ってい

たけど。」

「言葉通りの意味さ。君が今まで経験してきた事、感じた事、その全てが保管されてい
る。君だけの場所、君だけの世界。」

「……その私だけの世界にどうして貴女が居るの？」

「その内教えてあげるよ。」

「……そう、ですか。」

彼女から聞いた言葉をもう一度思い返し、アルカは整理する。

（彼女の言葉を信じるのなら、ここは言わば私にとつての記憶の保管庫……。コンピュー
ターで言う所のクラウドサーバーみたいなもの、かな。

そして私は何故かそのサーバーにアクセスしてしまった、と。）

彼女が何故ここに居るか、今は考えない。

アルカは経験則で知っているからだ。この手のタイプはどんなに聞いても教えてく
れない、ということ。

「悩みは解消したかい？」

「……ここがどういふ場所かは分かった。まあ完全に理解は出来なくても、そう割り切る事にする。」

「うんうん、物分かりの良い娘は好きだよ。さてと、そろそろ——。」

「最後に一つ良い？」

なんだい、と立ち上がったO・O・は、笑みを浮かべたままアルカを見つめる。

「貴女は何の為に私の前に？」

ニヤリと笑みを浮かべて、O・O・は再び雄弁に語る。

「君の成長の為に。」

彼女がそう言い終えた途端、何も入っていなかった筈の額縁に、ある風景が映る。

華やかな絨毯の上で、少女を抱きしめながら息絶えている女性。

アルカ自にも記憶がある。母であるマリアンヌ・ヴィ・ブリタニアが死んだあの日の

光景だ。

「本当は君のこれまでの軌跡を全て知りたかったんだけどね。生憎、そんな時間は無い。非常に残念だけど君自身が憶えている事は、飛ばさせてもらおう。」

さつきまでのおちやらけた雰囲気は身を潜め、O・O・Oは神妙な顔で呟く。
と思いきや。

「ああ。何、気にしなくて良い。私は何時でも君の記憶を覗けるから。また改めてゆっくり観させてもらうさ。彼女との濃密な絡みとか、特にね。」

「いや、別に気にして無いけど。……貴女って人を茶化さなきや気が済まないの?」
「僕は可愛い女の子の様々な表情が見たいだけさ。」

頭が痛くなってきた、とアルカは自身の頭を抑える。

そんな彼女を様子を横目で見つつも、O・O・Oは語り続ける。

「君はギアス嚮団に身を置いていた時の事を、憶えているかい?」

「……忘れる訳ないでしょ。」

その顔に影を落とし、恨み辛みが入り混じった言葉が、アルカから漏れる。

「そうかな。良く思い出してみなさい？」

「……………」

言われた通り、アルカは考える。

嚮団に連れて行かれたあの日。人体実験、戦闘訓練という名の殺し合い。人を信じられなくなり、孤立していく日々。

アルカにとつての精神的外傷とも言える幼少期。

そんな過去を思い出し、そして――。

「君は嚮団で出会った人々の事、憶えているかな。ああ、C. C. とV. V. は除いて。」

「――? 憶えているに決まって――。」

そこでアルカは気づいた。誰一人、顔も名前も、声すらも。何一つ記憶が無いことに。

「君は嚮団で体験した事やその胸に抱いた感情を、鮮明に憶えているかな。」

彼女の問い掛けに、アルカは応える事が出来なかった。

「…何で……………?」

私に優しくし接してくれた人は何人も居た。それは憶えている。しかし、その姿が鮮明に思い出せない。

「……………?」

嚮団で過ごす日々が嫌で嫌で仕方無かった。逃げ出したくて仕方無かった。しかし、何故そう思い、感じたのか。それが鮮明に思い出せない。

「漠然とは憶えている。しかし、鮮明には思い出せない。」

可笑しくは無いかい? 嚮団での日々は幼い君にとって忘れる事が出来ない程鮮烈

なモノだった筈だ。

自分の精神を守る為に記憶に蓋をする。それならまだ分かる。人間なら誰もが持つ自己防衛本能だ。

しかし、今の君のその状態は非常に中途半端だ。忘れたいのか、忘れたくないのか。チグハグなんだよ。」

O・O・Oは言う。

アルカは自身に振りかかった過去の出来事を、歴史書を捲る第三者の様に眺めていただけ、と。

「殺人事件の報道を聞いた時に、憤りや恐怖を感じたとしても、いちいち事細かに記憶はしないだろう。自分には関係の無い出来事なのだから。」

……今の君が持つ嚮団への恨み何て、所詮はそんなものっていう話さ。」
「何を……。」

呆然とするアルカを畳みかける様に、O・O・Oは言葉が続ける。

「それが悪いと言うつもりは無い。寧ろ、君に良い結果をもたらしたよ。

あんな幼い子どもが、あの仕打ちを受ければどうなると思う？」

恨むだろうね。人を、世界を、ギアスの事も。そしてそれを与える存在も。

それを危惧した者が、君の記憶に蓋をした。君に嫌われない様に。恨まれない様に。決して手放さない様に。

一体誰だと思おう？」

「……。」

「人の記憶や意識に干渉が可能で、君が好意を寄せている存在が居るだろうか？」

「……C・C……。」

O・Oは、より一層笑みを深くし、呆然とするアルカを抱き寄せる。

「ああ、良くその答えに辿り着いた。賢い娘は好きだよ。」

娘を褒める母親の様に、妹をなだめる姉の様に、彼女はアルカを抱きしめたまま、背中をさする。

「さて、予習も終えた事だし、そろそろ本題に入ろう。」

場面は切り替わる。

ヴィ家が崩壊したあの事件から、アルカが嚮団へと連れて来られたあの日に。

「彼女は君の記憶に蓋をした。

今こそ…そう、今こそ！ その蓋を開ける時だ。

あの頃の君を！ あの頃の感覚を！ 是非、取り戻して欲しい！！」

記憶は巡る。

少女の意志とは関係無く。

思惑は交差する。

少女を中心に、そして複雑に。

TURN 18 悪意の中で

皇歴2009年

あの日の事は良く憶えている。

暗雲に覆われた空。地を打つ激しい雨。

幼いながら、まるで自分の未来を暗示している様だ、と詩的な事を考えていた。

打ち付ける雨の音が私の耳を絶えず刺激しているのにも関わらず、雨音は周りの雑音を消してはくれなかった。

私の周りを囲い、見下ろす複数の大人達。

貴族の様に煌びやかな恰好をした者、軍服を身に包んだ者、白衣を羽織った者、エト

セトラエトセトラ。

恰好も、性別も、人種も、一つも同じモノが無い中で、唯一共通していたモノ。

それは私を見る目だった。

その目は私を決して哀れむものでも、同情するものでも無く。まるで新しい玩具を手に入れた子どもの様に興奮を隠し切れない、そんな目だった。

「やあ、よく来てくれたね。」

そんな大人達の間を割って、1人の少年の声が響く。

「マリアンヌを亡くし、ルルーシユとナナリーとは離れ離れ…。辛かっただろう？」

薄ら寒い笑みを浮かべて、少年は慰めを口にする。

「でも安心して良い。君を邪険に扱う存在はここには居ない。今は亡きマリアンヌ王妃の意志に従い、僕達は全力で手助けをしよう。ここが君にとつての我が家となる様に。そして君の夢が叶う様に。」

少年、V・Vは少女の手を取り、その中へと誘う。

「ようこそ、僕達のギアス教団へ。」

少女、アルカは手を引かれるまま、その中へ足を踏み入れた。



あの頃の私は居場所を求めている。

誰にも邪見に扱われず、安心して過ごせる場所を。

嚮団が安全な場所と言うには疑問が残るが、少なくとも当時の私にとっては比較的安全と思える場所だった。

母であるマリアンヌとの交流があり、他の皇族もその存在を知らない。

そして何より——、C・C・が居たから。

嚮団に身を置いてからの数日は、内部の地図を頭に叩き込むのに必死だった。

何せここは、一つの街の様に広く、石造りの建物が隙間無く立ち並び、そこに幾つもの研究室や訓練室が犇めき合っているのだから。

それでも私は必死に憶えた。

早く次のステップへ進みたかったから。

兄上と姉上から引き離され、落ち込む私に対してV・V・は言った。

「君は騎士を目指しているのだろうか？」

兄と姉は日本に送られただけで、死んだ訳では無い。生きているのなら人生、挽回するチャンス何ていくらでもある。

君が2人を守る力を手に入れば、その力で2人が安心して過ごせる世界を作れば良いだろう、と。

その言葉で幼い私は気付かされた。立ち止まっている暇は無い、と。

今思えば、酷く単純だったと自分でも思う。

結局、私はその言葉だけで邁進した。あの頃の私の世界はまだ、単純なモノだけで完結していたから。

嚮団には大人だけでは無く、子どもも沢山在籍していた。

元貴族、捨て子、戦争孤児。

様々なバックボーンを持った敗北者たち。

子どもである私達には義務があつた。

それは勉強と訓練。

将来、卿団の役に立つ人材と慣れる様に、嚮団での任務を熟せる様に。

毎日毎日、休む日も無く、それは行われた。

当然、私は全力で取り掛かった。それが肉親を守る為の近道だと信じて。

ある時、学力テストで満点を取った。

「凄！ 私なんてまた補修だよ…。」

誰かが褒めてくれた。

多分、一緒に勉強していた歳上の女の子だったと思う。

背の高い、褐色肌の少女。

ある時、戦闘訓練のリザルトがトップだった。

「つたく、なんでお前そんな強いんだよ。」

誰かがまた、褒めてくれた。

多分、最後に戦った歳上の男の子だったと思う。

少し口の悪い、金髪の少年。

私の嚮団での立ち位置は、次第に変わっていった。

最初は腫れ物の様に扱われ、遠巻きで観察されていた。

それが一人、また一人と私が結果を残す度に増えて行き、最終的には私が皆の中心になっていった。

当時の私は嬉しかったんだと思う。

初めて同年代の子ども達に囲まれて、認められて。

肉親以外は全て敵だった私にとって、初めての体験だった。

それに加えて、私が成果を残すと、決まってC・C・Cが褒めに来てくれた。

良く頑張っているな、と少し不器用に褒めてくれた。

失ってばかりだった私にとって、その時間だけはとても安らかで、かけがえのないものだった。

そんな出来事があつて、より私はのめり込んでいった。

成果を残せば、周りが認めてくれる。

成果を残せば、彼女との時間が増える。

成果を残せば、家族を守る。

成果、成果、成果、成果成果成果成果——。

成果を求め、邁進する日々はあつという間に過ぎていった。

そして、嚮団での生活も慣れ、自然に笑みも浮かぶようになったある日、私は知った。

「……、ブリタニアと、日本が戦争……？」

何時も通りに結果を残し、C・Cの元へと向かっていた途中だった。

通り掛かった研究室の扉の僅かな隙間から、大人達の声つが漏れていたんだ。

何時もだったら素通りをしていた。

しかし、通りかかった私の耳に、日本という単語が入り、興味を持ってしまった。

「……兄上と、姉上が居るのに……、父上は……、どうして……。」

皇歴2010年、サクラダイトの利権を巡ったブリタニアと日本の戦争、「極東事変」。

父は、シャルル・ジ・ブリタニアは、2人が居るのにも関わらず日本に向けて侵攻を開始した。

そして、その結果。

「ああ、アルカ。残念だけど。」

「…嘘よ。そんなの……。」

「そうだと良いんだけどね。でも残念なことに。君の戻るべき場所はもう無い。」

「嫌…、私は、認めたくない……!」

両目一杯に涙を貯め、首を振る幼い少女に、V. V. は微笑む。

「改めてようこそ、教団へ。」

「つつつつつ!」

少女の言葉にならない悲鳴が、嚮団内に響き渡った。

そこまでの私は甘かった。

ここがどういふ所かを知らずに過ごし、V. V. の本性を見誤り、あまつさえ信じかけていた。

朦朧とする意識の中、幼いアルカは目を覚ます。

真つ白い無機質な天井、自身を照らす眩しい光と、相も変わらない目で見下ろす大人達。

(……………?)

朦朧とだが意識はある、視界は動く。

しかし身体に力が入らず、口も動かすのも億劫だ。

「V. V. 様。」

「うん、皆には我慢させて悪かったね。でももう良いよ。」

V. V. の声を合図に、大人達はアルカの右手を抑える。

視界の外にある腕に、チクリと痛みを感じ、アルカは僅かに目元をピクリと動かした。

「被検体の名称は如何しましょう？」

研究員の一人が、手元の資料に目を落としながら呟く。

「ああ、そうだね。彼女はもう死んだことになっているから、元の名前は相応しく無いし……。

——うん、コードAとでも呼ぶとしようか。」

私はあの時、確信した。

アルカ・ヴィ・ブリタニアなどももうこの世の何処にも存在しないんだ、と。



V. V. からコードAと呼称されたあの日を境に、私の世界は一変した。

「……………何なの……。」

皆から向けられる感情が、何となく分かるようになった。
誰が私に対して好意を持っていて、誰が私に対して悪意を持っているか、分かかってしまった、気づいてしまった。

人の感情が分かるってどんな気分分かる？

——最悪以外の何ものでもないよ。

今まで無意識的にやっていた行為が、打算的なものに変わっていった。

今まで気にしなくて良かったものを、気にする様になっていった。

好感情を持っている人とはばかり関りを持つようになった。

悪意を持っている人に、近づかなくなった。

私らしくしてきた事が、出来なくなつた。

ある日、人の感情を知りました。

その感情は、私に対する嫉妬の感情。

——やめて。

ある日、人の感情を知りました。

その感情は、私に対する性的な感情。

——やめてよ。

ある日、人の感情を知りました。

その感情は、私に対する恐怖の感情。

——そんな感情を私に向けないで。

段々と日が経つに連れて、好意よりも悪意を気にする様になっていた。
そして。

私は、初めて人を殺しました。

▼
嚮団で過ごし、ある程度成熟した私達は、次のステップへと進んで行った。

それは、より本格的な戦闘訓練と、人体を用いた実験の参加。

まず最初に行ったのは戦闘訓練。

お互いの武器はコンバットナイフ一本。

それぞれ二人一組で、どちらかの戦闘不能になるまで戦い続けるというもの。

ナイフを用いた実戦を想定した訓練と言っても、所詮は訓練。

身体に幾つもの切り傷を作った人は居ても、死人が出る事は無かった。

——ある一組を除いて。

私がペアになったのは、私に恐怖心を抱いていた少女。

共に戦闘を繰り返していく内に、その少女の恐怖心は、私への殺意と変わっていった。

彼女のナイフの切っ先が、喉元、頭、心臓を掠めていく内に私は思った。

気持ち悪い、と。

「……が、あつ……」

周囲の動揺する声と、潰されたカエルの様な声を出す少女。

喉を突き刺すナイフを通して聞こえていた彼女の心臓の鼓動が停止する。

それを確認したアルカは、ナイフを引き抜き、重力に従って倒れた少女を見下ろす。

「…嗚呼、これで私を取り巻く感情が一つ消えた。」

返り血で頭から足までベツタリと汚したアルカは、安堵の笑みを浮かべながらそう呟いた。

「お前…!! 何やって!!!」

少し口の悪い金髪の少年が、鬼の様な形相でアルカに迫り、胸倉を掴む。

「殺す必要なんて——!」

「? 彼女から殺意を感じたから。」

彼がアルカに対して怒っている、というのは彼女も分かっている。

ただ、怒る理由が分からない。

「彼女の殺意、気持ち悪かったから。」

アルカの言葉に少年は怯み、後ずさりをする。

周りの傍観者たちも、以前とは様変わりをした彼女に対して恐怖を感じた。
いや、恐怖を感じてしまった。

「——ああ、気持ち悪い。」

彼女は不快感を示しながら、そう呟いた。

あの時の私は心を殺していた。

戦うべき、生きるべき理由を失った私をさらに追い詰める人の悪意。

当然、幼い私に耐え切れる筈も無い。

一種の自己防衛だったんだと思う、あの時の私は心を殺して日々を過ごしていた。

考える事を止めた私にとって、私を取り巻く人の感情の渦は不快なモノでしか無かつ

た。

その後、どうなったかは想像できるでしょう？

気持ち悪い、という理由だけで、また人を殺した。

私と夢を語り合った人を殺しました。

私と食卓を囲んだ人を殺しました。

私に勉強を教えてくれた人を殺しました。

私に薬を与えてくれた人を殺しました。

殺しました。

殺しました。

殺しました。

殺しました。

殺しました。

殺しました。

殺しました。

実戦訓練中にナイフを突き立てて、KMFの操縦訓練で相手の機体ごと潰して、戦闘

訓練の関係無い所で。

いつしか、自分の居場所になりかけてた場所を、自らの手で壊していった。

日に日に私から人は離れ、いつしか最初と同じ様に1人になったその時、C. C. は再び私に手を差し伸べた。

常に悪感情に晒されていた私にとって、彼女の感情だけは感じ取れなかった。

最早、嚮団内ですら居場所が無い私は、自然とC. C. と寝食を共にする様になった。穏やかだった。

私を取り巻く感情は無く、世界は私と彼女ののみ。

次第に凍てついていた私の心は優しく溶かされて。

「……………めんなさい……………」

罪悪感にさいなまれた。

C. C. と共に過ごす様になってからも、私は義務から逃れられない。

「私はただ、純粹に——自分の願いを叶えたいだけなのに——」。

祈るように。

「どうしても誰も分かってくれないの——」。

大嫌い、と記憶の中の私は言った。

「嫌い、大嫌い。大嫌い大嫌い大嫌い大嫌い——！」

人間も、世界も、何もかも！ 全部全部全部!!」

大嫌い、と自身の心に従うまま、そう叫んだ。



なるほど、とO・O・は感心した様に頷く。

額縁に映っていた風景は消え、アルカがここに踏み入れた時の状態へと戻った。

「そうして嘆く君に手を差し伸べ、力を与えたのが彼女、と。まあ100%の善意かどうかは怪しいが。」

「……どうして。」

「ん？」

「どうしてこれを私に思い出させたの？」

アルカが漏らした疑問に、O・O・Oは笑顔を浮かべたまま応じる。

「言っただろう？ 君の成長の為だ、と。何事にも押さえておかなければならない要点、というものが有る。それが君にとってのコレってだけさ。」

「…私の成長って貴女は言うけど、それを為したとして一体どんな意味が——。」

「チツチツチ、甘いなアルカちゃん。意味があるから成長するんじゃない。成長した君だから、意味を持たせることが出来るんだ。」

腰に手を当て指を振りながら、O・O・Oは得意げに告げる。

「さてさて、そろそろ選択の時だ、アルカちゃん。」

両手を大きく広げ、彼女は叫ぶ。

「黄昏の中から、精々後悔の無い様、君らしい道を見つけておくれ。

—— 僕のコードを継ぐ者よ。」

彼女の言葉を皮切りに、アルカの意識は再びブラックアウトした。

TURN 19 破滅の願い

嚮団全体が揺れる。

比喩では無い。本当に揺れているのだ。外部的な要因によつて。

——ふざけるな。

無数のKMFが、雪崩の様に流れ込んでいく。

——ふざけるな。

この場に居るものを殲滅する為に。

——ふざけるな。

囚われた彼女を救うために。

——何が頼もしいだ。

ルルーシュは以前にC・C・に聞いた、ギアス能力の詳しい詳細を。
その時、彼女はこう答えた。

——ギアスとは、ある種の才能、と。

彼女は言った。

ギアスの能力、発動条件、持続時間、効果範囲、その全てに至るまで個人差がある、と。
そしてその個人差は、決して後天的に付随するものでは無く、生まれつき決まってい
ると。

加えて、彼女はこうも言った。

——そういう点では、アルカは非常に才能に恵まれていると。

その言葉を聞いたルルーシユは思ってしまった。

—頼もしい、と。

当時のルルーシユはまだギアスの暴走はしておらず、その力に陶醉していた。

ギアスの真相を知らない立場の者としては、その抱いた感想は一般的な反応だっただろう。

しかし、例えそうで合っても、ルルーシユは許すことが出来ない。

そんな感想を抱いた、過去の己自身を。

「…何が頼もしい、だ。…何が才能だ。その才能の所為で、アルカは——、アルカは
!!!」

ジェレミアが言うには、嚮団の構成員の殆どは、幼少期の頃からそこに身を置いていたという。

戦争孤児、捨て子等の表の世界で居場所の無い子ども達が、無作為に選出され、嚮団

の為に教育される。

だがその中で、例外ある。

それは才能。

時に嚮団は、その才能を持った人物に付け込み、利を得ようとする。

それこそ、アルカやジェレミアの様に。

「その頼もしい才能とやらの所為で、アルカは連れて行かれたんじゃないか…。過去も、そして今現在も!!」

その端正な顔に激しい憎悪と怒りを乗せ、ルルーシユはただただ叫ぶ。

「終わらせなければならぬ——。私が……、この俺が!!!」

ルルーシユは蜃気楼のキーボードに指を滑らせ、通信のチャンネルをオンにする。

ゼロとして、団員達に指示する為に。

妹を取り巻く嚮団の影を、断ち切る為に。

「黒の騎士団に告ぐ！ 皇アルカを、彼女を探し出せ！
邪魔する者は排除して構わない……。女も、老人も、子どもですらも!!
研究データは全て廃棄。その痕跡すら一切残すな！」

その行動が、後の亀裂を生むとも知らないまま。

▼
意識が覚醒する。

「……………」
淡いミルク色の髪をした少女は、周りの騒動に気にした様子も無く身体を起こし、その歩を進める。

「……………」

そこに感情は無く、義務的に、機械的に、彼女は歩き続ける。

「……………」

身体に纏うのは布切れ一枚。

それ以外、彼女が身に纏う物は無く、裸足のまま。

廊下に散乱している瓦礫が、彼女の足を切った。

「……………」

辺り一面に転がる死体から漏れ出ている血液が、彼女の足を汚した。

「……………」

それでも彼女は進む。

中央の扉を目指して。

『皇様!』

そんな彼女を見て、声を掛ける者が居た。

「……………何。」

彼女は足を止め、声の主の方へ向く。

黒の騎士団の保有する暁から、1人の男が焦りの表情を浮かべて、彼女の元へ飛び出した。

「良かったです、ご無事で! 今、ゼロが貴女の救出の為に、この施設を——」。

ゼロ直属の部下、零番隊の平隊員である彼は、矢継に言葉を紡ぐ。

五月蠅いな——。

「それにしても、この施設は一体? ブリタニア軍の軍事施設と聞いて来てみれば、居る

のは研究員や無抵抗の子どもと老人ばかり。ここは本当に——。」

いくら救出の為だとは言え、やりすぎだ。

それが何も事情を知らない兵士達の感想だった。

事実、ここはギアスを研究している秘密組織の本拠地。

ギアス能力者を大量に抱え込んでいる事実を考慮すれば、関係者の殲滅は妥当と言える。

相手が、どんな超常の力を行使するかは、実際に相対しないと分からないからだ。

だが、そんな事情をゼロが彼らに教える筈も無く。

「五月蠅いよ。」

アルカを見つけた事による安堵からか、自身の疑問を口にしていた彼は、他でも無い目の前の幼い少女に、言葉を遮られる。

「……はい？」

「五月蠅い。黙れ、黙って、黙ってください。私に関心を向けなくて、私に構わないで、

喋りかけないで触れないで。」

「アルカ様？」

「嗚呼、貴方は悪い子。——今すぐ、黙らせてあげる。」

男は少女の言葉のまま、自身の舌を噛み切った。



「……ああ、クソが。めんどくせえ……。」

金髪の青年は悪態をつく。

か細く、弱々しく、今にも死にそうな声で。

「……流れ弾に当たった、だけで、これ、か……。俺も、ついてねえな……。」

その青年の身体は惨憺たる状況だった。

左脚は上から落ちてきた瓦礫に潰され、右の腹部は丸ごと吹き飛んでいる。

生きているのが不思議な位、彼の周りに夥しい程の鮮血が広がっていた。

黒の騎士団の強襲を知った彼は、抵抗する訳でも、逃げ出す訳でも無く、真つ先に彼女の元へと向かった。

幼い頃、共に過ごし、そして自ら離れてしまった彼女の元へ。

何故、彼女の元へ行こうとしたかは分からない。

ただ、気づいた時には自然と足が向かっていた、それだけの事だった。

彼女が眠るといふ研究室に向かっている最中の事、彼は不運に見舞われた。

黒の騎士団が放ったのであるKMFの弾丸が、青年の腹を翳めたのだ。

翳めたと言っても、それは軍事兵器であるKMFの弾丸。

本来、生身の人間に向けられるものではない。

当然、無事では済まない。

腹が吹き飛ばされた衝撃に、青年はバランスを崩し、その場に倒れた。

撃たれた。と認識出来たのはその後すぐの事だった。

青年が倒れている間にも、事態は進む。

黒の騎士団は次々に施設を破壊していき、瓦礫を積み上げていく。そして――。

「…結局、俺は、何をしたかった、んだろうなあ――」

人間、死ぬ寸前は冷静になるらしい。

自身の行動についてを振り返っているその時、すぐ近くでペタペタと歩く音が聞こえた。

「――ああ?」

その音の主の方へ視線を向ける。

本人の物かどうか分からない程、赤く汚れた真つ白な脚。

それとは対照的に、汚れが一切見当たらない淡いミルク色の髪。

青年が先程まで意識を 向けていた少女、その本人だった。

「――何だよ、その顔。」

少女の顔は何処までも無表情ではあったが、その瞳の奥には確かに感情があった。そして、その瞳に青年は見覚えがある。

少女は嫌い、と言う。

少女は己の言葉に従い、全てを拒絶する。

それは今も昔も変わらない。

しかし、昔の彼では分からなかった事がある。

ギアスを手に入れ、人から道を踏み外した今の彼に分かる事。

「……………寂しそうな顔をしやがって。」

彼は過去に少女の元から離れた。

それは彼女が理解出来なかつたから、異形の存在の様に感じ、恐怖心を憶えたから。

そして、その少女は彼の意志を汲み取つたかの様に、突然姿を消した。

心にしこりが残つた。

もしかしたら、歩み寄る余地があつたのではないかと。

もしかしたら、彼女は自分達と変わらないのではないかと。

もしかしたら――。

「……悪かったなあ、理解してやれなくて。」

青年の声は少女に届く事無く、崩壊の音に飲み込まれた。

「ああ…、寒い…。寒いのは、嫌だなあ……。」

名前も知らぬ青年は静かに息を引き取った。



扉から、光が漏れ出ている。

嚮団内部でも中央に位置する祭壇。

その中央に佇む巨大な扉が、文字通り開いていた。

その光に包まれながら、祭壇の階段に力無く腰掛け、1人の少年。

「シャルル…、何故今になってV. V. のコードを奪った？」

その少年を見つめる、1人の少女。

「……。」

少女の疑問に答える者はこの場におらず、水が地に落ちる音だけが響く。

「V. V. ……。お前さ、マリ안의事、好きだったんだろう？」

愛憎という言葉がある。

愛情と憎しみ、相反する気持ちを同時に抱いてしまう人の複雑な気持ちを指した言葉だ。

彼は異常なまでに、マリアンヌという言葉に反応し、激情していた。

その反応の裏には彼女に対する愛情があったのであろう。

最も、その答えを持つ者は、先程この世を去ったばかりだが。

「むかつく。安らかな顔で眠っちゃってさ。」

V. V. を眺めるC. C. の背後から、少女の声があった。

C. C. は僅かに視線を後ろに向け、優しい笑みを作った。

「……起きていたか。」

「ええ。」

少女、アルカも同様に笑みを浮かべながらC. C. の隣へ座り、彼女の肩にその頭を乗せる。

「——静か。雑音も、騒音も、何も感じない。まるで何時か見た、月が浮かぶ水面の様。」

先程の様子とは打って変わり、静かに優しく、味わう様に、アルカは言葉を紡ぐ。

その言葉は一字一句C. C. の元へと届き、彼女の中へ入っていく。

「……思い出した様だな。」

「……ええ。」

「この世界は嫌いか？」

「……ええ。」

そうか、と静かに呟き、肩に乗せるアルカの頭に、C・Cも同様に頭を乗せる。

「私を、恨んでいないか？」

「寧ろ、感謝してる。だって、あのままの私だったら、貴女を残して私一人で先走ってしまったらどうから。」

心の向くまま雑音を消し続けて。きっとこの身が破滅するまで続けたと思う。」

2人の少女は静かに会話を続ける。

「貴女は私に名前をくれた。ギアスをくれた。C・C。がくれたものが、貴女が存在が、私を繋ぎとめてくれた。」

「……でも、随分と遠回りをしてしまった。」

「その遠回り、私は好きだよ。好きだった。——でも。」

「もう疲れてしまった、か。お互いに。」

「……ええ。」

アルカは肩から頭を離し、C. C. の顔を見つめ、手を沿える。

「貴女の願いは私が叶える。」

「お前の願いは私が叶えよう。」

2人はクスリと笑い合う。

「なあ、アルカ。私の事、好きか？」

C. C. の言葉に一瞬キョトンとしたものの、すぐに笑みを作り、彼女は答えた。

「殺したい位に。」



黄昏の空に浮かぶ神殿で、ルルーシユは邂逅した。

自らの父であり、怨敵。

殺したいほど憎み、ギアスという力で抗う事を決意した相手。

神聖ブリタニア帝国第98代唯一皇帝「シャルル・ジ・ブリタニア」。

今まさに、彼がルルーシユの前に立ちはだかつていた。

皇帝の持つギアス能力は記憶の改竄。

発動条件はルルーシユやアルカと同じく、相手の目を直接見る事。

出し惜しみなど出来ないルルーシユは先手を打ち、皇帝にギアスを掛ける。ただ一

言、死ねと。

ルルーシユの言葉に従い、皇帝は自らの命を絶った。

絶った、筈だった。

しかし相手はその手腕で一代にしてブリタニアを超大国へと発展させた怪物。

ルルーシユの想像を優に越してくる。

死んだと思われた皇帝は、再び笑みを浮かべながらその活動を再開する。

その事実には驚愕を示しつつも、ルルーシュは抗い続けた。しかし、その抗いも何の意味も無いことを、彼は知ることになる。

「分からののか、ルルーシュ。最早僕には、剣でも銃でも、何をもってしても——、無駄あ
!!!」

身体中に銃弾を浴びながら、皇帝は自らの右手をルルーシュに見せつける様に突きつける。

そこには赤いギアスの紋章。

それを意味するのは。

「つ!!」

不老不死。

C・C・やV・V・と同じ。

額を銃で撃つても、心臓を剣で貫いても、死ぬことの無い不死身の身体。

「僕はギアスの代わりに新たなる力を手に入れた。」

皇帝は、雄弁に語る。

「故に、ルルーシユ。教えてやっても良い。この世界の真の姿を。」

皇帝のその言葉が終わると同時に、ルルーシユの意識は突き落とされた。
無数の歯車と、仮面が浮かぶ世界に。

「……(ハ)は……。」

戸惑うルルーシユの前に、シャルルの姿が再び現れる。

「ギアスとは何だ!? 貴様は何を企んでいる!?!」

「可笑しな事よ。」

ルルーシユの疑問に、シャルルは嘲笑を浮かべる。

「嘘に塗れた子どもが、人には真実を望むか…。」

「何……？」

「お前はゼロという仮面の嘘で、何を得た？」

「手に入れた！ ただの学生では到底手に入れない軍隊を！ 部下を！ 領土を！」

しかし、その裏で。

『ユーフェミアを失った。』

「なっ。」

周りに浮かぶ仮面の軍勢が、次々と声をあげる。

『スザクやナナリーにも姿を晒せない。』

『そして、アルカも失いかけている。』

「黙れ！」

ルルーシユの苛立ちが募る。

「人は誰でも嘘を付いて生きている！ 俺もそうしただけだ！」

『何故嘘を付く？ 本当の自分を分かって欲しいと思っただけに。』

『そう望みながら、自分をさらけ出さない。』

『仮面を被る。』

『本当の自分を知られるのが怖いから。』

仮面の軍勢は、ルルーシユに突き付ける。

現実を。

「嘘など、つく必要は無い。何故なら、お前が儂で、儂がお前なのだ。」

シャルルは語る。

人、という存在は、この世に1人だと。

過去も現在も未来も、人類の歴史上、1人しか存在しないと。

「1人…？ 何を言っている!？」

「シャルル。」

ルルーシユが理解するのを現実には待ってくれない。

この空間に少女の声が響くと同時に、この場に現れた者達が居た。

「遊びの時間はもう終わりだ。」

そう呟く少女はルルーシユの契約者、C. C.。

そして、まるで恋人の様に、将来を共にする伴侶の様に、彼女と指を絡めて手を繋ぐ、妹のアルカ。

「C. C. ? アルカまで…?」

「私にとって、それにもう価値は無くなった。」

ただ無感動に、彼女は口を紡ぐ。

「それを籠絡して、私達を呼ぶ必要も無い。私達は既に、ここに居る。」

「そうだな、C・C。」

「……父上……。いや、シャルル・ジ・ブリタニア。私が——。」

「ああ、叶えると良い。C・C.の願いを。」

ルルーシュを除いて、この場に居る全員が、アルカさえもがC・C.の願いを知っていた事に、驚愕の色を浮かべて彼は目を見開く。

「知っているのか、アルカ……。C・C.の願いを！」

「……………」

彼女は答えない。自分が答えるべきでは無いと、そう思ったからだ。

そんなアルカの意志を汲み取ってか、C・C.は再び口を開く。

「ルルーシュ、今こそ契約条件を、我が願いを明かそう。」

——我が願いはアルカと共に死ぬこと。」

私達の存在が、永遠に終わる事だ。

ずれていた歯車が噛み合った、そんな気がした。

TURN 20 コードを宿す者達

ルルーシユの瞳が震える。

驚愕、困惑、動揺、そんな感情が彼の頭を埋め尽くす。

「終わる……？ アルカと共に……？ 何を言つて——」。

「言葉通りの意味だよ、兄上。それ以上でもそれ以下でも無い。」

ルルーシユの動揺を余所に、アルカはC. C. の様に淡々と語る。

「アルカが、死ぬ……いや、待て。そもそもC. C. は——」。

「ギアスの果てに、能力者は力を授ける者、コードユーザーの地位を継ぐ。つまり、私達を殺せる力を得る。」

「待て、その言い方だと——」。

「ジェレミアからの報告を見ただろう。嚮団が再現しようとした失われたコード。それがアルカの中に宿っている。」

「——バカな…。」

言葉では否定しようとも、ルルーシユは胸中で納得してしまっていた。

傷の治りが早い身体、成長期である筈にも関わらず代わり映えない身体、ギアスに對する耐性。

「何故——、何故アルカが……。」

「お前が詳しく知る必要は無い。」

「……お前は…、お前達は、死ぬために俺と共に戦ってきたのか!？」

声を震わしながらも、ルルーシユは必死に叫び続ける。

真実を知る為に。

「そうだ。」

「ふざけるのも大概にしろ！ 俺は知っているぞ、アルカ！ お前がどんな気持ちで戦場に立ち、戦ってきたかを！」

「人には様々な仮面がある。さつき兄上も知ったでしょう。」

アルカの言葉にルルーシユは言葉を詰まらせる。

「嘘をついていた、と。お前が…、俺に？」

「……………」

「あれが嘘だと言うのか！ ブリタニアを憎む気持ちも、カレンへの友情も！ 俺達を守りたいというあの言葉も！ 全て嘘だと——」

ルルーシユも強い言葉に、アルカは唇を噛みしめ、目を鋭くする。

その様は、兄の姿にとっても似ていた。顔付きも、その在り方ですら。

「っ！ そうだよ！ 私はこの世界が嫌い！ 人間も！！ 優しくない現実が、全部嫌いなのだ！！ だから——！！」

今まで表情を変えなかったアルカが、激情をあらわにする。

ルルーシユは彼女その姿が初めて年相応だと感じた。

「だから死に逃げるのか!? 世界が自分に都合良く出来ていないから! お前には世界を変えるだけの意志と力が——。」

「——っ!! 私の事、何も知らない癖に!!!」

感情のまま、アルカは叫んだ。

遂には溜まっていた涙が決壊し、彼女の頬を濡らす。

「私が、何をして、何を思ったか、——知らない癖に。」

アルカの言葉が強いものから、弱々しいものへと変わっていく。

次第にアルカは泣き崩れる様にC・Cの胸元へと顔を埋め、涙を流す。

「ルルーシュ。」

自身の胸元を濡らすアルカの頭を撫でながら、C・Cは彼に呼び掛ける。

「どんなに否定しようと、これが真実だ。」

「——嘘だ。」

「それでも、この先も戦い続ける意志が有るのなら、私達を殺せ。」

俺が殺す？

アルカを…？ C. C. を…？

ルルーシユは狼狽えながら、一步また一步と後退る。

「——さようなら、ルルーシユ。お前は優しすぎる。」

「——！ 待て、お前達は……!!」

ルルーシユは再び落とされる。

「おやあ？」

全ての記憶が保管されている、回廊へと。

「ハイハイ……。」

次に目を覚ました風景は、穏やかな田舎だった。

草木が生い茂る、長閑な丘陵。

そんな田舎道で、ボロ布を羽織った幼い緑髪の少女が疲労困憊の様子で歩いている。布から見える脚は薄汚れ、その身体は棒の様に細い。

フラフラと身体を揺らしながらも、歩く少女だったが、遂には耐え切れなくなったのか、バランスを崩す。

「あ、おいー！」

重力に従って倒れる少女の身体を、支えようと手を伸ばしたルルーシユだったが、その少女の身体はルルーシユの手を通り抜け、その場に倒れる。

「無駄よ。」

ふと、機械の様に感情の無い声が響いた。

「これは私の記憶。干渉は出来ない。」

声の主はC・C。と瓜二つの容姿をしていた。

(C・C・C・? いや、違う……。)

見た目はC・C。だが、その声と表情に変化が無さ過ぎる。

本来の彼女にはもう少し、感情があった筈だ、とルルーシユは結論付ける。

「貴方は、誰？」

「…ルルーシユだ。お前の——。」

ルルーシユが言葉を紡ごうとすると、風景が変わった。

田舎の風景から、ボロボロの協会へと。

『貴女に生きる為の理由はあるの？』

優しい声音の女性の声が響く。

『わ、分かりません……。でも、死にたく、ないんです……。！』

教会のステンドグラスから差し込む光を浴びて、少女とシスターの恰好をした女性が言葉を紡ぐ。

シスターの問い掛けは、ルルーシュにも聞き覚えのあるモノだった。

懇願するように生きる意志を紡いだ少女に、優しい笑みを浮かべ、シスターは告げる。

『では、契約をしましょう。生き延びる力を貴女に授けます。その代わり、何時しか私の願いを叶えてはくさいませんか？』

シスターの額には、翼を広げた鳥の様な紋章。

「まさか…。」

「そう、私は彼女と契約をした。」

契約の場面から、シスターと暮らす少女の生活の場面へと、次々と移り変わる。

「私に発現したギアスは、愛されること。」

「愛？」

「心の奥底で、私は——、私は誰かに愛されたかった。」

少女はギアスを使い続けた。

「ギアスのお陰で、私はあらゆるものに愛された。」

少女の容姿は見る見るの内に小奇麗になっていく。

様々な男性からの贈り物、街中の人からの食糧の贈呈。

全ての人が、彼女を愛そうと奔走していた。

「でも、愛され過ぎてそのうち本当の愛が分からなくなった。」

所詮、少女に与えられたものは全てまやかし。

一夜の人肌も、煌びやかな宝石も、齒の浮く様な言葉も。

全て全て全て、彼女のギアスによって作られた虚構。

「私が信じたのは、彼女だけ。」

結局、彼女のギアスは人に嘘の気持ちを植え付けるモノ。

自身の認識と、周りの認識のズレに気付いてしまった彼女は、唯一対等に話せる存在。

コードユーザーである、シスターに傾倒していくのは時間の問題だった。

「ギアスが効かない彼女は、遊んでいた私を叱ってくれたから。なのに——。」

場面は再び教会へ。

『ハイハイ。言われた通り、貰い物は全て手放しました。でも仕方ないでしょう？ ギアスの所為なんだから。』

あっけらかんと、反省する様子も無く語る少女の両目にはギアスの紋章。

『シスターには感謝してるけど、正直、私も困っているの。プレゼントやプロポーズにはもう飽き飽き、私を崇める人まで出てきちゃって…。』

『——じゃあ、もう終わりにしましょう。』

『え？』

今まで優しかったシスターの雰囲気、当事者でないルルーシュにも伝わるほど、変わっていく。

『私の永遠を終わらせるためには、誰かを身代わりにしなければならぬの。一定以上のギアスを持つ、誰かを。』

彼女は続ける。

『どれだけ苦しかったか、生き続けるという地獄が。』

『あの…、何の話？』

言葉に憐憫が帯びて行き、語気が強くなる。

『残念でした！ 貴女、騙されちゃったの!!』

その光景は見るに堪えないものだった。

喜々とした表情で彼女の胸元に傷を付けるシスターと、泣き叫ぶ少女。

「私の存在は、彼女にとって自分自身にピリオドを打つための道具。ただ、それだけだった。」

回廊に戻った彼女はルルーシユの顔をじつと見つめる。

「その後は貴方の知っている通り。永遠に続く地獄の日々で——。」

「彼女に出会った。」

C. C. の言葉に続く様に、少女の声がまた一つ加わる。

額縁が並ぶ長い廊下の奥から、和服を着た黒髪の少女が、ニマニマとした笑みを浮かべながら、2人の元へと向かってくる。

「…貴女も来たのね。」

「おうとも。この物語には彼女の存在が必要不可欠だ。だとするならば、僕の出演だろう?」

C. C. とは対照的に、その声音と表情に抑揚が有り、人間味を感じる少女。

「…お前は?」

「良くぞ、聞いてくれた!」

仰々しく演技かかった仕草で、高らかに黒髪の彼女は声をあげる。

「僕はO・O・O。」

「O・O・O?」

「古き日本に伝わるコードの正当な継承者にして——、アルカちゃんの先代、とても言っておこうかな。」

「……………」

ルルーシユはめんどくさいのが来た、と言わんばかりの表情で、O・O・Oを見つめる。

「って何だい、その目は!?!」

「…いや、なんていうか……………」

「五月蠅いのが来たって思っているんでしょう。それには私も同意します。」

「君達冷たいなあ!」

2人の態度に、ぶーぶーと頬を膨らませて抗議するO・O・O。

「——それで、その先代様が一体何の用だ?」

ルルーシユは頭を抑えながら、やれやれと首を振る。

「さつきも言ったろう。この物語には彼女の存在が必要不可欠、つと。僕はその語り部
や。」

「なら、早くしろ。俺には時間が無いんだ。」

「分かってるよお。全く、彼女と違ってせつかちだなあ。アルカちゃんはじっくり私の
相手をしてくれたのに。」

肩を竦めながら、呆れた様にO・O・Oは言う。

「…待て、アルカがここに来た？」

「ああ、来たよ。当然だろう。私と同じコードを宿しているんだから。」

「……お前が、お前がその時に、あいつにコードを与えたのか!？」

ルルーシユは怒りをその顔に浮かべ、O・O・Oに迫る。

「わわっ。僕じゃない、僕じゃないよお。えーんーぎーいー!!」

僕は蓋を開けただけ。遅かれ早かれ、そうなる運命だったんだから……。そんなに怒らないでくれよお……。」

「運命、だと……?」

「ああ、そうさ。まずはその話からしようか。」

コホンつと息を整えて、彼女は神妙な顔で口を開く。

「まず良いかい。私達の持つコードは、古くから代々一族に継承されて行くモノだった。」

まあ、私の代で途絶えたけど。と悪びれる様子も無く彼女は笑う。

「その途絶えたコードが何故アルカの手にある?」

「血だよ、血。生前の私や、彼女の身体に流れる貴き血。日本における王の血と言っても良い。」

「まさか……。皇家……?」

ルルーシユの反応に気を良くし、彼女は笑みを深める。

「コードの継承を繰り返していく内に、私達の一族の遺伝子にはある傾向が見られるようになった。」

「知ってるかい？ ギアスの適正は遺伝するってこと。」

「……ああ、嚮団の研究データで見たよ。」

「そうかい、とO.O.は言う。」

「私の代でコードは途絶えたが、家は続いた。流石にその血は薄まっていたけどね。それでも、私と同じ血が、当代の彼女達にも流れている。」

彼女達、というのは神楽耶とアルカの事だろう、とルルーシユは考えた。

「コードの継承の条件はさつき知ったね？」

「……ああ、一定以上の力を持つギアス能力を保持する事。」

「そう、言い換えれば、ギアスの適正が高い者が、それを継承できる。あとは分かるだろ

う?」

コードユーザーという存在は、適性が極めて高い者ばかりだという事。
つまりは——。

「あえて君達の言葉を借りるならC因子とR因子かな? それは何を指すか、僕には分からないけどね。」

なにせ、僕が生きていた時代には、そこまでの研究はされていなかったから。
まあつまり、彼女は生まれた時から適正が非常に高かった。」

だから——。

「だから失われたコードが発現した、と?」

「そうなるね。勿論、そこには汚い大人達の思惑が絡みついてたのだが。」

「バカな——、それじゃあ、母上は……。」

「信じるかどうかは人それぞれだけど、僕は嘘を吐かない。……彼女の事に関しては、
ね。」

それが僕の、記憶の管理者としての矜持さ。」

嘘は言っていない。

ルルーシユの直観がそう告げる。

「そう、彼女はこうなる様に全て仕組まれてきた、生まれる前から。運命の奴隷、と言つても良い。」

だとすると、母であるマリアンヌに対して疑惑が浮かんでくる。

こうなる事を望んで、アルカを生んだのでは無いか、と。

「さあ、予習も済んだ所で本題だ。

そうして悲しい運命を背負って生まれてきたアルカは、C. C. と出会った。

偶然って訳では無いがね。」

「当時、嚮団の嚮主として身を置いていた私は、紹介されるがまま彼女に近づいた。」

今まで静観していたC. C. が会話に加わる。

「その時はまだ、私の身代わりになる少女、としか見ていなかった。それが、次第に――」

「C・C. はアルカに惹かれていった。」

「共に過ごすに連れ、身代わりとは思えなくなり、いつしか彼女の幸せを願う様になった。私と同じ運命を持たされた悲しき彼女の幸せを。」

代わる代わる、彼女達は語る。

「だからC・C. は、嚮団での出来事で世界を嫌った彼女の記憶に蓋をした。」

「アルカの、記憶に……?」

「当時の彼女は、活性剤によつて奥底に眠る因子を無理矢理引き出されていた。その状態が続けば、彼女は10にも満たない歳でコードを発現してしまう。」

それを恐れた私は、彼女が人間で居られる期間を延ばす為に――」

「ふーん、それが君の本心かあ。僕はてつきり、アルカに嫌われたくないとか、彼女を依存させる為にそれをしたんだと思っていたよ。」

僕って性格悪いから。っとO・O・Oは続ける。

「——それも否定出来ない。当時の私は、彼女の幸せと自身の願望の間に揺れていたから。」

「お前に、その気持ちがあるのなら何故——!。」

「アルカと過ごしていく内に、私は恐怖を憶えた。私の日常から彼女が消える事と——。」

「C・C・Cが居ない世界に、アルカを残すこと。」

それを人は、依存という。

「記憶に蓋をされたアルカは、純粋に前向きに、彼女の幸せを願った。例えば、自らが滅びようとも、彼女が幸せになれる世界を作ろうと。」

「加えて彼女はこうも思った。永遠を過ごすC・C・Cの中に、鮮明に自身の姿を残したいと。無窮の時の中で、彼女の中の自分の存在が風化していくのが嫌だったんだらうね。」

その意識が強かった彼女は、死に急ぐ様になった。」

単独で突入したり、身体を張って他の誰かを守ったり。

「献身的に、健気に、良い子になろうとした。その姿を焼き付ける為に。」

それが、ルルーシユの知っているアルカの姿。

「君はさっきアルカに言われたね。私の何を知っている、と。」

「貴方が知っているのは記憶に蓋をされた状態のアルカ。だけど、今はO・O・Oによって蓋を開けられている。」

「つまり、君の知っている彼女とは別人、という事だ。」

何せ、君の見てきたアルカ・アングレカムは、世界と人間をそこまで恨んでいないのだから。

「アルカは記憶を取り戻して、強く思った。C・C・Cを縛り付ける世界が嫌い。愛する肉親を不幸にする人間が嫌い。自分の大切な人達を傷つけるモノ、全てが嫌い、と。」

「彼女は今までの人生で、戦いで、C・Cの過去を知った、貴方達兄弟きょうだいの願いを知った、自分を取り巻く人達の優しさを知った。」

「つまり、彼女の全てのモノに対する嫌悪感、自分の為では無く、周りを思つて抱いた感情へと昇華した。」

「それを、俺は——。」

逃げる、と言つた。

「アルカなりの気持ちの決着の付け方だつたんだよ。C・C共に死を迎えるというのは。」

「皇帝は言つた。争いだらけの世界を壊し、人同士が分かり合う平穏な世界を作る、と。そしてそれをアルカは信じた。」

「C・Cとアルカの願いが同時に果たされる計画が、皇帝にはある。だから彼女達は、君をあの場合から突き放して、ここに送つた。ルルーシユ、お前を守る為に。」

ルルーシユは齒を噛みしめる。

「今、アルカはC・C・のコードを継承しようとしている。それが済めば、今度は彼女の番だ。」

「……O・O。」

「何だい？」

「お前は、アルカの記憶の蓋を開けた、と言ったな。それは何故だ。」

ルルーシユが最後に聞きたかった事、それは彼女の思惑。

そもそもO・O・が記憶の蓋を開けなければこんな事態にはなっていなかった筈だ。

「うん、そうだな。極めて個人的な願いの為、と言っておこう。」

ああ、勘違いしないでくれよ？ 僕はアルカちゃんの味方だよ。」

そうか、とルルーシユは小さく呟く。

「1つ言っておく、お前にどんな思惑があつたとしても、俺達はお前の思い通りに等なら
ない。」

「そうかい。」

「そしてもう、誰も失わない。」

「——世界は残酷だ。それは君も分かっているだろう？　今、君があそこに戻ったとして、悲願を叶える直前の2人を取り戻せるのかい？」

ああ、俺を誰だと思っている。

「出来るさ。なぜならば、俺はゼロ。世界を壊し、世界を創造する男。」

アルカの望む世界を作るのは皇帝では無い。この、俺自身だ。

ルルーシユの元に、光が差した。

再び、彼は舞台への階段に足を掛ける。

TURN 21 黄昏の中で

夕日に照らされながら、2人の少女は向かい合う。

「……C・C。」

「……アルカ。」

お互いに存在を確かめる様に名前を呼び合い、アルカはC・Cの胸に向かって手を伸ばす。

彼女がまだ人間だった頃に、刻まれた胸の傷の辺り。

2人の影が重なると、彼女達を照らす光が強くなる。

C・Cの額にギアスの模様が浮かび、赤く輝く。

それに呼応する様に、アルカが羽織っている布の奥で、ギアスの模様が赤く輝く。

ドクン、と鼓動が早くなった。

胸の中心から、熱が込み上がっていく。

(嗚呼、そんな悲しそうな顔をしないで。)

ようやく悲願が叶うというのに、C. C. の瞳は何処か悲しそうだった。

(すぐに私も一緒に行く。貴女はもう、1人じゃない。だから——、お願い。)

そう願うアルカの顔も、C. C. と同じ様に愁いを帯びていた。

「…アルカ、楽しかったよ。」

「——私もだよ。」

果てには互いの瞳から涙が零れ出た、その時。

『アルカ！ C. C. ！』

この場に居ない筈の少年の声が響いた。

「っ！」

「開いたのかルルーシユ……、思考エレベーターを！」

突然の兄の声にアルカは思わずC・Cから手を離し、ルルーシユの方へと意識を向ける。

「…なるほど。この空間そのものが思考に干渉するシステムか。」

この空間が誰の手によって作られたモノかは知らないが、思考に干渉できるのなら、過去に死んだはずのO・Oが存在出来ることも合点がいく。

先程まで乗っていなかった筈の蜃気楼にこうして今乗っているという事は、そうしたいと考えた故なのだろう、とルルーシユは考えた。

「ルルーシユ…、黙ってそこで見ておれ。」

シャルルが手を翳すと、何も無かった空間から、正八面体の物体が、蜃気楼を取り囲む。

「さあ、アルカ。続けるがよい。」

そう言いながらシャルルはその剛腕でアルカの細腕を掴み、C. C. の元へと寄せ
る。

シャルルに掴まれたその腕が、震えながらもC. C. の元へと辿り着こうとした。

「止めるんだ！ そいつらは、俺の——、俺にとつての！」

その時、ルルーシユは叫んだ。

「俺は知っているぞ！ お前達の純粋な願いを！ お互いの幸せを願う気持ちを！」

死に急ぐ少女達を、引き留める為に。

「お前達の幸せが、ゴールが本当に死という結末なら——、最後ぐらい笑ったらどう
だ!？」

「……………」

苦し気に細めていた合うアルカの瞳が見開かれる。

「そんな顔して死に急ぐな！ 本当は嫌なんだろう!? 離れ離れになりたくないんだろ！
必ず俺がお前達が幸せに過ごさせる世界を作つてやる…！」

——だから!!」

ルルーシユの言葉を聞き終えた、その時。

「っ！ 放して!!」

掴まれている腕を力一杯振り上げ、シャルルの手を振り払う。

「何を——?」

突然のアルカの行動に、僅かに眉をしかめたシャルルの隙を突いて、C・Cも動く。

彼女は神殿の床から、操作盤の様な物を起動させ、蜃気楼を囲う物体を操作する。

「これ以上、奪われて溜まるか……!」

自由を取り戻した蜃気楼は浮上し、その砲門を神殿へと向ける。

ハドロンショット。

ハドロン砲を弾丸状にして射出する蜃気楼のメイン武装。

その弾丸は皇帝の頭上の遺跡を破壊する。

「何たる愚かしさか!」

今まで余裕の笑みばかりを浮かべていた皇帝が、声を荒げる。

「きやつ!」

遺跡の崩壊は、皇帝だけに飽き足らず、アルカとC. C.をも巻き込む。

2人の足場は崩れ、重力に従って落ちていく彼女達。

「C. C. ……！」

アルカは必死に手を伸ばし、C. C.の身体を抱きしめ、彼女の頭を胸元へと寄せる。いつ訪れるか分からない衝撃から、彼女を守る為に。

その光景に僅かな笑みを浮かべつつも、ルルーシユは2人の元へと駆け付ける。

「手を——！！！」

コックピットから身を乗り出し、ルルーシユは手を伸ばす。

自身にとって、守べき大切な存在の2人に。

「……………」

C. C.を強く抱きしめながらも、アルカもルルーシユへと手を伸ばす。

「くっ、アルカ——！」

ルルーシユは必死の形相で妹への名前を呼び——。

「……お兄、ちゃん。」

それに応えるように、アルカは小さく呟く。

——その時、確かに2人はお互いの手を感触を感じた。



ギアス教団の中央部。

神根島と同じ扉が、中央に聳え立つ祭壇の上に、三人は居た。

「おい、戻ってきたんだC。C。しっかりしろ！」

「……。」

意識の戻らないC・C.に呼び掛け続けるルルーシユと、そんな彼女を見つめながらも、項垂れているアルカ。

「うう……。」

「しー、っー……。」

C・C.の口から僅かに言葉が漏れ、彼女の瞳が開かれる。

「ロロには連絡を入れた。すぐにも三人でここから——。」

「…あの、どなたでしょうか……。」

意識を取り戻した彼女から出た言葉は、怯える少女のモノだった。
普段のルルーシユに対する高飛車な態度は感じられず、それこそ、年相応な少女の様な。

「C・C.……?」

先程まで項垂れていたアルカが顔を上げ、縋る様にC. C. の元に近づき、彼女の瞳を見つめる。

「あの、新しいご主人様でしょうか……？」

「……何の冗談？ 私の事、憶えて、わからないの………？」

迫るアルカの瞳に恐怖を憶えたのか、C. C. はヒッと小さな悲鳴を上げて縮こまる。

「ごめんなさいごめんなさい！ 私に、で、出来るのは料理の下ごしらえと掃除、水汲みと羊の世話——。」

怯えながらも自身の出来る事を精一杯口にするC. C.。

自分を売り込む様に、媚びる様に。

「。」

その光景にアルカとルルーシユは言葉を失い、ただただC. C. を見つめる事しか出来なかった。



「……ん、うん……。」

「……お嬢様あ……、起きて下さいよお……。」

2人の少女の声が、ベッドの中から漏れる。

「……まだ……、ねむ——。」

「わ、私がお主人様に、怒られちゃいますう……。」

黒の騎士団の拠点、蓬萊島のとある建物内の一室。

幹部の中でも極限られた者のみ立ち入る事を許されるアルカの部屋で。

2人の少女は文字通り絡み合っていた。

事の発端は早朝の事。

ルルーシユとアルカと共に召使い（自称）として暮らし始めたC・C・は、ルルーシユに言われてまだ寝ているであろうアルカを起こしに来た。

彼が言うには、嚮団で捕虜にした者達に会って欲しいのだという。

嚮団の一件からアルカは、ゼロの私室よりも自室で過ごす事が殆どになった為、こういった情報共有もC・C・頼みとなってしまうていた。

ルルーシユに頼まれて二つ返事で快諾したC・C・は、張り切って彼女の元へと向かった。

寝起きの悪いアルカを起こす為に。

しかし、記憶の無いC・C・にとって、アルカは予想以上の強敵であった事に間違いない。

アルカの部屋に入ったC・C・は、真っ先に彼女の眠るベッドに向かった。

布団に包まり、気持ちよさそうな表情で、枕に顔を埋めるアルカに、微笑ましそうな表情を浮かべるも、心を鬼にしてC・C・はアルカの身体をゆすった。

「お嬢様、起きて下さい」と。

C. C. による優しい振動に僅かに目を開けたアルカは、C. C. の方へ視線を向けた。

「んん、つと吐息混じりの寝起き声を口にしながら。

ここで無事に起きてくれる、とC. C. は思っていた。

しかし、現実はその甘くない。

布団の中から伸びてきた白い細腕は、C. C. の腕を掴み、ベッドへと引きずり込む。

「え？」と困惑の声を上げた頃には、彼女はベッドの中に居た。

理解が追い付いていないC. C. を叩みかけるように、アルカはC. C. の脚に、自身の脚を絡ませる。そして、仰向けに眠る彼女の首に両腕を伸ばし、その細い首に顔を摺り寄せた。

この行動にC. C. は混乱した、大いに混乱した。

なぜならこの童女、服を殆ど着ていなかったからだ。

着ているのは腰丈までのキャミソールたった一枚のみ。その下に下着はしておらず、下半身に関しては何も着ていない。

絡み取られた脚から直に伝わってくる年相応の高い体温。密着する腕から伝わる心臓の鼓動。時折口から漏れ出る吐息に、首筋に当たる穢れの無い柔らかな髪。

そして、何故かC. C. の情欲を刺激する媚薬の様な甘い匂い。

C・C・の行動を止めるには十分過ぎる程の要素。

次第に彼女のアルカへ呼びかける声は弱くなっていき、そして冒頭に至る。

「だ、誰か助けてえ……。」

情けない声を上げるC・C・とは裏腹に、気持ち良さそうに眠りこけるアルカ。そんな少女が完全に目を覚ましたのは、今から一時間後の事だった。



ゼロの私室へと繋がる廊下を、2人の少女は歩く。

「な、何であんな恰好で寝てるんですかあ……。」

そう呟くのは少し疲れた表情を浮かべたC・C・。

「それは、記憶を失う前の貴女が——。」

そんな彼女に抗議する様に、アルカは口を開く。

元々アルカとて、ちゃんと服を着て寝ていた人種だ。

仮にも皇族として昔は生活していたのだから当然と言える。

しかし、その常識は彼女にとって壊された。

そう、他でも無いC・C・によって。

始まりは何だったか、とアルカは思い返す。

そう、始まりは心臓まで凍ってしまいそうな極寒の夜の事。

手元のモノだけでは寒さを凌げそうに無かった彼女達は、お互いの体温で身体を温めた。

その日を境に、人の体温の心地よさと、C・C・に守られている様な安心感を知ったアルカは、度々C・C・に求める様になり、C・C・はC・C・で新たな趣味嗜好に芽生えた。

後は語らなくとも想像出来るだろう。

兎に角、色々な心地良さを学んだ二人は、温度差はある物の、段々とそれが癖になつていき――。

「—それで私は薄着で寝るようになったの。だって、C. C. っで着こんでると無理矢理脱がして——。」

「ええ！ 絶対そんなのお嬢様の作り話です!! わ、私がそんな、お嬢様みたいな幼い子どもに手を出す訳!!」

「……はあ。もう、分かった分かった。そういう事にしといてあげますよーっだ。」

一瞬、隣に居るC. C. も見逃す程の一瞬だけ、表情を曇らせたアルカだが、極めて何時も通りに。

いや、何時もよりも明るく振る舞う。

後ろであーだこーだと抗議するC. C. を無視して、ゼロルルーシユの私室への扉に手を掛け、部屋に入る。

「やっと起きたか。」

「おはようございます、アルカ様。」

部屋に入ったアルカを迎えたのは、ゼロの衣装で仮面のみを外したルルーシユと、礼儀正しく深々と頭を下げるジェレミア。

「是非、私自身がアルカ様の元へと向かい、朝の支度のお手伝いをしたかったのですが、ルルーシユ様と咲世子に止められまして——。」

自身が用意したであろう紅茶を注ぎ、ティーカップをアルカの元へと運びながらジェレミアは少し残念そうに語る。

「ああ、顔に枕を投げられるぞ、と言って止めた。」

「あれは兄上のタイミングが悪いんでしょ。…まあ、来なくて正解だったと思うけど。」

紅茶を一口飲み、美味しいと小さく呟くと、アルカは雑談を程々に、本題を切り出した。

「それで、捕虜というのは？」

「嚮団での一件の時に確保した奴らだ。1人はジェレミアが。もう1人は…、自分から？」

ここ数日、アルカはゼロの私室に居る時間が限りなく減っただけでは無く、黒の騎士団の活動にすら顔を出していなかった。

団員達の間では、誘拐された事に対するトラウマから克服できていないと噂されているらしい。

最も事実を知るルルーシュは参加を強要することは無かった。

そんな彼女が再び顔を出し始めたのは、記憶を失ったC・C・Cがこの環境に慣れ始めた頃のこと。

彼女からの連絡が来たときは、アルカもアルカなりに前に進もうとしているのだろう、とルルーシュは嬉しく思った。

閑話休題

「自分から?」

ルルーシュの不思議なもの言いに、疑問を浮かべる。

「ああ…、木下が言うには自ら捕虜にしてくれと言ってきたらしい。にわかには信じが

たいが…。」

木下、というのは零番隊の副隊長を務める男の事。

平凡でありながらも、皆に分け隔てなく優しく、誠実な彼が言うのなら真実なのだろうが――。

「ギアスは？」

「一人目は効かない。」

「――ああ、コーネリアか。」

ルルーシユの命令が絶対であるジェレミアがそれを曲げてまで捕虜として確保する程の存在。

それに加えてルルーシユのギアスが効かない存在。
自ずと候補は絞り込める。

「それで、もう一人は？」

アルカの言葉に、ルルーシユは理解が追いつかない生き物を前にしたような表情を浮かべて、僅かに視線を逸らす。

その表情は、時折枢木スザクに向けていた表情と似ている、とアルカは考えた。

「掛けようとしたんだが―、その。掛けようとする直前で目を閉じるんだよ。そして一言言うんだ、アルカを呼んで来いと。その繰り返しさ。」

「……、無理矢理は？」

「出来たらやってるさ……。」

「ですよ。」

誰か大体分かったかも、とため息を吐きながらアルカは腰をあげる。

「私一人で会うよ。その方が良い。」

「良いのか？」

まあ……、と髪の毛をクルクルと遊びながら、少し恥ずかしそうに、彼女は呟いた。

「母親の様なものだし——」。

番外編：紅月カレンの受難

エリアー トウキョウ租界 ブリタニア政庁

「ふああ……。」

赤髪の少女は大きく欠伸をし、その瞳に生理的な水を貯める。

「ナナリーが来ないと暇ねえ。」

そう呟くのは黒の騎士団切つてのエースパイロットであり、ブリタニア人のハーフである紅月カレン。

彼女は捕虜という立場を忘れて、呑気に再び口を大きく開けた。

中華連邦での作戦の最中。カレンは星刻に敗れ、その身をブリタニアへと引き渡された。

その時のスザクの目は酷く冷たいもので、元学友への情けなど微塵も持っていない様子であった。

その時、彼女は覚悟したのだ。

拷問、脅迫、暴力、罵倒、等の人間の尊厳など無視した行為が身に降りかかるだろうと。

いや、それで終わるならまだ幸運だ。

処刑される可能性すら高い、と。

しかし、実際の彼女に対する想像は大きく裏切られた。

ある人物の口添えで。

ブリタニア貴族に良く見られる装飾が施された煌びやかなドレスを着させられ。

跳ねていた髪は整えられ。

食事は至って普通（シユタツトフェルト家基準）のものが用意され。

拷問も無ければ尋問すら無い。

何も起きない毎日を送っていく内に、カレンが抱いていた警戒心は薄れて行き、遂には、「暇……」と思わず呟いてしまうほどになった。

「カレンさん。」

その時、カレンの耳に1人の少女の声が届く。

「ナナリー。」

現れたのはエリアー1の現総督であり、カレンの良く知る2人の肉親で、カレンの元学友である、ナナリー。

本名、ナナリー・ヴィ・ブリタニア。

捕虜であるカレンの身を案じ、今の待遇を作った張本人。

「毎日、ここに通わなくても良いのよ？ 総督って大変なんでしょう？」

車椅子を走らせ、近づいてくるナナリーに、カレンは少し眉を下げて呟く。

「いえ、カレンさんとお話したいですから。」

ふわりと花が咲く様な笑みを浮かべるナナリー。

その笑顔が、彼女も良く知る人物と重なって見えた。

「そういう所はアルカに似ているわねえ。」

「ふふっ、そうですか？ 本当だったら嬉しいです。」

独房内で退屈な毎日を過ごすカレンにとって、ナナリーの訪問は有意義なものだった。

そして、それはナナリーも。

「あの子もナナリーに似ているとか、ルルーシュに似てるとか言われると、そうやって嬉しそうに笑ってたわよ。普段は素直じゃ無いのに。」

ナナリーはルルーシュとアルカの行方を知らない。

何も聞かされていないのだ。皇帝からも、総督補佐の任に付いている枢木スザクからも。

言える筈も無い。

自身の兄がゼロとして皇族を殺し回っており、妹もそれに加担していたなどと。

結局、皇帝は元より、スザクも彼女に嘘を吐くことしか出来なかった。

そしてその嘘はどんどんと積み重なり、彼に対する不信感へと変わっていく。

次第にナナリーはスザクに2人の話をしなくなつた。

そこに現れたのが、2人の事を良く知る人物、カレン。

ナナリーは純粋に喜びを覚えた。

友人であるカレンがテロリスト、というのは悲しい事実ではあつたが、それに超える喜びが、彼女の胸中に確かにあつた。

「素直じゃない、っていうのもアルカの魅力ですよ。」

「ハイハイ。シスコン発言は兄だけで良いですよー。」

こうして自然と今日の話題はアルカのものへと変わっていった。

幼少期、良く一人で泣いていた事。

再会した時の反応。

果てには一緒に寝た時の話まで。

「それで、寝惚けているアルカだったら本当に可愛いんです。猫みたいに擦り寄ってきて、

時折声を漏らして。」

段々とナナリーの声音が高くなっていく。

朗らかな笑みを浮かべながら、自身の妹の寝起きの様子を事細かく説明するナナリー。

「……可愛い……？ 質が悪いの間違いじゃなくて……？」

「……？ そうですか？ 私は可愛いと思いますけど——。」

「ああ、まあ……、姉であるアンタからしたらそう見えるかもしれないけど——。」

カレンは思い出す。

あれはそう、2人つきりで過ごしたシユタットフェルト邸での出来事。



ブラックリベリオンの騒動も落ち着き始めたトウキョウ租界。

その中心街から少し離れたシユタットフェルト邸。

「本当に私が行かなきゃダメか……？」

スーツを身に纏い、黒髪のウィッグを被ったC・Cは不服そうに口を開く。

「文句を言わない！ 向こうとの面識あるのはアンタだけなんだから。」

「それはそうだが……。」

「C・C……。私も我慢するから、お願い。」

「んう……。」

今のシユタットフェルト邸に3人以外の人間は居ない。

亭主が居ない事を良い事に好き放題やってきたカレンの継母は、使用人を連れて本国に飛び帰り、カレンが戻ってきた時はもぬけの殻だった。

そこに目を付けたのがアルカ。

追われる立場である自分達の隠れ家として使いたい、と彼女は半ば申し訳無さそうに言った。

貴族であるシユタットフェルト邸ならば、ブリタニア軍の手も伸びてこないだろう、

と。

「そうして今の経緯に至る。」

「今後の活動にも関わる事なのよ？　何がそんなに不安なのよ？」

今、彼女達は中華連邦との協力関係を結ぶ為に動いている。

その為の使者として白羽の矢が立ったのが、一度中華連邦との取引を行ったC・Cだ。

つい先日までは、C・Cも精力的に動いていた。

しかし、彼女は今になって渋っている。

1日、アルカの元を離れなければならない、という事だけで。

「……アルカの貞操。」

「アンタが言うか。」

たつぷりと時間を貯め、極真面目な顔で、C・Cはとんでもない事を口走る。

思わず、カレンは食い気味にツッコんだ。

何故、今更この女がアルカの貞操を気にする、と。不思議でならなかった。

C. C. が時々アルカに手を出していることを、カレンは知っている。

同じ屋根の下で過ごしているのだ。余程の鈍感では無い限り、誰でも気付く事であろう。

「——わ、私とカレンは何も無いよ！」

C. C. の言葉に動揺しながらも、アルカはC. C. を見上げて訴える。

「ああ、分かっているさ。信用出来無いのは——。」

ジトつとC. C. はカレンに目を向ける。

「わ、私？」

「だってそうだろう。お前は私が居ない間に、アルカと共に食卓を囲み、風呂に入り、床に就くんだろう？」

「それはそうだけど。別に初めての事じゃ無いし、心配するような事は——。」

ヤレヤレと呆れた顔をしてC・C・は首を振る。

「それは黒の騎士団が結成する前の話だろうか？　今と前じゃ、お前に対するアルカの信頼度が段違いだ。」

「だからなによ。」

自身の口をカレンの耳に寄せ、アルカに聞こえない位の小さな声で呟く。

「心を許した時のあいつを舐めない方が良いでしょう。」

・
・
・

結局、C・C・は渋々と言った様子で出掛けて行った。

「やっと行ったわね、あいつ…。」

「……なんか疲れた。」

2人は肩を落としながら、溜息を吐き、お互いの視線を交差させる。

「し、C. C. が変な事言ってたけど、気にしない方向で——。1日、よろしくカレン。」
「そ、そうね……。——かしこまりました。お姫様。」



追われている身である彼女達は、迂闊に外に出る事は出来ない。

ただ待っているだけの2人は、暇を持て余し、様々な事をして時間を潰した。

映画を観たり。本を読んだり。チェスをしたり。ストレッチをしたり。料理をした
り。

そうして過ごしていくうちにカレンは気付いた。

(この子、距離近くない?)

以前にアルカが遊びに来た時も、こうして過ごしたことがあったが、ある程度、パーソナルスペースを保っていた。

しかし、今はどうだ。

映画を観れば、身体を寄せて、その頭をカレンの肩に乗せる。

本を読めば、カレンの膝を枕代わりにして寝転びながら。

その他にも色々。

隙あらば身体を猫の様に近くに寄せる。

体温が伝わり、彼女の呼吸が聞こえる程に。

そんな彼女をカレンが見つめると、アルカは決まって笑みを浮かべ、呟く。

「カレン。」と。

一度気づけば、意識してしまうというのが人間の性。

カレンは自然とアルカの一挙手一投足を視線で追う様になっていった。

そしてそれはこの風呂場でも。

「カレンく、シャンプー。」

「……ハイハイ。」

アルカに言われた通り、カレンはシャンプーを手に取り、彼女に渡す。

「ありがとう」と呟きながら、アルカの白い細腕がシャンプーへと伸びる。

（うわ、腕細。）

一体その腕の何処にナイトメアを動かし、大人を組み伏せる力が有るのか。

本人は勉強したから、と言っていたが、全く説得力が無い。

そんな事を考えながら、ボーっとアルカの身体を眺めるカレン。

細い体躯、慎ましい胸、小ぶりのお尻、それらを包む瑞々しい白い肌。

女性らしい身体、とは言えないが、彼女の在り方は芸術作品の様に神聖さを感じる。

何者にも穢せない、無垢な——。

（つて、私、何を考えているのよ！）

ぶんぶん頭を振って、その考えを吹き飛ばす。

「？」

そんなカレンの気持ちを知らず、アルカは小さく首を傾げた。

・ ・ ・

「何か、疲れたな。」

カレンは真つ暗な部屋でベッドに仰向けになりながら、小さく呟く。

「アルカに1日中振り回されっぱなしだった…。」

彼女にそんな気が無いっていうのが質が悪い。

このままでは寝れない。と判断したカレンは、アルカを別室に通し、寝かしつけた。彼女の顔には抗議の色が浮かんでいたが、カレンは自身の名誉のためにそれを無視した。

「これでやっと……。」

眠りに付ける。つとカレンが目を閉じたその時。

カレンの部屋の扉が静かに開いた。

「……………んう。」

ヒタヒタと、裸足の足が近づく音と、少女の眠そうな声がかレンの耳に入る。

「……………アルカ？」

「……………。」

カレンの呼びかけに答える事無く、アルカはベッドに腰掛け、当たり前前の様に布団に

入った。

「え、ちよつ。」

するりと植物のツルの様にアルカの脚が絡みつく。

カレンの二の腕に慎ましい感触があつたと思えば、次に来るのは手の先の柔らかい感覚。

「え、嘘。」

手の先の柔らかさ。

それは丁度アルカのお腹の部分。

いや、正確にはそのもう少し下。

——女の子の、大事なところ。

密着する部分から、高い体温が伝わってくる。

彼女の吐息が、心臓の鼓動が、あらゆるものが直接伝わってくる。

(何で、服を着てないのよ?!?!?!?!?)

カレンは叫んだ、心の中で。

私が男であれば真っ先に手を出している。それくらいの甘美な誘惑が、今の彼女にはある。

ああ、質の悪い子。

「……………うん…、ふへへへ……………」

混乱している彼女を叩き込む様に、寝惚けているアルカはその拘束を強める。

これでもか、という位に密着し、嬉しそうに口角を上げながら、カレンの肩に頬を摺り寄せる。

彼女の髪が揺れる度に尾行を刺激する媚薬の様な甘い匂い。

カレンの理性を繋ぎとめていた最後の一本の線が、切れた気がした。

「……………っ！ ああ、もう！」

カレンは大きく声を上げ、アルカの拘束を振りほどき、彼女を見下ろす形を取る。傍から見れば、カレンがアルカをベッドに押し倒しているという構図だ。

「——アンタが。」

未だに寝ているアルカを見つめながら、カレンは小さく口を開いた。

「アンタが、悪いんだからね。」

アルカの唇に、親指を這わせる。

僅かに上下する胸を視姦する。

穢したい。

神聖な雰囲気を纏う彼女を。

歪ませたい。

その幼さの中にある綺麗な顔を。

汚ししたい。

その陶器の様な白い肌を、自らの欲で。

カレンの中に今まで抱いたことの無い気持ち芽生えていく。

「文句、言わないでよね。」

何かに当てられたようにカレンは、本能の感じるまま、アルカの口に自身の口を寄せ
る。

そして――。

「おい、戻ったぞ。案外星刻という男、話が出来る奴だな。今度はお前達を交えて――
」。

カレンの部屋に入ってきたアルカは、どうやら扉を閉めなかったらしい。

予定よりも早く戻ってきたC・Cは、部屋の入口の壁に寄り掛かり、カレンとアル
カを交互に見ていた。

裸で寝ているアルカ（12歳）を押し倒し、頬を赤らめて迫るカレン（18歳。）

「——この、ロリコンめ。」

C・C・に返す言葉も無く、カレンはただただ項垂れた。

・ ・ ・

結局、この後、カレンは冷静さを取り戻し、アルカはC・C・に連れて行かれた。そして次の日。

腰を摩りながら気怠そうにカレンの元へと現れたアルカに、彼女は一言。

「——アンタ、質悪いわね…。」

「何がさ!?!」



「いや、アルカは可愛いとかそういう次元じゃない。あれは兵器よ兵器。」

「カレンさんにも分かりますか!?! あの少し小生意気なところがもう微笑ましくて——
——!」

2人の会話は続く。

致命的なズレを生んだまま。

カレンとナナリーの対談は、総督補佐であるローマイヤが来るまで続いた。

そして——。

「くしゅんっ」

「風邪か?」

小さくくしやみをしたアルカに、ルルーシユは苦笑を浮かべる。

「…なんか、不名誉な褒め言葉と、名誉ある褒め言葉が同時に来た気がする。」

「なんだ、それ。」

良く分からない事を言い始めた妹に、ルルーシユは首を傾げた。

TURN 2 2 迷いの渦中

「やっと来たか。待ちくたびれたぞ。」

斑鳩にある数ある部屋の中でも、一際狭い部屋の中央で、銀髪を携えた女性は笑みを浮かべた。

捕虜、という言葉を表す様に、女性の両手は拘束されていた。にも関わらず、女性は勝気な笑みを崩す様子は無い。

「……本当に……。」

「んー？ そんなに意外か？」

「貴女があそこ……、嚮団に居るとは思っていませんでしたから。」

「なんだ、そつちか。捕虜になっている事には驚かないんだな。」

「コーネリアが私達の捕虜になってる、という情報があれば察しは付きます。」

「まあ、そうだな。違いはない。」

アルカは余裕綽々と言った様子の彼女に、溜息を吐きながら、部屋に用意されていた椅子に腰かける。

「それで、どうして嚮団に？ ノネットさん。」

「ギアスの事を調べようと思つてなあ。殿下と行動を共にしてたんだ。そして、嚮団と名乗る胡散臭い連中の尻尾を掴んだ。」

「それで嚮団内部に潜入し、捕まつたと。」

「まさか殺しても死なない人間が居るなんて想像もしなかつたからな。不意を突かれたんだよ。」

情けない話だ。と自信を嘲笑するノネットを、アルカはただ黙つて見つめる。

「それでどうやって抜け出そうかと考えている時、お前達黒の騎士団が攻めてきた。そのどきどきに紛れて脱出した、という訳だ。」

「自分から捕虜になった、とそう聞いていますけど？」

「私は私で調べたいことがあつてな。殿下と別行動をしていたんだよ。そうしたら殿下がジェレミアに連れて行かれていないか。もう卒倒したよ。」

それで彼女は自ら黒の騎士団に捕まった。

これが今の状況に至る事のあらましの様だ。

「どうしてジェレミアがこっちの仲間になったと知っているのです？ 私もついこの間知ったのに。」

「そんなに不思議か？ あいつの皇族に対する忠義の厚さは良く知っている。ゼロの正体が彼なら、そっちに付くのは容易に想像出来るが。」

「……人を良く見てるんですね。」

「まあ、これでも元ラウンズだからな。強いだけでは務まらないよ。」

はっはっは、とノネットは豪快に笑う。

「嚮団での調べ事、とは？」

「なあに、大したことじゃ無い。誰かさんについて少し、な。」

「……………どうやら、実りのある話では無さそうですね。」

アルカは溜息を吐いて椅子から立ち上がる。

部屋の扉へと手を伸ばし、ノネットに振り向く事も無く、淡々と口を開く。

「大人しくしていれば殺される事は無いと思います。大人しくしててください。」

「なんだ、もう行くのか？」

「私達は今貴女に構っている余裕も暇も無いんです。…もうすぐそこまで決戦は迫っているの、だから——。」

これ以上話したくない。そんな態度が見え見えのアルカは、淡々と言葉を紡ぎ、足早に部屋を去ろうとする。

「私達は？ 私は、だろ。」

部屋を出ようと扉に手を掛けたその時、ノネットの言葉にアルカの動きはピタリと止まった。

「……………、どういう意味、ですか。」

忌々し気に言葉を紡ぎながら、ノネットの方へと振り返る。

「そのままの意味だ。お前、無理しているだろ。」

「……………っ。」

「肯定、と受け取っていいか？」

質問には一切答えない者の、彼女は齒を強く食いしばっており、何かに耐えている様に見える。

そんな様子を見て、ノネットは「そうか」と小さく呟いた。

「いや、何。お前が分かりやすいという訳じゃ無い。お前に似てる目をしてる奴を知っているんだ。」

「……………私に、似てる？」

「ああ。そいつも不器用だな。周りの誰にも助けを求めず、一人で抱え込んでいる。元来の性格の影響か、育った環境か、義務感なのかは分からないがな。」

不機嫌そうな表情を浮かべつつも、アルカが口を挟む様子は無い。

「ブラックリベリオンでお前に会った時、私は安心した。お前の目が真っ直ぐに、前を向いていたから。ああ、器用に生きていけてるんだなと、あの時の私はお前に対してそう思った。しかし——。」

ノネットの何時に無い鋭い視線が、アルカを射抜く。

「今のお前はどうか。あの時とは別人の様だぞ。」

「——それはそうでしょう……。」

たっぷりと時間を貯めて、小さくアルカは呟く。

「……あの時の私は、忘れていたんだから……。嚮団で何があったか、私がどんな気持ちを抱いたか、何を願ったか——！」

小さい手を握りしめて、伏せがちだった瞳を真っ直ぐにノネットに向ける。

「騎士団が、兄上が、貴女が！ 見てきた私は全て偽物のなの！ 皆が頼ってくれ私
も、兄上が褒めてくれる私も、貴女が安心を覚えたアルカは、偽りの存在に過ぎない…。」

その瞳に涙を浮かべて、少女は吐露する。

「唯一、本当の私を知る人も、居なくなってしまった…。だから——！」
「何が偽物だ、馬鹿馬鹿しい！」

真っ直ぐアルカの瞳を見つめ、ノネットは一喝する。

「っ！ 何も知らなくせに…！」

「ああ、知らんさ。お前が話さないのだから、知るわけがないだろう。だが、知らない私
でも分かることがある。」

彼女は続ける。アルカが口を挟む隙を与える事無く。

「お前は言ったな、今までの自分は偽物だと。しかし、それは勘違いも甚だしい。」
「…何を……。」

「記憶を失つていようと無かろうと、お前はお前だ。何故か分かるか？　そこにお前の意志があるからだ。自らの考えで、想いで行動を選択出来る。それは紛れも無く、本物、だろう。」

「…でも、そこに願いの原点があると無いじゃ話が——。」

「そう答えを急ぐな。良いか、選択するのは過去の自分では無く、今の自分だ。過去に起きた事はもうどうする事も出来ん。それなら、その過去に起きたことを踏まえて、今後どうするかを考えるべきでは無いか？」

「私が、考えていないとでも…?」

「少なくとも、今後の事など考えていないだろう。今のお前は、過去の出来事にばかりに目を向けて、自分自身を縛り付けている様に見える。」

鋭い視線を向けていたノネットが、再び目元を柔らかくして語り掛ける。

「自分一人で全てを決める必要などない。お前はまだ、子どもなのだから。一度、落ち着いて周りを良く見てみる。本当に、お前の周りは敵しかいないのか？」

「……………」

「使えるものは何でも使え。そして勝ち取れ。少なくとも、私が惚れ込んだアルカはそういう人間だ。」

「……………」

アルカはノネットの言葉に返答する事無く、部屋を後にした。

◇◇◇

ブリタニアの皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアが行方不明。

シユナイゼルを中心とした軍の動きから、兄上はそう結論付けた。

黄昏の間での出来事の時、どうやら一人だけ取り残された様だ。

「……ん……………」

「お、お嬢様……………」

ゼロの私室にあるソファで、2人の少女が身体を横にしていた。

戸惑うC・C・を気にした様子を見せる事無く、アルカは隙間が無いくらい身体を寄せる。

今、この場に兄上は居ない。

連合国家「超合衆国」の建国に向けて会議に参加している。

日本、中華連邦を中心とするアジア諸国とE・Uの一部を一纏めにする事で、規模だけで言えばブリタニアに匹敵するほどの大勢力が誕生する。

これが認められれば、暗れて黒の騎士団はテロリスト、としてでは無く、一つ国として、大義名分を掲げてブリタニアと戦争をする事が出来る。

超合衆国が誕生し、ブリタニアとの戦争に勝つことが出来れば、黒の騎士団のみならず兄上の大望も叶えられ、姉上を取り戻す事が出来る。

しかし、それを意味するのは皇帝を殺すという事。
すなわち、彼女の願いは――。

どうして、あの時兄上の手を取ったのだろう。

願いを叶えるだけなら、無視してC・Cのコードを私に移せば良かったのに。

「……分からなくなっちゃったな。」

ぼそり、と小さく呟き、C. C. の胸へと顔を埋める。

「何時までそうしているつもりだ？ C. C. が困っているぞ。」

ふと、新たな声加わる。

少し驚いた様子のアルカは、目線だけを声の主に向ける。

そこには呆れた笑みを浮かべながら、アルカとC. C. を見下ろすピザを持ったルーシユが居た。

「……、いつからそこに？」

「ついさつき。気づかなかったのか？」

珍しいな、と言いながら手に持つピザを机に置き、2人の向かい側に座る。

「ノネット・エニアグラムに会ってからずっとその調子だが…、何か言われたのか？」

「……別に、将来の事について考え中。」

「将来、か。先の事を考えてくれてるだけで俺は嬉しいよ。何せ、あの時のアルカは――

「――」

「……まだ、完全に諦めた訳じゃ無いから。皇帝の言葉よりも、兄上の言葉の方が良く聞こえた、ただそれだけ。兄上が少しでも道を違えたら、その時は――」

「……ふつ、今はそれだけで十分さ。お前がこっちに居るだけで、な。」

「…………」

自信があるのか、至つて余裕の表情を浮かべてルルーシユは机のピザへと手を伸ばす。

「あの……、ご主人様。この食べ物は……？」

アルカに拘束されたままのC・Cは、目の前のピザに興味を示す。

「ん、ああ。ピザだよ。お前が好きなのやつだ。」

「……ピザ……」

食べてみたい。そんな気持ちが見え見えのC・Cにルルーシユは笑みを浮かべて、

「解放してやれ」と呟く。

渋々と言った様子ではあったが、アルカは言葉に従い、C・C・に回していた腕を解いた。

「美味しいか？」

解放されたC・C・は、すぐに身体を起こしてピザを頬張る。

「~~~~!! すぐく、すぐく!!」

口いっぱいピザを蓄え、幼い笑顔を浮かべるC・C・。

その表情は幸せに満ちている。

「……………」

それを見たアルカはピザを食べるのを止めて、C・C・の顔をじつと見つめる。

「……………？ お嬢様？ 私に何か……………？」

「……………別に。それより、超合衆国の方は？」

C. C. へ向けていた視線を外し、話題を変える。

「ん、ああ。各国からの承認は得られた。後は……………」

「世界にアピールするだけ、か。」

さてと、どうするべきか。

アルカの頭にはこの後に控える戦争の事よりも、別の事で一杯だった。

C. C. という願いを共にする人を失い、独りになってしまった自分の身の振り方を……………。



「はあ？ ランスロットにフレイヤを？」

ナイトオブシックス、枢木スザク直属の研究チーム「キヤメロット」に所属する軍人。セシル・クルーミーは驚きの声を上げた。

「いやその、本当は枢木卿には紅蓮に乗ってもらったつもりだったのですが……。」

キヤメロットの設立と同時に、別の研究チームから移籍してきた少女、マリーカ・ソレイシイは頬を掻きながら苦笑を浮かべる。

「僕が!？」

スザクの視線の先には幾度と無く立ち塞がった真紅の機体。

その風貌は捕縛した時と比べて大きく変わっていた。特に目が引くのは、その背中にある飛翔滑走翼に代わる新しい翼だろう。

「ラクシャータのマシンだから弄りやすくって。ねえ、セシル君。」

「ご、ごめんなさいね。私もついついノつちやって…。気づいたら趣味の世界に……。」

「それで出来上がったのが誰にも乗りこなせないモンスターマシン。全く、2人の研究

バカつぶりには呆れてしまいますよ…。」

ロイドとセシルの言い分を聞いて、マリーカはやれやれと横で首を振りながら口を開く。

「そういう君だって、ノリノリだったじゃないの。ほら、エナジーウイングの設計の時——」。

「あああああ、あ、あれは！　新しい世代の誕生と言う歴史的瞬間に立ち会える事に感動したと言いますか——」。

君も研究バカの一員では。とスザクは思ったが、口には出さなかった。

「まあ、兎に角、紅蓮を乗りこなす為には流石の君でも練習が必要だ。でも、僕らにはそんな時間は残されていない。そこでニーナ君が…。」

ロイドの後ろで控えていたニーナがスザクに歩み寄る。

「今の黒の騎士団には強大な戦力が揃ってきているでしょう？ それこそ、ラウンズと渡り合える位に。」

エリアーに集結した戦力は強大だ。

在住軍に加えて、ガレスを始めとする本国の新型。

そして各国に散らばっていたナイトオブラウンズ達。

黒の騎士団が勝てる要素はほぼ零に等しい、が相手はゼロだ。その万が一を何度も覆ってきた男。

そんな万が一の時に、彼女はスザクに判断を委ねたい様だ。

「フレイヤは貴方を守る為でもあるのよ。一次制圧圏内に含まれた物質は、フレイヤのコラプス効果によって完全に消滅するから——。」

「……僕に、背負えと……。」

人の命も、人の営みも、簡単に消滅させる最悪の兵器。

その兵器は、一人の少年の心を壊すには十分すぎるものであった。

しかし、それはもう少し後の話。

TURN 23 開戦直前

超合衆国。

現代における平和の象徴であるこの連合体は、日本と中華連邦を中心に発足した。

まだブリタニア帝国が超大国として世界を支配していた頃。

それに対抗する為にゼロが身を扮して反ブリタニアの意志を纏め上げた。

今更説明するまでも無いが、超合衆国への参加の条件は武力を永久に放棄する事。

それはブリタニアが支配者として健在だった当時でも変わらない。

そこで武力に対する抵抗の象徴として、各国の怒りの代弁者として白羽の矢が立ったのが黒の騎士団。

合衆国に所属する国の剣、或いは盾として。

黒の騎士団は傭兵という立ち位置で、超合衆国と契約する事となる。

そんな彼らの超合衆国での初仕事は、あの超広域破壊兵器『フレイヤ』が初めて実戦導入された第二次トウキョウ決戦。

日本国代表『皇神楽耶』の要請により、黒の騎士団は初めて、世界に認められた戦力として振るう事となる。

— A・A 著書 「帝国の崩壊」 第8章より



全ては順調だった。

『黒の騎士団の派遣を要請したいと考えますが、賛成の方はご起立を。』

神楽耶の言葉に一齐に席から腰を上げる各国の重鎮達。

『賛成多数。よって、超合衆国決議第壱號として、黒の騎士団に日本解放を要請します。』

初めて手に入れた大義名分。

ブリタニアにも引けを取らない国力。

今それが、一人の反逆者の手の中に。

『良いでしょう。——超合衆国決議第壹號…。進軍目標は——、日本!!』

全ての条件が揃った。

何の憂いも無く、戦いに望めると、その時のルルーシュは考えていた。しかし。

『ゼロよ。』

表舞台から消えた筈の、霸王がまた立ち塞がる。

『ゼロよ、それで儂を出し抜いたつもりか？　だが、悪くない。』

倒した、と思っていた敵の再来に、ゼロルルーシュは一步、また一步と威圧される様
に後退する。

『3局の一つ、E・U・は既に死に体。つまり貴様の作った小賢しい憲章が、世界をブリ
タニアとそうでない者に色分けする。単純それゆえに明快。』

この男の目的が、アルカとC・Cである事は既に分かっている。それを意味するのは――。

『この戦いを制した側が、世界を手に入れるという事。良いだろう、ゼロ。挑んでくるが良い。』

全てを得るか、全てを失うか。戦いとは元来そういうモノだ!』

皇帝にとって、ナナリーとルルーシユは何の価値も無いということ。

『オール・ハイル・ブリタニア!!!!』

彼の声に負けじと、黒の騎士団の面々からも日本万歳と声上がる。

普段なら不敵に微笑んでいたであろう。

しかし、今のルルーシユには――。

『皇帝が生きていた……。』

「……………」

「ご主人様！」

部屋に入るや否や、力無く仮面を外し、揺れる瞳を下に向けて考え込むルルーシユ。
そんなルルーシユの様子にアルカは一瞥、C・Cは嬉しそうに大皿を持って彼に駆け寄る。

「いけない、すぐにナナリーを……」

ルルーシユがゼロだと知られた以上、ナナリーは皇帝にとつての体の良い人質ではない。彼女が皇帝の膝元にあるだけで、ルルーシユの行動は否応なしに制限されてしま
う。

ルルーシユは思考を巡らせる。

捕虜であるコーネリアやノネットを使ってしまおうか。ロロやジェレミアを使い、暗殺を試みるか。ゼロの世界をルルーシユだと公表してしまおうか。

思いつく限りの策を列挙するが、どれも状況を覆す要因にはなりえない。

そもそも、ナナリーを助けた所で、今の超合衆国に迎え入れる用意が無い。

文字通り八方塞がりだった。

「……………」

「あのご主人様、これ……………」

考え込むルルーシユの元へ駆け寄ったC・C。が、おずおずと一切れのピザが乗った大皿を差し出す。

「……………」

「朝ごはん、取られていない様でしたから…。」

「……………」

「あの、ご主人様……………?」

「五月蠅い!!!!」

反応の無いルルーシユを心配してか、彼に声を掛け続けたC・C。だが、琴線に触れたのであろう。

彼女の気遣いを一蹴する様に、ルルーシユは声を荒げて差し出された皿を振り払う――
——ことは無かった。

「――！」

「いったあ……。」

ルルーシユからすれば、差し出された皿を払ったつもりだったであろう。

しかし、実際に手を振り抜いた後、眼前にあつたのは、頬を赤くしたアルカの姿。

——妹を殴った。

その事実ルルーシユは先程の焦りも忘れ、呆然とする。

「ほら、ご主人様は虫の居所が悪い様だから、下がってなさい。」

「は、はい……。」

叩かれた頬を擦りながら、自身の後ろに居るC・C・に優しく語り掛ける。
素直に頷きを返したC・C・は、足早にこの場を離れ、ソファの後ろへと隠れる。

「——アルカ。」

「……はあ。動揺するのは分かるけど、C・C・に当たるのだけは止めて。」

「……済まない。今すぐ手当を……。いや、冷やすのが先か……。」

冷凍庫から氷を取り出そうと、部屋に備え付けられた冷蔵庫に向かうルルーシユに、アルカは呆れた様に口を開いた。

「冷やす必要があるのは兄上もじゃない？」

「……………分かってる。」

小さく答え、ルルーシユは氷をアイスバックに詰め、アルカに渡す。

皮肉な笑みを浮かべながら、それを受け取り、「ありがと」と彼女は短く答えた。

「皇帝があの場から戻ってきたんだ。」

「知ってる。中継、見てたから。」

ルルーシュは項垂れながら、アルカは渡された氷を当てながら、お互いソファに腰掛ける。

「このままだとナナリーの身が……。」

「……………そう、ね。」

「人質を通じる相手では無い。しかし、暗殺しようにもギアスは効かない。いや、それどころか不老不死の存在だ。どうしたら——。」

「……………私もこの前言われたばかりなんだけど、もつと視野を広げてみたら?」
「……………何?」

まさかこの前自分が言われたアドバイスを、そのまま人にする事になるとは思わなかった。とアルカはぼんやりと思った。

(まだ自分自身の答えも出てないというのに。でも…、嗚呼、なるほど。)

目を細めながらアルカはルルーシユを見つめる。

(傍から見たら、私もこんな感じだったのだろうか。)

余裕の無い人間、というのは実に分かりやすいらしい。

兄上は姉上の身の安全の不安から。私は——、まあ今は良いだろう。

「手数が足りなければ、増やせばいい。至極普通の事ですよ？」



「……………さて。」

瞑っていた目を開き、辺りを見渡す。

目に映るのは雲一つも無い青空。そして無数の本棚と絵の入っていない額縁。

「……………いやいや、」さて、「じゃないよー！」

自分の家の様にソファに寝そべっていた黒髪の少女は、突然の来訪者に思わず、身体を起こして手をパタパタと振りながら声を上げる。

「そんな近所のコンビニに行く感覚で、ここに来る人なんて聞いた事無いよ!!」

「過去の存在の割には、随分と現代的な表現するのね。」

「……伊達に長く生きていない、という訳さ。」

O・O・Oの言葉を聞いているのか聞いていないのか。「ふーん」と返事をしながら本棚に置いてあった本を手に取り、先程まで彼女が寝そべっていた座る。

「ソファなんて、前回来た時には無かったけど? 他人の領域で随分リラックスしてるじゃない。」

「ここは君の世界であると同時に、私の世界でもあるんだよ。頭で思い浮かべたものは何でも手に入る。そういう場所さ、ここは。」

「……嘘吐きね。何でもは無理でしょう。」

「——ハハっ! 君のお兄さんには敵わないさ!! それに嘘吐きという表現は少し違

う。演出家と言つて欲しいな。」

ペラペラと捲つていた本をパタンと閉じ、呆れた顔でアルカはO. O. に視線を送る。

「大した役者になれるんじゃない？ 私の前以外だつたら。」

「手厳しいな。——何時から氣付いていた？」

「今さつき。このソファ、私が本国に居た頃、宮殿で使つてたものだから。」

懐かしむ様にソファの上に手を滑らせる。

「大方、ここに保管されているモノ、つまりは私の記憶にあるものを具現化出来る、つていうところでしょう？」

「……なんとも揶揄い甲斐の無い……。まっ！ そんな君も可愛いけどね！」

「……………来なきやよかつたな。」

鬱陶しい、と言わんばかりの態度で距離を取るアルカに対して、気にすることなく迫

るO.O。

小さなフィールドで暫しの間、二人による攻防が繰り広げられた。



「……無駄に疲れた。」

「いやあ、僕は満足だよ。数世紀ぶりに可愛い女の子とのスキンシップを楽しめた!!」

C.C. しっかりミレイさんしかり、神楽耶しかり。どうして私の周りにはこう特殊な人が集まるのか……。

自身の事はしつかりと柵に上げて、3人の顔を思い浮かべる。

「……それで? こんな大変な時に何故ここへ?」

だらしなく緩ませていた顔はすっかり消え、神妙な顔でO.O.は尋ねる。

「……分かる癖に。」

「君の口から聞きたい。」

「……………はあ。」

彼女の言う「大変な時」というのは現実で黒の騎士団が。いや、兄上と私が置かれた状況の事だろう。

「君のアドバイス通り、お兄さんは当代の枢木の元へと向かった。罨かもしれないのに要求通り一人で。対する君は心の抛り所を失い、まさに迷える子羊状態。戦争を間近に控えた組織の指導者とは思えないね。」

「先導者は兄上だけでしょ……………。私はただの戦闘要員。」

「謙遜しないでくれよ。合衆国が誇る最強の矛だろう?」

「——その矛が鈍り始めたから砥ぎに来た、って言ったら満足?」

「O.O. が僅かに口角を上げるその横で、アルカは再び本に目を落とすし、ページを捲く。」

「あるのかな? 求める答えが。君の記憶の中に。」

「……私の記憶には無いかもね。でもここは、貴女の世界でもあるのでしょうか？」

興味深そうに浮かべていた笑みは消え、O・O・Oは目を細める。

「……全く、頭が回り過ぎるのも問題だな。」

「それはどうも。褒められて嬉しいよ。」

「……ふん。それで？ 私達の世界で、君は何が知りたい？」

家族譲りのアメジスト色の瞳を細め、ただ静かに少女は口を開く。

「――■■■■■を。」

そう言いながら、本に視線を落とすアルカを、O・O・Oは静かに、しかし悲しそうに見つめていた。



トウキョウ租界は闇に包まれた。

租界内の電気設備は全てゲフィオンデイスターバーによりシャットダウン。市民は出歩く事無く、まさにゴーストタウン。

私達の目的はブリタニア政府の制圧、及び総督である姉上の保護。

世界に向けてこのトウキョウ租界からブリタニアからの独立を宣言する事で、世界中の人々を一斉蜂起させる。希望を与えるのだ。世界中の虐げられている民衆達に。

そしてブリタニア側もそれを理解しているのか、呼び寄せたのは精鋭中の精鋭達。つまりはブリタニアにとっても私達にとってもここが天王山。

「……ま、どうでもいい事だけど。」

一般的なナイトメアよりも小さいコックピットの中で、少女は独り呟く。

そう、どうでも良いのだ。

この戦いの勝ち負けなど。

「見失うな。ぶれるな。最初からそうだったじゃない。」

操縦桿を握る手に力が入る。

『よし、これで条件はクリアされた。藤堂！』

コックピット内に響くのは先導者である兄の言葉。

続けて響く、作戦指揮官の声。

それを合図に、黒の騎士団は進軍を始める。

自由を求めて、帝国の崩壊を願って。

「私にとって重要なのは……！」

一人の少女は世界を知った。

「心を捨てろ。冷徹、非情……。世界とはそういうものだろう！」

一人の少年は心を捨てた。

同時に黒の騎士団の動きを見て、帝国も動き始めた。反乱分子の殲滅を。自身の正義の証明する為に。そして。

「お兄様…、アルカ…、どうかご無事で…！」

一人の少女はまだ真実を知らず。

「乗るしか無いのか……。ランスロットに。」

一人の少年は手に余る力を手に入れた。

戦争が始まる。

TURN 24 第二次トウキョウ決戦

『黒の騎士団、斑鳩艦隊に告げる。ゲフィオンデイスターバーによって、トウキョウ租界のライフライン、通信網、第五世代以前のナイトメアは機能停止した。

敵の戦力は半減している！ 各主要施設を叩き、トウキョウ租界の戦闘継続能力を奪い取れ！』

ゼロの言葉と共に、黒の騎士団の航空部隊が進軍する。

先導するのは司令官であるゼロの乗る『蜃気楼』。

それに追従するのは、『無窮蒼天式』と新たに加わった帝国最新の量産機『ヴァインセント』。

(ギアスを知らない団員達の目があるのにも関わらずギルフオードの投入か。余裕無いな、兄上。)

なりふり構わず、と言った様子の兄を心配しているアルカの元に、ふと通信が入る。

送信元は零番隊副隊長の木下。

「どうしました？」

『わ、私達はどのようにして……。』

本人の性格からか、オドオドした様子で木下は指示を仰ぐ。

カレンが帝国に捕らえられてからというもの、零番隊の実質的な隊長はアルカになっていた。

彼女がカレン同様に戦場の最前線の立ちやすいから、というのもあるが、実際はルーシユの過保護の表れだ。

危なっかしい妹のお目付け役、もしくはいざという時の盾か。

それをアルカ自身、ひしひしと感じているし、兄の過保護さも身を持って知ってはい

「私だつて守りたいの。」

『……えーつと……？ 今なんて……。』

「いや、何でもない。」

項垂れていた顔を上げ、アルカは顔を引き締める。

「私の守りは不要。零番隊は租界を囲むゲフィオンデイスターバーの死守に徹してください。ゼロの身は私が守ります。」

『し、しかし…。』

「自分の身は自分で守ります。ほら、分かったなら早く行って。……敵が来ますよ、つと!!」

目の前に迫るのは黒い閃光。

ゼロの乗る蜃気楼を正確に射抜く様に放たれた光線は、無窮の輻射障壁に阻まれて霧散する。

「シユタルクハドロンに比べたらこんなの…!」

『おい、アルカ。ガレス程度のハドロン砲なら絶対守護領域を破る事は出来ない。こんな危ない真似は……。』

「はいはい、分かりました。お兄様。」

ヴァインセント同様、帝国最新の量産機であるガレス。

ブラックリベリオン時にゼロが乗っていたガウエインを元に製造された砲撃戦用 KMF。

「でも振りかかった火の粉を振り払うのが私の役目でしょ！」

『アルカ！』

そんなガレスの部隊に向かって、制止を振り切つて無窮は鋭い軌道を描きながら先陣を切る。

放たれた閃光を避け、一機、また一機とその数を減らしていく。

「全く、あいつは……。」

今もなお、ブリタニア軍を撃墜し続ける無窮を目で追いながら、ルルーシュは頭を抱える。

どうもらしくない、とルルーシュは思った。

昔から俺達を守る事に固執していたが、あそこまで個人的な行動はしなかった。

「…余裕が無いのはあいつも同じ、か。」

過去の記憶を無理矢理掘り起こされ、自身の真実を知り、心の拠り所を失った幼い妹。余裕を持って、というのが無理な話か。

「——全軍！ 無窮に続き、戦線を上げろ！ シュナイゼルが率いる主力部隊が到着する前に叩くぞ!!」

状況は切迫している。

今、重要なのは一早く勝利をこの手に収める事。
なりふり構うものか……!!



今回の戦争における勝利条件は、総督である姉上を保護する事。

私達がこうしてブリタニア軍と交戦するその裏で、咲世子さんとロロが姉上の確保の為に政庁に潜入している。加えてカレンの救出の為に。

だから私達はこうして戦線を維持し続けられ、いずれ……。

「——来たか。」

トウキョウ租界の中心に聳え立つ政庁から一機。従来の戦闘機を遥かに超える速度で、アルカ達の元へ直進する一筋の光。

『……………スザク……！』

ふと、ルルーシュは声を漏らした。その身一つでは抱えきれない程の憎悪と、ほんの少しの憐憫を含んだ声を。

(ルルーシュ……、それにアルカも……！)

操縦桿を持つ手が僅かに震える。何故震えているかはスザク本人も分からない。

戦闘に対する恐怖を憶えたのか。その手に持つには大きすぎる兵器を持っているからか。

——友達をこの手で殺めなければならぬ事を認識したからか。

僅かに芽生えた迷いを振り切る様に、スザクは眉間に皺を寄せ、目の前に佇む二機を睨み付ける。

友達が乗っているであろう二機を。

「聞こえるか、ゼロ。戦闘を停止しろ。こちらは重戦術級の弾頭を搭載している！使用されれば、4000万リータ以上の被害をもたらす…。その前に……！」

スザクは必死に声を挙げ続ける。ゼロルルルシユの良心に。自身から紡がれる言葉、彼がどんな表情で聞いているか知らぬまま。

「……だつてさ、どうする？ 撤退？」

「……………」

妹の問い掛けに答える事無く、ルルーシユはただただ睨む。まるで皇帝と対峙した時

の様に。

そして次第にゆっくりと口を開く。

激しい憎悪を含んだ声で。

「お前の…、……っ！ お前の言う事など信じられるか！ アルカ、ジェレミア!!」
「っ!!」

ゼロ||ルルーシュの言葉と同時に、二つの凶刃がランスロットを襲う。

一つは無窮の武装の一つである太刀。

もう一つは——。

「ジークフリート……!?! ジェレミア卿!!」

突如、ビルの壁を貫いて現れた巨大なスラッシュハーケンとその持ち主であろう規格外のナイトメア。

嚮団から回収したジークフリートをラクシャータの手によって改良されたワンオフ機。

その名を、サザーランド・ジーク。

「スザクの突破力は障害となる。今、この場で——」。

ランスロットと交戦する2人は目を細める。

次に紡がれるであろう言葉を待って。未来の為に手を汚す覚悟を、その目に宿して。

「殺せ!!!」

「イエス、ユアマジエステイ！」



カレンと同等の実力を持つアルカ。

旧純血派のリーダーであり、帝国軍でも有数の実力者であったジェレミア卿。

そして、帝国の先槍と言われるギルフオード卿。

「く……っ!!」

正直に言つて、やりにくい。

「ジエレミア卿！ 何故貴方が!!」

「枢木スザク……。君には借りがある。情もある、引け目もある…。」

——しかしこの場は、忠義が勝る!!!」

ジークフリートから放たれるミサイルの嵐とスラッシュハーケンを掻い潜る。

弾頭の爆発で発生した黒煙によって生まれた一瞬の攻撃の隙。

煙幕に紛れながらファクトスフィアで捕らえた巨大な熱源に向かって銃口を——。

「っ！」

向ける事は叶わなかった。

黒煙で目視が困難な筈のランスロットに向かって放たれた正確無比な銃撃。

咄嗟にルミナスブレイズを展開し、その凶弾を辛うじて弾き飛ばす。

「この状況下での精密な射撃……、アルカ!!」

真つ直ぐこちらに向かつてくる凶刃をMVSで受け止め、両者の間に一瞬の膠着が生まれる。

「また君達は……、いや君は！ そうやってまた手を汚すのか!!」

犠牲の先に得た未来に、一体何の価値があると言うんだ!?!」

「何を今更！ お前だって同じことをしている癖に！

それに、これはお前が望んだ戦争だろ！」

少女の慟哭が戦場に響く。

「お、俺はただ——、この戦いを終わらせたくて!!」

「じゃあ大人しく殺されれば!?! ジェレミア！」

「イエス、ユアハイネス!!」

剣の交わりを解き、無窮はその場から一步後退する。そしてそこに代わる様に現れた

サザーランド・ジーク。

「捕らえたぞ、枢木スザク!!」

サザーランド・ジークに搭載された電磁ユニットを展開した近距離戦用の雷撃。その攻撃は確実にランスロットを捕らえ、その動きを鈍らせる。

「枢木……。貴殿には悪いが、お互いに主君を持つ身……。許せ。」

「情けは無用……ってね。」

ヴァインセントと無窮がそれぞれ武装を展開し、少しずつランスロットに迫る。その光景を静観しながら、ルルーシュは顔を歪ませ、口角を僅かに上げた。

「良し、作戦通りここでスザクを始末すれば、ナナリーを取り返す障害は——、なっ!!」

ルルーシュが勝利を確信したその時、突如現れた新手がそれを阻む。

「ラウンズの戦場に、敗北は無い!!」

絶対守護領域によって阻まれたスラッシュユハーケンを戻しながら、フォートレスモードから変形させる。

頭部から伸びた二本の角が特徴的なトリコロールの可変型ナイトメア。

「ジノ・ヴァインベルク!!」

「おっと、そう女性から熱烈にアピールされるとは嬉しいねえ。だけど!!」

素早く反応した無窮の凶刃を受け流し、トリスタンは再び変形してランスロットを捕らえるサザーランド・ジークの背後へと回る。

「今回の君の相手は私では無い。なあ? ——クルシエフスキー卿!」



神聖ブリタニア帝国第二皇子及び宰相、シュナイゼル・エル・ブリタニアは此度のト

ウキヨウ決戦を予め予測していた。

それこそ、ゼロによる合衆国決議が放送されるその前から。

皇帝であるシャルル・ジ・ブリタニアは表舞台には立っているものの、戦争や政治に直接関与すること無く、その全権をほほほほシュナイゼルに託している。

そしてそれは、ナイトオブブラウンズも例外では無い。

シュナイゼルの声によって集められた日本にナイトオブブラウンズ達。

その内の一人にナイトオブトウエルブ「モニカ・クルシエフスキー」が居た。

本来、皇帝の護衛の任の付いている彼女は前線に出る事は少なく、他のブラウンズと比べると戦果も乏しいが、本人の強い希望もあってこの戦いに参加することが叶った。

「一本角は私が抑えます。」

開戦前、普段は温厚な様子を見せる彼女が珍しく、顔を強張らせながら一言、そう言った。

一度も邂逅した事は無く、パイロットの顔も知らない。因縁と言うべき因縁も無い。しかし、それでも。

(先輩の敵討ち位は許されるよね。)

尊敬すべき先輩であるノネット・エニアグラムがラウンズを退いた切っ掛けになった相手。

歴戦の騎士であつた彼女を二度も下した相手。

ラウンズの中でも取り分け仲間意識が強い彼女にとって、戦う理由はそれだけで十分だつた。

・ ・ ・

「邪魔をするな!!!」

トリスタンに続く様に現れた白い甲冑に身を包んだナイトメアが、自身の両腕に固定されたエツジを無窮の太刀と交差させる。

機体の出力が高いのか、無窮は押される形でじわじわとゼロから離される。

「邪魔と思ってくれたなら結構！ 私の役目は貴女の邪魔をすることだから、ね！」

突如、白い甲冑のナイトメアは上半身を180度回転させ、遠心力に任せて太刀を弾き飛ばす。

「っー！」

今までのナイトメアの常識とはかけ離れた挙動に、アルカは目を見開いたが、それも一瞬。

迫る二撃目を自身のバインダーで受け止め、様子見の為、距離を取る。

（エッジの威力はそれほど高くない…、警戒すべきはさつきみたいな変則的な挙動、か。）
僅かに傷が出来たバインダーを眺めながら、血が昇った頭を冷まして状況の把握に努める。

「随分変わったナイトメアを使うのね、モニカ・クシエルフスキー。帝国のナイトメアの生産ラインとは外れすぎね。」

「……………」

「ロイド・アスプルンドの様な突拍子の無い変態が居たか、或いは。——他国から鹵獲した機体を改修したか。」

「——テロリストにしておくには勿体ないほど頭回るわね。」

変形型KMF「フローレンス」

E・U・戦線においてユーロピア連合が導入した「アレクサンダ・ドローン」を有人機用に改修し、それを専用にカスタマイズした機体。

ハドロンブラスタターやスラッシュユハーケン等のブリタニア特有の武装が追加されつつも、本来の変形機構をそのまま残したワンオフ機。

「……………何かまためんどくさい相手を引いちゃったな。」

戦況は激化する。

TURN 25 破滅の光

兄さんは僕が嫌いだ。

気付いた切っ掛けは何だったか。

ああ、そうだ。アルカが嚮団に連れて行かれた時だ。

あの時、僕は彼女に問いかけた。

僕の事が嫌いなのだろう、と。

彼女の答えは想像通りだった。

ええ、嫌い、と一言。

そう呟いた時の目は思わず凍えてしまいそうな程冷たくて、同時に何処か既視感を覚

えた。

そう、兄さんの目だ。

僕を見つめる時、時折同じ目をしていた。

よく考えれば分かる事だ。

最愛のナナリーの立場を奪ったのだ。

妹がそれを許せていないのに、長男である彼が許せる筈が無い。

そう気付いた時、足元の土台が崩れる音が聞こえた。

戦う理由を、生きる目的を、全て失った様な感覚に襲われた。

全ては兄さんの為に行動し、兄さんと自分の未来の為に戦ってきたのに、その兄さんから嫌われているなんて。

実際、それに気付いた後の僕は酷いものだった。

兄さんもそれを感じ取ったのだろう。使い物にならない、と思っただろう。

嚮団への強襲作戦からも外されたし、それ以後の作戦にも関わることは無かった。

怖かった。

いつか消されるんじゃないかって。

誰も訪れる事の無い部屋の片隅で、思考に耽る。

兄さんの事、自分の事、アルカの事、嫌いという感情のこと。

考えて考えて考えて。

どんどん沈んでいく思考の中で、ふと思った。

アルカが自分を助けた理由ってなんだっけ？



「第二優先事項の確保か…、良しいいぞ。紅蓮が戦場に戻り次第、咲世子は僕と一緒にナリーを…：うん、15階層までの障害はクリアした。うん、頼む。」

ブリタニアに捕らえられていた紅月カレンが見つかった、と咲世子からの報告が入る。

これで僕達が課せられた任務は残り一つ。

アルカはあの時、行動で示した。

人に対する思いやりを。

例え嫌いでも、その未来に自身の存在が無くても、その人の笑顔に繋がる選択を優先する。

それが、それこそが本当の愛情。

(……改めて言葉にするとむず痒いな。)

僕は今まで自分のことしか考えず、兄さんを含む周りの人達の事を考えようとしなかつた。

しかし、今なら――。

(悔しいが兄さんの未来にはナナリーが必要だ。……兄さんが幸せになる為ならば。)

ナナリーを確実に保護する。

それが残された僕の任務だ。

▼
「蜃気楼、ナイトオブシックスと交戦に入りました！」

斑鳩のオペレーターを務める少女、後藤が声を上げる。

「ゼロの援軍に行ける部隊は!？」

「それが…玉城さんしか……。」

ナイトオブシックスの操る機体、モードレッドの装甲はナイトオブブラウズの中でも随一だ。

無窮や紅蓮等のワンオフ機ならともかく、玉城が乗る様な量産機の武装ではその装甲には傷一つ付ける事は出来ないだろう。

玉城が悪いんじゃない。相手が悪すぎるのだ。

「無窮蒼天式、以前、ナイトオブトゥエルブと交戦中！」

「木下部隊全滅、租界内の電力が復旧します！」

始めはこちらに傾いていた戦況も、徐々にブリタニア側へ。

「クソ…、どうすれば…、ナオト…!!」

斑鳩で支援をしようにも、この巨大な機体ではただの的。扇は劣勢に置かれたこの状況を理解しつつも、動けないでいた。



「基本システムは同じか。」

久々に身に着けたパイロットスーツの感触を確かめながら、自身の愛機を起こす。

画面に映し出される見慣れた日の丸。それを上書きするかのように現れたブリタニア国旗。

紅蓮が改造された証だ。

あまり良い気分はしないが、今はそうも言ってられる状況では無い。

「ゼロ様の現在地は搜索中。アルカ様はシンジユクゲッター上空にて交戦中です。」

「ゼロの援護を優先に動きます。——あの子が負ける筈ありませんから。」

アルカへの信頼を口にするカレンの様子を微笑ましく思い、紅蓮の機動準備をしながら咲世子は僅かに口角を上げる。

「ええ……と、紅蓮、聖天……八？でいいのかしら……？」

モニターに映し出されるのは今の紅蓮を表すブリタニア語。

S u p e r l a t i v e

E x t r u d e r

I n t e r l o c k e d

T e c h n o l o g y

E x c l u s i v e

N e x u s

全ての科学技術を突き詰めた究極の機体。
名を――。

「紅蓮聖天八極式、発進!!」

その背にある真紅の翼を広げ、紅蓮は戦場へと駆ける。



一筋の紅い光が戦場に迸る。

その速度は目で追えず、ナイトメアのモニターでも捉える事は叶わず。
軌道上の居たブリタニア軍のナイトメアは悉く破壊される。
何が起きたか理解する暇も無く。

「ゼロ、今どいかに……!」

「よおし、そのまま離すなよ。」

「「「イエス、マイロード！」「」」」

モルドレットの相手を終え、戦線に復帰しようとしたゼロの元に現れたのは、薄紫色の悪趣味な機体。

ナイトオブテンが操るパーシヴァルだ。

蜃気楼の前に現れた彼は、たちまち部下のヴァルキリー隊との連携で蜃気楼を捕縛する。まるで見世物の様に。

無防備な蜃気楼にパーシヴァルは自身の刃を突きつける。

その武装は、絶対守護領域を突き破る程の威力は無いが、蜃気楼のエネルギーを削るには十分過ぎる代物で。

それを知ってか、操縦者であるルキア・ノ・ブラッドリーは舌なめずりをしながら、消耗していくゼロを見つめていた。

しかし。

「？」

豊富な経験から、もしくは血に飢えた獣の勘からか。こちらに迫る戦力に気付き、蜃気楼から一步後退する。そして、それと同時に。

「え、何が起きたの!?!」

「嘘……。」

自身の部下の悲鳴と激しい爆発音が響く。

破壊された。

視認することすら叶わない速度で。蜃気楼を捕らえていた4機が、一瞬で。

拘束が解かれ、自由になった蜃気楼と静観していたパーシヴァルの間に、真紅にナイトメアが立ち塞がる。

「カ、カレンか……?」

何処か見覚えのある様で見違えた真紅のナイトメア、紅蓮を見つめながら、その存在を確かめる様に呼びかける。

「はい！ 親衛隊隊長紅月カレン、ただいまを持って戦線に復帰しました！」



もう何度刃を交えたことか。

(つ強いな……、それに——。)

無窮の用いる武装を、考えつく限りのアプローチを。

全ての手札を切るつもりで戦闘を繰り返すも、そのどれもが決定打にならない。

(読みにくい！)

予想にもしない角度から斬撃が繰り出され、レールガンを当てようにも変形機構によつて的が絞れず。

(アレクサンダのデータは見た事がある。従来のナイトメアよりも柔軟な運動性能、それに付随する機動性。機体可動域の広さを考慮するに、死角はほぼ無し……。)

これを考えた製作者は変態、と思わず罵倒したくなるほどの常識から外れた性能。

(しかしそれらを存分に活かす為に武装は少なく、決定打も無い……。私と同じね。)

アルカはすれ違いざまに放たれた攻撃を、見てから対応する。

予測不能な角度から攻撃が繰り出される現状、その方が余計な労力を使う必要が無いからだ。

(多分このまま戦闘を続けてもお互いに倒すことは叶わない。……そうになると、戦闘時間が長い私の方が不利か。)

エナジーとて無限じゃない。

激しい戦闘をすればそれなりに減るし、フロートユニットで浮いているだけでも消費されていく。

膠着状態のこの状態でどっちが有利かは子どもでも分かる話だ。

「……このままでは埒が明かないし、気分転換にお茶しながらチエス……なんてダメだよね？」

「とつても素敵な提案、ねっ!!」

接近と離脱を繰り返し、少しずつ少しずつ攻勢に出ようとするが、やはり押し切れな
い。

ゼロの援護に行かなければならないという焦りと、攻勢に出れない歯痒さに襲われ
る。

しかし、その時。

アルカにとつての吉報が、モニカにとつての凶報がそれぞれの元に届く。

『紅月隊長及び紅蓮、戦線に復帰しました!』

『ブラッドリー卿、奪取された紅蓮と交戦の後、——戦死しました…。』

「!!」

前者は好戦的な笑みを浮かべ、後者は動揺から目を見開く。

「どうやらチェスどころじゃ無くなった様ね。」

顔を強張らせたモニカが言う。

「——ええ、全く。」

獣を狩る狩人の様にアルカは目を細める。

「これで後先考えずに戦える!!」

「……………何?」

無窮に装備されていた銃身が切り離される。それ以外の武装も、外殻さえも。

「エナジー消費激しいし、何より熱いし。中華連邦の時に使った時、身体への負担大きかったから極力使いたく無かつただけど——」。

細い指をモニターに滑らせ、システムを起動させる。

「——貴女が悪いんだよ？」

少女の口が三日月の様に歪む。

コックピット内の照明が落ち、彼女を照らすのは非常灯とモニターの赤い画面の光。無窮の心臓であるドライブの音が大きく鼓動し、コックピット内の温度が上がる。

—— S. K. A. N. D. A. システム、オーバードライブ。

そう呟いた後、無窮は消えた。

「っー」

いや、消えた訳では無い。

実際にフローレンスのファクトスファイアはギリギリ無窮を捉えている。
しかし——。

「早い……！」

フローレンスの真後ろから、コックピットに向かって一閃。

即座に機体上部を回転させ、腕部の固定されたエッジで受け止める——事は叶わなかった。

「くっ……！」

エッジを構える事は間に合わず、機体の片腕を犠牲にして何とか凶刃から免れる。手の平から肘まで深々と刺さった太刀を見つめ、モニカは額に汗を浮かべる。

(何とか間に合った…。全く反応出来ない速度では無い…。けど——。)

使い物にならなくなった腕をパージする。

(それでもギリギリ…。一歩でも遅ければ…。！)

ただ速度が上がっただけと言えどもそれまでだが、たつたそれだけの要因でこの少女の脅威は何倍にも膨れ上がった。

彼女の戦闘データは以前、目を通した事がある。

彼女の基本戦術は急所を狙った短期決戦。少ない労力で相手を無力化する、非情に効率の良い戦法。

力押しのアルトシュタイン卿や枢木卿とは真逆のタイプだ。

そういった戦法を好む分、機体パワーはそれほど重要じゃ無かったのだろう。ブリーフィングでの共有の通り、攻撃は比較的軽いものだった。

しかしその分、速度は僅かにフローレンスを上回っていた。

この機体の超次元的な可動域が無ければ、今頃私は串刺しになっていた。だが、ここに来て無窮の速度が遥かに上がった。

今まで対応出来ていた急所を狙った攻撃の鋭利さがさらに増したのだ。まるで気分は猛毒が仕込まれた刀をもった騎士と対峙する様で。

相手を翻弄するその姿は正に――。

(閃光……!!)

「――その名前、嫌いなんだけど。」

ふと、耳元で声がある。

「!!」

実際に耳元で囁かれた訳では無い。

しかし、そうと錯覚する程の至近距離に、無窮は居た。

モニター越しに映る機体の鋭い目に、モニカは恐怖を憶える。

「く、クソ!!」

機体を回転させ、両腕のエッジを突き刺す形で繰り出す。それは無窮のバインダーの装甲を貫き、そして——。本体には数センチ届かず、その凶刃は完全に停止する。

「……な！」

咄嗟に展開された輻射障壁の影響を諸に受け、腕部の駆動系が焼き切れ、突き刺さったエッジを抜く事も叶わない。

つまり——。

「つ・か・ま・え・た。」

少女の楽しそうな声と同時に、展開されているバインダーの内側から格納されていた太刀が姿を現す。

「チェックメイト、ね。」

▼
「ち、違い過ぎる…、マシンポテンシャルが……！」

カレンと交戦中のスザクは動揺を隠せずに居た。

ブリタニアの吸血鬼と名高いブラッドリー卿を瞬く間に倒した。

——彼女なら可能だろうと正直思っていた。

紅蓮を改造した結果、誰にも乗れないモンスターマシンが誕生した。

——それでも、自分は負けないと思っていた。

それを乗りこなすデヴァイサーが居た。

——それでも。

紅蓮聖天八極式はピーキーな性能をしている分、その機体性能は既存のナイトメアを遥かに上回った第九世代だと開発者の三人は言っていた。

それを乗りこなすパイロットが乗った時、全体出力の内の60%で第八世代のラウン

ズ専用機を超えるとも。

それでも、僕は、自身の力を信じていた。

「か、勝てない……!」

ハドロンブラスターが軽々と片手で止められる。

たった一振りで、容易に装甲を切断するMVSが折れる。

一握りするだけで、ランスロットを装甲ごと潰す。

正面突破も奇襲も不意打ちも、全てが対応され、一つ一つの選択が叩き潰される。

「ああ……」

ふと全てを悟った。

自身の限界を、死期を。

(これは罰なんだ。父を裏切り、皆に嘘を吐き、親友を売った、僕の。)

そう一度考えると、急に力んでいた身体から力が抜けていく。

（そうだ、これが償い何だ——。受け入れるしか無い。例え、ここで死んだとしても——）。

その時、ある男の声が頭に響く。

それは自身もよく知る、親友だった男の声。

あまりにも身勝手で、あまりにも優しい単純な願い。

「——お…、俺は……、生きる。」

緑色の瞳を赤く染めたスザクは、何の躊躇いも無くスイッチを押した。
人類史上最悪の兵器のスイッチを。

・ ・ ・

ランスロットから放たれた小さな弾頭は、瞬く間に収束し、そして広がった。爆発も起きず、熱も発生せず。ただただ静かに光は広がっていく。

「全軍撤退、フレイヤだぞ！」

「何故、ブリタニア軍は撤退している!？」

各所から巻き起こる阿鼻叫喚。

黒の騎士団もブリタニア軍の異様な光景に、放たれた弾頭はただの兵器では無いことを察する。

「何か不味い、斑鳩を最大最速で後退させろ！」

「これは、まさかスザクの言っていた――」。――」。

そしてトウキョウ租界は死に絶えた。



「これがフレイヤか……。。」

以前と変わらず、瓦礫に囲まれたシンジユクゲットーで、一人の巨漢は地に倒れ伏す小さな少女を横抱きにしながら、破滅の光を眺める。

「爆発は起きず、熱反応も無く、放射能も発生しないクリーンな核兵器……。ふん、くだらん。」

次第に光は収束していき、それと同時に激しい強風が発生する。

「うっ……」

「気を付けろよ、クシエルフスキー卿。フレイヤの二次被害でラウンズが命を落とした等、笑えんからな。」

フレイヤはその兵器の特性上、効果圏内の空気すら消滅させる。つまり一定の真空状態が出来るのだ。

それが収まるとどうなるか。

一気に真空中の中に空気が流れ込み、広範囲に強風を発生させる。

凄まじい兵器ではあるが、今回の弾頭はリミッターが掛けられている為、この場はさほど影響を受けていない様だった。

「無窮の残骸はどうしましょう?」

風が収まったと同時に、モニカは先程まで対峙していた機体を眺める。

翼を折れ、機体上部と下部は切り離され、辛うじてコックピットだけが無傷の状態。

「捨てて置け、今の奴らに修理する余裕は無かろう。それに、扱えるパイロットが居ない。」

そう言いながらビスマルクは自身の腕の中で眠る少女、アルカを眺める。

「フローレンスはまだ動くな?」

「は、はい。」

「ならば戻るぞ。陛下がお待ちだ。」

そう告げるビスマルクの裏で、モニカは僅かに顔を曇らせた。

TURN 26 想い

何かに依存しなければ生きていけなかった。
そういう生き方しか少女は知り得なかった。

奪われたく無かった。

奪われ続けた人生だったから。

だから奪い続けた。

それが自分を守る為に必要な事だった。

「誇らしい」と喜ぶ者も居た。

「忌々しい」と憎む者も居た。

「穢らわしい」と蔑む者も居た。

それでも彼女は進み続けた。

何か突き動かすものがあつた訳では無い。ただ漠然と奪われたくなかつたから。

結果、彼女は手に入れた。

力が全てのこの帝国でも【最強】と称される位、ナイトオブブラウンスの席。自身の両肩に乗る黒いマントを見て、少女：アルカは漠然と思った。

死に装束みたいだ、と。



まだ数える程しか訪れていないのにも関わらず、何処か居心地の良さを感じてしまうのは何故だろうか。

無数の本棚が果てまで立ち並び、記憶を切り取った様な絵画が虚空を漂っている。そ

んな非現実的な光景も、まるで日常の風景の様に感じる。

自身に内包される世界だからか……それとも、私が彼女達へ近づいているからか。

答え合わせをしたい所ではあるが、求めている回答は戻って来ないだろう。

何故なら、私よりも私の世界を知っているような少女は、ある額縁にお熱の様だから。

「……何を見てるの？」

ソファに深く腰を掛けた黒髪の少女、O・O。

彼女は映画でも観ているかの如く、ニマニマと笑みを作っていた。

「君のイフ」

「イフ？」

「つまりもう一つの現実さ」

「言葉の意味は聞いてない」

「そうかい」と意地悪そうな笑みを含んだままO・Oは、視線をアルカへと移す。

「内容は？」

「知らない方がいいんじゃないかな。きつと君、もう1人の自分に虫唾が走って殺したくなるよ」

「……はあ。話す気無いのは良く分かった」

「話しても何の得も無いからね。もう過ぎた事だし。……まあ遊びの無いこの世界での数少ない娯楽さ」

「……鑑賞料でも請求しようかな」

「おいおい、つれないこと言うなよ。半分は僕の人生でもあるんだ」

やれやれと言う様に首を振り、呆れた笑みを浮かべるO・O。

「状況は？」

「曖昧な質問だな。君が聞きたいのは戦況？ それとも自分の置かれた状況？ 前者なら私は知らないし、知っていたとしても教える意味が無い。教えたとて、今の君は何も出来ないのだから」

「……というところ？」

「言葉通りの意味さ。現実の君は昏睡状態。要するに意識だけが切り離されている状態」

だ。ここを出ない限り、向こうでの活動なんて夢のまた夢だよ」

「ならここを出ればいい……と言いたい所だけど、きつと簡単な事じゃないんでしょうね」

「ご明察」

張り付いた様な笑みを浮かべたO・O・Oが腰を上げた途端、澄んでいた筈の青空がみるみる塗りつぶされた。焼けるような黄昏へと。

アルカから訝し気な視線を注がれる彼女は、肩をすくめて「僕の所為じゃないぜ」とやはり飄々とした態度でそう言った。

「僕やC・C、V・V……じゃなくてシャルル。そして、君。なあ、コードって何だと思おう？」

「……………」

「私の国ではね。コードはその代の当主に受け継がれていくものだったんだ。尊き血——なんて私の一族は呼ばれていたね。そう呼ばれる以上、勿論役割もあった。ブリタニア風に言えばノブレス・オブリージユってやつ」

黄昏の空を仰ぎながら、O・O・は懐かしむ様に目を伏せた。
何時もの態度は鳴りを潜め、茶化す様子無く淡々と語る。

「役割は2つあってね。1つは国を治める事……まあ私の代は小さい国だったけど、まあそれなりに大変だったよ。そしてもう1つが——民草の願いを空に届ける事」

「空？」

「例えじゃない。本当に空へと……より詳しく言えば、その先に存在するモノに届けていたんだ。ほら丁度、こんな茜空だった」

以前にアルカは彼女の記憶と思われる光景を見た事があった。祭壇の上で祈る様に踊る黒髪の少女と膝を地に付けた民衆。

「踊るのは祭事の時のパフォーマンスの一種だったけど」

彼女は畳みかける様に情報を加える。

まるでアルカの思考を読む様に……いや、きつとお見通しなのだろう。なぜならここはアルカの内の世界であり、彼女はそこに巣食う魔女なのだから。

「まあ要するに、私の国ではコード保持者と言うのはそういう役割を担っていた。別に尊き血が特別だった訳じゃ無い。コード保持者というのはそれを出来るだけの力があり、私達は本能的に本質を捉えていたという訳だ。つまり——おっと」

その時、世界が揺れた。黄昏に包まれたアルカの世界が。

ここはアルカという少女の全てが記録された世界、そこに生じる異変の原因など考える限り2つしかない。

現実の自分に何かあったか。もしくは何者かが干渉しているか。

「おや」

興味深そうにO・O・Oが口を開いた。

彼女の視線を追う様に、回廊のその先……ポツンと現れたソレに視線を送る。

「なるほど、剣……。はは、ブリタニアらしいな」

黄昏に染まる廻廊の、その中央に現れた岩。そしてそれに突き刺さった1本の剣。

「アーサー王物語……?」

「を模したものの、かな。ふむ、まあ分かりやすくていいじゃないか」

「抜け、と?」

アルカの言葉にO. O. が笑みを深くする。

「選定の時だ。剣を抜けば何もかもが変わるだろうさ。君も、人も、世界すらも」



時は数刻遡る。

空を突く摩天楼が立ち並び、人で賑わっていたトーキョー租界。エリアーの租界内で一番の発展を遂げていたその場所は、死に絶えたと言つても良かった。

租界のあちらこちらに転がるNMFの残骸、まだ目新しい弾跡を残した建物、そして人々の亡骸。

数を挙げればキリが無いほど、各地に残る戦火の爪痕だが、中でも目を引くのは、そのまま空間を切り取った様に出来たクレーターだった。

直径20キロほどのそのクレーターには何もなかった。巻き込まれた人々の亡骸も、建物やKMFの残骸も、匂いさえも。ここにあつたモノ、起きた事すら思い出せない程、何もない。

効果範囲内を完全に消滅させる史上最悪の兵器によって繁栄を極めた租界は完全に死んでしまった。

そんな事が起きてしまつては、最早戦争どころではない。

進軍していた黒の騎士団は、総帥のゼロの指示により撤退。それを確認したブリタニ

ア軍も警戒は続けているものの軍を退かせ、一時の休戦状態。今はお互いに行方不明者の捜索に駆られていた。

「っ」

ゼロ||ルルーシユは荒れていた。

部下からの報告を聞く度に口元を歪めては内心で悪態を吐く。その苛立ちを表す様に、ソファに腰掛けたその脚は頻りに揺れていた。

絶好の機会だった。

カレンが戻り、ラウンズを討ち取り、都庁に潜らせた佐世子はナナリーを見つけた。あと一手でチエックメイトだったのだ。完膚なき勝利が目の前だった。

それがたった一つの兵器で覆された。

軍は撤退を余儀なくされ、ナナリーと佐世子は行方不明。加えて別動隊として進軍していたアルカも、ボロボロの無窮を残したまま姿を消した。

「クソっ！」

様子を影で見ているC・C・が怯えた様子で肩を震わせた。

言うまでも無く、彼にとつての妹達は戦う理由であり、生きる意味だった。ルルーシユという少年にとつての全てだ。

だから彼女らの生存を確認出来ない限り、彼は仮面を取る事は出来ない。

「……兄、さん……」

そんなルルーシユにとって、その者の存在は我慢ならない。

「……ロロカ」

ギロリと親の仇を見るような視線で、偽りの弟ロロ・ランペルージを睨み付ける。ナナリーとアルカに代わり、自身を監視する目的ですり替わった赤の他人。

何よりも妹達を大事にする彼にとつてすれば、居場所を奪った略奪者。

その利用価値から殺さず、仲間に取り込んだが、今となつてはただの憎悪の対象。

「なぜ……」

「兄、さん……?」

「何故アルカ達なんだ…。オマエじゃなく…!」

ルルーシユは信じたい、妹達が生きていると。

しかしながら部下から告げられる報告が、現実がその願いを上書きしていく。

フレイヤに巻き込まれたというナナリーが乗っていた脱出船。修復が不可能なほどボロボロになった無窮。

ルルーシユ自身、薄々分かっていた。

生きている可能性の方が限りなく低い、と。

自分を見つめる批評家の自分が、そう警鐘を鳴らしているのだ。

「……は?」

「何故生きているんだと聞いているんだ!!」

だからロロの存在が許せない。

何故、偽りの家族の方が生きているのだ。居場所だけでなく、その命すら上書きしてしまうのか。

そんなドロドロとした憎悪が胸中に蠢き、それは言葉として吐き出される。

「お前が代わりに死ねばよかつたんだよ……お前が生きているから、妹達は居ないんだ!! その為の命だろう? お前など、本当の家族になりやしない! この偽物め!!」

妹達と幸せに暮らせる世界が創る為のただの道具だ。理想を体現させるために消費されるただの駒。使い道が無くなれば、真っ先に始末すべき存在。

こいつとの関係など、全て嘘だ。取るに足らない幻だ。

「出てけ! 最早お前には利用価値すらない……出てけよ、偽物!!」

偽りの弟との生活。

嘘に塗れた世界だった。こいつの存在は嘘。こいつへ向けた言葉も嘘。語った気持ちも全て嘘。

だからこれが、初めて口口に送った真実であり本音だった。



実に簡単だった。

所詮はトップのカリスマ性で成り立っている烏合の衆。皆、ゼロという仮面に惑わされ、ギアスというペテンに魅了された哀れな観客に過ぎない。ましてや、ゼロの目的と幹部衆……つまりイレヴン達の目的は同じ様に見えて決定的に違う。

だからそこを突いてしまえば簡単に揺らぐ。

ゼロは秘密主義であったし、本来の人物像とかけ離れた行動を取る事があつたと言う。元々、多少の不信感があつたのだろう。

まあそれでも、たかだがその正体と枢木スザクとの会話の録音。そしてギアスの事を伝えただけで崩壊するとは思っていなかったが。

「それは殿下の人徳では？」

後ろのカノンがクスクスと笑みを浮かべている。

「……ふむ。それならいいけどね」

カノンの言う通り、シユナイゼル・エル・ブリタニアの名が会合を有利に進めてくれたのかもしれない。

兎に角、成果は予想以上だった。

黒の騎士団はゼロへの不信から崩壊、指揮系統は藤堂、扇らの幹部達へ。

しかし幹部達はゼロという共通の敵が生まれた事により、敵対心は薄く、加えて捕らえる見返りにエリアーの開放も約束した。つまり実質的に黒の騎士団、ひいては超合衆国の主導権はこちらが握ったに等しい。

「それで、ルルーシュは？」

「依然、逃亡中です。アーニヤを出しましたが…、振り切られた様ですね」

「ギアスというのは厄介だね。時を止めるなんて……。アルカが居なくて良かったよ」

ゼロ：…ルルーシュを取り囲んだ時に現れた蜃気楼……、機情のデータにあつた嚮団の
エージェントだろう。ギアス能力も一致する。

彼はたちまちルルーシュを守るや否や、彼を連れて飛び去ってしまった。

騎士団とこちら、両軍からナイトメアをいくつか出したが、結果は芳しくない。

「アルカ、というのは……ゼロの……」

「妹、だね。向こうでは皇……と名乗っていたけど……。ほら朱禁城で仮面を身に付けていたあの子だよ」

「ああ……あの趣味の悪い……。ブラツクリベリオンの時にエニアグラム卿を下し、中華連邦ではアーニヤを退けた——」

「そう、その彼女。戦果も凄まじいけどね。マリアンヌ殿下の死後、幼い身で生きながらえた少女だ。恐らくギアスも持っている。居たらこんなにスムーズにはいかなかっただろうさ」

「いやはや、我が弟達は強敵だよ。とシユナイゼルは笑った。

「しかし哀れだね。どんなに能力を持っていても、死んでしまえば無力だ」

そう語るシユナイゼルの目は冷たく、声音とは真逆の印象を受ける。

「一度退かせよう。蜃気楼が向かった先は神根島だろう？ あそこにはオカルトにお熱の父上が居るからね」



「何故、助けた……………」

追手を振り払い、降り立った地で、ルルーシュは呟く。
死に掛けた少年を見下ろして。

「…僕は、おとう、と……………だから」

ギアス能力はその者の素質によって左右される。

元々持っている素質が高ければギアスも強大となり、低ければその逆。

少年、ロロ・ランペルージはお世辞にも高いとは言えなかったのだろう。

相手の時を止めるといふ強大な力の裏で、使用中は自身の心臓が停止するという重大な欠陥を抱えているのだから。

そんな中、彼は追手を振り切る為に数十分に渡ってギアス能力を使い続けた。

そうなれば、もう彼は——。

「嘘だと言っただろう……」

「それ……でも、僕にとつて……ほんと……だ、った、から——」

元々白かった肌が、さらに白くなっていく。ゆつくりと、その生命活動が終わりに向かつている。

「アルカ、に……教わった、んだ……。好きな、人を……想つて、行動する、こと……。大切だ、つて」

「もういい！ 喋るな！ 後でゆつくり聞いてやる……！ 待つてろ、機内に確か生命維持装置が……」

「……忘れ、ないで、兄さん……。に、いさんが、想うよう、に……にいさん、を想つてる——人も、居るんだ……。兄さん、1人の……い、のち……じゃ——」

手足の感覚が無くなっていく、脳内が霧に包まれた様に不鮮明になっていく。それでも少年は想いを吐き続ける。

「ロロっ！ ロロ——！！」

「……偽り、でもいい……から……、兄さんと……僕——4人で暮らして、みたかつ——」

もう何も見えはしない。その造られた瞳には、何も映していない。
叫ぶ兄の声も、もう、聞こえない。

「おい！ しっかりしろ！ ロロ!?」

「っ」

全てを失った青年の叫びが辺りに響く。
それは間違いなく、偽りの無い慟哭だった。

TURN 27 アルカ・アングレカム

全てを失った。

ルルーシュ・ランペルージとして大切にしてきたもの。

そして仮面の男として築き上げてきたもの。

前者は家族や友人、後者はゼロという存在そのもの。

抗って、戦い続けて。その過程で抱えたしらがみや願い。

ルルーシュ／ゼロとして背負ってきたそれらは、気づけば零れ落ちていた。

そんな彼に残ったのは最初の願い、全ての始まり。

それは紛れもない復讐心。

母を見殺しにし、妹達の人生を踏み潰し、強者が弱者を虐げるこの世界を作り上げた
皇帝。

大儀などは無い。

ただただ父に対する私怨が、ルルーシュを突き動かす。

瞳に歪な光を宿らせ、混沌を生みながら。

嗚呼、ここに居るの嘘偽りの無い俺だ。

ゼロでも無ければルルーシュ・ランペルージュでも無い。

家族の仇を撃つと決めた、あの日の――。

「我が名はルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。マリアンヌ皇妃が長子にして、帝国に捨てられし皇子！」



血に塗れた人生だ。

最初に殺したのは実の父親。次に殺したのは数えきれない程の日本人。

徹底抗戦を唱える父が居なくなれば、戦争は回避出来ると思っていた。しかしその実、事態は悪化したばかりか日本という国が歴史から消えた。

思えば最初からそうなる運命だったのかもしれない。

ナイトオブブラウンズという今の立場も、元を言えば友達を売り、大勢を犠牲にして得た血塗れの席。

今こうして動いている心臓だって、フレイヤという殺戮兵器で得たモノに過ぎない。過程を大事にしたいと口では言いつつ、最終的に自分が取る行動は何時だって最悪のものだ。

ギアスの呪いの所為なんかじゃない。結局のところ、自分の存在自体が穢れているのだ。

ならば最早、過程など無意味だ。

何を選択したところで、得れる結果が血に濡れた未来なら、自分は喜んで血を流し続けよう。

そうすることで皆が平和になるのなら良いじゃないか。

元よりこの手は汚れ切っているのだから。

「——陛下」

「……シュナイゼルの、指金か？」

醜いのは、僕だけでいい。

▼
「あらまあ。もう始まつてるわ」

まるで舞踏会にでも遅れてしまったのかの様な声音で、アーニヤ・アールストレイムは言った。

いや、正確には彼女の姿をした別の誰かがそう言った。

「ルルーシユの仕業だな」

「あの子も好きねえ」

知る人が見れば分かる状況。

神根島に駐在するブリタニア軍同士が戦闘を行っていた。

当事者からしたら、何が起きているか訳が分からないだろう。何せ、味方だと思つていた奴がいきなり撃つてくるのだから。

しかしそのタネを知っている者……とりわけそれを何回も見てきたこつちからすれば些か滑稽に見えるというもの。

奴の十八番だからな。

影で高笑いしている様子が目に浮かぶ。

「早くシャルルの所行きたいのに、余計なことしちゃってさ」

心底面倒くさそうに呟く彼女の言い草は、息子に向けて放った言葉とは到底思えない。

しかしそれはとうの昔から分かっていた事。コイツに……マリアンヌに人並の親の感情などありはしない。

「ありがとうね、C・C。」

「……………」

自分の目的のために娘を殺す母親が居たとして、それは人間と言えるのだろうか。

「私の代わりにあの子を育ててくれて」

恍惚な表情でそう語る彼女は、怪物にしか見えなかった。



そうして時は戻る。

世界にとってはほんの数刻の出来事、されどそこに生きる人々にとっては重要な時間。

少女が観測していない僅かの中に、舞台は整い、役者も揃いつつあった。

少女Ⅱアルカの世界に選定の剣が出現、その同時刻。

シャルル・ジ・ブリタニアとその息子、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが対峙していた。

黄昏に包まれた間、父の背後には螺旋状に蠢く剣の様な何か。

「さあ、時間はたっぷりあるんだ。話してもらおうぞ。真実を」

神根島の遺跡、祭壇。そのモノが持つ役割はルルーシュは既に知っている。

扉だ。この黄昏の間に干渉する為の扉。

ならば、それを破壊してしまえばどうだろうか。この間と現実世界の結び目があの扉ならば、そこを解いてしまえば孤立したも同然。いくら不死身の肉体であろうと、いくら力を持っていようと。何も出来なければ死んだも同然。

「今頃、お前が入って来た扉とやらは瓦礫と化しているだろうな」

「……………愚かな事よ」

「さあ、答えて貰おうか。母さんを殺したのは誰か。そして何故守らなかったのか

……」

「可笑しいな事を言う。人には真実を求めるか……。ここまで嘘を吐いてきたお前が？」

そう、その通りだ。

ルルーシユは嘘を吐き続けてきた。名前を偽り、本心すらも偽り、仮面すら被つて全てを騙してきた。

しかし、それは人が当たり前にやっている事だとルルーシユは思う。

他人に話を合わせる、場に溶け込む。人は常に誰かが我慢をして自分を殺して、本能を抑えて生きている。そうすることで国や民族……ミユニティが生まれている。

「そうだな。しかしお前もそうだろう。俺がゼロという仮面を被つたように。お前は皇帝と言う仮面を被っている。誰しもが仮面を使い分ける。……最早、人はペルソナという仮面無くしては——」

「違うな。未来永劫によつて嘘が無駄だと悟つた時、ペルソナは無くなる。理解さえしあえれば……争いは無くなる。……それがラグナレクの接続……世界や欺瞞を脱ぎ捨て、真実をさらけ出す」

シャルルは既に知っている。嘘は虚しく、無意味なものと。嘘があるから争いは起き、混沌とした世界が生まれる。

だからここから起きる事は全て真実だ。

—— 例え、死んだとされていた女性が目の前に現れようと、全ては偽りの無い真実。

「来たか、マリアンヌ」

「大きくなつたわね、ルルーシユ」

「母……さん……？」

マリアンヌは穏やかな笑みを浮かべて柔らかく微笑んだ。そう、まさに絵に描いたような理想的な母親……聖母の様な笑み。全てがああの時のままだ。ルルーシユが皇族として過ごしていた9年前と同じ。当時の記憶をそのまま映し出したのかの様な。

「これも幻想か!?! こんな事をして——!」

有り得ない。間違いなくあの日、母は死んだ筈だ。だってこの眼で直接見たのだから

ら、疑いようの無い。

「うーん、本物なんだけどね。ま、このシステムじゃなければ元の姿は取れないケド」

しかしそれはマリアンヌ本人によって否定された。

「…本物……？」

表情が、仕草が動作が。一挙手一投足が記憶通りの母だった。理性では否定しつつも、本能でこの人物はマリアンヌ・ヴィ・ブリタニアだと、そう叫んでいる。

「ルルーシュ…先程の問いに答えよう」

半世紀前、とある兄弟が居た。

至って普通の、何処にでもいる兄弟だった。お互いを信じ、愛し、心を通わせ、共通の母を持っていた。

唯一、普通とかけ離れている事があるとするならば、それは彼らを取り巻く環境だっ

た。

彼らは皇族だった。

一つの国を治める皇帝から枝分かれした、その枝先の末端。次の帝位を狙って血みどろの競争が繰り広げられる……そんな環境で育った。肉親同士で殺し合う、嘘に塗れた世界。兄弟の母もその帝位争いに吞まれ、友好的だった異母兄弟も、また別の兄弟の手によつて命を散らす。

元々、優しい心の持ち主だった。とりわけ弟の方は、虫を一匹も殺せないほどの。

だから胸中に抱いた絶望もすさまじかった。

生まれた環境を疎ましく思った。嘘に塗れた世界を憎悪した。

そして少年達は誓った。嘘の無い世界を作ろう、と。

「私もC. C. もその同意に賛同したわ。でも、V. V. は……」

誓いを立てた兄弟の内の弟……シャルルにとつて、マリアンヌという女性は初めての友人とも言えた。

偽りだらけの世界で、いつしか自身の心すらも閉ざしてしまった彼にとつて、兄以外で本音で語り合える唯一の人間。

心を通わせるのを諦めていた彼にとって、彼女との出会いはまさに転換期であり、シャルルも徐々に変わっていった。

本心を曝け出す事が、楽しいと感じ始めたのだ。

時を重ねれば重ねる程、その思いは増していく。それに比例して、マリアンヌとの関係もより親密なモノへと変わっていった。

しかし唯一、その変化を受け入れられない者が居た。

シャルルの兄であるV・V。

彼は焦った。

既に不変の存在となっていたV・Vにとって、変化は何よりも恐ろしいもの。自分だけが取り残されてしまう。

——血を分けた弟すらも、自分の先を行ってしまう。

だから排除した。

V・Vにとつて当たり前前の事だった。育った環境がそうさせた。

自分の、自分達兄弟の理想の邪魔をするならば、原因を取り除けばいいと。

「夜中に呼び出された私は彼に撃たれた。何発も何発も、即死だったでしょうね、身体の方は」

だがマリアンヌには秘密があった。V・V・ですら知らない秘密が。

——人の心を渡るギアス。

そのギアスの発動条件は身体が死を迎えること。

密かにC・C・と契約し、手に入れていた力。

マリアンヌ自身、使用した事など一度も無かった。契約の事を知っているのも、契約者であるC・C・と夫であるシャルルのみ。

「幸運だったわ。たまたま行儀見習いで来ていたアーニヤ・アールストレイム……彼女が近くに居たの。そして、私はアーニヤにギアスを使った……。後は貴方の知ってる通りよ」

テロリストの仕業だと偽装をし、加えて娘であるナナリーを偽りの目撃者としてでっち上げた。

……有り体に言えば仲間割れ。

事実を知ったC・C・はそのまま嚮団に送り込まれたアルカを連れて姿を消した。

「ワシは兄さんと話した……しかし……」

残念だったね。

彼は白々しくそう言った。あたかも、自分は何もしていないと、そうアピールするかの如く。

——初めて肉親に憎悪を抱いた。

「兄さんは嘘を吐いた……！ 嘘の無い世界を作ろうと誓っておきながら……！！」
「——ふざけるな！ 死んだV・Vに全て押し付けるつもりか!？」

分かった。ある程度は理解出来た。

皇帝の目指す世界、母が生きている理由。

しかし、肝心な事をまだ語っていない。ルルーシュの憎悪……その原初たる由縁をコイツはまだ隠している。

「俺とナナリーを……アルカを！ 俺達兄妹きょうだいをバラバラにした癖に！」

「必要があった！」

「何の必要だ!? 親が子を遠ざけるなんて——!」

瞬間、ルルーシユの脳裏に過去の光景がフラッシュバックする。

自身の契約者であるC・C・が語っていたこと。

——本当に大切ならば、遠ざけておくこと。

「……そう、兄さんの目を遠ざける為、お前達を日本に送る必要があつた」

あの時の謁見の間で、主要貴族が集まる中、幼いルルーシユに告げた言葉は全て意味があつてのこと。

「シャルルはもう、ヴィ家に用は無い」と思わせる為の。

V・V・がマリアンヌに向けたその憎悪を、子ども達に向く事を恐れたのだ。

数居る妻の中で、唯一心から愛した女性との間に生まれた子ども達。冷血と言われる皇帝にも、情があつた。

「ワシは全てを守る為、アーニヤとナナリーの記憶を書き換えた」

「ナナリー? …では、目が見えないのは心の病では無く……?」

「偽りの目撃者とはいえ、命を狙われる可能性はあったわ。真実に近づけさせない証拠が必要だったの」

「じゃあアルカは!?! アイツは日本に送られてもなければ、記憶も消されていない…! なぜV・V・の元へ送り込んだ!?!」

アルカ、ルルーシユにとつてのもう一人の妹。

その名を口にした途端、皇帝はにわかに関角を上げ、マリアンヌは冷めた目付きでルルーシユに視線を送った。

「全ては計画の為。致し方なかったこと」

「それがあの子の役割だったからねえ」

「——なっ」

何だこれは。何だこいつらの言い草は。

まるで、道具の様な。

「元々、アルカは殺せぬ。計画に必要な存在であるが故…、いくらマリアンヌの子と言え

ど兄さんは殺せなかった」

「ラグナレクの接続にはアルカが持っているコードが必要な。知っているでしょ？ あの子には日本の【尊き血】が流れている。古い血脈の失われたコードをどうしても必要だったわ」

だからV・V・の元……厳密に言えば別のコードを持つ者の元へ送る必要があった。

奥底に眠る力を引き出し、共鳴させ、新たな不変の存在として覚醒させる為。

それ故、アルカがC・C・に連れ出されたとしても、計画上は何も問題無かった。傍に居るのがV・V・でもC・C・でも、結果的には同じこと。

「その為に調整されたデザインベイビーだもの、時が経てば覚醒する。だから後は待つだけだと思っていた。——C・C・があそこまでアルカに入れ込むとはちよつと予想外だったけど」

アルカを連れ出したままでは良かったのだ。

問題はその後。

彼女の行動は冷徹な魔女のソレとはかけ離れていた。

言葉では自身の願いを優先すると言いつつも、その行動には――。

「C・C。がアルカを匿ったままじゃ計画は破綻」

「マリアンヌの説得がうまくいかない以上…最早、お前を使うしか……」

「……………そうか」

最初からコイツらの手の上で転がされていたという訳だ。

ルルーシュは自らを嘲笑う様に笑みを浮かべた。

ゼロと黒の騎士団の戦いは――俺の存在はC・C。を表に引きずりだす餌で……。ナナリーは自分達の都合であんな身体になり…。アルカは生まれる前から――。

「ま、色々あったけど。今はこうしてシステムは正常に動いてる。C・C。も協力してくれているし……。ありがとう、ルルーシュ。貴方の戦いは無駄ではなかったわ」

変わらず聖母の様に微笑む母が、今は憎たらしく思えた。

彼女は恍惚とした表情で後ろで蠢く剣を仰ぎ見る。

「名は体を表す……よく言ったものね。見て、ルルーシユ」

そうマリアンヌは言った。

「これがアーカーシャの剣、世界を変える……私達祈りのアルカを・アングレカム乗……せ……た……箱……舟……貴女の妹よ」

TURN 28 継承

嘘の無い世界を創る。

すなわち個人という壁を無くし、人類が平等な意識の元で生きる理想郷。

「そんな力が…私に？」

「正確に言えばその剣に…だが、まあ使えるのは君だけだし結果は同じかな」

岩に突き刺さった剣……O. O. の言葉を借りるならば選定の剣をアルカは見つめる。

「一体どういう仕組みで………」

「さつき尊き血の……つまり私の一族の役割について話しただろうか？」

「願いを…届ける……？」

「そう。厳密に言うとな、私がみんなの代わりをお願いをしていたんだ。この上の世界、

茜空の向こう側にあるCの世界。君はそれを知っている筈だよ。コード保持者というのはそういうものだ」

「……………集合無意識……………」

それは生まれながらにして備わっている普遍的な潜在的な意識。

自然に安らぎを感じたり、昇ってくる朝日に神々しさを感じたり、暗闇に恐怖を感じたり……………」

そんな共通の認識。

「例えば、だ。争いをやめさせたいのなら、争いは醜く凄惨なものだと伝えれば良い。仲良くさせたいのなら、人類はみんな兄弟だと伝えれば良い。つまりそういうことさ。そうやって我々は国を運営してきた。この剣を用いてね」

「じゃあこれは…アーカーシヤの剣は集合無意識にアクセスするための鍵?」

「どちらかと言うと鍵は僕らで剣は扉、もしくは道かな? ま、この際どちらでも構わない。君が剣を抜けばCの世界が現れるってこと」

まあ最も個人の心の壁を取り払うなんて機能は無かったけどね。とO・O・は笑う。

「そのシステムを組み上げたのは他でもない皇帝だ。全く、シャルル皇帝もめざといよね。まさかこんな骨董品を神殺しの武器にしてしまうなんて。そして君はその担い手という訳だ。……いや、武器そのものかな。ねえコード アーカイシャ A」

O. O. の煽る様な視線がアルカに刺さる。

「そのコードAはまだ不完全なままだけど？」

「ふうん？」

今度は興味深そうに瞳を細くした。

アルカが分かるのが意外だったのか、それとも――。

「まあ仕組みは大体分かった。漠然と私が必要……としか知らなかったから、ちよつとスッキリした。でも、必要なのは今の私では無いでしょう。足りない何かは、まだ貴女のもの」

「……確かに、肝心なモノはまだ私の中だ」

ふと、O・O・Oは自身の帯を解いた。

はらりと色白の身体を包んでいた和服は地に落ち、曝け出された細い四肢。

——そして、その胸の谷間に刻まれた幾何学めいた紋章。

「コレだろ、君が言っているのは」

まさしくそれは力の源。

人の歴史のその裏で、細々と受け継がれていった古きコード。

「それが無ければ、私は剣を抜けない」

「そうだね。今の君は中途半端に覚醒した状態だ」

「剣を抜かなければ、C・C・共に死ねない」

これは皇帝との取引だ。

その力を計画の為に振るう代わりに、私達のコードを奪い取って貰う。

前回、黄昏の間に訪れた時、交わした取引。

「そうだね。何て壮大な無理心中なんだ」

結局のところ、皇帝の求める覚醒とは、ここに居るO・Oから正式にコードを受け継ぐこと。

現実の私の身体が保持者のソレにならない限り、皇帝はこの失われたコードを得ることとは出来ない。

当初の予定と逆になってしまったが、結果的には同じこと。
神を殺した後に、殺して貰えればそれでいい。

「……………少し、昔話をしようか」

そう、O・Oは言った。

「僕には従者が居てね。何、特別な事は無い。僕の一族では至って普通の事だった」

貴き血が宗家としたならば、従者はその分家。つまりは枝分かれしているものの、同

じ血が流れる家族。

「代々、宗家の当主には分家の当主が付き従う決まりがあった。僕が生まれるよりもずっと前から」

宗家当主……つまりO. O. の役割は国を治めると同時にコードを受け継ぐこと。
なら分家の方は？

「分家の役割は至ってシンプル。守る事。守護者……なんて言われ方もしていた」

貴き血が永代に渡って栄える様に。その敵を撃ち滅ぼし、魔の手から命に代えてでも守る……それが守護者の役目。

「守護者の家系も少し特別でね。コードを守るという側面から、大体には人並外れた身体能力が備わっていた。いくつもの争いで戦果を上げて貰ったよ。それに何回も数えきれないほど、守ってもらった。……そうそう、僕の代は丁度、優しい瞳をした男の子だったよ。しかも同じ年ときたもんだ」

分かるだろうか？

向けられた視線がそう物語っていた。

「月並みの表現だが、僕は好きになつてしまつたよ。その守護者の子を。僕だつてもとより人間だつたんだ、意外……なんて思わないでくれよ？」

「素敵な事ね」

「だろうか？ 初めて恋心を知つた時、身体が熱くなつたさ。……しかし、それは許される恋では無い。君にだつて分かるだろ？」

「……………ま、よくある事ね」

貴族は何より血を重んじる。

それが国を治める家系とあれば、余計に。この世に同じ立場で自由に振る舞える者がどれほど居るだろうか。

「まさに日本版ロミジュリさ。まあ敵対関係では無かつたが……………。ごめん、少し脱線したね。……………丁度私はその恋を自覚した時、許嫁が居たんだ。国の領土に隣接した

国の王……。当時の日本の中ではそこその武力を持った国だった」

小さな島国に無数の国が存在してた当時は争いが絶えなかったという。

コード、という不確かなモノで国を治めていた彼女の国にとって、周りに誇示出来る分かりやすい力が必要だったのかもしれない。

「自分で言うのも何だが、僕はとつても可愛いだろ？　僕と添い遂げられるのなら喜んで国を差し出すと言ってくれていたさ……。でも、僕は少々我儘でね」

政略結婚に踏み込める程、大人では無かった。

誰かもよく知らない男と、自分の意思が介入する余地も無く誓いを立てるよりも、淡い恋心を大事にしたかった。

「実は陰でコソコソ付き合っていたんだよ。守護者くんとね。だから隣国の王などどうでも良かった。……。僕が正式に自国の王座を継いだその時、断ってやったのさ。……。でもまあ、それがいけなかった」

相手が武力国家だと言うのを失念していた。

その王は長年、私と添い遂げる気で準備をしていたのだ。だからその今になって、たった一言で今までの積み重ねを否定されたもんだから、怒りに怒った。

——実力行使で、僕を攫いに来た。

「酷いものだったよ。兵士どころか、無抵抗の民草まで皆殺しさ。……でも一番酷いのはきつと僕自身だ」

自らのエゴを優先して罪無き人々を犠牲にした。天秤に掛ければどちらに傾くか、分かっていた筈なのに。

「当然、守護者くんも殺された。……数には敵わなかったんだろうね。彼と交わした最後の言葉だけが、私の中に残った」

争いが終わる様に祈っててくれ。

そう戦いに出る前、彼はそう言った。

「流石に諦めたさ。僕が折れば、残った民は救われる。もう受け入れるしかないって」

若かったなあ。とO・O・Oは自嘲な笑みを浮かべる。

「でもそんな争いがあつた後だ、当然納得出来無い者も出てくる。それに僕自身、気が気じゃ無かつた。何せ旦那は恋人の仇だ、許せる筈も無い。だけど僕は国を治める立場の人間…表立つて対立も出来ない」

「……………」

「丁度、僕の子どもが生まれた時、コードを正式に受け継ぐ事になった。……そう、それまでの僕は君と同じ、中途半端な状態だつたんだ。我が一族ではその代の当主が子を産んだらコードを先代から受け継ぐ…そんなルーティーンがあつた。当然の帰結だろう？ 受け継いだら子を産めなくなるのだから、繁栄どころじゃあない」

O・O・Oは静かに続ける。

「毎回、儀式の時は神根島に当主が訪れる事となつていてね。僕は憎き夫を国に残し、まさに外の遺跡でコードを先代から受け継いだ——」

「それだけ聞くと、何で貴女の代でコードが途絶えたかわからないけど？」

「まあ焦らないでくれよ。ここからが僕のちよつとした反攻撃の始まりなんだから」

先代……つまりはO・O・Oが自身の母を殺した後、本来であればそのまま国に戻る筈だった。

しかし、彼女はそうはしなかった。

結局のところ、許せなかったのだ。

夫が、国が、あの人の犠牲の上で生きている自分が……。

「僕は遺跡の扉を開けた。精神だけをこっちの世界に移し、閉じ籠って祈りをささげた。今後、あのような醜い争いが起きないように、血で血を洗う事は醜い事だと、集合無意識に語り続けたんだ」

「……願いを……届ける役目、か」

「元より戻る気は無かった。ここで果てるまで祈りを続ける事が、せめての報いだと思つた。現実の肉体が朽ち果てて帰る場所が無くなつても。だからコードは失われたんだよ。他でも無い最後の継承者である私が、精神の存在となつて切り離された空間で生き続けているのだから」

「……………なるほど。どれで時を重ねるごとに貴女の血……というよりは因子が薄れていき、貴女は子孫との接点を無くしていった」

「まあコードが無くても国を治め続け、現代まで続く体制を作りあげたのだから、それもそれで良しと思っていたさ。……ただまあ、僕を殺せる存在が生まれない……つていうのは寂しかったがね」

国が安定し、無事に血も受け継がれ、争いは順調に減っていった。

コードが存在しない中でも滞りなく時が流れる様を見て、O・O・Oは自身は不要だと判断し、祈る事をやめ、観測者に徹した。

「自身の役割が必要無いと悟ったその時、僕は孤独に苛まれた。すぐ上の世界に……集合無意識には彼が居るのに……私は彼の元へといけない……!」

死にたくなつた。

この永劫の時を終わらせたくなくなつた。

「そこに君が現れたんだ! 正統な後継じゃない……しかしそれが何だ。私と並ぶ……いや

僕以上に高い適正を持つギアス能力者！」

「……そう……つまり貴女も死を望むのね」

我が子を受け止める様な穏やかな表情で、両手を前に差し出すO・O。

「さあ、私の願いは話したぞ。そしてもう一度聞こう。君の本当の願いは何だ？ アルカ・アングレカム。死にたい……なんて受け売りだろう？ 彼女がそう言っているから、そう言っているだけだ。それしか君は知らないから！」

「何を——」

「嫌われたくないから、不要と言われたくないから、必要とされたいから君は全てを彼女に差し出す。時間を、身体を、願いすらも……！」

「っ！ 知った風に…………！」

ふわり、と温かな匂いがした。

その香りにアルカは憶えがある。C・Cだ。彼女と同じ香り。鼻にかかる彼女の黒髪が、アルカの固まった思考を解す。

「……小さいな、君は。そんな小さい身体で戦ってきたのか」
「放して……！」

抱きしめられた。他でも無いO・O・Oに。

元より小柄な体躯のO・O・Oでも、そのまますっぽり覆えてしまうほどアルカの身体は小さい。

「アルカ……君は死にたいんじゃない。ただ同じでありたいだけ。嗚呼、死は確かに平等だ。でも、死んでちやこうして触れ合う事も、体温を感じる事も出来ないぜ？」

「……私……は」

「受け入りの願いで無く、自分の願いを語れよ。君のはギアス^願本当に醜いものか？ 憎い世界のままにして大切な人達を残して去るつもりか？」

「……………」

O・O・Oはアルカの手を掴み、自身の胸にそれを寄せた。
小さな掌と、刻まれたギアスの紋章が重なり、そして輝く。

「悔いのない選択をする事だ。君の先代……皇櫻樺すめらぎおうかは失敗ばかりだったから」

ああ、でも。

と黒髪の少女は続けた。

「守護者……いや、枢木くんを選んだことだけは、失敗じゃなかったけどね」

永劫の時を生きてもう一人の魔女は、微笑みながら消えていった。

TURN 29 玉座

虚しい。

そんな感情が胸に蠢く。

結局のところ、嘘に塗れた人生だ。それが、真実だ。

「……結局、俺は世界にとってのノイズで…邪魔者で………」

自分の信念に従って生きてきたつもりだった。仮面を取ったその時から、自分の人生が始まった気がしていた。

しかし、結局のところ、親の……こいつらの傀儡に他ならなかった。そしてそれは俺だけでなく、ナナリーも……アルカまで……

「はっ……どう思う？ お前達は」

そんな己を一番近くで見えてきた共犯者。

そして真向から対峙してきた親友。

C・C・と枢木スザク。

「気付いていたのか？ 私が来ると」

「元に戻っていることもな。死にに來たんだらう？」

その通り。と皇帝が言った。

「アルカのコードが目覚め、C・C・が揃った以上……準備は整った。故に枢木、追ってきたところで無意味な事よ」

「……でしょうね……。貴方は既に不老不死になったと聞きました。だから……確かめたい事があります。貴方が創ろうとしているコレは……」

かつて、優しい世界をと望んだ少女達が居た。

片や幼馴染で、親友の妹で。身体に障害を負いながらも、誰よりも心優しい少女だった。

片や枢木スザクにとっては初めての恋人だった。自分の信じる世界を目指し、奔走し、そして命を落とした。

「そう、ユフィやナナリーが望んだ……優しい世界だ」

そんな少女達と同じ願いを、この男、シャルル・ジ・ブリタニアは持っていた。

「C・C。アルカが継承した以上、これで始められる。お前達の願いは計画の後で、叶えてやろう」

「……………」

皇帝がその手を虚空へと翳す。

【少女が剣の柄を掴む。】

それぞれのコードの証が、ギアスの象徴が光り輝き、地は揺れ、空は割れた。

「嗚呼、始まる！ アーカーシャの剣が……私の娘が神を殺す……！」

まるでハリボテの空だと、ルルーシュは思った。

【まるでハリボテの空だと、アルカは思った。】

存在する空間は違えど、見えている空は同じだった。

黄昏の空が消え去ったその先で、現れたのは巨大な惑星。いや、本当の惑星では無いだろう。便宜上、その形をとっているだけに過ぎず、その実態は——。

集合無意識。

すなわち人類そのものであり、神である。

「ルルーシュ。君は何のために戦ってきた？」

【自分は何のために戦ってきた？】

くだらない質問だ、とルルーシュは思った。

【そんなの当たり前じゃないか、とアルカは自嘲した。】

「俺は妹達の為に」

【私はC・Cの為に】

「あの2人を言い訳に使うのか？」

枢木スザクの鋭い視線がルルーシユを突き刺す。

嗚呼、そうだよ。

妹達だけの為じゃない。俺は俺の為に…俺自身が大切にしたい全てのものの為に…戦ってきた！

【本当にそうかい？と先代の魔女の声が聞こえた気がした。】

【違う、C・Cの為なんかじゃない。】

【彼女と一緒に居たい。兄上と姉上と一緒に居たい。】

カレンと、ミレイさんと、シャーリーさんと……

結局、自分の為だったんだ。】

【だって1人は寂しいから。孤独になりたくないから。もう失いたくないから私は戦ってきた！】

——だから俺は。

【——だから私は】

—— 皇帝の願いを認める訳にはいかない。

人は何故、嘘を吐くのか。

それは何かと争う為だけじゃない、何かを求めるから。

ありのままの良い世界とは、変化が無い、完結した世界。
歩むことを止めた世界など、死人と同じ。

【一つになるといふ事は、それ即ち究極の個人となる事。

自分同士で争い合う人間など勿論居ない。自分同士で意見を交わすものなど居ない。

全て分かり切っているのだから、分かり合う必要が無いのだから。】

【そこには発展も、温かみも無い。】

【分かり合おうとするから意見を交わすんだ。

分かり合おうとするから身体を重ねるんだ。】

【全てを失った全てを得た世界なんて、とつても寂しいよ。】

俺は【私は】嫌だな、そんな世界。

「ルルーシユ、それは私も否定するということ?」

「母さんの願いも、皇帝と同じなのですか?」

「1つになるという事はとつても良い事だと思わ。死んだ人とだつて一緒になれるのよ。ユーフェミアだつて」

スザクの眉が僅かに揺れた。

「そうか……やはりな……お前達はそれをいい事だと思っているしかし……! それはただの押し付けた善意だ。悪意とやら変わりは無い」

「いずれ……皆、分かる時が——」

「そんな時は来ない!!!!」

ルルーシユの瞳に涙が浮かぶ。

知ってしまった。分かってしまった。

これは紛れもない真実だ。

こいつらはどうしようも無く、救いがなく、自分達の善意が全て正しいと、そう思っ

ている。

だが――。

「お前達はそれが俺達に善意を施したつもりなのかもしれない……。しかし！ お前達は俺達兄妹きょうだいを捨てたんだよ！」

結局のところ、俺もナナリーも、アルカも。

こいつらにとってはただの手駒だったんだ。結果的に会えるのだから、死人にすら会えてしまう世界になるのだから。

その過程でどうなろうと知った事かと素知らぬ振りをしていたのだ。

「結局、お前達は未来なんか見ていないんだ！」

「未来はラグナレクの接続……ナナリーの言った優しい世界が……」

「違う！ ナナリーが言ったのはきつと……他人に優しくなれる世界……お前達はただ、自分に優しい世界を創ろうとしているだけだ!!」

ナナリーが流す涙の意味を、こいつらは知らない。

アルカが人を想って行動する意味を、こいつらは知らない。自分自身しか見えていないこいつらに、分かる筈が無い！

「そこに居るんだらうアルカ。これが俺の答えであり願いだ。俺は歩みを止めたくない」

ルルーシユはコンタクトを外し、自身の呪われた瞳を顕わにさせる。

奪ってばかりの、間違っただけの力だった。

しかし、今こうして、彼は人類の為に力を振るう。

「今でも醜いとそう思う。

使ったら、最後、その願いは永遠に残り続け、その者を蝕んでいく。

コードを継承し、力も消えたと思っただが、それでも無いらしい。

多分、一度死ななければ消えないのかもしれない」

「……でも今は、この醜い力が必要の様だから、まあそれも良しとしよう」

「神が息絶えるその前に、彼女の様に祈りを捧げよう」

ルルーシユは空を仰ぐ。

【アルカは空に祈る】

双方の両目には、力の証。

絶対順守の、願いの力。

「神よ！ 集合無意識よ！」

【どうか、時の歩みを止めないでください】

俺達【私】は——明日が欲しい。

崩れていく、崩れていく、崩れていく。

とある君主の夢が、理想が、嘘が。

天を突く程の剣も、それを動かしていたシステムごと。

「バ、馬鹿な……崩れていく……思考エレベーターが、ワシと兄さんの夢が……！」

「貴方っ!!」

マリアンヌは叫んだ、夫の元へ向かおうと。

しかし、足が言う事を聞かない。

そこでやつと気づいた。

自分達の身体すら、崩れていつていると。

「それが答えだ……現実だ……」

世界がそう判断したから。

前に進む為に、その者達は不要だと判断したから。

世界から弾き出されてしまえば、いくら不老不死とは言え存在することは許されな
い。

「愚か者が……！ ワシを否定すれば……待っているのは奴の……シユナイゼルの世界だぞ！

善意と悪意は所詮、一枚のカードの裏表……それでも貴様は！」

「だとしても、俺達はお前達を否定する！ ……消え失せる！！！」

!!!

大国の皇帝と、その妻の断末魔が響く。

世界そのものを変えようとした観測者は、他でも無い世界に吞まれ、塵と化した。



「はっ、良い恰好ね……お義父様。それに、お母様」

世界に……集合無意識に一番近かった少女が、剣の崩壊と共にルルーシユの前へ姿を現した少女がそう言った。

宙に舞って消えていく、塵を眺めながら。

「……出来れば、その死にざまも拝みたかったな」

「…アルカ」

「何、兄上」

「これからどうするつもりだ」

「どうする……ねえ」

チラリとアルカはC・C・に視線を送る。

地べたに座り込み、意気消沈と言った様子だ。

「Cの世界に触れて俺達は知った。人々は明日を望んでいる、と。それはアルカ、お前にも感じただろう？ だから願いを届けてくれた」

「……………」

「だからもう一度聞こう。お前の願いで歪めたこの世界で、お前は何をしたい？」

「私は——」



第二次トウキョウ決戦から一か月が過ぎた。

被災したトウキョウ租界は復興の兆しが見え始め、今日に至るまで戦火を浴びることも無かった。

いや、トウキョウ租界だけでは無い。

世界中の至る所で、ここ一か月大きな争いは生まれなかった。

ひとえにそれは、ブリタニア皇帝：シャルル・ジ・ブリタニアが玉座を空けていたからである。

反ブリタニア組織の黒の騎士団を戦力として保有する超合衆国ですらも、皇帝の不在とゼロの失脚により、まともな活動は取れていなかった。

そんなある日、全世界に激震が走った。

一か月もの長期に渡って席を空けていた皇帝シャルルから、重大な発表があると。

ブリタニアの首都、帝都ペンドラゴンでは皇族と主要貴族が集まり、あの男が姿を見

せるのを待っている。

全世界の人々が、中継を通してその様子を見ている。

「皇帝陛下、ご入来!!」

軽快なファンファーレが宮殿内に鳴り響く。

そう、これは世界の王の凱旋歌。

——誰もがそう思っていた。

「は?..」

ブリタニアの第一皇子、オデュッセウスが声を上げた。

毒にも薬にもならぬ、第二皇子の陰に隠れた平凡な男。

しかしそんな彼にもこれが異常であると、そう感じられたのだ。

「あれって……」

「嘘、まさかテロリストの……?」

彼に続いて主要貴族達が口々にそう言った。

そう、現れた人物は皇帝などでは無かった。

響く足音は舞踏会に向かうお姫様の様に軽やかで、その体軀も非常に小柄。身に纏う服装も、気品を感じるがただの学生服だ。子どもと言っても差し支えなかった。

しかしそんな、威厳とは無縁の風体であるが故、その顔を覆う仮面が余計に恐ろしく見えた。

その仮面をオデュッセウス達は知っている。

ブリタニアにとつてのテロリスト、そうでない者達にとつての英雄。

そんなゼロに付き従う、日本の貴き血【皇】を名乗るもう一人の少女だったのだから。会場のざわつきなぞ何のその。

その【皇】は君主の椅子に腰掛けた。皇帝だけが座る事を許された玉座に。

「まさか……あのテロリストがお父様を……」

第一皇女、ギネヴィア・ド・ブリタニアが口を開いた。

「衛兵！ 何をしている！？ あの痴れ者を——」

『まあ、お姉様。落ち着いてください。貴女は歳を重ねるばかりで全く成長していない。少しは考えたらどうですか、この状況を』

玉座の少女が仮面に手を掛ける。

皇族であるギネヴィアを姉と呼んだ少女が。

この場に居る全員が、ギネヴィアさえも固唾を呑んだ。彼女の一挙手一投足、目が離せなかった。

仮面から現れたのはやはり幼い少女だった。

淡いクリーム色の髪、アメジストの瞳、陶器の様な白い肌。

「……なっ」

「あ、ありえない……」

それを彼女達は知っている。

皇族であれば、誰しもが知っている。

無数にいる兄弟達の中でもさらにその末端。

「私が、第99代皇帝。アルカ・ヴィ・ブリタニアです」

最も皇帝の座から遠いとされていた少女が、そう雄弁に語った。

これはアルカが生まれるよりも前の話。



ナナリーがまだ、生まれたばかりのそんな時期。

皇妃マリアンヌは毎日の様にそこへ訪れていた。

不可思議な力であり、計画の源。ギアスを研究する嚮団。

「ねえ……このR因子っていうのは何なの？」

モニターを指差しながら、彼女は研究員に問う。

「ギアス能力に関わる才能……素質……と言うべきでしょうか。高ければ高いほど、その能力は強大なものとなります。逆に——」

「低ければその能力は微小で使いにくくなる……と」

私の様に、とは言わなかった。

「じゃあこのC因子っていうのは？」

「まだハッキリとは分かっていないのですが……。心を読んだり、通わせたり……要するに教祖様たちに近い素養かと……」

ふうん。と機械に繋がれた容器の中で眠る、生まれたばかりの赤子を眺める。

「ナナリー様はC因子に関しては高い数値を示しています。逆にルルーシユ様をR因子をシャルル皇帝とマリアンヌ王妃……2人の素養をそれぞれ受け継いだのかと」

「遺伝するの？」

「はい。両親の値が高ければ高い程、その子どもに引き継がれて——」
「仮に後付けでも？」

「……………ある程度は……………」

マリアン又はしばらく考え込んだ後、朗らかな笑みを浮かべた。

「なら因子活性剤をくださいな。ルルーシユ用にR因子、ナナリーと私用にC因子のを」

「……………王妃にもですか？」

「……………何かと都合良さそうだから」

悪戯つぼく笑みを浮かべた後、マリアン又は眠るナナリーに手を伸ばす。
優しい手付きだった、まさに理想的な母親の。

しかしながら、その赤子を見つめる目はどこまでも冷めていて恐ろしかった。

「聞いていて？ ナナリー。貴女の素質は子どもに受け継がれるんですって」

細い指が赤子のナナリーの方を撫でる。

「どうする？ お兄ちゃんとの子、生んでみる？」

これは皇帝も、ナナリーも、C・Cも。

誰も知り得ない、今後も知る由の無いほんの一幕。

TURN 30 一天万乗の君

有り得ない。

と誰かが言った。

そう、有り得ない。

あの少女が、玉座に座る事は決して。

アルカ・ヴィ・ブリタニアは皇族の中でも末端も末端。

他に何人、皇族が居ると思っっているのだ。他に何人、先立つ兄妹達が居ると思っっているのだ。

既に軍人として、為政者として、成果を挙げている者も居ると言うのに。

今まで何もしてこなかった……国にすら居なかつた末妹が、皇帝だと？

いや、そもそも……

「生きていた……う？」

ギネヴィアは知っている。いや、彼女だけでない。オデユツセウスも、カリーヌも。この場に居る皇族、主要貴族全員が知っている。

彼女、アルカ・ヴィ・ブリタニアは、マリアンヌを追う様に殺された、と。

「そうです、お姉様。地獄の底から舞い戻ってきました」

死んだとされた少女は穏やかな笑みを浮かべ、またも雄弁と語る。

気に喰わない。

チラリ、とある女性の面影が重なった。

庶民の出でありながらラウンズまで上り詰め、あまつさえ皇帝の側近として迎え入れられたあの女。

マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアの顔がチラつくのだ。

「う、嬉しいよ、アルカ。生きていたなんて。しかし…少々悪戯が過ぎるんじゃないか？

そこはお父様の——」

「相変わらず何も見えて無いようですね。お兄様」

これではシュナイゼルの陰に隠れるのも当然です。

そう、玉座の少女は嘲笑う様に自身の兄弟きょうだい達を見つめる。

「先代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアは私が殺した。よって、次の皇帝には私になる。――

――弱肉強食はこの国の国是でしょう？」

今度こそ宮殿は困惑に包まれた。

呆然とするもの、怒りを表すもの、恐怖を感じるもの。反応は様々であるが、誰一人として彼女の即位に賛同するものなど居ない。

しかしそんな様すら娯楽映画だと言う様に、相も変わらず彼女の顔には笑顔が張り付いていた。

「あの痴れ者を排除しなさい！ 皇帝陛下を弑逆しいぎやくした大罪人です！」

混沌としたこの場で、一早く平静を取り戻したのは第一皇女、ギネヴィアだった。

いきなり皇帝を名乗る少女よりも、既存の皇女に従うの極自然の事。衛兵達は玉座の

少女にその切っ先を向け、始末しようと試みる。

——しかし、その刃が少女の首に届く事は無かった。

「おっと、オイタが過ぎるな？ 皇帝の御前だぞ？」

槍の切っ先が切り落とされていたからだ。

零れた刃はカランと虚しく音を立て、剣を携えた銀髪の女性の足元で転がっている。

「皇帝陛下への無礼を、見逃す訳にはいかない」

そしてもう一人。

少女の盾となる様に立ち塞がる茶髪の青年。

「紹介しましょう。私の騎士、ノネット・エニアグラム卿。そして枢木スザク卿。彼らには新しきラウンズとして、それぞれナイトオブワン、ナイトオブゼロの称号を与えます」

さらに宮殿内の困惑は増していく。

かつて先代皇帝に忠誠を誓った円卓の騎士達が、今では皇帝を自称する少女の前で跪いてる。

温厚で有名なオデュッセウスですら、その異常さに僅かに身震いを覚えた。

「そして——もう一人」

しかし、少女は淡々と告げる。

既に決定事項だと。お前達に拒否権は無いのだと言う様に。

そう、元より関係無いのだ。

第一皇女が反発しようと、第一皇子が危機感を覚えようと、この場に居る誰一人として賛同していないくても、玉座の少女には関係無い。

「次期、帝国宰相を紹介します」

コツコツと、ブーツの踵を地に鳴らしながら、その眼帯の男は現れた。

どこまでも黒かった。艶やかな髪も、身に纏う服も。

死神を彷彿とさせるその男の存在も少女と同じ様に異質だった。

かつてユーロ・ブリタニアで指揮を執った軍師。パリへの侵攻に多大なる貢献をした後、死んだ筈の男。

「ジュリアス・キングスレイ卿」

彼もまた、皇帝の元に跪き、頭を垂れる。

「……あ、アルカ……君はこんな事をして——」

危機感を覚えつつも、オデユツセウスは対話を試みた。一切理解は出来ないし、策も何もない。しかし彼は自身の知る妹だと信じて語り掛けた。

これが現代で無ければ、平和な世の中であれば、平凡ではあるものの彼は良い統治者となったかもしれない。

「いや、そもそも。先程の仮面は一体………?」

聞きたい事は沢山ある。

皇帝殺し、次期皇帝の座、離反した2人のラウンズ……………。

しかし、まず第一に解消すべきはあのテロリストと同一の仮面。

親族殺しは…まあ悲しい事だが皇族・貴族ではよくある事だ。

あと2つに関しても、力を持ち過ぎた皇族や騎士達が過去に起こした事例がある。

どちらも歴史としては一般的に知り渡っている事柄も多いし、今起きたとしてこの国の根幹が揺れる事は無い。

だけど、あの仮面だけはダメだ。

皇……つまりイレヴン達にとつての皇族の様なもの。

その一族の1人である少女が、ゼロに付き従いテロ活動を行っていたのは周知の事実。

そんなテロリストの仮面を、アルカは身に着けてここに現れた。

そしてよりもよって、皇族である自分達の事を兄、姉と呼んだ。

その意味が分からない程、オデュッセウスは間抜けでは無い。

だから彼女に否定して欲しくて彼は問うた。

自分が討ち取り、その戦利品だと、高らかに掲げて欲しかった。そんな淡い展開を、望んでいた。

「皇アルカ。そう、私のものです」

「は？」

しかし、そんなオデュッセウスの希望もあつさりと吐き捨てられる。

「まあどちらでも、好きな方で呼んでください」

少女は静かに立ち上がる。

体軀は大きくない。その手足も簡単に手折れてしまいそうなほど細く、肌は人形の如く白い。

しかしそんな可憐とも言える外観にも関わらず——いや、だからこそ彼らは目を離せなかった。

「いずれにせよ、お前達の王の名である事に変わり無いですから」

その唇から紡がれる言葉から。

その毒々しく輝く赤黒い両目から。

「私が望むのはただ一つ——忠誠を」

鈴の様な声音が、聖少女の様な可憐な声が響いた。

それがさも合図かの様に、先程までざわめきに包まれていた宮殿内は静まり返る。

「イエス・ユア・マジエステイ」

沈黙を破ったのは他でも無いオデュッセウスだった。

焦燥と困惑に駆られていた筈の彼の顔は何処までも穏やかであり、丁寧な所作で膝を付く。

そしてそれに連なる様にギネヴィア、カリーヌ。次第に宮殿に集まった全員がアルカを前に頭を垂れた。

「オール・ハイル・アルカ！　オール・ハイル・アルカ！　オール・ハイル——！！」

まさに讚美歌の如き響き。

宮殿内を震わす、新たな皇帝の誕生を称える歌は、いつまでも続いた。



「ハッハッハ！」

男は笑っていた。いつになく上機嫌に、心の底から楽しそうに。

例え肉親がギアスによって歪められていても、例え母国が奪われようと、彼は楽しそうだった。

元々、この男にとってブリタニアという国は、世界の1/3を統べる国すら、ちつぽけに見えていた。

だから今更、国を1つ取られた位で、焦る様な事は無い。

相手が動けば、こちらでも合わせて動けばいいだけ。

いや寧ろ、先に手の内を晒してくれるのなら、この後の展開も予測しやすいという

もの。

「ありがとう、ルルーシユ。いや、ジュリアス・キングスレイと言うべきかな？ 表に出てきてくれたお陰で、動きやすくなる」

だから男は…シユナイゼル・エル・ブリタニアは感謝を述べた。
勿論、皮肉ではあるが。

「殿下…お言葉ですが…：…相手は、皇アルカ…：…新皇帝の方では？」

そんなシユナイゼルに水を差す様に、黒の騎士団を離れた男、デイトハルトは疑問を投げる。

「アルカは差し当たっての問題では無いよ。彼女は賢いけど…、人の上に立つ様なタイプでは無いだろう？」

シユナイゼルにとってのアルカ・ヴィ・ブリタニアは武人…：…要するにコーネリアや

ラウンズの様な戦場でこそ真価を發揮するタイプだ。

勿論、全く向いていないとは思っていない。親が親だし、何よりルルーシユの妹なのだから。

しかし、圧倒的に経験が足りなさすぎる。

帝国から離れなければ、その才能も開花したかもしれないが、所詮、彼女は帝国の捨て子。外の世界で学べる事など、たかが知れている。

仮にアルカがルルーシユと同じタイプならば、皇神楽耶を蹴落として当主に成り代わり、日本の実権を握っていただろう。

「勿論、戦場では会いたくないがね」

「しかしその心配も無いのでは？ 彼女は皇帝。戦場を駆ける役割は……」

「ふむ、さあ。どうかな。僕にはアルカがクイーンで、ルルーシユがキングに見えるけどね」

暗にシユナイゼルはこう言いたいのだ。

アルカは形だけの皇帝であり、その裏で糸を引いているのはルルーシユ。アルカの即位も、自分自身を宰相にしたのも、全て意味があつてのこと。

シユナイゼルはそう考えている。

「仮に、ルルーシユが手を打っていると仮定しよう。向こうの戦力は枢木卿、エニアグラム卿、それとアルカ。もしかしたらオレンジくんも一緒かな？」

エニアグラム。その名前を聞いたコーネリアの顔が曇る。

「強大ではあるが、旧ラウンズが離反している以上、使える戦力は少ない。きっと暫くは、各地で起きる反発の制圧で忙しいだろう。僕らはその間に——カノン」

「はい。トロム機関から……既に完成していると……」

「うん、じゃあ試運転だ。まずは帝都ペンドラゴンへ。ああ、気付かれない様に慎重にね」

「兄上！」

咎める様なコーネリアの声に対し、シユナイゼルは穏やかな微笑みを返す。

「まだ打たないさ。国はルルーシユ達にあげようじゃないか。しかし」

その先の世界を獲るのは、彼らのギアスか、それとも――。

シユナイゼル・エル・ブリタニアは好戦的な笑みを浮かべた。

TURN 31 破壊

ローゼンクロイツ家。

その家名が知れ渡ったのは遙か昔の事。

それこそ、98代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアが皇帝となるずっと前からブリタニア皇族に仕え、主要貴族として時には政治にも携わってきた。

シャルル皇帝の即位時に起きた反乱……血の紋章事件の際も反対派皇族を一斉に炙り出した功績もあり、特にここ数十年の成長は目を見張るものがあった。

それこそ、皇族との縁談が持ち込まれるほどには。

遙か彼方の祖先からずっと、皇族に仕える事に誇りを持ち、血統を守ってきた。

それが今はどうした？

まるで自分達の歴史がゴミだと言わんばかりに、悉くを破壊されている。

┌

美しかった庭園の花々は無骨なナイトメアに踏み潰され、生まれ育った家は最早瓦礫と呼ぶに相応しかった。

「ふ、ふざけるな——」

どれだけの時の積み重ねがあつたと思つている。一体どれだけ、この国に貢献してきたと思つている。

憎い。憎い。憎い。

玉座にふんぞり返るあの少女が。脳裏にチラつくあの皇帝の微笑みが、見下した瞳が、ただただ憎い。

元々、アルカ・ヴィ・ブリタニアとかいう死にぞこないの皇女など、認めてはいなかつた。

今に限つた話では無く、アイツがアリエスの離宮に居た時からずっと。

皆、同じ気持ちだった。

だからこうして一斉蜂起を起こした——結果がこれだ。

何の前触れも無かつた。

あの皇帝は何の前触れも無く、唐突にあの男を送り、我が神聖な領地を火の海と変えた。

「ご機嫌如何かな？ ローゼンクロイツ伯爵……ああ、失礼。元伯爵でしたね」

黒髪の間から垣間見える、アメジストの瞳が挑発的に細まる。

ジュリアス・キングスレイが。

「貴様ら……こんな事をして……。ただでは済まないぞ！」

「ふっ。おかしなことを言う。一体貴方に何が出来る？ 特権に寄生するだけしか芸が無い一族の貴方が」

主要貴族などと名ばかりだろう。とジュリアスは言った。

先代皇帝は良くも悪くも、足元の貴族達に無関心だった。彼にとって、ブリタニアがより強大になったという結果こそが大事だったのだから。

だから特権に縋り、裏で悪事を働く貴族が多く蔓延った。

このローゼンクロイツの様に。

「そもそも、過去、シャルルに取り入れたのも裏切りがあつての事だろう」

「！」

「シャルル派に戦況が傾いたから鞍替えしただけの事……。そんな奴ら、手元に置く必要が何処にある？」

カチャリと冷たい鉄の感触が彼の恐怖心を掻き立てた。

ジュリアスが連れている神官の様な風貌の部下が、その手に持つライフルを彼の額に押し付けているのだ。

「ま、待て——！」

パン、と音が響く。

きつとまだ意識があつたなら、あれやこれやと思つても無い言葉を並べていただろう。

「キングスレイ卿」

「何だ」

すっかり静かになった男の傍ら、部下からの報告がジュリアスの耳を打つ。

「———そうか。ならば後は任せる。滞り無く行え、更地にせよと陛下からの御命令だ」
「イエス、マイロード」

ジュリアスは身を翻し、乗ってきた飛空艇へ歩を進める。

先程までの無感情な顔付きとは打って変わって、呆れ半分、嬉しさ半分といった複雑な表情で。

「……全く、過保護なやつだな」

その眩きは、船内で待機していた茶髪の青年の耳にしつかりと届いていた。

▼
ブリタニア国内は真つ二つに割れていた。

新皇帝を支持する者とそうでない者。

決まって前者は庶民やナンバーズで、後者は貴族だった。

皇帝、アルカ・ヴィ・ブリタニアの振る舞いはそれほどまでに苛烈なのだ。

ブリタニアの国是、世界の1/3を統べる強国である由縁、不平等を良しとするその文化を悉く破壊しているのだから。

貴族階級の廃止、財閥の解体、ナンバーズの解放……。古き文化、過去の栄光などは全て真向から切り捨て、まるで自分が新たな世界を創ると言わんばかりに。

反発する者は全て力で抑えつけ、無理矢理にでも推し進めるその姿勢に対し、あまりにも先が見えず、超合衆国も手をこまねいている始末。

つまり、今の世界にこの皇帝を止めるものは存在しない。

「私の元へ、下りたいと?」

「は、はい。仰る通りです……皇帝陛下」

玉座の前で跪く男が居た。

身なりは上々、容姿はそこそこ。

時代が時代ならば女性には困らなそう、そんな男だった。

そんな彼はその上物のスーツに皺を作りながら、皇帝の様子を伺っていた。

体躯に不相応な玉座に座る皇帝は、それこそ人形に見間違える程だ。

色白い肌と感情の無い瞳、整った容姿がますますそれを助長させていた。

しかし、だからこそ恐ろしい。

彼女はその透き通った声でブリタニアという国を破壊し、蹂躪しているのだから。

それも顔色一つ変えずに、悪びれる様子すら見せず。

「ふうん、それで?」

喰い付いた。と男は内心で笑みを作った。

ある程度の自信はあったが、皇帝の僅かに上がった口角を見て、それは確信へと変わった。

彼の家はKMFの台頭に乗じて成り上がった、比較的歴史の浅い貴族であった。ナイトメア用の武装を主に製造するを生業としている言わば武器商人の様な役割を担って

いた。

だから男にとってKMFは専売特許であったし、皇帝がかの【閃光】の娘と聞き及んでからは、謁見する機会を伺っていた。

——閃光の娘とあれば、KMFの話題にも喰い付く筈だ、と。

実際、新体制になってからと言うもの、以前にも増してKMFの配備が進んでいた。

これは単純にシュナイゼルを主とした反皇帝派の離反に際する戦力の穴埋めだけでなく、皇帝自身が戦事に関心があると、そう男は考えたのだ。

だから、ただ呑気に特権に縋っていた貴族達とは違い、勤勉に武器を作り続けてきた自分達ならもしかして——そう、淡い希望を抱いてここに来た。

男の売り込み文句はこうだ。

来るシュナイゼルとの直接対決に向けて進めている軍の配備を手助けする、と。

「一部武装の製造を貴方に託せ、と？」

はい。と男は答えた。

製造ラインを絞れば効率は上がる。

極簡単な話だ。

「見返りに何を求める？」

何も。ただただ、陛下の世の安寧を。

「——へえ」

勝った。と男は確かな手ごたえを感じた。

件の皇帝は、そのアメジスト色の瞳を興味深そうに細め、こちらに笑みを向けている。完全に読み通りだった。

皇帝とは言えまだまだ子ども。反発するのではなく、相手に寄り添い、持ち上げ、少しでもいい気分にするれば必ず隙は生まれる。

そう、思っていた——。

「舌先三寸口先だけの巧みな弁舌。うわべだけのうまい言葉で、心や中身が備わっていないこと。とはこの事ね。まあ、ジョークとしては面白いわ」

しかし続いた言葉は表情とは裏腹に、冷たく突き放したものの。

これには男も困惑を示す。

だから思わず食い気味に返してしまった。

私は嘘なんて吐いて無い、と。

「あら、流石に詳しいですね。現地のお友達に教えて貰ったの？」

最初、皇帝が何を言っているのか分からなかった。

しかし、彼女はその困惑している様子すらも楽しむ様に、薄い笑みを浮かべている。

「武器の製造なんて頼む訳ないでしょう？ 中華連邦の鋌力：なんて言いましたっけ

……嗚呼、鋼體。サザーランドにも劣るガラクタが付いている物と同じのを使えって？

貴方が横流ししているお友達なら喜ぶかもね。でもそれと同列に見られるのは心外」

顔がみるみる青くなっていくのが自分でも分かった。

バレている。

「裏でコソコソと中華連邦に武器を横流しして私服を肥やしてた売国奴に居場所はあ
ると思っています?」

無知だと、侮っていた。

だってこの皇帝は、つい先日まで本国に居なかったと聞いていたから。

この数年で成り上がった貴族の生業も、その裏でしていた事も、把握しているとは思っていないかった。

「ノネット、私は武器商人が来ると聞いていたのですが? これじゃあ良くて道化です」

皇帝は溜息を吐きながら、横に控える騎士、ノネット・エニアグラムへ愚痴を零す。

「申し訳ありません。この男が是非に、と。陛下の軍に勝るとも劣らない物を用意する
と息巻いていたモノですから」

紫色のマントを羽織った女騎士は淡々と言う。

違う、そんな事は言っていない。

自分はただ、本当にちよつとでも皇帝と手助けになればと思つて提案しに来ただけだ。

配下に加われれば、気に入つて貰えれば、命は助けてもらえると、そう思つて。しかし、口は動かなかつた。

皇帝の冷たい瞳が、こちらを見つめていたから。

有無を言わさぬ重圧が、この身体を拘束している。

「つまり、私の軍は貴方のガラクタを使うのに相應しい、と? ——不敬極まりな

い」

突如、男はその頭を地面に押し付けられた。

いつの間にか後ろに回つていた男が取り押さえたのだ。

恐ろしい。

ここで男は、今まで感じた事のない恐怖を憶えた。

先代皇帝には威厳があつた。皇帝たる威厳、覇者たる威厳、勝者たる威厳。

そんな絶対性があつたから、寧ろ分かりやすかつた。超えてはいけない線引きが、踏

み込んではいけない領域が。

しかし、この皇帝にはそんなものは無い。

気まぐれの様で論理的、論理的の様で気まぐれ。まるでこちらの命を、人生を持って余す悪魔の様。

最初から、全てお見通しならば、何も言わずに初手で殺せば済む話なのだ。

いやそもそも、謁見の場を設ける必要は無かった。

あたかも、自分自身に恐怖するその反応が見たかっつと言わんばかり。

「その耳障りな舌、三寸ほど切つてしましましょうか。それでもまだ喋る元気があるのなら、またお話を聞いてあげましょう。まあ最も、生きていたらの話ですが」

男が見た最後の光景は、それはもう美しい少女の顔だった。



逃げる様にコックピットに逃げ込んだ。

操縦桿を握れば、シミュレーターに没頭すれば、モヤモヤが晴れると思ったから。しかし、それは全くって言っつていいほど逆効果だった。

「——アルカ」

操縦桿にぶら下がるお守りがチラつく。

1年前：体感的にはもつと遠い昔の様にも感じるが……とにかく1年前に、彼女から貰ったモノ。

ずっと一緒に戦ってきた仲間だった。時には家族だとすら思っていた。

共通の敵を持ち、途中からは共通の秘密も持ち、支え合っていた。少なくとも、私は

そういう気持ちで居た。

中華連邦でブリタニアに捕らえられ、騎士団を離れた時は毎日毎日、彼女の事を思わない日は無かった。

「——アルカ」

そして念願の戦線復帰。

ブリタニアから逃れ、騎士団のエースとして再び舞った戻った時には、アルカは居なかった。居たのは彼女の半身であるKMFの無窮だけ。見るも無残な、最早修理など不可能なレベルでボロボロとなった蒼い残骸。

死んだ。

縁起でも無い事を考えてしまっていた。口では生きていると言いながら、頭の何処かで諦めていた自分が居た。

だけど、彼女は生きていた。

生きて、また私の前に現れた。

——しかし、その彼女は全くの別人の様だった。

「——アルカっ!!」

世界を冷めた瞳で映し、その声音は何処か見下していて、張り付いた笑みは人形の様だった。

誰だ、あれは一体誰だ。

アルカの瞳には折れない意思があつた。アルカの声音は想いやりがあつた。アルカの笑みは温かく人間らしかつた。

あの不釣り合いな玉座に座る彼女を、私は知らない。

「……どう、して………」

今の超合衆国は新皇帝である彼女をどうするかで揺れている最中。

一見、振る舞いを見れば悪としてきたブリタニアそのものを破壊しているのだ。彼女を支持する声も出始めている。

彼女の事をあまり知らない人達が、彼女の存在は善か悪か、そう判断しているというのに。

最も彼女の近くに居た筈の私は、何も判断が出来無い。

一言、言つて欲しかった。

言つてくれれば、私は自信を持って判断出来たかもしれないのに。あの場に居るルーシユとスザクが羨ましい。妬ましくさえ思う。共に戦つてきた時間は……私の方が長いのに。

「アルカにとって、私は何なの？」

握り占めたお守りは何も答えてはくれない。

TURN 3 2 傍目八目

耳に届くのは、媚び諂う空虚な言葉。

頭に響くのは、有象無象の願いの言葉。

嗚呼、五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い。

五月蠅くて夜もまともに寝れやしない。

「次っ」

しかしそんな中でも、全てを忘れて没頭出来るのだから、やはりKMFの中は心地が
良い。

カメラに映る敵を、ただただ殲滅すれば良いのだから。

・ ・

「凄いですね…。どんどんスコアを更新しています」

元ナイトオブシックス専用研究チーム、現、皇帝直属研究機関「キャメロット」の副主任、セシル・クルーミーが啞然とした様子で言った。

「まあ元々、騎士を目指してたらしいからね。当時は有名だったよ？ マリアンヌ皇妃の教育熱心ぶりは。それに騎士団時代も常に戦場だろ？ ラクシャータが気に入るだけはある」

続いてその主任、ロイド・アスプルンドが言った。

「陛下。ほら、もう一つレベル上げますよ〜！」

『うん』

2人の視線の先にはマリーカ・ソレイシイが興奮した様子でシミュレーションの設定

を弄り回していた。

「あまり根詰め無いで下さいよ。陛下、明日も予定があるんですから」

分かつてる。30分前にも聞いた言葉が研究所内に響き渡り、セシルはやれやれと首を振った。

「ロイドさんからも何か言っただけでください！」

「僕から？ 無駄無駄、聞くような人じゃないでしょ。こういうのは本人の気が済むまでやらせた方がいいの。陛下にとつても、マリーカ君にとつてもね」

「マリーカちゃん？ ……………あっ……」

天真爛漫、底抜けのポジティブ、ロイドに継ぐレベルの研究オタク……特徴を挙げればキリが無い彼女。

一見悩みなど無さそうな彼女ではあるが、セシルはその心の底に持っている物を知っていた。

「キューエル卿…の事ですね」

「そう。ナリタ連山での作戦の時、とんでも無く強い無頼が居ただろ？ 紅蓮はその時、ジエレミア卿と交戦してるし……。きつと、その無頼に乗っていたのは殿下本人。そしてマリーカ君は今や、兄の仇の部下だ。思う所はあるでしょ」

戦場である以上、誰かは死ぬ。

ましてや当時のキューエルとアルカは敵同士。アルカが死ぬ場合も勿論あった。結果的に、キューエルの力及ばなかっただけだ。

そこを分かっているのか、マリーカはその事への恨み言は一度も吐いた事は無い。本人には勿論、周りの同僚達にも。

軍に入っている以上、その覚悟は常にしていたから。

しかしながら、身内最良は抜きにしても兄の操縦技術には目を見張るものがあつたし、自分自身もそれを誇っていた。

だけど兄は負けた。

ましてや旧世代の量産型ナイトメアに。

だからマリーカは知りたいのだ。

この皇帝が……皇アルカの強さが絶対であることを。

『……………レベル、3つ位上げたでしょ?』

「あ、バレました?」

そして、この少女の力が何処まで伸びるかを。

それが彼女なりの、気持ちの決着の付け方だった。

「まあ陛下にとつても良い息抜きだと思おうよ。ほら、昨日の謁見は散々だったらしいから」

「ああ……………鋼髓の…」

「それにデータが沢山取れた方が僕らにとつても有難いからね」



あれからもう1時間。

暇を持て余していたセシルが料理でもしようかと、包丁を取り出した所で件の少女はコックピットから出て来た。

「お疲れ様です、陛下！」

「ん、ありがと」

マリーカが持つてきたタオルを受け取り、汗を拭く。

数時間にも渡ってシミュレーションをしていたのだから、当然ながらその運動量も凄まじい。

しかし、その疲労も感じさせずに軽やかな足取りで歩く彼女は流石と言うべきか。

「分かっていた事だけど、やっぱり皇帝ちゃんはこちらの方が向いてるねえ」

「ロイドさん！」

ロイドの相変わらずの態度にセシルは非難の声を飛ばすが、アルカがそれを制止した。

「いいの、セシルさん。ここは公の場じゃないんだから」

「いえ、ですが……」

「まあ確かにその姿を見て、誰も皇帝とは思わないですよ〜」

「マリーカちゃんまで!!」

と、口では非難しつつも、セシル自身も内心でマリーカの言い分には一理あった。

今の皇帝…アルカは雑に髪を1つに纏め、タオルを首に掛けた挙句、タンクトップにシヨートパンツと非常にラフな格好だったのだから。

「それより、データは役に立ちそう?」

「ええ、それはもう。所で、どうでした? 新しいナイトメアは?」

「反応がコンマ2秒位遅かったかも。もう少し早くても大丈夫」

「えっ!?!」

セシルが素っ頓狂な声を挙げる。

それもその筈、今回は彼女の中での最高の調整のつもりだったのだから。

「あのく、お言葉ですけど、エナジーウイング付いたら操作感変わりますよ?」

「勿論、織り込み済み」

「あ、はい」

マリーカが恐る恐ると言った様子で手を挙げたが、それも一言で済まされる。

この皇帝、思っている以上に開発者泣かせである。

「出来そう?」

「まあ完成は何とか。だけど紅蓮と同等とまでは言えませんね」

「あちらは元となる機体がありましたから……。ただ今回の2機は完全新造…、0からの設計です。時間がいくらあっても……」

この先の戦いで、真っ先に障害となるのは紅蓮だ。

現状、この世界で唯一の第九世代NMF……。いや、世代を1つ飛ばして第十世代と言ってもいいかもしれない。

それほどまでに、あの機体は強烈だ。

……それをその場のノリで開発してしまったこの3人が言うのだから間違いない。だから紅蓮に太刀打ち出来るほどの機体が必要だった。

それほどまでにあの「紅蓮聖天八極式」という機体にはありとあらゆる可能性が秘められている。

それこそ、たった一機でこちらの軍を壊滅させてしまう程の。

「じゃあ、第2生産ラインを止めてアルビオンに回して。1機さえ出来てしまえば旧植民地エリアへの侵攻も容易になる、量産機はその後からでもリカバリーが——」

「いや」

2つの足音と共に、とある男の声加わった。

「僕よりもアルカの方を優先するべきだ。だろ、ルルーシユ？」

「そうだな、全く。蜃気楼の修理を優先しなければ良かったんじゃないか？」

2人の青年だ。

一方は茶髪、一方は黒髪。

良く知る人物だ。

国内の反皇帝派の討滅を命じていた2人の部下……、いや今はただの友人と兄か。その2人の柔らかい表情が、それを如実に表していた。

「だって兄上、ナイトメア無いと弱いんだもん」

「あーまあ、それには同意する、かな」

「……………お前らな……」



「んで？ 結局、お前の方を優先したのか」

「うん、そうだね」

アリエスの離宮。

かつてルルーシュやナナリー、そしてアルカが生まれ育った場所。

しかしながら住んでいた、と言っても決して閉鎖的な空間として扱って居たので無く、シュナイゼルやクロヴィス、コーネリアとユーフェミア等、他の異母兄弟達の出入りもあり、他の皇族領と比べても比較的、人で賑わっていた。そんな場所だ。

現在は皇帝であるアルカ自身が人の出入りを止めている為、宮殿内に居るのは極僅かの人間ののみ。そしてそれも大半はギアスで縛り付けている者達であり、かつての賑わいはなりを潜めている。

「エリア侵攻でどうしても障害になるのは旧皇帝派達。取り分け、ビスマルクは厄介」

「ああ、なるほど。だからお前か」

「そう言う事」

C. C. はやれやれと言った様子で溜息を零した。

「折角の休みだと言うのに、年頃の女が……花が無いな」

昼間はシミュレーションで時間を潰し、口から語られる事は政治や戦争の話。

私がお前位の時はもつと遊んでいたぞ?とC. C. は遙か昔に想いを馳せながら言った。

「今更じゃない? 今まで、年相応に過ごした事なんて殆ど無いよ」

生まれた時から……いや生まれる前から普通の人生とは無縁だった。

常に血生臭い人生、命の危険が隣り合わせの人生。

それこそ、年相応に過ごしたのなんて、アツシユフオードに通っていた時くらいか。

「まあ別にそうしたい、とも思わないけどね。私は私だ。それに——」

アルカはC. C. の手を自身の胸に手繰り寄せ、熱っぽく口を開いた。

「夜は貴女が花を持たせてくれるでしょ?」

「……………そうだな」

途端、アルカは手首を掴まれた。

「へ?」

有無を言わせぬ力で芝生の上に押し付けられ、天地が逆転する。頬にかかったC・C・の髪が日差しでテラテラと光っていた。

「まあ持たせるのでは無く、散らすのが正しいがな」

「あの……」外……」

「黙れ、お前が悪い」

ピシヤリと言い放ったC・C・の眼は、狼の如く細められていた。

TURN 33 天に咲く花

これはあくまでも旧体制での話だが。

ナイトオブラウンズには数字の順番はあれど、それに序列は無い。

あくまでも皇帝の元に集った円卓に座る騎士達の席次であり、それ以上もそれ以下も無い。

だからラウンズは皆、平等な立場の元で公務にあたっていた。

しかし、これはあくまでもナイトオブワンを除いての話。

ラウンズの中でも唯一、ナイトオブワンだけはその意味合いが変わってくる。

皇帝直属の騎士であるラウンズの中でも、より上の立場：つまり実質的な右腕であるナイトオブワンは、事実上の騎士団長としての役割を有していた。

また、それに合わせて他のラウンズに無い特権を有しており、その中でも最大の物が「エリアの統治」。つまりブリタニアが有する植民地エリアの内、好きなエリア一つを自分の物に出来る。

本来は皇族、またはそれらに選定された主要貴族のみが有する特権を、騎士である身ながら有していたのだ。

実際、元ナイトオブセブン：枢木スザクはその特権を利用してエリアーを統治しようとしていた。

力さえ認められればナイトオブブラウンズは、ナンバーズ出身であるスザクにとつて最上位の地位であり、内部から変えるという彼の抱いていた願いに実に沿っていたものである。

皇帝：アルカ・ヴィ・ブリタニアの手によつてナンバーズ制度が撤廃された今、ナイトオブワンの特権は無効となり、既存の該当エリアも解放された筈だった。

しかし――。

元ナイトオブワン、ビスマルク・ヴァルトシュタインが治めるエリアはその限りでは無かった。

各地にある植民地エリアの中で、エリアーは属領になつてからの歴史が長く、既に反帝国派閥も淘汰されていた。立地も本国から程良く近く、資源も軍備も豊。衛星エリア属領として安定した治安と生産性が認められた場合に与えられる公的な地位。昇格す

ればナンバース制度も緩和され、ナンバース達も住みやすくなる。エリアーではクロヴィス、コーネリアが衛星エリアを目指して奮闘していたが、反ブリタニア組織の反抗が激しく、ブラックリベリオン後は矯正エリアまで下がってしまった。の見本と言つても過言では無く、そこに住まうナンバース達もブリタニアの支配を甘んじて受け入れていた。

それには単に時間的な問題以外にも、このエリアの長、ビスマルク・ヴァルトシュタインが優れた統治者である事が起因している。

ビスマルク・ヴァルトシュタインを一言で表すのなら高潔な騎士だった。

自らが統治者である自覚と、常に規範有れと己を律する事で、エリアに住まう国民や部下達に常にその背中を見せて来た。

この国の国是であり、故シャルルが良しとしていた弱肉強食の風土を良い方面で体现したい男とも言える。

彼の意識にブリタニア人、ナンバースの偏見は無く、あるのは強者か、それとも弱者か。強者であればそれ相応の評価を下し、弱者ならそれは守るべき対象であつた。

だからエリアーに住まう人々は、実力があれば誰でも平等に活躍出来るチャンスがあ

るし、仮に何があってもビスマルクが守ってくれる。

そんな安心感と共に生活していたのだ。

最も、彼が第一にしていたのは皇帝シャルル・ジ・ブリタニアへの忠誠であり、彼がエリアを焼くと言えば迷わずそうするのだが、結果的にはビスマルクは良い統治者としてその名を轟かせた。

また本国に近いのもあって、軍備が整っていたり、主要な国家機関が集約されていたりと、ブリタニア全体にとってみてもエリアは模範的なエリアとして扱われていた。

即ち、エリアーは旧皇帝の支配体制の象徴であり、大国となったブリタニアの全て。強者である証明の様な場所。

逆に言えば、ここが陥落すれば、即ち完全なるブリタニアの崩壊を意味する。

だから彼は新皇帝体制になった後も手放さず、ここに居続けた。

ナンバーズの解放もしない、エリアも明け渡さない。

私は新皇帝を認めない。とでも言う様にビスマルクは崩れかけの玉座に座り続けた。

「ヴァルトシュタイン卿！」

広大なエリアを一望できる政庁、その管制室。

監視役の部下が声を荒げてビスマルクの名を呼んだ。

未だに旧ラウンズの、純白のマントを羽織った彼の名を。

「帝都ペンドラゴンより熱源反応！ 数は一機！」

「ふむ」

アルカ・ヴィ・ブリタニアが即位してからというもの、彼は帝都を監視し続けていた。必ず、このエリアを取りに来る。

そう、確信があつた。

「境界に防衛ラインを敷け、地上部隊は狙撃のみ、航空戦力は全て出せ……戦艦もだ。決して市街地には入れるなよ」

「イエス、マイロード」

このエリアはブリタニアにとって非常に大きい役割を持つ。

それは新体制になっても……いや、新体制になったからこそだ。

現在、ブリタニアにおける主流の機体であるガレス。ガウエインの量産機であるそれは、その殆どをこのエリアーで製造している。

これは立地以前に、ガウエインを開発した研究チームがこのエリアーに居るからであり、ビスマルクが駆るギャラハッドもガウエインから派生した機体だからだ。

つまりこのエリアーをアルカが手にすれば戦力は潤い、手に出来なければ……。

(反撃の機会はある、か)

ならば今はあの皇帝が放った刺客を――。

「そ、そんな……！……対象、第一次防衛ライン突破！ 依然速度を落とさず……いえ、速度を上げて接近中！」

「――」

有り得ない。とビスマルクは思った。

本国からこのエリアーまで。距離的に近いとは言え、これ程の短時間でここまで接近

する事など、既存の兵器では不可能だ。

それこそ、ミサイルの速度と同等のトリスタンですら、この時間では無理だろう。
ならば導かれる答えは一つ。

「……新型か」

・ ・ ・

その少女は嗤っていた。

それはもう美しい笑みを、天使と見間違えてしまう程の笑みを浮かべて軽やかに口を開いた。

「あら、少し早すぎたかしら。全然歓迎の準備が出来て無いじゃない」

向けられた銃口から弾が発射された頃には、もう少女の機体はそこには居ない。

その軌道を追おうと必死に目を動かしても、気づいた時にはもうすぐ後ろ。

ナイトメアは玩具の様に切り捨てられ、辛うじて翳めたとしても、その武器では掠り傷1つ付けられない。

「メインの会場はまだ先かな？」

その機体を駆る少女は三日月の様に口元を歪めた。



その日、日常は崩壊した。

皇帝が変わったと言え、エリア統治者であるビスマルクが首を縦に振らなければこのエリアは変わらない。

そう信じるに足りる、実力と実績があつた男、ビスマルク・ヴァルトシュタインにはあつ

た。

それこそ、新しい皇帝となったアルカ・ヴィ・ブリタニアとなる少女よりも遙かに。エリアーの住民にとって、このエリアの住民だという事自体が誇りだったのだ。

だから何の不安も無く、与えられた平和を享受するこのエリアで、何時も通りの生活をしていた。何時も通りに買い物をして、何時も通りにご飯を食べて、何時も通りにテレビを観る。

そんな時だった。

家のテレビが、街頭モニターが、ラジオが、至る所の情報発信源が、ブリタニア国営放送に切り替わったのだ。

それ即ち、新皇帝がまた何か動いたという意味で——。

『元エリアーにお住まいの皆様。私は神聖ブリタニア王国第99代唯一皇帝、アルカ・ヴィ・ブリタニアです』

声が聞こえた。

尊大で、横暴で、可憐な少女の声だった。

内容が内容で無ければ、思わず聞き惚れてしまう程の声。

『私は悲しい。世界は今、新たなステージに進んでいるのにも関わらず、未だにこの場は旧き時代に取り残されてしまっています』

そんな声が二重となって聞こえている。

『故に私自らが視察に来ました。今も尚、古い体制にすぎるその浅ましさを。不平等の不条理を』

途端、エリア中に轟音が響いた。

まるで何か爆発した様な、何かが崩れ去る様な、このエリアとは無縁だった音。

住民達は皆そろってその方向を見た。

それはこのエリアの中心に聳え立つ、象徴の様な場所だった。

ブリタニア政庁。

天を突く程の高い摩天楼であったそれは、半分になってしまっているのだから。

『嗚呼、安心してください。皆様には危害を加えるつもりはありません。ただ一つ、示して

くれれば良いのです』

黒々と立ち込める煙の中から、人型のシルエットがぼんやりと浮かんだ。

それは絶対的な支配者の様に、新しく出来た屋上からこのエリアを見下ろしている。

段々と煙が晴れると、そこに現れたのは蒼の巨人。

一般的なナイトメアと比べると、その全長は比較的高く見えた。しかし身長に反してその体軀は細く、何処か女性的。背中の紺碧の翼は有り余る力を示す様に揺らぎ、その特徴的な額の角の先には、花の様な……円状の何かが浮いていた。

そう、正しく天使とも言えてしまいそうな、神秘的な機体だった。

そしてその機体からは、同じ様に可憐な少女の声が発せられている。

『——— 忠誠を』

その名を無窮終式。

正式名称は無窮終式・碧落天花。

未来永劫、世界の果てに至るまで。

全ての支配の象徴。

即ち、皇帝天に咲く花そのものである。



誰もが啞然と天を仰ぐ中、それに刃を向けた騎士が居た。

廢ビルと化した政庁のその真下から、巨大な剣を突きつけて皇帝へと向かう黒い機体。

その機体を見るや否や、少女は、アルカ・ヴィ・ブリタニアは微笑みを浮かべる。

『良かった。生きていたのね、ビスマルク』

向けられた剣……ギヤラハッドが持つエクスカリバーを受け流しながら。

そう声を弾ませて、まるで既に故人となった女性と同じ様な声音で皇帝は語る。

「やはり来たか！ アルカ!!」

対してビスマルクには再会を喜ぶ気すら見られない。

まるで親の仇の様な形相で睨み付ける。

『つまらない男。再会の挨拶も無しなんて』

ビスマルクが駆る「ギャラハッド」は、その大柄の体軀も合わせて非常に機体パワーの高いナイトメアだ。

この世に切れない装甲は無いとまで言わしめた大型の剣状の武器「エクスカリバー」に十基の「スラッシュハーケン」、戦艦にも採用されているエネルギーシールドの「ブレイズルミナス」。その搭載されている武器の数々は全て最高峰。

本人の操縦技術も相まって第八世代の中ではトップ……いや第九世代にまで迫ると言われていた、が。

「ぐっ!!」

呆気なくその太刀筋は見切られ、ついぞと言わんばかりにカウンターを喰らってしま
う始末。

ビスマルクが決して弱いのではない、アルカが……無窮がそれほどまでに強いのだ。

「エナジーウィング……！ これ程までとは」

KMF技術を驚異的に発展させた悪魔の技術。

第二次トウキョウ決戦時、ナイトオブテンであったルキアーノを瞬殺し、たった一機
で戦況を巻き返した紅蓮に付いていたものと同じモノ。

それが今、かの皇帝が乗る機体に、無窮の背中に燦然と輝いている。

「愚かだなアルカ！ 皇帝が自ら出てくるとは！」

『王が自ら動かなければ部下は付いてこない。兄にそう教わりましたから』

一撃、一撃。

隙を見ては繰り出すその攻撃が、全て届かない。

その太刀でいなされたり、その翼で回避されたり。返しに繰り出される反撃は目で追

う事すらやつとで防御が間に合ったとしてもただでは済まない。
これを、この光景をビスマルクは知っている。

「――閃光」

かつては夢見ていた。

マリアンヌ王妃の子である彼女が、アルカがその名を継いでくれるのを。

共にラウンズとして肩を並べ、共に切磋琢磨する未来を。

しかし、そんな日は来なかった。

あろうことかこの少女は自らの父を、皇帝を殺し、その計画すらも！

「いくら閃光の娘と言えど!!」

今は忠義が勝る！

「不当なる王位の篡奪など認められん」

ビスマルクには秘密があった。

それこそ皇帝やマリアンヌしか知り得ない秘密。

彼の閉じられたその右目には、ギアスが宿っていた。

普段は使う事は無い。

使うべき相手と判断した時、または勝ちに執着した時、その瞳は決まって開かれた。

未来を読むギアス。

戦場に身を置くビスマルクにとって、これ以上は無い力だ。

相手の動きが見える。これがどんなに、アドバンテージだったか。

実際、このギアスを持ってしても勝てなかった相手など、1人しか居なかった。

だからいくら娘と言えど、いくら第九世代と言えど。

この力を使えば決定的な勝利が掴めると、そう思ってしまった。

『……………閃光？』

一瞬の事だった。

正に、閃光と言うに相応しい一時の事だった。

無窮の頭上に浮かぶリングから、何やら重々しい音が響いた、その数秒後の事だった。

「……ば、馬鹿な……」

そのリングの形を作っていたソレは、ギョラハッドに牙を向いたのだ。

『無窮の武器が太刀だけだと思っただけ？』

リングを形作っていたソレは、蓋を開けてみれば旧式の無窮のバインダーを小型化した様なモノだった。それらが幾つも繋がり合っただけで、円状に形作って浮かんでいたに過ぎない。

よく見ればそのバインダー一つ一つには、それぞれにフロートユニット、ブレイズル

ミナスが搭載されている。

そう、ギヤラハッドの機体に無数に刺さるソレらにも。

「これが…第九世代……………」

ブレイズルミナスが攻撃装備として転用されているのはヴィンセントで知つての通りだ。

しかし、脅威なのはそこじゃない。

真に脅威なのは、これらが完全に無窮と独立している事。

『もつと楽しみたかったけど、残念ね』

動かない。機体が動かない。各部駆動系に完全に突き刺さっている。

殺そうと思えば、コックピットを狙えば済む筈だ。

つまり、手加減されている。

完全にかの皇帝に命を握られている。

『ご苦労様、ビスマルク』

皇帝アルカは静かに告げた。

その言葉にどんな意味が込められていたのか、それは誰にも分からない。

無駄な足掻きに対する皮肉か、それとも自らの母を長らく敬愛していた事に対する労
い。

でもどのような意図であれ、最早関係無い。

だってビスマルクが居る筈のコックピットには深々と太刀が突き刺さっているのだ
から。

『貴女が母の名前を出さなければ、もう少し長生き出来たかもしれませんね』

かつて帝国最強を謳った騎士は、ゴミの様に切り捨てられた。